

我が魔王は緑谷出
久！？

夢野飛羽真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじ

トラックに轢かれそうな少女を庇おうとして死んでしまった大学生、渡辺涼太はオーマジオウの前に召喚される。

彼はとある世界が最低最悪の結末を迎えるのを阻止するため、その世界に住む少年を最高最善の魔王になるよう導くという使命を与えられた。

仮面ライダーウオズとなって、その少年の住む世界へ転生した圭介。

新たな魔王になる運命を背負った少年、その名前は緑谷出久であった：

目次

立志編

第1話	転生	1
第2話	英雄の夢	9
第3話	覚醒の時	20
第4話	ワン・フォー・オール	40
第5話	挑め！雄英入試	49
第6話	魔王のターン	66
入学編		
第7話	雄英入学	80
第8話	個性把握テスト	90
第9話	屋内戦闘訓練	107

USJ編

第10話	出久VS爆豪	120
第11話	友・情・再・結	136
USJ編		
第12話	マスコミ騒動	145
第13話	いざ行け！USJ！	156
第14話	美しき調和	171
第15話	魔王と救世主 前編	190
第16話	魔王と救世主 後編	202
体育祭編		
第17話	迫る大会	218

第18話	開幕	228
第19話	障害物競走	238
第20話	騎馬戦	249
第21話	昼休み	270
第22話	トーナメント一回戦 p a r	285
第23話	トーナメント一回戦 p a r	294
第24話	トーナメント一回戦 p a r	302
第25話	トーナメント二回戦：轟焦	315
凍オリジン		
第26話	トーナメント二回戦 p a r	354

第27話	トーナメント準決勝	329
第28話	トーナメント決勝戦	370
第29話	表彰式	379
第30話	ヒーローネーム	393
第31話	職場体験開始	411
第32話	グラントリノ	424
第33話	保須事件の始まり	435
第34話	保須の悪夢 前編	448
第35話	保須の悪夢 中編	

職場体験編

第36話	保須の悪夢	後編	—	462	我が魔王は緑谷出久	ロングホープファイ
第37話	職場体験の終わり	—	481	481	リア	ロングホープファイ
期末試験編						
第38話	ワンフォーオールの過去				第44話	ロングホープファイリアPa
489					rt1	—
第39話	期末試験に向けて	—	505	505	第45話	ロングホープファイリアPa
第40話	期末試験Part1				rt2	—
515					第46話	ロングホープファイリアPa
第41話	期末試験Part2				rt3	—
525					第47話	ロングホープファイリアPa
第42話	期末試験Part3				rt4	—
541					第48話	ロングホープファイリアPa
第43話	期末明けの休日	—	553	553	rt5	—
					第49話	ロングホープファイリアPa

第67話 雄英BIG3 | | 968

第68話 インターンに向けて

第77話 希望のトリニティ | |
第78話 戦いのその後 | |

990

第69話 ラビットヒーローミルク

1003

第70話 ギンガの力 | |

第71話 凝留葉事変 | | 10391019

死穢八斎會編

第72話 出久のインターン | |

第73話 緊急会議 | |

第74話 突入開始 | |

第75話 ルミリオン | |

第76話 オーバーホール | |

11121096108210701057

11461126

立志編

第1話 転生

(もうすぐVシネマか…楽しみだな。)

僕の名前は渡辺涼太。どこにでもいる普通の大学生だ。

強いて言うなら、仮面ライダーが好きすぎる大学生かな…

そろそろ仮面ライダーリバイスのVシネマが公開されるので、今日はバイト代で何かライダーグッズを買うために街を歩いていた。

もうすぐで家電量販店に着くだろうという時だった…

「美咲！危ない！」

交差点の方から声がしたかと思えば、横断歩道を歩いている少女にトラックが迫っていた。

それを見て、僕の身体は咄嗟に動いてしまっていた。

「逃げて！」

僕はその子の身体を押して、トラックの車線上から脱出させた。

だがその次の瞬間、僕の身体に衝撃が走った。

次の瞬間視界は目まぐるしく変わっていき、宙を向く。

「キヤー!!」

身体に伝わる熱と全身に走る鈍痛。

そして、女の人の悲鳴で僕は何があったのか理解した。

少女を助けたまでは良かったけど、僕はそのままトラックに轢かれてしまったらしい

「はあ…仮面ライダーギーツの続き…見てみたかったなあ…」

まさかギーツの続きを見届けることなく死んでしまうとは…

クソツ…!こんなところで…

死にたくない…!まだ僕は生きたいッ…!

(あれ…う…こ…こ…は…?)

車に轢かれて命を落としたはずの涼太は、暗闇の中で目を覚ました。

辺りに何かあるかと辺りを見渡せば、神々しい黄金の光が彼の目に入る。

「青年よ…ようやく起きたか。」

「オーマジオウ!?!」

光が放たれている方から声が聞こえ、涼太がそちらを見てみると、彼の眼には玉座に座る豪華絢爛な仮面の男がいた。黒色と金色のその姿は派手な高級腕時計の様だと言いが表すことができ、顔の複眼は「ライダー」と書かれている様な形である。彼の名前はオーマジオウ、時の王者であり「最低最悪の魔王」、最強の仮面ライダーとも言われている存在だ。

「な、なんでオーマジオウがこんなところにいるんだ!?これって…夢…?」

涼太にとってテレビの中の存在であるオーマジオウ。

彼が自分の目の前にいるという事実を、彼は信じ切ることができなかつた。

「夢ではない…ここは現実だ。確かに貴様の世界で我々仮面ライダーは創作物の中の存在ではある。だが現に、私はここに居る。」

「現にここに居るって…」

「他のライダー達の世界と同様に、貴様らの世界も私の存在した世界と並列する世界の1つだ。渡辺良太、貴様の暮らす世界はどうやら特殊な世界らしいな。我々だけでない、多くの世界の物語を観測できているらしい…」

これまで、仮面ライダーをテレビで見てきた涼太であったが、それは彼の暮らす世界の特性によって並行世界を観測していたのだった。ライダーだけでなく、スーパー戦隊やウルトラマンを見ることがも、観測行為に該当することであった。

「まだよく分かってないんですけど…なんで俺は貴方の前に居るんですか!？」

オーマジオウら仮面ライダーが存在しているという事実を涼太は何とか飲み込み切れたが、自分が何故そのオーマジオウの前に居るのが理解できていなかった。

「私が召喚した。少女を救うその姿を見て、ある使命を貴様なら全うできると感じてな…」

「ある…使命…?」

「ああ、とある世界を救って欲しい。この世界にはいずれ破滅が待っており、その破滅はいずれ多くの世界に波及するだろう…その世界で最高最善の魔王を目覚めさせ、結末を変えてくれ。」

オーマジオウから涼太に託す使命。

それはとある世界だけでなく、他の並行世界が最低最悪の結末を迎えるのを阻止するために、ある少年を最高最善の魔王に導けというものであった。

「あなたが自ら行ったらダメなんですか?」

その任務を涼太に託すオーマジオウではあったが、彼のこともよく知っている涼太からすれば自分よりも彼自身がやった方が最適だと感じてしまう。

なぜなら、オーマジオウは涼太の様なライダーファンたちが行っている仮面ライダー最強論争に、終止符を打つほどのスペックと能力を持ち合わせている。

少なくとも彼が出てくれば、どんな世界のトラブルも一瞬で解決できてしまうだろう。

「貴様も知っているだろう。若き日の私が王にならない未来を選び、私の存在はすでに消滅している筈だ。だが平成ライダーの歴史が今の私を生かしている。確かに今こうして生きているが、存在は不完全な状態……この世界を救うことができる力は、もう残っていない……」

「なるほど……だから僕が最高最善の魔王を誕生させないといけないんですね……」

だが、そのオーマジオウの存在は今現在不安定なものであり、世界を一つ救うこともままならない。

だからこそ、新たな魔王を誕生させようというのがオーマジオウの出した結論である。

「そうだ。私はある少年にジオウの力を託した……ウオズとしてその少年を導いてくれ……！」

オーマジオウが託してくれた使命。

自分にとつて憧れの仮面ライダーから託された願いでもあり、自分が再び生きるチャンスでもある。

「ええ……やりますよ！」

”一度失った命で世界を救うための使命を果たす。”

涼太の中でその覚悟は既にできていた。オーマジオウの話が正しければ、多くの並行世界：さらには自分が暮らしていた世界にも影響を与えかねない。

だからこそ、その使命を託される道を選んだ。

「必要なものは全て託そう：ゲイツもいずれ新たなジオウの近くに現れるだろう：」

オーマジオウが手を翳せば、涼太の手の上にビヨンドライバーと4つのミライドウオッチが現れる。

「運命は既に動き始めている：頼んだぞ、新たなウオズ！」

「はい！それと最後に聞きたいことがあります。」

「何でも申ししてみよ。」

「その新しい魔王の名前を教えてくださいませんか？」

新たな世界に旅立つ前に、涼太の中には一つの不安があった：

それは新しい魔王が誰か分からないということだ。その者が分かっているなければ、導くように導くことができない。

涼太には新しい魔王がどこにおり、それが誰なのか、という情報を知っておく必要があった。

「いずれその者に会う運命になるだろう：ゲイツの力を持つ者もその近くで目覚めるだ

ろう…その、新たなジオウの名は…」

オーマジオウから新たな魔王になる者の名を聞き、涼太…いや、新しいウオズはすぐに新しい世界に向けて旅立っていったのだった…

それから時が流れて桜の季節。

春は出会いと別れの季節とよく言われているが、今日は多くの場所で新たな出会いが生まれる行事が行われている。

その中でも、折寺中学校の入学式では1つの出会いが生まれ、運命の歯車が動き出そうとしていた。

「ようやく会えましたね、我が魔王」

「魔王…って僕?!」

入学式を終えて、体育館から教室に移動する新入生達の多くは小学校からの友人と話しているが、緑がかつた縮れ毛とそばかすに大きく丸い目が特徴的な少年だけが話す相手もいないまま体育館から校舎につながる通路を歩いていた。だがその少年は突然1人のクラスメイトに魔王と言われ、話しかけられた。

「自己紹介が遅れましたね。私は魚津圭介、ウオズとお呼びください。」

「う、うお…ウオズ君…？そ、その…魔王って…？」

話しかけてきた少年は、長身でウエーブがかった少し長めの髪が特徴的で、逢魔降臨歴と書かれた一冊の本を手に持っている。

彼に魔王と呼ばれている緑髪の少年は、彼の言っていることが理解できず戸惑っている様子だ。

「ええ、君には最高最善の魔王となり世界を救う未来が待っている。私はその運命を導く預言者…お会いできて光栄です。我が魔王、”緑谷出久”」

第2話 英雄の夢

最初にオーマジオウの口から緑谷出久の名を聞いた時は驚いた。

私の友人に”僕のヒーローアカデミア”という漫画のファンが居て、彼からその少年の名を何度も聞いていたからだ。

私自身、その漫画やアニメを見たことはなかったが、彼の名前だけは何故か頭の片隅にあった。

(超常社会か…)

どうやらこの世界では、人口の約8割が”個性”と呼ばれる特殊な能力を持っているらしい。

特に私の世代ともなれば、個性を持たない人間の方が珍しいらしい。

私もこの世界に”魚津圭介”と言う名の赤子として転生し、両親に育てられながら幼稚園や小学校に通ったが、周囲の人には個性を持っていない人は居なかった。

「父さん、引越しの準備は完了した。先に車に乗っておくよ。」

「おう、スマンな。急に静岡に行くことになってしまつて…」

「問題ない。向こうでの暮らしも楽しそうだ。」

さて、私の新たな父、魚津一真と母の魚津瀬里奈は宮城県、服屋で働いていたのだが、上の命令で急遽静岡県の支店で働くことになってしまったようだ。

丁度小学校の卒業式を終え、中学校に進学するという時期だが、家族3人で静岡県に転居することになった。

だがこれも、運命なのかも知れない…

我が魔王、緑谷出久が引越した先にいるのかも知れない。そう思うと小学校の友人達との別れもあり悲しくはなかった。

新天地での生活に胸を躍らせ、家族の乗用車に乗り込んだ。

（待っていてください。我が魔王…）

私はその手にウオズミライドウオッチを握りしめ、我が魔王に会えることを祈る。

因みに、私はオーマジオウからこのウオッチを含めた4種類のミライドウオッチとビヨンドライダー、それに逢魔降臨歴と伸縮自在のマフラーと、地球の本棚へのアクセス権を与えられており、この世界では私の個性として扱われている。

「その本、何書いてるか分からないけど、飽きないわね〜」

車の中で逢魔降臨歴を開いていると母さんが話しかけてくる。

「ここには20年分の英雄の伝説が記されているからね。寧ろ飽きる方法を教えて欲しいものだよ…」

この逢魔降臨歴を通して、私は平成ライダーの歴史を見ることができると。つまりは平成ライダーのテレビを見返している様なものだ。早く我が魔王に会ってこの歴史も見せてみたいものだ…

それから数週間後…

「おいクソデク！ テメエ最近何調子こいてんだ!?!」

「か、かつちゃん!?!」

ある日の折寺中学体育館裏、茶髪の少年爆豪勝己とその取り巻き達は、緑谷出久を数名で囲んで詰め寄っていた。彼は出久の幼馴染であり、幼少期から彼を虐めていた男だ。

彼の個性は爆破、汗腺から二トロの様なものを出して爆破することで攻撃や移動に転じれる中々強力な個性を持つ少年だ。一方の緑谷出久は個性を持たない”無個性”、それ故か爆豪によって普段から虐げられている。

「俺の知らねえところで、変な奴連れて来やがって!」

「僕だってあの人のこと良く知らないんだよ!」

「うるせえ!!俺に口答えすんな!!」

出久が口答えしようとしたのが気に入らなかつたから、爆豪が彼の制服の襟首を掴み腕を振り上げたその時だった。

「その辺にしたまえ!」

その時、どこかから伸びて来た布の様なものが爆豪の腕に絡みつき、腕が出久に向けて振り下ろされるのを阻止する。

「またテメエか…」

「う、魚津君!」

「ウオズで良いと言っているだろう。我が魔王…」

爆豪から出久を守った者の正体はウオズであった。

爆豪の腕を拘束したのも、彼の首に巻かれているマフラーであった。

「チツ…行くぞ…!」

ウオズによって出久から引きはがされてしまった爆豪は、舌打ちをして不機嫌そうな顔で取り巻き達と共にこの場から去ってしまう。

「我が魔王、このことを先生に伝えなくていいのかい?」

「ううん、大丈夫。実際に殴られたわけじゃないし…」

「ホント、君は少々優しすぎる。魔王たるもの、たまには厳しく切り捨てる冷酷さも必要

だというのに……」

ウオズは爆豪によるイジメ行為を認知こそしているが、出久の頼みでそのことを先生に言いつけてはいなかった。彼からすれば早々に排除してしまいたい人物ではあるが、出久からすれば幼稚園からの幼馴染で、憧れの存在でもある。彼のことを言いつけて、彼がヒーローになることを邪魔してしまうことも恐れて、いじめのことは自分の中にしまい込んでいた。

「それに、僕がなりたいのは魔王じゃなくてヒーローだから……」

出久からすれば、ウオズは初めて自分のことを理解し虐げない良き友人であるのと同じ時に、彼の言っている魔王関連のことに関しては理解することができなかった。

「そうは言っても、君が王の力を手に入れる日はいつか必ず訪れる。私は君を最高最善の魔王にしてみせるさ。」

また、ウオズも出久のヒーローになりたいという夢に疑問を感じていた。

周りのヒーローになりたいと言っている者達は個性を持っている。爆豪の様に派手なものもあれば、そうではないが鍛えることで実用性が上がるものもある。だが、出久にはそれが無い。

そんなハンディキャップを抱えているのに、ヒーローになるというのは無茶な話だ。諦めて他の道を選ぶ方が無難だ。

「あの…う、ウオズ君！」

「なんだい？我が魔王…」

出久に背を向けてこの場を去ろうとしたウオズを、出久が呼び止める。

「何で君が僕のことを『魔王』って呼んだり王様にしようとしてるのか分からない…けど、これだけは言っておきたいんだ…」

振り返ったウオズの目に入ったのは、出久の真剣な眼差し。

それを見てか、ウオズの身体も自然と彼の方を向きなおす。

「僕は昔から、オールマイトに憧れてて…オールマイトが…災害やヴィランで困っている人達を助ける姿が僕は大好きで！僕も…そうなりたいってずっと思ってた…ダメかな…？僕が皆を笑顔で救けるヒーローになったら…」

無個性ゆえに周りから否定された夢。実現しないかもしれない夢。

そうであったとしても出久は、ヒーローになることをずっと夢見てきていた。

それは彼が幼い頃に見たオールマイトの動画がキツカケだった。

大災害の中、笑顔で次々と人を救うヒーローの姿。今やNo.1ヒーローと呼ばれているオールマイトというヒーローの雄姿である。出久はずっと「彼の様になりたい」と考えてヒーローの分析などをやりまくっていた。

「確かに、オールマイトの笑顔は人を救う。それに、その話をしている君も自然と笑顔に

なっているようだね。」

オールマイトについて語る時、出久の顔は自然と笑顔になっていた。それほど彼のことが好きで憧れていると分かり、ウオズも彼に微笑み返す。

出久のオールマイトやヒーローに対する熱い気持ち、彼の表情や言葉からウオズの心に伝わっていった。

「ならば、私も君の夢を応援しよう。君の憧れや夢を否定してしまっていたことを詫言なければいけないようだな…」

「ちよ、ちよつと！頭を上げてよ！」

出久の真摯な思いに、自分が内心で思っていたことを恥ずかしく思っていたウオズは深々と頭を下げ、それを出久は必死に止める。

「けど、僕のことを応援してくれるって言うのは嬉しいよ…ありがとう…」

「いや、ただ私は君が最高のヒーローを目指すことで、最高最善の魔王になる道がより開けると思っただけだ…ただし道はかなり険しいだろう…私が特訓を付けよう。」

「特訓…?」

「そうだ、少し厳しいかも知れないが、いずれにせよ必要なこと。放課後私と共にその場へ向かうとしよう…」

「うん！」

私は我が魔王の夢を受け止め、あることを考えた。

我が魔王が夢を叶える道の中で最高最善の魔王になればいい。

彼の思う最高のヒーロー、そのビジョンと私が求める最高最善の魔王はどこか近い気がした…

それに、夢を否定することで、彼が壊れてしまう気もしていた…

「まだッ…まだ!!」

さて、今は我が魔王の特訓を行っている。

ヒーローになるにせよ、魔王になるにせよ、体を鍛えておく必要がある。ということ
で今は海岸の粗大ゴミの清掃をしていただいているところだ。

この海岸にはかなりの量の粗大ゴミが不法投棄されているが、これらを清掃すること
で体の様々な筋肉を使い鍛えることもできるだろう…

「言っておくが、無理は禁物ですよ。」

始めてまだ数日だと言うのに、我が魔王は想定以上のペースで清掃を勧めている。

「分かっている…けど僕は、他の人より頑張らなくちゃ!」

無個性故に他の人に遅れを取っている。それで少し焦っているのだろうか……
もう少し様子を見てみるとしよう。

「ねえ、ウオズ君。」

「どうしたんだい？我が魔王。」

ある程度清掃を行い、休憩している時に我が魔王は私の隣に座って問いかけてきた。

「ウオズ君はヒーローになりたいとかって思わないの？」

それは私の目標に関する問いかけであつた。

「生憎、今の私には君を魔王に導く以外の目標は無いからね……」

「ウオズ君はそれでいいの……？僕を導くだけって言つても、それで変わるの僕だけだ。

ウオズ君自身がどうありたいとか、どう変わりたいか……そういう夢は無いの……

？」

そう私に問いかける彼の顔は、どこか悲しそうだった。

確かに、私の今の目標に私自身の勘定は入っていない。それは我が魔王や、多くの人からすれば空っぽにも見えてしまうのだろう……

「ウオズ君だつて、良いヒーローになれると思うよ。だつて僕、ウオズ君に会つてから笑つてる時が増えた気がするよ……」

そう言つて我が魔王は清掃に戻る。

”ヒーロー”ねえ…確かに私はその存在が好きだ。

昔は仮面ライダーだけでなく、スーパー戦隊にウルトラマン…色々なヒーロー達を見てきていた。

彼らに憧れてその活躍を見続けた日々、私にとっては幸せな時間であった。

人々の笑顔を守るヒーロー達、私もそうなりたいと思わなかったわけではない…

我が魔王と違って私はその夢を諦めて普通に生きようとしていた。

「けど、今の私なら…」

この世界の住民に生まれ変わったのは、私にとってチャンスかもしれない。

オーマジオウから託された使命を果たすことも大事だ。

だが、与えられた第二の生で夢を追うのも悪くない…

我が魔王がオールライトを指すのなら、私も大好きな仮面ライダーを指すとしよう…

「私も手伝うとしましょう…」

我が魔王を導くだけではダメだ。私も我が魔王と共に、ヒーローを目指してみるのも悪くない。

そう思うと自然と体が動き、私も粗大ゴミを運び始めていた。

「ウオズ君!」

”切磋琢磨 私の好きな言葉です。 範囲は広くなるかもですが、共に頑張りましょう
……”

「うん！ありがとうございます！」

オーマジオウがなぜ彼を選んだのか分かった気がした：

まっすぐな彼の心、それに優しさや思いやり：

彼ならばきつと、常盤ソウゴとはまた違う最高最善の魔王になるだろう。

だが今は鍛える時。私も彼もしっかり強くなつて、共に覇道を歩むとしよう……

第3話 覚醒の時

私と我が魔王による特訓が始まり、約2年が経った。

この間に海岸の粗大ゴミ清掃もかなり進み、さらに我が魔王には逢魔降臨歴を使って平成ライダーの歴史を体験していただいた。我が魔王は夢の中でクウガくビルドまでの歴史を知り、少しずつ最高最善の魔王に近付いてきている。それに身体もかなり出上がってきている。後はジオウライドウォッチさえ現れれば…

「えーお前らも3年ということで、本格的に将来を考えていく時期だ。」

さて、我々はもう中学三年生。

来年には義務教育を終える時期で、それ以降の進路を左右する、高校受験について考えていかななくてはいけない。

「今から進路希望のプリントを配るが…皆、大体ヒーロー科志望だよな？」

担任の言葉とともに、クラスメイト達は各々の個性を発動してアピールしていく。

「うんうん、皆いい個性だ。原則校内では個性使用は禁止だ！」

「せんせー！皆とか一緒くたにすんなよ！俺はこんな没個性共と一緒に底辺にはいかねえんだよ…！」

などと生意気なことを口にして居るのは、年々調子に乗っている爆豪氏だ。机に足をかけ、クラスメイト達を見下している。

「なんだとー勝己ー！」

「モブがモブらしくうつせー！」

周囲のブーイングを特に気にする様子もなく、相変わらず我々を挑発して、神経を逆撫でしてくる。

「あー確か爆豪は、雄英志望だったな。」

しかしながら、彼のムカつくところは実力と結果で反論する者を寄せ付けないところだ。

模試ではA判定、それに戦闘向きの個性、日本国内のヒーロー科高校で最高峰という国立の雄英高校に入ることが出来る程の実力はある。寧ろ彼の持っている力に対して精神が幼いので、態度の方が実力に伴っていないのかも知れないが…

「そういや、魚津と緑谷も雄英志望だったな。」

おっと、ここで我々の名を出すとは…

まずいことになるぞ…

「は？緑谷？魚津はともかくコイツは無理だろ!!」

一瞬担任の言葉で教室が凍り付き、その直後クラスメイトによる我が魔王への嘲笑で

教室が埋め尽くされる。

「勉強ができるだけじゃヒーロー科は無理だぜー!」

「そんな規定はないよ…前例がないだけで!」

「無礼だぞ!我が魔王に向かって!」

我が魔王に罵倒を浴びせる馬鹿共から守る様に、私は我が魔王の前に立つ。

「おいゴラー!なんで没個性の下僕はともかく、なんで無個性のデクが俺と同じ土俵に立てるんだ!!?」

そんな私達に爆豪くんが詰め寄って来る。

因みに、本来の力を出していないので彼らは私の個性をマフラーだけだと勝手に認識している。

「別に張り合おうとは思ってないよ…」

「ええ、別に我々3人揃って雄英に行くことに問題はない。君一人で行きたいとか言つた都合も、私達には関係ない。」

「んだと…?テメエら俺の道を邪魔すんのか!」

彼のプランでは自分が折寺中学から唯一の雄英進学者になることで、経歴に箔を付けたいようだが…そんな自己中心的な要望を私達が?む必要なんてない。しかしながら目の前にいる彼には、そのことを理解する気はなさそうだ。

「おいクソデク！無個性の癖に受けるとか記念受験かよ？」

「そ、そんなんじゃないよッ……！」

「ああ？テメエに何ができるんだクソが！」

爆豪クンが振り上げた腕を私は咄嗟に受け止める。

「その辺にしておきたまえ。我が魔王はいつか君を超える力を手にする。同じ土俵に立てなくなるのはどつちかな……？」

「うるせえ！テメエらは王様と下僕ごっこでもしてろ！」

何とも無礼な奴だ……これで内申点が下がらないのが不思議で仕方がない……

「しかしながらあの爆豪勝己という人間、年々態度が悪くなっている気がする……君もそう思わないかい？」

「そうかな……？受験近くてピリピリしてるのかな……？」

「ホント、君は彼に対して甘すぎるよ。」

放課後に、爆豪がもう一度彼らに雄英を受けない様に詰め寄ってきたが、またウオズがそれを跳ね除けていた。彼の態度に既にウオズは呆れてしまっているようだった。

「そうかも知れないけど…僕は昔みたいにもた仲良くできたらって思ってる…」

「そうか、否定はしないがたまには私がお灸をすえても良いんだよ?」

「ううん、大丈夫。」

2人が歩いていくうちに、暗いトンネルの様な所に来てしまっていた…

「我が魔王、嫌な予感がする…少し走ろう!」

「う、うん…」

その時だった。ウオズが何か気配を感じて、出久に走り出す様に告げた。

「逃げるんじゃないやねえ! Mサイズの隠れ蓑!!」

彼らの後ろにあったマンホールからヘドロの様な体のヴィランが現れ、2人に襲い掛かる。

「ヴィラン!?!」

「我が魔王に手を出すな!」

ウオズが数m程度に伸ばしたマフラーで敵を払いのけ、ウオズミライドウオツチを起動しようとしたその時だった…

「わーたーしーがー来た!!」

マンホールの蓋を飛ばし、一人の男が跳び上がって現れた。

筋骨隆々な肉体、堀の深い顔、そして金髪、その男を知らないものは日本国内どこを

探してもいないだろう。

「オールマイト!？」

「なんでここに!？」

その男こそ出久が憧れているオールマイトである。

彼を見て逃げようとするヘドロヴィランであったが…

「テキサスツ！スマーツシュ!!」

オールマイトの拳から繰り出される風圧で弾き飛ばされて、身体が飛散する。

「No. 1ヒーロー…オールマイト…ホ、ホンモノだ…生だとやっぱり…画風が全然違う!!」

その姿に興奮して目が回ってしまっている出久。それに対して飛び散るヘドロ敵の身体をマフラーを広げて網ですくうように回収し、持っていたペットボトル内に詰め込むウオズ。

「すまないね。ヴィラン退治に巻き込んだだけでなく、協力してもらって…」

「いえいえ、お礼にこちらの彼にサインをプレゼントしていただけると嬉しいですよ。」

ヴィランの身柄をオールマイトに渡しつつ、ウオズはちやっかり主君のためにサインを要求し、オールマイトもウオズが渡したノートに自身のサインを書き込む。

「あー！ありがとうございます！一生家宝にします！家の宝にします!!」

出久は興奮しっぱなしで、高速で頭を下げながら何度もお礼を言っている。

「それでは私は、こいつを警察に届けてくるよ。それではまた、液晶越しで会おう！」
そう言つてオールマイトは飛び立って行つてしまった。

「良かったですね。我が魔王……」

その姿を見届けてからウオズは、出久のいる方を再び向く。

「あれ……？我が魔王は……？」

だが、そこには出久の姿は無かった。

「何処に行つたのですか!?!我が魔王!!」

数十分後

「なるほど、そんなことが……」

「うん、そうなんだ……」

はぐれてしまつていた2人だが、再び合流することができていた。

そこでウオズは、出久がオールマイトにそのまま掴まって飛んでいたこと、そこでオールマイトからヒーローになる夢を諦める様に諭されたことを伝えられた。

本当は出久はオールマイトの正体も知ってしまったが、そこは2人だけの秘密だと思
い、流石にウオズには伝えなかった。

「なるほど、」力がなくなるとも成り立つとは、とてもじゃないが口にはできない」か…
「オールマイトにそう言われちゃった…」

オールマイトから言われた一言に、出久は流石に現実を見てしまっていた。

いくら鍛えても無個性ならヒーローになるのは難しい。その事実を再認識し、自分の
夢が揺らぎそうになっていた。

「彼はきつと、君に危険な目に遭って欲しくないからそう言ったのだよ。ヒーローの道
は険しい、無謀に挑んでいいものではないからね。」

「それは…分かっているけど…」

「ああ、だがこういう時こそライダー達の歴史を思い出してみたい…例え力がなく
とも、力を失ってしまっても、正義のために戦おうとしていたものは多くいた。」

例え変身できなくても、戦おうとした仮面ライダー達の雄姿。

それは出久の中にも刻みこまれていた。

「うん、そうだね…僕もまだ、立ち止まっている場合じゃないね…」

「そうだと、我が魔王…平成ライダーの歴史を学んだ君ならわかるだろう。夢を持つ
と時々切なくなるが…」

「時々すごく熱くなるんだよね…」

仮面ライダーファイズ、乾巧の言葉である。

時々困難な壁にぶつかって絶望するが、希望が見えて突き進める時もある。

「ああ、今の君ならもう、これを使うことができるだろう…」

乾巧の言葉を思い出し、立ち直りそうな出久にウオズが1つのブランクライドウォッチを渡す。

平成ライダー達の歴史を学び、身体を鍛えた出久には“その時”が近いと思い渡されたのだ。

「これは…?」

「いずれわかるさ、それとこれも…」

そして、もう一つあるものを渡そうとした時だった。

突如町中に爆発音が鳴り響き、2人はそちらの方を向いて、駆け出していく。

出久は日々ヴィランが居る現場に赴いては、ヒーローの分析をしているため反射的に爆発音がする方に来てしまっていた。

その場所は道幅が少し狭い商店街であった。そこは既に爆炎に包まれており、ヒーローも何人か集まっていた。

「あのヴィランは…」

ウオズ達にはそのヴィランの姿に既視感があった。

そう、彼は先程自分達が遭遇してしまったヘドロヴィランだ。

オールマイトが捕まえていたはずなのに、何故かまたそこにいる…

「僕の…せい…?」

その原因が出久にはすぐわかった。

さつき、自分がオールマイトに掴まった時に、ヘドロヴィランを入れていたペットボトルが落ちてしまったのだ。

「おいおい、ヒーロー何で棒立ち?」

「強い個性の中学生が捕まってて、手が出せないらしいぜ。」

「中学生が捕まっている…ん?あれは…」

「かつちゃん!」

さらに驚くべきことに、そのヴィランの身体に捕らえられていたのはウオズ達もよく知る人物であった。

爆豪勝己、出久の幼馴染でクラスメイトの少年だ。

「おい誰かあいつに有効な個性はないのか!」

「ダメだ!今ここには誰もいない!」

「誰かなんとかしろよ!」

「人質がいるのにどうしろとゆうんだよ!？」

「にしてもすごいなあの子…ずつと抵抗しているよ……」

その爆豪の個性爆破を、ヘドロヴィランが使ってしまっている為か、近付けばその攻撃を喰らってしまう恐れがあった。それ故に爆豪はあの状態で放置され、ヒーロー達はこの状況に有利な者が来るのをただただ待っていた。

その状況で緑谷出久は、爆豪のことが心配で今にもこの場から飛び出して助けに行こうとしていた。

「待ちたまえ、我が魔王。」

だがそのことを察したのか、ウオズが彼の腕を掴んで制止する。

「ウオズ君!? だつて、助けないと……」

「君の気持ちはよく分かる…だが、君が危険な目に遭ってまで、彼を助ける必要はあるのかい……?」

爆豪のために無謀に飛び出そうとする出久の気持ちを、ウオズは理解できなかった。

自分のことを虐げ、今日も罵倒してきた人間を体を張って助けたいという気持ちはウオズの中にはない。

「おいおい、こつち向かってきてるぞ!」

「皆逃げろ!」

へドロヴィランが出久達野次馬の方に向かって来ると、他の野次馬達もこの場から逃げ出していく。

ウオズも彼らと共にこの場から離れようと、出久の手を引く。

「我々も行こう…我が魔王！」

「行かない！放っておけないよ…たとえどんな人でもッ、どんな状況でもッ、助けを求められたら見捨てない！それがヒーローだから！」

その時不思議なことが起こった…

ウオズから受け取り、ポケットの中に入れていたライドウオツチが白い光を放ち始めたのだ。

「素晴らしい！それでこそ最高のヒーローであり最高最善の魔王！目の前で助けを求める者を助きたい、実に君らしい答えだよ！さあ、後はどうすれば良いか、わかりますよね？」

爆豪を放っておいて逃げようというのは、ウオズなりの出久に対する発破であった。

ここで逃げなかった出久の決意は、彼の中に眠っていた“王の力”を目覚めさせ、それに合わせる様にウオズは跪いて朱色のクッションに乗せたジクウドライバーを捧げる。

「うん！分かってるよ…」

ウオズの意図を理解した出久は、ジクウドライダーを手に取り腰に巻き付ける。

「逃げる！少年！」

ヴィランに歩み寄っていく出久を周囲のプロヒーロー達が止めようとするが、出久は止まらない。

『ジオウ！』

彼が手にしたブランクライドウォッチは、ジオウライドウォッチに変化し、出久はそのリングパーツであるウェイクベゼルを回す。そうすれば、ウォッチに描かれた仮面ライダーの顔が現れ、上部のボタンであるライドオンスターターを押すことで起動する。

そして起動したウォッチを、ジクウドライダーの左側にあるD、9スロットに装填してロックを外せば、彼の背に大きな時計のエフェクトが現れる。

「変身！」

『ライダータイム！』

そしてベルトを1回転させると、後ろの時計が10時10分を指し示す。すると出久の周りを無数の金属製腕時計のバンドの様なエフェクトが回転し、ジオウのスーツを着する。

『仮面ライダー！ジオウ！』

背後の文字盤から出て来た“ライダー”の文字が彼の顔にセットされて変身が完了

する。

「変身した!?!」

「何者だ!!」

「クソデクツ……!」

プロヒーローやヘドロヴィラン、それに爆豪が変身を終えた出久の姿を見て仰天し、一時的に体の動きが止まる。

「祝え!」

一瞬の静寂を切り裂き、逢魔降臨歴を手にしてウオズが声を上げる。

「全ライダーの力を受け継ぎ時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者! その名も仮面ライダージオウ! まさに生誕の瞬間である!!」

そのウオズの声と共に、ジオウがヘドロヴィランに向けて駆け出していく。

「さっきのガキ!! テメエもここで殺してやる!!」

爆豪の身体を乗っ取ったことで、彼の個性である爆破も使えるようになったヴィランは、自身の腕をジオウに向ければ、何発か爆破を放つ。

「ッ……!」

それに対してジオウは、ジカンギレードをケンモードにして構え、視界を遮られながらも爆破によるダメージが自身に達するのを防いで進んでいく。

「ハアツ……」

敵に近付けばすぐに、そのヘドロ口状の腕を切り落としてから更に距離を詰めて、囚われの爆豪に手を伸ばす。

「なんで来たツ!!」

「君がツ……助けを求める顔をしてたから!!」

その腕はヘドロヴィランの身体を貫いて、中にいる爆豪の腕を掴む。

「邪魔をするなア!!」

だがその手はすぐに引き? がされてしまう。ヘドロヴィランの腕が再生し、そこから至近距離で放たれた爆破によってジオウの身体が吹き飛ばされる。

「ウワツ……!?!」

吹き飛ばされたジオウの身体が地面を転がる。普通なら骨を何本か持っていないかそれうではあるが、ジオウの鎧が出久の身を守り、ダメージをあまり喰らっていないジオウはすぐに体勢を立て直して立ち上がる。

「確かに、かつちゃんの個性まで使われたら厄介だ……どうすれば……」

「我が魔王よ。こういう時こそライダー達の力を使うのです。さあ、これまでに見て来た彼らの歴史を思い出してみてください……」

「ライダーの……歴史ツ……」

ウオズのアドバイスを受けて、胸に手を当てたジオウの身体がオレンジ色の光を放つ。

胸に当てられた手に光が集結し、1つのライドウオッチが生成される。

逢魔降臨歴を通して出久は平成ライダーの歴史を観測した。そのことで既に多くのライダーの力が彼の中にある、今ここに”仮面ライダーゴースト”のライドウオッチとして具現化したのだ。

『ゴースト！』

起動したライドウオッチをジクウドライバーの右側にあるD、3スロットに装填し、ベルトを一回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『アーマータイム！』

すると、仮面ライダーゴーストの姿を模したアーマーがジオウの前に現れて、各パーツに分散。

『カイガン！ゴーストー！』

ジオウの身体に次々と装着され、顔には”ゴースト”の文字の形をした複眼が取り付けられる。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者！そ

の名も仮面ライダージオウ・ゴーストアーマー！まず一つ、ライダーの歴史を継承した瞬間である。」

「アイツちよつとうるさくないか？」

仮面ライダージオウ・ゴーストアーマーの登場を受けて、本日二度目の祝福を行うウオズに対して、周囲のプロヒーローからツツコミが入る。

「この力は…」

「アーマータイムだよ。我が魔王…平成ライダーの歴史を纏い、まずは爆豪クンを救出しましょう。」

「うん…」

ゴーストが使用するアイテムの眼魂を模した肩部の装甲、眼魂シールドからパーカーゴーストを召喚すれば、4体のパーカーゴーストがヘドロヴィランに向けて突撃していく。

「次から次に!!」

やって来るパーカーゴーストを相手にヘドロヴィランは掌から爆破を放って対処していくが、自由自在に飛び回る彼らの動きに徐々に翻弄されていく。

「陽動は上手くいきそうですね。」

「うん、次は僕がかつちゃんを引きはがす！ウオズ君も手伝ってくれるよね？」

「当然だ。我が魔王……」

ヘドロヴィランに気がパーカーゴーストたちの方に向いている隙に、一気に2人が敵に向けて駆けていく。

「次こそは！」

まずはジオウが空中を滑空し、爆豪に接近してその手を伸ばして再び彼の腕を掴む。

「やらせるか！」

「今だ！」

それを止めようとしたヘドロヴィランにパーカーゴースト達が次々と突撃していき、そのダメージによってヴィランはジオウに対処するどころか、拘束を緩めてしまつて爆豪を引き手がされてしまう。

「後はお任せください！」

その瞬間ウオズが自身のマフラーを伸ばし、爆豪の身体に巻き付けて引つ張り上げる。

「テメエの助けなんざ要らねえよ！下僕野郎！」

「静かにしてくれないか？今は我が魔王の活躍を見る時だ。君も少しは祝いたまえ……」

「彼のことは俺達に任せてくれ。君も早く避難を……」

「チツ……！」

救出された爆豪をプロヒーロー達が救助に来る。しかし、彼らは既にジオウの戦いに圧倒されており、救助以外の活動に手を付けられる状態ではなかった。一部の者はウオズと共にジオウの戦いの行く末を見守っていた。

「だったら次はテメエを！」

ヘドロヴィランは標的を爆豪からジオウに変えて、彼を呑み込もうとするが：

「命！燃やすよ！」

ジオウ・ゴーストアーマーが印を結べばその手から炎が放たれ、敵の身体が炎で焼かれて押し返される。

その間に再びジクウドライバーのロックを外してから一回転させる。

『フィニッシュタイム！』

『オメガ！タイムブ레이크！』

パーカーゴースト達がジオウの右足に収束し、エネルギーを纏った状態でジオウが跳び上がる。

その右足を突き出した体制で、ヘドロヴィランに向けて一気に突き進んでいく。

その蹴り自体はヘドロヴィランの流体状の身体を突き抜けてしまうが、足に収束したエネルギーがぶつかるとともに、敵の身体が一気に弾け飛ぶ。

「アイツ…やりやがった…」

「あのヴィランを……こうも容易く……」

何人ものプロヒーロー達が対処できず尻込みしてしまった相手を、1人で対処してみた仮面の戦士。

その存在に驚きつつも、1人のヒーローがスカウトでもしてやろうかと声を掛けようとしたその時だった。

「行きましょう。我が魔王……恐らくマスコミも来てパニックになってしまう……」

「そうだね。ウオズ……」

ジオウの前に立ったウオズがマフラーを伸ばし、自分達の身体を包み込んでしまえばその場から姿を消してしまう。

「き、消えたッ……!?!」

この世界に新たに誕生した仮面ライダージオウ、彼がヘドロヴィランを倒したのは歴史の1ページでしかない。

彼らの伝説はここから始まるのであった……

第4話 ワン・フォー・オール

遂に王の力に覚醒した我が魔王、緑谷出久

あの日から普段のトレーニングに加えて、ライドウオッチを使うトレーニングも行っており益々成長著しい。

海岸の清掃もかなり進んでおり、過去に見えたであろう美しい景観も徐々に蘇ってきていた頃だった。

「ようやく見つけた!」

「オールマイト!?!」

ある日、我々の特訓中に突如話しかけてきた金髪でガリガリに痩せた男。

我が魔王は何故か彼のことをオールマイトと呼んでいるが、全然似ていない…

筋肉の量も全く違う様に見える。

「オールマイト? それはどういうことかな?」

「アワワワワ…そ、それは…」

「私から詳しく話そう。」

慌てる我が魔王に変わり、ガリガリの男が前に出てくれば、その体が隆起しいきなり

筋骨隆々な肉体に変化した。その姿はまさしく：

「オールマイト…」

その後詳しく話を聞いてみたところ、先程の痩せ細った姿は個性を使用していない時の姿で、個性を発動することで我々のよく知る筋肉ムキムキの状態になるそうだ。

彼曰く数年前にとあるヴィランとの戦いで内臓に大きなダメージを受けてしまっており、活動時間が減っているだけでなく、身体も弱ってきているそうだ。

因みに、ヘドロヴィランの際も現場にいたそうだが、活動限界を迎えて動けなかったらしい…

一先ず無理は禁物故、オールマイトにはガリガリの姿に戻っていただきたい。

「さて、緑谷少年。君に会いに来た要件なんだが…一つ提案があつてね…」

さて、オールマイト氏は先日の戦いを見て我が魔王の事を見込み、提案したいことがあるらしい。

「私の個性を受け継いでみないかい？」

「ええ!?!」

それは、我が魔王がオールマイトの個性を受け継ぐというものであった。

「個性を受け継ぐ…? そんなことが可能なのですか?」

「ああ、私も元々この個性をお師匠から受け継いでいる。何代にもわたって培われ、譲渡

され、救いを求める声と義勇が紡いできた結晶、それが私の個性”ワン・フォー・オール”だ!”

オールマイトの個性というのは、何十年も前から継承されてきていたものだそうだ。

その後継者として我が魔王が見初められたということか…

「君はこの前の戦いで仮面の戦士に変身していた様だが、あれは本当に君の個性なのかい…?」

「あれは…その…」

「私がお答えしよう。仮面ライダー…それはこの世界と並ぶ幾つもの並行世界に存在するヒーロー達だ。我が魔王が変身する仮面ライダージオウは、その力を継承した存在であり、この世界で言う個性ではない…法律上では個性として扱えるかもしれないが、その本質は全く違うものだろうね…」

以前、我が魔王が医者は無個性と診断された時の話を聞いたことがあった。

その時、我が魔王は足の小指の関節の数に関して触れられたそうだ。どうやら個性を伝える人類には足の小指の関節が”ない”らしいのだが、個性を持たない人間にはその足の小指の関節があるらしい。

我が魔王はその足の小指の関節があるタイプの人間だ。もし仮にジオウの力が個性であれば、この足の小指の関節は無いだろう。

「なるほど、つまりは緑谷少年の体質的には『無個性』ということか…ならばこの私の個性、受け継いでみないか…?」

「僕が…オールマイトの個性を…」

我が魔王にとつては憧れのヒーローの力。

受け継げるのならかなり嬉しい話だろう…

「僕、受け継ぎます！オールマイトの個性！」

「ウムー！いい返事だ！なら早速…」

「おっと、少し待ってくれ。」

我が魔王の答えは予想通りであった。

力を失いつつあり、後継者を見つけたいオールマイトと彼に憧れているだけでなく、

さらに強くなりたい我が魔王。個性の譲渡という取引は互いの利害が一致し、円滑に成

立するはずであった。

しかし、私には一つ不安があった。

「仮面ライダージオウとワン・フォー・オール。2つの強力な力が交わることで、どの様

な化学反応を起こしてしまうかは分からない。それが良い方向に向かうのか、悪い方向

に向かうのか、今は予測できないね。」

「確かに、ウオズ君の言い分もわかるよ…ジオウの力の強さは身に染みてわかってい

る…けど、僕が最高のヒーロー且つ最高最善の魔王になるには、オールマイトから個性を受け継いでもっと強くなる必要もあると思うんだ…」

ただでさえ強力な2つの力が合わさった時、何が起こってしまうのか想像は出来ない

…

だが、我が魔王の気持ちを汲むのも大切だ…

「なるほど…なら私に一つ提案がある。」

そう言っつて私は1つのブランクライドウオッチを取り出す。

「これは…」

「僕が変身に使っているライドウオッチです。」

「ええ、ここにはライダーの力というのをに入れておけるのですが、その仕組みを応用すればあなた方の個性、ワン・フォー・オール”をこの中に入れることもできるはず。」

ワン・フォー・オールの何代にも及ぶ歴史、それは1人の仮面ライダーの歴史よりも濃厚かもしれない…我が魔王の中にある仮面ライダーの歴史とぶつかり合ってしまう、その身が持つかも分からない。

だがしかし、我が魔王がさらに強くなるだけでなく、彼の憧れも尊重したいという気持ちもある。

だからこそ、ジオウにとって最も安全な手段での継承を提案することにした。

「どうでしょうか？御2人とも…ジオウの力の一部にすることでリスクはかなり減ると思われます。」

「ウオズ君がそういうなら、僕もこのやり方でいいと思うよ。」

「うむ…私も賛成だ。ワン・フォー・オールは100年以上にわたって培われて紡がれてきた…実は私自身、次の代以降受け入れられる者がいない可能性も少しは考えてたのだよ。よし、ではライドウオッチを通して私の力を流し込み継承するでしょう！」

我が魔王もオールマイトも賛成してくれたようで何よりだ。

普通の人間が受け入れられなくなるかもしれない個性、それをライドウオッチという新たな器に入れるというのも悪くないと感じてくれたそうだ。

早速私は我が魔王に手を差し出していただき、その上に先程のブランクライドウオッチを置く。

「では、オールマイト…継承の儀を始める。この上に手を置いて、実際に継承するときはどうしているのか考えてみたまえ…」

「その時は個性を継承させたいと思いつながら、”自分の遺伝子の一部を摂取させる”必要があるな。」

「つまりは…？」

「髪を食ってもらおうとか…爪を煎じた茶を飲んでもらおうとか…後はデープキスとか

セツ…」

「それ以上言うなー!!」

我が魔王もすっかり困ってしまっている。未だ14歳の我が魔王に何を吹き込もうとしているんだ…

「例えばだが、少し血を流してもらおうことは可能かな？ライドウオッチにあなたの遺伝子を吸収させて取り込むことができるかも知れない…」

「うむ、任せたまえ…」

オールマイトはマッスルフォームに姿を変え、粗大ゴミの尖っている部分で少し指を傷つける。

「緑谷少年。君はウオズ君と共に体を鍛え、私の前で見事な活躍をしてこの力を勝ち取った。受け取ってくれ…」

そして、流れ出た血をブランドライドウオッチの上に垂らしてから再び手を翳す。

「これが…オールマイトの力…」

すると、ウオッチは光を放ち継承された個性を具現化した物へと変化する。

「祝え！長き歴史の中で紡がれてきた個性、ワンフォーオール！その力が我が魔王に継承されたその時を！」

完成したライドウオッチ、”ワン・フォー・オールウオッチ”とでもしておくか…

その完成と共に我が魔王が、ウオツチのリングパーツであるウエイクベゼルを回そうとするが…

「あれ？回らない…？」

「貸してみたまえ、我が魔王…」

何故か回らなかつた。これではウオツチが使えない。

試しに私も回そうとしたが一切動かなかつた…ゴリライズも継承しろとでもいうのか？

「あれ？オールマイトの方の力はまだ消えていないのかな？ということとはちゃんと継承できていないのか…」

更によく見るとオールマイトの方はマツスルフオームを保ったままだ。

まさか上手く譲渡できていないというのかツ…？

「いやいや、私の方はただの残り火だ。私の時も継承してからしばらくはお師匠も個性を使っていたし…継承自体は完了している筈だ…」

現状を整理すると、先代継承者であるオールマイトと、現在力を持っているライドウオツチが並立して存在することは可能。

しかしなぜ、ライドウオツチが起動できないのかが不明だ。

「ウオズ君、きつと今の僕じゃまだ駄目なんだ…これからもっと強くならないとこの力

は使えない。だから僕、もつと鍛えるよ！」

しかしながら、我が魔王は前を向いているようだ。

今はまだ使いこなせないからウオッチが起動しない。だからこそもつと上を目指す

：

「良きお考えです。私も協力しますよ。」

「緑谷少年、ウオズ少年、よかつたら私にも協力させてくれないか？後継者の面倒を見るのも先代としての仕事の一つだ。」

「ありがとうございます！」

オールマイトは我が魔王と私の面倒を見てくれるそうだ。

歴戦の猛者から戦いを教えていただけること程嬉しいことはない。

「それと聞いておきたいのだが、二人は志望校は決まっているのかな？」

「僕もウオズ君も雄英志望です！」

「OK！ならまずは雄英高校の入試合格を目指して共に頑張ろう！」

「はー！」

第5話 挑め！雄英入試

季節は巡って冬。

この時季には、多くの者に人生の岐路が訪れる。そう、入試である…

現在、中学3年生の出久とウオズも遂に高校入試の日を迎えた。

「おはよう、我が魔王。体調は万全かな？」

「うん！昨日はしっかり寝て体の状態もバッチリだよ！」

2人が今日挑むのはヒーロー科最高峰である国立校、雄英高校の入学試験である。

自分達に目を掛けて、1年間鍛錬に付き合ってくれたオールマイトの出身校であり、お互いヒーローになると決めたその日からここを志望校としていた。

「どけ、デク」

「かつちゃん!？」

「俺の前に立つな！ぶつ殺すぞ…」

前を歩く2人に退く様に言い、そのまま前へ歩いていくのは彼らのクラスメイトである爆豪勝己だ。

「おはよう！頑張ろうね…」

「全く、最近は危害を加えてこないとは言え、口の悪さは変わらないな……」

ヘドロヴィランの一件以降、爆豪から出久の方に絡んだり嫌がらせをすることは無くなった。

だが、時折恨む様な目で睨みつけられていると出久は時折感じてしまっていた。

「はあ……けど、緊張するなあ……」

「何を言っているのですか？緊張する必要なんてありません。私と出会ってからの3年間を思い出してみてください。」

雄英の校舎が近付いて来るごとに、出久の中の緊張感が増してきていた。

既に仮面ライダージオウの力を得ているというのに、何を恐れることがあるのだろうか。かとウオズは呆れ気味だ。

「恐れることはありません……堂々と胸を張ればいいのです。」

「そうだね、胸を張って一歩……」

ウオズの言葉に頷き、出久が歩き出したその時だった。

後ろから踏み出そうとした右足が、既に前にある左足に引つ掛かり、身体が前に倒れていく。

「大丈夫……?」

ウオズが咄嗟にその体を支えようとしたが、その必要はなかった。

突如出久の身体が、重力から解放されたかの様に浮いて、転んでしまうのを回避していた。

恐らくこれは、心配して声を掛けてくれた少女の個性によるものだろう。

「私の個性。ゴメンね、勝手に…転んじやったら縁起悪いもんね。」

丸顔のその少女が自身の個性を解除し、出久が地面に降り立つてからも少女は明るい笑顔で出久に声をかける。

「はあ〜緊張するよね〜」

「ひツ…：あツ…：ええと、ええと…」

「お互い頑張ろう！じゃあー！」

その少女の言葉に出久は緊張してか上手く返せず、お礼を言う間もなくその少女は先に会場へと入っていった。

「女子と喋っちゃったー！」

「何も喋れてなかったですよ。我が魔王…これまで女性との対人経験がないとはいえ、少しは慣れていただけかねば…」

出久は母親や大人の女性と話すことはあつても、中学などでは同世代の女子と話す機会はあまり無かった。それ故にいざ女子と話すとなると緊張して何も喋れないのであった。

「このまま調子を崩さなければ良いのですがね…まずは筆記試験、張り切って参りましょう。」

「そうだね、ウオズ君。」

「筆記はどうだったかな？我が魔王」

「何とか、9割以上は取れたかな…」

「流石です。」

さて、我々は午前の筆記試験を終えて、午後に行われる実技試験の説明を受けるために校内にあるホールに集められて各々の席に座っていた。

「今日は俺のライブによるこそー!!!エヴィバディセイ Hey!!!」

この試験の説明を行うのはプロヒーローでもあり雄英に勤めているプレゼントマイク氏だ。

残念ながら、彼のテンションと受験の雰囲気はミスマッチだったようで、誰もレスポンスを行っていない。

「こいつあシヴィー！受験生のリスナー！実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!」

Are you Ready!?! Yeah!!」

「ボイスヒーロープレゼントマイクだ〜スゴイ〜ラジオ毎週聞いているよ…」

「我が魔王、少し抑えて。」

一方、我が魔王だけは憧れのプロヒーローの存在に興奮し、目を輝かせて独り言を喋っている。

ヒーローを目の前にするといつもこうなってしまうのだが、雄英はプロヒーローが教師も担当している。ヒーローが当たり前にいる環境で我が魔王は平常心を保てるのか今から心配だ。

「入試要項にもある通り！リスナーにはこの後！10分間の模擬市街地演習を行ってもらうぜ!!」

模擬市街地での演習内容を簡条書きに纏めるとこの様になる。

- ・ エリア内には仮想敵というロボットがかなりいる。
- ・ 彼らは1P, 2P, 3Pの3種類があり、彼らを行動不能にすればそのポイントが自分の物になる。

・ この入試では合計のポイント数を評価する。

とこのことだ、おや？プリントには仮想敵が4種類書かれているようだが…

「質問よろしいでしょうか！」

「OK」

プリントの件を首を傾げて考えていたところ、メガネを掛けた真面目しそうな少年が挙手をして声を上げた。

「プリントには4種のヴィランが書かれています! 誤載であれば日本最高峰たる雄英において恥ずべき痴態! 我々受験者は規範となるヒーローの指導を求めこの場に座しているのです!」

「どうやら、我々が疑問に感じているところを質問してくれたそうだが、真面目過ぎるのだろうか? 言葉がかなり堅苦しい。少々言いすぎだ…」

「ついでにその縮れ毛の君! 先程からボソボソと…気が散る! 物見遊山のつもりなら即刻! ここから去りたまえ!!」

「おっと、何故か我が魔王に飛び火してきたな…これは許せん…」

「我が魔王に向かって無礼だぞ!」

「魔王! 君は何を言っているんだ?」

私は彼に対して即反論することにした。

「確かに我が魔王の独り言で少々迷惑をかけてしまったかも知れないが、それだけで数年にも及ぶ努力を否定するのはいただけないな…少なくとも私含めここに居る者達は何年も勉強や特訓をしてきた筈だ。ここに来た者を物見遊山と決めつけて否定する権

利など誰にもない。増してや我が魔王に対して…その非礼、即刻詫びて欲しいものだね…」

「すまなかつた…」

「(ち)ら(そ)、(ご)めんなさい…」

自分が失礼なことをしてしまったと、メガネの少年が詫びを入れて我が魔王も独り言で邪魔してしまったと謝り、この場は何とか収まった。

「OK OK, ちよつくら言い過ぎたところはあつたがナイスなお便りサンキューだ。4種目の敵はOP、云わばお邪魔虫。各会場に1体！所狭しと暴れまわっているお邪魔虫よ！倒せないことはないが、倒しても意味はない。リスナーにはうまく避けることをお勧めするぜ。」

さて、例のプリントにいる4体目の仮想敵だが彼を撃破しても意味はないそうだ。

ただし、我々の邪魔はしてくるそうだ…

多分私や我が魔王、後となりにいる爆豪君の様に強い力を持つ者ならば撃破してしまつた方が早い気もするな。

「俺からは以上だ！最後にリスナーへ我が校の校訓をプレゼントしよう…かの英雄、ナポレオンは言つた…真の英雄とは！人生の不幸を乗り越えてゆく者と！さらに向こうへ…Plus Ultra!」

ということとで説明を終えて、我々は指定された会場に向かう。

私と我が魔王は受験番号こそ近かったが、会場は別であった。

恐らく同じ学校の者同士で協力するのを防ごうということだろう。

「では、健闘を祈っております。我が魔王」

「うん、ウオズ君も頑張つてね!」

「勿論です。」

ということとで私も演習場に向かうバスに乗って、指定された場所に向かうのであった

：

入試の演習場には既に多くの受験生が集まっており、ウオズもその中にいた。

(我が魔王の覇道をお支えするだけでなく、私自身の憧れに近付くため…この入試、本気で行かせてもらおう…)

『ウオズ!』

他の受験者よりも演習場に近付きつつ、ビョンドライブを腰に巻きながらウオズミライドウオツチを起動する。

『アクション!』

ドライブバーを開けて、起動したウオッチを取り付けて開けば、彼の背後にウエアラブル型の時計を模したエフェクトが現れる。その光景に周囲の受験生からの注目も集まる。

「変身」

『投影!フューチャータイム!』

ライドウオッチを装填していたスロットを起こす様にして閉じれば、ミライドウオッチに描かれた戦士の姿がベルト内部に投影され、ウオズの身体が緑色の光に包まれる。

『スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

その光は銀と黄緑色の鎧となり所々に腕時計のバンドの様な意匠が取り付けられる。後ろの時計から現れた“ライダー”の文字が複眼となってその顔に装着され、新たな仮面ライダーの変身が完了する。

「祝え!過去と未来を読み解き、正しき歴史を記す預言者!その名も仮面ライダーウオズ!新たな歴史の1ページである。」

「なんであいつ、自分で祝ってるんだ…?」

その変身にウオズ自身が祝辞を述べれば、近くにいた金髪に黒い稲妻の様なメツシユが入ったチャラそうな少年がツツコミを入れる。

「はい、スタート!」

その時、突然プレゼントマイクによって試験開始が宣告された。

「どーした!? 実戦にカウントダウンなんざねえんだよ! 走れ走れ! 賽は投げられてんぞ! ほら、既に何人かスタートしてるぜ!」

カウントダウンから戦いが始まるのなんて、格闘技では当たり前だが、ヒーロー達の戦いではありえない話だ。多くの受験生が反応できずスタートを切れていない中、ウオズは既に演習場内に向かって走っていた。

『ジカンデスピア! ヤリスギ!』

ジカンデスピアを手に持ち、槍状にすれば早速目に入った仮想敵の首を突き、その機能を停止させる。

「俺達も行かねえとツ……!」

先程の金髪の少年を含めて、他の受験生達も演習場内に流れ込んでくるがその間にもウオズは、自分に集まってきた仮想敵達を次々と槍の刃先で切り裂いていく。

『カマシスギ!』

「君達の命、10秒で刈り取ってしんぜよう。」

更にやって来る3体の仮想敵に対して、ウオズはジカンデスピアをカマモードに変形させ、まずは先頭の敵に振るえば、その胴を切り裂き上半身と下半身を真っ二つにする。

2体目がウオズに殴りかかろうとすれば、今度はその腕をジカンデスピアを用いて切り裂き、胸部を蹴って突き飛ばす。吹き飛ばされて壁にめり込んだ仮想敵も機能を停止させてしまう。そして、最後の一体が自身に迫れば、カマを敵の股下に突き出してから、一気に上げることで、その身を一刀両断。

「さて、この辺の敵は他の者に譲ってやるとしよう…」

演習場の入り口付近のエリアには、既に多くの受験生がおり、やって来た仮想敵も彼らによって次々と撃破されている。

その様子を見てか、誰もいないエリアの敵を狙った方が競合が少なくポイントを稼げると判断したウオズは新たなミライドウオツチを取り出す。

『シノビ！』

『投影！フューチャータイム！』

『誰じゃ？俺じゃ？忍者！』

『フューチャーリングシノビ！シノビ！』

ビヨンドライバーのミライドウオツチをウオズからシノビに付け替えたことで、仮面ライダーシノビの力を持つ仮面ライダーウオズ・フューチャーリングシノビに姿を変える。

「それじゃあ、サラバーイ」

この場に居る者達に別れを告げると、ウオズは忍者の様に高速でこの場から去り移動していく。

演習場内を駆け回りつつ、何体かの仮想敵を見つけ次第切りつけながら、多くの仮想敵が集まるエリアに到着した。

「ここが穴場か…」

他の受験生がいないエリアで、ウオズは大量の仮想敵を見つけて、カマモードになったジカンデスピアを構える。

「いざ、勝負!」

目にも止まらぬ速さで敵に近付き、鎌を振るい次々と敵を切っていく。

仮想敵達は自身がウオズを補足する前に、身体を切られて機能を停止し、彼の姿を捉えて攻撃を仕掛ける者も高速で動く彼に躲されてから体の各部を切られてシャツトダウンしていく。

「この数なら、一網打尽にしまった方が良さだろう…」

運が良いのか悪いのか、彼が降り立った場所には受験生こそ少ないが多くの仮想敵がおり、ウオズは10体以上の仮想敵に囲まれてしまっている。

『クイズ!』

『投影!フューチャータイム!』

『ファッション！パッション！クエスチョン！』

『フューチャーリングクイズ！』

今度は仮面ライダークイズの力を模した仮面ライダーウオズ・フューチャーリングクイズに姿を変えると…

「問題。我が魔王の誕生日は7月15日である。○か×か？」

仮想敵達に対してクイズの問題を出す。と言つても内容は出久の個人情報だが…

『マオウ…？ナニライツテイルンダ？』

『ナゼ、クイズヲダスンダ？』

人の言葉をしゃべれる様にプログラムされた仮想敵達は言葉を発しつつも、問いに答えることなくウオズに襲い掛かる。

「残念。全員時間切れだ…」

すると、仮面ライダークイズの能力により、クイズに無回答だった仮想敵達の身体に大量の電気が流れ、内部の回路が焼かれてしまう。

「ちなみに正解は○だ。流石仮面ライダークイズの力だ…」

自分が出したクイズに不正解だった者や無回答の者に電撃で攻撃する仮面ライダークイズの力に感心しつつ、ウオズが他の仮想敵を倒そうとしたその時だった。

「おや？あれは…」

「に、逃げろー!」

「デケエのが来るぞー!」

これまでの仮想敵とは一線を画する、巨大な体を持つ仮想敵が現れ、受験生達に迫っていた。

「例のOPか…」

逃げる受験生達とは逆方向に走り、ウオズは巨大な仮想敵に向かっていく。

「おい!大丈夫かよ!」

「足が…」

ウオズがその場に着いた頃、先程の金髪の少年が倒れていた別の受験生の方を担ぎその場から逃がそうとしていた。もう一人の受験生は恐らく足を挫いてしまったのだろうか…:上手く歩けないようだ。

「危ない!」

だが、その2人の背後から巨大敵の拳が迫っていた。

『キカイ!』

『投影!フューチャータイム!』

『デカイ!ハカイ!ゴーカー!』

『フューチャーリングキカイ!』

咄嗟にウオズはキカイミライドウオツチを使って、仮面ライダーウオズ・フューチャーリングキカイに姿を変えれば、飛び上がって彼らに迫る敵の拳に自身の拳を打ちこむ。

「ええっ!？」

ウオズのフューチャーリングの中でも特に高火力なキカイのパンチにより、巨大敵の手を形成する鉄板がへこんでしまう。だがそれだけでなく、ウオズの放ったパンチの衝撃で肘と肩の関節部を形成する金属パーツが悲鳴を上げた。肘関節は押し潰れ、肩関節は千切れて脱臼したかのように外れてしまい、巨大な右腕が使い物になる無くなってしまった。

「今のうちに逃げたまえ！」

「ああ、サンキューな！」

負傷者を金髪の少年に任せて、ウオズは仮想敵に向き合う。

「さてと、私の力を試すための犠牲となっていたかどうか…」

『ヤリスギ!』

右手にジカンデスピア・ヤリモードを持ったウオズが敵に向けて駆けていく。

(まずはキャタピラを…)

仮想敵の脚変わりとなっている戦車の様なキャタピラの前で、背中からロボットアーム

ムを伸ばせば、左側のキヤタピラに突き立てて動きを止めさせると、ジカンデスピアのタッチパネルを操作する。

『フィニッシュタイム!』

『爆裂DEランス!』

すると槍の刃先から赤い光が放たれ、仮想敵の右側のキヤタピラ部を一気に切り裂いた。

「これで動けなくなったな…」

巨大敵の進撃を止めたウオズは一度引き下がりながら、ビヨンドドライバーを一度開いてから再び閉じる。

『フィニッシュタイム!』

すると、背中から伸びたロボットアームの先に倒された仮想敵のパーツが集まり、巨大な機械の腕になると…

『フルメタルブレイク!』

ウオズのパンチを撃つ動作に合わせて、その腕が巨大敵の胸部にパンチを放つ。

「これで終わりだ…」

その拳は巨大敵の胸を貫き、敵の身体は炎と煙を各部位から出しながら崩れていく。

「私はこれで問題ないだろうな…さて、あとは我が魔王の結果を待つだけだ。」

倒れていく仮想敵を背に、ウォズは満足気に出口に向けて歩いていく。

それと共に試験終了のアナウンスが流れる。

彼の中では倒した敵のポイントはある程度計算されており、既に合格圏内という確信を持ちながら去っていく。

彼が気になっているのは出久の試験の様子だ：

彼もしつかり仮想敵を倒して合格できるのか、そのことを気にかけてながら他の受験生よりも一足先に演習場から校舎に戻るのだった：

第6話 魔王のターン

時は少し遡る。

広大な雄英高校の敷地には、市街地を模した演習場が幾つもあり、出久もその内の一つにバスで向かい、到着していた。

（緊張する…けど、今までの特訓やライダーの歴史を思い出せー）

ここに居る受験生達の多くは緊張よりも自信の方が勝っているのか、平常心を保っている様子で開始の時を待っている…

「今の僕なら…いける気がする！」

出久も最初は緊張していたが、中学の3年間でやって来たウオズやオールマイトの特訓や、完全に自分の物として使いこなせるようになったジオウの力のことを考えれば、その緊張は自然と薄れていった。

（あの人…校門で会った良い人！同じ会場なんだ…）

彼が辺りを見回していると、校門でこけそうなときに助けてくれた丸顔の少女、麗日お茶子が居た。

先程のお礼を言おうと思って、話しかけようかと出久が考えていた時だった…

「その君！少しいかな…？」

「は、はい…？」

後ろから実技試験の説明の際に出久を注意したメガネの少年が声をかけてきた。

「先程はキツイことを言つてしまいすまなかつた。俺自身入試でピリピリしすぎていた様だ…」

「い、いえ…こちらこそその…ボソボソ喋つてて…すみません…」

メガネの少年、飯田天哉も出久と同じ会場である。

出久を見つけると先程出久のことを何も配慮せず、攻め立てたことを謝ろうとしていた。

「少し気になったのだが、なぜ君はあの少年に“魔王”と呼ばれているんだい？」

「それは…」

「はい！スタート！」

飯田の問いかけに出久が答えようとしたその時、プレゼントマイクによって突然開始のアナウンスが為された。

「行かなきゃ！」

『ジクウドライバー！』

アナウンスを聞くとすぐに出久は演習場に向けて走り出す。

カウントダウン無しでの開始にしっかりと反応できた出久は、ジクウドライバーを腰に巻き付けてジオウライドウォッチを取り出す。

『ジオウ!』

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『ジカングレード!ジユウ!』

走って演習場内に入り、仮面ライダージオウへの変身を果たせば、身体能力が強化されて走る速度がさらに上がっていく。他の受験生を抜き去り、先頭を走りつつ、ジカングレード・ジユウモードを手を持ち目の前にいる仮想敵を次々と撃ち抜いていく。

「その銃、反則ではないのかい!」

自身の個性であるエンジンによって出久に追いついた飯田が、その銃は持ち込み可能の範疇を超えたサポートアイテムなのではないかと問いかける。

この場に持ち込んでいいのは、自分の個性を使う際に必要な物や、個性を使うことで起こる体への負担を抑えることのできるサポートアイテムだけである。銃や剣などは持ち込むことができないだけでなく、そもそも銃刀法違反になってしまう。

「大丈夫だよ。これも僕の個性だから…」

出久に関しては、仮面ライダージオウの力自体を自身に芽生えた個性として役所に提

出している。彼の母もジオウを出久の個性として受け入れている。

なので、ライドウォッチやジカンギレード等も個性の一部なので持ち込みが可能だ。

「そうか、ならここは…お互いベストを尽くすでしょう！」

「そうだね！」

目の前に迫った2体の仮想敵をジオウと飯田がそれぞれ蹴り飛ばす。

『ダブル！』

さらにもこちらに向かってくる数体の仮想敵に備え、出久はダブルウォッチを起動する。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

起動したウォッチをジクウドライバーのD、3スロットに装填し、1回転させる。

『アーマータイム！』

『サイクロン！ジョーカー！』

『ダブル！』

すると、サイクロンメモリとジョーカーメモリを横したメモリドロイドが召喚され、彼らが仮面ライダーW変身時のメモリを構えるポーズを取り、変形してからアーマーと共にジオウに装着されていく。

”ダブル”の文字が複眼として装着され、仮面ライダージオウ・ダブルアーマーへの

変身が完了する。

「さあ、君達の罪を…教えろ！」

10体近い数の仮想敵達が押し寄せると、ジオウの肩に付いているメモリドロイドが分離し、ジオウ自身と共に敵に向けて走っていく。

「また姿が変わったッ…！」

自身に迫る敵を倒しつつ、飯田もジオウの新たな姿に驚きを隠せずにいた。

だがその間にも、ジオウは確実に敵を倒してポイントを稼いでいる。

自分自身はジカングレードをケンモードにして周囲の敵を切りつつ、メモリドロイドサイクロンはホバリング飛行をしながら敵の頭部を蹴りつけて敵を撃破し、メモリドロイドジョーカーは格闘戦で敵を次々と葬っていく。

「次は僕とッ…！」

更に迫って来る3体の仮想敵の姿を捉えると、メモリドロイド達は再び変形して出久のアーマーとして装着される。そして、右手を翳せば竜巻が発生して仮想敵達の身体が巻き上げられる。

その竜巻の中にジオウが入っていき、上手く動くが取れない仮想敵達を次々と倒していく。

「次は…ブレイドさん！力を貸してください！」

『ブレイド!』

出久はウオズと出会ってからの3年間の特訓の間に19人の平成ライダーの歴史を継承しており、多くのライドウオッチを使い分けて戦うことができる。そのライドウオッチの1つであるブレイドライドウオッチを起動してダブルウオッチと取り換え、ジクウドライバーを1回転させる。

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

『アーマータイム!』

『ターンアップ!』

『ブレイド!』

ブレイラウザーを模したアーマーを肩に付けた仮面ライダージオウ・ブレイドアーマーに変身し、ジカンギレードを構える。

「一体、幾つ姿があるんだ…」

既に飯田の前では3つ目の姿を見せるジオウ。その異質な強さに飯田や他の受験生は困惑しつつも、各々仮想敵を倒してポイントを稼いでいく。

「いくよー」

肩のアーマーから現れたトカゲが描かれたカードと鹿が描かれたカードが、ジカンギレードに入っていく。

そして自分の周囲にいる敵に向けて振るえば、ジカンギレードの強化された切れ味によつて装甲を真つ二つにされ、それと同時に剣から放たれた雷撃が回路に流れ込み、その高電圧に耐えきれず爆発する。

仮面ライダーブレイドのラウズカードを使いこなす力を受け継いだこの姿は、9種類の多様な能力を活用することができる。

「まだ、向かつてきてる…」

周囲の仮想敵こそ倒したが、また遠くから敵が向かつてくるのを出久が確認すれば、肩から出て来たジャガーが描かれたカードがジオウの脚に入っていく。すると走力がかなり強化され、見つけた敵に向けて高速で向かつて行って先頭にいる一体の首をジカンギレードで切り落とす。

「ハアッ!!」

更に向かつてくる仮想敵の攻撃を避けつつ、ジカンギレードで敵の脚部や腹部を切断していく。

切り伏せられた仮想敵達は次々と鉄屑と化していき、地面には先程まで彼らの身体を動かしていた電気回路やコードが散らばる。

「おいおい、何かデカいのが来たぞー!」

「早く逃げろ!押し潰されるぞー!」

出久の実技入試は順風満帆に進むかに思われたが、突如逃げ惑う受験生達の声が入る。

次に出久の耳に入ってくるのは、地面から響く轟音とモーターが回転する音だ。

「あれがさつき説明してた…」

出久はそれが、説明会の時にOPのお邪魔虫と紹介されていたロボとすぐに理解した。

多くの受験生が巨大敵から逃げていつてるが、出久は冷静に敵の方を見ていた。

「いいッ…：ダメッ…：」

「あの子は…」

そんな中、出久はジオウの仮面越しに1人の少女の姿を確認した。足が瓦礫の下敷きになり、上手く動けないようだ…

(転んじやったら、縁起悪いもんね。)

その少女は雄英の校舎前でこけそうになった出久を助けてくれた少女、麗日お茶子であつた。

『エグゼイド！』

自分を助けてくれた少女の危機に、出久の身体は自然と動いていた。

エグゼイドライドウォッチを起動し、ブレイドウォッチと付け替えればジクウドライ

バーを回転させる。

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『アーマータイム！』

『レベルアップ！』

『エグゼイド！』

ジオウは仮面ライダーエグゼイドの歴史を継承した、仮面ライダージオウ・エグゼイドアーマーに姿を変える。その両腕には大型のハンマーであるガシヤコンブレイカーブレイカーが装備されている。

「ノーコンティニューで…クリアできる気がするッ…！」

麗日との距離を徐々に近づけていく巨大敵。

早く敵を退けなければ、彼女が轢かれてしまう。逃げることでできない彼女を助けるのに時間がかかれば、確実に巨大敵の餌食になってしまう。そんな状況で出久が選んだ答え、それは必殺技を使い早めに勝負を決めることであった。

『フィニッシュタイム！』

一時的に装備が外れ、ジクウドライバーを1回転させると、エグゼイドの力で強化された脚力で一気に飛び上がる。

『クリティカル！タイムブ레이크！』

そして、巨大敵の胸部に向けて一直線に降下していき、両手を覆うガシャコンブレイカーブレイカーにエネルギーを溜めて連続でパンチを繰り出していく。パンチが繰り出されていくのと共に”ヒット”という文字のエフェクトが現れている。

巨大敵の身体はパンチを受ける度に、装甲はダメージを受けてへこんでいき、身体が後退していく。

「スマーツシュ!!」

そしてジオウはトドメを刺そうと右腕を振り上げてエネルギーをため込み、一気に巨大敵の胸部に向けてその拳を突き出す。

その攻撃を受けて機体が限界を迎えた巨大敵は、身体の各部位を爆発させながら後ろに倒れこんでいく。

「あれ…?ウチ、助かった…」

巨大敵が倒されたのに気付いて視線を上げた麗日の視界に、エグゼイドアーマーを除して地面に降り立ったジオウの姿が映る。

「もう大丈夫…」

ジオウは彼女の方に駆け寄ると、足に落ちて来た瓦礫を持ち上げて除ける。

「僕が来たッ…!」

「あ、ありがとうッ…」

助けてもらったことに感謝しつつ、安堵の表情を見せる麗日。

「残り時間も少ないし、お互い頑張ろうね。」

「う、うん！」

残り時間はあと僅か、試験のラストスパートをかけえるために2人は再び戦場に向けて走り出したのだった…

「あら、魚津君。いらっしやい。」

「これはこれは我が魔王の母君。お邪魔しております。」

「魔王って呼ばれ方はよく分からないけど、ゆっくりして行ってね。」

入試終了から約1週間。自分の入試結果を見た後のウオズは、出久にも届いているだろうと思つて彼の家を訪れていた。

「あ、ウオズ君いらっしやい。」

「おはよう。我が魔王も、もう結果が届いたかな？」

「うん、今から見るところだよ。」

因みにウオズは既に自分の結果を知っており、自分が入試を全体2位で合格したこと

が分かった後、出久も合格していると確信していた。

「では早速、見てみるとしましょう。」

2人は出久の寝室に入り、勉強机の上で雄英から届いた封筒を開ける。

するとそこには小型の端末が入っており、一度結果を見ていたウオズはその端末を操作する。

『わーたーしーがー！投影された！』

「オールマイト!?!」

すると端末から投影された画面に、オールマイトが映し出される。

突然の彼の登場に出久はかなり驚いている。

『諸々手続きに時間がかかって、連絡が取れなくてね。いや、すまない!』

実は入試の日以降、出久達とオールマイトは連絡が取れなかった。

その原因は主に雄英とオールマイトの間で為された手続や、合格者向けの結果発表のビデオ撮影であった。

『実は、私がこの町に来たのは他でもない。雄英に勤めることになったんだ。』

「え!?!オールマイトが雄英に?」

「これは嬉しいサプライズだね。」

出久の住む地域と雄英高校はかなり近い。

約1年前からオールマイトが出久の住む町や、付近の海岸にいたのは雄英に勤めるために引越してきたからだった。

『さて、入試の結果だが筆記は合計で9割超え！そして実技では仮想敵を撃破して得たポイントは80ポイント！』

「素晴らしい！私以上の高得点だ！」

『さらに先の試験！見ていたのは敵ポイントだけではない！救助活動ポイント！こちらは審査制でヒーローとして相應しい行いをした者に与えられる！君に与えられたレスキューポイントは50ポイント！合計で130ポイント！！歴代最高点で主席合格だつてや！』

「歴代最高……」

『来いよ！緑谷少年。ここが君のヒーローアカデミアだ！』

「うわあああああん!!」

彼自身、合格の自信こそあったが、改めて聞いてみると嬉し涙が目からあふれ出てしまう。

「涙をお拭きください。どちらのポイントも私以上ですよ……」

涙を流す出久にウオズはハンカチを差し出す。

その後、出久の母の緑谷引子も加わり親子で泣いていたが、雄英高校への合格……

これもまた緑谷出久が歩む覇道の1ページとなるのであった…

入学編

第7話 雄英入学

再び訪れた桜の季節。

桜は国立の名門校である、雄英高校をも彩っている。

「こうして見てみると、ここの敷地はかなり広いですね。」

「そうだね。入試の時の演習場が何個もあるって考えたら、この広さも頷けるよね。」

既に出久とウオズも雄英高校の門を潜り、校舎に向けて歩いていった。

「しかしながら、爆豪君も雄英に受かっているそうだね。」

「うん、先生も雄英に3人も受かったって言ってる喜んでたね。」

ごく普通の公立中学である折寺中学からの雄英進学は史上初である。しかも、それが一気に3人もなれば校長含む教師陣はかなりの大騒ぎであった。

「私的には他のクラスであって欲しいところだが……」

既に入学前に自身のクラスを知らされており、出久とウオズはお互いが1年A組に配属されたことを知っていたが、爆豪が彼らに教える筈もなく2人は彼のクラスを把握していない。

ウオズとしては他のクラスであることを望んでいるようだが…

(扉デカッ！)

彼らが指定された教室まで歩いてみれば、5 m程の巨大な扉が目に入った。

様々な個性の生徒に対応したユニバーサルデザインの巨大な扉を開けて、2人が教室に入っていく。

「机に足をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者に申し訳ないとは思わんのか！」

「思わねえよ！テメーどこ中だよ？端役が!!」

(最悪だ…)

ウオズにとっては同じクラスだと嫌だなど思っていた2人が、何やら言い争いをしていた。

実技試験の説明会で出久を攻めた男と、いじめっ子の爆豪。

彼らと同じクラスということに、ウオズは頭を抱えそうであった。

「ぼ、俺は聡明中出身の飯田天哉だ。」

「聡明だあ!!超エリートじゃねえか!ぶっ殺しがいがあるかねえかあ!!」

「ぶっ殺しがいい!?君ひどいな!本当にヒーロー志望か?」

言い争いをしていた2人だが、教室に入ってきた出久達の方に気付くと、飯田がそちらに歩み寄って来る。

「おはよう！俺は私立聡明中学の…」

「聞いてたよ！僕は緑谷…よろしくね。飯田君」

「私は魚津圭介。ウオズと呼んでくれたまえ…」

飯田に挨拶をし返す緑谷に続き、ウオズも自身の名を名乗って軽くお辞儀をする。

「緑谷君…君は実技試験のあの構造に気付いていたのだな…」

「え…？」

「俺は気付けなかったよ！実力も素晴らしいが、試験に挑む者としても完全に上手だった…」

飯田は受験中、仮想敵の撃破ばかり考えてしまっており、レスキューポイントを稼げていなかった。

一方で出久は試験終盤に巨大敵を倒し、少女を一人助けていた。飯田はレスキューポイントを多くもらえるなら出久の様に人を救うために強敵に挑んだ者だろうと考えていた。

（ゴメン…気付いていなかったよ…）

なお、出久は試験の構造に気付いて助けたわけではなかった模様。

「ああ！君は…地味目の！」

「おお、君は確か、我が魔王がこけそうだった時に助けてくれた方か。」

さらに教室に入ってきたのは麗日お茶子だ。ウオズからすれば入試前にこけそうだった出久を助けてくれたという印象が強い。

「今日って、式とかガイダンスとかだけなのかな?」

「仲良しごっこやるなら他所に行け、ここはヒーロー科だぞ。」

少し騒がしくなった教室が、1人の男の一声で一気に静まる。

(寝袋……?)

出久達が声のした方を見てみれば、そこには寝袋に入った謎の男がいた。

彼の言葉に恐る恐る全員が自分の席に座る。

「俺は担任の相澤消太だ。ヒーロー名はそのうちわかるだろ。」

(まさかの担任!?)

寝袋から出て来た無精ひげを生やしたこの男こそ、1年A組の担任である相澤消太だ。

「早速だが、コレ着てグラウンドに出ろ。」

そして、彼が告げたのは入学式等の行事への出席ではグラウンドに行けという指示。それに驚きつつも生徒達は支給された体操服を持ち、更衣室に向かうのであった……

さて、相澤先生の指示で体操服に着替え、グラウンドに来たのだが…

既に白線で円や線が書かれており、体力テストの様なものをこれから行うのだと推測できる。

「これより、個性把握テストを行う。」

「「個性把握テスト!?!」」

名前から察するに、個性を使つて行う体力テストの様なものかな…?

「入学式は? ガイダンスは?」

「そんな悠長な行事をするほど、ヒーロー科は甘くない。」

入学式が無いだとツ…!?

我が魔王の晴れ舞台が一つ消えてしまつてはいないかツ…!!

「君達がこれまで行つてきたのは個性使用禁止の非合理的な体力テストだ。ま、文部科学省の怠慢だな。」

とは言うものの昨今の超常社会において、ヒーロー科を目指す小・中学生は多い。

そうした子達が多いにも関わらず、体力テストが個性使用禁止だったり個性を伸ばす様な教育が為されていないのはヒーロー科の人間としては疑問を感じるだろう。

「ではまずデモンストレーションとして入試成績トップの緑谷、こつち来てソコの円に

入れ。」

「は、はい!」

おや? どうやらデモンストレーションは我が魔王がご指名の様だ。

爆豪くんが彼のことを睨みつけているようだが、気にしないでおう。

へドロ事件で我が魔王がジオウになってから、彼はずっとこの調子だが正直慣れてしまった。

「中学の時の『個性禁止』ハンドボール投げの記録、幾つだった?」

「34mです。」

「その円の中なら何してもいい。全力で飛ばせ。」

「分かりました…」

『ジクウドライバー!』

そう言われると我が魔王は、ジクウドライバーを腰に巻き付ける。

オールマイトのアドバイスで、役所にはジオウの力を個性として提出している。なので、こういう場で使用しても問題ない。

『ジオウ!』

『ゴースト!』

我が魔王が最初に選んだのは、ゴーストのライドウオッチであった。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『アーマータイム！』

『カイガン！』

『ゴーストー！』

そして我が魔王は、仮面ライダージオウ・ゴーストアーマーへの変身を完了する。
相澤先生からボールを受け取り、我が魔王は白線で書かれた円の中に入っていく。

「スッゲー！姿が変わった！」

「あの人って……」

「あれって、1年前のヘドロん時の……」

「まさか、同じクラスに居るとはな……」

確か1年前のヘドロ敵の時、この姿が謎の仮面の戦士としてネットで話題になっていた。

何人が覚えていてくれたみたいだね。

「それじゃあ、いきます！」

そう言つて、我が魔王がボールを投げると彼の肩から現れた1体のパーカーゴーストがボールを掴んで空へと飛んでいく。

「緑谷…あいつはどこまで飛んでいくんだ？」

「そうですね…僕が”いい”って思うまでですね。」

「なるほど、じゃあ記録は無制限だな。」

流石我が魔王。パーカーゴーストを活用して早速素晴らしい記録を出された。

「いきなり無限?! スゲえじゃねえか!」

「まずは己の限界を知る。全てはそこからだ。」

確かにこの個性把握テスト、相澤先生が我々の個性やレベルを確認することができ
る。

だが、それだけでなく成績を数値化することで各々が自分の立ち位置や今の強さを理
解することができる。入試に合格して調子に乗っていた者も、ここで出鼻を挫かれてし
まうだろう…

「流石ヒーロー科! 全力で個性使えるなんて!」

「何コレ面白そう!」

”面白そう”か…

ピンク色の肌の少女が放った一言に、先生が反応する。

「ヒーローになるための3年間、そんな腹積もりで過ごす気でのかい?」

その時、彼が不敵な笑みを浮かべたのを私は見逃さなかった。

「8種目トータル成績の者は見込みナシと判断し、除籍処分としよう…」

「「ハァー!?!」」

「生徒の移管は俺達の自由! ようこそ! これが雄英高校ヒーロー科だ!」

少々自由すぎる気もするが…まあ、やるしかないだろうね。

ということ、我々は個性把握テストに向けて準備をしていくのだが…

「クソツ…前までその辺の石コロだったはずだろ…」

そんな中、爆豪くんだけは不満そうに我が魔王のことを睨みつけていた。

「それはもう、過去の話だろ? 爆豪くん」

「ああ…?」

「我が魔王が力を得たのは運命であり、彼の信念もあつてこそだ…その事実を早く受け入れたまえ。」

無個性であつたのに、いつしか力を得た我が魔王に対して彼は不満を抱いているようだ。

ヘドロ事件から1年経っているというのに、何故受け入れられないのだろうか…?

「まあいいだろう、このテストで今の君と我が魔王の差を感じるがいいさ…」

「うっせ…」

さて、これから行われる個性把握テスト、他のクラスメイトの個性を把握するだけで

なく、私自身もその実力を発揮させていただけこう…

第8話 個性把握テスト

前回のあらすじ

雄英高校入学の日を迎えた緑谷出久とウオズ、及び1年A組のクラスメイト達。

しかし、彼らに待ち受けていたのは入学式ではなく、担任の相澤による個性把握テストであった。

最下位になれば除籍と宣告されたこのテスト、果たして無事に潜り抜けることができるのだろうか!?

第一種目 50m走

「我が魔王に関しては無用だろう…なら私も、その覇道を見届け追隨するため、この試練を突破させていただこう…」

「何言ってるか分からないけど…よろしくね、ウオズ君。」

「(こちらこそよろしく頼むよ。麗日君…」

最初の種目は50mの直線走り切る50m走である。ウオズは麗日とペアで走る事になっている。

自分の個性を發揮して、如何に速いスピードで走り切るかが肝となる。

例えば、彼らの前のペアにいる飯田であれば、個性であるふくらはぎのエンジンで加速し、一気に駆け抜けている。麗日は自身の個性、無重力（ゼログラビティ）によって靴や衣服を無重力化して身軽な状態で走ろうとしている。一方ウオズは：

『シノビ！』

『アクシヨン！』

仮面ライダーシノビのスピードを活かして、好記録を狙う様だ：

「変身」

『投影！フューチャータイム！』

『誰じゃ？俺じゃ？忍者！』

『フューチャーリンググシノビ！シノビ！』

仮面ライダーウオズ・フューチャーリンググシノビに変身したウオズがスタートラインに立つのを見て、本日2人目の仮面ライダーの姿を見ることがなったクラスメイト達は驚きの声を上げる。

「マジかよ！2人目かよ！」

「またいい記録が出るんじゃないか？」

「ウオズ君も仮面ライダー!?!」

「いちについてー」

麗日が驚いている間に相澤がスタートの合図をしようとし、それに気付いた彼女はすぐにクラウチングスタートの姿勢になる。それに対してウオズは特に構えもせず立っている。

「よいスタート」

『記録1秒』

そこからウオズがスタートしてゴールに辿り着くのかかったのは、僅か1秒であった。

仮面ライダーシノビの能力による加速性能だからこそ、出すことのできた記録と言えるだろう。

「早すぎるだろー！」

「俺の記録が…」

『記録7・5秒』

「ちよつと、速すぎるって…」

速さにおいて自信のあった飯田は自身の記録があつという間に追い抜かれたのに唾然とし、一緒に走っていたはずの麗日も取り残されてしまったようで息切れしながらも何とかゴールに辿り着いた。

「私の記録程度で驚いては身が持たないよ…我が魔王はもつといい記録を出すだろ

う……」

自信が好記録を出しても尚、視線は出久の方に向いていた。

「爆速ターボ！」

その出久の前の組には爆豪が居た。彼は両掌から爆破を放ち、その推進力で加速してゴールを目指したが……

『記録4. 13秒』

「チツ……下僕にすら勝てなかったか……！」

だがその記録は、彼が精々マフラーだけの男と侮っていたウオズにすら及ばなかった。

『カブト！』

そして出久の番、彼が選んだのは仮面ライダーカブトのライドウォッチであった。

『アーマータイム！』

『Change! Beetle!』

『カブト！』

「いちについて、よーい」

出久が仮面ライダージオウ・カブトアーマーへの変身を終わると共に、スタートの合図をしようとする。

「スタート」

「クロックアップ！」

だが、次の瞬間。ジオウの姿はゴール地点にいた…

『記録0・1秒』

「流石我が魔王だよ。」

「ううん、カブトさんのクロックアップのお陰だよ…」

光を超える速度のタキオン粒子が全身を駆け巡ることで発動するクロックアップ。使用時の速さは簡単な数字では表せないだろう。その力を借りたジオウでも、50mを駆け抜ける姿を誰にも視認させなかった…

第二種目 握力測定

握力計を使い、物を握りしめる力を測るこの競技。

背中から伸ばした複製腕で何重にも重ねて握る障子や、万力を創造した八百万が好記録を出していく中、ジオウとウオズはそれぞれ響鬼アーマーとフューチャーリングキカイに姿を変えて挑んだのだが…

「あッ…」

「どうした…？」

「そ、その…壊しちゃいました…」

2人揃って握力計を握りつぶしてしまい、ジオウはかなり申し訳なさそうにしている。

「許容荷重を超えたか…ふつうこんなことはあり得ないんだが…」

「ええ、鍛えてますから。」

「一先ず2人の記録は無限にしておこう…」

「スッゲー！緑谷の記録また無限かよ!?!」

第三种目 立ち幅跳び

「ハアツ…!」

『記録87・4m』

ウオズは再びフューチャーリンググシノビに変身し、ひとつ飛びして無事に好記録を出していたが…

『アーマータイム!』

『3・2・1!』

『フォーゼ!』

出久はフォーゼのロケットモジュールを模したブースターモジュールを両腕に装着した姿、仮面ライダージオウ・フォーゼアーマーに変身すると…

「宇宙に…行くー!」

そのアーマーを変形させ、ロケットモードに変化すると、ブースターモジュールから火を噴きながら宙へ向けて飛んでいく。

「なあ、魚津。あれはどこまで飛んでいくんだ…?」

「恐らく、宇宙まで…」

「記録無限だな…魚津、呼び戻しておけ…」

「かしこまりました…」

出久だけで3つ目の無限の記録に相澤は呆れてしまう。

「もしもし、我が魔王…」

「いや、電話でできんのかよ!」

相澤から出久を戻すように頼まれたウオズはファイズフォンXで彼に連絡を取っており、その様子に思わずA組生徒の上鳴がツツコミを入れてしまう。

第四種目 反復横跳び

『アーマータイム!』

『タカ!トラ!バツタ!』

『オーズ!』

タカ、トラ、バツタを模した姿のアーマーを身に付けた仮面ライダージオウ・オーズアーマー。出久がこの姿に変身して脚部のバツタスプリンターで地面を蹴って、区間内

を往復し続ける。

『記録、2011回』

「素晴らしいですね、我が魔王。」

因みにウオズはフューチャリングシノビの状態で挑んだのだが、止まるべきところで止まらず、少しロスがあつたため1582という記録に落ち着いた。

第5種目 ボール投げ

出久は先程投げたため免除で、ウオズの様子を見守っている。

フューチャリングを解除して通常形態になったウオズが、円の中に入っていく。

「さて、私は蹴りでいってみるとしよう……」

『ビヨンドザタイム!』

ウオズがビヨンドライバーを操作し、蹴りの構えをし……

『タイムエクスペーション!』

上に投げたボールに対して足を突き出して蹴り上げ、ボールは放物線を描いて飛んでいく。

『記録、1856m』

「流石ウオズ君だね。」

「お褒めの言葉。実に光栄だね。」

出久から褒められて少し嬉しそうなウオズである。

「緑谷君の実力もかなり強力だと思っていたが、魚津君の実力もかなりのものだな…」
「何か、2人の個性似てる気がするけど気のせいかな?」

飯田と麗日も既に2人のことを気にかけており、自然と彼らの周囲に集まっている。
「私のことはウオズと呼んでくれたまえ。個性が似てるのはたまたま、いや、もしかすると運命というやつかもね?」

「運命…?もしかして2人!?!」

「変なことを想像しないでくれ…」

まさかの展開を脳内で浮かべてしまった麗日に、ウオズは少し頭を抱える。

「死ねェ!」

その裏で爆豪もボール投げに臨んでいたのだが、爆風でボールを飛ばして出した記録は…

『記録705. 2m』

「クソが!」

同じ中学出身の2人には遠く及ばない記録であった。

既に、折寺中学から雄英に来た面子の中では最下位となってしまうている自分に、彼は不満を抱いていた…

第六種目 上体起こし

第七種目 長座体前屈

ここは2名ともベルトが邪魔になると判断して外して挑んだため、省略。

第八種目 持久走

『フューチャーリングシノビ！』

『アーマータイム！』

『『ドライブ！』』

『ドライブ！』

最後の持久走では、ウオズはフューチャーリングシノビに、ジオウはドライブアーマーに変身してスタートラインに立つ。

他のクラスメイト達も各々の個性を使う準備をし、スタートラインで開始の時を待っている。

「よいい、スタート。」

そして、相澤のスタートの合図と共に全員が走り始める。

「爆速ターボ！」

両掌からの爆破で加速し、その推進力で突き進む爆豪。足元を凍らせてその上を颯爽と滑っていく轟、涼ふくらはぎのエンジンで加速しながら走る飯田、自身の個性で創造

したバイクで走る八百万など各々が自身の個性を使ってトラック上を走っていくが…

「やはりドライブアーマーの加速性能も侮れませんね。」

「追いついてるウオズ君も十分凄いです…」

やはり、頭一つ抜きんでているのはジオウとウオズだ。

仮面ライダードライブの力で加速していくジオウに対し、ウオズはシノビの持つ高速移動で走って何とか食らいつついている。

「あんなの、ありですの!?!」

「バイク乗ってる奴が言えることじゃねえけどな…」

その後を追う八百万と轟は推薦入学生である。

家庭の環境もあるだろうが、推薦で雄英高校ヒーロー科に入って来れる人間は中々のエリートだ。

2人は心の奥底で、自分が一番実力があるだろうと思いついた入学式の日を迎えていた…だが、この場でその幻想はあっけなく崩れてしまった。

轟はバイクに乗ってる八百万も、まあまあ規格外と思っているようだが…

「お先に失礼。」

「一周抜かれた!?!」

この持久走では500mのトラックを3週の計1500mを走るようになっていく

のだが、既にジオウらは2周目に入っており、最下位の峰田を追い抜かしていた。「君のその個性、反復横跳びの時みたいに反発材として使ってみたらどうかかな？」

なんなら、出久はその峰田にアドバイスを送る余裕もあるようだ。

「言われなくても…やってやらあ！」

自分の前を去っていったジオウを追う様に、自身の頭に着いた球状の物体を前方に投げ、その上を忍者の様に素早く飛んで移っていく。先程よりも素早く前進していく峰田だが、それでも爆豪や轟らとの差が縮まるだけで2人の仮面ライダーとの差は広がっていく。

「クソツ…！」

さらに、2人との差をその身で感じる事となったのは爆豪だ。とうとう彼も、1周自分達よりリードしている出久達に追い抜かれてしまった。

「今回は中々、面白いクラスになりそうだ…」

誰よりも早く3周目に入っていくジオウとウオズを見て、相澤はただ1人笑みを浮かべるのであった…

「んじゃあ、パパッと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計したものだ…」

さて、全ての種目を終えて結果発表の時を迎えたのだが…恐らく1位は我が魔王で2位は私だろう…

「口頭で言うのは面倒なので、一括開示する…」

相澤先生がスマホから映し出した順位表を見てみたが、うん予想通りだ。

因みに爆豪君は5位か…そこそこ実力があると言ったところだろう…

「素晴らしい順位だ。おめでとう。」

「ありがとう…けど…」

そして、残念ながら最下位となってしまったのは峰田君か。

持久走では我が魔王のアドバイスを受けて頑張っていた様だが、周囲より小柄な体格故幾つかの種目で結果を残せなかったようだね…

彼の個性を把握し、救いの手を差し伸べた我が魔王は素晴らしいとだけ言っておこう

…

「因みに、除籍は嘘な。」

この瞬間、全員がポカンとしていた。

「君らの個性を最大限引き出すための合理的虚偽」

「ハアアアア!?!」

「どうやら、個性把握テストで最下位除籍は嘘だったようだ。

驚きの声上がり、除籍を回避した峰田君本人もかなり驚いている。

「我が魔王は少しホツとした表情を見せており、級友が1人減らなかつたことに安心して胸を撫で下ろしている。彼のことを気遣う我が魔王、流石お優しい……」

「さて、無事に個性把握テストが終わつたんだが、1人只ならぬ雰囲気で我々を睨みつけている男がいた。

「少し話そうか。」

「いいぜ……言いてえことはたんまりあるからな……」

「そう、爆豪勝己である。」

「終礼の後少し席を外させてもらい、我々2人だけで階段の踊り場に彼を呼び出した。

「で、言いたいことつてのは何かな？」

「ああ、クソデクだけじゃなくてテメエまで力を隠してやがつたな！」

「怒った爆豪君がする行動は至極単純。そう、私の服の襟首を掴むことだ。」

「テメエら2人揃つて個性を隠して俺を騙してたんだろ！裏で俺を嘲笑つてそんなに楽しかつたか?! ああ……!」

流石に、殴りかかつて来られそうだったので首にかけていたマフラーで彼の身体を巻

き取り、拘束する。

「離せ！」

「確かに、私が折寺中時代に”本気を出していないかった”ことは謝ろう…だが、君を騙して嘲笑ったりはしていない。それだけはつきり言っておこう。」

少なくとも私が彼の前で仮面ライダーウオズに変身したのは、今回が初めてだ。

なので、彼自身私の個性をこのマフラーだけと思いついていたようだが…その認識で終わつたのは、恐らく彼がすっかり私達と向き合つてこなかったからだろう…

「はつきりと言っておこう…我が魔王が変身できるようになつたのは、君がヘドロヴィランに捕らえられた時が初めてだ。」

「だからなんだッ…！」

「その時まで彼が無個性だったのは確かだ…少なくとも我々は君を騙して嘲笑うようなことはしていない。君の勝手な妄想だ。」

マフラーで拘束した彼の身体を壁に押し当て、彼の額に人差し指を押し付ける。

「う、嘘付くんじゃねえ！」

「嘘じゃないさ…それにその期間に関しては我々の方がフラストレーションを抱えていたよ。我が魔王が寛大にも君による虐めを教師に言いつけていなかったことをむしろ感謝してほしいね…そうしてもらえなければ君はこの場に居れないのね…」

我が魔王のお陰で、何とかこの場に居れるのに彼はまだ事実を受け入れることができないようだ：

「君が私達のことを無力な石コロだと思い、調子に乗っている間も我々は必死に鍛錬を積んでいた。君が我が魔王の力を認めてない間、彼はその力を磨き上げた。悔しければ今日の結果と向き合い、自分の無力さを痛感し、精々足掻けばいいさ：」

私の言葉に何も言えなくなったのだろうか：彼は黙りこくつてその辺の空気を見つめている。

「私から言えるのはそれだけさ：それじゃあ失礼させてもらおうよ：」

何も言い返せない彼をその場に放置し、私は皆の下に戻るのであった。

「遅かったじゃないか！ウオズ君。」

「爆豪君とどこか行つてみたいだけど：」

「失礼、少々話し込んでいてね：」

我が魔王に会おうと校門前に来たところ、そこには飯田君と麗日君の姿もあった。

「ねえ、ウオズ君。2人も一緒に帰つて良いよね？」

「ええ、勿論です。」

私は少し嬉しいです。

中学時代私以外の友人が居なかった我が魔王が：新たに御2人も友人を……

ああ、感動で泣いてしまいそうです…

「ところで、デク君…」

「は、はいッ…!」

因みに爆豪君が作ったデクというあだ名がいつの間にか流行っているようだが…
今度の授業、少しお仕置きが必要かも知れませぬ…

「まあね、」

第9話 屋内戦闘訓練

雄英高校での生活が初まり数日：

ヒーロー科の午前の授業は主に必修科目。通常の高校や普通科と同様、英語などの科目の授業が行われている。

「じゃ、この英文の中間違っているのは？」

ただし、その科目の担当は主にプロヒーローが行っている。

この英語の授業の担当はプレゼントマイクである。

((普通だ・・・))

((前置詞が違うから4番！))

((クソつまんねえ))

だからと言って特別感があるわけではないが：

「Everybody hands up! もつと盛り上がれ！」

昼休みにはクックヒーローであるランチラッシュュがシェフを務める雄英の大食堂に、A組のメンバー含めて多くの生徒が集まっている。

「肉汁が溢れ出ている…素晴らしいハンバーグだ！」

「カツ丼も美味しいよ…」

ウオズ、出久、麗日、飯田ら4人も食堂に訪れており、各々の好物を注文して食べている。

そして午後には、ヒーロー科ならではの授業が控えている。

「わーたーしーがー普通にドアから来た!!」

「オールマイトだ!」

「すげーや、本当に先生やつてるんだ…!」

皆の憧れるヒーロー、オールマイトが担当するヒーロー基礎学の授業だ。

「あれ、シルバーエイジのコスチュームね…」

「画風違いすぎて鳥肌が…」

出久だけでなく、多くの生徒達が目を輝かせて教壇に立つオールマイトを見ている。

「私が担当するのはヒーロー基礎学。ヒーローの基礎を作るため、様々な訓練を行う科目だ。単位数も最も多いぞ。」

ヒーロー科の花形ともいえる授業であるヒーロー基礎学。教師も生徒もかなり気合が入っている。

「早速だが、今日はコレ! 戦闘訓練!」

「戦闘ッ…」

「訓練！」

しかも初回から戦闘ができるということ、爆豪らも喜びを隠しきれていない。

「そしてソイツに伴ってエ……こちら！」

オールマイトが教室の壁を指さすと、そこが開き生徒21人分のコスチュームを詰めた箱が出てくる。

「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿って挑めたコスチューム！着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ！」

「良いコスチュームだね。我が魔王……」

「うん、実はこれお母さんが作ってくれたんだ。」

「ほう、それは素晴らしいね……」

我が魔王のコスチュームはどうやらお母様の手作りらしい。

シンプルで良いスーツだ。

「ウオズ君のもカッコいいね。」

「ありがとう。とは言ってもある人の真似ではあるが……」

私のコスチュームはクォーツアーの衣装そのものだ。

逢魔降臨歴を持って、マフラーも付けたので再現度も完璧だ。

「さて、皆似合ってるぜ！様になってるぜ！」

コスチュームに着替え、指定された演習場に来たところ、既に準備を終えたオールマイトが出迎えてくれた。

「始めようか有精卵供！戦闘訓練のお時間だ！」

「先生！ここは入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしょうか！」

今現在我々が居るグラウンドβには、入試で使われたものと同様の再現された市街地がある。

初回授業で入試を振り返るのも悪くないだろうが…

「いいや、もう二歩先に踏み込む！屋内での対人戦闘訓練さ!!敵退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内の方が凶悪敵の出現率は高いんだ。監禁・軟禁・裏商売…このヒーロー飽和社会。真に小賢しい敵は屋内にひそむ！君らにはこれから『敵組』と『ヒーロー組』に分かれて、2対2の屋内戦を行ってもらおう！」

なるほど、ここにあるビルを使って屋内戦闘の訓練をするということか…

屋内戦闘ということは、周囲への被害を抑えて戦わなければならないということ。

緻密に考えて戦わねばいけないというのも、ヒーローとして大事なことだ。

「基礎訓練もなしに……？」

「基礎を知るための実戦さ！ただし、今回はぶつ壊せばOKなロボじゃないのもミソや。」

しかも相手は他のクラスメイト、即ち人間だ。

今回に関しては必殺技の使用は控えねばいけないな……

「勝敗のシステムはどうなりますか？」

「ぶつ飛ばしてもイイんすか？」

「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか？」

「チームとはどのように分かれるんでしょうか？」

「このマントヤバくない？」

「ンン……聖徳太子！」

約一名関係ない方がいるようだが、質問攻めに遭うオールマイトに変わって今回のルールを纏めると……

・敵チームは核兵器（ハリボテ）を制限時間内に切り切るかヒーローを確保すれば勝利。

・ヒーローチームはヴィランを拘束するか、核に触れれば勝利。

・破壊行為をしすぎるとストップが入るかも知れない。

・チーム分けはくじ引きで行う。因みに、クラスは21人と奇数なので1チームだけ3人になるらしい。

・青山君のマントはなんか輝いている。

「我が魔王とは違うチームになってしまった様だが…」

「同じチームだね、よろしく！」

「一緒に頑張ろー！」

さて、私は丁度3人のチームを引き当てた。我々1チームのメンバーは尻尾の尾白君と透明人間の葉隠君か。

まずは彼らと共にベストを尽くすとしよう…

「最初の組み合わせは…コレだ！」

おっと、トップバッターはいきなり我々の様だ…

相手は…うん、轟君と障子君のペアか。

「頑張つてね。ウオズ君！」

「ああ、行つてくるよ。」

我が魔王に見送られながら我々は演習場に向かう。

今回はヴィランチームでの参戦ということで、ビルの内部で作戦会議をすることにした。

「私が轟君なら、ビルを全て凍らせてしまおうね…核も機能停止にできて安全だろうし…」

私は個性把握テストでクラスメイトの個性を大体把握している。

轟君の個性は右手から冷気を出して凍らす…だけでなく、恐らくだが左手から熱や炎を出すことができる。個性把握テストの際に出した氷を左手で溶かしていると見ていたし。

「確かに、いきなり俺達の足元が凍り付いちやうかもね…」

「ああ、なので一番に考えるべきは凍結への対処だ。それができた後は私が轟君を仕留めに行くとしよう…2人はここで核を守って障子君辺りが来れば対処してくれ…」

轟君の個性は恐らく、我々仮面ライダーを除けばA組内でもトップクラスに強力だ。

そうなれば、私の様な仮面ライダーが対処した方が効率的だ。

「ああ、ここは任せてくれ。」

「尾白君との連携で確保しちやうよ…」

「ええ、一先ず氷結が来ればそのタイミングで飛び跳ねてみたまえ。そうすれば、回避は出来るはずだ…」

『それでは…屋内戦闘訓練…！開始！！』

「4階に2人、2階に1人いる。4階の1人は透明の奴か。恐らく伏兵としてとらえる役割か。」

オールマイトの号令と共に始まった屋内戦闘訓練。轟と障子は早速ビルの中に入ってくる。

障子は個性の複製腕で目と耳を複製し、相手の位置を探る。

「外出てる、あぶねえから…」

良い一手目を打った障子に対し、轟は退く様に指示を出す。

彼のコスチュームの左側は氷の様なもので覆われており、轟は逆に露になっている右手でビルの壁に触れる。

「向こうは防衛戦のつもりだろうが…俺には関係ない。」

すると次の瞬間ビルの壁、床、天井、階段、配管が一気に氷に覆われてしまう。

轟の指示を受けた障子は外に出て、凍結を回避したがもし中にいけば足元を凍らされて身動きが取れなくなっていただろう。

「ハハ、さつき誰かいるって障子が言ってたな…」

核を探しながら、轟は氷に覆われたビル内を歩いていき、先程障子が1人誰かいると

言っていた2階に到達する。

しかし、彼が辺りを見回しても誰の姿も見えない。

「誰も居ねえのか…?」

辺りを警戒するが誰の気配も感じなかった轟は、次の階に向かおうと階段の方につきま先を向ける。

「私に背を向けるとは…油断しすぎだね…!」

「…ッ!?!」

だが、轟が気付けなかっただけで、このフロアに1人の男が隠れていたのだった。

光学迷彩の布で壁と同化して姿を隠していた、仮面ライダーウオズ・フューチャーリングシノビ。

姿を現した彼は、背後から一気に駆けて迫り、身体を拘束しようと相手の左腕に掴みかかろうとする。

「油断してるのはどっちだ!」

だが咄嗟に轟が右手を突き出し、そこから冷気によって周囲の空気と共にウオズの下半身を凍らせる。

「何!?!」

だが、轟が凍らせたのは、ただの藁人形であった。

「忍法、変わり身の術。」

凍らせられる瞬間、身代わりと入れ替わったウオズは轟の背後に回り込んで背中を蹴り飛ばす。

「…ッ！」

「アクア忍法」

さらに、五行を操るシノビの忍術により、ウオズの背部から溢れ出た水流が蹴り飛ばされて床を転がる轟に襲い掛かる。

「こんぐらい…どうってこと！」

ウオズに翻弄されつつも、轟は水流を凍らせて難を逃れたが…

「グラント忍法」

今度は土行を操る忍法により、拳に生成された土を纏わせたウオズが、氷塊を殴り飛ばす。

そうすると、その破片は轟に向けて飛んでいく。

「手数が多いッ…！」

ウオズの手数の多さに対して、轟は新たに氷の壁を作ることによって相手の攻勢から身を守る。

「轟君。どうやら私は君の個性を見誤っていたよ。思っていたよりも弱いね。」

「どういうことだ……!」

「君は私の推測よりも弱い。そういう意味さ。」

『クイズ!』

轟の方に歩み寄りつつ、ウオズはベルトのミライドウオッチを入れ替える。

『投影!フューチャータイム!』

『ファッション!パッション!クエスチョン!』

『フューチャーリングクイズ!クイズ!』

仮面ライダーウオズ・フューチャーリングクイズに姿を変え、じわじわと轟に迫る。

先程の形態で見せた多彩な能力に臆してか、新たな姿に変化したウオズ相手に轟は迂

闊に攻撃できず様子を見ている。

「ここで問題だ。轟焦凍の個性は氷を操るだけ。○か×か?」

「なんで今クイズなんだ?」

「未回答。ペナルティを与えないとね……」

質問に質問で返してしまった轟の身体に、上から落ちて来た雷が襲い掛かる。

「ああつ……!?!」

「ちゃんと答えたまえ。もう一度問おう……轟焦凍の個性は氷を操るだけ。○か×か?」

「ば、×だ!」

「おっと、これは正解みたいだね。」

「ここで轟は真実を言ったため、再び雷撃を喰らうことはなかった。

「つまり、今の君は氷以外にもできることがあるのに、”わざと使っていない” そういうことだね？」

「ああ…わかりか…?!？」

「いいや、それは個人の自由だ。ただし、最後の問題に答えてもらおうか。」

「ジカンデスピア・ツエモードを手にしたウオズは、その先端を轟に向ける。

「問題。自分の半分の力だけで困っている人たちを助けることができる。○か×か？」

「俺はこの力だけでもやれる…○だ…」

「いいや、答えは×さ。」

するとまた天井から雷が轟に向けて降ってくる。咄嗟に氷のドームで自身の体を覆い防ごうとしたが、それすらも貫通した雷撃が轟の身体を襲う。

「グアアツ…!!」

「このままじゃ君は立派なヒーローになれないよ。精々どうすれば良いか考えると良いだろう…」

雷のダメージで体が痺れて動けない轟を拘束テープで縛ったウオズは、その場から立ち去って他の仲間の下に向かう。

「2人は上手くやっているだろうか？」

と、ウオズが核のある部屋に入ってくると。

「捕まえた！」

丁度障子も葉隠によって、テープで拘束されてしまっていたところであった。

轟を見送った後、別のルートで核のある部屋に向かっていた障子だが、この部屋で尾白と拳を交えている間に、隙を見た伏兵の葉隠によって拘束されてしまっていた。

『敵チーム！Win——！』

こうして、屋内戦闘訓練の初戦はウオズ達の勝利で幕を閉じたのであった。

第10話 出久VS爆豪

戦いを終えたウオズ達は、保健室行きになった轟以外モニタールームにやってきて、他のクラスメイト達と共に戦いの振り返りを行っていた。

「さて、次のペアは誰になるかな〜？」

ウオズ達の戦いの総括を終え、次の戦いを行うためにオールマイトがくじ引きを行う。

ヒーローチームと敵チームの箱からそれぞれチームを表すアルファベットの書かれたボールを引き出す。

「Aチームがヒーロー！Dチームがヴィランだ！」

「おお、我が魔王の番か。」

くじ引きの結果、ヒーローチームになったのは出久と麗日のコンビで、敵チームになったのは爆豪と飯田のコンビだ。

「…」

爆豪は無言で出久のことを睨みつけ、核のある建物内に入っていく。

「この建物の見取り図覚えるの大変だね。でも、オールマイトってテレビのイメージと

変わらないね。相澤先生と違って罰とかなしみみたいやし…デク君…？」

「ご、ゴメン！つい、色々と考えちゃって…」

屋外で開始の時を待つ出久は、麗日の言葉を聞くことができないほど地図と真剣ににらめっこしていた。

「そっか…爆豪君、馬鹿にしてくる人なんだっけ…。」

個性把握テストの後、麗日と飯田は出久達から爆豪による虐めに関する話を聞いていた。

決して浅くない彼らの因縁。その衝突の時が徐々に迫ってきていた。

「凄いなだよ…嫌な奴だけど、目標も自信も僕なんかより何倍も凄いな。だから、僕は負けたくない。」

「男の因縁って奴だね。」

「ああ、ゴメン…麗日さんには関係ないのに…。」

「あるよーコンビじゃん！頑張ろう！」

その2人の戦いを麗日も後押ししている。

出久と爆豪の決着に期待しているのは麗日だけではない。

（時は満ちたよ。我が魔王…）

モニタールームで彼らの戦いを見守るウオズだ。

「見せていただきましょう…個人的な遺恨の最高傑作を…」

ジオウに覚醒してから、出久と爆豪がこうして拳を交えるのは初めてのことだ。

その実力を完全に爆豪に示し、どちらが強いか証明するこの戦い。

「クソナード…俺がここでテメエを潰す！」

爆豪もその機会を待っている。本当に強いのは自分だと見せつけるがため、ビルの下
の階に降りて、向かってくるであろう出久達を待つ。

『それでは…屋内戦闘訓練…！開始!!』

オールマイトの号令と共に、出久はライドウォッチを起動する。

『ジオウ!』

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオウ!』

出久はジオウに変身し、麗日と共に演習場であるビルの中に入っていく。

「侵入成功…」

「死角が多いから気を付けよう。」

曲がり角の多い屋内では、どこから奇襲を喰らうか分からない。

2人は警戒しつつも、核のある上の階に向けて進んでいく。

「ウ…オラア!!」

丁度彼らが曲がろうとした時だった。

その曲がり角から現れた爆豪が、右掌を振り下ろしながら爆破を放つ。

「先に行つて！」

「う、うん……」

その攻撃を瞬時に見抜いて避け、ジオウは爆豪と対峙する。

「コラデク……避けてんじゃねえよ……」

「かつちゃんか敵なら、いきなり僕に殴りかかって来ると思った……」

1対1で向き合う両者。

「中断されねえ程度に……ぶっ飛ばしてやらア!!」

先に動いたのは爆豪。右の大振りでジオウに殴りかかろうとするが……

「君の癖は……分かつてるよ!」

その腕をジオウが掴み、爆豪の身体を背負つて投げ、地面に叩きつける。

「クソデクツ!!」

爆豪とて、ヒーロー科入学に向けてトレーニングはしっかり積んでいる。

地面にぶつかつたダメージを背負いつつも、すぐに起き上がつて両手からの爆破を浴びせる。

だが、ジオウの鎧がそのダメージから出久自身を守る。

「僕は…いつまでも雑魚で出来損ないのデクじゃないぞ！ウオズ君や麗日さん達に出会って変わったんだ！かっちゃん！僕は頑張れって感じのデクで…ヒーローの王になる男だ！」

麗日から言われた”頑張れって感じのデク”。ウオズから目指せと言われた”最高最善の魔王”。

そして、自分のオールマイトの様な最高のヒーローになりたいという夢。

それらすべてを背負い、出久は”ヒーローの王”としての覇道を歩む。そのことを自分を虐げて来た幼馴染に宣言してみせた。

「なれるモンならなってみやがれ！」

『ジカンギレード！』

ジオウに向けて爆豪は大振りのフックで殴りつつ、掌で爆破をしていく。

その攻撃をジカンギレードで防ぎつつ、ジオウは攻撃のタイミングを伺っていた。

「そこだ！」

攻撃の時は出久の想定よりも早くやって来た。ガムシヤラに腕を大きく振って攻撃してくる爆豪の攻撃は、まるで格闘技素人そのものだ。精密じゃない攻撃パターンが繰り返されれば自然に隙は生まれる。その隙を突いてジオウの放った前蹴りが爆豪の腹に突き刺さり、身体を突き飛ばされた彼は地面を転がり、腹を抑えて藻掻いている。

「かつちゃん！」

そんな様子に、実戦中という事実よりも心配が勝ってしまった思わず出久が駆け寄ってきてしまう。

「来るんじゃない!!」

手を差し伸べようとした出久に向けて爆破をし、爆豪は何とか立ち上がる。

「憐れんで俺を見るんじゃないねえ!」

良く言えばガムシヤラ、悪く言えばヤケクソ気味に爆豪が出久にタツクルをしてその身を掴むが…

「こんなの…かつちゃんらしくないよ!」

逆に出久にコスチュームを掴み返され、投げられて壁に叩きつけられる。

「そんな戦い方じゃダメだろ!かつちゃん!」

「うるせえ!テメエが分かったようなこと言ってるんじゃない!!」

中学までの間、彼の自尊心というのは体格と共にどんどん大きくなっていった。ヘドロ事件で、出久に自分を越されてしまった。個性把握テストでウオズや轟、八百万にすら差を見せつけられた。彼らのことをその辺の石コロと置いていた彼自身がいつの間にかその辺の石コロになりつつあった。

”我が魔王が寛大にも君による虐めを教師に言いつけていなかったことをむしろ感

謝してほしいね…そうしてもらえなければ君はこの場に居れないのにね…”

”君が私達のことを無力な石コロだと思い、調子に乗っている間も我々は必死に鍛錬を積んでいた。君が我が魔王の力を認めてない間、彼はその力を磨き上げた。悔しければ今日の結果と向き合い、自分の無力さを痛感し、精々足掻けばいいさ…”

ウオズに言われた言葉で自尊心は完全に砕け散った。安いプライドも何もかも失い、ドン底にいる。

「俺はアー…ここでテメエをぶつ潰す！」

ここで出久を倒すことでしか、彼の心を保つことは出来ない。

だが、今の彼の自暴自棄な戦い方では目の前にいるジオウどころか、クラスの数多くの者に勝てないだろう。放った爆破も蹴りも避けられ、胸にジオウの拳を撃ち込まれ、そのまま何発もパンチのラツシュを繰り返されて身体が地面を転がる。

「かっちゃん！僕に勝ちたいんでしょ…？だったらそんな戦い方じゃダメだよ！」

「クソツ…!?なんでだツ！なんで俺はこんなに弱いんだ!!」

出久の言葉に対して、爆豪は地面を殴り涙を流し始める。

「辞めてやるツ…！」

「え？」

「もう、ンなとこツ…！辞めてやる！」

完全にジオウに……いや、出久に勝てない自分に絶望した爆豪の口から出た言葉に、出久は耳を疑った……

「昔のことでも何でも暴露しやがれ！そしたら俺はこつから消えてツ……」

「そんなことツ……！君が言うんじゃない!!」

自尊心を失い、この場から早く消えてしまいたいと口にしてしまった爆豪の右頬に向けてジオウはその拳を撃ちこんだ。

「君は……昔から僕よりもずっと先にいる、” 凄い奴 ” だったじゃないか！ずっと、憧れてたんだよ！君に！」

ジオウの手が彼のコスチュームを掴み、その体を揺する。

「僕がなりたい” ヒーローの王 ”、それはかつちゃんみたいな……誰よりも自信があつて……！高い目標を持つ者でもあるんだ!!」

出久はオールマイトに憧れ、彼の多くを学んだ。ウオズと共に平成ライダー達の意味を学んだ。だがそれでも、憧れ続けた身近な目標が居た。それこそ爆豪勝己である。生まれながらの天才であり、自分よりも上のステージに進んでいく爆豪に、子供の時からずっと憧れていた。

「悪かった……テメエの期待を……裏切るようなことを言っちゃまって……」

初めて聞いた出久の本音、それは爆豪を再び奮い立たせた。

これまで自分が出久にしてきた罪を償うためでもあり、ここからでもスタートラインに立つため、爆豪は立ち上がってジオウの方を見る。

「一番強いので来い！こっからの俺は…全力だ！」

「うん！」

『ディケイド！』

ようやく自分を取り戻し、出久に向き合う爆豪。

彼に対して出久も全力で応える。起動したディケイドウォッチをジクウドライバーの右側にあるD，3スロットに装填し、ロックを解除してからベルトを一回転させる。

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディケイド！ディケイド！ディケイド！！』

ベルトから現れた十枚のカードが、灰色のボディとなり、ジオウに重なることで仮面ライダージオウ・ディケイドアーマーの姿を形成する。

「これは！祝わねばなるまい！」

モニタールームにいるウォズ達には出久達の会話は聞こえていない。だが、どの様なやり取りが為されたのかは彼らの表情から察することができる。

だからこそ、出久がジオウアーマーを使った時、ウォズも再び祝わねばなるまいと思

い、祝福を始める。

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウ・デイケイドアーマー！」

「Shit！ウオズ君の悪い癖が出てしまったよ…」

ウオズの授業内祝福に、オールマイトは頭を抱えてしまう。

「かつちゃん…！来い！」

「ああ、いくぜ！」

両掌から爆破を放ち、その推進力で爆豪がジオウに迫る。

「ハアツ…！」

その爆豪に対し、拳を振るう出久。

しかしそれに合わせて爆豪が爆破を放って威力を相殺。

更に地面に向けて爆破し、飛び上がって宙を舞う爆豪。そのまま、ジオウの背後に回ってきて背中に向けて掌から爆破を撃つ。

「やるね…」

「当たり前だ！」

完全に自分の調子を取り戻した爆豪の動きは、数分前とはまるで別人だった。

爆破の推進力を活かし、トリッキーな動きでジオウを翻弄しつつじわじわとダメージ

を与えていく。

「けど僕だつて…」

『ライドヘイセイバー!』

昔の出久なら、爆豪にこのままやられてしまっていただろうが、今の出久には対応する力がまだまだ残っている。

まさしく平成の象徴ともいえる剣、ライドヘイセイバーをその手に持つと、その時計を模した針を回す。

『ヘイ!キバ!』

『キバ!デュアルタイムブ레이크!』

刀身にある仮面ライダーキバのライダーズクレストが赤く光り、ジオウがトリガーを引くことで金色のコウモリの群れが放たれて爆豪に襲い掛かる。

「数が多いッ……!」

蝙蝠の群れを爆破で対応していく爆豪だが、その数に押されていく。

(こうなりやこれで…)

爆豪には秘策があった。腕に付けている手榴弾型の籠手には、ニトロ口を含んだ自身の汗が溜め込まれている。籠手に着いたピンを抜くことで、それらを解き放つて大爆発を起こすことができる。

「オラア！」

コウモリの群れとジオウを一気に吹き飛ばそうと、大爆発を彼らの方に向けて放ったが…

『ヘイ！龍騎！』

『龍騎！デュアルタイムブ레이크！』

ライドヘイセイバーの刀身から放たれた炎が、ジオウ自身の身を守った。

「麗日さん、そろそろ決めるよ…」

『フィニッシュタイム！』

出久は無線で麗日に声をかけると、デイケイドライドウオッチをジクウドライダーから取り外してライドヘイセイバーに装填。そして剣の柄にある時計の針を3度回転させる。

『ヘイ！仮面ライダーズ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘヘヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！』

”ヘイセイ”の文字とライダーズクレストが描かれたカード型のエネルギーを刀身に纏わせるジオウ。

「行くぞゴラア！」

もう片方の籠手に溜まった汗を使おうと、後方に爆破を放ちその推進力で一気に距離

を詰める。

「いくよ！麗日さん！」

『ディディディディケイド！』

爆豪がピンを抜き、籠手から大爆発が放たれるのと同時にジオウはライドハイセイバーを上には振り上げた。

平成ライダー達のエネルギーは爆破の威力を打ち消しただけでなく、ビル天井を撃ち抜いて上に登っていく。

「来た！」

その上の階では、ヒーローチームの麗日と敵チームの飯田が対峙していた。

無重力で様々なものを浮かせて戦う麗日に対抗し、飯田が部屋の片づけをしていた。攻め手に欠き、中々動けなかった麗日だが…

「何だ!？」

しかし、ジオウがライドハイセイバーで放った一撃が彼らのいるフロアの床と天井に大穴を開けた。

「飯田君！ゴメンね…！」

その余波で折れた一本の支柱を、麗日は無重力化してその手にバットの様に持つ。

「即興必殺！彗星ホームラン！」

宙に舞う瓦礫に向けて柱をスイングし、飯田に向けて撃ち出した。

「ホームランではなくないかー！」

完全に視界を遮られた飯田。これは明らかにホームランではなく、ピッチャー強襲のライナーである。

「回収！」

「うおー!!核ー!!」

その隙に麗日が個性で自身の身体を浮かせて、核に向かっていき触れることで回収に成功した。

「一本取られちゃったか……」

その攻撃の余波で吹き飛ばされた爆豪は、地面に倒れて宙を向いている。

「かつちゃん……!」

その爆豪を心配して駆け寄る出久。

「わりい、俺はテメエをずっと見下してた……無個性だっただから……」

幼少期、強力な個性が芽生えた爆豪は個性が発現しなかった出久の横で調子に乗り始めた。

「俺より遥か後ろにいるハズなのに、俺より先にいる様な気がして……嫌だった、見たくなかった、認めたくなかった……テメエがその力に目覚めた時もそうだった……」

「……」

子供の時、爆豪と出久やその友人たちが山で遊んでいた時だった。

爆豪が浅い川に落ちてしまうということがあった。その時、他の友人は爆豪なら大丈夫と心配していなかったが、出久だけが心配して駆け寄ってきた。

しかし、プライドの高い彼は心配されることを「見下されている」と感じてしまっていた。

「だから、遠ざけたくて虐めてた…否定することで優位に立とうとした…俺はずっと敗けていた……」

倒れる爆豪の眼からは涙が流れ、出久は彼の言葉を静かに聞いて頷く。

「テメエは、俺よりも強くなつて…俺は色んな奴に追い抜かれちゃった…俺はここでテメエらの強さと俺の弱さをようやく理解した…言つてどうにかなるもんじゃねエけど…本音だ…出久」

目頭を押さえていた腕を除けて、戦いのダメージで意識が遠のく中でその身を起し、出久の方を見る。

「今までゴメン…」

頭を下げる爆豪の身体を出久が抱き寄せる。

「ごっつちこそ、さつきは顔殴つてゴメン…」

「わーってるよ…」

出久の腕の中で爆豪は、戦いの疲れからか意識を手放すのであった…

第11話 友・情・再・結

「素晴らしい…我が魔王…」

出久と爆豪の戦いを画面越しに見ながら、恍惚とした表情で拍手をしていた。

「ウオズさん…涙をお拭きください…授業中ですよ。」

「すまないね…八百万君。お借りするよ…」

出久と爆豪が抱き合った瞬間、涙が零れ出てしまったウオズ。

その隣に居た八百万が彼を気遣い、ハンカチを創造して彼に手渡す。

「おい、ウオズ。なんか光ってるぞ…」

「なんだろうか？」

その時、ウオズのポケットの中で何かが光を放っているのに、気付いた上鳴が指摘する。

「ミライドウオッチか…」

光を放っていたのは、シノビ、クイズ、キカイの3人のライダーのミライドウオッチであった。

それらの上に光で新たなミライドウオッチのビジョンが現れる。

(これは…ゲイツリバイブウオッチ…?)

間もなくして、光とそのウオッチの姿は消え、ウオズはミライドウオッチをポケットに仕舞う。

(なるほど、ゲイツの力を手にするのは君なのか…)

仮面ライダーゲイツの力を手にする者。その可能性を感じたウオズは静かに頷いた。

「ただいま、ウオズ君。」

その後爆豪は保健室に搬送され、出久達が戻ってきた。

「おかえり、我が魔王。無事に和解ができた様で何よりだ…」

「ありがとう…また後でかつちゃんと話してくるよ。」

「私も同行しよう。」

保健室に行った者を除いた全員が揃ったのを見て、オールマイトが出久達の戦いの総括を始める。

「まーつつても、今戦のベストは飯田少年だけだな!」

「勝った緑谷ちゃんかお茶子ちゃんじゃないの?」

「何故だろうなく分かる人。」

「はい!オールマイト先生!」

オールマイトの問いかけに対し、八百万が真っ先に手を挙げる。

「それは飯田さんが1番状況設定に順応していたからです。緑谷さんと爆豪さんは私怨丸出しの戦闘、尚且つ屋内での大規模攻撃は愚策。麗日さんは中盤の気の緩み、そして最後の攻撃が乱暴すぎたこと。ハリボテを本当の核兵器と扱っていたらあんな危険なことは出来ませんわ…相手への対策をこなし、核の争奪をきちんと想定していたからこそ…飯田さんは最後対応に送られた…」

八百万の考察を聞き、飯田はかなり嬉しそうな表情をしている。

(思ってたより言われた…)

(中々ズバズバ言うけど…嫌いではないな…)

自分が言おうとしていた以上のことを言われたオールマイトと八百万の考えに感心するウオズ。

出久ももう少しスマートなやり方があったと、彼女の意見に頷き反省している。

「まあ、飯田少年も固すぎる節があったが…正解だよ!」

「かつちゃん居るかな…?」

放課後、私と我が魔王は保健室にいる爆豪君の下に見舞いに来ていた。

轟君とも話したかったが、早々に彼は帰ってしまったそうだ…

「ああ、居るぜ…」

我が魔王の声に、右頬にガーゼを付けた爆豪君が顔を出す。

「その、デ…出久…」

「デクで良いよ。僕はそのあだ名悪くないって思ってるし…そうじゃないとかつちやらしくないとと思うんだ…」

「ありがと…」

かなり爆豪君も丸くなってしまった様だ。

それに少し表情も緩くなった気がする。

我が魔王は麗日君の言葉で”デク”というあだ名も気に入っているようだし…

「あと、う、うお…」

「ウオズで良い…」

「テメエのことも色々言つて、悪かった…」

私のことを下僕と言ったりしてたことについて、頭を下げてくれた。

「頭を上げたまえ…我が魔王に謝り態度を改めるのなら、これ以上要求することはない
さ。」

私ももう、彼をこれ以上恨むことはしない。

謝ってくれたわけだし、これ以上責める必要もないだろう…

「それより爆豪君。君に渡したいものがある…」

「なんだ…？」

私は爆豪君に一つのブランクライドウオッチを託す。

「君には本当のことを話さないといけないからね…我が魔王もよろしいかな…？」

「うん、ジオウのことでしょう？ 良いよ、話しても…」

彼を相手に嘘を付き、騙すとまた恨みを買ってしまいそうだし…事情は全て言った方が良いでしょう。

一度保健室から出て、誰もいない場所でジオウの力に関する話を始める。

「我が魔王の力、それは厳密に言えば個性ではなく、仮面ライダー”の力だ。私のもね…」

「仮面ライダー…？」

元はと言えば、ジオウの力はオーマジオウから緑谷出久に託されたものだ。

なんなら、常盤ソウゴのものとも言えるだろう…

「ああ、こことはまた違う世界のヒーローだ。我が魔王にはその仮面ライダーの魔王である仮面ライダージオウの力が託された。つまり厳密には、個性ではない。」

「そう、だからこれは僕自身の力ってわけじゃなくて…平成ライダー達から受け継いだ

ものなんだ…」

このことを聞き、また彼が恨んでくるかもしれない恐れこそあったが、これ以上騙すことも彼には悪いだろう…

保健室に行く前に我が魔王からそう私に相談してきたので、私はその提案に対して首を縦に振った。

「ゴメンね…その…」

「何言ってるんだ？力の本質がなんだろうと、テメエが得た力なら…今はテメエのモンだろ？」

以外にも、彼はこの事実をすんなりと受け入れてくれた。

「ありがとう…」

「理解が早くて助かるよ。」

「ああ、それとさつき渡してきたこれはなんだ？デクの力と関係あるのか？」

爆豪君が先程私に託されたブランクライドウォッチを取り出す。

「これはブランクライドウォッチさ。私は君にもライダーの力が宿ると予想していてね

…」

「かつちゃんが!?／俺が!？」

先程の予兆は明らかに、新たな仮面ライダーの存在を示唆している。

そして、そのライダーは恐らく…

「その時になれば、きつと使うことができるだろう…」

「ああ、すっかり受け取っておくぜ…」

さらに上を目指す爆豪君は、その力を受け入れる道を選んだ。

「もし我が魔王が窮地に立たされた時は、君がその力で救ってくれ。」

「ああ、俺が今までしてきたこと…色々と返さねえといけねえからな…」

覚悟を決めて拳を握りしめる爆豪君の拳を我が魔王の手が包み込む。

「僕がヒーローの王になる時、その傍にはかつちゃん居て欲しいと思ってるよ。だからこれからは、正面から競い合おう！」

「ああー！」

嘗ては我が魔王のことを虐げていたが、今の爆豪君は我が魔王にとって救世主となるかも知れない。

その時にはまた、祝わねばならないな…

緑谷出久が覇道を歩む中、1人の闇の王もまた動き出そうとしていた…

「脳無の調整は完璧かな…?」

培養液に満たされたタンクが幾つも並んでいる研究室。

その中央に他の人間よりも身長が高く、漆黒の髑髏を模した金属製のマスクを着けた黒スーツの男が立っている。

「対平和の象徴” 個体含めて調整は完了じゃ。」

仮面の男の問いかけに、小太りで禿げ頭の男が返答する。

彼が指差した培養タンクの中には、筋骨隆々で頭部には脳ミソが丸出しの怪人が眠っている。

「首領。俺の方も準備は出来たぜ…」

さらに1人の男が、ライドウオッチの様なものを持ってその部屋に入ってくる。だが、そのウオッチは出久達が使っているものと違い少し禍々しいという印象がある。

「ティード、君と脳無達の力があれば平和の象徴…オールマイトも倒せるだろうね…」

「当然だ…この世界で俺は再び王になる!」

かなり気合が入っている様子のティードの言葉に仮面の男も静かに頷く。

「良いだろう…弔に君と脳無達を預ける。平和の象徴を堕とすんだ…!」

「ああ…任せろ!」

仮面の男からの指名を受けたその男は、再び研究室から出ていく。

「しかし良いのか？あの若造、自分が王になろうとしているが…」

「言わせておけばいいさ…どうせ僕は更なる力を手に入れるんだから。彼が僕のことを超えることはできないよ…」

「流石じゃな…だが、その力をしっかりと調整しなければな…」

「ああ、問題ないよ…」

その男は、自身の胸の中からティードが持っていたものに似ている時計の様なものを取り出し、そのボタンを押し込む。

『ジオウ…』

U S J 編

第12話 マスコミ騒動

屋内での戦闘訓練翌日

いつも通り学校に向かって歩いてきた出久とウオズだったが：

「オールマイトの授業がどんな感じか教えていただけますか？」

「普段のオールマイトはどんな感じですか？」

校門の前にはかなりの数のマスコミが集まっており、彼らが進もうとする道を阻んでいる。

かなりの数のマスコミに、自分も何か聞かれるのではないかと緊張し始める出久に対して…

「我が魔王、このまま巻き込まれれば遅刻するかも知れません…」

「確かに…どう切り抜ける？」

「決まっているだろう…私のこれを使う。」

校門前で狼狽えていた出久だったが、次の瞬間伸ばされたウオズのマフラーに包まれる。

「あれ？いつの間に門の中に!？」

気付いた時には出久達は校門の内側にいた。

「ねえ、これってどういう原理なの？」

「それは企業秘密さ。さて、早く教室に向かおう。」

「そうだね。」

マスコミを回避した出久達は教室に向かい、しばらく時間が経てば朝礼が始まる。

「昨日の戦闘訓練。お疲れ：V見させてもらったんだが爆豪、轟、お前らは実力あんだからもうちよいしっかりやれ。伸びしろは十分にあるんだからな…」

昨日の戦闘訓練のVTRは相澤も確認済みであり、まずは彼なりにその所感を述べる。

「ホームルームの本題だ：今日は君らに…」

（（また臨時テスト!?!））

相澤の言葉に、クラスメイト達はいきなり抜き打ちテストの様なものを思い浮かべてしま
うが…

「学級委員長を決めてもらう。」

（（学校つばいのキター））

相澤からの指令は如何にも高校生らしい、学級委員長決めであった。

そのことにクラスメイトの大半が安どの表情を見せる。

「委員長！やりたいです！それ俺！」

「俺もやりたいです！」

「ウチもやりたいっす。」

その役割に、多くのクラスメイト達が立候補して次々に手を挙げていく。

「静粛にしたまえ！他を牽引する責任重大な仕事だぞ……！やりたい者がやれる仕事じゃないだろう……周囲からの信頼あつてこそ勤まる政務！民主主義に則り真のリーダーをみんなで決めるというのなら……これは投票で決めるべき議案！」

多くの立候補に収拾がつかなくなってきたのを、多数決を提案してその場を制そうとした飯田だったが……

「腕聳え立ってるじゃねえか！」

提案者の飯田自身が一番手をまつすぐに上げていた。

信頼が浅い中、複数票を得れた者こそ委員長に相応しいということでも早速投票が始まったのだが……

「僕4票！」

「当然だな……」

その結果、大半のクラスメイトが自分自身に投票して1票で並んでいたのに対し、出

久はぶつちぎりの4票獲得で無事委員長に選出された。

因みに、当然出久に入れているのであろうウオズもその結果に納得して笑みを浮かべている。

「0票…分かってはいたツ！聖職と言ったところか…」

「他に入れたのね…」

「お前もやりたがってたのに…何がしたいんだ？飯田？」

そして何故か多数決提案者の飯田は自分に入れておらず、票数は0であった。

「じゃあ、委員長は緑谷、副委員長は八百万だ。」

クラスメイト達の前に緊張で震えまくってる緑谷と、票数2により副委員長となった八百万が立つ。

「悔しい…」

なお、八百万は結果に不服そうであった。

「良いんじゃないかしら？」

「まあ、緑谷の戦いとか熱いしな！」

クラスメイト達はこの2人に賛成のようで、納得のまま午前前の授業に入っていく。

さて、昼食の時間だ。

「うおー！今日も凄い人だね！」

「ヒーロー科の他に普通科、サポート科、経営科の生徒も一堂に会するからな。」

今日は我が魔王と私に加え、飯田君、麗日君、そして爆豪君の5人で食べに来た。

「はあ〜いざ委員長やるってなると勤まるか心配だよ。」

「勤まる。」

「大丈夫さ。緑谷君の実力や判断力は他を牽引するのに値する。」

「それに君の言葉は芯もあるし、心に響く…救われた人間も多いんじゃないかな…？」

私とて、彼の言葉が無ければヒーロー科に来ていなかったし…

そこにいる爆豪君も自分の弱さと向き合うことができた。

「つーか、デクに入れたのってテメエら3人か？」

「うん！デク君なら大丈夫かな〜って思ってた。」

「僕も相応しいと思ったから投票したんだ。」

「当然だ。」

「3人が入れてくれたの!？」

「どうやら、我が魔王に入れたのは彼自身と私、それに飯田君と麗日君の様だ…」

「つーか、眼鏡は自分が委員長やりたかつたんじゃねえのか？あんなに手上げてたのによ。」

「確かに、眼鏡だし！」

（何気に2人共ざっくりいくよな…）

寧ろ一番やりたがってたのは、飯田君なんじゃないだろうかと私も思っている。

「やりたいと相応しいか否かは別だ。僕は僕が正しいと思う判断をしたまでだ…」

「「僕!」」

「おや？確か彼は普段自分のことを「俺」と言っていたが…」

「いつもは俺って…」

「いやあ、それは…」

「ちよつと思ってたけど、飯田君って坊ちゃん!」

「坊ちゃん…そう言われるのが嫌で一人称を変えていたのだが…」

「そう言えば彼はエリートな中学校出身だったな。普段のふるまいから見ても八百万君と飯田君…後青山君辺りは良い家の子だとは思っていたが…」

「ああ、俺の家は代々ヒーロー一家なんだ。俺はその次男だよ。」

「「ええー!?!スゴー!」」

なるほど、親や祖父もヒーローをしているのか。

確かに一族の稼ぎや教育もしっかりしているだろうね。

「ターボヒーローインゲニウムは知っているかい？」

「勿論だよ！東京の事務所には65人のサイドキックを抱えている大人気ヒーローじゃないか！まさかッ……」

「それが俺の兄さ！」

「あからさま！」

「スゴいやー！」

我が魔王もよく知る有名ヒーローを兄に持つとは、プレッシャーもあるだろうが中々誇らしいことじゃないか。もっと自慢しても良いのだよ、飯田君。

「規律を重んじ！人を導く愛すべきヒーロー！俺はそんな兄に憧れ……ヒーローを志した！しかし、人を導く立場は俺にはまだ早いと思う。俺よりも上手の行動をいつもしている緑谷君なら相応しいと思ってる……」

なるほど、それが彼の真意か。私達も熱い思いを持つ友人と出会えて嬉しい限りだ。
「ま、良いんじゃないかねえか……？それよりウオズ」

「私かい？」

飯田君達の話の聞きつつ、爆豪君が食事を済まして私の方をじつと見ている。

「テメエは良いのか？いつつもデクのことを立ててるだけで……」

「私なりに彼のことを信頼しているからね。だからこうして追従しているのだよ。」

爆豪君はどちらかと言えば、自分自身を更にも上のステージへと上げていくタイプの男だ。そう、それも自分自身が先頭で舵を取るタイプ。私の様な魔王の臣下という立場を貫き、後ろからお支えする者とは訳が違う。

「それも良いけどよ、テメエもつと自分を出していかねえのか？ ずっとテクの後ろに付いていつてるだけじゃつまんねえだろ？」

「ずっと付いていくだけか…」

「別につまらなくはないね。私は現状満足しているし…」

私は我が魔王がライダーの歴史を継承し、その瞬間に立ち会う日々を楽しんでいる。

だから特に不満はない。

「まあ、好きにやればいいんじゃない？」

『セキユリティー3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外に避難してください。』

その時だった。突如食堂中に警報が鳴り響く。

「セキユリティー3？ なんですか、それは？」

「校舎内に誰かが侵入してきたってことだよ！ 君らも早く…」

セキユリティー3、名前から察するに警告のしかも3段階目。

何者かの侵入という緊急事態が起こったようで、食堂中が一気に混乱で染め上げられる。

セキュリティー3について教えてくれた先輩も、急いでその場から逃げ出す。

「我が魔王！皆！」

食堂はパニック状態だ。

その場から離れて屋外に避難しようとする生徒でもみくちやにされ、私も他のクラスメイト達とはぐれてしまった。

このままでは死人が出るぞ！

「皆さーんストッブ！」

近くにいた切島君たちも混乱を収めようとしているが、その声が誰にも届かない。

おや：？あれは飯田君？

恐らく麗日君の個性で体を浮かしているのかな？

「エンジン！ブースト！」

身体を浮かした状態で彼はふくらはぎのエンジンを噴射。

そのまま出口付近の壁に、走っている人の様なポーズで張り付く。

「皆さん！大丈夫ー夫！！ただのマスコミです！何もパニックになることはありません！

大丈夫ー夫！！ここは雄英！最高峰の人間に相応しい行動をとりましょう！」

飯田君の行動はその場にいる多くの者の目に留まり、その声が全員に伝わった。

それにより、パニックになっていたものは落ち着き混乱は収拾された。

「我が魔王。よくぞご無事で…」

「なんとか助かったね…」

しかしながら、この件を引き起こしたのはマスコミか…

今朝集まっていた彼らが原因か…？いや、何か嫌な予感がするな。

「ほら、委員長。始めて…」

「でっ、ではっ…！他の委員決めを執り行つて参ります！」

マスコミは警察に連行され、昼休みの騒動は終息した。

その日の午後のホームルームでは出久の進行の下、委員決めが行われようとしていた

…

「けど、その前に良いですか…？」

「え…？」

「委員長はやっぱり…飯田天哉君が良いと思います！」

だがここで、出久は委員長を飯田に帰ることを申し出た。

「あんな風に人をカツコよくまとめられるんだ：僕は飯田君がやる方が良いと思うよ！」

「確かに…：納得だ。」

食堂での騒動は多くの者の心を突き動かした。

出久は人もまとめるなら飯田の方がふさわしいと感じ、ウオズも委員長の座の譲渡に納得の様子であった。

「しかし…」

「俺はそれでもいいと思うぜ。緑谷もそう言ってるし。確かに飯田、食堂で超活躍したしな。」

「ああ、それに非常口の標識みてえになってたしな〜」

自分が委員長を譲ってもらっていいのだろうか？と戸惑う飯田であったが、他にも食堂にいた切島や上鳴も彼の背中を押す。

「委員長の指名ならば仕方がない！以後はこの飯田天哉が委員長の責務を全うすることを約束します!!」

こうして、非常口飯田が1年A組のクラス委員に就任したのであった。

だがそれと同時に、新たな事件が起こるその時が刻一刻と近付こうとしていた…

第13話 いざ行け!USJ!

「今日のヒーロー基礎学だが…俺とオールマイト、そしてもう1人の3人体制で見ることになった。」

とある日のヒーロー基礎学。

普段であれば担当教師を務めるオールマイトが教壇に立つのだが、今日は何故か担任の相澤が立っている。

今日は彼とオールマイト、そしてもう1人の教師による3人態勢での授業だ。

「ハーン！なにをするんですか!?!」

「災害水難なんでもござれ人命救助訓練だ!!」

その授業の内容とは、前回の様な戦闘訓練だけでなくもう一つのヒーローの活動である災害救助に向けた訓練である。

「レスキュー…今回も大変そうだな。」

「バカおめーこれこそヒーローの本分だぜ!?!鳴るぜ!!腕が!!」

「水難なら私の独壇場、ケロケロ。」

「おいまだ途中。」

救助訓練では戦闘とはまた違った形で自分の個性を使えるので、そのことに想像を膨らませながらクラスメイト達がざわめき、それを相澤が制止する。

「今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗ってく。以上、準備開始。」

救助訓練のための特別な演習場で授業を行うため、更衣室でコスチュームに着替えたA組一同はバスに乗り込んでその地に向かうのであった：

彼らが乗ったバスは巨大なドーム状の建物の前に到着する。

A組一同がバスから降りると、宇宙服の様なコスチュームを纏ったプロヒーロー兼英雄教師が出迎えてくれる。

「皆さん！待ってましたよ！」

「スペースヒーロー113号だ〜災害救助で活躍してる紳士的なヒーローだよ〜」

「あー！好ききなよ！113号！」

そのヒーローの名前は、スペースヒーロー113号。

13号の登場に出久や麗日は目を輝かせている。

「早速中に入りましょう。」

「「よろしくお願いしますー!」」

13号の誘導で生徒達はドームの中に入っていく。

そのドームの中には、映画作品をモチーフとしたアトラクションが多くある遊園地やテーマパークの様な空間が広がっている。

「すっげえ!USJかよ?」

「懐かしいな…」

前世で何度かUSJに行ったことのあるウオズは、この場所に懐かしさを感じていた。

「水難事故、土砂災害、火災、暴風雨、等々:僕が作った演習場です。その名も(U)嘘の(S)災害や(J)事故ルーム!略して!USJ!!!」

「(本当にUSJだった!)(」

この名前が各方面から怒られないか心配するクラス一同。

「さて、訓練を始める前に、ボクから君達に小言が一言、二言、三言………」
「(増える)(」

「超人社会は『個性』の使用を資格制にし、厳しく管理する事で一見成り立っているよう

に見えます。しかし、その実一步間違えれば簡単に人を殺傷できる力を個々人が持っている事を忘れないで下さい。」

その言葉を聞きつつ、ウオズはミライドウオツチを眺める。

彼や出久の変身する仮面ライダーの力も容易に人を傷つけることができる。

だからこそ、対人での戦いとなれば力をセーブしたりする必要がある。

「相澤さんの体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘訓練でそれを人に向ける危うさを体験したと思います。この授業では心機一転！救命のために個性をどう使用するか学んでいきましょう。君達の力は人を傷つける為にあるのではない。助ける為にあるのだと心得て帰って下さいな。以上！ご静聴有り難うございました！」

救助訓練で学ぶべきことをしっかりと話した13号に、生徒達から拍手が送られる。

「ようし、そんなじゃまはずは…」

生徒達の授業開始に向けてのモチベーションが上がったところで、相澤が授業を進めようとしたその時だった…

「なんだ…？」

USJのドーム上部にある円環状の照明の電灯が切れ、空間内が少し暗くなる。噴水からあふれる水は少しずつ途切れ、その中心部から黒い渦が現れる。

「一塊になつて動くな!13号!生徒を守れ!」

「なんだありや…?入試ん時みたいにもまた始まつてるパターンか?」

生徒達は敵との実戦を想定した訓練でもするのだからかと考えるが、どうにもそんな様子には見えない。

相澤もゴーグルを掛けて臨戦態勢を取る。

「イーツ!イーツ!」

その黒い靄はUSJの中央広場中に広がる。そしてその中から、体中に手の様なものを付けた男、黒くて筋骨隆々ん肉体を持つ脳ミソ丸出しの怪人、チンピラヴィランと覆面を被り白い骨の様な柄が描かれた黒いボディスーツ甲高い声を上げる戦闘員多数がその場に現れる。

「何故彼らが…」

ウオズからすれば嘗て映像作品の中で目にしてきた存在、ティードとシヨツカー戦闘員がその場にいることにウオズは驚き、すぐさま対処しようと腰にビヨンドライバーを巻く。そのただならぬ様子に出久も自然とその腰にジクウドライバーを巻きつける。

「動くな!あれはヴィランだ!」

「13号にイレイザーヘッド、先日頂いた教師側のカリキュラムではオールマイトもここにいるはずなんです…」

「やはり先日ののはクソ共の仕業だったか…」

先日のマスコミ騒動、それは彼らヴィランが一枚噛んでいた。

マスコミを使うことで騒動を起こし、その間に雄英から授業のカリキュラムを盗んでいたのであった。

「オールマイト、平和の象徴…居ないなんて…」

恐らく彼らの狙いは雄英で教鞭を取っているオールマイト。

しかし、彼が居ないことに手が体中に着いた男が落胆している。

「だったら、ガキ共を殺せばいい…何人か、いや？全員殺そうか。」

その言葉に危機感を覚え、捕縛布を広げてすぐにでも戦おうとしている。

「私もいきましよう…どうやらこの事態、プロヒーローだけでは解決は難しいだろうね…」

だが、この事態にプロヒーロー以上に危機感を感じてしまっているのはウオズだ。

仮面ライダーの敵として代表的なショッカーの戦闘員と、スーパータイムジャッカーであるはずのティードがその場にいることに、仮面ライダーの力が必要な非常事態であると感じ取っていた。

「ウオズ君…?」

『ウオズ！アクシヨン！』

「変身!」

『投影!フューチャータイム!』

『スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

ウオズはすぐさま仮面ライダーウオズに変身し、ジカンデスピアを構える。

「本来なら止めるべきだが、こんな状況だ。助太刀、任せたぞ。」

「ああ、任せたまえ…」

ウオズの実力は相澤も認めている。緊急事態で生徒に戦わせるのは好ましいことではないが、今は猫の手も借りたい状況。

『ジカンデスピア!』

ジカンデスピアを持ったウオズとイレイザーヘッドが同時にチンピラヴィランと戦闘員の集団に向かって走っていく。

敵と対峙すればすぐ、イレイザーは捕縛布を使い敵を縛りつつ近接格闘技で敵を1人ずつ倒していく。

ウオズの方もパンチや蹴りに加え、槍の柄部分で敵の頭を殴りつけて次々と気絶させていく。

「流石イレイザーヘッドにウオズ君…!僕も…」

「緑谷君!早く避難するんだ!」

出久もその戦いに遅ればせながら参加しようとしたが、飯田に止められてクラスメイ
トと共に出入り口に向かう。

「させませんよッ……！」

だが、生徒達の前に黒い霧状の身体をしたヴィランが立ちはだかる。

「チッ……！」

「行く手を阻むか……」

咄嗟にA組生徒達を助けに行こうとした2人の前に、脳ミソが露出している黒い怪人
が立ちはだかる。

「初めまして……我々は『オーマシヨツカー』。平和な歴史を終わらせるためにオールマイ
トを殺しに来ました。ここに彼が居ると聞いてきたのですが、何か変更でもあったので
しょうか？ですが、居ないのならば仕方ありません。私のやるべきことは変わりませ
ん……」

その黒い霧の身体を広げ、A組生徒達を包み込もうとした敵であったが、そこに爆豪
と切島が殴り掛かる。爆豪が放った爆炎で敵の身体が吹き飛んでしまう。

「その前に俺達にやられることは考えてなかったか！」

切島達は確かに手応えを感じていたが……

「危ない危ない……生徒と言えど優秀な金の卵……」

「ダメだ!2人共下がって!」

「私の役目は貴方たちを散らして!罨り殺す!」

その時だった。敵の身体である黒い霧が生徒達を包み込むように広がっていく。

「皆!」

多くの生徒がその黒い霧に呑み込まれてしまった。

『ジオー!』

「変身!」

『ライダータイム!仮面ライダージオー!』

その瞬間、咄嗟に出久は仮面ライダージオーに変身したが、身体は黒い霧に呑み込まれてしまっていた。

「落ちるー!」

出久は黒い霧から出てこれたが、出てきた先は先程の広場ではなく空中であった。

敵密にはUSJのドーム内だが、このままでは水難ゾーンに落下してしまう。

『アーマータイム!』

『3・2・1!』

『フォーゼ!』

咄嗟にジオウは仮面ライダーフォーゼの姿を模したアーマーを装着し、両腕に装備したブースターモジュールからのジェット噴射で宙に浮く。

「危なかった…あの中にいるのって…」

出久が人工池に溜まった水を見ると、そこには多数の敵が居た。

(オールマイトを殺すって言ってたけど…ウオズ君と先生、大丈夫かな? 僕も早く助けに行かないと…けどまずは!)

「緑谷ちゃん!」

「蛙吹さん!」

峰田を抱え込んで、水中の敵を回避しながら泳ぐ蛙吹梅雨の姿を確認すると、彼女が伸ばした舌を掴んで引き上げる。

「蛙の割に中々どうして…おっぱいが…」

3人は一旦、人口池に浮かぶ船の上に退避するが、峰田は自分を抱え込む蛙吹の胸の感触を味わっていた。蛙吹はその峰田を手放して床に落とすと、アーマータイムを解除したジオウの方を向く。

「助かったわ、緑谷ちゃん。」

「こちらこそ、峰田君まで助けてもらってありがとうございます。」

「梅雨ちゃんと呼んで。」

出久と蛙吹、それと峰田は船の上で一度状況を整理することにした。

「さっきのヴィランの言葉…：雄英のカリキュラムを知ってた…：恐らくこの前のマスコミが雄英バリアを破った時に盗んだんだ!あの、オーマショッカーって人達、虎視眈々とこの計画を準備してたんだ!」

これまでの敵の言動や、雄英内で起こった出来事から、出久は敵がしつかりと情報収集をして準備していると推察した。

「でもよ、でもよ、オールマイトを殺すなんて出来っこねえさ!オールマイトが来たらあんな奴らけちよんけちよんだぜ!」

「峰田ちゃん。恐らく殺せる算段があるから連中、こんな無茶してるんじゃないの?」

「そうだね、マスコミまで使つて情報を仕入れてる連中だ…：きつと対策もしつかり積んでいる。それにオーマ”ショッカー”か…:」

楽観的な峰田に対し、冷静な2人。

しかし、出久の中に一つの不安が生まれていた。それはエントランス広場での戦いに即座に参戦したウオズが抱いたものと同じ不安であった。敵の組織の名前の中に入っているショッカーという言葉。平成ライダーの歴史をウオズに見せられた出久も、その

名前をしつかりと憶えていた。

何度も仮面ライダー達と戦ってきた悪の秘密結社シヨッカー。彼らの名を冠しているうえに、その戦闘員まであの場に居た。仮面ライダーと戦ってきたような怪人が来るかもしれない、その考えを少しでも早く思い浮かべなかつたことを出久自身後悔していた。

「み、緑谷…あいつらなんだよ…!？」

だがしかし、彼らが一番に恐れるべきは船に迫る一般ヴィラン達であった。

水中戦闘に長けた個性を持つ者達が迫り、3人は窮地に立たされていた。

「峰田君、大丈夫…僕に作戦がある。」

まずはここを切り抜けることが先決と捉え、すぐに考えを巡らせた。

「けど、どうすんだよ…」

「大丈夫。僕達はまず彼らに情報戦で勝っている。」

「情報…?？」

「うん、僕達はお互いの個性を知っている。けどあいつらは…僕達の個性を知らない。」

出久は「敵は出久達A組生徒の個性に関する情報を持ってない」と考えていた。

「もし彼らが僕らの個性を知ってたら…あすつ、梅雨ちゃんをここに飛ばしてない筈だ。」

「そうね、ここは私の得意な場所…もし、私の個性を知ってるなら火災ゾーンに飛ばす筈だわ。」

蛙吹を水難ゾーンに飛ばしたことから、敵は彼らの情報を持ってないと推察できる。それに対し出久は蛙吹と峰田の個性を”個性把握テスト”の際にしっかりと把握し、解析していた。

「この作戦でここを乗り切ろう…」

出久が2人に作戦を話すとすぐ、実行に移る。

『アーマータイム!』

『レベルアップ!』

『エグゼイド!』

仮面ライダーエグゼイドを模したアーマーをその身に纏い、ジオウは敵が一番集まっている場を見つめる。

「来たぜ!」

「あのヘンテコ仮面!ここで殺してやる!」

仮面ライダージオウ・エグゼイドアーマーを狙う敵達。

「この方法なら…ノーコンティニューで、クリアできる気がする!」

『フィニッシュタイム!』

腕に付けた装備を外し、ベルトを一回転させると両腕に取り付けたハンマー型の武器、ガシヤコンブレイカーブレイカーにエネルギーが溜まっていく。

『クリティカルタイムブ레이크!』

ジオウは船の上から飛び上がり、水面に向かって降下していく。

「峰田ちゃん。」

(こんな怖い状況なのに!皆…なんで…なんで!)

怖がって震えている峰田を抱え、蛙吹もその様子を見ている。

「アラウエア!スマーツシユ!」

憧れの戦士、オールマイトの様にその右腕を水面に突き出してエネルギーを一気に撃ち出す。

「「うわああああ!!」」

すると、攻撃が撃ち出された場所を中心に渦ができ、船を取り囲んでいた敵達が巻き込まれていく。

「梅雨ちゃん!峰田君!」

「ケロー!」

船から飛び上がった蛙吹が舌をジオウの身体に巻き付け、彼の身体の回収を試みる。

(チックシヨ!緑谷お前!カッコいいことばっかしやがって!)

「うおおおおお!!」

出久に負けじと峰田は頭のもぎもぎをちぎって水面に向けて投げつけていく。

「おいらだつて!おいらだつて!」

「吸い込まれる!」

「これあのガキの!」

渦に吸い込まれる敵の身体に、峰田の頭部に着いた球体が引っ付いていく。

「水面に強い衝撃を与えれば…!衝撃が広がってまた収束するから…!」

「一網打尽!とりあえず、第一関門突破ね…凄いわ!2人とも!」

峰田の頭のもぎもぎで敵達はお互いの身体が引っ付き、一塊になった拳句、渦の中心

から打ち上げられて撃破。

その様子を見た出久達はウオズの援護に向かうのであった…

第14話 美しき調和

出久が水難ゾーンで敵と戦っている間、USJの中央広場でもウオズと相澤が戦っていた。

「全く手ごたえを感じないな……」

オーマシヨツカーが引き連れて来たヴィラン相手に善戦していた相澤とウオズだったが、筋骨隆々の怪人脳無を相手にウオズは苦戦を強いられていた。

ウオズの持つ全フューチャーリングの中でも高火力を誇るフューチャーリングキカイでも、パンチやキックで脳無にダメージを与え切れていなかった。

「そりやそうさ！ ソイツは対オールライト用に作られたんだぜ！ 並大抵の攻撃じゃやられないさ……！」

脳無に対して有効打を与え切れず、苦戦するウオズに対して体中に手が付いた男、死柄木弔が自慢気に語り出す。

「ほう、対オールライト用か……なら確かに、この形態で戦うのはよろしくなかったね。教えてくれて助かったよ。」

『投影！フューチャータイム！』

『フアツション！パツション！クエスチョン！』

『フューチャーリングクイズ！クイズ！』

ウオズは彼の”対オールマイト用”という言葉から、目の前にいる怪人が彼の様な超パワーによる物理攻撃に耐えられるように設計されているのではと感付いた。

そうなればこのままパワーで押し切るより、他の手段でダメージを与える方が良いと判断してビヨンドライバーに付いているミライドウオッチを取り換え、仮面ライダーウオズ・フューチャーリングクイズに姿を変える。

「問題。我が魔王の好物はカツ丼である…○か×か？」

「知るか！なんで今クイズなんて！」

「残念、未回答…答えなかった者には罰を与えなければ…」

ウオズの出題た問いかけに答えなかった死柄木と脳無に、上から生成された雷が落ちてくる。

「なんだよ！この攻撃！脳無！やれ！」

落雷によりダメージを負い、体が痺れて動けない死柄木は痲癩を起しながら脳無にも動くように指示するが、脳無の前に一人の男が立つ。

「流石、仮面ライダーウオズ…やはり消してやりたい！」

その男の名はティード。仮面ライダーの歴史を消し、自らが王になると目論む男

だ。

「ティード、君は平成ライダー達に倒されたはずだ…なぜ生きている？」

「闇のライドウオツチが俺を復活させた…！二度目のこの命で俺は！平成ライダーを終
わらせる！」

『クウガ…』

ティードの中にある仮面ライダーに対する怨念が、再び彼が生きる要因となった。

取り出したアナザークウガウオツチを起動させ、自身の胸にその物体を押し当てる。

すると黒い禍々しいオーラに包まれながらティードが赤くて巨大な肉体を誇る怪物
へと変化する。

その見た目はクワガタムシにも近い、だが”仮面ライダークウガ”にも似ている。と
いうより、そのクウガを禍々しくしたような姿をしている。

「アナザーライダー…厄介な敵が来てしまったな…」

その名もアナザークウガ。3mを超える巨体を誇るその怪人は巨大な腕でウオズを
払い除け、相澤に向けて飛んでいく。

「…ッ！」

アナザークウガの虫の脚のように細いが、他の者に比べたらかなり大きい腕が相澤の
身体を殴り飛ばした。

怪物に殴り飛ばされた相澤が地面を転がり、泣きつ面に蜂と言わんばかりに痺れから復活した脳無が跳び上がって相澤に向けて降下しながら筋骨隆々なその腕を振り下ろす。

「次から次に……！」

その一撃を回避した相澤であったが、次々と繰り出される脳無の攻撃を避けるのに一杯で攻勢に出れない。

『フィニッシュタイム！』

『不可思議マジック！』

アナザークウガは脳無と共に先に相澤を潰しておこうと彼の方に向かおうとしていた。

だが、背後からウオズがジカンデスピア・ツエモードから放った大量のクエスチョンマークが襲い掛かり、背中に衝撃を受けたアナザークウガはウオズの方を向きなおす。

「やはり、アナザーライダー……我が魔王でなければ倒せないか……」

「やってくれたなあ……まずはお前からだ！」

アナザークウガは仮面ライダークウガの力を持ったアナザーライダーである。クウガの力を使わなければ彼を倒すことはできない。

ウオズの攻撃は焼け石に水、しかしながらアナザーライダーの標的を自らに向けるこ

とはできた。

「さあ、来るがいい！」

『シノビ！アクション！』

『投影！フューチャータイム！』

『誰じゃ？俺じゃ？忍者！』

『フューチャーリングシノビ！シノビ！』

アナザークウガに対してウオズはフューチャーリングシノビに変身し、アナザークウガと対峙する。

『カマシスギ！』

「私の速さ、見切れるかな？」

全形態の中でもトップスピードを誇るフューチャーリングシノビに変身した理由は、その機動力を生かして目にも止まらぬ速さ敵の周囲を駆け回り次々と鎌型になったジカンドスピアで何度も切りつける。

「確かに速いが…俺はクウガの力を持っている。」

360。様々な方向からアナザークウガを切りつけるウオズだが、右側面から切りかかるようにしたウオズの身体を掴んだ。アナザークウガには少しであるがクウガの各形態の特徴が備わっている。

視覚と聴覚に優れたペガサスフォームの様に、研ぎ澄まされた感覚で高速移動するウオズの身体を捕まえてみせた。

「最強のアナザーライダーである俺に！お前は勝てない…」

更に彼は、ウオズの身体をメンコで遊ぶ少年の様に地面に叩きつけ、さらに上から腕を何度も振り下ろす。

「防ぎきれない！」

何とか振り下ろされる腕を避けたり、ジカンデスピアを使って防ごうとするが確実にダメージを受けていく。

「忍法！変わり身の術！」

何とか、藁でできた身代わりと入れ替わってその場から離脱するが…

「逃げてても無駄だ！」

それに気付いたアナザーライダーがウオズに肉薄する勢いで飛び、殴り飛ばす。

「劣勢か…」

自分だけでなく、相澤も敵の脳無に取り押さえられて血を流している。

今この場に居る雄英サイドの2人は敵に囲まれていつ命を奪われてもおかしくない状況に立たされていた。

「せめて、我が魔王が来るまでの時間稼ぎは…！」

ジオウであればクウガウオツチを使うことができる。ウオズは出久が来るまで耐え抜くことを考えた。

「ここでジオウに頼るか！ヒーロー様が他力本願になるとは！」

「ああ、我が魔王の力は偉大だ。彼が来れば貴様などツ…」

そう言ってるウオズにアナザークウガが腕を振り下ろす。

「お前じゃ俺には勝てないさ！俺は王で！お前はただの魔王の下僕だからな！」

魔王の下僕か…

私は周囲の者にそう思われていても仕方ないだろう…

実際に爆豪君からもそう呼ばれていた時期もあった…

「野望もビジョンもない！そんなお前は俺に勝つことはできない…！」

確かに、今日の前にいる男は野望の塊のような男だ。

だが私とて、夢が無いわけではない。

私には我が魔王の覇道を見届けるといふ夢がある…！

「貴様が私の夢を語るな！」

再びジカンデスピアを構えて、切りかかろうとするが彼の強化された足によって蹴り飛ばされる。

劣勢なのは変わらないか……こんな時彼らなら……！仮面ライダーならどうする……!!

「それも良いけどよ、テメエもつと自分を出していかねえのか？ずつとデクの後ろに付いていつてるだけじゃつまんねえだろ？」

「ウオズ君はそれでいいの……？僕を導くだけと言っても、それで変わるのは僕だけだ。ウオズ君自身がどうありたいとか、どう変わりたいかって……そういう夢は無いの……？」

これは、爆豪君と我が魔王の言葉……

「そうか、今の私には……」

私には一つ足りていなかった物があつた。それは自分から前に出ていく気持ちだ……

！

仮面ライダーに憧れ、我が魔王と共にヒーローを目指そうとした。しかし、どこかで私は彼に勝てないと感じ、後を追っていくことに満足していたのかも知れない……甘さがどこかにあつたのかも知れない……

”私自身の力”で勝って誰かを救う。その気持ちが無知していた。

「何を笑っている？」

「いいや、教えてくれて助かったよ。私に足りていないことがよく分かったよ。」
私の中の仮面ライダーの記憶。

「お前を止められるのはただ一人！俺だ！」

「物語の結末は！俺が決める！」

「一気に…いや、”一緒”にいくぜ！」

彼らは皆、自分自身で戦い、誰かを救おうとしていた。

「我が魔王に頼り切っていたことを詫びるよ。”私”が皆を助ける！」

私も皆を救うヒーローとなる。

そう決意したときだった…

『ゼロワン！』

『セイバー！』

『リバイス！』

私の胸から3つの光が出てきて、それぞれミライドウォッチに変化した。

「何?!新しいウォッチが生まれただど！」

「ああ、私の中の記憶が生み出した力、とくと味わうと良いだろう…」

『ゼロワン！』

シノビミライドウォッチをビヨンドライダーから取り外し、新たに起動したゼロワン

ミライドウオッチを取り付ける。

「変身!」

『アクション!』

展開していた状態のビョンドライバーを閉じる。

『投影!フューチャータイム!』

『プログラムイズ!』

『フューチャーリングゼロワン!ゼロワン!』

我が魔王、仮面ライダージオウよりも後の時代を生きる仮面ライダー。そう、令和ライダーという未来のライダーの力を私は継承してみせた。

「祝え!令和の歴史を継承し、新たな歴史を歩む預言者!その名も仮面ライダーウオズ・フューチャーリングゼロワン!新たな歴史が創成された瞬間である!」

「何を祝っている!」

私に殴りかかろうと、その巨大な腕を振り上げたアナザークウガに対して、私はゼロワンの力で強化された脚力を活かして地面を蹴り、弾丸の様に胸に飛び込んでいく。その勢いを乗せたストレートパンチをアナザークウガの胸に打ち込む。

「ああ、祝福を贈ったのだよ…私の新たな力にね。」

続いて、我が魔王がゴーストアーマーを使う時にパーカーゴースト達を操るのと同じ

要領で、バツタ、ファルコン、サメ、トラ、ホツキョクグマのライダーモデルたちを召喚し、敵に向けて突撃を仕掛けさせる。

「我が臣下よ！敵を迎撃せよ！」

バツタのライダーモデルがアナザークウガに飛びつき、頑丈なあごで噛みつく一方で、トラとホツキョクグマのライダーモデルは相澤先生を拘束する脳ミソの怪人に攻撃を仕掛ける。

白熊の腕で殴り掛かりつつ、虎がその顎で方に噛みつく。

「さあ、今の間に……」

「助かる……」

その間にファルコンのライダーモデルが重傷を負ってしまった相澤先生を救出して遠くへ運ぶ。

周囲にいるチンピラ達もサメのライダーモデルの突撃で次々と蹴散らされている。

「さて、まずは君からだ。」

「次から次に！」

相澤先生を救出したファルコンが、バツタの方を助けるためにアナザークウガに飛びついた。

更なる相手の出沒に彼が手間取っている隙に、私はあの筋骨隆々の脳ミソ怪人を処理

してしまふことにした。

「なるほど、再生能力か…」

虎と白熊が現在対処してくれているのだが、彼らから受けた傷がすぐに再生してしまっているようにも見える。先程私がフューチャーリングキカイで戦った時には打撃技もあまり効いていない様子だった。

そのことから察するにかなりの打撃耐性を持っているか、衝撃吸収の能力があるのだろうか…

「ベアーよ、凍らせろ。」

そこで、ホッキョクグマのライダーモデルに指示を出して冷気を発していただく。この白熊はフリージングベアーのライダーモデルだ。そのプログライズキーが持つ相手を凍らす力を活かして黒い怪人の全身を氷で覆う。

「ほう…パワーも中々あるようだね…」

だがしかし、その怪人が氷を突き破ろうとしているのだろうか？氷が少しずつひび割れしていく。

「だが、この攻撃を確実に当てる余裕はあるだろうか…」

『フィンツシユタイム！』

手に構えたジカンドスピア・ヤリモードのタッチパネルを操作すると、緑色のエネルギー

ギーがその刃先に収束する。

『爆裂DEランス！』

その槍を突き出すとともに、収束されたエネルギーが衝撃波となつてまっすぐに解き放たれ、氷ごと怪人の身体を打ち砕いた。

「今だー！」

攻撃を喰らつた黒い怪人の右胸に風穴が空き、腕もせん断されて地に落ちる。

だがここで、再生されてしまわない様にトラのライダモデルに指示を出す。フレイミングタイガーのライダモデルであるそのトラは口から炎を放ち、再生する前にその傷口を焼いて炭化してしまう。

その余波で全身に火傷を負つたその怪人は、そのダメージから回復し切ることができず地面に倒れ伏す。

「まさか脳無が！」

地面に倒れて這いつくばっている、手だらけの男がその怪人がやられたことに驚きを隠せていない。

彼も後で捕えておかないとな…

「次は君だ…」

「やられてたまるか！」

このまま、アナザークウガを倒してしまおうとしていたその時だった…

『ヘイ！ファイズ！』

『デュアルタイムブ레이크！』

空中から赤い光の斬撃が放たれ、アナザークウガの胸部を切りつける。

ファイズという音から、この光はフォトンブラッドだろうと考えられる。そして、これを撃つたのは…

「我が魔王！」

私達の援軍に来てくれた我が魔王であった。仮面ライダー・ジオウ・デイケイドアーマーに変身しただけでなく、ファイナルフォームタイムで仮面ライダーブレイド・ジャックフォームの力を引き出して空を飛んでいる。

「蛙吹さんと峰田君の避難も終わったよ！凄いな！新しい姿！」

「ああ、ジオウよりも未来の仮面ライダーの力だよ。さて、一緒にいきましよう！」

「うん！」

我が魔王と共に並び立ち、アナザークウガと向き合う。

「お前ら仮面ライダーごときにな！負けてたまるか！」

向き合う両者、先に動いたのはウオズであった。

召喚できる全てのライダモデルにアナザークウガを攻撃するように指示を出す。

「我が魔王、奴はクウガの力を持つ怪人……ここはクウガの力をお使いください。」

「分かった!」

『クウガ!』

ライダモデル達が隙を作り、その間にジオウはディケイドライドウオツチのF・F・

T・スロットに装填したブレイドライドウオツチを取り外し、クウガライドウオツチを取り付ける。

『ファイナルフォームタイム!』

『ク・ク・ク・クウガ!』

アナザークウガに対抗するために、出久は仮面ライダージオウ・ディケイドアーマークウガフォームに姿を変えて、ライドハイセイバーを構える。

顔面部の画面には仮面ライダークウガの顔が描かれたカードが映し出され、素体はアメイジングマイティフォームのものとなり、胸のバーコード部分にはアメイジングマイティと書かれている。

『ハイ! 鎧武!』

『デュアルタイムブ레이크!』

オレンジ色のエネルギーを纏った斬撃がアナザークウガに放たれ、ライダモデル達はその場を退くのと同時に炸裂。

「これが今のお前達の力だというのか!」

四面楚歌、そんな言葉が今の彼にはピッタリだろう。

上空はファルコン、周囲はバッタ達のライダモデルに取り囲まれ、共に来た死柄木はウオズ・フューチャーリングクイズが食らわせた雷撃のダメージから回復し切っていない。

『ク・ク・ク・クウガ!』

『ビヨンド・ザ・タイム!』

そんな彼の耳に、最後の宣告と言わんばかりにジオウとウオズの必殺技発動音が入ってくる。

ジオウはディケイドライドウオツチのボタンを押し、彼の右足に電撃を纏った封印エネルギーをため込み、ウオズはビヨンドライダーを開閉操作して、ライダモデル達を右足に収束させる。

『ファイナルアタックタイムブ레이크!』

『プログラミングブ레이크!』

跳び上がった2人が同時に、ライダークックをアナザークウガの胸部目掛けて放つ。「馬鹿な！また俺は負けるのか！」

その一撃を喰らったアナザークウガは身体から火花を散らし、体内に流し込まれたエネルギーに耐えきれず爆発四散する。

「クソっ……！」

爆炎が晴れ、アナザークウガが居たはずの場所には地面にはティードとアナザークウガオツチが転がっている。

「逃げるぞ……！」

彼らを率いる死柄木は、ワープ使いの黒霧を呼び出してその場からの退避を指示する。

頼みの綱である脳無とアナザークウガを標的であるオールマイトが来る前に失ってしまう、これ以上抗う道はなかった。

「俺を置いていくな……！」

「負けたやつに用はない……！」

「待て……！」

ティードをその場に残して、黒霧の黒い靄に包まれながら死柄木がその場から逃げようとする。

それに対してウオズはファルコンのライドモデルを仕向けて逃げるのを阻止しようとするが、死柄木の手に触れられれば、彼の個性によってライドモデルが崩壊してしまう。

「今回はゲームオーバーだ。けど、次のゲームは勝つツ……」

そのまま彼は黒霧と共にその場から消える。

「まあ良い、君はもう見捨てられた。大人しく他の敵共々警察のお世話になると良い……」
「うん、このウオツチも……」

一先ず2人はティードを確保して警察に突き出すことを優先しようとしたが……

『クウガ……』

ティードは再び、アナザーライドウオツチに手を伸ばして掴み、再起動させると立ち上がり、目の前にいたジオウの身体に埋め込んだ……

「ウオ、ウオズ君……」

「我が魔王……」

「こうなれば俺がお前を取り込み究極の闇の王となる……」

出久とティードの身体は禍々しい闇のオーラに包まれ、地面にダイケイドとクウガのライドウオツチが転がる。

そして2人を包み込んだ闇のエネルギーは空中に浮かび上がり、黒く禍々しい肉体と

先程よりもさらに大きな体、そして4本の腕を持つアナザライダー、アナザークウガ・アルティメットフォームへと姿を変える。

「我が魔王！」

敵が放った火炎弾を避けつつ、ウオズはディケイドとクウガのライドウオッチを手に取る。

(何故こんなことに……だが、私が何とかして助けなければ！)

アナザークウガ・アルティメットフォームがウオズに襲い掛かる。

突然出久を失い、何とか冷静になるウオズは攻撃を仕掛けることもできない……

「ハウザー……インパクト！」

その時だった。アナザークウガの背に爆破による衝撃が走った。

さらに次の瞬間、敵の身体が氷山の様な氷の塊に包まれた。

「頼もしい援軍の到着か……」

出久をアナザークウガに取り込まれてしまい、一気に窮地に立たされたウオズに希望の光が差し込んだ。

他の場所で敵を倒して援軍に向かっていた爆豪、轟、切島がこの場に到着したのであった……

第15話 魔王と救世主 前編

緑谷出久をアナザークウガに取り込まれてしまい、窮地に陥ってしまったウオズ。

そこに爆豪達クラスメイトが援軍として駆け付けたことで、彼らは反転攻勢に出る。

『セイバー!!』

『投影! フューチャータイム!』

『烈火抜刀!』

『フューチャーリングセイバー! セイバー!』

ウオズは新たに手に入れたセイバーのミライドウオツチを使い、仮面ライダーウオズ・フューチャーリングセイバーに変身する。赤い竜を模したアーマーを身に付けて、火炎と物語の力を秘めたファイヤソード・レッカを手を持つ。

「皆、我が魔王を助けるぞ!」

「おう!」

「ああ…」

轟が生成した氷を打ち砕き、その中から飛び出してきたアナザークウガ。

その巨大な拳がウオズに迫っていくが…

「防御は任せろ！」

身体を硬化させた切島がその攻撃を防ぐ。

『ジャツ君と土豆の木！』

その間にウオズがレッカの柄部分にある葉状のボタン、ライドブックマークを押すとそこに秘められた物語の力が刀身に宿る。「ジャツ君と土豆の木」の力が秘められた剣を地面に突き立てると、巨大な木の幹の様なものが地面から生えてきてアナザークウガの身に絡みつく。

「轟君、もう一度いけるかい？」

「任せろ……」

轟の右腕から放たれる冷気がアナザークウガの下半身周りの空気を冷やし、氷を生成して包み込む。

「行くぜ！」

「ああ！」

『ニードルヘッジホッグ！』

身動きが取れなくなってしまうアナザークウガの上半身に、爆豪の爆破、切島も硬化した拳によるパンチ、レッカから放たれた大量の針が放たれる。それらの攻撃はアルティメットフォームとなりより硬くなったアナザークウガの生体装甲にかすり傷を付

けてみせた。

「まだだ…まだ足りないな！」

だが、彼の持つ4本の腕が振るわれ、爆豪と切島の身が地面に叩きつけられてしまう。

「その程度では俺を倒すことはできない！」

「やはり、キツイな…」

アナザークウガ・アルティメットフォーム、本来であれば20人の平成仮面ライダーの力で倒せた相手だ。

流石のウオズや爆豪、轟でも敵の身体にダメージを与えることもままならない。

「クソツ…どうすりゃいいんだよ！」

さらにアナザークウガは足元の氷を打ち砕いて、地面に転がる爆豪達に向けて拳を振るう。

それを避けつつも、何とか爆破を浴びせて牽制。だが、それでも敵の進撃は止まらない。

「危ねえ！」

アナザークウガが爆豪を蹴り飛ばそうとしたところを全身硬化状態の切島が庇う。

「切島！」

「友達なんだろう?!緑谷！」

ダメージを逃す様に、切島は後ろに身体を引き下げてから爆豪の方を見る。

「昔何があつたか分かんねえけど！アイツ助けるなら俺よりもお前の方がふさわしいだろ！俺が守り切つてやるから！お前がいけ!!」

「ありがとなッ…」

自身の後押しをし、彼自身が助けに行く隙を作るために防御に徹してくれると申し出てくれた。

2人は先程、USJ内のビル倒壊ゾーンで共闘して戦友関係を築きつつあつた。

そんな彼からの申し出に、爆豪は初めてその口から感謝の言葉を述べた。

「その通りさ、爆豪君。」

『ピーターファンタジスタ!』

ウオズの持つレッカの刀身から伸びるフックとウィールが、アナザークウガの足元に巻き付き、敵の動きを封じる。

「あの時我が魔王は君を救つた！今度は君が彼を助ける番だ…」

「ああ!」

「何をゴチャゴチャと!」

ウオズによる拘束を振りほどいて、腕を振るおうとするアナザークウガ。

その一撃を全身硬化状態の切島が受けて耐え抜く。

「脇腹がお留守だぜー！」

攻撃によって生まれた隙を突くように、左手の籠手の先端部を敵に向けてピンを引き抜く。

そうすると、籠手内に溜まっていた爆豪の汗を活かした威力増大バージョンの爆破がアナザークウガに付き刺さる。

「小癩なアー！」

「離れろー！爆豪ー！」

轟の声と共に、爆豪は後退して距離を置く。その瞬間2人の間に巨大な氷塊が生成され、2人を分断すると…

「撃てー！」

今度は右籠手のピンを抜き、大爆破を氷塊に向けて放てば一気に割れてその破片がショットガンの銃弾の様に、拡散した状態でアナザークウガの身体に向かって吹っ飛んでいく。

「ガキとときがー！」

その攻撃を喰らい、よろけつつも空を飛ぶアナザークウガ・アルティメットフォーム。彼にはまだ作戦があった。究極の闇を発動して大量の怪人を生成することができ、それらを召喚してUSJにいるA組生徒達を全て殺そうと考えたが…

「何故だ！何故こうなる!!」

彼自身がその力を発動しようとしても、使うことができなかった。

『ストームイーグル!』

「どうやら今の君は、本当の力を使えないようだね…」

剣に秘められた物語の一つ、ストームイーグルの力で空へ飛んできたウオズにもそのことを見抜かれてしまった。

「恐らく、君の中で我が魔王が抗っているのだらうね…だから君は、本来の力を使えない。」

「黙れ! だったら俺が完全に取り込んで…」

「その隙は与えない!」

『西遊ジャーニー!』

レッカの刀身から生成されて、剣を振るうことで放たれた金属の輪がアナザークウガの左翼を切り裂いた。

「クソ!」

「まだだ! まだ俺とタイマン張れんだろ!」

バランスを崩して、地面に落下していくアナザークウガ。

そこで待ち受けていた爆豪から、さらに数発爆破を喰らってしまうが…

「仮面ライダーでもない奴が！俺と張り合うな!!」

その口から放たれた破壊光線に、よって3人が吹き飛ばされてしまう。

「爆豪君！皆！」

ウオズがその光景を見て、すぐに3人に駆け寄るが…

「まッ、まだッ…！終わってねえぞ！」

それでも爆豪は立ち上がってみせる。

「何故だ！何故まだ立てる！」

「俺はッ…！小さい時からアイツをッ…！デクを虐げちまってた！勝手に見下して！勝手に…！プライド折れて！そんな俺でもアイツは救ってくれた！だから俺が今度は救ける番だ!!」

その時であった、爆豪がコスチュームのポケットに入れていたブランクライドウォッチが赤く発光し始めたのは…

『ゲイツ！』

「これは…」

「人を救う力だよ。さあ、これを使って我が魔王の…いや、皆の救世主になってくれ。」

爆豪の中の”助ける決意”が生み出したゲイツライドウォッチと、ウオズが差し出したジクウドライダー。

その意味が分かると爆豪は、それらを手に取り、ウオツチをジクウドライバーのD、9スロットに取り付けてからベルトを腰に付ける。

「変身ツ……！」

『ライダータイム！』

『仮面ライダーゲイツ！』

爆豪勝己が仮面ライダーゲイツに変身した。だがその姿は多くのライダー視聴者が知っている姿と少し違う。爆豪のコスチュームデザインを反映したかのように、両手には手榴弾型の籠手が付いている。ゲイツはゲイツでも、爆豪の個性を生かすのに特化した姿と言えるだろう……

「祝え！悪意に打ち勝ち、新たな未来を切り開く最強の救世主！その名も仮面ライダーゲイツ！まさに生誕の瞬間である！」

「出久……俺が勝つ！だから teme エもソイツに打ち勝て！」

ゲイツに変身した爆豪が、足から爆破を放つてその推進力でアナザークウガに飛びつくと、腰の節部分に手から爆破を放つ。

元々個性を持つ爆豪からウオツチが生まれたことで、ゲイツの力が爆豪自身に適応した。

それにより、手だけでなく足からも爆破が出来るようになり、彼の戦い方の幅が広が

る。

「仮面ライダーが一人増えたところで！」

「俺はただのライダーじゃねえぜ……」

4本の腕を振り回して何とか倒そうとする敵に対し、ゲイツは四肢から放つ爆破によるヒット&アウェイ戦法で攻撃を回避しつつ、自身の爆破を確実に当ててじわじわと敵を削っていく。

「俺は“勝つ”仮面ライダーだ！」

両手からの爆破をアナザークウガの頭部に当てると、さらに敵の下半身が氷に覆われる。

「私達のこととも忘れないでいただきたいね……」

『ニードルヘッジホッグ！』

起き上がって戦線に戻ってきた轟らの援護が爆豪に加わる。

大量の針と切島のパンチがアナザークウガに突き刺さる。

「これで決めたまえ……」

「分かった！」

ウオズからゲイツに手渡されたのは、デイケイドライドウオッチ。

一度出久がそれを使っている場面を見ていた爆豪は、使い方をすぐに思い出してジク

ウドライバーのD，3スロットにそれを装填する。

『アーマータイム!』

そして、ジクウドライバーを回転させる。

『カメンライド!』

『ディケイド!ディケイド!ディケイド!』

両手の籠手が取れる代わりに、仮面ライダーディケイドを模したアーマーがゲイツの身に取り付けられる。

「祝え!」

「いちいち祝わなくていいわ!とつとと助けんぞ!」

「ああ…次いでだ、あの敵にはこれも有効だ…使うと良いだろう…」

仮面ライダーゲイツ・ディケイドアーマーの誕生に、思わず祝福をしそうであったが注意されてしまい、ウオズは少し寂しそうに俯く。だがすぐに、出久を救うという使命を思い出してクウガライドウオツチを手渡す。

『ファイナルフォームタイム!』

『ク・ク・ク・クウガ!』

クウガ、アメイジングマイティフォームの力を備えた仮面ライダーゲイツ・ディケイドアーマークウガフォームは、再び足からの爆破で飛ぶとアナザークウガが振るつてき

た腕を殴り飛ばす。

「すっげえパワー……」

その様子に切島も感心している。

強化された身体能力により、アナザークウガの4本の腕を寄せ付けなほに拳や蹴りを撃つて対処していく。

「さて、一気に決めるよ……」

「ああ……」

一度地上に降りて来た爆豪にウオズが合図を送る。

『ビヨンド・ザ・タイム!』

『ク・ク・ク・クウガ!』

アナザークウガを打倒して、出久を救い出すために2人はベルトを操作して必殺技を発動する。

『ストーリーーズスラッシュ!』

ウオズが物語のパワーを纏ったファイヤソード・レッカを縦に振るい、アナザークウガの頭部から腰に向けて縦に切り裂くと……

『ファイナルアタックタイムバースト!』

ゲイツが電撃と封印エネルギーを込めた蹴りを、爆破の推進力で強化しながらアナ

ザークウガの胸部に放つ。

「アクウウウ！戻って来やがれッ！」

蹴りを撃ち込まれたアナザーザークウガに、2人の必殺技のエネルギーが流れ込み、身体が光に包まれるのであった…

第16話 魔王と救世主 後編

「……は……？」

アナザークウガに取り込まれてしまった出久が目を覚ます。意識を取り戻した彼は、裸の状態で闇に包まれた空間の中に居た。

『ワンフオーオール！』

その彼の前には、緑色に発光して宙に浮くライドウオッチがあった。

それは、オールマイトから受け継いだ個性が秘められているワンフオーオールウオッチであった。

「このウオッチが僕を……」

出久は直感的に、その力が自分をテイドの闇から守ってくれているのだと感じることができた。

テイドが爆豪との戦闘で本来のアナザークウガ・アルティメットフォームの力を使えなかったのも、このウオッチの力が作用しているからである。

「君が俊典の後継者か。」

その闇の中から一人の女性が浮かび上がってくる。

プロヒーローらしいコスチュームを着ており、露になつて腕はしつかり筋肉が付いているのが分かる。

「あなたはッ…」

「私は志村菜奈。俊典、いや、オールマイトつて言つた方が分かるかしら…？彼の師匠で先代のワンフォーオール継承者さ。」

「オールマイトの師匠!？」

その女性もかつて、オールマイトの様にワンフォーオールを継承してその力を正義のために振るつていた。過去の戦士が何故か出久の前に現れていることに、驚きを隠せていない。

「ああ、ところで君に1つ。聞きたいことがあるんだ…」

「な、なんですか…?？」

「自分の命を失つてでも誰かを助けなくちゃいけないつてなつた時、自分の命と他人の命、どつちを優先する?」

志村からの問いかけに、考える間もなく出久は答えを出した。

「それは勿論、他の人の命です…」

「君ならそう答えると思つたよ。俊典も他の継承者達も皆そうだった…」

出久の答えを聴き、志村は俯きつつ自身の拳を見つめる。

「けど、それだけじゃダメなんだ…誰かが犠牲になり続ける連鎖はもう終わらせないといけない…」

「え…?」

「これを見てみればわかるよ……」

出久の前に映し出されたのは、アナザークウガと戦うウオズや爆豪達の姿であった。

「あの時我が魔王は君を救った!今度は君が彼を助ける番だ…」

「まだだ!まだ俺とタイマン張れんしろ!」

どれだけ攻撃を受けようと、どれだけポロポロになっても、出久を助けようとする彼らの姿…

「かつちゃん!ウオズ君!」

そんな彼らの姿を見て、出久は心配して止めようとするかのように声を漏らす。

自分のために傷ついていく仲間達の姿に、出久は狼狽してしまう。

「彼らも君と同じ、自分を犠牲にしても誰かを助けようとしている者よ。」

「皆も…僕と同じ…?」

ヒーローというのは、他人や大事な人の為なら自分の命を投げ打ってしまう人間だ。

その姿に感動する者も多いだろうが、近い人間ほど心配という感情もより強く抱いてしまう。

「君が誰かのために身体を張れるように、彼らも誰かのために身体を張れる。ただ、君が彼らを心配したのと同じように、君が無茶をすれば彼らや…家族も心配する…」

志村菜奈やこれまでのワンフォーオール継承者もそうであった、身体を張って正義のために戦っていた。周囲の人間に心配を掛けさせ、中には巻き込まないために家族と縁を切ってまで戦いに挑んだ者もいた。

だが、未だに彼らが挑んだ巨悪は倒れていない…

「それでも君は…自分を犠牲にするという答えを選ぶのか…?」

「僕は…」

自分が心配される。そんなことを今まで考えたことが無かった。

幼少期から受けた無個性故の差別、それは彼の中にある自己肯定感という感情を摘み取るのに充分であった。何かの選択肢を与えられた時、出久は自分自身のことを勘定に入れていなかった。

「我が魔王ツ…!」

「俺はツ…!小さい時からアイツをツ…!デクを虐げちまっていた!勝手に見下して!勝手に…プライド折れて!そんな俺でもアイツは救ってくれた!だから俺が今度は救ける番だ!!」

だが今は、彼のことを認めてくれる者が多くいる。

それも出久がジオウだからではなく、彼の行動によって少しずつ惹かれていつてる者達だ。

そんな彼らの姿に、出久の心は揺れ動いていた。

「質問を変えよう。もし、誰かの命を救うために自分の命を捨てなければならなかった時、君ならどうする…?」

自分の命を捨てることも、誰かを見捨てることも、他の人を悲しませてしまう行為になる。

「僕は…選べません…どつちの命も、助けます！僕が居ること救われる人がいるなら…僕は立ち続けます！けど、その道の中で誰も見捨てません！」

「その答えを待ってたよ。今の君にはこの力、使いこなせるだろうね。」

その時、出久の胸が光を放ちジオウライドウォッチに似た新たなライドウォッチを作り出した。

「それは君の誰かを助けるといふ選択肢。そしてこれは、君が生き続ける選択肢さ。」

志村からも黒と金の時計の様なものを渡される。

『ジオウⅡ!』

その2つのライドウォッチが組み合わさり、「ジオウⅡ」に変身するためのライドウォッチとなる。

「行つて来い、友達が待つてるぞ！」

「はいー！」

出久はその闇の中から消え、志村菜奈…いや、ワンフォーオール of 歴代継承者達はその出久を見守るのであった。

「まだ…倒し切れないか…」

「ああ、どれだけお前らが力を手にしよう！俺には勝てない！」

アナザークウガ・アルティメットフォームの防御力はかなり高く、ウオズとゲイツの必殺技を喰らつても、多少のダメージを体に残しながらも雄英生達に立ちはだかる。

「だったら…もっぺんやるだけだ！」

ウオズ達の方は肩で息をしよう程疲労とダメージが身体に蓄積しているが、まだ出久が解放されずに敵が立ち続けるのであれば、自分達戦い続けるつもりだ。

『ジオウⅡ！』

「ぐあああッ…！」

その時不思議なことが起こった。

アナザークウガの身体が突如光始めて、その中からライドウォッチの起動音が鳴る。

『ライダータイム!』

その時、アナザークウガの胸部にある生体装甲が開いて穴が開き、その中から金と銀が混じった高級腕時計のような装甲を纏う戦士の姿が現れる。

『仮面ライダー!ライダー!』

「我が魔王…」

身体が爆発を起こしながら、アナザークウガは再びティードの姿に戻ってしまう。

その姿に、ウオズは“魔王”が返ってきたと確信した。

『ジオウ・ジオウ・ジオウ!II!』

「おせーよ、いつまで待たせんだよ…」

「ごめん、それにありがとう…皆…」

戻ってきた緑谷出久、改め仮面ライダージオウII

自分を助けようと奮闘してくれたクラスメイト達に感謝して頭を下げる。

「気にするな…それより、やるべきことがあるだろう…?」

「そうだね…」

ウオズの言葉にジオウは強く頷く。自分を認めてくれる友の一人、彼のやりたいことを察すればその思いをすぐに汲み取る。

「王の凱旋である！祝え！全ライダーを凌駕し、時空を超え、過去と未来を知ろしめす時の王者！その名も仮面ライダージオウⅡ！新たな歴史の幕が開きし瞬間である！」

「いつまで茶番を続ける気だ！」

『クウガ…』

だが、出久を失ったティードにはまだ執念があるようで、アナザークウガオッチを起動して足を引きずりながら立ち上がる。

「脳無！何を眠っている！とつとと起きろ！」

そして、起動したアナザーウオッチを地面に倒れ伏す脳無の肉体に埋め込み、彼と脳無の身体は禍々しい闇に包まれる。

「ウオオオオオオ!!!」

そしてその闇は再び、アナザークウガ・アルティメットフォームへと形を変える。姿を変えた彼はすぐに、ライダー達に向けて口から破壊光線を放つ。

「祝福を邪魔するとは…ここで潰してくれよう…」

「俺らの手、煩わせやがって…とつととくたばらせたるわ！」

「うん、3人共いこう！」

身体にダメージが溜まっている切島と轟は一時的に身を引き、ウオズ、ゲイツ、ジオウⅡの3ライダーがアナザークウガと対峙する。

『ジカンギレード!』

『サイキョーギレード!』

次々と繰り出されるアナザークウガの4本の腕を、ジオウはジカンギレードと新たに手にしたサイキョーギレードの二刀流で防ぎつつ関節部に刃を突き立てて着実にダメージを与える。

「さあ、次はこれを使うと良いだろう…」

「ああ…」

『フォーゼ!』

ゲイツがウオズから受け取ったフォーゼライドウォッチを、ベルトに取り付けられたデイケイドライドウォッチのスロットに装填する。

『ファイナルフォームタイム!』

『フォ・フォ・フォ・フォーゼ!』

フォーゼ・エレキステイツのスーツを纏い、右手には電撃武器“ビリーザロッド”を装備した仮面ライダーゲイツ・デイケイドアーマーフォームに姿を変える。

「ハアツ!」

ビリーザロッドから撃たれた電磁ネットが、アナザークウガの巨体を上から覆って身動きを封じる。

『投影！フューチャータイム！』

『プログラムズ！』

『フューチャーリングゼロワン！ゼロワン！』

仮面ライダーオズ・フューチャーリングゼロワンがこの場に再臨し、彼が召喚した5種類の生物のライダモデル達が一気にアナザークウガに群がっていく。

上手く体を動かせないのに、各方向からライダモデル達の爪や顎による攻撃を受けてダメージを与えられていく。

「さあ、我が魔王…今こそ決める時です！」

「うん！」

『サイキョージカンギレード！』

ジオウは自身を持つ2本の剣を合体させ、サイキョージカンギレードにするとその剣を2度振るい、放たれた斬撃でアナザークウガの腕を2本切り落とす。

『ジオウサイキョウ！』

そして、トドメを刺そうとサイキョージカンギレードに付いたジオウの仮面状のパーツであるギレードギャリバーを動かして、「ジオウサイキョウ」の文字を仮面の眼の部分に表示させる。

『サイキョーフィニッシュタイム！』

『キンググーギリギリスラッシュユ!!』

ピンクで”ジオウサイキョウ”と書かれた金色のエネルギー刃が剣から伸び、その巨大な黄金の斬撃をアナザークウガ・アルティメットフォームに向けて降り降ろす。

「ぐあああ!!」

その一撃で敵を一刀両断し、アナザークウガを倒した筈だった：

「こ、この力はッ!」

だが、爆炎に包まれるアナザークウガの身体は回復していつており、先程切り落とされた腕も再生されてしまっている。

「なんで回復してんだ!?!」

「恐らく、先程吸収した怪人の力だね。あれは超再生の力を持っている。恐らくその力がアナザークウガに宿ってしまった様だ…」

ティードがアナザークウガ・アルティメットフォームに姿を変えた際に吸収した怪人、脳無。

この怪人は”ショック吸収”と”超再生”の2つの個性を持っており対オールマイト用に作られていた。

それらの個性がアナザークウガの新たな能力ちからとなり、キングギリギリスラッシュを受けてしまったその肉体を復活させてしまったのだ。

「何度も起きやがって…鬱陶しい！」

「私に良い考えがある。我が魔王、ジオウⅡの力を使ってみたまえ…」

「こうかな…?」

すると、頭部にある時計の針を模した“プレセデンスブレード”に取り付けられている、長針センサー“バリオンプレセデンス”が回転し、ウォッチのD，9サイドが発光する。

その時ジオウⅡに変身する出久は、これから起こりうる未来というものを観測する。

「この方法なら…いける！」

その中から、出久はアナザークウガを倒せる未来を見つけ出して、そこで自身が行うべき行動を実行に移していく。

「かつちゃん！ライドヘイセイバー貸して！」

「お、おう、これか…?」

ゲイツはディケイドアーマーの専用武器であるライドヘイセイバーを手渡し、ジオウは受け取ったその剣にあるライドウォッチを装填する。

『ワンフォーオール！』

「そのウォッチは…!?!」

その使用されたライドウォッチはオールマイトから受け取った個性“ワンフォー

「オール」の力が秘められたものであった…

「今なら…使える!」

そのウオツチはこれまで、起動することすらできなかった。

だが過去の継承者に認められ、そのウオツチはライドオンスターターを押されてその個性の名を発した。

「何を(ご)ちや(ご)ちやと!」

「邪魔はさせないよ!」

そんなジオウらを妨害しようと迫り来る、アナザークウガ・アルティメットフォーム。だが彼に向けてライダーモデル達が次々と喰らいついていき、その侵攻を止める。それを援護するようにゲイツもビリーザロッドから電光弾を撃つてダメージを与えていく。

『フィニッシュタイム!』

2人が隙を作ってくれた間に、ライドヘイセイバーとワンフォーオールライドウオツチによる必殺攻撃の準備を行う。剣に付いた時計の針を三度回転させ…

『ヘイ! 仮面ライダーズ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘヘヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ!』

待機音と共にその刀身はワンフォーオールの虹色の光を纏い、20人の平成仮面ライダー達の力を秘めたカード型エネルギーが取り込まれていく。その影響で光はさらに

大きくなり、巨大な刃となる。

『ワンフオーオール!』

出久がその剣を振り下ろすと、巨大な虹色の光を放つエネルギー刃が放たれてアナザークウガに迫っていく。

「な、何イ!？」

ライドモデル達がアナザークウガを拘束し、迫るエネルギー刃が確実に当たるように援護する。

その刃は敵に近付くにつれて大きさが増していき、アナザークウガの身がその光に切られるのではなく呑み込まれてしまう。

「まだだ!まだ終わらない!」

光に呑み込まれたアナザークウガは、その内部のエネルギーをその身に受けてダメージを受けていくが脳無から吸収した個性で体を回復させていく。

「グアツ!…な、何故だ!」

だが、ライドハイセイバーから放たれたエネルギーの量は圧倒的であった。

再生していくアナザークウガの4本の腕や生体装甲が次々と破壊され、再生が追いつかなくなったアナザークウガは受けるダメージに耐えきれず爆発四散。

「素晴らしいです。我が魔王!」

地面にティード、脳無、そしてアナザークウガウオッチが転がる。

「こんな……ところで……」

ティードがアナザークウガウオッチに手を伸ばすが、そのウオッチも火花を散らして砕け散ってしまう。

「私 came!」

その時丁度、救援として呼ばれていたオールマイトがUSJに現れた。

「もう終わりましたよ。オールマイト……」

「なんだって!?!」

「一先ず、警察も呼んでおいて下さい。彼らをさっさと豚箱に押し込みましょう。」

ライダー達は各々変身を解除し、ウオズはマフラーでティードを縛って拘束しておく。

「つか、さっきのデクの技。何だったんだ……」

「そ、それは! その……」

爆豪は先程出久が使ったライドウオッチのことが気になり、出久に問いかけるが手に入れた経緯も経緯なので狼狽してしまう。

「そこも含めて、また話し合わなければならぬ……君がライダーになったことも含めて。」

「そうだね…ちゃんと話し合わないといけないことは多いし…」

爆豪が仮面ライダーになったこと、ワンフォーオールライドウオッチの存在。

そこも含めて雄英の人々と話さなければならぬと感じる出久とウオズ。

だが今は、クラスメイト達の無事を喜びながら、一先ずは家路に付いて家族に自分の無事を報告することを優先するのであった…

体育祭編

第17話 迫る大会

オーマシヨツカーによるUSJ襲撃から数日：

事件当日から数日間は臨時休校機関が続いていたが、その期間も開けて出久達は久々の友人との再会を喜んでいた。

「皆ー！！朝のHRが始まる。席につけー！！」

久々の朝のHRを前に、飯田は気合十分でクラスメイト達の着席するように指示を出しているが…

「ついでるよ。ついてねーのおめーだけだ。」

なお、飯田以外全員が着席しており、彼の行動は無駄になってしまった。

（しかしながら、相澤先生はこの前の戦いで重傷を負っている。今日は大丈夫なのだろうか…？）

さて、USJでの事件で彼らの担任相澤は重傷を負ってしまっており、本日復帰してくるかどうかすら分からない彼のことを皆心配している。

彼自身が来るのか、代理の教師が来るのか。

そんな考えを巡らせながら生徒達は開くドアに注目する。

「おはよう」

「相澤先生復帰早えええ!!!」

彼の怪我の心配は無用であった。

教室に入ってきたのは正しく彼らの担任である相澤であった。

「先生！無事だったんですね！」

「無事言うんかなあ、アレ……」

なお、包帯でグルグル巻きだが……

「俺の安否はどうでもいい。それに戦いはまだ終わってない」

「戦い?」

「まさか……?」

「また、ヴィランがあああああ!」

相澤が語る「戦い」という言葉を聞いて教室内に緊張感が走る。

「雄英体育祭が迫ってる!」

「クソ学校ほいの来たー!!!」

その戦いとは雄英体育祭。

毎年雄英高校で行われる体育祭であり、超常世界において衰退したオリンピック等の

スポーツイベントに変わって世間的に注目されているスポーツイベントだ。

「待て待て！ヴィランに侵入されたばっかなのに大丈夫なんですか!？」

生徒達にとっては自身の強さをアピールできる場であり、胸躍るイベントではあるが

：

ヴィランに襲撃された直後で開催することを心配する者もいる。

「逆に開催することで、雄英の危機管理体制が盤石だと示す、って考えらしい。何より雄英の体育祭は……最大のチャンス。ヴィランごときで中止していい催しじゃない」

だが、これは雄英にとっては良い機会ではあった。

新たに強化された警備体制をアピールすることができるうえ、かつての甲子園の様に高校生達がプロヒーローに自身の实力を示せる場である。

（我が魔王の……いいや、私達の晴れ舞台だ。そうそう簡単に潰れて欲しくはないところだね。）

各々が体育祭に向けて気合を入れていく。

それはウオズとて例外ではなかった。

彼自身、出久を立てるだけでなく自分もライバルとなり彼らと相対す覚悟はできている。
その日に備えていくのであった：

さて、今日は中々に濃い一日であった。

昼休みには麗日君の胸の内に秘めた思いを聞き、この後はオールマイトと話すことになった。

「すまないね。相澤君は未だ療養中なので今日は私が対応させてもらうよ。」

放課後、私と我が魔王、そして爆豪君はオールマイトと共に仮眠室に居た。

目の前にいるオールマイトは今マッスルフォームに変身中だ。

「で、何で俺は呼ばれてんだ？」

「ああ、先日君も気にしていただろう？例のライドウオッチのことを…一先ず爆豪君にも話す必要がある。オールマイト、あなたも真の姿を晒す時だ…」

「ああ、彼にも伝えなくてはいけないか…」

「うん、かつちゃんも僕達と同じ仮面ライダーで、僕の大事な友達だから…」

「わかった。」

オールマイトは私の指示に従ってマッスルフォームを解除し、トウルーフフォームの姿を見せる。

「オールマイト!?!」

「今まで隠していてすまない。これが私の真の姿なんだ…」

それからオールマイトは、自身が力を失いつつあることや過去の戦いで体が弱っていることを爆豪君に説明した。そして、自身の個性が継承されてきたものであることと、その後継者に我が魔王を選んだことを…

「そうだったのか…」

「隠していてすまない。だが、このことは他の皆には黙っていてくれ。」

「ああ、分かった…」

あの日から爆豪君はかなり聞き分けが良くなった。

我が魔王がオールマイトから個性を引き継いだことを認め、そう言った秘密を周囲に言わないと了承までしてくれた。恐らく彼なりに「以前の自分であれば継承するのに相応しくない」ということも心の中で理解してしまっているのだろう。

「で、その個性を受け継いだ結果ってのがこの前の…」

「うん、ワンフォーオールライドウォッチだよ。どんどん強力になってきてるこの個性を安全な器で受け入れたのが、このウォッチなんだ。」

「器…? テメエの身体で直接継承じゃダメだったんか…?」

爆豪君は今の魔王を認めているからこそ一つの疑問が頭に浮かんでいた。

それは何故、継承した個性を緑谷出久自身の肉体ではなくライドウオツチに落とし込んだかだ。

「ジオウの力の強さなら君達も良く理解しているだろう…多くの仮面ライダー達の力が我が魔王の中にある。そんな力と強力な個性“ワンフォーオール”の両方を持った時、干渉したりすれば何が起こるか…それらが組み合わさってどんな力が生まれるか…それこそ先日アナザークウガを倒した時と同じ、いや、それ以上のパワーだろうね…さすがの我が魔王でも耐えきれるか…」

「うん、あの力を使った後、疲労感も凄かったし改めてワンフォーオールの力の強さを実感したよ…ジオウの力と併用するのはまだ危険だよ…」

「なるほどな、だからライドウオツチに入れといたってことか…」

「うん、使えたのはこの前が初めてだけだね…」

アナザークウガを倒したライドヘイセイバーとワンフォーオールライドウオツチの組み合わせはかなり強力な力を秘めている。もし、ワンフォーオールの力を直接我が魔王の身体に入れていたらかなり強くなっていた半面、身体への負担もかなり大きかっただろう…

起動できたのもこの前がやっとだったし…かなり扱いにくかっただろう…

「これで一先ず、オールマイトの個性…ワンフォーオールに関する事情は分かってくれ

「たかな?」

「まあな、事情は大体わかったし…今後使いこなせるようにしねえとな…」

「そうだね…うん、しっかり使いこなせるように僕ももつと強くなるよ!」

そう言つて我が魔王はワンフォーオールライドウォッチを握りしめ、強い眼差しで見つめている。

「さて、次はゲイツの力について話さなければならぬな…」

先程までは爆豪君に対しての説明をしていたが、今度は私達が雄英陣に爆豪君の新しい力について話す時だ。

「ああ、私も気になっていたんだ。何故、爆豪少年も仮面ライダーになつてしまつたんだ…?」

私自身、こうなるだろうと思つていたが、やはり爆豪君が“我が魔王と似た力”を得たことに関してオールマイトや雄英教師陣、いや、クラスメイト達でも疑問を感じてしまふだろう…

「2人にも既に仮面ライダーのことは説明しているが、爆豪君がこの力を得た理由は”ジオウの力を持つ我が魔王に近しいから”としか言えないね。」

ジオウの近くにゲイツあり。

それは以前、私に使命を託したオーマジオウが言つていたことだ…

ジオウの力を持つ者に近い人間にゲイツの力が宿る。そういう運命だったのだらうね。

「この力についてはよく分かった…けど、どうすんだ？他の奴らには隠し通せねえだろ？」

「うん、まずは相澤先生にどう説明すれば良いのか…」

「私に良い考えがある。」

まずは相澤先生を納得させることが最優先。

彼に文句を言わせないような説明さえできれば、他の者にも何とか爆豪君の仮面ライダーの力に関して納得させることができる。

そして私は、ある理由付けを思いついた。

「我が魔王の個性として扱われているジオウの力はかなり強力。その個性が近い人間である爆豪君にも影響を及ぼしたと説明するのはどうだろう？」

「ウム…確かに、そんな規格外の事態も領けるほど緑谷少年の力は規格外だ。他の者にまで仮面ライダーの力を与えてしまったとなってもおかしくはないかも知れないな…私のワンフオーオールとて、他人に継承していく規格外の個性だしな。」

私の出した答えにオールマイトだけでなく、我が魔王も領いている。

「これで良いかな？爆豪君？」

「ああ、つーかこれってデクとかの力ってことになっちまうんか…?」

「いいや、この力はもはや君の物さ。ライダーの力に選ばれ、自身の個性に順応させたただけでなく、見事に使いこなしてみせた…君の個性の一部になったと言っても過言は無いだろう。」

彼の変身した仮面ライダーゲイツ。その姿は彼自身の個性に順応したものに變化していた…

その進化はまさにゲイツと爆豪君自身が、それぞれ順応して結合し合った形と言えるだろう。

「つまりかつちゃんも入試とか、体育祭みたいにサポートアイテム使っちゃダメな時も仮面ライダーになって良いってこと?」

「その通りさ。」

「良いのかよ!?俺も今度の体育祭とかでこれ使っちゃまって…」

自分の想定よりも力を使っていいと言われ、爆豪君自身は少し戸惑っているようだ。

「勿論。後これ、ウオズ君と僕も持つてるんだけどかつちゃんも使って。」

そう言っつて我が魔王は彼にファイズフォンXを手渡す。

「これは…?」

「これはファイズフォンX、この中に平成ライダー達のライドウォッチが入ってるから

ね。戦う時にこの中から選んで使っても良いよ。」

ファイズフォンX内のアプリを使えばどこからでもライドウオッチを手元に呼び出せるようになっていて。これで、我々はウオッチの共有をすることが可能になった。

「ありがとな…」

「ああ、これで我ら3人雄英体育祭で良い活躍ができるだろうね。」

体育祭で3人のライダーの活躍を世間に知らしめられるだろう…

それこそオーマシヨッカーの様な巨悪に、私達の力をアピールして彼らの悪事を抑止してみせよう。

「ウム、一先ず爆豪少年と仮面ライダーの関係性は私から校長や相澤君に伝えておこう。

一先ず3人の体育祭での健闘を祈っているよ。」

「「はい！／ああ！／ええ！」」

体育祭では我が魔王も、爆豪君も、そして私自身も一番になり力を示す。

そのことを目指し、万全の準備を進めていく。

来る体育祭の日、仮面ライダーによる最高の戦いをお見せするでしょう…

第18話 開幕

時は流れて5月の上旬

各々が特訓を行いこの日に備えてきた。

そう、雄英体育祭の日である。普段は生徒や教師、学校関係者だけが立ち入る土地の中には一般の客やプロヒーロー、マスコミなどが立ち入っている。雄英内にある3つのスタジアムではそれぞれ1年生、2年生、3年生の競技が行われる予定だ。

例年は3年のステージに多くの客が集まるのだが、今年は1年ステージの方に注目が集まっている。

「あーあ、コスチューム着たかったな〜」

「公平を期すため、着用不可なんだよね。」

今回の体育祭では、ヒーロー科は全員体操服での参加が義務付けられている。

あくまでも、個性や知能、身体能力など己の力を競い合う場であるためそう言ったルール付けがされている。

因みに、オールマイトの働き掛けも上手くいき、出久とウオズだけでなく爆豪も仮面ライダーの力を使つての参戦が可能となった。

「緑谷、爆豪、魚津…」

競技に向けて気持ちを整えているライダー陣3人に、轟が声をかける。

「轟君…？何？」

「お前ら、オールマイトに目えかけられてるよな。別にそこ詮索するつもりはねえが、俺は大人しく負ける気はねえ。」

「推薦入学者が宣戦布告!？」

出久達ほどではないが、強力な個性で実力を示してきた推薦入学者の轟。

彼は突如ライダー3人に宣戦布告してみせた。

「おいおいおい、急に喧嘩腰でどうした!?!直前だろ!？」

「仲良しごっこじゃねえんだ…なんだって良いだろ…」

一通り言いたいことを言った轟は、彼らから離れていく。

「まあ、今日ここに来る多くの者が自分の中に熱い思いを秘めて来ているのは私自身、よく分かってるよ。クラス内だけでなく他の科の者にそういう人間がいるのも知ってるさ。」

今日に至るまでにクラスメイトの麗日の内に秘めたる思いを聞いたという出来事もあった。普通科からヒーロー科に昇格しようとしている、心操という生徒からA組に対して宣戦布告をされたこともあった。

そしてウオズ自身も、U S Jで決意したように出久の横に立つためにこの日は彼に挑もうとしていた。

「私とて、今日の狙いは一位の座だ。我が魔王にも挑戦させてもらおうよ。」

ウオズの言葉に出久と爆豪は静かに頷く。

爆豪も今日は出久に負ける気もないし、出久も2人と全力で競い合うことを望んでいる。

「だからこそ、君も”全力”で来ると良いさ。楽しみにしてるよ……」

しかしながら、轟も熱い思いは持っているが未だに彼自身の左側炎の個性を使おうとしていない。この場での全力の戦いにおいて、それが使われるのをウオズも待っている。

「僕達も負ける気はないよ。全力で競い合おう！」

ウオズの言葉にはあまり納得していないようにも見えた轟だが、出久のアンサーに対しては大人しく首を縦に振る。

「みんなー！そろそろ入場だ！ゲートの方に向いたまえー！」

そして、飯田の指示でA組一同入場口に向かうのであった。

『雄英体育祭！ヒーローの卵達が我こそはと鎬を削る、年に一度の大バトルッ！てゆーか、どうせテメーらアレだろ!? コイツ等だろ!? ヴィランの襲撃を受けたにも拘らず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!! ヒーロー科ッ！1年ッ！A組だろおおおおおッ!?!』

いよいよ、雄英体育祭の開始時刻を迎えて、プレゼントマイクのパフォーマンスと共に1年A組のメンバーが入場してくる。

彼ら目当てで来ている客も多く、彼らの入場と共に歓声上がる。

『さあ、話題性では後れをとっちゃいるが、こちらも実力者揃いだあッ！1年ッ！B組イッ！』

それについてヒーロー科のもう1つのクラスであるB組、普通科、サポート科、経営科が呼び出されて行ってスタジアムに入場してくる。

「選手宣誓！」

全生徒が入場を終えると、主審のミッドナイトが台の上に立つ。

「ミッドナイト先生！なんちゅー格好だ！」

「流石18禁ヒーロー」

「18禁なのに高校に居てもいいのか…」

「良い！」

18禁ヒーローの登場に客席だけでなく、男子生徒達がザワザワして頬をピンク色に染める。

「静かにしなさい！選手宣誓！――A！緑谷出久！」

「は、はいッ……！」

選手宣誓は入試トップの出久が行うことになっているのだが、彼は緊張で震えながらゆっくりと台の上へ上がっていく。

「せ、宣誓！僕達は！スポーツマンシップに則り！正々堂々戦うことを誓います！」

（（普通だ……！））

特に盛り上がることもなく、無難に宣誓を終えて出久は台から降りていく。

「……は王らしく、もっと何か言っても良かったと思うのだが……」

「緊張で何も出てこなかった……」

戻ってきたウオズに声を掛けられ……少し安心したような表情を見せる。

「さーて、それじゃあ第1種目行きましょう。いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者がティア・ドリク涙を呑む……さて運命の第1種目!!今年は……コレ!!」

「障害物競走ッ……！」

「計1ークラス全員参加のレースよ！コースはこのスタジアムの外周約4km！」

最初の競技は障害物競走。この競技は予選でもあり合計1ークラスの生徒から43

人に一気に絞り込んでいく。コースはスタジアムを出てから、屋外を一周してまたスタジアムに戻るというものだ。

「我が校は自由が売り文句！コースを守れば何をしたって構わないわ！さあさあ、位置に付きまくりなさい！」

ただしそのコース上で何があるか分からない。

生徒達はミッドナイトの指示で各々位置についていく。

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

『ウオズ！』

そんな中3人はライドウォッチを起動しながら位置についていく。

「変身！」

『ライダータイム！』

『投影！フューチャータイム！』

『仮面ライダージオウ！』

『仮面ライダーゲイツ！』

『スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

ジオウ、ゲイツ、ウオズの3ライダーがその場に立つと、他の生徒や観客からの視線

が一気に集まる。

「何だよアイツら！」

「変身した!？」

「スッゲー！」

3人が位置につくのと共に、ミッドナイトによって開始の合図が為される。
「スタート！」

そのミッドナイトの一声と共に、生徒達は一気に走り始める。

『さあて！実況していくぜ！解説Are you ready? ミイラマン！』
『無理矢理呼んだんだろうが…』

その様子を見ながら、放送席のプレゼントマイクと相澤先生が実況・解説を始める。

『っーか、A組連中速すぎんだろ！』

スタジオムから外周に抜けていく出入口。

そこには多くの生徒が集まってきていたが、そこを圧倒的な走力を誇るライダー3人が先に抜けていくがそれよりも先には1人の男が居た。地面を凍らせて突き進んでいく1人の男子生徒…

『現在1位は轟！誰よりも先にスタジオムから出た！』

それは轟焦凍であった。

「厄介なことになったね…」

地面が氷に覆われて下手に走れば足を滑らすか、さらに広がる冷気に足を凍らせられてしまう恐れもある。

3人は地面から足を離して移動しようと考えた。

「だったら…ってあれ？」

その為にも空を飛んでいこうと、ファイズフォンXからフォーゼライドウォッチを取り出そうとした出久だったが、何故か取り出すことができなかった。

『フォーゼ！』

「先にいくぜ…」

先に爆豪がフォーゼウォッチを手にしており、起動して自身のジクウドライバーに装着していた。

『アーマータイム！』

『3・2・1！』

『フォーゼ！』

仮面ライダーゲイツ・フォーゼアーマーは両腕のブースターで飛び、コースを進み始める。

「だったら僕は！」

『龍騎!』

先にフオーゼウオッチを取られてしまった出久だが、すぐに龍騎ウオッチを選んで起動させる。

『アーマータイム!』

『アドベント!』

『龍騎!』

仮面ライダージオウ・龍騎アーマーに姿を変えると、赤き龍ドラグレッダーを呼び出してそれに乗って低空飛行状態で突き進んでいく。

「私の新しい力もお見せするのでしょうか…」

『リバイス!』

そんな2人に続いてウオズもUSJでの戦いで手に入れた、新しいミライドウオッチを起動する。

『投影!フューチャータイム!』

『バディアップ!』

『リバイス!』

リバイとバイス、2人の仮面ライダーの力を組み合わせた新たな鎧を纏う新形態がスタジアムのスクリーンに映し出される。

「祝え！令和の歴史を継承し、新たな歴史を歩む預言者！その名も仮面ライダーウオズ・フューチャーリンググリバイス！その雄姿、この雄英体育祭にてくと味わうがいい！」

仮面ライダーウオズ・フューチャーリンググリバイスの君臨と共に、肩部のアーマーからマゼンタとシアンの入り混じったボディと、Tレックスの頭部を模したフロント部を併せ持つバイクが飛び出してくる。そのバイクの名はバーストライカー、古代生物のゲノムを秘めたウオズ専用マシンである。

『プテラー！』

ウオズがバイクのフロント部についた、ゲノムナビを操作するとバーストライカーに秘められたプテラノドンのゲノムが具現化すると4枚のプロペラがドローンのように展開する。プテラノドンの頭部を模したフロントを持つホバーバイクに変化して、その上に跨る。

「二気にいこうか。」

ホバーバイクが浮上し、凍ってしまった地面から飛び立つ。

それぞれの手段で空を飛ぶ、ジオウ、ゲイツ、ウオズ。

彼らが先頭争いに名乗り出ていき、熾烈な争いが繰り広げられていく。

轟やその他のA組生徒によるレベルの高いレースを繰り広げていく中、最初の関門が彼らの前に立ちはだかるのであった：

第19話 障害物競走

遂に始まった雄英体育祭の第一種目、それは障害物競走であった。

『先頭争いを繰り広げているのは轟と爆豪！そこに緑谷と…なんだ!?バイクに乗ったウオズまで参戦だ！』

序盤から先頭争いを繰り広げているのは、氷結を上手く繰り出して前進していく轟、両腕のブースターと足から放つ爆破の推進力で進んでいくゲイツ・フォーゼアーマー、ドラグレッツダーに乗って飛んでいるジオウ・龍騎アーマー、そして、バイストライカー プテラモードに乗るウオズ・フューチャーリングリバイスである。

『おっとここで最初の障害物だ！第一関門！ロボ・インフェルノだ！』

「あれって、入試の…」

「一般入試用の仮想敵って奴か…」

スタジアムの外周を進んでいく雄英生達の前に、最初の障害物が立ちはだかる。

それは以前の雄英入試で彼らと相對した仮想敵で、あの時OPだった巨大仮想敵も複数台配備されている。

多くの者の脅威となった彼らが、再び生徒達の前に立ちはだかる。

「折角ならもつとスゲエの用意してくれねえかな…」

その内一体が先頭にいる轟に拳を振り下ろそうとしたその時、彼は右手を地面に突き当てて、冷気を解き放った。地面は一気に氷に覆われていく。

「クソ親父が見てるんだから…」

その腕を仮想敵に向けて振るうと、先頭に居た仮想敵の身体が一瞬にして大量の氷に包まれて一つの大氷塊と化す。

凍らせた敵の股下を通り再び彼は前に進んでいく。

「あそこ通れるぞー！」

「やめとけ、不安定な体制で凍らしたからな。倒れるぞ…」

凍ってしまった仮想敵の身体は崩れ落ち、後続の進行を妨害するだけの瓦礫と化す。

『I—A轟！攻撃と妨害を同時に！コイツはシビイ！』

『合理的な戦いだ。だが、あいつらを止めるには至ってないがな…』

「空にいるから！俺には関係ねえ！」

あくまでも轟が妨害できたのは地面に足を付けたライバル達だけであり、空を飛んで移動している者達の妨害はし切れていなかった。

「オラア！」

ゲイツは両腕のブースターで加速しつつ、その勢いで前足を突き出して巨大仮想敵の

頭部に突き進む。ブースターの推進力が加わったキックを受けた仮想敵の首が折れ、動けなくなつたその巨体も地面に倒れ伏す。

『A組爆豪も仮想敵を撃破！そのまま轟を追撃だ！』

「僕だつて…」

さらに、ドラグレッダーに乗ったジオウも彼に続く。

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディケイド！ディケイド！ディケイドー！』

地面に降り立ったジオウはディケイドアーマーをその身に纏い、複数の仮想敵と対峙。

『アギトー！』

『ファイナルフォームタイム！』

『ア・ア・ア・アギト！』

仮面ライダーアギト・トリニティフォームの力をその身に具現化させた仮面ライダージオウ・ディケイドアーマーアギトフォーム。その武器であるストームハルバードとフレイムセイバーを構えると…

「ハアッ！」

それぞれを振るい、強風と炎を纏った斬撃を周囲の仮想敵に放つ。

『A組緑谷！一気に5体倒した！恐るべき破壊力だ！』

「まだまだ、かつちゃん達に追いつかないと。」

『ブレイド！』

『ファイナルフォームタイム！』

『ブ・ブ・ブ・ブレイド！』

敵を倒したジオウは、少し遅れを取ってしまったために開いた差を埋めるためにさらに進んでいく。

その為にディケイドアーマー・ブレイドフォームに姿を変えてブレイド・ジャックフォームが持つイーグルの羽を背中から生やし、再び飛翔して彼らを追う。

「チョロいですわ。」

「良い援護だ…」

各々が仮想敵と相対し、八百万も自身が創造した大砲で巨大敵達を倒していく。その間にバイストライカーに乗ったウオズもエリアを突き進んでいく。

『おいおい第一関門チョロいってよ！じゃあ、第二関門どうだ？』

既に先頭集団は次の障害物に辿り着いていた。

『落ちればアウト！それが嫌なら這いずりな！ザ・フォール！』

端的に言えば大胆な綱渡りの様な障害物である。地面に掘られた大穴と幾つかの残された足場。

それらを繋いでいるのは僅かなロープだけだ。

「こうなりや俺の独壇場だ！」

「いいや、僕達だね……」

ロープを凍らせてその上を滑っていく轟。

だが、そんな彼をゲイツとジオウが追い抜いた。

特に足からの爆破でさらに加速していくゲイツが現在トップを走っている。

『爆豪と緑谷が轟を追い抜いた！さらに魚津も続いていく！』

空を飛んでいる者が優位に進めていけるこの障害物。

各々の手段で飛んでいるライダー3人が先に関門を突破していく。

「……ッ！」

轟も彼らに続いてザ・フォールのエリアを抜け出す。

それと同時に右腕を振るい、氷結を空中に向けて撃つて冰山を作り出す。

その冰山を避けようとした3人の起動が逸れて、スピードが少し下がってしまう。

その間に轟は地面を滑って加速し喰らいついていく。

『A組の4人が先頭争いを来る広げる！そんな中迎えるは最終関門！一面地雷原！よく

見りや分かるようになってるから目と足酷使しろ！」

最後の障害物は地面に埋まった地雷。

本物の爆弾ではないが音と光、それに爆風で踏んでしまった挑戦者を妨害する仕組みになっている。

地面の一部が土の色が変わっており、そこが地面を掘って地雷を置いた後に埋め直した跡であることが分かる。

「後続に道を作ることになっちまうが……」

既にライバルは空中にあり、地雷を残しても妨害にはならない。

そのことが分かってしまった轟は、後続にとつては地雷の意味がなくなってしまうことを致し方ないと思い、地面を凍らせてその上を滑っていく。

「道を作ってくれて助かるよ……」

第三関門の開始地点から終端地点までを凍らせた轟。

彼が作ってしまった氷の道は轟だけでなく、多くの生徒が通ることができる。

それはウオズとて例外ではない……

『レックス！』

バイストライカーをレックスモードの変化させ、通常のバイク形態にするとその2つのタイヤで氷上を走り抜けていく。

『魚津がトップに躍り出た!』

ホバーバイク状態よりもスピードが出やすい通常のバイク形態は、他の3人を超えるスピードで突き進んでいく。

「そうはさせねえぜ!」

爆豪が猛迫するが、ブースターと爆破の推進力でもバイストライカーの速度に追いつけない。

「流石、皆速いッ…けど、僕だって負ける気はないよ。」

ウオズとゲイツは徐々に轟やジオウとの差を広げていく。

『爆豪猛迫!このままトップは2人に絞られるか!』

流石に第一種目の一位通過はウオズか爆豪になるだろう。

プロヒーロー含むオーディエンスや関係者らはそう感じていたが…

『ファイズ!』

一度地面に降り立ったジオウは作戦を変更し、一気にトップに躍り出ようとしていた。

『ファイナルフォームタイム!』

『ファ・ファ・ファ・ファイズ!』

ファイズ・アクセルフォームの力をその身に宿す、仮面ライダージオウ・ディケイド

アーマーファイズフォーム。彼はゴール地点を見据えると、デイケイドライドウオツチのボタンを押す。

『ファイナルアタックタイムブ레이크!』

すると、ジオウの身体が赤く発光したかと思えばこの場に居る者達の前から姿を消した。

『おっと!? 緑谷の姿が消えた!? どこに行ったんだ!』

『マイク、ゴールんとこ見てみる…』

そう言つて解説席の相澤がスタジアム内のゴール付近を指さす。

「これで…タイムアウトだ…」

スタジアム外周の第三関門内に居たジオウの姿が見えなくなつてから、僅か10秒。

ジオウはゴールテープ付近に再び姿を現した。

『いつの間に居たんだよ!? なんだ? ワープか!』

『いや、超高速でここまで走り抜けたんだろ。その証拠に見てみる、足跡は残ってる。』
未だ誰も踏んでいないコース上には幾つものジオウの足跡があり、しっかりと走り抜けていたことが推察される。

『よくわかんねえけど、A組緑谷! 一位でゴールだ!』

「よしー!」

最初の競技からいきなり一番速くゴールに辿り着くという結果を叩き出した出久は、思わずガッツポーズをする。

「素晴らしいよ。我が魔王……」

続いてバイクで走り抜けたウオズ。

「俺も使つときや良かったか……」

あまりアーマータイムの扱いに慣れていないものの、フォーゼアーマーの力を使いこなしたゲイツがそれぞれゴールに辿り着く。

「お疲れ、2人共……」

「度肝を抜かれてしまったよ……しっかりとファイズ・アクセルフォームの能力を覚えていた様だね。」

「クソツ……俺ももつと使いこなせるようにならねえと……」

流星の戦術で一位になった出久に、感心するウオズと悔しがる爆豪。彼らを横目に轟ら他の生徒達が次々とゴールしていくのであった……

「さて、予選通過は上位43名!!」

全ての競技を終え、主審のミッドナイトにより予選通過のボーダーラインが告げられるとともに、その次の競技がアナウンスされようとしていた。

「そして次からいよいよ本戦！さーて第2種目は……コレよ!!」

『騎馬戦!』

その競技の名目がスタジアムにあるスクリーンに表示される。

「参加者は2〜4人のチームを自由作ってもらおうわ!基本は普通の騎馬戦と同じだけど、1つ違うのが……先程の結果に従って各自にポイントが振り当てられるわ。43位が5ポイント、42位が10ポイント……といった具合で……」

このシステムだと第一種目で高順位の者に多くのポイントが与えられるため、上位の者ほど狙われやすくなる。ポイントも4位の轟が200P、3位の爆豪が205P、2位のウオズが210P、1位の出久が215Pといった風に増えていき、彼らのポイントを奪うことができれば次の競技に進める確率が高くなる。

「そして1位に与えられるポイントはなんと……!1000万ポイントよ!!」

「1000万!?!」

1位である出久は自分に与えられるポイントが予想を超える大きな数字であることに驚いてしまっている。

他の者のポイントを考えると、その1000万ポイントを奪うことができれば次のス

テージに上がれることは確実だ。つまり、騎馬戦で出久のことを狙う者は多い。多くの者が彼に視線を向けながら、騎馬戦のチーム決めに移っていくのであった…

第20話 騎馬戦

雄英体育祭の第一種目を終え、第二種目の内容が発表された。

障害物競走での順位ごとに与えられたポイントを、騎馬戦で奪い合い上位4チームが最終種目に進めるという内容だ。

普通の者は5ポイント間隔で上位に上がるほどポイントが上がるのだが、1位である出久にはなんと1000万ポイントが与えられてしまった。

彼の鉢巻を取れば確実に一位になれる。多くのチームに狙われるということはチームメイトになった場合は自分もかなり狙われ、応戦させられるということだ。

それ故に避ける者が多い。守るよりも狙う方がやりやすいと多くの生徒が考えていた。

「ど、どうしよう…」

「組も！デク君！」

「私も共闘しよう…」

誰も仲間になってくれず、狼狽する出久に麗日とウオズが仲間になると申し出る。

「良いの!?! 2人共！」

「うん！仲いい人と組んだ方が良いじゃん！」

麗日としては、幾ら狙われやすいと言えど自分とある程度関係性を築けている出久と組んだ方がやりやすいと感じたのだろう。

「私は我が魔王に挑むつもりでいたし、爆豪君もその道を選んで他のチームに行った。だが、私は思うのだよ……君と戦うのは次の競技で良い。楽しみにしているよ……」

ウオズは出久に付き従うばかりではいけないと思い、体育祭では出久にライバルとして挑むつもりであった。

しかしながら、この先にもう一つ競技があるならタイマンを張るのはそこで良い。

一先ずはここでは共闘して、一緒に上のステージに進もうと考えていた。

「後のメンバーは……」

騎馬戦となれば、4人でチームを組むのが理想的だ。

しかし出久は、あと1人を探すのに難航していた。

友人である爆豪や飯田は、出久に挑みたいという思いが強くて彼とチームを組むことを辞退した。

（飯田君やかっちゃんと組めなかったのは痛い……けど、ウオズ君や麗日さんがいるなら安心だ。後は近距離や中距離で戦える人は……）

「君だ……！」

多くの生徒がチームを固めてしまった中、出久はとある生徒に声をかけてチームに引き入れたのだった。

その一方で：

「ここに居る殆どがA組に注目している。なんでだ…？A組は調子に乗っている。」

USJでの事件を乗り越えて世間的に注目されるA組に、対抗しようと試みる者達が居た。

「おかしいよな？彼らとの違いは？敵と戦ったただけだぜ。僕らB組が何故予選で中下位に甘んじたのか？調子付いたA組に知らしめてやろう…皆。」

そう、B組である。

しかしながら、彼らは既に間違った認識をしていた。

A組は”敵と戦った”だけではない…各々が力を発揮し、”敵を撃破した”のである。

これから彼らはそのことを分からせられることになるのであった…

「それじゃいよいよ始めるわよ！」

『15分のチーム決め兼作戦タイムを閉廷!』

チーム決めのために設けられた時間が終わり、騎馬戦開始の時を迎えた。

『フィールドに12組の騎馬が並んだー!』

『中々おもしろえ組み合わせになったな…』

『さあ上げるぜ鬨の声! 雄英体育祭! 合戦の刻だ!!』

各々がチームを組み、作戦や相性を考えて、ポジションを決めて騎馬を作った。

それぞれの騎手達はチームメイトの持つ総合計ポイントが描かれた鉢巻を頭に付けており、フィールド上に馳せ参じていく。

「ウオズ君! 麗日さん! 常闇君! よろしく!」

出久達のチームも既に布陣を終えている。

『問答無用で行くぞ! 残虐バトルファイトのカウントダウン! 3!!』

「狙いは…」

「一つ」

その多くが一つのチームを狙っている。

『2!!』

「準備はいいね?」

「勿論!」

既に出久、ウオズ、それに爆豪も各々変身しており、開始の合図を待つ。

『1!!』

『スタート!!』

「実質1000万の争奪戦だ!」

開始とともに、多くの騎馬が出久の騎馬に向けて突撃していく。

「俺達はどうする…? 選択しろ緑谷!」

「勿論、守りの一手!」

「ゆけ! ライダモデル達!」

緑谷チームの前騎馬を務めるウオズは開始前にフューチャーリングゼロワンの形態に変身しており、ライダモデル達を召喚して守備を固める。

「ハツハツハー! 緑谷君! そのポイントいただくよ!」

「いきなり、襲来とはな…追われし者の運命…さだめダークシャドウ!」

さらに緑谷チームの後騎馬としてスカウトされた常闇の個性であるダークシャドウも周囲をけん制しており、指示を出されると迫り来る葉隠チームの攻勢をダークシャドウが前に出て食い止める。

「次はどう来るか分かるかな? 我が魔王!」

「2時の方向の銀髪の人! 多分B組かな? 彼らが来るよ!」

「了解！」

出久がこの戦いに選んだ形態は仮面ライダージオウⅡ、未来を予測することができるこの形態は、何処から誰に攻撃されるかを瞬時に把握することができる、こういった乱戦には打ってつけた。

「何だよ！」

B組の鉄哲チームに属する骨抜は自身の個性で地面を軟化させて、出久達の足を沈めて動きを阻害しようとしていたが、その作戦がジオウⅡによってすぐに見抜かれてしまっていた。

フリージングベアーのライダーモデルが彼らの足元を先に凍らせ、その腕を騎手の鉄哲に振るう。

「俺が耐える！その間に氷を何とかしろ！」

鉄哲徹鐵、個性：ステイール。

肉体の一部や全身を金属化して防御力を高めることができる。ぶっちゃけ、切島の個性とダダ被りである。

その彼が自身の個性で体を固くし、仲間達の盾となる。

「耳郎ちゃん！」

「常闇ツ……！」

葉隠チームの耳郎がイヤホンジャックで攻撃を試みるが、それもダークシャドウに阻まれる。

鉄哲チームと葉隠チームはそれぞれ、緑谷側の戦力によって攻勢を阻まれ、近付くことすらままならない。

「凄いよ！ウオズ君！常闇君！」

「いいや、我が魔王の未来予知あつてのことさ……」

「選んだのはお前だ。」

「ウチだって……」

出久に褒められる他2人に負けじと麗日は、出久から拝借したファイズフォンXを手に周囲を見回す。

「デク君！後ろ！」

その時彼女は一つの網が出久に向かって飛んできているのに気が付き、出久に知らせると共に銃で撃ち抜いた。

「助かったよ……麗日さん！つて、あの人……」

「バレてしまいましたか……」

その下手人は、紫髪の心操であつた。彼が持っているネットガンは、同じチームに属しているサポート科の発目が作ったモノだろう。

「あの人サポート科だよ！だからアイテム持ち込めるんだ！」

「撤退するぞ…」

「はい！」

奇襲に失敗した心操と発目はその場から撤退する。

更に出久を狙って障子に乗る峰田らのチームや、B組の鱗チーム、小大チーム、鎌切チームらが出久に挑んでいくがライダモデルとダークシャドウに阻まれてしまう。

「つーか、葉隠お前！鉢巻ねえぞ！」

「いつの間にもー！」

「漁夫の利だね…」

その隙に一部のA組の騎馬からB組の物間が鉢巻を盗み取る。

『さあ、まだ2分しか経ってないが！A組緑谷の防御は完璧！各所で奪い合って2位と4位狙いもありだぜ！』

「んな勝ち方、する訳ねえだろ…」

既に出久に挑むのは得策ではないこの状況。

他の者から掠め取って予選通過圏内を狙ってしまうのも得策ではあるが、そのような勝ち方を認めない男が居た。

「仕掛けるか？爆豪！」

「ああ！」

仮面ライダーゲイツに変身する爆豪勝己である。

出久への罪を償い、仮面ライダーとなり、彼のライバルの一人となった彼だが、一曲がっていない信念があった。それは完璧な勝利を求めることである。体育祭も全競技1位で終える気である。

『ディケイド！』

立場は追われる者から追う者になり、出久に挑む立場の爆豪。

彼が選んだのはディケイドのライドウオッチであった。

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディケイド！ディケイド！ディケイドー！』

まずは、仮面ライダーディケイドを模したアーマーをその身に纏い：

『ファイナルフォームタイム！』

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

更にはゴーストアイコンをスロットに取り付け、ゴースト・グレイトフル魂をその身に宿した仮面ライダーゲイツ・ディケイドアーマーゴーストフォームに姿を変える。

「こうやって使えばいいんだろ？同じ芸当がでるのはダメエだけじゃねえぞ！」

ゲイツはその能力を早速發揮し、15体の偉人ゴースト達をフィールド上に召喚する。

「スツゲーお前もそんなことできんのかよ…」

「ちよつくら練習しただけだ。」

体育祭に向けての特訓でライドウオツチの能力を学び、障害物競走でその組み合わせの重要性を身に染みて理解した。だからこそ、ライダーの力と自分の個性の合わせ技で出久に挑むことにした。

「行け！」

爆豪チームの騎馬が出久らに向けて走り出すのと共に、偉人ゴースト達も各々の武器を手に偉人ゴースト達が出久のチームに突撃していく。

「防ぎきれるか!?!」

ライドモデル達を使い、防衛しようとするウオズだがゲイツが召喚した偉人達の方が数が多くて対処しきれない。

『サイキョーギレード!』

迫り来る偉人達にジオウもジカンギレードとサイキョーギレードの二刀流で対処を試みる。

「中々やるねえ…」

「油断はするな！」

完全に出久チームの周囲はライダーモデル&ダークシャドウと偉人ゴーストによる混戦状態となつてしまつていた。それも数の上では偉人ゴースト達が優勢の状態で…

「デク!!」

その状況下でジオウII本人を狙つてゲイツが乗るその騎馬が進んでいく。

爆豪自身の個性である爆破を放ち、爆炎でジオウの視界を阻害する。

「オラァー！」

そしてジオウの頭部にある鉢巻目掛けて腕を振るうが…その手が掴んだのは周囲の空気であつた…

「危なかつた…」

彼に攻撃される寸前で、ジオウは麗日の個性を使つて重力から解き放たれて宙を浮いていた。

「解除…」

麗日が個性を解除し、再び重力に縛られて騎馬の上に降りて来た。

「チツ…!」

逆にゲイツにファルコンのライダーモデルが襲い掛かつてきて、深迫いは禁物と感じた。彼らは一時的に撤退する。

爆豪決死の作戦すらも跳ね除けてしまった出久達、徐々に他のチームも1000万狙いから2位〜4位に標的を変えつつあった。

一方、出久への攻撃に失敗した爆豪は次なる敵と対峙することになった。

「全く…どうしてまた君達A組が目立つことになるんだろうか…まあいいさ、ここで少しでもA組を減らして、次の競技では僕達B組が天下を取らせてもらおうとしよう…」

出久チームへの攻勢に失敗し、一時的にその場から距離を置いた爆豪のチームをB組の物間チーム、小大チーム、鎌切チームが取り囲む。

「なるほどな…デクに勝てねえって分かって、俺らのポイント取りに来て上位固めってところか…」

彼らの狙いを察した爆豪だが、はつきり言う物間が爆豪を狙ったのは悪手と言えるだろう…

「じゃあ、教えといてやるぜ。そんなセコイ考えじゃ、デクには勝てねえし…俺にも勝てねえ！」

その時、ゲイツがグレイトフル魂の力で召喚していた15人の偉人ゴースト達が3チームに襲い掛かる。

「ドツカン！」

B組の吹出が発した言葉が、個性によって固体化して爆豪に迫っていたがそれもビ

リーザキッドの偉人ゴーストによって撃ち抜かれる。

「俺に遠距離武器で勝てると思うなよ！」

吹出が次々と発する固化した擬音を、ガンガンセイバーガンモードとバットクロックガンモードの2丁の銃で撃ち落とし続ける。

「切り刻んでやるよ！」

「そうはさせない！」

一方、B組鎌切と対峙するのは宮本武蔵の偉人ゴーストだ。相手が振るう刃に対して、ガンガンセイバー二刀流モードで防いでいく。

「触れさせずれば……」

圧倒的に劣勢になってしまった3チーム。

しかし、その首領である物間には秘策があった。彼の個性はコピー、触れた相手の個性を一時的に自分も使えるというものであるが……

「しまった……！」

背後に現れたフリーデューニの偉人ゴーストが伸ばした鎖に、両腕を縛られてしまう。

「来るぞー！」

そこに迫る爆豪チーム。彼を阻もうと前騎馬の円場が個性によって空気を固めて盾となる板を作り出す。

だが、その板に向けてゲイツが腕を振るうと共に個性の爆破を放つと盾も打ち破られ、縛られた物間から彼らと、彼らが掠め取った葉隠チームの鉢巻を奪う。さらに小大、鎌切の鉢巻も偉人ゴースト達が奪っていた。

「大量ゲツト！」

「良い感じだな、爆豪！」

「まだだ！俺の狙いは完膚なきまでの一位だ！また仕掛けんぞ……」

多くのポイントを手に入れ、次の競技への進出が射程圏内に入った爆豪だが、やはり狙うのは1000万ポイント……次の攻撃の機会を伺うが、また自身の鉢巻を狙う物間らや、そこにやって来た鉄哲チームに取り囲まれ、その対処に追われるのであった。

時間は残り半分を切った。

爆豪チームがB組の騎馬を相手していた頃、出久達の方にも動きがあった。

「もう少し後半で相対するものかと踏んだが、随分早いな……」

「時間は半分！足止めないで！」

「飯田、前進！」

出久チームと次に対峙するのは轟らのチームだ。

彼らは八百万が創造したローラーズスケートを履き、飯田のエンジンで加速しながら突き進んでいく。

「八百万、ガードと伝導を準備！」

「はい！」

「上鳴は！」

「おうよ！分かってる！」

「気を付けて！仕掛けてくるのは1組だけじゃない！」

出久チームには轟達だけでなく、隙を見た他のチームの騎馬も迫ってきていた。

「しっかり防げよ……！」

迫り来る騎馬達に対抗すべく、ライダーモデル達が出久の前に出る。

そんな中、八百万が生成した布を轟が被り、金属の棒を八百万が地面に突き立てる。

「無差別放電！130万ボルト！」

上鳴が周囲の騎馬諸共出久らに向けて自身の中の電気を放つ。

咄嗟にダークシャドウが前に出て、ジオウやウオズ達を守るが周囲に集まった騎馬達は巻き込まれて身体に電流が流れる。

「残り6分弱、後には退かねえ……！」

轟が八百万に生成された棒を右手で握ると、その棒を伝って冷気が地面を覆い、電撃を受けて痺れてしまっていた他チームの足元を凍らせる。

「悪いが、我慢しろ！」

『群がる騎馬を轟一蹴！』

『上鳴の攻撃で確実に動きを止めてから凍らせた…障害物競走でかなりの数に躲されたのを鑑みてるな…』

『ナイス解説。』

フィールド上に残ってまだ動ける騎馬の数がかなり絞られた。

「ライダモデルがやられたッ…！」

轟らの作戦で出久チームはかなりの損害を背負うことになってしまった。

ウオズが召喚したライダモデル達は電撃のダメージと凍結によって動けなくなってしまうていた…

「しまった…！」

さらに、出久達の騎馬を囲うように轟が円状に氷を生成し、轟が作り出した氷山に囲われた空間内に出久達は囚われてしまう。

「安心してくれ、我が魔王。1対1となったのはむしろ都合…彼の弱点はよく分かっている…」

この場に居るウオズと轟は対戦経験があった。

それ以降ウオズは3人のライダーのフューチャリングを手に入れてさらに強くなっていたが、轟の手数はその時とあまり変わっていないかった。

炎を使わず凍結だけで戦う轟の戦闘スタイルはジオウとウオズにはお見通しで、常に出久らは轟の左側に陣取る様に移動することで5分以上轟を寄せ付けなかった。

『なんと緑谷！この狭い空間を五分間逃げ切っている！』

完全に轟の弱点を突いていく出久らに、轟は手も足も出せないでいた…

「まだ、ういける…」

残り1分の段階で轟チームの上鳴も限界を迎えつつあった。

何度か放電を試みたが、常闇のダークシャドウに防がれてそろそろショート寸前だ。

「緑谷…コノ野郎…」

「皆、残り1分弱。この後俺は使えなくなる…頼んだぞ！」

この膠着した状況を潰すべく、飯田が賭けに出る。

「皆！しっかり掴まってる！取れよ！轟君！」

前傾姿勢を取り、飯田は自身の脚部にあるエンジンのトルクを上げていく。

「ウオズ君…」

「ああ、分かっているさ……ダークシャドウくん、少し手伝ってくれ……」

飯田のその行動を、出久は既にジオウⅡの能力で予知していた。

そして同じく警戒するウオズに指示を出す。

『投影！フューチャータイム！』

「トルクオーバー！」

両足のエンジンマフラーから蒼炎を噴き出す飯田に対し、ウオズはダークシャドウの手を借りてリバイスミライドウオッチをビヨンドライバーに装填。

『バディアップ！』

「レシプロバースト！」

『フューチャーリングリバイス！』

飯田の爆発的な加速に対し、ウオズはフューチャーリングリバイスに姿を変える。

彼らの急接近に対して、ウオズはバイストライカーを呼び出して搭乗。

咄嗟にジオウだけを乗せて、彼らの車線上から離脱した。

「しまった……！」

咄嗟の賭けを外してしまい、飯田は足のエンジンをレシプロバーストの負荷によって使えなくなる。轟らのチームは機動力すらも失ったのに対し、ジオウ達は……

『マンモス！』

バイストライカーを4輪の車型のマンモスモードに変化させると、その上にジオウ、ウオズ、麗日、常闇が乗り込む。

「このまま逃げ切るよー！」

「させるかー！」

またも轟の左側から逃亡を図るジオウ達。

その彼らに向けて咄嗟に轟は炎を放ってしまう：

「逃がしたか…！」

他のチームは人間同士で組んだ騎馬に乗っているのに対し、こちらは車に搭乗しており機動力ではどのチームにも勝っている。

そうなれば、出久チームが終盤の1分間を逃げ切るのは容易であった：

『タイムアップ！第二種目！騎馬戦終了！』

そして、第二種目衆力の時が訪れ、出久達は完全に逃げ切ったのであった：

『ンじゃあ早速上位4チーム見ていこうか！』

プレゼントマイク的一声と共に次の競技に進める上位4チームが画面に表示される。

一位通過は1000万を守り切った緑谷チーム、二位通過は物間、小大、鎌切と彼らに奪われた葉隠チームの鉢巻を得た爆豪チーム、三位通過は鉄哲チームと彼らが奪取した峰田チームそれぞれの鉢巻を奪った心操チーム、四位通過は元々の高いポイントを維

持し続けた轟チームであり、これら4チームの16人が最終種目に進むことになる。

(攻撃には使わねえ…そう決めてたのに、気圧された…)

「これじゃアイツの思う通りじゃねえか…」

多くの者が自身の決勝進出を喜ぶ中、轟は出久らを相手に終盤炎を使ってしまったことを悔いていた。

『それじゃあ1時間ほど昼休憩録んでから午後の部だ！じゃあな！』

こうして、雄英体育祭午前の部は終了したのであった。

「何が起きたんだ…いつの間にか0ポイントになって終わったぞ…」

そんな中、鉄哲は終盤まで2本の鉢巻を持っていたのに終わった時にはそれを失っていたことに啞然としていた。

「あの小さき方のポイント…汚らわしい獲り方をしてしまった罰でしょうか…」

メンバーの塩崎はこの件はこっそりと峰田のポイントを奪った罰ではないかと推測していた…

「納得いかねー!」

悔しがる彼らを見て、紫髪の少年心操は一人笑みを浮かべるのであった…

各々が昼休憩に入っていく中、出久とウオズはある者に呼び出されていた…

「話って…何…?」

2人を呼び出した男は轟焦凍。

彼は静かに目の前にいる2人のことを見ていた……

第21話 昼休み

「話って…何…?」

騎馬戦を終えた直後、轟に呼ばれた出久とウオズは通路の様な場所で彼と向かい合っていた。

「早く話したまえ…私は腹が減った。」

黙って2人を見つめている轟に、お腹が空いてきたウオズは少しイライラしている。

「気圧された…自分の制約を破っちまうぐらいによ…」

「それは、左側の炎のことかな…?」

轟の制約、それは騎馬戦の終盤でしか使われなかった炎のことだと2人は察していた。

「ああ、そうだ…俺の親父は『エンデヴァー』知ってるだろう? 万年N.O. 2ヒーローだ。爆豪もだが、お前らがN.O. 1に近い実力を持つてるなら、俺は…猶更勝たなきやいけねえ…」

騎馬戦で直接対峙した2人を呼び出した轟だが、彼が越えなければいけない人間は多い。爆豪もその内の一人だ。

「親父は極めて上昇志向が高い奴だ：ヒーローとして破竹の勢いで名を馳せたが、生きる伝説オールマイトが目障りで仕方なかったらしい：自分では自分ではオールマイトを超えられねえと悟った親父は、『次の策』に打って出た。」

「何の話だよ、轟君：僕に何を言いたいんだい：？」

轟の左腕に関する話をしていた筈が、突如彼の父親の話を書くことになり出久は少し困惑してしまっている。

”個性婚” 知ってるよな：？」

「知ってるさ：過去に歴史の授業で学んだよ。超常第2第3世代の頃に社会問題になったことだったね：」

轟の口から出た”個性婚”という言葉に、出久達は思わず表情を曇らせてしまう。

「自身の個性をより強化して子供に継がせるために配偶者を選び、結婚を強いる：欠落した前時代的発想：実績と金だけはある男だ。親父は母の親族を丸め込み、”母の個性”を手に入れた。俺をオールマイト以上のヒーローに育てることで自身の欲求を満たそうってこった：」

「No. 2ヒーローがそんなことをしているとはね：」

エンデヴァアの所業を知り、出久とウオズは啞然としている。

輝かしいNo. 2ヒーローが裏では人を道具としか思っていない行動をしているこ

とに、2人は驚きを隠せない。

「鬱陶しい…そんな屑の道具にはならねえ…記憶の中の母はいつも泣いている…『お前の左側が醜い』と、母は俺に煮え湯を浴びせた。」

轟の顔はクラス内でも特に整っている方だが、その左目の付近には醜い火傷の痕が出来てしまっていた。

その理由というの、彼の家庭環境が故に起きたトラブルによるものであった…

「ざっと話したが、俺がお前らに突つかかんのは見返すためだ。クソ親父の個性なんてなくなつて…いや、使わず一番になることで奴を完全否定するッ…!」

「なるほどね。それが君が本気を出さない理由か…」

轟君のバックボーンは中々衝撃的であった…

だがしかし、それは人を救えない時の言い訳にはならない。

「本気…?」

「ああ、半分のみしか使わない。それで困っている人たちを助けられるか否か…」

そうやって私は彼にクイズミライドウォッチを見せる。

私は嘗て、フューチャーリングクイズの姿で彼に同じ問いかけをしたことがあった。「それは…」

その答えは否である。その現実には彼も心のどこかで分かっていたのだろう…

というより、以前の戦いで私に思い知らされてしまったのだろうね。

「最初に言っておく、私達はかなり強い。半分の力しか出さない君じゃ勝てないだろうね。そして強力なヴィランにも…」

以前のUSJに現れたオーマシヨツカーにアナザーライダー。

彼らのような強力な敵が来た時、轟君は氷結の個性だけで勝てるのだろうか…？

厳しい現実だが、制約付きの彼ではNo.1ヒーローなんぞ程遠いだろうね。

「……」

「あの…轟君は何でヒーロー目指してるの？お父さんに復讐したいならヒーローにならずに他の土俵から見返すことだってできるはずだよ…？」

確かに、我が魔王の言う通りだ。エンデヴァーに嫌がらせをしたのであれば、No.1ヒーローの競争に名乗り出ないというのが一番有効的…自分の進路をヒーローに絞るということは…ましてやその中でも1番を目指すということは復讐という動機だけでは為せないだろう。

「それは…」

「本当は轟君も好きなんじゃないの？ヒーローのこと、例えば…オールマイトとか！」
「…！」

我らもよく知るオールマイトという名前に、彼はハツとさせられたかのような表情を見せる。

私自身、この世界に来てから彼の名を耳にする機会や、彼の活躍を目にすることも多かつた。

勿論、学友とオールマイトの話をすることも多い。我が魔王含め、オールマイトに魅せられた同級生は少なくはない。恐らく轟君も例外ではないのだろう…

「轟君はオールマイト好き？」

「好きだ…」

「僕もだよ。」

まるで恋バナをする少女のような明るい表情を見せる我が魔王。

少し仮面ライダーの先輩方に影響を受けたのか、以前に比べて明るい笑顔を見せることが多くなった気がする。

「だったら、自分に正直に…もっとまっすぐにヒーロー目指せばいいんじゃないかな？」
「愚直に突き進めばいいさ。多くの悪に打ち勝ち、多くを救うことができるヒーローを

…

我々の言葉を聞き、彼は少し俯く。

「わりいけど、俺にはできねえ…こんな運命背負っちゃってんだ…お前らには分かんねえよな…」

我々の言葉を聞いても彼の表情は曇ったままであった。捨て台詞を吐いてこの場から去っていく。

恐らくまだエンデヴァーの呪縛に囚われてしまっているのだろう…

「彼がどう言おうと私達は全力で戦うだけさ…次の競技は私も…轟君に爆豪君、それに君ともタイマン張らせてもらうよ。」

「うん、受けて立つよ…」

轟君の意思がどうであろうと、この後の戦いでは皆が心の内に秘めた思いを爆発させて戦うだろう…

私達とて、乗り遅れるわけにはいかない。

『さあ！昼休憩を終えて最終種目発表！』

昼休みを終えていよいよ午後の部が始まろうとしていた。

『と、その前に予選落ちの皆に朗報だ！あくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してるのさ！本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ…ん…？』

『何やってんだ…』

体育祭午後の部の序盤はレクリエーション種目

生徒全員が再びグラウンドに集まっているのだが…

『どーしたA組！どんなサービスだ！』

何故かA組女子たちはチアリーダー姿でグラウンドに立っていた。

「峰田さん！上鳴さん！騙しましたわね！」

そう、彼女らはA組の変態峰田と上鳴に“午後はチアリーダーの衣装で応援合戦がある”と騙されてこの場に来たのだが…そんなものはなく他クラスの女子は普通に体操服でこの場に来ていた。

「何故こうも峰田さんの策略にハマってしまったのですか私…」

「アホだろ！コイツら！」

落ち込む八百万と不機嫌な耳郎。そんな2人にウオズが歩み寄る。

「とは言っても応援するのも大事なことだ。チアー、応援する…私の好きな言葉だ。こ

ういう張り詰めた時こそ互いに鼓舞して、緊張をほぐすのも良いだろう…」
「そうだね！やったるう！」

「透ちゃん、好きね…」

ウオズの言葉に賛同した葉隠や芦戸はノリノリだ。

『さあさあ！楽しいレクリエーションの後は最終種目！第二種目を通過した4チーム16名によるトーナメント！1対1のガチバトルだ！』

「最終種目はサシでのトーナメント…毎年テレビで見た舞台に立つんだ！」

最終種目の内容に切島は胸を躍らせている。

「去年トーナメントだったけ？」

「形式は違ったりするけど例年はサシで競ってるはずだ。」

「それじゃあ、組み合わせ決めのくじ引きしちゃうよ！組が決まったらレクリエーションを挟んで最終種目開始になります。レクに関しては最終種目進出者16人は任意での参加になります。息抜きしたい人も温存したい人も居ると思うしね。」

ミッドナイトからレクリエーションや最終種目に関する説明がされる。

レクの時間をどう過ごすかも最終種目進出者にとっては、その後の自分の調子を左右する要素になるだろう。

「じゃあ、一位のチームから…」

「あの、すみません…俺、辞退します。」

くじ引きを始めようとした時だった。突如A組の尾白が拳手し、辞退を申し出た。

「尾白君！なんで!？」

「折角プロに見てもらえる場なのに…」

彼の行動に多くの者が疑問を感じてしまう。

折角のチャンスが無駄になってしまうその行動に、出久達も困惑を隠しきれない。

「騎馬戦の記憶…終盤ギリギリまでボンヤリとしかないんだ…多分、彼の個性で…」

（尾白君と組んでたの…確か…）

彼の言葉を聞き、出久の視線は自然とC組心操の方を向く。

普通科からは唯一の騎馬戦と最後のトーナメント出場者となった男だ。

「チャンスの場だつてのは分かっている…それを不意にすることも…」

「尾白君…」

「でもさ！皆が力を出し合って争ってきた場なんだ…こんな…わけわかんないままここに並ぶなんて俺にはできない！」

「気にしすぎだよ…本選でちゃんと結果を出せばいいんだよ！」

「そんなん言ったら私だつて全然だよ…」

深く考え込んでしまう尾白を葉隠と芦戸が励ます。

騎馬戦がチーム種目だったため、爆豪の様な実力者と組めた芦戸や心操に利用されてしまった尾白の様な者も最終種目に進めてしまう。ここは葉隠の言う通り、次の個人戦でしつかり結果を残せばいいのだが…

「違うんだ…俺のプライドの話なんだ…俺が…嫌なんだ…」

（なんとも誇り高い男だ。私の様に君に感心する人は多いだろうね…報われて欲しいものだ…）

尾白の様子を見てウオズも静かに頷いている。何もせずにつかんでしまったチャンスを活かすことで自身のプライドが傷付くことを拒む誇らしさに思わず感心してしまっている。

「後なんで君らチアの格好してるんだ…」

「「……………」」

（ツッコむのが遅いぞ、尾白君…）

チアの格好をしていることにまたもツッコまれてしまったA組女子達。

その一方で、もう一人ミッドナイトにある申告をしようとする者が居た。

「B組の庄田二連撃です。僕も同様の理由から辞退したい。」

彼の名は庄田二連撃。尾白と共に心操のチームに属していた者だ。

「実力以前に、何もしていない者が上がるのはこの体育祭の意思に反するのではないだ

ろうか…?」

「なんだよコイツら！男らしいじゃねえか！」

そんな2人の行動に切島は思わず感動している。

『なんか妙なことになってるが…』

『ここは主審、ミッドナイトの采配がどうなるか…』

くじ引きの前に2人の最終種目辞退希望者が出てしまい、判断がミッドナイトに委ねられた。

「そういう青臭い話はさあ…好み！庄田！尾白の棄権を認めます！」

（（好みで決めた!?!））

最終的には青春大好きというミッドナイトの趣味趣向により、2人の熱い思いが受け入れられた。

「まあ私は、残りますが。」

一方、同じく心操チームであった発目は棄権はしない模様…

そもそも彼女は洗脳されずに心操に協力していたため至極当然のことであるが。

「となると…2名の繰り上がり出場者は騎馬戦5位の拳藤チームからなるけど…」

さて、決勝進出は16人の枠があるのだが、尾白と庄田の辞退により2人分の枠が余ってしまった。

「そういう話で来るなら…騎馬戦で途中から動けなかった私らより…あれだよな。」
「うん。」

「最後まで頑張つて上位キープしてた鉄哲チームじゃね？」

拳藤らのチームは騎馬戦の中盤、轟の攻撃に巻き込まれて凍結により動けなかったが、運よく鉢巻を奪われなかったために5位であった。だが、このチーム全員の意思は終盤まで動き、高いポイントを持っていた鉄哲チームの方がふさわしいというものだった。

「拳藤…」

「馴れ合いとかじゃなくてさ。普通に…」

「おめえら…うおおおお!!」

拳藤に権利を譲渡してもらった鉄哲は思わず感極まってしまう。

そして彼らの間で話し合いが行われ…

「というわけで鉄哲君と塩崎さんが繰り上がって16名！くじ引きの結果組み合わせはこうなりました！」

ミッドナイトの一声と共に対戦確定されたカードとトーナメント表がスクリーンの表示される。

第一試合 緑谷出久VS心操人使

第二試合 瀬呂範太VS轟焦凍

第三試合 上鳴電気VS塩崎茨

第四試合 飯田天哉VS発目明

第五試合 魚津圭介VS八百万百

第六試合 芦戸三奈VS常闇踏陰

第七試合 切島鋭児郎VS鉄哲徹鐵

第八試合 麗日お茶子VS爆豪勝己

試合決定…！

「私の相手は君か…全力でやるまでさ…」

「望むところですよ！」

八百万との試合が決定したウオズは彼女を見据える。

そして出久は…

(一回戦は第一試合か…僕と轟君が勝ったら…)

昼休みに言葉を交わした轟との対戦が近いことを察するが…

(その前に…！心操君って…)

「アンタだよな、緑谷出久って…」

その前に戦わなければいけない心操について考える。

彼の個性までは把握できておらず、騎馬戦で尾白らと組んでいたことしか分からなかったが、そんな彼が突如話しかけて来た。

(この人……！)

その少年に出久は見覚えがあった。

体育祭前に彼はA組の教室に宣戦布告しに来たことがあった。

” 体育祭のリザルトでは普通科からヒーロー科への昇格ができる。その逆も然り……”

「一回戦、よろしく。」

「よ……」

「緑谷……」

彼の言葉に応えようとした出久の口を、尾白の尻尾が塞ぐ。

「尾白君……どうしたの？」

心操がその場から去り、出久は尾白の行動について問う。

「奴に応えるな……」

出久と最初に戦うことになった男、心操人使。

自身の言葉に応じた物を洗脳してしまうという彼の個性は非常に厄介で、障害物競走と騎馬戦で彼の術中にハマってしまった者は多い。

尾白と共に彼の対策を考えるのに、出久はレクリエーションの時間全てを使うことになったのであった……

第22話 トーナメント一回戦 part 1

『オーディエンス共！待ちに待った最終種目が遂に始まるぜ！第一回戦！その強さはまさにキング！ヒーロー科！緑谷出久!!』

いよいよ始まる雄英体育祭最終種目のトーナメントバトル。

そのオープニングマッチを飾るのは、既に仮面ライダージオウの姿に変身している緑谷出久と…

『VS…ここまで、まだ目立つ活躍無し…普通科！心操人使!』

普通科からやって来た男、心操人使である。

彼の個性は洗脳。自身の言葉に應對した者を洗脳してしまうという個性を持ち、障害物競走や騎馬戦でもその力を使い成り上ってきた。

だが、洗脳された相手からは警戒されやすく、騎馬戦にて彼に洗脳されてチームに入られてしまった尾白は、分かっている情報を出久やウオズに託していた。

『ルールは簡単！相手を場外に落とすか行動不能にする！後は、”参った”とか言わせても勝ちのガチンコだ!』

レフリーと会場設営を担当するセメントスが椅子を作ってそこに座り、戦いの行く末

を見守る。

（我が魔王…対策は万全だろうね…？）

客席のウオズ達もその戦いを静かに見つめる。

特にウオズは、相手が尾白を洗脳したと聞いて出久もそうなってしまわないか心配そうに見つめている。

「これは、心の強さが問われる戦い…強くある将来があるなら、なりふり構ってちやダメなんだ。」

『レディー！』

実況のプレゼントマイクが開始の合図を出そうとするのと同じタイミングで、心操は出久を洗脳するために言葉を紡ぎ始める。

「あの猿はプライドがどうか言ってたけど」

『スタート！』

「チャンスをつぶに捨てるなんて馬鹿だとは思わないか？」

心操が出久を嵌めるために選んだ話題は、トーナメント出場を辞退した尾白に対する批難であった。

「なんてことを言うんだ！」

「俺の勝ちだ…」

ジオウはその言葉に怒りを感じてしまい、殴りかかろうと走り出してしまった。だが、その足は止まってしまふ。

「あー！折角忠告したって言うのに！」

『おいおいどうした!?!大事な初戦だ！盛り上げてくれよ！』

尾白らが恐れていたことが起こってしまった。

『緑谷！開始早々完全停止！』

「振り向いてそのまま場外まで歩いて行け……」

ジオウは心操の言いなりになってしまった……

彼の言葉に従い、場外に歩みを進めていく。

『ええー!?!緑谷！従順！』

(いいや、何か策があるんだろ？我が魔王！)

この時、多くの者がこのままジオウが負けてしまふと考えた。

だが、ウオズの信じる通り彼はこのまま終わらない。

『タカウオツチロイド！』

『スイカアームズ！コダマ！』

ジオウの腕についているライドウオツチホルダー。

そこにはめ込まれていた赤と緑のウオツチが突如飛び出して変形し、それぞれオーズ

のタカカンドロイドを模した鳥型のメカと、鎧武のスイカアームズを模したメカに変形する。

『緑谷の腕から2体の小型メカが登場！何をやる気だ！』

すると、タカの姿をしたタカウオッチライドと、スイカの姿をしたコダマスイカアームズはそれぞれジオウにぶつかっていく。

「ナイスタイミング……！」

「ほう、その手を使ったか……」

2体の攻撃を受けたジオウの身体が揺らぎ、心操によって施された洗脳が解除される。

2体のライドガジェットに自分が洗脳されたら自分自身を攻撃するように予め指示しておき、実際にやられてしまったら2体によって救ってもらおう。尾白が”洗脳はどこから衝撃を受けたら解除される”という情報をもたらしてくれたことにより組めた作戦だ。

出久のその作戦にウオズは思わず拍手をしてしまう。

『緑谷！小さな仲間に助けられたー！つーかあれ、サポートアイテムじゃねえのか？』

『書類によれば、あれも個性の一部らしい。』

『マジかよ！！ただで多彩なんだ!?!仮面ライダージオウ!』

洗脳からの復帰に、スタジアムは歓声に包まれる。

「緑谷君！」

「よ、よかつたあ！」

その様子に、飯田や麗日も安堵している。

洗脳が攻略されてしまえば、この戦いの結末は火を見るよりも明らかだろう…

「体の自由は効かない筈だ！なんでだ！何をした！」

動揺する心操にジオウは歩みを進めていく。

「何とか言えよ…そんなサポートメカ2つも持つてて羨ましいよ…」

なんとか出久の口を開かせようとする心操だが、既に個性の概要をしているジオウは

口を開かない。

2体のライドガジェットと共に心操に迫って来る。

「なんか言えよ！」

ジオウに押されていく心操。殴って抗うが、彼のパンチではジオウの身体は揺るがない。
い。

「心操君場外！緑谷君2回戦進出！」

心操の抵抗ではジオウには蚊に刺された程度のダメージしかなく、場外に押し出されてしまった。

「心操君はなんでヒーロー科に？」

「ジオウは負けてしまった心操に、何故ヒーロー科を目指すのか問いかける。

「憧れちまったもんは仕方ねえだろ……」

「戦いの結果を受け入れ、スタジアムの退場口に向かう心操。

「かつこよかったぞ！心操！」

「正直ビビったよ！」

「俺ら普通科の星だな」

「障害物競走1位の奴といい勝負してんじゃねえよ！」

「それにさ……」

そんな心操に普通科のクラスメイト達から称賛の声が浴びせられる。

「あの個性、対ヴィランにすごく有効だぞ……欲しいな。」

「雄英も馬鹿だなーアレ普通科か？」

さらには、観客であるプロヒーロー達も心操の個性を高く評価している。

「聞こえるか……？心操！お前凄いで！」

「俺は……諦めないぞ！いつか資格も取って、お前らより立派なヒーローになつてやる！」

この日で確実に心操のヒーローへの道が切り開かれたと言っても過言では無いだろう。

第一試合を終えて、次の試合が始まる前。

「祝え！我が魔王の一回戦突破を！」

「ウオズ君!？」

客席に戻った我が魔王に、早速祝福の言葉を浴びせる。

「デク君おつかれ〜」

「ト・ナ・リ開けてあるぞ。」

「ありがとう。」

麗日君と飯田君も出迎えてくれて、我々は彼らが用意してくれた席に移る。

その時、我が魔王と尾白君も視線を交わしていた。

『お待たせしましたー！続くカードはこいつ等だ！』

さて、次の試合がそろそろ始まるだろう。

『優秀！優秀なのに拭い切れないその地味さはなんだ!?!ヒーロー科！瀨呂範太！VS！予選で常に上位！強すぎるよ君！推薦入学者は伊達じゃない！同じくヒーロー科！轟焦凍！』

次のカードは瀬呂君と轟君の戦いだ。

瀬呂君はスパイダーマンの様な戦法も得意で、中々に優秀だが…個性が派手に強いのは対戦相手の轟君の方だろう…

『それでは最終種目！第2試合！スタート！』

開始と同時に瀬呂君の肘から放たれたテープが、轟君の身体を縛る。

『場外狙いの不意打ち！このまま勝ちまうんじゃねえか!?正直やってやれ！瀬呂！』

轟君の身体を縛った瀬呂君は、テープを円を描く様に振るい、彼の身体を場外に出してしまおうとしていた。客の一部は彼によるジャイアントキリングを期待しているが

…

「わりいな…」

轟君の右足から冷気が地を伝い、それは巨大な氷塊となり瀬呂君を巻き込む。

スタジアムには振動が伝わり、彼の作り出した氷は客席の眼前にまで迫っていた。

『…！』

突然スタジアムに作り出された氷山の様な氷の塊、それに実況のプレゼントマイクも言葉を失ってしまう。

「少し、やりすぎではないか…?」

「瀬呂君…動ける…?」

主審のミッドナイトも右半身が凍っており、マイクで拾われたリタイアを問いかける声スピーカーカー超しに聞こえる。

「瀬呂君行動不能！轟君！二回戦進出！」

恐らくその問いかけに、瀬呂君が肯定の言葉で応えたのだろう…

轟君の勝利が彼女の口から告げられる。

「ド、ドンマイ…」

「ドーンマイ！」

「ドーンマイ！」

客席から突発的に発せられたドンマイコールが、瀬呂君に浴びせられてしまう。

だがこれは…うん、私からも”ドンマイ”としか言えない。

さて、2回戦での我が魔王の対戦相手は轟君で確定だ。

私の試合も近い、気合を入れていくとしよう…

第23話 トーナメント一回戦 part 2

次々と進行していく体育祭

第三試合ではA組の上鳴とB組の塩崎が試合を繰り広げ、上鳴があっけなく敗北

第四試合では飯田がサポート科の発目に説得されて彼女が作ったサポートアイテムを装着して試合を行った。なお、この試合は飯田を使つての発目によるアイテムのデモンストレーションとなった。

彼女のお手製アイテムを次々と使わせられつつ、翻弄された飯田。

10分に及ぶ彼女のアイテムプレゼンに付き合わされてしまったが、最後は満足した発目が降伏したことにより、飯田の2回戦進出となった。

そして、第五試合：

『さあ、息継ぐ間もなく第五試合！バイクにバッタ！能力多彩！Mr. 仮面ライダー！ヒーロー科！魚津圭介！VS！万能創造！成績も相まって実力は折り紙付き！同じくヒーロー科！八百万百！』

ウオズの対戦相手は推薦入学者の八百万だ。

ビョンドライバーを腰に巻きながらウオズは、目の前にいる八百万と対峙する。

「クラス屈指の実力者が相手とはな……この勝負、楽しませてもらうでしょう。」

推薦入学者である八百万との対戦に、ウオズは手首を回しながら少しワクワクしている。

一方の八百万はかなりの実力者であるウオズとの対戦に、緊張しつつも考えを巡らせている。

(プレゼントマイク先生の言う通り、相手は能力多彩の魚津さん。私の創造と魚津さんの変身……出来にできた方が先制攻撃を仕掛けられる……時間が必要ないシンプルな武器を創造して……)

『スタート!』

『シノビ! アクシヨン!』

『投影! フューチャータイム!』

(しまった!)

八百万が考えてる間に、試合開始の時を迎えると同時にウオズは既に変身しながら走って迫って来る。

『誰じゃ? 俺じゃ? 忍者!』

『フューチャーリングシノビ! シノビ!』

八百万が咄嗟に盾を生成し、防ごうとした時には彼はフューチャーリングシノビの形

態に変身を完了して眼前に迫って盾を殴った。

(他の武器は……！)

八百万が彼の速さに追いつき、しつかり考えて行動するという間も与えないほどのスピードで彼女を追い詰めていく。

(盾がッ！)

何度か盾にパンチやキックを撃たれ、後ろに退きさがっていた八百万だが、自身を守っていた盾が破壊されてしまいまた盾を創造し直す。

再び防御し直すそうと、盾を構える八百万だが……

「私からすればッ……まだ遅い！」

それに対し、ヒット&アウェイ戦法で八百万の盾を殴ってから下がり、また攻撃に転じていく。

シノビの能力故にウオズの動きはかなり速くなっており、その攻勢を目で捉えきれぬ者は少ない。

勿論、八百万は彼の動きを把握することもできず、次の策を考える間も無かった。

「ハッ！」

ウオズの攻撃を盾で受けている八百万の身体は、徐々に場外に向けて後退していく。

「これでなんとかッ……」

咄嗟に鉄の棒を創造し、反撃を試みる八百万であったが…

「八百万さん場外！魚津君！2回戦進出！」

気付いた時には彼女の身体は場外に出てしまっていた。

「まずは一回戦…」

『圧勝！まさに圧勝！スピードも中々のものだ！』

一回戦で勝利を収めたウオズは、変身を解除して彼女の方を見る。

「そんな…何もできず…何も…」

「涙を拭いてくれ。君の個性の有用性は私もよく分かっている…だからこそ、私もしっかりと対策させてもらい、全身全霊を掛けて挑ませてもらったよ。」

ウオズの実力的にも結果的にも圧勝となったこの対戦カード。

本来であれば身体を直接攻撃して気絶でもさせればさらに短い時間で勝負を決められただろうが、あえて盾だけを狙うことでお互い無傷で決着をつけることができた。

しかしながら、ウオズは対戦相手である八百万への敬意を忘れない。

「う…ウオズさん…」

ほぼ瞬殺されてしまったことに悔しさを感じていたが、彼なりのリスペクトの気持ちは伝わり、褒めてもらえたと感じると思わず涙を零してしまう。

「皆が見ている。今は泣くのはやめておいた方が良さそう…さあ、こちらへ」

そんな彼女にハンカチを渡し、退場口までエスコートする紳士的な姿にスタジアム中から拍手が沸き上がる。

ウオズの試合後は芦戸と常闇の戦いが行われたが、こちらは常闇の圧勝。

一方で、次に行われた切島と鉄哲の試合は同じ体の防御力を上げる個性での対決故、拮抗した試合となり、前2試合とは違い試合時間がどんどん伸びていた。そんな中、次の試合を待つある選手のために控室に飯田が訪れていた。

「お疲れ様…飯田君。」

「麗日…じゃないな！シワシワだぞ！眉間!!」

そこにいた麗日の表情はかなり張りつめており、眉間にはかなりの量のしわが寄っている。

「眉間？ちよつと緊張がね…」

「そうか…君の相手、あの爆豪君だからな…」

一回戦の最終試合は爆豪と麗日の対戦となっていた。

出久との戦いを経て、仮面ライダーゲイツにもなり成長著しい爆豪。

今や出久やウオズに匹敵する力があると言っても過言では無いだろう…
はつきり言って、実力差のあるカードかも知れない。

「うん、超怖い…でもね、飯田君のあのやつとか見ててね…」

「あのやつ…?」

「デク君!あれ?皆の試合見なくていいの?」

「大体短期決戦で終わってて…今、切島君とB組の人がやつてるところだよ。」

その控室に、さらに出久も入ってくる。

2人の試合は長期化してしまい、その間に彼女が心配になって声を掛けに来たようだ。

「じゃあ、もう次…すぐ…」

切島らの試合が行われているということは、次は麗日の試合が控えているということだ。

「しかしまあ!爆豪君も女性相手に全力は…」

「ううん、かつちゃんなら全力で戦うよ。皆夢のために一番になろうとしてる。かつちゃんでもなくても、手加減なんて考えないよ…」

体育祭は多くのプロヒーローからの注目を集める場。

一位になれば多くのスカウトも来るだろう…

そんな場で、手を抜いて負けてしまったらその道が一気に閉ざされてしまう。

さらに爆豪は自分が舐められて、手を抜かれることを嫌う。逆に相手をリスペクトせずに手を抜くなんてことを自分自身にするのも嫌う。

「かつちゃんかスゴイのは分かっている…だから、付け焼刃かも知れないけど麗日さんがかつちゃんに対抗できる策…考えて来た！」

出久からすれば2人共大事な友達だ。特に爆豪の実力は本物で、何も心配はいらない。

一方の麗日はそんな彼を相手することになり、出久の中に少し心配という感情があった。

「おおー！麗日君！やったじゃないか！」

「ありがとう。デク君…でも、いい…」

個性の分析に長ける出久が考えた作戦。その信頼性はかなり高いものであった…

だが、その作戦を使うということを麗日は断ってしまった。

「騎馬戦の時、仲いい人と組んだ方が良いって思ったから組んだけど、今思えばデク君に頼ろうと思ってたのかも知れない…だから…飯田君が挑戦するって言って…自分が恥ずかしくなった…」

「麗日さん…」

「皆、将来に向けて頑張つとる！それなら皆、ライバルなんだよね！だから…決勝で会おうぜ！」

爆豪は最初から出久に挑んでいた。

ウオズはUSJでの出来事を経て体育祭で出久に挑む覚悟を決めた。

轟は体育祭で彼らを超えると宣戦布告した。

飯田も騎馬戦の時に出久に挑むと同じチームになることを拒否した。

彼らの姿を見て麗日も、今日は出久と1位を争い合うために挑むと決めた。

決勝で会おうと2人と誓い合った彼女を、出久と飯田は静かに見送るのであった…

第24話 トーナメント一回戦part3

『鉄哲と切島が回復している間に次のカードいくぜ!』

鉄哲と切島の戦いは決着が着かず2名とも倒れてしまった。

2人が回復次第、何らかの手段で決着をつけることになった。

その間に次の試合を行うことになり、それぞれがフィールド上に現れる。

(これも面白いカードになったな。)

『第一回戦最終試合! 進化した仮面ライダー! 素の顔はちよつと強面系? ヒーロー科!

爆豪勝己! VS! 俺こっち応援したいくヒーロー科! 麗日お茶子!』

そのカードは出久の友人2名による試合となった。

ここまでライダー勢が2連勝しており、世間的にはそうでない者にも勝つて欲しいという機運が高まりつつあった。最終試合の爆豪には、そんなちよつとした負けて欲しいという願望が向けられていた。

「爆豪君…先に変身して良いよ…」

「ああ…? お前浮かす奴だろ、退くなら今退けよ。痛えじゃ済まねえぞ…」

仮面ライダーに変身してしまつてからの戦いで良い。麗日のその発言は自分をかな

り不利にしてしまうものであった。

爆豪自身、元々手を抜く気はなかったがそれ以上に力を出していいと言われてしまい、少し驚いてしまっている。変身してのスタートとそうでない場合で戦略も大きく変わるし、変身前の隙を突くことができなくなった麗日はむしろ不利だろう。

『ゲイツ！』

「退かねえなら……いくぞ……！」

それでも発言を撤回しない麗日の覚悟を受け入れ、爆豪はゲイツライドウオッチを起動する。

「変身！」

『ライダータイム！』

『仮面ライダーゲイツ！』

改めて仮面ライダーゲイツに変身した爆豪と、ファイティングポーズをとる麗日が向かい合う。

『第8試合！スタート！』

そして、プレゼントマイクの合図と共に麗日が姿勢を屈めた状態でゲイツに向けて駆け出す。

「退くなんて選択肢無いから！」

「じゃあ、俺も…逃げねえエ…！」

一歩も退く気が無い麗日に対し、爆豪が選んだのは迎撃。
右手を振るい爆破を加減することなく放つ。

『容赦ないな！爆豪！』

「アカン！分かってても対応できない！」

その攻撃を避け切れずに喰らってしまった麗日は、煙に包まれながらも後ろに吹き飛ばされる。

「そこかッ！」

だがその煙は爆豪自身にも悪影響を及ぼす。

麗日の姿を見失ってしまい、背後から迫る彼女に気付くのが遅れた。

何とか気付いて爆破を放ちながら抑え込もうとするが…

『おおー！』

そこにあつたのは、麗日の体操服の上着であった。

囿に引つ掛かったゲイツの背後から、タンクトップ姿の麗日が襲い掛かる。

『上着を浮かせて這わせたのか！よう咄嗟にできたな！』

(ここで浮かせちゃえば！)

彼に触れて宙に浮かし、そのまま倒してしまおうとしていた麗日。

だが、咄嗟に反応できなかったゲイツがまたも腕を振るいながら爆破を放ち、それを受けてしまった麗日の身体が地面を転がる。

『デイケイド！』

『アーマータイム！』

間髪入れずゲイツは、さらに自身を強化する。

『カメンライド！』

『デイケイド！デイケイド！デイケイドー！』

仮面ライダーゲイツ・デイケイドアーマーに姿を変えた爆豪を、再び浮かせに行こうと麗日が駆けていく。

「おせえ！」

『オーズ！』

だが、その麗日に向けて再び爆破を放ちつつ、更なるウオツチをデイケイドアーマーのスロットに装填する。

『ファイナルフォームタイム！』

『オ・オ・オ・オーズ！』

仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボの力をその身に宿した爆豪は、ヒット&アウェイで攻勢を仕掛けてくる麗日を容赦なく爆撃していく。

諦めずに何度も駆けていく麗日に、手を抜くことなく…悪く言えば容赦なく爆破していく。

『麗日…休むことなく突撃を続けるが…これは…』

現状のゲイツ最強形態で麗日を叩き潰さんと攻撃する爆豪だが、その試合は容赦なく一方的なものになっていた。

「おい、止めなくていいのか？」

「大分クソだぞ！」

「見てらんねえ…」

女子相手に一切手を抜かない爆豪に、客席の者達は試合を止めるようにとクレームを言い出す。

「おい！それでもヒーロー志望かよ！そんだけ実力差あるなら早く場外にでも放り出せよー！」

試合時間が長くなるということは、麗日が爆破を受けて体に溜まるダメージが増えてしまう。

業を煮やした1人のプロヒーローが、早く終わらせてしまえよと主張し始める。

「女の子いたぶって遊んでんじゃねえ！」

「ブー！ブー！」

未だに戦いの決着を付けず、麗日に爆破を浴びせていくゲイツの姿に会場からはブーイングが沸き起こる。

『一部からブーイングだ！しかし、正直俺もそう思う…』

『今遊んでるって言ったやつプロか！何年目だ？』

ブーイングに賛同するプレゼントマイクからマイクを奪い、相澤が言い出しつぺのプロヒーローに物申す。

『素面で言ってるならもう見る意味ねえから帰れ！帰って、転職サイトでも見てろ！爆豪はここまですがってきた相手の力を見てるから警戒してんだろ！本気で勝とうとしてるからこそ、手加減も油断もできねえんだろうが！』

(まだだ！まだコイツ！立ってやがる！)

爆豪が手を抜けないのも無理はない。

麗日はこれまでの攻勢を受けても尚、立ち続けている。

そんなしぶとい相手に対して手を抜けば、いつ自分が狩られてもおかしくはない。

相澤の言う通り、確実に勝つために手加減も油断もしていないのだ…

(そろそろかな…)

「ありがとう爆豪君…油断してくれなくて…」

「爆豪の距離ならともかく、客席に居ながら気付かずブーイングしてたプロは恥ずかし

いね。」

麗日が爆豪の全力を引き出し、攻撃を受け続けた理由をB組物間は気付いていた。

「低姿勢での突進で爆豪の打点を下に集中させ続け、武器を蓄えてた…そして、絶え間ない突進と爆破で視野を狭め悟らせなかった…」

ゲイツの放った爆破が地面を抉り、その瓦礫は麗日の個性によって宙を浮いていた。

「解除！」

そして、麗日が浮かしていた瓦礫がゲイツに向けて雨の様に降り注ぐ。

『流星群?!』

『気づけよ…!』

(こんだけの量の瓦礫! 迎撃にしろ回避にしろ必ず隙ができる! 今のうちに距離を詰める! 勝つ! 勝つ! 勝つ! 私もデク君みたいに!)

その間に一気に駆け抜け距離を詰める麗日。

このまま彼に触れて宙に浮かし、場外に押し出してしまおうとする。

だがしかし、その幻想は一瞬にして打ち砕かれた。

「ああつ…!」

ゲイツが降ってくる瓦礫に対処しようと放った爆破は、デイケイドアーマーによる強化も上乗せされて彼女の想定を超える大規模なものとなった。

「やっぱ、油断できねえ奴だったな…」

「一撃って…」

その爆風で彼女の身体が吹き飛ばされ、地面を転がる。

『爆豪！会心の一発で麗日の策を正面突破！』

（危ねえな…）

（私のできる最大限…全く通じんかった！それでも…）

策を破られてしまった麗日だが、まだ負けないという気持ちで再び立ち上がる。

いいや、気持ちだけで立っていると云っても過言では無い。

「いいぜ、ここからが本番だ！麗日！」

（デク君なら…デク君ならあきらめたりなんか！）

自身に向かってくるゲイツを、迎撃しようとした麗日だが体の力が抜け、倒れこんでしまう。

捨て身の策で溜まったダメージによって、彼女の身体は限界を迎えていた。

『麗日ダウン！』

（からだガツ…言うこときかんツ…！私はツ…まだ…！）

倒れながらもあきらめずに地面を這う彼女だが、その視界はぼやけていく。

（私だって、ヒーローに…とうちゃん…かあちゃん…）

「麗日さん戦闘不能！爆豪君！二回戦進出！」

「ジオウの方はしつかりライダーの力を扱えてるが…ゲイツは全然だな。」

激闘が繰り広げられた第一回戦。爆豪の戦いによってスタジアムの地面は大きく抉られ、セメントスによる緊急修復が行われていた。

そんな中、とある席から試合を見つめる“マゼンタカラーで2眼のトイカメラを持った男”が仮面ライダー達の戦いを振り返っていた。

「さっきの試合も、折角の俺の力を活かさきっていないな。障害物競走は飛ぶだけ飛んで、騎馬戦は呼び出せるだけ出しただけ…さっきの試合も上手くライダーの力を使えば即片付けたな。」

どうやら彼は爆豪の戦い方が気に入らないようだ。

確かに出久の変身するジオウは、障害物競走で多くのライダーのウオッチをその場に合わせて有効活用し、騎馬戦ではジオウⅡの未来予知能力を活かしてウオズ達と完璧な布陣を組んだ。さらに先程の一回戦ではライドガジェットまで有効活用していた。

それに対して爆豪の変身するゲイツは障害物競走はフォーゼアーマーだけ、騎馬戦で

はデイケイドアーマー・ゴーストフォームだけの力しか使っていない。何ならさっきの麗日戦はほぼ彼自身の個性で戦ったと言える。

「仮面ライダーゲイツの力、そんなものじゃないだろ…」

彼自身、仮面ライダーゲイツの潜在能力をよく分かっているようだった。

「指名するなら、完璧な方より指導が必要な奴の方だな…」

雄英高校では体育祭の後、職場体験が控えている。

この体育祭でアピールできた者はこの場に来たプロヒーローから指名され、自身を指名してくれたプロヒーローの下に行くことになる。

恐らくプロヒーローである彼は、自身による指導が必要と判断して爆豪を指名しようと考えていた。

「もう一人は…ジオウかウオズだな…」

指名できる枠は2つ。もう1枠を誰にしようかとその男は思案していた。

「お疲れさま、爆豪君。」

「おう、これで互いに一回戦突破だな。」

試合を終え、廊下を歩く爆豪にウオズが話しかける。

互いに一回戦を突破したことをねぎらうが、それは2人の戦いが近付いているということだ…

「麗日君は強かったかい？」

「ああ、油断できねえ奴だった…」

無傷で勝つたとは言え、爆豪からすれば一瞬たりとも気を抜くことができない相手であつた。

少しでも隙を見せれば体に触れられ、宙に浮かされてしまつていただろう。

ライダーの力で重力に縛られながら飛ぶ方法は分かつていても、そうでないときはコントロールを失つてしまう恐れがあつた。

いくらライダーの力を得てたとしても、触れられて個性を使われれば負けてしまつていただろう。

「飯田君から聞いたよ。彼女は我が魔王に”決勝で会おう”と誓つたらしい。彼女の覚悟も相当なものだつただろうね…」

「ああ、それは俺にも伝わつた。で、アイツを倒したから改めて言わせる…決勝でデクと戦うのは俺だ！ テメエも準決で潰す！」

「そのセリフ、私からもそのままお返ししよう。我が魔王と戦うのは私だ！」

「いいぜ、勝つのは俺だけだな……!」

爆豪とウオズはこのまま勝ち上れば準決勝で戦うことになる。

そして勝てば待っているのは出久だ。彼との対戦を熱望する2人は、この場で互いに競い合うことを誓い、この場から去っていく。その一方で出久は麗日のいる控室にやって来ていた。

「いやー負けてしまった。」

「あ、あれ……?」

控室に居た麗日は意外にも笑顔で出久のことを出迎えた。

「最後いけると思ってたよ!クツソ……!」

「麗日さん……怪我は大丈夫……?」

「うん、リカバリーされた。体力削らんようにギリギリの治療だから擦り傷は残ってるけど……」

と言つてガーゼが張られた自身の頬を指さす。

「いやーやつぱ強いな。爆豪君は!完膚なかつたよ!もつと強くならんと!」

「麗日さん……無理しなくていいんだよ。」

「デク君……?」

出久には、彼女の今の笑顔が取り繕って作つたものにはしか見えなかつた。

普段彼らの前で見せるものとは、全く違う様に見えていた。

「やっぱ、デク君は何でもお見通しだね…」

ポタポタと机の上に彼女の涙が落ちていく。

「泣きたい時は、泣いても良いんだよ…無理に取り繕ったってしんどいだけだよ。」

「デク君…!」

敗けたのに無理して悔しさを隠しても、さらに心が苦しくなるだけだ。

そう説いた出久に抱き着き、麗日は彼の腕の中で涙を流すのであった。

泣きじやくる麗日の頭を、出久は彼女が落ち着く様に優しく撫でるのであった…

第25話 トーナメント二回戦：轟焦凍オリジン

麗日を慰めた後、出久は次の試合のために廊下を移動していた。

だがその時、彼の前に体の一部から炎を発している大男が現れる。

「エンデヴァー!?!」

「おお、居た居た。」

その男こそ現役No. 2ヒーローであり、轟焦凍の父のエンデヴァーだ。

「エンデヴァー! 何でこんなところに?」

「君の活躍見せてもらった。素晴らしい個性だ…様々な種類の鎧を纏って、強力な力で次々と敵を倒していく。将来的には…オールマイトに匹敵する力を持つことになるだろう…」

「何を…言いたいんですか…? 僕はもう行かないと…」

彼がライバル視しているオールマイトの名前が出されたことで、出久は彼との師弟関係を指摘されるのではないかと思い、足早にその場から去ろうとする。

「ウチの焦凍にはオールマイトを超える義務がある。君との試合はそのテストベットになる…みつともない試合はするなよ…」

だが、彼の発言はまるで、出久をも焦凍がエンデヴァー自身の理想に近づく様に利用しようとしているとしか感じられない。

「クソ親父の個性なんてなくたって…いや、使わず一番になることで奴を完全否定するッ…!」

轟焦凍が父を否定する理由。それを出久はその肌身で感じてしまった。

「僕は…オールマイトじゃありません!」

「そんなものは当たり前…」

「当たり前のことですよね!轟君も…!あなたじゃない!」

緑谷とオールマイト、轟焦凍とエンデヴァーをそれぞれ重ねているエンデヴァー自身。

だが、周囲の者を利用して理想をかなえようとする彼の言動を出久は否定する。

そして、彼から離れていきスタジアムのフィールドに向かうのであった…

『お待たせしたなEvery body!二回戦第1試合はビッグなカードだ!!一回戦の圧勝で観客を文字通り凍り付かせた男!ヒーロー科!轟焦凍!!片や多彩な能力でどんな困難も突破してきた!ヒーロー科!緑谷出久!!』

これまでの競技全で一役通過で実力を示し続けた仮面ライダージオウ、緑谷出久と先程の試合含めて強力な個性を見せただけでなくエンデヴァーの息子ということで注目

を浴びる轟焦凍の対戦となった。

「来たな…変身しないのか…？」

「轟君…するよ、君を救けるために！」

『ジオウⅡ！』

この戦いで出久が目指すもの。それは勝利だけでなく、エンデヴァアの呪縛に囚われてしまっている轟を救うことだ。その為にも最強の力で彼と向かい合う。

『ライダータイム！』

『仮面ライダー！ライダー！』

『ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

『スタート！』

出久が仮面ライダージオウⅡへの変身を終わると同時に、戦闘開始の合図が為される。

その開始と共に、轟は右足から冷気を解き放ち周囲の空気を凝結させる。迫り来る氷塊に備え、ジオウはジカンギレード・ジュウモードをその手に持つて1つのライドウオッチを装填する。

『フォーゼ！スレスレシユータイング！』

ロケットの様な形をしたブースターモジュール。その姿を模したエネルギー弾を銃

から放ち、轟が放つ氷を撃ち砕いた。

『緑谷！轟の攻撃を破った！』

ジカンギレードによる必殺技が氷を撃ち砕き、その余波により巻き起こった強風が轟と観客に吹き付ける。後ろに氷の壁を作って場外に吹き飛ばされない様にする。

『ファイズ！スレスレシユーツィング！』

氷結を打ち砕かれても、再びジオウを凍らせてしまおうと右足からの氷結で氷の波を作り出してジオウを襲う。

それに対し、ファイズの力を秘めたエネルギー弾を放つことでジオウは氷をまたも打ち砕いた。

『また破った！』

『響鬼！ギリギリシユーツィング！』

『ダブル！ギリギリシユーツィング！』

『ウィザード！ギリギリシユーツィング！』

その後何度も氷結による攻勢を試みる轟。

しかし、その度にジカンギレードによる必殺技でジオウが打ち砕いていく。

轟の凍結は確かに強力で、スタジアムに巨大な冰山を作ってしまう程ではある。

しかし、その手札一辺倒な轟に対し、ジオウは幾つものライドウォッチを使って対処

していく。

その戦いに観客の多くが出久の方が有利であると感じてくるが、それはフィールド上にいる轟とて例外ではない。

「…ツ！」

自身の背後に氷を作って飛ばされないようにする轟の戦法は、戦いを膠着するところまで持っていつていた。

自分の攻撃は防がれてしまうが、ジオウの攻撃によって自分が負けてしまう程でもない。

拮抗した状態から自分優位にするために、先程瀬呂に使ったような大氷結でジカングレードによる必殺技をも呑み込んでジオウを凍らせようとする。

「大きいのが来るツ…！」

『ワンフオーオール！ギリギリシユータイング！』

ジオウIIには未来を予測する能力がある。

それにより、轟が先程の試合で見せた大氷結を放つと分かれば、最強の力を持つライドウォッチをジカングレードジュウモードに装填。

「うああッ…！」

その銃口から膨大な量の虹色のエネルギー弾を解き放つが、その反動でジオウは後ろ

に転倒してしまふ。

『何ちゅー威力だア!!』

ジオウの狙い通りワンフォーオールによるエネルギーは轟の水結を打ち砕いてみせた。

「さつきより、随分高威力だな…」

咄嗟に轟は、自身の背後に氷を生成して吹き飛ばされない様に踏み止まった。

「なんだよ…守って逃げるだけか?」

轟の度重なる攻勢に流石のジオウも防戦一方だ。

だが、出久自身は体力の消耗もそこまでなく受けてしまったダメージと言えはワンフォーオールライドウォッチを使った際の反動ぐらいだろう。それに対して…

(震え…そういうことか！)

轟の身体は自身の冷気によって追い込まれつつあった。吐く息は白く、身体には霜が幾つも付いてしまっている。

「まだ来るのかッ…!」

『サイキョーギレード!』

それでも氷結で攻撃を仕掛けてくる轟に対し、ジオウは戦法をジカンギレードとサイキョーギレードの二刀流に切り替える。

『ライダー斬り!』

その刀身にピンク色の光を纏わせ、迫り来る氷を切つて砕いてみせる。

「震えてるよ…轟君!」

2本の剣を構えて轟に歩み寄つていくジオウII。その口から轟の身体が限界に近づいていることを告げられる。

「個性だつて身体機能の1つだ!君だつて、冷気に耐えられる限度があるだろう?」

個性もあくまで人間の体の機能の一部だ。

考えると脳は限界を迎えるし、動き続ければ筋肉が限界を迎える。

それと同じように個性の使用による限界というものもある。爆豪の爆破の場合、大規模な爆破をサポートアイテムやライダーへの変身無しで繰り出せば汗腺がダメージを負う。切島の場合硬化しても、受け切れない程のダメージを負つてしまえば倒れてしまう。飯田に至つては騎馬戦の終盤に無理やり限界を突破したことで、最後は動けなくなつていた。轟の場合氷結を使えば使う程冷気によつて体温を奪われてしまう。

「けどそれって、左側の炎を使えば解決できるんじゃないかな?」

エンデヴァーが求めた焦凍の個性、半冷半燃の炎を使えば冷気を吹き飛ばし、奪われた体温を取り戻すことができる。逆に炎による体温の上昇を氷結でカバーすることもできる。この個性をバランスよく使うことで、お互いの弱点を克服し合つて攻撃を打ち

続けられる。

「皆……本気でやってる！勝って目標に近付くために！」

爆豪とウオズは出久に挑みトップヒーローになるため、麗日はヒーローになって家族に楽をさせられるほど稼ぐため、心操は憧れに近付くために普通科からヒーロー科に上がるために本気で戦っている。

「一番になるために！半分の力で勝つ！それじゃまだ、僕に傷一つ付けられていないよ……」

ヒーローの王を目指すジオウ。彼は2本の剣を構え、その刃を轟に向ける。

「全力でかかって来い！」

「緑谷……何のつもりだ……？全力？クソ親父に金でも握らされたか……ムカつくッ……」

轟に炎を使わせようとする出久。それはエンデヴァーに頼まれたからではなく、彼が呪縛から解き放たれて自分と共にトップヒーローを目指し時に仲間として、時にライバルとして切磋琢磨するためだ。

彼の凍てつく心を解かそうとする出久を理解できず、轟がジオウに向かっていくが……
(動きが鈍いッ……)

だが、身体が霜に覆われて体温が下がってきていた轟の動きは鈍くなっていた。

使えば使う程消耗してしまうことが、ジオウや客席のクラスメイトにも見抜かれてし

まっていた。

(コイツツ……！)

上から腕を振るおうとする轟だが、ジオウによるカウンターに対応し切れなかった。姿勢を低くして懐に潜り込まれ、腹に彼のパンチを喰らってしまう。

『モロだ！生々しいの入った！』

殴り飛ばされた轟の身が地面を転がるが、場外にまでは飛ばされない。

(なんでツ……！)

またも氷を出す轟だが……

(威力が弱まっている！)

ジカンギレードを使う必要もなく、ジオウが放たれた氷を簡単に避ける。

その後も轟の攻撃を避けつつ近距離に攻めていくジオウ。

彼を相手に轟は何発も氷結を放ち、ジオウを退けていく。

「クソツ……しぶといな……」

「だって僕は、皆の期待に応えたいんだ……！皆の期待に笑顔で応えられるカッコイイ”

ヒーローの王様”になりたいんだ……！」

ウオズやオールマイト、それに母から期待され、そこから雄英に入り応援してくれる人や仲間が増えていた。そんな皆の想いに応えて、自分の夢である”ヒーローの王”と

なるためにも出久は一切手を抜かない。

「僕だけじゃない！皆に夢があつて、皆全力でやってるんだ！」

そして、自分と同じようにヒーローに対する夢を持ち、身体を張って全力で戦った人たちを何人も見てきた。ボロボロになっても戦った麗日や勝ち抜くために一切手を抜かなかつた爆豪。彼らの姿を見ていたからこそ、轟の行動には少し憤りを感じていた。「君の境遇も…君の決心も…僕に計り知れるモノじゃない！けど、好きな物にまつすぐに突き進まず、全力を出さないなんて正直ふざけるなつて今思つてる！」

「俺はコイツを…」

彼の夢に対する歩み方や、体育祭に挑む姿勢。

それは周りのヒーローやクラスメイトを愚弄してしまうようなものと言つても良いだろう。

そんなこと、彼自身も薄々分かつているしこのままだと負けると分かり切つていた。

だがそれでも、過去に父が自分にしてきた所業。それによつて精神を壊してしまつた母。

父の影響で余り話せなかつた兄や姉。エンデヴァーにより暗い側面が多くなつた彼の過去が、轟焦凍の心を縛り付けてしまつていた。左側の炎を憎き父と重ねてしまい、拒絶してしまつている。

「親父の力を…」

「君のツ…力じゃないか！」

かつてとあるテレビ番組でオールマイトはこう言った。

「個性というものは親から子へと受け継がれていきます。しかし、本当に大事なものはその？がりではない…自分の血肉。」自分である」と認識すること。そういうこともあつて私は言うのさ。」私が来た”つてね…」

轟の様に個性が親から遺伝するケースが多い。だが、受け継いだとしてもその個性は所持者自身の身体の一部だ。

(ずっと忘れていた…いつの間にか…忘れてしまった…)

「血に囚われることなんかない。なりたいたい自分になって良いんだよ…」

轟は思い出した。かつて母が投げかけてくれた言葉を…

「だったら、自分に正直に…もつとまっすぐにヒーロー目指せばいいんじゃないかな？」

「愚直に突き進めばいいさ。多くの悪に打ち勝ち、多くを救うことができるヒーローを…」

そして、自分に声を掛けてくれた出久とウオズの言葉を…

”自分が憧れるヒーローになるために、まっすぐ全力で戦う。”

エンデヴァーに囚われることなく、自分のなりたいたいものを目指す。そう決意した轟は左腕から熱き炎を解き放つ。

「敵に塩を送るなんて、どっちがふざけてんだ…俺だって、ヒーローに！」

左から解き放たれた炎は轟の右半身を覆う霜を解かした。

決意を新たにした彼の姿に、ジオウは仮面の中で笑顔を浮かべた。

「焦凍オオオオオ!! やつと…」

「祝え!!!」

遂に轟が“自分から受け継いだ”炎を使ったことに、エンデヴァーが喜びの声を上げて声援を投げかけようとしたその時。ウォズの声がエンデヴァーの雄叫びを打ち消した。

「自らの身体に宿る炎と氷の力を操り、トップヒーローを目指す若き戦士。その名は轟焦凍！彼の覚醒と、その心を解かした我が魔王の活躍…そしてその聖戦をとくと楽しむがいい!!」

轟の炎とウォズの祝福に客席から拍手が沸き起こる。

「お、おい、俺の激励…」

『エンデヴァーの激励が邪魔されたー！ウォズの祝福は目立つなく』

『良いんだ。今はアイツの言う通り、2人の戦いを見届けよう。』

相澤の言葉と共に観客たちはフィールド上にいる、仮面ライダージオウⅡの緑谷出久と半冷半燃の轟焦凍に視線を集める。

「スゴッ…」

「何笑ってんだよ…とつとと決める、どうなつても知らねえぞ…」

左腕からは炎を出し、右足からは大量の氷を出し、ジオウ目掛けて氷の波が襲ってくる。

『ジオウサイキョーギレード！』

『ワンフォーオール！』

その氷の波を跳躍して避けつつ、ジカンギレードとサイキョーギレードを合体させる。

2本の刀身を合わせた後に、サイキョーギレードにあるジオウの仮面を模したギレードギヤリバーをジカンギレードのライドウオッチ装填部に入れなければならないが、付け替えずにそのスロットにはワンフォーオールライドウオッチを装填する。

「ありがとな…」

周囲の氷を一気に解かすほどの熱を纏い、轟は最大火力の炎を解き放つ。

『キング！ワンフォーオール！ギリギリスラッシュユ！！』

轟の炎と、ワンフォーオールと2本の剣の力が交じり合った光がスタジアム中央でぶ

つかり合い、その衝撃波と凍らされてから膨張した空気が強風を巻き起こして観客や主審のミッドナイトに吹き付ける。その衝撃はスタジアム外にも伝わっており、外で警備をするプロヒーロー達もスタジアムの方に注目している。

『何…今の…？お前のクラス何なの…？』

『散々冷やされた空気が瞬間的に熱され、膨張したんだ。』

『それでこの爆風って…どんだけ高熱だよ…ったく、何にも見えねえ。て勝負はどうなってるんだ!?!』

実況席のプレゼントマイクは転倒しつつも、状況を伝えようと椅子に座り直す。

スタジアム上空まで登っていた煙が徐々に晴れ、主審のミッドナイトはプレゼントマイクの問いかけに答えるために状況を確認する。

「と、轟君…場外…」

彼女がその目で見たのは、左側の体操服が焼け落ちて自身の上半身を晒している轟が場外に倒れている光景であった。

「緑谷君！三回戦進出！」

煙が晴れるとそこには、振り下ろしたジオウサイキョーギレードを地面に突き立ててフィールド上に立っているジオウIIの姿があり、観客は彼の姿を確認すると勝利を称えるように歓声を上げるのであった。

第26話 トーナメント二回戦 part 2

「デク君！お疲れ！」

「素晴らしい戦いだっただよ。」

轟との戦いを終え、自分達のクラスの客席に戻ってきた出久を、麗日とウオズが出迎える。

「ありがとう、2人共。」

「当然だ。轟君の呪縛もしっかり断ち切り、良い戦いだっただよ。」

先程出久と轟の戦いをウオズは称賛し、小さく拍手をしている。

「そう言えば、飯田君は？」

「彼は自分の試合が近いからね。先に控室に行ったよ。」

「そっか、次の試合、飯田君とB組の塩崎さんの試合だったね……」

出久らの試合で荒れたフィールドがセメントスの手によって修復されていき、それが終わり次第二回戦の第2試合が行われることとなっていた。

その対戦カードは上鳴と倒したB組の塩崎と出久らの友人でもある飯田の組み合わせである。

「飯田君の後はウオズ君の試合だね。」

「ああ、私の相手は常闇君だね。彼も中々強いが…しっかり対策して勝たせてもらおうとしよう…」

「そうだね。そろそろ準備しないとイケないね…」

「ああ、行ってくるよ。」

ウオズも準決勝、決勝へと上がっていくのに大事な戦いを控えている。

そこに立ちほだかる強敵常闇に備えるため、ウオズも出久に促されて控室に向かう。

「魚津…」

その道中、臨時で用意された保健室から客席に戻る轟がウオズの前に現れた。

「その…ありがとな。お前と緑谷の言葉で俺は…」

轟は出久とウオズの言葉で、自身の過ちに気付けただけでなく、出久に救ってもらっていた。

そのお陰か、憑き物が取れたかのような爽やかな表情でウオズの前に立っている。

「私のことはウオズと呼んでくれ。礼には及ばないさ…君を救い出したのは我が魔王さ…」

轟の言葉に、ウオズは謙遜して廊下を歩いていく。

「いいや、俺はお前にも感謝している。だからこそ、いつか戦って欲しい。全力の俺と

…

「以前の屋内戦闘訓練にて、ウオズは轟と対戦して”半分の力”だけでは勝てないというのを知らしめた。

出久との戦いに負けてはしまったが、それは轟の闘志を更に燃やした。

今度は炎の力も使って、ウオズにリベンジしたいとも思っている。

「ああ、望むところだよ。」

轟からの戦いの申し出に、笑みを浮かべて頷きウオズは廊下を歩いていく。

「緑谷、ウオズ…俺もいつか追いつくからな…」

轟は先程の試合でようやくヒーローのスタートラインに立つことができた。

だがこのまま負けるつもりもなく、いずれ追い抜かすことを胸に近い客席に戻っているのであった。

飯田と塩崎の試合は、飯田がレシプロバーストで攻撃を避けた後、塩崎を場外に押し出して勝利となった。そして、次はウオズの試合を迎える。

『二回戦第3試合！先程は推薦入学者の八百万を瞬殺！だが、その裏には策謀アリ!?イ

ンテリジエンスライダー！ヒーロー科！魚津圭介！VS！こちらも一回戦では見事な瞬殺劇！ダークシャドウを従える黒木侍！常闇踏陰！」

「騎馬戦では組ませてもらったけど、今回は本気で倒させてもらおうよ。」

「それはこちらのセリフだ…」

『スタート！』

フィールドに上がったウオズと常闇が睨み合うとすぐ、プレゼントマイクが開始の合図をする。

『シノビ！』

「ダークシャドウ！」

ウオズがシノビミライドウオツチを起動すると同時に、常闇のダークシャドウが襲いかかる。

「そう来るだろうね…」

ここでウオズは焦って変身することなく、首にあるマフラーを伸ばしてダークシャドウを縛る。

『ダークシャドウをマフラーで拘束！抜け出せるか!?』

《ナンダヨ!?!》

ダークシャドウを縛る布がキツく締め付けられていき、ダークシャドウはもがいて抜

け出している。

『投影！フューチャータイム！』

『誰じゃ？俺じゃ？忍者！』

『フューチャーリングシノビ！シノビ！』

その間にフューチャーリング・シノビに姿を変え、一度ダークシャドウの拘束を外す。

「戻れ！」

一度常闇の指示で彼の元に戻るダークシャドウ。

しかし、その間にもウオズは肉眼では捉え切れない速さでフィールドを駆け、右側面側から蹴りつける。

《コノ！》

蹴られたダークシャドウは少しムキになり、自分の腕をウオズに向けて振るって爪で引つ掻こうとする。

「何処だ……」

しかし、ダークシャドウの腕は空を切った。

即座にウオズはダークシャドウの攻撃を避け、常闇の前から姿を消す。

《ファミカゲー・アブナイ！》

攻撃を避けたウオズが何処にいるのか、ダークシャドウが最初に気付いた。

彼は背後から常闇に迫っており、その距離を確実に縮めていた。

「…!?」

ウオズの動きに常闇自身が対応しきれなかった。

膝蹴りを腹に受けて思わず怯むが、2撃目を加えようとするウオズを駆けつけたダークシャドウが対処して防ぐ。

「流石だね…」

少し引き下がりながらも、常闇の隙をしつかりとカバーしたダークシャドウをウオズは褒める。

「だが、これはどうかかな？」

『ジカンデスピア!』

ジカンデスピア・カマモードを手にしたウオズが、ダークシャドウに一太刀浴びせてから引き下がる。

反撃を試みるダークシャドウであったが、攻撃を仕掛ける前にヒット&アウェイ戦法で攻撃してくるウオズの動きをその目で把握し切れていない。

《フセグノガヤツトダ! フミカゲ!》

「ああ、わかつてる!」

機動力を活かして反撃を避けつつ、連撃を加えていくウオズ。

ダークシャドウは何とか両腕を振るい、攻撃を凌いでいる。だが、常闇自身にはそんな状態のダークシャドウを援護する手段がない。

「なるほど、そつちを叩いてしまった方が良いか…分身の術！」

常闇とダークシャドウのコンビにある隙に気付いたウオズは自らの分身を4体生成する。

「どれが本物だ…」

分身の内3体がダークシャドウに襲いかかり、常闇はどのウオズが本物なのか分からずにフィールド上を見回しているが…

「隙だらけだね…」

その腹部に衝撃が走った。

ウオズ本人が一瞬で常闇に迫り、彼の腹部に蹴りを打ち込んだのであった。

その衝撃を受けた常闇の身体は場外へと飛んで行ってしまう。

ダークシャドウ自体の戦闘力は確かに強力ではあるが、常闇自身はそこまで戦闘能力はない。

その欠点に気付いたウオズは、ダークシャドウを分身を使って封じしまい常闇本体を叩いたのであった。

「常闇君場外！魚津君、三回戦進出！」

そのままフィールドの境界線を越えてしまった常闇は、負けを宣告されてしまい、彼が起きるのを鉄だろうとウオズが差し出した手を握って身体を引き上げてもらう。

「いい戦いだっただよ。ただ常闇君、君自身ももつと強くなつた方が良いかもしれないね……」

「そうだな。そのことを思い知らされてしまったな……しつかり鍛錬する。」

「ああ、その意気だ。」

常闇は敗北こそしてしまつたが、自分の弱点を見つめ直すいい機会になつた。

今後の課題を見つけた常闇はウオズと健闘を称え合い抱擁を交わしてから退場していく。

そして、二回戦最終試合は爆豪と切島の試合となつた。

ゲイツに変身した爆豪の爆破を伴う攻撃を硬化で防御力を高めた切島が防いでいる。

防御面で余裕がある切島は、攻撃を受けつつもパンチを繰り出していく。

『カウンター！』

だが、ゲイツは顔を殴られるのに合わせて爆破を切島の脇腹に撃つた。

「はっは！効かねえっての！この爆発さん太郎が！」

（しぶてえな…流石に硬いだけじゃねえみたいだな…）

硬化で防御力を高めた切島は、攻撃をすっかり凌いでからもパンチを次々と繰り出していく。

『爆豪！再びのカウンター！』

爆豪のカウンターが切島の左脇腹に炸裂する。

『さっきと違って効いてる!?!』

だが、この攻撃を受けてしまった切島はダメージを浮けてしまったのだろうか、顔をしかめてしまっている。

「ダメエ全身ガチガチに気張ってんだろ？その状態で速攻仕掛けてりやいずれどこか綻ぶわ！」

身体を硬化し続けて常に腕を振るっていた切島だが、少しずつ硬化し切れていない場所ができてしまっていた…その限界を上手く突くゲイツの攻撃に怯みそうになるが体制を立て直し、次に放たれた爆破を硬化した腕で防ぐ。

「オラー！オラー！オラー！オラー！」

だが、連続で繰り出されるゲイツの爆破に押されていく。

「トドメ！」

右腕の大振りと共に放たれた爆破を受け、切島は意識を手放しながら吹き飛んで地面に倒れる。

体操服は爆破を受けたせいでかなり破れてしまっている。

「俺と持久戦やらねえってのも、分かるけどなア！」

「切島君！戦闘不能！爆豪君三回戦進出！」

主審のミッドナイトによって爆豪の勝利が告げられる。

「私の相手は爆豪君か……」

爆豪が勝利を収めて三回戦……すなわちトーナメントの準決勝への進出が決まった。

その対戦相手はウオズである。

「ウオズ君、次の試合って……」

「ああ、面白いことになりそうだね。」

ウオズと爆豪の試合決定した。この戦いは体育祭初となる仮面ライダー同士の戦いとなる。

自然と出久やクラスメイト、それに観客達は自然と期待感を高めている。

「いい試合にしよう……爆豪君。」

第27話 トーナメント準決勝

雄英体育祭の最終種目

トーナメントによるガチバトルだが、その準決勝第1試合はA組同士の戦いとなった。

委員長の飯田天哉と屈指の実力者である緑谷出久のカードとなった。

「速いー！」

個性：エンジンの飯田は、脹脛からの噴射で加速することで常人以上の速度を出すことが出来るが…

『仮面ライダージオウ！お前速すぎねえか!？』

仮面ライダージオウ・ドライブブーマーが飯田の機動力を上回る。

「飯田君！もうひとつ走り、付き合ってもらおうよ…！」

「ああ、望むところだ！」

出久に挑むと覚悟を決めてこの体育祭、ここまで勝ちを重ねてきた飯田。スピードで負けてしまっただけでは諦める気がない。

「トルクオーバーー！」

フィールド上を駆け回るジオウの姿をその目で確認しつつ、飯田は自身の足に備わったエンジンの回転数を上げていく。

「レシプロバースト!!」

エンジンマフラーからは青白い炎が噴射され、急加速した飯田がジオウに向けて走っていき、それを見たジオウは一時的に撤退をしようとする。

『並んだー! 飯田速い! 速いぞー!』

フィールド内を一周するように走るジオウを飯田が追い、レシプロバーストで加速したことで追いついたみせた。

「流石、飯田君!」

彼の加速を見て出久は仮面の中で笑って見せる。

「けど! 僕だって!」

ジオウは撤退から迎撃に作戦を切り替えた。180°回転して後方を向きながら一回し後ろ蹴りを飯田に向けて放つ。

「…ッ!」

腕を交差させ、それで蹴りを受けつつもすぐにエンジンの勢いを乗せた回し蹴りをジオウに放つ。

「キック力も凄い…!」

「当然さ……」

仮面ライダージオウが放つ蹴りはかなり強力で、喰らえば場外にまで吹き飛ばされてもおかしくはない。

しかし、レスプロバーストの推進力を加えた蹴りとぶつかり合うことで、飯田自身がダメージを追うどころがジオウが数歩下がることになってしまう。

あと数mほどジオウを蹴り飛ばせたら場外に押し出せる。そんなところまで追い詰めていたが……

「……でかッ……」

レスプロバーストには弱点があった。それは使用後に、数分間のインターバルが必要になりエンジンが使えなくなることであった。

「決めさせてもらおうよ、飯田君……」

なんとかレスプロバーストによって後一步のところまで追い詰められた飯田であったが、その反動で動けなくなったところをジオウに投げ飛ばされてしまい、場外に出てしまった。

『決まったー!!』

「飯田君場外！緑谷君！決勝戦進出!!」

「流石だよ……緑谷君……」

「ううん、飯田君も凄かったよ。」

ミッドナイトにより、出久の勝利と決勝進出が告げられると、お互いを称えつつ握手をする。

飯田が一時的にしか出せないトップスピードに並ぶ速さを常に出し続けられるジオウ・ドライブアーマー、その力に飯田は時間制限の克服という課題を見つけて静かに首を縦に振るのであった…

「次、ウオズ君達の試合だね。」

「うん、どっちが勝ちあがってくるんかな…」

客席に戻った出久は麗日と共にスタジアムのフィールドを見下ろす。

この試合に勝った方が、決勝で自分と戦うことになる。そして、その対戦カードは爆豪VSウオズである。

友人同士、尚且つ仮面ライダー同士の戦いということもあり出久達は唾を飲んで見守ることとなった。

『いよいよ準決勝第2試合！策も強さもプロヒーロー級！仮面ライダーウオズ！魚津圭

介！VS！爆破とライダーの力で成り上がって来た！仮面ライダーゲイツ！爆豪勝己！』

プレゼントマイクの実況と共に、ウオズと爆豪がステージに上がって来る。

「遂にここまで来たね…爆豪君。」

「ああ、テメエとこうして戦うのは初めてだな…」

2人はそれぞれのベルトを腰に付ける。

「我が魔王と拳を交わすのは私だ…！」

『キカイ！』

「俺はアイツにリベンジする…！」

『ゲイツ！』

『ディケイド！』

そして、互いの気持ちを胸に秘めてウオッチを起動する。

『投影！フューチャータイム！』

『デカイ！ハカイ！ゴーカー！』

『ライダータイム！』

『仮面ライダーゲイツ！』

2人は仮面ライダーの装甲をその身に纏い…

『フューチャーリングキカイ！キカイ！』

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディケイド！ディケイド！ディケイドー！』

『スタート！』

その上からそれぞれ、仮面ライダーキカイと仮面ライダーディケイドを模した鎧を身に着けていく。

仮面ライダーウオズ・フューチャーリングキカイと仮面ライダーゲイツ・ディケイドアーマーがフィールド上に立つとともに、試合開始の合図をする。

その瞬間にゲイツが後方に両手を向けて爆破を放ち、その推進力でウオズに向けて飛び出していく。

「我が魔王が言ってたよ、君が最初にするのは右の大ぶっ……！」

「デメエなら分かってると思ったよ……！」

爆豪の右腕を警戒したウオズ、その腹部にゲイツの左手から放たれた爆破が炸裂する。

「対策済みかッ……」

『ジカンデスピア！』

ゲイツの一撃を喰らってしまい怯むウオズ。

そこから爆破による連撃を受けてしまうが、ジカンデスピア・ヤリモードを構えて爆風から身を守る。

「これ以上好きにはさせないさ！」

さらに爆破の合間を縫うように、その槍をゲイツに向かって突き出すとゲイツの胸部に当たって火花を散らす。

「……」

攻撃に集中してしまっていたゲイツはその攻撃を受けて、一度後方に下がって体制を整える。

『ダブル！』

ファイズフォンXからダブルライドウォッチを取り出して起動すると、デイケイドウォッチのスロットに装填する。

『ファイナルフォームタイム！』

『ダ・ダ・ダ・ダブル！』

仮面ライダーW・フアングジョーカーの力をその身に具現化した、ゲイツ・デイケイドアーマーWフォームが右腕から伸びるアームセイバーを構えてウオズに飛びかかる。

「そう簡単にやられるつもりは無いさ……」

その一撃をジカンデスピアで防ぐ。

接近した状態から前蹴りをゲイツの腹に放ち、再び距離を取る。

「オラァー！」

ゲイツは爆破を地面に放って、跳躍しながらウオズに接近。

腕を振り下ろしながらウオズに爆破を放つ。

「ハッ！だー！」

爆破によつて宙に浮くゲイツだが、避けにくい状態の爆豪目掛けて左足で回し蹴りを撃ち込んだ。

「あめえなッ……」

だが、ゲイツは自身の腹に打ち込まれたウオズの足をキャッチするように受け止め、右手から大爆破を放ってウオズを吹き飛ばす。

『爆豪！キャッチ！&アタックだ！コイツはいてえ！』

「クッ……！」

場外に出る手前まで吹き飛ばされるが、ジカンデスピアを地面に突き立ててその場に踏みとどまる。

爆豪の天才的な戦闘センス、強力な彼自身の個性、そして仮面ライダーゲイツの持つ能力やアーマータイム。

それらが組み合わさることで爆豪は出久に負けた時とは全く違う、驚異的な戦士へと成長していた。

「流石だね…爆豪君。君ならば我が魔王と良い競争ができるだろうね。」

「いいや、ちげえな…俺はアイツをも超えて！俺が目指すトップヒーローになる！」

ヒーローの王を志す出久、そんな彼に一度敗れて救われた爆豪は再びトップヒーローになるためのスタートラインに立っていた。協力しつつも競い合いさらに上を目指そうとしている…

「いい心意気だ…だが！その気持ちは私も同じだ！我が魔王を最高最善の魔王にする…それも私の夢の一つだ。しかしながら、私とて頂点に立つヒーローに憧れていないわけではない。」

仮面ライダー達への憧れ、出久の後ろではなく横に立つ覚悟、自らの力で多くを救いたいという気持ち。

それらは自然とウオズ自身にトップヒーローになるという夢を見せていた。

「私も描くよ、この私の物語を！」

『セイバー！』

『アクシオン！』

立ち上がったウオズはビョンドライバーに装填したキカイミライドウオツチを、セイ

バーミライドウオッチを入れ替える。

『投影！フューチャータイム！』

『烈火抜刀！』

『フューチャーリングセイバー！セイバー！』

「祝え！令和の歴史を継承し、新たな歴史を歩む預言者！その名も仮面ライダーウオズ・フューチャーリングセイバー！その戦い、その戦いをとくと目に焼き付けよ！」

自分の物語を描いて歩む覚悟、その物語を描くためにファイヤソード・レッカをその手に持ちゲイツに向ける。

「私の物語の結末は…私が決める！」

『ジャツ君と土豆の木！』

レッカの柄に付いたライドブックマークを押し、剣を地面に突き立てると木の様なものが地面から伸びてきてゲイツに絡みつこうと襲い掛かる。

「オラア！」

地面から伸びてきた4本の木や無数の蔦に爆破を放って、その攻撃を凌いでいく。

『ストームイーグル！』

だが、これらの樹木はゲイツの視界を防ぐのに十分だった。

ウオズがレッカを振るうと共に放たれた炎と風を纏う鳥のエネルギー体が、土豆の木

ごと焼き払ってゲイツに突撃していく。

『クリティカル！火の鳥がゲイツに直撃！』

「クソがッ……！」

攻撃を受けてしまったゲイツは地面に落ちてから、何とか踏みとどまって場外に行つてしまふのを何とか耐える。

『ニードルヘッジホッグ！』

体勢を立て直したゲイツに、今度はレッカから放たれた無数の針が襲い掛かる。

「次から次に……！」

その多数の針に向けて爆破を放ち、ゲイツは攻撃を凌ぐが……

「手を抜く気はないからね……！」

『西遊ジャーニー……！』

今度は2つの金属の輪がゲイツに向けて飛んで行き、それらを何とか撃ち落とす。

『ピーターファンタジスタ！』

だがその隙にレッカの刃先から伸びるワイヤーとフックがゲイツの足に絡みついてしまう。

「隙ありだよ……！」

そのワイヤーを引き寄せることで、ゲイツの身体はバランスを崩して転倒してしま

う。

「クツソ……！」

だが、その状態からでもウオズに向けて爆破を放っていく。

「オラア!!」

地面に爆破を放ち、その推進力で立ち上がったゲイツは腕に付いたアームセイバーでウオズに切りかかる。

「その攻撃、簡単には喰らわないよ。」

そのゲイツの一振りをレッカの刀身で受け止める。

フアングジョーカーも使っているブレードを右腕から生やしているゲイツは、その掌をウオズに向けて爆破を放とうとしたが……

「なるほどね……ハツ……！」

ウオズは剣に踵落としをし、ゲイツの腕ごと地面に叩き付けると、右足を強く踏み込んで後ろ胴回し蹴りをゲイツの腹部に打ち込む。

『ニードルヘッジホッグ!』

さらに剣を振るい、多数の針をゲイツに放っていく。

「クツ……！」

針による攻勢を爆破で防いだゲイツ、だがそこに何度もレッカで切りつけていく。

ゲイツも負けじと爆破を放ってウオズを迎え撃つが、そのダメージを気にすることなく剣を振るう。

『お互い捨て身！ダメージを気にしていない！』

互いの攻撃でダメージを負いながらも、ウオズもゲイツも攻撃の手を止めない。

『ストームイーグル！』

ウオズは剣を縦に振るうと共に、炎と風を纏う鳥のエネルギー体と斬撃をゲイツに放つ。

『ファイナルフォームタイム！』

『フォ・フォ・フォ・フォーゼ！』

吹き飛ばされながらゲイツはフォーゼ・エレキステイツの力をその身に宿した、ゲイツ・デイケイドアーマーフォーゼフォームへと姿を変えて、ビリーザロッドから電撃を放つ。

『ジャツ君と土豆の木！』

その攻撃を地面から木を生やしてウオズは防ぐ。

『俺はテメエもツ……超える!!』

その木々を爆破の推進力で飛び越えて、爆豪が右腕を振るいながらウオズに迫る。

「私とて、負けるつもりは無いさ！」

迫りくるゲイツの右腕を爆破が放たれる前に掴んだウオズが、飛び込んでくる勢いを利用して地面に叩き付ける様に投げ飛ばす。

「このまま決める……！」

『ビヨンド・ザ・タイム！』

少し距離を取りつつ、ウオズは必殺技を放とうとレッカを構える。

「勝つのは俺だ！」

『ファイナルアタックタイムブ레이크！』

ゲイツもデイケイドライドウオッチのボタンを押して必殺技を放とうとする。

『ストーリーリーズラッシュ！』

物語の力と炎を纏わせたファイヤソード・レッカから放たれる斬撃と、電撃を纏うビリーザロッドから放たれるとフィールドの中央でぶつかり合う。

「私は我が魔王に挑む！たとえ、力の差があってもだ！」

出久とウオズが戦うのは初めてのことだ。実力差がどれほどのものなのかウオズにとっても未知である。

勝てるかどうかわからない。だが、それでも彼に挑む覚悟、そして目の前にいるかなり強くなった爆豪に勝つ覚悟、それらの勇氣に応えるようにファイヤソード・レッカからさらに炎が沸き上がってくる。

『魚津が押し切ったー!!』

ウオズの放った斬撃の威力がゲイツのものを上回り、一気に押し切ると共にゲイツのとこまで突き進んで炸裂した。

「クソツ……!」

「爆豪君場外!」

その威力を受け止め切れず、ゲイツの身は空中に投げ出されて場外に飛び出してしまった。

「魚津君! 決勝戦進出!」

『死闘を制した——! 緑谷出久と試合をするのは魚津圭介で決定だー!!』

「強かったよ……爆豪君。」

出久との試合が決定したウオズは、変身を解除した爆豪に歩み寄る。

悔しさもあつてか、彼は一度目を逸らすか……

「次、ゼツテー勝てよ。」

「ああ、君の分も背負って勝つき。」

爆豪は拳を突き出し、それに応えるようにウオズも拳を合わせる。

2人の試合に多くの客が拍手を送り、そして休憩の後、トーナメント最後の試合の時間を迎えるのであった。

第28話 トーナメント決勝戦

「負けちまったか…アイツにどう顔向けすりや良いんだか…」

ウオズとの戦いを終えて廊下を歩いている爆豪は、悔しさからか俯いて歩いてしまっていた。

彼なりに出久に挑んでリベンジしなかったが、その夢はあと一歩で潰えてしまった…

「仮面ライダーゲイツ、爆豪勝己だな…」

「誰だ…?」

スタジアムの廊下を歩く彼に、ピンクのトイカメラを首からかけた男が声を掛ける。

「俺か…?俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておけ…」

「仮面ライダー…?」

通りすがりの仮面ライダーと名乗るその男に、爆豪は困惑しつつ首を傾げてしまう。

「ああ、爆豪勝己。お前にははつきり言っておこう…お前はまだ、仮面ライダーの力を使いこなせていない…」

「そりゃ、よく分かってんよ…」

その男から言われた言葉に、爆豪は納得したように首を縦に振る。

ウオズとの戦闘ではデイケイドアーマーの能力を上手く使いこなせなかったし、他の競技でも爆破メインでの戦いが続いていた。もちろん、その状態でもかなり強いが、出久やウオズに比べると物足りなく感じてしまう。今回の敗因もそうであると爆豪は重々承知していた。

「だから俺が、その使い方を教える。今度の職場体験では俺のここに来い。」

「アンタ、仮面ライダーってだけじゃなさそうだな…プロヒーローなんか?」

「ああ、この世界ではな。まあ良い、今度指名するから覚えておけ。仮面ライダーデイケイド…俺のヒーロー名だ。」

「デイケイド!?!」

その男が名乗ったライダーの名に聞き覚えがあった。

先程も使ったデイケイドの名を関するライドウオッチ、それをふと取り出すと共にその男の方を見るが…

「どこ行きやがった…?」

既にその男はその場から去っており、どこに行ったのかと辺りを見回す。

しかし、その姿を確認できなかつたため仕方なく客席に戻るのであった…

一方その頃、試合を控えた出久は控室に向かっていた。

「緊張するな〜」

緊張で心拍数が上がっており、胸をさすりながら控室の扉を開ける。

「我が魔王……？」

「ウオズ君!？」

ドアを開けた出久の目に映ったのは、椅子に座って戦いに備えているウオズであった。

「ご、ゴメン! 部屋間違えちゃったみたい……」

「気にすることはないさ。」

待ち受けているのは雄英体育祭のファイナーレを飾る、トーナメントとの決勝戦。

緊張しすぎて出久は部屋を間違えてしまったようだ……

「我が魔王、折角の2人の晴れ舞台だ。もつと胸を張りたまえ。」

「う、うん……そうだね……ここまで上がって来たんだ……」

多くの雄英生が目立つ舞台に遂に立てたのだ。

これまで敗れてきた者達の想いを胸に、2人は戦いに臨んでいく。

「お互い勝つ気なのはもう分かっているさ……全力でぶつかり合おう。」

「うん、最高の戦いをしよう！」

2人は決勝戦でしっかり観客に魅せると誓い、出久は自分の控室に向かうのであった
：

『さあ、いよいよ決勝戦！これが体育祭のファイナーレだ！』

プレゼントマイクによって最終決戦の時を迎えたと告げられ、観客は今日一番ぐらいの完成を上げる。

『対戦カードはく策略巡らし、勝ちを狙う！インテリジェンスライダー！魚津圭介！』
歓声に包まれながら、入場ゲートを潜ってウオズがフィールド上に現れる。

『VS！圧倒的な力で勝ち続けた最強の男！キング・オブ・仮面ライダー！緑谷出久！』
続いてフィールドに入場してくる出久に歓声が浴びせられていく。

「さあ、戦おう…」

『ウオズ！』

「うん、いくよ…」

『ジオウⅡ！』

2人がお互いのウォッチを起動しベルトに装填。待機音が流れる中、戦いの開始の時を待つ。

『スタート!』

「変身!」

『投影!フューチャータイム!』

『ライダータイム!』

『スゴイ!ジダイ!ミライ!』

『仮面ライダー!ライダー!』

『仮面ライダー!ウオズ!ウオズ!』

『ジオウ・ジオウ・ジオウ!II!』

開始の合図と共に変身を終えた仮面ライダーウオズと、仮面ライダージオウIIがお互いに向けて駆けていきジカンギレードとジカンデスピアの刃をぶつけ合う。

(さて、次は…)

刃が交わったまま拮抗しても仕方ないと、槍でジオウの刃を薙ぎ払ってから腹に向けて前蹴りを放とうとした。

『サイキョーギレード!』

だが、未来余地の能力でその攻撃を見切ったジオウのもう一本の剣が下から上に三日

月を描くように振るわれる。その刃がウオズの胸部装甲を切りつけ、火花を散らす。

「やはり、見抜かれてしまったようだね…」

ジオウⅡの未来予測があれば、ウオズが次に繰り出す攻撃であればすぐに見切ることが出来る。

「どうするツ…？ウオズ君！」

「ならば、未来を見せるだけだよ…私の攻撃を回避できないという未来をね…」

『ゼロワン！』

自分の攻撃を予測されるなら、予測されても回避するのが難しい程の攻撃を仕掛けられ
ばいい。

その対策を考えていたウオズは、そのためにゼロワンミライドウオツチを起動する。

『投影！フューチャータイム！』

『プログライズ！』

『フューチャーリングゼロワン！ゼロワン！』

ウオズがフューチャーリングゼロワンに姿を変えると同時に、5種類のライダーモデル達が召喚されてフィールド上に降り立つ。そして彼らは、ジオウⅡに向けて次々と攻撃して行く。

「まずは…」

バツタのライダーモデルがジオウⅡに襲い掛かるのに対し、彼も2本の剣で切つて対処しようとしたが…

「うわッ…!」

背後から襲いかかって来たファルコンのライダーモデルに突き飛ばされる。

「次は何処からッ…!」

体勢を立て直したジオウⅡにトラのライダーモデルが攻撃を仕掛ける。

「後ろに気を付けたまえ…」

だが、背後から迫つて来たホツキョクグマのライダーモデルに気付かなかつた。それが放つた冷気によつて足元を凍らされてしまう。

「次は…」

ジオウⅡは頭部にある時計の針型センサーを回転させ、次にどのように攻撃されるかを予測する。

（どの未来でも…やられるッ!）

360。様々な方向から波状攻撃を仕掛けてくるライダーモデルとウオズ。

その未来を見て、回避や迎撃をしても何らかの攻撃を喰らってしまうことが分かる。

「ハアッ…!」

ゼロワンの力で脚力を強化したウオズが、地面を蹴りその勢いでジカンドスピアを

使つて突いてくる。

その迎撃をすると同時にサメのライダモデルが横から突進してきてしまう。

先程、足元を氷で覆われてしまっていたジオウは上手く回避できずに吹き飛ばされる。

この様に、誰かに対処しようとすれば、別の者に攻撃をされてしまう。

「だったら……！」

『ダイケイド！』

ジオウⅡは未来予測もできる上に久が現在変身できる形態の中では一番能力が高い。

しかしながら、その能力の手数は少なく、ウオズ・フューチャーリングゼロワンの様な幾つも手数がある相手には少し不利である。

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ダイケイド！ダイケイド！ダイケイドー！』

ライダモデルとウオズ本人を合わせて6対1の状況に、流石のジオウⅡでも対処しきれないということでジオウは戦法を切り替えることにした。

『ゴースト！』

『ファイナルフォームタイム!』

『ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

ここで、ゴースト・グレイトフル魂の力をその身に宿すジオウ・ディケイドアーマーゴーストフォームに姿を変えると15人の偉人ゴーストたちをフィールド上に出現させる。

『フィールド上がそれぞれの戦力でこつた返している! さあ、どうなる!?!』

「……は任せろ……!」

宮本武蔵の魂から生まれたムサシ・ゴーストが他の偉人たちと共にジオウの周囲にいるライダモデル達に攻撃を仕掛けていくことで、ジオウに対する脅威を取り除く。

「ほう、騎馬戦の時の……」

騎馬戦では、ライダモデルを使って防御を固めるウオズに対し、爆豪の変身するゲイツが同じ様にディケイドアーマー・ゴーストフォームの力で偉人ゴースト達を召喚してライダモデル達を攻撃させた。

数で勝る偉人ゴーストはライダモデルを完封し、ゲイツがジオウに挑むことが出来る様にしてみせたのだ。

「うん、かつちゃんがやってた作戦だね……」

爆豪が行った作戦を参考にし、ジオウはライダモデル達を封じる。

各偉人ゴースト達が各々の手段でライダモデル達を対処している間に、ライドハイセイバーを構えてウオズに一騎打ちを挑む。

『ハイ！ドライブ！』

『ヤリスギ！』

『デュアルタイムブ레이크！』

『爆裂DEランス！』

ライドハイセイバーから放たれる、マックスフレア、ファンキースパイク、ミッドナイトシャドーのタイヤ型エネルギーとジカンデスピアの刃先から撃ち出された赤いエネルギー刃がぶつかり合う。

『カマシスギ！』

お互いが距離を詰め、ライドハイセイバーとジカンデスピア・カマモードの刃が混じり合う。

「流石我が魔王…私の作戦を見事に打ち破ってみせたね…」
「ウオズ君だつて、ジオウⅡを完封しちゃって凄いよ…」

相手の力を認め合う両者が、一度身を引いて距離を置いてから再び刃を振るう。

その刃がぶつかり合うと同時にライダモデルと偉人ゴーストも自身の最大火力の技を放ち、お互いの攻撃がぶつかり合つて爆発する。フィールド上が一時的に爆炎で包ま

れ、それが晴れると刃を交えるジオウとウオズの姿しかなかった。

「ライダモデルがやられたか……」

「ありがとう、ムサシさん達……」

お互いの攻撃でライダモデルと偉人ゴーストは倒されてしまったようで、2人は形態を切り替えようと新たなウオッチを取り出す。

『リバイス!』

『ウイザード!』

『投影!フューチャータイム!』

『ファイナルフォームタイム!』

『フューチャーリングリバイス!リバイス!』

『ウイ・ウイ・ウイ・ウイザード!』

ウオズがフューチャーリングリバイスに、ジオウがディケイドアーマーウイザードフォームにそれぞれ姿を変える。ウオズはバーストライカーに跨り、ジオウはウイザード・オールドラゴンの力をその身に宿し、ドラゴンの翼を背中から生やして空を飛ぶ。

『プレラノドン!』

ウオズはバーストライカーにプレラノドンの力を具現化させ、宙を浮くホバーバイクに変形させる。

『さあさあ、空中戦の幕開けだー!』

ジオウとウオズはそれぞれの力で空を飛び、バーストライカーにのるウオズがジオウに向けて突撃していく。

それに対し、ジオウは両腕に装備したウィザードラゴンの爪を模した籠手で殴り飛ばして防ぐ。

「流石、ドラゴンの力…」

ウィザードラゴンの力を纏うジオウに、ウオズもどう対抗しようかと考える。

だが、その間にも背中から生えるドラゴンの尾を振るってウオズに攻撃を仕掛ける。空中でウオズがバーストライカーを上手く操縦して、その攻撃を下降して避ける。

「ハアッ……!」

その状態から再びジオウに向けて突撃していく。

それを防ぐようとジオウは胸部にあるドラゴンの頭部から火を噴いた。

「これで防げる……!」

車体を傾けた状態で飛んだ状態で突っ込んでいく。

ボディが炎に当たると弾いていき、ウオズの身体に炎が達するのを防いでいる。

「けど、避けられないってわけじゃない!」

通常のバイク程のスピードで突っ込んでくるそのホバーバイクを上を飛んで避ける。

『ヘイ！ 鎧武！』

『デュアルタイムブ레이크！』

オレンジの果汁のようなエネルギーを纏った斬撃がライドヘイセイバーから放たれる。

「おっと…」

その斬撃を避けたウオズであったが…

「そこだッ…！」

その隙を突く様に、ウィザードラゴンの装備を身に纏った状態で回転しながらウオズに突っ込んでいく。

「しまった！」

『ここで緑谷！ 決死の突撃でバイクを破壊だ！』

出久の突撃により、ドラゴンの爪がバイストライカーを貫き大破させる。

「…ッ！ 流石だね…」

バイストライカーが空中で爆発する中、ウオズは空中で体勢を立て直して地面に着地する。

『セイバー！』

『投影！ フューチャータイム！』

『烈火抜刀!』

『フューチャーリングセイバー!セイバー!』

そしてすぐ、ビヨンドライダーの中のミライドウオッチを入れ替えて、フューチャーリングセイバーに姿を変える。

『ジオウII!』

『ライダータイム!』

『仮面ライダー!ライダー!』

『ジオウ・ジオウ・ジオウ!II!』

そして、戦いのケリを付ける為に、出久もジオウIIへと再び変身しながら地面に降り立つ。

「さあ、ケリをつけよう!」

『ビヨンド・ザ・タイム!』

ウオズはビヨンドライダーを操作し、ファイヤソード・レッカを構える。

『ジオウサイキョーギレード!』

『ワン・フォー・オール!』

「うん、全力で撃ち合おう!」

『キング!ワンフォーオール!ギリギリスラッシュ!!』

ジカンギレードとサイキョーギレードを合体させたジオウサイキョーギレードにワ
ン・フォー・オールのエネルギーが流れ込む。

「いくよー！ウオズ君！」

「ああ！我が魔王！最高の結末を描こう!!」

体育祭の中でジオウが轟に、ウオズが爆豪にもぶつけた最大火力の必殺技を放ち、ス
タジアム中央でぶつかり合う。

「勝つのは…」

「僕だ／私だ！」

2人の剣から放たれた巨大なエネルギーが混じり合い、大爆発を起こす。

爆風が巻き起こって観客に吹き付け、爆炎はスタジアムの外からでも見えるほどに立
ち上ってしまう。

『さあ、戦いの結果はどうなった!?』

2人の必殺技がぶつかり合ったことにより起きた大爆発はスタジアムの地面を抉り、
粉塵を宙に巻き上げた。

それにより客も実況席もフィールド上の様子を視認することが出来なかったが、すぐ
に煙も減ってフィールドに立つ戦士の姿が観客の目に映る。

「魚津君場外…優勝は！緑谷君!!」

煙が晴れるとそこには、地面に振り下ろした剣を突き立てるジオウの姿があり、その先には場外に吹き飛ばされて壁にもたれかかるウオズの姿があった。

雄英体育祭の総合優勝者が決まったその瞬間、会場からは拍手と大歓声が沸き上がったのであった……

第29話 表彰式

「魚津君場外…優勝は！緑谷君!!」

『以上で全ての競技が終了！今年度の雄英体育祭1年ステージの優勝は！A組！緑谷出久！』

何度も繰り広げられた激しい力のぶつかり合いの末に、この雄英体育祭の総合優勝が仮面ライダージオウこと緑谷出久で決定した。

「ウオズ君！」

だがその出久は、優勝を喜ぶよりも先に場外で倒れているウオズに駆け寄る。

「我が魔王か…」

駆け寄ってきた出久に身体を揺さぶられると、気を失っていたウオズは意識を取り戻して変身を解除する。それと同時に出久もジオウの変身を解いて素顔を見せる。

「ふふ、負けてしまったよ。」

出久の素顔を見たウオズはどこか安心したように笑みを浮かべて起き上がる。

「強いね。流石だよ…」

「ううん、ウオズ君だって強かったよ。」

出久がウオズに差し出した手を握って立ち上がる。

そして、お互いの健闘を称える様に抱擁を交わす。

「君と戦えて良かったよ……改めてその力と君の強さを、この身で感じることが出来たよ。」

嘗てテレビの中で観たヒーローとの戦いをその身で体感できただけでなく、長きにわたり支えてきた出久の成長も見ることができてどこか満足した様子を見せている。

「ううん、僕の方こそ。ウオズ君やかっちゃんと同じ合えてもつと強くなれたよ。ありがとう……！」

体育祭に向けて生徒達は己を磨き、力を蓄えてきた。

出久もより多くのライダーの力を使いこなせるようになり、ウオズや轟に打ち勝って優勝という結果を出すことができた。

「こちらこそありがとう……いい戦いができたよ。さて、そろそろ表彰式が始まるみたいだね。」

出久に手を引かれて立ち上がったウオズの目には、入場ゲートを潜ってやって来る生徒達や教師陣。

表彰台を作るセメントスの姿が映っていた。

体育祭の優勝者も決まり、いよいよ閉幕の時を迎えたのだと分かると出久と共にそち

らに向かう。

「緑谷出久、私の魔王が君で良かったと心から思うよ。君は強いし頭も切れる…それに優しい男だ。君ならば真のヒーローの王になれるよ。」

「そ、そう言われたら…照れるよ…けど、ありがとう。僕もウオズ君の支えがあつてここまで来れたよ…」

「恐悦至極だね。これからも共に戦おう。」

「うん…！」

2人はお互いの拳をグータッチさせながらクラスメイト達がいる方に歩いていくのであつた…

「今年度雄英体育祭1年の全ての日程が終了！それではこれより、表彰式に移ります！」

ミッドナイトの指示と共にせり上がって来た表彰台には3人の生徒が立っている。

本来であれば、ベスト4の4人が立っていないとはいけないのだが…

「3位には爆豪君ともう一人、飯田君が居るんだけど…ちよつとお家の事情で早退になつちやつたのでご了承くださいいな☆」

「メデイア意識……」

飯田の下に、兄であるインゲニウムが任務中に重傷を負ったという連絡が入ってしまった病院に行ってしまった。だが、ミッドナイトはそのアナウンスの際にすっかりメデイアを意識してカメラに可愛い表情を見せる。

「飯田ちゃん、張り切ってたのに残念ね。」

「う、うん……」

飯田が兄であるインゲニウムのことをかなり尊敬していることを知っている出久や麗日は、飯田自身やヴィランによって負傷してしまった彼の兄のことを心配している。

表彰台の上立つ出久やウオズもインゲニウムの無事を祈っている。

「それではメダル授与よ！今年メダルを授与するのは勿論この人……！」

「ハーハツハツハツハ！」

メダルを授与するために登場したオールマイトの高笑いを聞き、観客は彼の登場に立ち上がって歓声を上げ始める。

「私がメダルを持つて！」

「我らがヒーロー！オール「来たア！」マイト！」

スタジアムの屋根から飛び降りて登場するオールマイトの名乗り口上とミッドナイトによるオールマイトの紹介が不運にも被ってしまった。

「被った…」

「しかし、今年の1年は良いなあ〜」

「No. 1ヒーローに見てもらえるもんな。」

登場こそミッドナイトと被ってしまったが、オールマイトの偉大さは変わらない。

観客の多くは彼にメダルを授与してもらえる上位者たちを羨ましく思っている。

「それではオールマイト。3位からメダルの授与を…」

「ハハハハハ！おめでどう、爆豪少年。君は心身ともに強くなったな。」

「まあな…」

爆豪も幼い頃からオールマイトに憧れていた。

そんな彼から自身の成長を認められると、少し照れ隠しをするように下を向く。

「これからももっと成長してみせてくれ。」

「ああ…！」

オールマイトが爆豪を抱きしめつつも激励の言葉を送り、爆豪もその言葉に応えるように拳を握りしめて強く頷く。

「ウオズ少年、おめでどう。君の緑谷少年に挑み横に並び立つ覚悟、しっかり私の心に焼き付けさせてもらったよ…」

「光栄です。これからも競り合う為にもっと精進しますよ…」

「うむ！その意気だ！」

ウオズもメダルを首にかけてもらった後に、オールマイトからの抱擁を受ける。

「さて、緑谷少年！」

「は、はい！」

そして、1位の出久が表彰を受ける時が来た。

「おめでとう、”君が来た！”っていうのをしっかりと見せてもらったよ……」

「あ、ありがとうございます……」

オールマイトからの誉め言葉に思わず出久は嬉し涙を流し始めてしまう。

「ま、まあ……泣き虫なところは治した方が良くもな……」

「は……」

涙を溢れさせている出久をオールマイトが抱擁し、客席から沸き上がる拍手が彼らに浴びせる。

「さあ！今回の勝者は彼らだった！しかし皆さん！ここにいる全員がここに立つ可能性があった！ご覧いただいた通りだ！競い！高め合い！さらに先へと昇っていくその姿！次代のヒーローは確実に！その芽を伸ばしている!!」

オールマイトがこの場にいるヒーロー科だけでなく、雄英高校生徒全員を称える言葉に生徒達は来年こそ1位を取ろうと心の中で闘志を燃やす。

「てな感じで最後に一言！皆さんご唱和ください！セーのー！」

「Plus！「お疲れ様でしたー！！」Ultra！」

「ええー！そこはPlus Ultraでしょ！オールマイト！」

観客の殆どが雄英の校訓を唱える中、ただ一人全く違う挨拶をしてしまったオールマイトにはブーイングの嵐が浴びせられる。

こうして何とも締まりがないが、雄英体育祭は幕を下ろしたのであった…

その頃、東京の保須という街では…

「まだだ…この世には贋物が多い。英雄は…見返りを求めてはならない。」

ヒーロー殺しステイン。その男は自身の思想を実現するため、刃を振るって多くのヒーロー達を再起不能にしてきた。誰かを助けるのに見返りを求めるプロヒーローが、彼にとっては自身の理想像から大きくかけ離れていた。そんな彼らを日々排除しようと戦っていた…

「君の理想を叶える力。この僕が分けてあげようか？」

街の裏路地を歩くステインの前に、黒いスーツに身を包み鉄仮面を付けた男が声を掛

ける。

「理想を叶える力……？そんなもの」

「与えてあげるよ。君の想いがこの力をさらに強くする。」

『ジオウ……』

仮面ライダージオウを禍々しくしたような姿が描かれている黒いウオッチを手にした鉄仮面の男は、そのボタンを押して起動し、ステインが拒否する間もなく胸部にそのウオッチを埋め込む。

「何をツ……するツ……!？」

アナザーウオッチを埋め込まれてしまったステインの身体は禍々しい闇のオーラに包まれてしまい、仮面ライダージオウを歪にしたような姿の怪人にその姿を変えてしま

う。
「ヒーロー殺しステイン。君のその理想は英雄を否定するだけでは敵わない。ならば、君自身が示せばいい……英雄の王となつてね。」

「英雄の王……？そうだ、英雄回帰……この俺が到達してみせよう……!」

英雄回帰、それは「ヒーローとは見返りを求めてはならない。自己犠牲の果てに得る称号でなければならぬ。」という主張であり、ヒーローが職業になるよりも前にあつた原理主義的な考え方だ。

人を救うという目的で英雄をする英雄だけを残し、人を救うということを金稼ぎの手段にする贗物は排除する。そんな思想を持ったステインは今日も飯田の兄でもあるプロヒーロー、インゲニウムを急襲していた。

そして、アナザージオウの力を得た彼の野望は加速していた。

「さあ、英雄の王となり、英雄回帰を実現する姿をこの僕に見せてくれ！」

新たなアナザージオウの誕生に、鉄仮面の男は高笑いをするのであった…

職場体験編

第30話 ヒーローネーム

雄英体育祭とそれに関する連休が明け、久々の登校日を迎えた。

「やっぱりテレビで中継されると違うね〜超声かけられたよ来る途中!」

「あー俺も!」

朝の教室では芦戸や切島が体育祭の影響で町中のいろんな人から声を掛けられたという話しており、他のクラスメイトもそう言った話題で持ちきりだった。

「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ!」

「ドンマイ」

「うわー!!」

なお轟に大水結を喰らった挙句客席からドンマイコールを浴びせられていた瀬呂は、しばらくそのトラウマを掘り返されることになりそうだが:

「たった1日で一気に注目の的になったな!」

「流石雄英だな〜」

雄英体育祭の影響を実感しているのは出久やウオズも例外ではなくて、道で小学生に

変身してるところを見せて欲しいとよくお願いされていた。そんな話をしつつも朝礼が始まる時間には、全員大人しく自分の席に座っている。

「おはよう。」

「「おはようございませす！」」

始業と同時に入って来た相澤に、生徒たちは元氣よく挨拶する。

「ケロ、相澤先生包帯取れたのね。良かったわ…」

「バアさんの処置が大袈裟なんだよ。」

USJで大怪我を負ってしまっていた相澤だが、その頭部を覆っていた包帯は完全に取れていた。

「んなことより、今日のヒーロー情報学、ちよつと特別だぞ。」

（もしか、抜き打ちテストか…!? 体育祭で気が抜けた後だし、十分考えられるだろうな…）

”特別”という言葉に生徒達は抜き打ちテストでもあるのではないかと身構えてしまう。

「コードネーム、ヒーロー名の考案だ。」

「「胸膨らむ奴キター!!」」

特別なことが自分のヒーロー名を決める授業と分かると、A組生徒達のテンションが

一気に上がる。それを相澤がギリりと睨んで、その場を静かにさせる。

「と言うのも、先日話したプロヒーローからのドラフト指名に関係してくる。使命が関係してくるのは、経験を積み、即戦力として判断される2〜3年から。つまり、今回お前達1年に来た指名は将来性に対する興味に近い。」

今回の指名は今後の指標にもなる。この指名を減らさないようにするどころか、数を増やすのが理想的だろう。

「で、その集計結果がこれだ。」

そう言いつつ相澤が黒板に指名の集計結果を表示する。

一番多いのは出久の約4000票で、そこにウオズ、爆豪が200票近くで続いている。

他にも轟や飯田、常闇も票数が多い方だ。

「例年はもつとバラけるんだが、今年はベスト8に票が集中したな。」

「シロクロ付いた!」

「見る目ないよね〜プロ。」

轟や常闇の様なベスト8入りメンバーにも指名が集まっているのに対し、最終種目の一回戦で負けてしまった生徒や、第二種目で敗退してしまった生徒は自分の指名数が少なかったり0であることに不満そうだ。

「わく指名来てた〜」

「あまり揺らさないでくれるかな？少し酔いそうだ。」

自分に指名が何件か来ている麗日は、喜びの余り後ろからウオズの身体を揺らしてしまっている。

「この結果を踏まえ、指名の有無に関係なく職場体験つてのに行つてもらおう。」

前々から生徒達は話を耳にしていたことがあったが、ヒーロー科1年向けに行われるプログラムであり、1週間ほどプロの現場に行つて彼らの仕事を現場で学ぶというものだ。実りある訓練になることは確実だ。

指名が来た生徒は、自分に指名をくれたヒーローの下に行くことになっている。

因みに、指名がない生徒は雄英が用意してくれたリストにあるヒーローを選んでそこに職場体験に行くことになっている。

「それでヒーロー名か！」

「俄然楽しみになってきた！」

「まあその、ヒーロー名は仮になるんだが…適当なモンは」

「付けたら地獄を見ちゃうよ！」

突如教室に入つて来たのは、18禁ヒーローでありながら雄英の教師も務めるミッドナイトだ。

そのセクシーなコスチュームに一部の男子生徒は鼻の下を伸ばしている。

「学生時代に付けたヒーロー名が、世に認知されてそのままプロヒーロー名になってる人も多いからね。」

「「ミッドナイト?!」」

「ま、そう言う事だ。その辺のセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう。俺はそういうのは出来ん…」

因みに相澤のヒーロー名、”イレイザーヘッド”は同級生のプレゼントマイクに付けてもらったものである。

「将来自分がどうなるのか、名を付けることでイメージが固まりそこに近付いていく。名は体を表すつてことだ、オールマイトとか。」

と言いつ残して相澤は残りをミッドナイトに任せて、寝袋の中で寝始める。

ミッドナイト主導でヒーロー名を記入する様のボードと、サインペンが渡される。

10分後

「じゃあ、そろそろ。出来た人から発表してね。」

「前に出て発表するのか…まあ、発表できないような名前を付けてはいけないということだね。」

「その様だな、ここで付けるヒーロー名は外でも使う物、先生方が言うように安易なもの

はつけられないな。」

考えたヒーロー名を前に出て発表しなければいけないということに、クラスメイト達は困惑しているが、その目的をウオズと飯田は冷静に分析する。そんな状況で青山が教壇に立ち、自身のヒーロー名を発表する。

「いくよ…輝きヒーロー『I can not stop twinkling!』訳して、キラキラが止められないよ!」

((短文!))

だが、トップバッターを務める青山のヒーロー名はかなり型破りなものであった。

「そこはIを取ってcan, tにした方が呼びやすい。」

「それね、マドモアゼル。」

((いいのかよ!))

しかもそれを訂正しつつも容認するミッドナイトに、A組一同驚きを隠せない。

「じゃあ!次はアタシね!ヒーロー名『エイリアンクイーン!』」

「2!血が強酸性のアレ目指してんの!?やめときな!」

((馬鹿野郎!最初に變なの来たせいで大喜利みたいになってるじゃねえか!!))

青山、芦戸ととんでもないヒーロー名を発表する2人に、場の空気が固まってしまふ。

「ケロ、じゃあ次、私良いかしら?」

「はい！梅雨ちゃん！」

そんな空気の中、蛙吹が名乗りを上げて壇上に上がる。

「小学生の時から決めてたの、梅雨入りヒーロー『フロッピー』！」

「かわいい！親しみやすくていいわ！皆から愛されるお手本のようなネーミングね！」

「『フロッピー』！フロッピー』！フロッピー』！」

（（ありがとうフロッピー！空気が変わったよ！））

大喜利のような空気を、蛙吹の考えたヒーロー名のお陰で緩和することができた。

そして、次にウォズがヒーロー名を発表するために皆の前に出る。

「では、私のヒーロー名は…インテリジエンスライダー！『ウォズ』！」

ウォズは雄英体育祭でプレゼントマイクに付けられた2つ名を冠し、名前そのものは普段からの呼び名を選ぶことにした。

普段からウォズと呼んでくれと言ってる彼のヒーロー名に一同納得するように頷く。

その後も、多くの生徒達が自分に付けたヒーロー名を発表していく。

「『爆殺王』！」

「そういうのは止めた方が良いわね。」

「なんでだよ！」

なお、爆豪の考えたヒーロー名はあまり評判は良くなかった…

「爆発さん太郎にしろよ！」

それに対して切島が弄る中、ウオズが爆豪に1つの提案をする。

「ヒーロー名、ゲイツにはしないのかい？」

「確か、ライダーの方の名前よね？」

「まあな、けどあれはまだ完全に俺の力じゃねえ…」

仮面ライダーの力を完全に使いこなせていない。

体育祭でもデイクイドから指摘されてしまっていたことだが、それ故に元の自分の個

性に肖ったものを付けたいというのが爆豪の希望であった。

爆豪が席に戻り、その後も何人かが発表をしていく。

「緑谷君。できた？」

「はい！」

そして、出久もいよいよ自分のヒーロー名を発表する時が来た。

「ヒーローの王『ジオウ』です！」

出久の中で幾つか迷いがあった。自分の憧れであるオールマイトをインスパイアした名前。爆豪に付けられ、麗日にもポジティブな意味に変えてもらった名前“デク”。様々な選択肢があつたが、出久はNo. 1ヒーローと仮面ライダーの力の集大成であるヒーローの王に相応しい名前を選んだのだ。

「『爆殺卿』!!」

出久のヒーロー名が決まった一方、爆豪だけは授業中に名前が決まらなかったのだ
た…

「ん〜どの事務所にするか迷うな〜」

「私も指名をしてくださったヒーローの事務所リストに目を通すだけでも、1日かかり
そうだよ。」

その日の放課後、どのヒーロー事務所に行こうか迷っている出久とウオズが、家に帰
ろうと教室の扉を開けた時だった。

「私が独特の姿勢で来た!!」

彼らの前に腰を直角に折り曲げた、前傾姿勢のオールマイトが登場する。

「オールマイト、どうしたんですか? そんなに慌てて!」

「ちよつとおいで…」

「は、はい。」

「俺も行っただい? 話してえことがある。」

「ああ、構わんよ。」

オールマイトに声を掛けられて出久とウオズに加えて爆豪が仮眠室に向かう。

「単刀直入に言うのと、緑谷少年、君に私の師匠からの指名が来ている。」

「オールマイトの師匠？」

「ああ、その名はグラントリノ。嘗て雄英で1年だけ教鞭を取っており、私の担任だった方だ。」

グラントリノは雄英高校で1年だけ教師を勤めており、その期間にオールマイトを鍛え上げた男だ。

先代のワン・フォー・オール継承者である志村に次ぐ第二の師匠ともいえるような存在だ。

「ワン・フォー・オールの件も存知だ。そのことで君に声を掛けたのだろう……」

「そんなすごい方が！」

オールマイトの師匠と聞き、出久はやや興奮気味だ。

「ワン・フォー・オールの件を知っている人はまだ居たということかな？」

「グラントリノは先代の盟友。とうの昔に隠居なさっていたが、まだ活動を続けていたらしい。」

ウオズは自身の問いかけに対する答えから、そのグラントリノがオールマイトよりも

かなり世代が上のヒーローなんだろうと推察する。

「手紙を書いた時に君のことを書いたからか……それとも私の指導不足を見かねての指名か……かつての名を出して指名してきたということは……こええ……こええよ……震えるなの足よ！」

（オールマイトがガチ震いしてる！）

だが、彼のことに関して話すオールマイトは怯えているのか震えている。

その様子に、グラントリノが只ならぬ人物なんだろうと3人は察する。

「君を育てるのは私の仕事だが……折角の指名だ！存分に扱われてくれッ……!!」（どれだけ恐ろしい人なんだ！）

「で、彼からの指名がウオズ少年！君にも来ているんだ。恐らく緑谷少年とのセットだろう。」

「な、なるほど……」

オールマイトが恐れる人物から指名が来ていたと聞き、ウオズは少し身を引く。「ところで、かつちゃんの話しておきたい事って……？」

「ああ、俺も指名の件だ。」

「……」ここで出久は、話をしたいと付いて来た爆豪の方に話を振る。

「体育祭ん時にも声かけられたんだけど、デイケイドって奴から指名来てた……」

「ディケイド!？」

「ああ、多分このディケイドだ。」

体育祭の時に声を掛けてきた男の話をしつつ、ディケイドライドウオツチを爆豪は取り出す。

「仮面ライダーディケイドが爆豪君に指名か…? どういう意図なんだ？」

仮面ライダーディケイドは平行世界を巡るヒーローで、その変身者である門矢士は訪れた世界で何らかの役割を与えられる。

そのことを理解していたウオズは、もし本物が居るのならプロヒーローになってこの世界で活動していてもおかしくないと考える。

「テメエらは指名来てたか？」

「ちよつと見てみるよ。」

爆豪に言われて出久とウオズは自身の指名リストを確認する。

50音順に並んでいるため、どのページにディケイドの名前があるのかがすぐに分かった。

「僕のところには無かったよ…」

「私には指名が来ているね。」

確認した結果、出久には指名が無かったが、ウオズの下には来ていた。

「俺はディケイドんどこに行ってもっと強くなる。テメエらはどうするんだ…?」

「僕はグラントリノのどこに行ってみるよ。他にも凄い人たちから指名来てるけど、オールマイトの先生の所で鍛えてみたいよ。」

「ウム、良い心がけだ! 2人共! ウォズ少年はどうするんだ?」

爆豪と出久はさらに強くなるための覚悟を決め、その思いをオールマイトも受け入れる。

一方のウォズは出久と共に行くか、爆豪と共に行くか、それとも他のヒーローの所に行くか迷っていた。

「我が魔王の特訓を見届けたい気持ちもあるが、ここは爆豪君に付いて行くとしよう。プロヒーローディケイドの姿を私も一目見てみたい…そちらに付いて行くとしよう。」

グラントリノもディケイドもウォズにとつてかなり気になる存在であった。

だが、元々仮面ライダー好きなウォズは元から知っている仮面ライダーディケイドの方が気になっている。

「すまないね。今回は別行動になってしまつて…」

「ううん、大丈夫だよ。しっかり鍛えて戻ってくるから!」

「つーことで、テメエも一緒か…ウォズ。よろしくな!」

こうして出久、爆豪、ウォズの職場体験先が決まり、その当日を迎えるのを待つこと

となつたのだ……

第31話 職場体験開始

職場体験当日。

各々が職場体験先に向かうため、A組一同は駅に集合していた。

「全員コスチューム持ったな」

彼らを見送るため、相澤も生徒達と共に駅に来ていた。

「本来なら公共の場じゃ着用禁止だ。落としたりするなよ。」

「ハイー！」

「伸ばすな！ハイ」だ芦戸！」

「ハイ……」

少し浮かれ気味に返事をする芦戸を、相澤が注意する。

落ち込んだ様子の芦戸に視線が集まるが、すぐに相澤が話を続ける。

「くれぐれも、体験先のヒーローに失礼のないように……じゃあ、行け。」

「「ハイ!!」」

相澤の言葉と共にこの場は解散となり、生徒達は各々の体験先に向かう為に各方面に向かう電車のホームに向かう。

「飯田君！」

そんな中、一人静かにホームへと歩いていく飯田の下に出久とウオズ、麗日が駆け寄る。

「本当にどうしようもなくなったら言っただけ……」

「うん、うん。」

「ああ、何かあれば連絡してくれ。」

「友達だろ……?」

体育祭の裏側で、飯田の兄であるプロヒーローインゲニウムはヒーロー殺しステインの襲撃を受けて再起不能の重傷を負ってしまっていた。

それ以来、飯田は一人で考え込む時間が多くなってしまっていた。それに職場体験の行き先は彼の兄が倒れた保須にしたと聞き、ウオズや出久は彼がステインへの復讐をしようとしているのではないかと考えていた。

「ああ。」

飯田を心配する3人の方を向いて一言返事し、飯田はホームに向けて歩いていくのであった。

「おい、そろそろ行くぞ。」

「そうだね、爆豪君。では2人共、私達もこちらの方面に行くとするよ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

「じゃあな。」

飯田に続いてウオズと爆豪も列車の方に向かい、出久と麗日もその場で分かれて各々の行き先に向かうのだった：

「……」が彼の事務所か……

爆豪と共にデイケイドの事務所までやって来たウオズ。

その場所はビルの中で、デイケイドと共に旅をしてきた光写真館では無いので、今は光夏美らとは一緒に居ないと推測する。

「行くか。」

爆豪が先陣を切ってビルの中に入り、事務所が入っているテナントを探す。

「……」だ、邪魔するぜ。」

相澤から渡された資料を見て、部屋を突き止めるとその扉をノックして入っていく。

「来たか。」

「やはり、あなただったか……」

扉を開けた2人を出迎えたのは、ウオズもよく知る人物であった。

「前世の頃テレビや映画で何度も見た男であり、仮面ライダーディケイドの変身者として彼に認知されている。」

門矢士、世界の破壊者と呼ばれる男である。

「魚津圭介に爆豪勝己だな。俺は仮面ライダーディケイド、門矢士だ。覚えておけ。」

「私のことはウオズと呼んでくれ。これから一週間よろしく頼みます。」

「ウツス。」

軽い挨拶を済ませると、士が2人を事務所の中に招いていく。

「早速だが、俺はプロヒーローなんてのはよく分らん。今回はお前達を強くするため呼んだから、しっかり鍛えていくぞ。」

（今回門矢士に与えられた役割はプロヒーローだったということか。）

士は様々な並行世界を訪れる際、その世界で様々な役回りを与えられる。

この世界では士はプロヒーローではあるが、恐らくこの世界に来訪すると共にプロヒーローになっただけであり、免許習得などは体験していない。

「コスチューム着て外出ろ、早速特訓だ。特に勝己、お前はやらないといけないことが多いからな。」

「わーつてるよ。」

士の指示で2人はコスチュームに着替えて、そのまま彼に連れられて外に出ていく。

門矢士に連れられて、私達は廃工場に来ていた。

「ここなら心置きなく戦えるだろ。」

「んで、どんな特訓をするんだ？」

「今日はひたすら組み手だ。勝己にはこれを使ってもらう。」

そう言つて門矢士は一つのアタツシユケースを取り出して、それを開いて中を見せる。

「ライドウオッチ!？」

そこには十数個のライドウオッチが並んでいた。

それぞれには仮面ライダーの顔が描かれていて、この描かれたライダー達の共通点上げるなら…所謂2号ライダーってことだろう。

「勝己、お前は今日これを使って戦え。もっとライダーの力を学ぶんだ。」

『ゲイツ!』

『GG33!』

門矢士からの指示に従い、早速G3のライドウオッチを選んで爆豪君は変身をしようとする。

「では、私が相手しよう。」

『ウオズ!』

「いや、2人がかりで俺に挑んで来い。」

「了解…」

私と爆豪君でタイマンをするのかと思いきや、私達2人で仮面ライダーデイケイドと組み手することになった。

2対1とは言え、苦戦を強いられることになるだろう。

『ライダータイム!』

『投影!フューチャータイム!』

『カメンライド!』

『仮面ライダーゲイツ!』

『スゴイ!ジダイ!ミライ!仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

『デイケイド!』

『アーマータイム!G3!』

私と爆豪君は変身を終え、仮面ライダーデイケイドの方を向く。

「さあ、来い！」

ライドブツカーを構えるデイケイドに私達2人が挑んでいく。

ゲイツは掌からの爆破で距離を詰め、爆破を浴びせようとするが避けられ、そのデイケイドの隙を突く様にジカundesピア・ヤリモードで刺そうとするがライドブツカーで切り伏せられて軌道を逸らされる。

「オラア！」

だが、そのタイミングでゲイツはデイケイドに爆破を浴びせた。

しかしながら、これも左腕で防がれる。

「爆豪君、銃も使いたまえ。」

「これか？」

仮面ライダーゲイツ・G3アーマーの右腕にはGM-01スコープオンを模した単発の銃のような物が、左腕にはGM-02サラマンダーを模したランチャーの様なものが付いており、それも活用するように促す。

「おらあ!!」

だがしかし、彼が両腕に付いた銃から放った弾丸はデイケイドではなく、我々の足元に当たり、グレネード弾の爆発で私ごと吹き飛ばす。

「これを使うには向いていないかもね…他のも使ってみろ！」

「ああ、これでいいか?」

『ゼロノス!』

フレンドリーファイヤが起りつつも、ここは別のライダーを使うように促す。

これで改善してくればいいのだが…

ゼロノスアーマーの場合

「おらア!死ね!」

ゲイツ・ゼロノスアーマーに変身した彼なのだが、ゼロガツシヤーの様な剣を振り回してくる。

デイクイドどころか少し私にも当たりそうなんだが…

「ちゃんと狙って振りたまえ!当たるだろ!」

「わ、わりい…!」

「大振りすぎる!」

そんなゲイツもライドブッカーで切られてしまう。

「次だ次!」

マツハアーマーの場合

「これはどうだ!」

「おお、速い!」

続いて、ゲイツ・マツハアーマーに変身した爆豪君なんだが、これは少し親和性が良さそうだ。

「良いセンスだ。」

高速移動でデイケイドに迫って攻撃を仕掛けていくのにデイケイドはなんとか凌ぎつつあるカードを引く。

『カメンライド！カブト！』

ここで、デイケイドはカメンライド・カブトを使って、仮面ライダーカブトに姿を変えるとクロックアップで加速。マツハの力で加速するゲイツとぶつかり合っている。

マツハのスピードをしつかり生かしている辺り、流石爆豪君だがしつかり対処してみせるデイケイドも中々だ。流石10年以上戦い続けた仮面ライダーだ…

「色々使ってもらったが、どう思った？」

一通り組手を終えて休憩中、門矢士が爆豪君の戦いに関する感想を聞いてきた。

「これらのウオッチは癖がある物もあるが、爆豪君がしつかり使いこなせているモノが少ないね。」

「クソツ…！」

爆豪君には殆どの2号ライダーのウオッチを使ってもらったが、完璧にモノにしたと言えるライドウオッチは少ない。むしろ使わない方が強力な気もする…天才肌の爆豪

君でも四苦八苦することになるとは予想外だった。

「しかしながら、爆豪君の持つ個性自体は強力かつ、彼自身はそれをしっかり使いこなせている。私は様々なライダーの力を使うより、己の力をさらに高める方がベターだと思うね。」

爆破を極めて、後に来るであろうゲイツリバイブになった時に爆破も活用する方が良いかもしれない。

「お前もそう思ったか？」

「ええ、ライドウォッチを活用するのは我が魔王に合った戦闘スタイル：爆豪君の場合は完成しつつある爆破を主軸にしたスタイルの方が強力かもしれない…」

「良い分析だ。」

門矢土もこの組手で爆豪君に相応しい戦闘スタイルを見抜いたようだ。

ライダーの力よりも個性：爆破を活かしたスタイルの方が良いと言われ、爆豪君も少し納得しているようだが…

「そうかも知れねえが、俺だってデクみたいに…こいつらの、ライダーの力を使いこなしてえ…」

嘗て、我が魔王は私に言った。子供の頃から爆豪君に憧れ、その背中を追っていたと

…

だがそれは、雄英に入って様々な戦いを乗り越えて逆転した。今では爆豪君が我が魔王の背中を追っている。お互いにリスペクトがあるからこそだろう…

「お前の爆破とライダーの力を両方活かせるウオツチならある。使いこなす覚悟、あるか…？」

「あるに決まってるだろ！俺は…！もつと強くなる…！」

爆豪君の飽くなき向上心は、彼の頭の中の辞書から“諦める”という言葉が消していた。

新たな力をするためには、どんな手段でも使う。そんな覚悟を受け入れてか、門矢士は新たなライドウオツチを取り出す。

「ちよつとした知り合いから渡された…ディエンドライドウオツチだ。」

「ディエンド…」

私も少し知っているディエンドライドウオツチは通常のライドウオツチと同じ形なのだが、彼が手に持っている者は少し形状が違う。シアン色のそのウオツチはディケイドライドウオツチと同じように、1つのウオツチを装填できるスロットが付いている。

「使ってみろ。」

「ああ…」

『ゲイツ！』

『ダイエンドー!』

休憩時に1度変身を解除していた彼は、2つのライドウォッチを起動してジクウドライバーに装填する。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダーゲイツ!』

『アーマータイム!』

『カメンライド!』

『ダイエンドー! ダイエンドー! ダイエンドー!』

仮面ライダーゲイツに変身を終えた爆豪君の身体に、仮面ライダーダイエンドの姿を模したアーマーが装着されていく。

「ウオズ、相手してやれ。」

「ああ、任せたまえ。」

『セイバー!』

爆豪君の新戦力の相手は私が務めることになった。

体育祭で彼を打ち破ったセイバーの力で挑むとしよう。

「変身」

『投影! フューチャータイム!』

『烈火抜刀!』

『フューチャーリングセイバー!セイバー!』

私は仮面ライダーウオズ・フューチャーリングセイバーに姿を変えてファイヤソード
レックを構える。

「コイツを使ってみるか…」

『イクサ!』

ここでゲイツはイクサライドウォッチを起動し、ディエンドライドウォッチのスロット
に装填する。

ディケイドアーマーであれば、ライジングイクサの力を模した形態に変身するところ
だが…

『カメンライドタイム!イ・イ・イ・イクサ!』

だが、その時ゲイツ自身の身体に変化は無かった。

その代わり、彼の隣には仮面ライダーイクサが召喚されて現れる。

「なるほどね…」

ディエンドと同様、仮面ライダーを召喚するというのがディエンドアーマーの特殊能
力か。

「行くぞオラア!」

そして、ゲイツとイクサが同時に私に襲い掛かる。

『ジャツ君と土豆の木!』

まずは土豆の木の物語の力を刃に宿らせ、地面に突き立てると、そこから生えてきた木の蔦が彼らに絡みつくこうとするが：

「その手は食わねえ!」

それらはゲイツが掌から放った爆破で焼き払われてしまい、さらにイクサが私に切りかかって来る。

2対1の戦いを強いられるのは流石に苦しい。だが、ここはまずイクサの武器であるイクサカリバーによる斬撃をレッカで防ぐ。

「まだまだア!」

イクサの剣による攻撃と、ゲイツの爆破による攻撃が交互に襲い掛かって来て、何かレッカを振るって攻撃を防いでいく。

『ストームイーグル!』

ここで、剣を振るのと同時に炎を纏った鳥のエフェクトを戦に向けて放つと、咄嗟の攻撃を防げなかったのか直撃し、イクサはこの場から姿を消してしまう。

「やられたか…けど、まだまだ!」

『ブレイブ!』

『カメンライドタイム！ブ・ブ・ブ・ブレイブ！』

だが、間髪入れずに仮面ライダーブレイブを召喚してくる。

『西遊ジャーニー！』

金属の輪を作ってそれぞれに向けて放つが…

『ガシャコンソード！』

それぞれをブレイブのガシャコンソードに切り落とされる。

『ストームイーグル！』

再び私が放った炎の鳥が、ブレイブの放つ炎の斬撃とぶつかり合うが…

「隙だらけだッ…！」

どちらかに対処している間に、もう1人に隙を狙われる。

それが2対1の状況の恐ろしいところだ…

大爆破をモロに自分の身体に受けてしまい、地面を転がることになった…

「中々やるねッ…」

仮面ライダーゲイツの新しい力をその身で味わうことになったが…勝負はまだ終わらない。

『ゼロワン！』

「ならこれは、対処できるかな？」

『投影！フューチャータイム！』

『プログライズ！』

『フューチャーリングゼロワン！ゼロワン！』

私はフューチャーリングセイバーに姿を変えると同時に、ライダモデル達を一気に召喚。

そのまま彼らに指示を出し、ゲイツとブレイブに攻勢を仕掛けさせる。

「クタバレ！」

最大の防御は最大の攻撃と言った所だろうか…

ゲイツが放つ大爆破と、ブレイブが振るうガシヤコンソードから放たれる炎の斬撃がライダモデル達を一掃。

「心成しか、爆破も強くなってるような…」

「当たり前だ！」

『ガタック！』

『カメンライドタイム！ガ・ガ・ガ・ガタック！』

ゼロワンから得たバツタの脚力を活かして後退を図ろうとしたが、彼はブレイブに代わってガタックを召喚。

『クロックアップ！』

クロックアップで加速するガタックと共に、ゲイツも両手両足から放つ爆破の推進力で加速しながら迫って来る。

「だつたらここぞ！」

『ビヨンド・ザ・タイム！』

合えて此処でライダーキックを放って、カウンターを仕掛けようとするが…

『ファイナルアタックタイム！ガ・ガ・ガ・ガタック！』

その時には既に、私の眼前にゲイツとガタックの2人が迫っていた。

咄嗟に彼らに向けてライダモデル達のエネルギーを纏った右足を突き出そうとするが、彼らもエネルギーを自身の腕に纏わせて…

「喰らえー！」

ゲイツの爆破と共に2人同時のパンチを放つ。

それは私の攻撃を打ち破り、胸に直撃。喰らってしまった私の身体に鈍痛が走ると共に吹き飛ばされて地面を転がる。その際に身体に纏っていた仮面ライダーウオズの鎧が消え去ってしまう。

「そこまで！」

この組手は爆豪君の完勝で終わってしまった。

「良い力だ…」

このディエンドアーマーの力はかなり強い。爆豪君をさらに強くしていくだろう。

「良い戦いだった。だが、まだまだ続けるぞ。」

「おう！／＼はい！」

だが、特訓はまだ終わらない。

新たな力を得た爆豪君と共に、再び仮面ライダーディケイドとの組み手を続けていくのであった…

第32話 グラントリノ

爆豪とウオズがデイケイドの下で特訓をしている一方で、出久も自身の職場体験先に来ていた。

「雄英校から来ました〜緑谷出久です。」

事務所のような場所に到着した出久は、恐る恐るその建物の扉を開ける。

「よろしくお願いし…」

建物の中に入って来た彼の目に、衝撃的な光景が映ってしまった。

そこには赤い液体の上で横たわる小柄な老人の姿がある。

「うわあああ!!死んでるううう!!」

その周りにはお皿も散らばっており、腸のようなものも来尖っている。まるでこの老人が襲撃されて死んでいる様に見える。まるでこの老

「生きとる!」

「あああああああ!生きてるううう!……ホツ……」

しかしながらその老人は生きており、かなり元気そうだ。

その様子を見て驚くとともに、出久は安堵する。

「いや、切つてないソーセージにケチャップかけた奴運んでたら転けた。」
血に見えていたものはケチャップで、腸と誤認されていたものはソーセージであつた。

なんとも紛らわしい。

「誰だ君は……?」

「雄英から来た! 緑谷出久です!」

起き上がったその老人の問いかけに、出久は改めて自己紹介をする。

「なんて……?」

「緑谷出久です!」

「誰だ君は?」

耳が遠く、少しボケてしまった様子の老人を見て、もう彼はかなりの高齢なのだと思ふ。久は感じてしまった。

「飯が食いたい。」

「飯がツ……!?!」

さらに老人は座り込んで食事を要求する。

「俊典ツ……!?!」

「違います!」

完全に名前を間違えられてしまった出久は、一度スマホを取り出して部屋から去ろうとする。

「ああ……すみません。一度電話してきますね。」

一度部屋を出た出久が、グラントリノの様子をオールマイトに報告するために扉の前で電話をしようとした時だった。何かが開く音がして、咄嗟に出久が振り返る。

「何を勝手に!？」

すると、グラントリノが出久のコスチュームが入ったケースを開けてその中を見ている。

「使ってみなさいよ、ワンフォーオール。」

「……ッ!」

「どの程度扱えるのか知つとききたい。」

グラントリノの表情が先程と違って引き締まっているように見える。

急に表情が変わり、まるでスイッチが入ったようなグラントリノの様子を見て、出久はジクウドライバーとジオウライドウォッチを取り出す。

「おっと、使つて良いのはそのウォッチとワンフォーオールだけじゃぞ。受精卵小僧。まずは俺から一本、取ってみろ!」

すると、グラントリノは足からのジェット噴射を活かし、部屋の中を縦横無尽に跳躍

して飛び回る。

バツタが跳ねるようなその動きを目で捉えるのは難しいが、さらに平成ライダーのウオッチと未来予測できるジオウIIの力を使うことが禁じられてしまった。未だ大技用のワン・フォー・オールしか使つてはいけなと言われたが、使つてしまえばグラントリノが重傷を負うどころか周囲の建物が被害を被つてしまう。簡単には使えないだろう…

「やるしかない！」

『ジオウ！』

「変身！」

『ライダータイム！』

『仮面ライダー！ジオウ！』

だがまずはジオウに変身し、グラントリノの動きを目で追う。

「雄英体育祭を見たが、ワン・フォー・オールは必殺技要員に終わるようなもんじゃない。おぬしはワン・フォー・オールの真価を分かつてない…」

「真価ツ…!?!」

そう言いながら、後方から突撃してくるグラントリノに対処する。

素早い動きであらゆる方向に飛んで行くグラントリノに、ジオウは翻弄されてしまっ

ている。

「実践形式でそれを引き出す！さあ、使ってこい！」

「ここで撃つたら……！」

ワン・フォー・オールライドウオッチをジカンギレードに装填して使えば、グラントリノが飛び回る部屋ごと吹き飛ばせるだろうが、周囲への被害が甚大になってしまい、使用を躊躇する。

「ワン・フォー・オールの9人目の継承者がこんな湿った男とは、オールマイトはとんだド素人だな……」

「そんなこと……！」

自身を翻弄するグラントリノだが、背後から迫る彼の動きを察知できたジオウは後ろ回り蹴りを放つ。

蹴りを腕で受け止めたグラントリノは一時的に引き下がる。

（どんな個性か分からないけど！捕まえないとツ……！）

回避したグラントリノはまたすぐに、出久の周りを跳ね回って翻弄する。

迫るグラントリノに向けて片手で掴みかかろうとしたが、回避されてその仮面を殴られる。

「硬いなあ……意識がチグハグだ。だからこうなる……！」

「絶対、捕まえたと思っただのに……」

「それだよ。本選の氷の小僧やもう一人のライダーとの戦いでワーン・フォー・オールの利用法……オールマイトへの憧れや躊躇からそうなってしまう。ワーン・フォー・オールを使って、ワシやこの部屋、それに自分自身が壊れることへの躊躇が足枷となっておる……」

「躊躇ッ……!?!」

出久は今までの戦いで3つの戦いでワーン・フォー・オールライドウオッチを使った。だが、それぞれドメの一撃などの大技で、そのウオッチを使っていた。

それ故に、出久の中では広い空間で、尚且つ強力なパワーで押し切りたい時に力を使うようにしていた。

「ワーンフォーオールを特別に考え過ぎだなー!」

体育祭の映像を見てか、グラントリノもそんな出久の考え方を読み取っていた。

「特別に考えすぎ……?それってどういうことですか!?!」

「答えは自分で考えろ。俺は飯を買ってくる。掃除ヨロシク!」

そう言って一度グラントリノは部屋を出てどこかに行ってしまう。

それを変身解除しながら出久は見送るしかなかった。

「ワーン・フォー・オール of 真価……それに僕の気持ちも足枷……」

出久は掃除をしながら、グラントリノの言葉について考えさせられることになってし

まった：

その夜：

「ZーZー！」

(寝てるんだよな…!?)

独特な寝息を立てながら寝ているグラントリノに驚きつつ、出久はグラントリノに言われたことに關して考え直す。

(ワン・フォー・オールを特別扱いしすぎてゐるって…)

自分はワン・フォー・オールを特別に扱い過ぎており、真価を引き出せていないと言われてしまい、そのことについてよく考えている。

「電話だ…」

その時、出久のフェイスフォンXが振動しながら着信音を鳴らしているのに気付いて、それを開いて電話の主に応える。

『もしもし、我が魔王。まずは職場体験1日目。お疲れ様…』

「お疲れ、ウオズ君。」

寝ているグラントリノのことを気遣い、寝室のある2階から降りて1階で通話を続ける。

『さて、今日の報告をしようと思って、電話をさせてもらったんだけど今大丈夫かな?』
「大丈夫。グラントリノさんが寝てる部屋とは別の部屋に移動したし:」

ウオズも出久が歩いているのを電話越しで気付き、今電話して大丈夫だったか問いかける。

『今日は爆豪君が新しい力を手にしたよ。また一段と強くなっているね:』

「そうなんだ! 見れるのが楽しみだね:」

爆豪が新形態を得たと聞き、出久はその姿を早く見てみたいと目を輝かせながらウオズの話聞く。

「僕の方はワン・フォー・オールに関して色々と見てもらったけど、どう使えばいいかまだ分かんなくて。」

『なるほど、ワン・フォー・オールウオッチのことか:』

その後は、出久が今日グラントリノと話して得たことをウオズに言う。

「うん、ワン・フォー・オールウオッチのことを特別に考えすぎって言われて:」

『確かに、これまで必殺技を使う時に主に使っていたからね。』

「うん、けどそんな使い方じゃダメだって言われて: しっかりと言われとワンフォーオールの真

価を引き出せて…」

『そうか、確かにここまで使えるようになったわけだし、さらにワンフォーオールを使ってもいい頃合かもしれないね。』

ウオズは以前、ジオウとワンフォーオールの力が干渉しあうのを恐れ、力を一時的にウオツチに収めておくことを提案した。そこからは、アナザークウガのような大型敵や体育祭での大技のぶつかり合いのみで使っていた。だが、その時の様子から、ジオウとワンフォーオールの力がぶつかり合うどころか相乗効果を起こしているとウオズは感じ、さらに力を引き出しても問題ないと判断した。

『こういう時は誰かを参考にして、考えてみると良いだろう。君が平成ライダーの戦いを見た上でアーマータイムを使っているみたい…』

「参考か…オールマイトはどうだろう？」

『オールマイトは確か、マッスルフォームの時は常にワンフォーオールを使っているみたいだね…まるで私たちが変身したりフォームチェンジするみたい…』

「変身…？」

だが、ワンフォーオールは本来は個性、使用者の体の一部だ。クラスメイト達は身体の関節を曲げると同じような感覚で個性を使っている。それは、時間制限があるとはいえ、先代ワンフォーオール継承者のオールマイトも同じだ。”特別”なものではな

く、他の体の部位同様、当たり前のように使っている。

その感覚をウオズや出久に当てはめるなら、変身したり、アーマータイムやフューチャーリングを使うことだ。

「そうかつ……コレの使い方が分かったかも！ウオズ君ごめんね！電話切るよ！」

『どうやら答えは出たようだね。おやすみ、我が魔王。』

ウオズの言葉を聞いて、出久はワンフォーオールライドウオッチの活用方法を思いついたようで、咄嗟に電話を切る。そのことをウオズも容認し、出久はジクウドライバーを腰に巻いてみる。

『ジオウ！』

『ワンフォーオール！』

2つのライドウオッチを起動し、ジクウドライバーのそれぞれのスロットに装填していく。

オールマイトがマッスルフォームに変身したり、爆豪が爆破を使うのと同じように、自分達が普段変身やアーマータイムを使う時のように……

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダー！ジオウ！』

『ワンフォーオール!!』

出久がジオウへの変身を完了させたその時、ジクウドライバーに装填されたワンフォーオールライドウォッチから放たれる光にジオウが包まれていく。

「やあ、久しぶりだね。」

「志村菜奈さん!?!」

光に包まれたかと思えば、ジオウは暗闇の中にいた。

そして、目の前にはアナザークウガの中で会った志村菜奈の姿があった。

「今はグラントリノの所に來てるみたいだね。」

「ま、まあ、そうです…」

「アイツは私の友人でね、ちよつと変わった奴だけどしつかり鍛えてもらうんだよ。」

「はいー!」

志村からの激励に應えると、志村はジオウのファイズフォンXに触れ、とあるウォッチを取り出す。

「君は以前、私と話して命の選択という話をしてこのウォッチを手に入れたね。」

そう言いつつ、志村がファイズフォンXから取り出したジオウIIライドウォッチを見

せる。

嘗て出久はアナザークウガの中で、彼女に与えられた”自分の命”と”他人の命”という選択肢から両方を選んだことでジオウIIウオツチを手にした。

「そして今、ジオウの力をワン・フォー・オールという2つの選択肢の両方を選ぶうとしていて。その覚悟も、できているみたいだね…?」

「はい！僕がヒーローの王になって多くを救うのに、この力も必要な筈です。」

ジオウの手は自然とワン・フォー・オールウオツチに触れている。

「ヒーローの王、良い覚悟だね。私達はずっと君の戦いを見てきたよ。全力でぶつかって爆豪君や轟君の心を救った。これからも君なら救えるはずだ。誰かを導く新たな平和の象徴、ヒーローの王”に相応しい！」

「ありがとうございます！」

オールマイトの師匠である彼女からの誉め言葉に、出久は感激する。

爆豪との屋内戦闘訓練やUSJ、それに轟の凍てつく心を溶かした体育祭での戦い。

それを見て、少なくとも志村は出久のことを新たな継承者に相応しいと認めていた。

「俊典や、他の継承者を代表して改めて言わせてもらおうよ。ワン・フォー・オール9代目

継承者は君だ。緑谷出久…私達もジオウの新しい力となり、君の覇道、見届けさせても

らうよ。」

その時出久の周囲が明るくなり、再びグラントリノの事務所の中に立っていた。

「これって…!」

ふとジオウが自分の両手を見てみると、ワンフォーオールによるものと思われる変化が見られた。

爆豪が変身するゲイツは、両手のウオッチホルダーが消えた代わりに手榴弾型の籠手が付いている。これは彼の個性故に現れた変化だ。それと同様に、両腕のウオッチホルダーがあつた所には緑色のガントレットのようなものが付いている。手甲と腕時計やグローブが合体したような形になっており、左腕側にはベルトに付けていたはずのワン・フォー・オールライドウオッチがはめ込まれている。

「早速使ってみよう!」

ワン・フォー・オールが自分の一部になり、ジオウの新たな力として具現化したのを見て、出久は兎に角使ってみようと思ひ夜の街に繰り出して自主トレに励むのであつた

：

第33話 保須事件の始まり

「おはよう、そして…どうした？」

職場体験2日目の朝、目を覚ましたグラントリノ目に入ったのは目の下にクマができて十分に睡眠が取れていなさそうな状態の出久であった。しかも、左手首には時計のよなものが付いている。

「昨日…ちよつと自主トレしてたら夢中になっちゃって…」

昨日、ワンフォーオールの方とジオウの力を融合させ、自身に継承させることに成功した出久。

しかし、その後に力を試そうと夜の街をパルクールの様に駆け回っていたらいつの間にか睡眠時間が2時間しか確保できなくなってしまうていた。

「グラントリノさんに言われたことを咀嚼したり、友達にアドバイス貰ってなんとか使いこなせるようになりました…」

「なるほど、その腕の時計は…？」

「これは、僕がワンフォーオールを継承した証です。」

ワン・フォー・オールライドウォッチは出久の中に取り込まれ、その力は出久に継承

された。

その証であるかのように、左手首には緑色の腕時計が付いている。これは、ワン・フォー・オールによって具現化した緑色のガントレット、その名もマイトガントレットが格納されている。

「継承した…ということは使えるようになってきたということじゃな？」

「そうですね…ここまで本格的に使ったのは初めてですけど…」

「初めてのチャレンジの成果はどうじゃった？」

「はい！オールマイトみたいな出力はまだまだ出せていませんが、全身にエネルギーを張り巡らせて身体能力の強化は出来ました。」

「初めてでそこまでできたか…上出来じゃな！」

ジオウが出久仕様になったことで、体の一部や全身にワンフォーオールのエネルギーを流すことができるようになった。オールマイトのようなかなり強力な力を出せていないが、彼の5%程度の出力を出せる。それにより変身時のスペックや身体能力を底上げすることが可能になった。

そのことを聞いてグラントリノは出久に、サムズアップをして見せる。

「おぬしもオールマイトの様に初期から上手く扱える様じゃな…土台がしっかりと出来上がっておる。オールマイトも身体だけは出来上がっていた。」

「オールマイトの学生時代！どんな感じだったんですか!？」

グラントリノがオールマイトの学生時代のことを話すと、出久はそれに興味を示すように目を輝かせる。

「ん？ああ、ひたすら実践訓練よ!」

(それであんなに恐れてたのか…)

実戦で恐らくオールマイトがボコボコにされてしまったのだろうと思い、彼が恐れていた理由を何となく理解する。

「生半可な扱いはできなかった。亡き盟友に託された男だったからな…」

(志村さん…)

グラントリノの言葉を聞き、出久は過去に二度自分と回析した志村菜奈のことを思い浮かべる。

「さあ、使えるってことなら話は早い！朝飯食って早速実践じゃ!」

「はい!」

グラントリノとしては早く出久の戦いを見てみたかったが、彼はほぼ徹夜明け状態なのでお互い栄養補給をしてから組み手をすることにした…

朝食後

「それじゃあ、早速始めるとしよう。昨日とルールは同じ、俺から一本取ってみろ!」

「よろしくお願ひします!」

鯛焼きで腹を満たした後、家具類を避けてから2人は向き合う。

『ジオウ!』

「変身!」

『仮面ライダー! ジオウ!』

出久がジオウの鎧を身に纏うのと同時に、左手首の腕時計、マイトウォッチが光となり出久の両腕を包み込む。それはマイトガントレットとなり、それを見てグラントリノはジオウの変化を理解する。

「ワンフォーオール…フルカウル!」

ジオウが両腕をX字を描く様にクロスさせると、彼の全身にワンフォーオールのエネルギーを張り巡らせる。

「さあ、かかってこい若造!」

「はい!」

グラントリノは個性を使い、両脚からのジェット噴射で室内を縦横無尽に跳ね回る。

それも、昨日の訓練時以上のスピードで跳ね回っていて通常なら目で追うのがやっとだ…

(目で終えるスピードじゃない…けど、攻撃を仕掛けてくるのは…)

「後ろだー！」

グラントリノが背後から攻撃を仕掛けてしようとしてくることを察知すると、ジオウはそれをジャンプして避ける。

身体能力が向上しているジオウは、一跳びで天井まで飛んで回避する。

（今のを避けたか…）

グラントリノの攻勢を回避してから、自分の下方方向にいる彼に向けてジオウは天井を蹴って突撃しながらパンチを繰り出す。

「中々やるのう…」

「今のを避けた!？」

ジオウのカウンター攻撃を、グラントリノは別方向に足のジェット噴射を噴射して回避する。

（しまった!）

グラントリノは壁を蹴ってはジェット噴射で飛び、また別の壁に着地。

さらにそこを蹴って跳ね回っていくのを繰り返し、ジオウを翻弄する。

「だったら僕も…!」

ジオウはこのまま屋内の中心部で待ち構えていたら、360。どの方向からでも奇襲を受けてしまうと察知して地面を蹴り跳ねていく。

天井や壁を蹴り、その推進力でグラントリノと同様に跳ね回る。

「俺の戦術を真似るか…」

「はい！これで決めます！」

飛び回る両者が交錯し、互いのキックがぶつかり合う。

「そこまで！」

蹴りがぶつかり合ったことで2人とも着地し、グラントリノは組手終了を告げる。

「流石は体育祭優勝の男と言った所か…よし、ワンフオーオールを使い方をもっと伝授するでしょう。インターバルを挟んでまたやるぞ！」

「はいー！」

出久の職場体験2日目はグラントリノとの組み手の繰り返しであった。

只管実践訓練を行い、グラントリノが志村菜奈から見せられた戦い方や、オールマイトに教えた戦い方を出久に伝授していった。

その翌日

「さて、今から外に行くでしょう。」

「外、ですか…?」

「ああ、このまま俺と同じ戦法でやっても癖がつく。コスチュームに着替える。フェーズ2だ！」

訓練をある程度こなしした後、グラントリノは出久に次の段階に行くと言いコスチュームを着て外に出るように指示をする。それに従い出久はコスチュームに身を包んで建物から出る。

「つーわけで、いざヴィラン退治だ。」

「いきなりですか!?!」

「俺とばつか戦ってたら、全く違うタイプとの戦いで蹟く。元の力が強い分、これ以上やっても頭打ちだ。次は様々な状況やタイプと経験を積むフェーズだ。今まで使ってたライドウオッチも活用してみろ。」

出久の中で、ワンフォーオールを使った戦いの基礎はほとんど出来上がっていた。

そのことが分かるとグラントリノは応用編として、実際のヴィランとの戦闘をこなしてもらおうことにした。

「そもそも職場体験じゃ。ヴィラン退治をするのは当たり前じゃろ。」

「仰ることはごもつともですけど、こういういきなり言われると心の準備が…」

来襲したヴィランを迎撃したことはあっても、自ら探して倒しに行くのは初めてで出久は少し緊張している。

「ヴィランとの戦闘は既に経験してるんじゃないろ? デカイ山には近づかんさ。」

そう言つてグラントリノはタクシーを呼び止め、出久と共に乗り込む。

「ここいらは過疎化が進んでいる。犯罪率が低い、都市部にヒーロー事務所が多いのは犯罪が多いからだ。人口密度が高けりやそれだけトラブルも増える。渋谷や新宿は小さなトラブルが日常茶飯事……」

「渋谷に新宿って……まさか東京に行くんですか!? まさかそんな……」

出久にとつて初めての東京でもあり、胸の鼓動はさらに早くなつていく。

「甲府から一気に新幹線で行く。スピードも速くて中々爽快だぞ!」

（そのルートだと保須市を横切る。飯田君、大丈夫かな……後で連絡してみよう……）

グラントリノから自分達を通るルートを聞くと、ふとその途中の街にいるはずの飯田のことが気になつてしまう。そこは丁度ヒーロー殺しステインが居るといふ場所だ。

その頃、東京の保須では……

「保須市って意外と栄えてるんだな。」

夕焼けに照らされる街を、建物の屋上から眺めているヒーロー殺しステインの後ろに、黒霧のワープゲートを潜つて死柄木弔が現れる。

死柄木と黒霧、両者ともに腕を負傷しているようで、そこに巻かれた包帯には少し血が滲んでいる。

これは先程、別の場でステインと交渉した際に付けられた傷である。

「で、アンタは何をする?」

以前オーマシヨツカーの首領である男は、この保須に訪れてヒーロー殺しステインに自身の力を分け与えた。そして、死柄木達は改めて彼にオーマシヨツカー入りの誘いをしようとしていた。だがその交渉は決裂してしまい、アナザージオウの力を奪い返そうとした死柄木達は返り討ちに遭ってしまっていた。

そして、今現在アナザージオウの力を保有するステインに目的を問いかける。

「この街を正す。それにはまだ、犠牲が要る。」

既にステインは5人以上のヒーローをこの街で狩ってきたが、彼の思想を知らしめるにはその数では不足気味なようだ。

「先日仰っていたやるべきことという奴ですか？」

「お前は話が分かる奴だな……」

「いちいち、角立てるな……オイ。」

黒霧の問いかけに、彼を褒めつつ死柄木はまるで「話が分からない人間」であると言っているようなステインの言葉に死柄木はイライラして傷跡を撫でている。

「ヒーローとは！偉業を成した者にのみ許される称号！多すぎるんだよ！英雄気取りの”拜金主義者”が！この世が自ら過ちに気付くまで、俺は何度でも現れ続ける！」

『ジオウ……』

報酬目当てに活動するヒーロー達を滅ぼす。

その目的を達成するため、ステインはアナザージオウに姿を変えて街に繰り出していくのであった。

「あれだけ偉そうに語っておいて、やることは草の根運動かよ。健気で泣けちゃうね」
そんな彼を見送りつつ、地道にヒーローを襲っていくステインの行動を死柄木は嘲笑う。

「そう馬鹿には出来ませんよ。事実、ステインが現れた街は犯罪率が低下しています。ある評論家がヒーロー達の意識向上につながっていると発言し、バッシングを受けたこともあります。それに彼の悪意にはあのお方も注目されている。恐らくあの方の計画に必要なのやもしれませんね……」

一方の黒霧は、ステインのことを冷静に分析している。

「それは素晴らしい！ヒーローが頑張って食い扶持減らすのか、ヒーロー殺しはヒーローブリーダーでもあるんだな！回れどい。」

だがしかし、死柄木が求めるヒーロー社会の崩壊とステインの思想は全く異なる物であった。

「やっぱ、合わないんだよ。根本的に……ムカつくしな。黒霧、脳無出せ。」

死柄木の指示と共に、黒霧は自身のワープゲートから3体の脳無を呼び出す。

「俺に刃突き立てて、タダで済むかって話だ……ぶっ殺したいならぶっ殺せばいいって話。」

アンタの面子と境地、潰してやるぜ……大先輩。」

ヒーロー殺しステインのいる街でオーマシヨツカーが暴れば、ステインと彼らの繋がりを噂する者が出てくるだろう。そうなれば、思想が全く違うステインからすれば迷惑な話である。

それを分かったうえで、死柄木は脳無とシヨツカー戦闘員達を街に放ったのであった

：

第34話 保須の悪夢 前編

保須と呼ばれる地域には、ここ数日多くのヒーローが集まっている。

先日ヒーロービルボードチャート上位常連のプロヒーロー、インゲニウムがこの街で襲撃を受けて重傷を負ってしまった。その犯人であるヒーロー殺しステインを捕まえようと、普段保須に拠点を置くプロに加えて人気実力ともに兼ね備えたヒーロー達が何人かその姿を見せている。

「焦凍、俺の後ろについて来い。」

そこには現在職場体験中の雄英生であり、息子の轟焦凍を引き連れているN.O. 2ヒーローのエンデヴァアの姿もある。

「アイツがエンデヴァア、N.O. 2ヒーローか。」

「ああ、私達の学校の大先輩でもある。」

さらに、デイケイドこと門矢士と彼の下に職場体験で訪れているウオズや爆豪も保須に訪れている。

個性を持つ人間達の世界ならではの、エンデヴァアの派手な見た目に士は少し感心している。

「呼ばれたから来てみたものの、中々の厳戒態勢だな。」

「ヒーロー殺しステイン、これまで全国に出没し続け17人のヒーローを殺害。」

「で、重傷で再起不能になったのは23人……こん中に委員長の兄貴も含まれてんだろ？」

「ああ、その通り。」

士がこの世界に来てからよくテレビで目にするヒーロー達を、保須に来てからかなりの頻度で目にしており、ウオズ達が解説している被害規模を耳にしてステインが彼らにここまで警戒されている理由を改めて理解する。旅の道中にある士は今現在この世界の住民であり、与えられたプロヒーローという役割をこなすためにウオズと爆豪を引き連れて町のパトロールを行うのであった……

「保須つつーことはアイツも此処に居んのか？」

「その可能性は高いね。」

ウオズと爆豪も飯田が保須のヒーロー事務所を訪れていることを知っており、インゲニウム事情も聞いているので飯田が復讐に走らないかと心配している。

（何事も無ければいいのだけどね……）

飯田に対する心配が杞憂に終わって欲しいと祈り、ウオズも士に連れられて歩き始めたのだが彼の願望は打ち砕かれてしまうのだった……

「イー……イー……！」

街の中心部で爆発が起こり、夜闇を爆炎が照らしているだけでなく、どこかから現れた大量のシヨツカー戦闘員が市民たちを襲っている。

「アイツらがオーマシヨツカーか…」

戦闘員達が現れるとすぐ、3人はUSJにも現れたオーマシヨツカーが襲撃してきたと察知する。

「変身！」

『カメンライド！デイ・デイ・デイ・デイケイド！』

士はすぐにオーマシヨツカーの戦闘員達を殲滅するために、仮面ライダーデイケイドに姿を変える。

「お前らも手伝え！敵を倒すぞ！」

「ええ。／おう！」

『ウオズ！』

『ゲイツ！』

『デイエンド！』

さらに士は、職場体験中でヒーロー免許を持たないウオズと爆豪にも戦闘許可を出す。

「変身！」

『仮面ライダーゲイツ!』

『投影!フューチャータイム!』

『アーマータム!』

『スゴイ!ジダイ!ミライ!』

『カメンライド!』

『仮面ライダーウオズ!ウオズ!』

『デイエンド!デイエンド!デイエンド!』

戦闘許可を出されたウオズと爆豪も、仮面ライダーに姿を変えて敵に向かっていく。保須でのヴィラン達とヒーローの戦いの火蓋は既に切られてしまったのだ…

その頃、出久とグラントリノが乗る新幹線も保須近辺を走行していた。

「あの、この新幹線が着く頃には夜ですけど、良いんですか?」

「夜だから良い。その方が小競り合いが増えて楽しいだろ。」

「楽しくはないですけど…納得です。」

既に空も暗くなってきており、時間が遅いことを気にする出久だがグラントリノの夜

の方がトラブルが多いという意見に納得する。実戦経験を積むなら、そう言った時間帯の方が事件が多く戦いの数をこなせることは確かだ。

「座りスマホ！全く近頃の若者は！」

保須近辺を通っているということもあり、出久はスマホで飯田にメッセージを送っていた。

しかし、それに既読は付いているが返信が来ていないことを気にしている。いつもはすぐに返事をくれるのにと出久は心配している。

「おい！あれ見ろよ！あのビル爆発したぞ！」

「どっどっどっどっ！」

その時だった。新幹線の乗客の内何名かが保須市内で突如起こった爆発に反応して窓の外を見ている。

「何事だ？」

「火事でしょうか？」

『お客様。座席にお捕まり下さい。』

状況を把握しようとする2人の耳に、車掌によるアナウンスが流れ込んでくる。

そのアナウンスに従う2人であったが、車掌の判断が正しいということがすぐに分かった。

車体に何かがぶつかり大きく揺れたかと思えば、大穴が開いてそこから傷だらけのプロヒーローと脳無が入って来る。

「何だよアイツ！」

「脳無！」

四つ目で長い手足を持つその脳無が車内でプロヒーローを仕留めようと腕を振るう。

「小僧！一緒に行くぞ！」

「はい！」

『ジオウ！』

グラントリノは出久と一緒に来るように告げると、足からのジェット噴射で乗客の間を縫うように移動する。

「変身！」

『仮面ライダー！ジオウ！』

出久がジオウに変身を終わると同時に、先にグラントリノが脳無の頭部に蹴りを入れる。

「車両から引きはがすぞ！」

「はい！」

走っている新幹線内での戦闘は、戦闘中に車外に放り出されて引きずられてしまえば

危険と判断し、乗客達も守るためにまずは脳無を車外に放り出す必要があると判断する。

(ワンフォーオール！フルカウル！)

グラントリノは足からのジェット噴射で加速し、出久は全身の筋肉をワン・フォー・オールで強化して床を蹴る。

2人は推進力を付けた状態で同時に脳無を殴って、新幹線の車内に突き飛ばす。

「小僧！お前の力なら大丈夫だ！町の中心部に行け！この脳無はオレが対処する！」

「グラントリノ！」

脳無を車外に出した2人が車体に空いた大穴から見たのは、爆発のせいで燃え盛っている保須市内だ。

グラントリノはワン・フォー・オールをマスターしつつあり、体育祭でも圧倒的な実力を見せた出久に想定よりも早い段階で実戦を積ませることにした。事件の中心となっている地に向かうように指示し、彼自身は先に脳無への対処に当たる。

「何が起こってるんだ！」

両脚からのジェット噴射で脳無を押しながら地面に向かっていくグラントリノに対し、出久は町の方を見てから緊急停車した新幹線から降りる。再び身体にワンフォーオールを張り巡らせた状態でビルの屋上に降り立つと、パルクルの様にビルからビル

へ飛び移ってグラントリノの指示通りに街の中心部に向かっていく。

『カメンライドタイム！メ・メ・メ・メテオ！』

『ジカンデスピア！ヤリスギ！』

保須にてオーマシヨツカーと遭遇した私達は、現在彼らとの戦闘中だ。

ゲイツ・デイエンドアーマーが召喚した仮面ライダーメテオが、迫りくるシヨツカー戦闘員達を拳法の技で次々と倒していく。

「しかしながら、戦闘員だけで来るとは考えにくいね…」

ジカンデスピアヤリモードの刃先で戦闘員達を切っていくが、敵が戦闘員だけとは考えにくい。

こういう時はどこかに怪人がいる筈なので、敵を倒しながら爆心地に進んでいくとしよう。

「オラア！」

しかしながら爆豪君、ここ数日でライダー達のとコンビネーションをしつかりと確立している。

中距離の敵相手には自分の爆破で対処しつつ、討ち漏らした戦闘員達はメテオの拳が粉碎していく。

「気を抜くな！敵はまだまだいるぞ！」

『カメンライド！鎧武！』

デイケイドも戦力を惜しみなく投入していく。デイケイド・鎧武に変身すると大橙丸と無双セイバーの二刀流で次々と戦闘員達を切っていく。

3人＋カメンライドタイムで呼び出された4人のライダーで戦っているということもあり戦闘員達をあっという間に倒すことができ、私達は騒動の中心へと飛び込んでいく。

「あれは……」

炎に包まれる市街地の中心にいたのは2体の脳無であった。

片方はUSJに現れたものに似た黒い脳無で、もう片方は翼が生えている。

「黒い方は俺に任せろ。翼があるのはお前達に任せろ。」

「了解！」

『リバイス！』

『バース！』

デイケイド鎧武は二刀流で黒い脳無に切りかかり、私とゲイツはウォッチを入れ替え

る。

『投影！フューチャータイム！』

『カメンライドタイム！』

『バディアツプ！』

『バ・バ・バ・バース！』

『フューチャーリングリバイス！リバイス！』

ゲイツ・ディエンドアーマーは召喚中のライダーをバースに切り替え、私はフューチャーリングリバイスに変身すると共にバーストライカープラモードに乗り込み空を飛ぶ。

「やっちまうぞー！」

私と爆豪君とバースの3人で翼のある脳無を取り囲み攻撃を仕掛けていく…

（流れの元が騒ぎの中心だ！しかし、なんだって脳無みたいなやつが…！）

グラントリノの指示に従い、騒ぎの中心地に向かっていくジオウ。

（もし、オーマシヨッカーがこの前のアナザークウガみたいな奴を引き連れていたら…

この街が危ない！ここで職場体験してる飯田君だつて！

出久は街にいる戦闘員や脳無達から今回の襲撃犯がオーマシヨツカーであると感じ、前回のアナザークウガのような敵が居れば町の住民の安全を保障できないと急いでいる。

出久が身を案じている人物の中には、クラスメイトで職場体験に来ている飯田も居る。

「天哉君！天哉君！」

その時丁度出久の耳に、飯田の名を呼ぶ声が聞こえてくる。

「クソが！」

「かつちゃん！ウオズ君！」

声のする方に出久が向かえば、燃え盛る炎の中で2体の脳無とウオズ達4人のライダーが戦っている。

「マニユアル！消火だ！」

「お、おう！」

プロヒーロー達は周囲の人々の救援をしていく中、飯田の職場体験先のヒーローであるマニユアルは自身の個性を活かして消火活動を行っている。

「なんでこんな時に限ってどっか行っちゃうんだ！天哉君！」

(どこかに行った!?この状況で!あの真面目な飯田君が!こんな大事件を前にして!::
ここつて、保須市::?ヒーロー殺し!)

マニユアルの言葉から飯田がこの場から離れてしまったことを知り、出久は最悪の状況を想定する。

保須での混乱に乗じて現れたかもしれないヒーロー殺しステインに、兄の復讐をしようとして飯田が独断で行動してしまった可能性がある。そんなことに気付いて思わずジオウは立ち尽くす。

「我が魔王!」

そんな出久の存在に気付いたウオズが、バイストライカーから降りて駆けよって来る。

「今のマニユアルの言葉::!」

「うん、飯田君が危ないかも知れない!」

「ああ、その可能性は高いね。脳無達は私達で何とかする。我が魔王は、彼を助けに行ってくれ!」

ウオズはバイストライカーを自分の隣に呼び寄せると、再び乗り込んで脳無に向けて突撃していく。

「ありがとう!ウオズ君!」

仲間達がこの場を抑えてくれるということ、心置きなく飯田を助けに行けることになり、感謝の言葉を述べつつ出久は宵町を駆けていくのであった：

第35話 保須の悪夢 中編

「スーツを着た子供、何者だ？」

「お前にやられたヒーローの弟だ！最高に立派な兄さんの弟だ！兄に代わり、お前を止めに来た！」

保須市のある路地裏で、ヒーロー殺しステインが変身したアナザージオウがコスチュームに身を包む飯田に刃を向けていた。飯田の方は、頭の中が重傷を負った兄の復讐に支配され、相手が怪人化していようともステインを倒すことしか見ていない。

「僕の名前を！生涯忘れるな！インゲニウム！お前を倒す、ヒーローの名だ！！」

「そうか…死ね。」

「誰があああああ！！」

アナザージオウを蹴り倒そうと飯田は右足のエンジンを点火。

その噴射の勢いで回し蹴りを放つが、軽々と避けられてしまう。

「インゲニウム…兄弟か。奴は世間に伝聞させるため、生かした。」

アナザージオウの足にはステインが元から使っていたスパイクが生えており、その足で飯田の右肩を蹴る。スパイクが刺さり、飯田の肩からは血が流れてしまっている。さ

らにステインからは、彼の兄であるインゲニウムは自身の存在を知らしめるために襲つてわざと生かしたと伝えられてしまう。

「クツ……」

その事実を受けながらも蹴り倒されて、地面に倒れ伏したところを踏みつけられてしまう。

飯田は兄のキャリアを奪った相手をその目で睨みつける。

「お前は、弱いな。」

アナザージオウの剣が飯田の左腕に突き立てられる。

「お前の兄も弱い。贗物だからだ。」

「黙れ悪党……」

痛みに耐えつつも、飯田はステインの言葉に反論する。

「脊髄損傷で下半身麻痺だそうだ……もうヒーロー活動は叶わないそうだ……」

ステインから受けた傷により、彼の兄であるインゲニウムはヒーロー引退に追い込まれてしまった。

飯田自身の憧れである兄の引退は、飯田に暗い影を落としていた。

「兄さんは多くの人を助け！導いてきたッ……立派なヒーローなんだッ……お前が潰していい理由なんて無いんだッ……！」

ステインにも思想はあるが、それはヒーロー達を再起不能にして誰かの夢を潰す理由にはならない。

「僕のヒーローだ！僕に夢を抱かせてくれた立派なヒーローだったんだ！」

飯田の中で兄に対する尊敬の念が強かったのに伴い、彼を潰したステインに対する憎悪もより強くなる。

「許さない！殺してやるッ……！」

「アイツをまず助けろよ……！」

ステインへの憎悪で動く飯田に対し、ステインは先程まで自分が襲っていたヒーローのネイティブを指差す。彼もステインの攻撃を受けて動けなくなってしまうている。

「自らを省みず他を助け出せ。己の為に力を振るうな……目先の憎しみに囚われ、私欲を満たそうなど、最もヒーローから遠い行いだ。」

その憎悪故に、飯田は他人を助けることを忘れてしまっていた。

ヒーローとしてすべきことを忘れていた飯田の腕から剣を引き抜く。

「だから死ぬんだ。」

（体がッ……動かない！）

アナザージオウの口のクラッシュャーが開き、舌が出てくるとそれは飯田の血を舐める。

すると、ステインの個性である凝血により、血を舐められた飯田の身体は動けなくなる。

「じゃあな…正しい社会の供物…」

「黙れ…！何を言ったってお前は！兄を傷つけた犯罪者だッ…！」

アナザージオウが己の剣を飯田に突き立てようとしたその時だった…

「…ッ！」

「スマーツシユ！」

ワンフォーオールを全身に張り巡らせ、身体能力を強化したジオウがその場に駆け付け、目にもとまらぬ速さでアナザージオウに迫って、その顔面部を殴り飛ばす。

「み、緑谷…君…？」

「助けに来たよ！飯田君！」

飯田は自身の前に立つジオウの姿に、出久が来てくれたのだとすぐに察した。

「ヒーロー殺しステイン…だよな…？…なんであんな姿に…」

倒れているプロヒーローと、飯田が狙って攻撃をしていたことから相手がヒーロー殺しステインだと考えるが、目の前にいるのはジオウ自身を禍々しくしたような姿の怪人である。

「ああ、アイツが兄さんをやった…男だ…！」

「ステインが僕のアナザーライダーに……」

以前に出入が戦ったのはクウガのアナザーライダーであつたが、今日の前にいるのは彼が変身するジオウのアナザーライダーである。しかもその正体がかの有名なヒーロー殺しステインであると確定すると、その驚異的な相手を目の前に飯田に避難を促すことにした。

「飯田君、動ける？大通りにはプロモウオズ君たちも居るから、そこに逃げて！」

「体をツ……動かせないッ……！切りつけられてからだ……恐らく奴の個性！」

「ワイドショーの解説者が推測した通りだ！アナザーライダーなのは、予想外だけど……」
ステインの謎に包まれた個性と、アナザージオウの力にジオウは身構える。

（飯田君だけなら担いで逃げられるけど、もう一人いる。僕が戦うしかない！）

飯田とネイティブの2人がこの場にいるが、2人ともステインの個性により体が動か
せない。

それ故にここは応戦する道を選び、ジカンギレードを構える。

「緑谷君ツ……！手を！出すな！君は関係ないだろ！」

復讐心から、この場を一人で収めようとしてしまっている飯田。

「何、言つてんだよ！」

「仲間が助けに来た。いいセリフじゃないか……だが、俺はこいつを殺す義務がある。ぶ

つかり合えば当然、弱い方が淘汰されるわけだが……さあ、どうする？」

時計の長針と短針を模した2本の剣をジオウに向け、アナザージオウが問いかける。

『サーチホーク！』

『スイカアームズ！コダマ！』

出久は2人を守りながら戦うことに不安があり、確実に2人を待たために増援を呼ぶことにした。そのために、2体のライドガジェットを起動して町の方に放った。

「辞めろ！逃げろ！君には関係ないんだから！」

流石の出久にとつてもリスキーな戦いだ。飯田はこんなところで出久にやられてほしくないために彼にこの場から離れるように言う。

「そんなこと言ったら……ヒーローは何もできないじゃないか！余計なお世話だろうと、誰かを笑顔で助けるツ！それがヒーローで、仮面ライダーだ！」

ワンフォーオールを体に流し込み、脚力を強化した出久がアナザージオウに向けて走って距離を詰めていく。

「見切った。」

長針の剣をアナザージオウが突き出し、それをジオウは屈んで回避する。そのまま懐に潜り込んでジカングレイドを振るおうとするジオウだが、その動きはアナザージオウが持つ未来予知能力によってお見通しであった。自身の腹部に迫るジオウの背中

に上から時計の短針を模した剣を振り下ろす。

「ああっ……！」

「緑谷君ッ……！」

ジオウは背中から火花を散らし、バランスを崩しながらも咄嗟に前転してステインとの距離を置く。

「血は出なかつたか……装甲は固いようだな……まあいい、動ける状態でも仕留めれるッ……！」

「血……そうか！」

飯田やジオウがステインと戦うのを見るしかできない男がいた。

彼はプロヒーローのネイティブ。飯田が駆け付けた時には既に、ステインによつて動けなくなっていた男だ。

「その君！ 奴は血を舐めた相手の体を動けないようにすることができんだ！ 剣に気をつけろ！」

彼はステインの言葉や、自分と飯田が体を動かせない現状からステインの個性を推察して警告を送る。

「剣!? だつたら当たらないように……！」

剣で切られて出血するようなことがあれば、自分も身動きを取れなくなる可能性があるあ

る。

そう気付いた出久は敵の攻撃を見切る必要があると思い、その予測が可能なジオウIIに変身を試みるが…

「フォームチェンジか？その際は与えない。」

ジオウIIへと姿を変えようとしているのも予測し、ステインは2本の剣を振るってジオウに迫る。

「…ッ！」

出久も何とかワンフォーオールによって身体能力を強化し、地面を蹴ってその推進力で距離を取る。

『ジオウII！』

出久がグラントリノから習った強化された脚力で地面を蹴っての跳躍は、相手との距離を置くには丁度良かった。

ジオウIIウオッチを取り出して起動し、2つに分ける時間を稼げた。

アナザージオウとの間に距離も出来てこのままジクウドライバーを操作できればジオウIIへの強化変身ができると思ったその時だった。

「隙だらけだ。」

アナザージオウは自分が持っていたナイフを取り出し、それをジオウの右手目にかけて

投げる。

「しまった!」

ジオウの手自体はマイトガンレットによって守られ、傷一つ負わなかったが、ジオウIIライドウオツチの片割れが弾かれて手から離れてしまった。

「このまま仕留めるッ!」

ジオウの意識は己の手から離れたウオツチと、目の前の敵の間で揺らぐ。

その隙を突くようにアナザージオウが彼に向けて剣を振るおうと腕を振り上げた。

「避ける! 緑谷!」

突如どこからか炎が放たれ、ステインは攻撃を仕掛ける前にそれを跳躍して避けることになった。

ジオウもそれを屈んで避けつつウオツチを回収する。

「次から次に…今日はよく邪魔が入る!」

ジオウとアナザージオウが炎の放たれた方を見ると、そこには自身の左半身の一部から火を出している轟の姿があった。

「こいつが教えてくれて何とか駆け付けられた。」

「轟君までッ!」

出久の援軍に駆け付けたと語る轟の右肩には、先程ジオウが放ったライドガジェット

のタカウオツチライドが止まっており、彼の誘導で轟がこの場に来ることができたと分かる。

「ただ事じゃねえから応援呼べってことだろ？安心しろ、数分すりゃプロも来る！」

今度は轟の右半身から冷気が放たれるが、それも跳躍してアナザージオウは回避して足元を凍らせられるという事態は避けた。しかし、その氷は小さな山となり、そこを滑ってネイティブと飯田が一か所に固まる。バラバラの位置にいた2人を一か所に集めたことで出久達の集中力が散漫することを避ける。

「いくよ。轟君！」

『ライダータイム！』

そして出久もその間にジクウドライバーにジオウライドウオツチⅡを装填して、ベルトを1回転させる。

『仮面ライダー！ライダー！』

『ジオウ！ジオウ！ジオウ！Ⅱ！』

未来予測能力と、ヒーロー殺しとしてプロヒーローやヴィランとの戦闘経験を活かして出久に攻撃やその回避を許さなかったステインことアナザージオウ。だが、炎と氷を自在に操る轟が彼から隙を作ったことにより、出久はジオウⅡへの変身に成功した。

「緑谷に似た姿をしているが、こいつらは殺させねえぞ。」

「僕のアナザーライダー、なら、僕が止める！」

出久も轟もUSJで本物のヴィランや怪人と戦ったとは言えど、外に出ればこの場面はプロヒーローに任せるのが得策だ。しかし、相手はジオウのアナザーライダーでもある。以前のアナザークウガとの戦闘時やその後、アナザーライダーはそのライダーの力を持つ者や強力な能力を持つ者でないと倒せない、とウオズに教えられていた。目の前にいるのがジオウのアナザーライダーであるなら倒せるのはジオウだけ……逃げる隙も与えてくれない。それ故に出久は戦う道を選ぶことにした。

「止めれるものなら……止めてみる！」

ジオウと轟に挟まれてしまったアナザージオウだが、生身の轟の方を狙うことにした。

彼と飯田やネイティブらに向けて駆け出していき、それを防ぐように轟が巨大な氷の壁を作り出す。

「自分より素早い相手を前に視界を塞ぐとは愚策だな……」

「いいや、僕がいる！」

ジカンギレードとサイキョーギレードの二刀流でアナザージオウに背後から迫り、そのまま振り下ろす。

「2本の剣の扱い方がダメだ！」

ジオウが振るう2本の剣はほとんど同じ軌道を描く様に、並行して振るわれる。その2本の刃を、アナザージオウは長い剣一本で防ぐ。

「来るッ……！」

ここでジオウⅡは未来予測を活かし、次にアナザージオウが繰り出す攻撃を予測。

時計の短針を模した剣でジオウを突こうとするのを察知すると、咄嗟にその剣を横方向から蹴って弾き飛ばす。

その蹴りの勢いで体を回転させ、その回転に合わせるように2本の剣を振るってアナザージオウを切りつける。

（俺の動きを読まれた！）

（僕の動きを読んでもッ……！）

ジオウの攻撃をアナザージオウは再び未来予測で見切り、長針を模した剣で防ぐ。

ジオウⅡもアナザージオウも未来を予測する能力を持ち、それぞれの次の攻撃を予想しながら攻撃と防御をしていく。

「なら、これはどうするっ？」

アナザージオウは自身の剣を振るい、轟が作った氷の壁を剣で切ってから一気に轟らに距離を詰めていく。

「やせな……！」

アナザージオウが友人達に迫ると、ジオウはワンフォーオールにより身体能力を強化する。

その状態で地面を蹴り、その勢いで加速。一気に轟らの前に滑り込んでアナザージオウの前に立つ。

「轟君は血を見せないように気を付けて！血を舐められたら動きを止められる！」

「分かった！」

轟が炎を放つて、アナザージオウを自分たちから離そうとする。

「攻撃が大振りだとよく言われないか？」

だが、その炎を避けてから2本のナイフを投げようとするアナザージオウ。

「危ない！」

轟に向けて投げられた刃が轟に刺さってしまう未来をジオウⅡは予測。

ワンフォーオールの力で素早く動いて轟の前に立つと、サイキョーギレードでナイフを切り落とす。

「何故…二人とも…何故だ！やめてくれよッ…兄さんの名を継いだんだ…僕がやらなきゃ！そいつは僕が！」

アナザージオウの剣を轟が氷で防いだり、逆に彼を拘束しようと放った氷をアナザージオウが剣で切ったりと一進一退の攻防が繰り返される。未来予測をうまく使うア

ナザージオウに、ジオウも轟も決定打となる攻撃を仕掛けられない。

「継いだのか？おかしいな：俺が見たことあるインゲニウムはそんな顔じゃ無かったな。」

轟は半冷半燃を活かしてアナザージオウを遠ざけつつ、自分たちを制止しようとする飯田に応える。

「お前ん家も裏でいろいろあるんだな…」

家族というものに縛られているのは轟も飯田も同じであった。

形や感情は違えど、轟は恨み辛みで動いていた。それは今の飯田も同じである。

それ故に轟は今の飯田がどれほど視野が狭まっているのかよくわかっていた。

「スマーツシユ！」

ジオウと轟はそれぞれの攻勢でアナザージオウを飯田達から離れさせようとしていく。

(2人とも…)

ステインによって体の動きを止められてしまった飯田は、体を張って戦う2人を見ることしかできなかつた…

第36話 保須の悪夢 後編

「再生能力と超パワーか、大体わかった。」

保須の中心街では上顎がなく、黒くて筋骨隆々な脳無と仮面ライダーデイケイドが戦っていた。

先程から鎧武の姿にカメンライドしていた彼は、2本の剣で何度も相手を切ったがすぐに傷が治ってしまうのを見て、相手が再生能力持ちであると推察する。

「だったら、傷を焼けばいい。」

『カメンライド！ ウィザード！』

何度切っても再生してしまうことから、デイケイドはまた違う戦法を選ぶ。

仮面ライダーウィザードが描かれたカードをマゼンタ色のネオデイケイドライバーに挿入すると、デイケイドウィザードに姿を変えてライドブツカーとウィザードガンを構える。

「まずは足だ。」

自身の手を持っている2つの武器をそれぞれ銃形態に変形させ、それぞれの銃口から脳無の足首に向けて弾丸を放つ。

「再生するにしても体力に限度はあるか…」

幾つもの弾丸は脳無の足首を貫き、その骨や筋肉、腱を断ち切ってしまう。

立てずに膝をつく脳無だが、足首の組織の回復速度が遅くなってしまう。

何度もデイケイドの攻撃を受けて、そのたびに再生した影響で体力が削がれて再生が遅くなってしまう。

「その腕を封じさせてもらおう…」

デイケイドから見て相手の驚異的な能力は2つ。超パワーと再生能力である。

特に超パワーから繰り出されるパンチは厄介であるため、それを封じるために2つの武器をそれぞれソードモードにして脳無の肩に向けて振り下ろす。

「焼き加減はウエルダんだ。」

2本の刃は脳無の両腕を肩から切り落とし、さらにデイケイドウイザードが右手を翳して赤い魔方陣を生成。そこから魔法で作り出した炎を脳無に放ち、その傷口を焼いてしまう。

「トドメだ。」

『ファイナルアタックライド！ウイ・ウイ・ウイ・ウイザード！』

傷口を焼かれて再生できなくなり、地面をのたうち回る脳無に向けてデイケイドウイザードは右足に魔方陣を纏った状態で迫り、ライダーキックを放つ。その蹴りを受けた

脳無は、そのエネルギーによって爆発し、体の残った部分もダメージからか再生が止まってしまおう。

「アンタ、何者だよ!？」

先程まで脳無に苦戦していたヒーロー達は、脳無をいとも簡単に倒してみせた。デイケイドに驚きを隠せない。そして、普段見たことない男の正体をヒーローのうち1人が問いかける。

「通りすがりの仮面ライダーで、今はプロヒーローだ。覚えなくていい!」

そしてまた、デイケイドの下に職場体験に来ているウオズ達も翼が生えた脳無と対峙していた。

「空には逃げさせないよ。」

飛行可能な相手に対し、爆豪が変身するゲイツ・デイエンドアーマーが地上から攻撃し、空に逃げようとしたらバーストライカー・プレラモードに搭乗するウオズ・フューチャーリングリバイスが突撃してきて敵の離脱を阻止する。

『ドリルアーム』

さらに、ゲイツ・デイエンドアーマーが召喚したバースが、自身の武装であるCLA Wsユニットの1つであるカッターウィングで飛行してウオズを援護している。

バースが右手に装備したドリルアームで脳無を背後から殴れば、その回転するドリル

が後ろから脳無の腹を貫く。

「おいウオズ！こいつ、撃ち落とすぞ！」

「了解。」

地上にいる爆豪はジカンザックスをゆみモードにして構えている。

それを見てウオズもバイクの上でジカンデスピア・ツエモードを構える。

『『フィニッシュタイム！』』

ウオズはジカンデスピアのタッチパネルを操作し、ゲイツはマツハライドウオッチをジカンザックスに装填する。

『『不可思議マジック！』』

『『マツハ！ギワギワシユート！』』

ジカンデスピアから放たれた魔法の刃と、ジカンザックスから拡散しながら放たれる魔法の矢がそれぞれ脳無の翼を撃ち抜く。両翼に穴が開いてしまった脳無は飛行能力を失い、地面に落下してしまう。

「再生させんな！」

『『キヤタピラレッグ！』』

こちらの脳無も再生能力を持っているが、回復の隙を与えないようにバースが自身の両足にキヤタピラを装備すると、回転させた無限軌道部を翼の付け根に押し当てて周囲

の肉や骨を削いでいく。

『カマシスギ!』

そこに、バイストライカーから降りたウオズがジカンデスピア・カマモードを構えて走ってくる。左翼部に向けてその刃を振るい、キヤタピラレツグで削られたその部位を一気に切り落とす。

「トドメだ!」

「おうよ!」

バースとゲイツが並び立つと、ゲイツがデイエンドライドウオッチのスイッチを押す。

『ファイナルアタックタイム!バ・バ・バ・バース!』

『ブレストキヤノン!』

すると、バースは自身の胸部にキヤノン砲を装備するとその砲口を脳無に向けて。

「くたばりやがれ!クソがツ!!」

ブレストキヤノンからエネルギー弾が脳無に放たれるのと同時に、ゲイツも両手から大爆破を放ち。それら2つが脳無に向けて突き進んでいき、直撃する。

「流石だね、新しい力は…」

「テメエの援護も助かったぜ。」

その爆発の跡地には、体が黒焦げになった脳無が倒れていた。それを見つつ、ゲイツとウオズは互いの拳をコツンと当てる。

デイケイドの下での特訓で、2人の連携もさらに強化されていた。

「おや？これは我が魔王の…」

そんな時、ウオズはジオウが放ったコダマスイカアームズが自分たちに駆け寄ってきているのに気付く。

「消火は俺がやる。お前たちは仲間のところに行つてこい。」

出久が救援を求めていると察したウオズと爆豪に気づいた士はウイザードの力で水を操つて火を消していく。その間に2人に出久のどこまで行くように勧める。

「すまないね。行つてくるよ。」

士の意思を組んで、ウオズと爆豪はコダマスイカアームズに連れられて出久の下へ向かうのであつた。

とある路地裏ではジオウⅡに変身した出久と、轟がヒーロー殺しステインの変身するアナザージオウと対峙している。

轟の水と炎を剣で対処しつつ、ジオウⅡとは未来予測をお互いにしながら一進一退の攻防を繰り返している。

「やめてくれ…もう、僕は…」

熟練の技術を持つアナザージオウを相手に苦戦し、2人は少しずつ体力を削られてしまっている。

その様子を飯田はもう見てられず、2人を止めようとしている。

そんな飯田の言葉に、轟はアナザージオウの攻撃に対処しつつ応える。

「辞めてほしけりや立て！なりてえもんちゃんで見ろ！」

それは、かつて復讐に駆られて視野が狭くなり、大事なものが見えなくなっていた轟だからこそ飯田にかけられる言葉であった。

轟の言葉に、自分の行動の愚かさを痛感し、悔しさからか涙を溢れさせる飯田。

「さつきから飯田君たちの方を狙ってる…？」

そんな飯田とネイティブに向けて剣を振るいながら駆けていくアナザージオウ。

（2人を殺そうと焦ってるツ…？他のプロも来るから…）

この戦いが長期化すれば、体力に余裕のあるステインが優勢になるかと思われるが、轟もプロヒーローの救援も呼んでいると言っていた上に、コダマスイカアームズがさらなる援軍を連れてくる可能性もある。

ヒーローサイドは徐々に増援が来る可能性は高いが、ステインはあくまで一人。脳無らの出現で彼もオーマシヨツカーと結託していると思われかねないが、そういった評判を付けるがために死柄木が勝手にやったことである。時間が経てば不利になるのはステイン自身がよくわかっており、早く飯田とネイティブを仕留めてこの場から撤退しようと考えていた。

(ワンフオーオール！フルカウル！)

ジオウはワンフオーオールを全身に張り巡らせて身体能力を強化し、アナザージオウの前に回り込んで2本の剣を振るう。

(次の動きはッ……！)

2人の剣がそれぞれ2本、合計4つの刃が交じり合う状態でお互いが未来予測を發動。

「ダメだッ……！」

「どの手数だッ……！」

互いが互いの手を読み合い、予測できる未来も2つ、3つと増えて複雑化していく。

2人はそれぞれ、相手がどの手法で攻撃してくるのか見切れず、一度距離を置く。

「轟君、多分アイツも未来予測の力を持つてる……」

「なんだって……？」

そしてお互い、相手が未来予測能力を持つていることを察する。

自身の姿を模したアナザーライダーなのだから、自分と同じ力を何か持っていてもおかしくないと考えながら戦っていた出久。その推論は彼が見た未来の中で確信に近づいた。出久の動きを予測するように防御や攻撃を繰り出すアナザージオウ。互いが動きを読み合って戦う未来がジオウⅡにも見えていた。

「未来予測を持つてるなら、どう攻略するんだ…?」

「大丈夫。やり方はわかっているよ。前に、ウオズ君にやられたから…」

雄英体育祭の決勝で、出久の変身するジオウⅡはウオズのフューチャーリングゼロワンのよって未来予測能力を完封されてしまった。

だからこそ、その方法を応用してこの事態を乗り切ろうとしていたが…

「けど、人数が足りない。」

今動けるのはジオウと轟の2人だけだ。

ウオズがライダムモデル達と共に行った、多数で攻撃を仕掛けて予測されても攻撃を回避し切れない状況にするという作戦を再現するには人数が足りなかった。

「僕も…戦うよッ…!」

「飯田君!」

その時、ステインの個性によって体を固められていた飯田が立ち上がって彼らの前に

出る。

「轟君も緑谷君も、関係ないことで申し訳ない！」

「そんなこと……」

「だからもう！これ以上2人に血を流させるわけにはいかない！」

飯田の決意は固まっていた。ここから2人を救うため、多くを救うために再起すると覚悟を決めて立ち上がった。

回復した飯田含めた3人と少し距離を置いていたアナザージオウが剣を構えて歩み寄る。

「感化され取り繕うとも無駄だ。人間の本質はそう易々と変わらない。お前は私欲を優先させる贗物にしかかなれない！ヒーローを歪ませる社会の癌だ。誰かが正さねばならないんだ！」

飯田が自分の欲望のためにステイン自身を倒すことに躍起になり、近くにいたヒーローを救おうとしなかったのを見て、彼を私欲で動く人間と判断して粛清しようとしていた。

「時代錯誤の原理主義だ。飯田、人殺しの理屈に耳貸すな。」

ステインの言葉に飯田の心が揺るがぬように轟が忠告する。

「いや、奴の言う通りさ。僕にヒーローを名乗る資格などない……それでも、折れる訳には

いけない。俺が折れれば、インゲニウムは死んでしまう！」

自分の行動に対する後悔や、そこからくる絶望。それに対して飯田は屈しない。憧れのインゲニウムを継ぐために、飯田は出久達の横に立つ。

「論外」

飯田に切りかかろうとするアナザージオウに、轟が炎を放つ。

その攻撃を回避し、壁を蹴りながら飯田達に迫ってくるのに対し、轟が何度も氷結を放っていく。

氷を砕きつつ迫る相手に何度も炎と氷で攻撃を仕掛ける。

「轟君……のまま相手に攻撃しまくって！」

「任せろ！」

轟による炎と氷の連続攻撃はアナザージオウをこちらに寄せ付けないだけでなく、予測の集中をそちらに偏らせることができる。轟自身、炎と氷を交互に繰り出すことで体内の温度調節も出来ており、しばらくは威力を保ってアナザージオウを攻撃し続ける。

「飯田君は体育祭でやったアレ、できる？」

「ああ、問題ない！」

「だったら、僕と一緒にいくよ！」

ジオウはワンフォーオールによる身体強化、飯田は両足のエンジンによる加速でそれぞれスピードを上げてアナザージオウに迫っていく。その間も轟が左腕からの火炎放射で敵の意識をそちらに集中させて出久達に対処するための間を与えない。

(マイト、ガントレット！)

「レシプロ…バースト！エクステンド！」

轟による火炎放射をよけようと跳躍するアナザージオウ。跳んでしまった状態だと、飛行に有意な個性や能力を持っていなければ、上手く身を動かせないし、轟の攻勢がそれ以降にアナザージオウの身に起こることを予測させる暇を与えなかった。

ジオウIIは右手のガントレットにワンフォーオールのパワーを貯め、飯田は足からのエンジンの噴射を蒼い炎にして急加速。

「スマーツシュ!!」

壁を蹴つての回避も出来ないアナザージオウの背にはレシプロによる推進力が加わった飯田の右足による蹴りが、顔面部にはワンフォーオールで威力の上がったジオウのパンチが突き刺さり、アナザージオウの仮面にわずかにヒビが入る。

(チャンスだ！)

「お前を倒そう！今度は犯罪者として！」

2人の攻撃を食らっても、アナザージオウは意識を手放さず、剣で飯田を切ろうとす

るがそれを彼は避ける。

「たたみかけろ！」

「ヒーローとして！」

今度は左足でレシプロを発動した飯田の蹴りがアナザージオウを宙に打ち上げる。

『フィニッシュタイム！』

さらに轟の炎がアナザージオウに放たれ、彼の身を焦がす間にジオウⅡはジクウドライバーを操作。

近くにあつた壁をワンフォーオールで強化した脚力で蹴って飛び、ピンボールのように壁から壁を蹴って登っていき、生成されたピンクと金色の“ライダー”の文字がアナザージオウを捉える。

『トウワイズタイムブ레이크！』

上から下に、敵を叩き落すようにジオウⅡはライダーの文字とワンフォーオールの力を込めた必殺キックをアナザージオウに打ち込む。

蹴りを食らった敵の体は、その衝撃で地面にまっすぐに落ちていき、体がアスファルトに接触すると同時に爆発する。

「拘束するぞー！」

アナザージオウの変身が解除され、生身のステインとアナザージュオッチが地面を転が

り、轟はアナザージオウの体を氷で覆う。機能を停止したアナザージオウウオッチは砕け散ってしまった。

「おお、我が魔王！少し到着が遅くなってしまったね…」

コダマスイカアームズに連れられ、ウオズ達も出久らの援軍に向かったのだが、到着した頃には既に戦いは終わっていたようだ。出久、轟、飯田とプロヒーローネイティブの4人が1人の男を拘束して路地裏から出てきた。

「ウオズ君！かつちゃん！」

「おう、出久。その捕まえてる奴は誰だ？」

爆豪が出久達に拘束されている男の正体を聞く。

「彼はヒーロー殺しステイン。さつきは僕のアナザーライダーにも変身してたけど、2人のお陰で何とか…」

「君のアナザーライダー…アナザージオウだね。アナザーウオッチはどうなった？」

「あれは、壊れたよ。」

ステインがアナザージオウに変身したと聞き、ウオズは驚きを隠せないがまずは

ウオッチが破壊されたか確認することになった、

「おお！そつちも終わったか！」

その後、グラントリノらプロヒーローもその場に現れた。

「エンデヴァーさんから要請を承って来たんだが……」

「子供!」

「酷い怪我じゃないか！今すぐ救急車を呼ぶから！」

一緒にやってきたプロヒーロー達は、敵を拘束しているのが高校生であることに驚きつつも、飯田の負傷具合を見てすぐに治療しなければいけないと判断する。

「おい……コイツ……」

「え!?まさか……ヒーロー殺し?」

「すぐ警察にも連絡だ!」

プロヒーロー達が警察や救急車を呼び、この事態は収拾していこうとしていた。

そんな中、血を流しつつも飯田が出久と轟に歩み寄る。

「2人共！僕のせいで迷惑をかけて……本当にすまなかつた！怒りで何も……見えなくなつてしまった……」

「僕もごめんね。君があそこまで思い詰めてたのに、見えてなかつたんだ……友達なのに……」

飯田の謝罪に対し、出久も謝罪の言葉を返す。自分が飯田の心の闇を取り除けなかったことに情けなさを感じていた。

「しつかりしてくれよ、委員長だろ。」

「ああ、またいつもみたいじゃ我々A組を導いてくれたまえ。」

轟とウオズも飯田に励ましの言葉を投げかける。

「誰か来る!? 新手だ!」

このまま事件の処理に入っていくのかと思われたその時だった。

エンデヴァーやウオズ達が仕留めたのはまた違う4体目の脳無がどこかから現れ、突然の奇襲にヒーロー達は対処しきれずまき散らされる。

「ステイン!」

その脳無は空を飛び、彼らの中に突撃したかと思えば拘束されたステインの体を奪取した。

「ホント、手間がかかる奴だよ。」

ステインを回収した脳無の下に、黒霧と死柄木が現れる。

「死柄木ツ……!」

「これを回収するよう、先生に頼まれていてねえ……」

すると、死柄木は手に持ったブランクウオッチをステインの体に押し当てる。

『ジオウ…』

ステインの体の中にあつたアナザージオウの力の残滓を回収し、新たなアナザージオウオツチを生成したのだ。

「そのウオツチ、使わせないよ!」

アナザージオウオツチを奪つてしまおうとウオズがマフラーを伸ばすが、脳無がそれを弾き飛ばす。

「帰るぞ。黒霧…」

「待て!」

これ以上ここにおいても攻撃されるだけと判断し、死柄木は黒霧のワープゲートを潜つて保須から離脱する。続いて脳無もワープゲートに向かおうとしたその時だった。

「贖物が蔓延るこの社会も…!」

ステインが隠し持っていたナイフで自信を拘束するロープを切つてから、ナイフで脳無を切りつける。

「悪戯に力を振りまく犯罪者も!」

そのナイフについた血を舐められた脳無はステインの個性で体が動かなくなる。

「粛清対象だ…!」

体が動かなくなった脳無の頭部にステインのナイフが突き刺さる。

その様子を見て、黒霧は脳無を見捨ててこの場から立ち去る。

「全ては……正しき社会のために！」

口からは涎が垂れ、目を見開いた状態のステインがヒーロー達に向けて歩み寄る。

「贖物……正さねば……誰かが血に染まらねば！」

そんなステインに、この場にいる多くのプロヒーロー達が気圧されてしまう。

飯田も轟も思わず体が固まってしまう。

「ヒーローを！取り戻さねば！来い！来てみる贖物共！」

「いいや、それは違うさ……ヒーロー殺し！」

多くのヒーロー達が動けない中、ウオズがただ一人前が出る。

「血を流して正されるものなんてないさ。君がどういうヒーローを求めているかは知らないけど、ヒーローの考えやスタイルは様々だ。君に強制する権利は無い。」

ウオズは前世で、多くの平成仮面ライダーの活躍を見てきた。

彼らが全員同じ理由で正義の道を歩んでいるわけではない。各々にバックボーンや理由がある。

ヒーロー像というのを一括りにして全員に同じ方向を向かせるというステインの目的に、ウオズは疑問を持っていた。

「ウオズ君の言う通りだよ。一人一人、正義の形は違うんだ。それを一つに固める為に

血を流すなんて間違ってる……！あなたにはもつと、別の道を歩んで欲しかったです……」

出久もウオズの言葉に続く。仮面ライダーの歴史を知るからこそ、2人はステインの言葉に心が揺るがなかった。それに、出久の中ではステインの思想が飯田や彼の兄を傷つけることを正当化するべきでないという考えもあった。

「んで、どうすんだ？また戦うか？」

爆豪も出久達と並び立ち、身構える。3人はいつステインが攻撃を仕掛けてきてもいいようにいつでも変身できる体制を整える。

「俺が……間違ってるだと……俺は……」

ステインは戦いの中で出久の言葉を聞き、彼は自分の中で本物のヒーローであると認めていた。

しかし、そんな出久に自身の行いを否定されてしまった。出久を認めているからこそ、彼の言葉は深く心に突き刺さった。自分がこれまで流してきた血を否定され、ステインは意識を手放して倒れてしまう。

「か、確保だ！」

プロヒーロー達がステインを再び拘束し、この後到着した警察に身柄を引き渡したのと飯田含めた負傷者の治療。そして、4体の脳無の討伐完了を確認したところで保須の事件は幕を下ろしたのであった……

第37話 職場体験の終わり

オーマシヨツカーらによる保須襲撃から2日が経った。

職場体験が始まって5日目でもある。

「今日もステインのニュースをしているみたいだね。」

「ああ、この話題で持ち切りツツー感じだな。」

ヒーロー殺しステインにプロヒーロー2名と職場体験中の高校生5名が遭遇し、確保できたというニュースと、それに伴って報道されるステインの思想に関する特集が常にテレビをにぎわせている。

飯田君と轟君はあの日プロヒーローからの許可無しで戦っていたため、お咎めを受けてしまった。だが、その法違反を隠すためにその場にいたエンデヴァー含めたプロヒーロー達の功績ということになった。

一応その代表はエンデヴァー氏ということになった。

「ステインの思想は、ニュースでかなり拡散されているようだね。注目度もかなり高い。」

「ま、俺はコイツの考え方は好きじゃねえ…」

「ああ、私もだ。」

世間では彼の声を「カッコいい」と評価するコメンテーターも居てたりするが、私や爆豪君はあまりよく思っていない。

「つーかあん時、真正面からあいつのこと否定してたけど、なんであそこまで言えんだ？ あんときのテメエの言葉、その辺のニュースに出てる奴らよりも的を射てるよな。」

「君の方からそんなに褒めてくれるとは、嬉しいことだね。」

1年ほど前までお互いに敵視していた私と彼だが、我が魔王を通してお互いに成長して信頼関係を築けてきた。彼の口から私への誉め言葉が飛び出してくるとは驚きだ。

これも雄英体育祭での戦いや、門矢士の下で連携を取れるようになったからこそかもしれない。

「だが、あそこまでステインの言葉に対して疑問を持たたのは仮面ライダーのお陰かも知れないね。」

「ライダーの?」

「ああ、私は仮面ライダー達の物語をよく知っている。だからこそ分かるのだよ。ヒーローや正義の戦士の中にも、それぞれ違った正義があると…奥深いよ、仮面ライダーというものは。君の持つライドウォッチの仮面ライダー達にも各々違った正義がある。」

門矢士が爆豪君に渡した仮面ライダー達。G3やギャレン、アクセルにスペクターに

クローズと個性的な仮面ライダーが多い。その中には利己的に動く者もいるが、そんな中でも皆、人を守って戦っている。

ステインの思想に当て嵌めて否定するべきではない。いや、否定できないほどに个性的でどんな枠にも当てはまらない…それが仮面ライダーなのかも知れない。

「仮面ライダー」つつーのは奥深いんだな。」

「ああ、勿論プロヒーロー達にも同じことは当てはまるからね。爆豪君が仮面ライダーというものの深みを分かってくれたのは嬉しいことだよ。」

爆豪君も仮面ライダーのことを徐々に理解しつつある。ライドウォッチをさらに使いこなせるようになってくるだろう。

「さて、ライダーについてさらに理解するでしょう。」

まずは爆豪君がさらにライドウォッチを使いこなせるように今日も組手で特訓をするでしょう。

「なら、俺が相手しよう。」

私達が訓練の準備をしようとしていると、そこに門矢士も来た。

「仮面ライダーに関しては俺もよく分かっている。残りの2日間しっかりと教えてやる。」

「おう！」

「ウォズも、基礎的な戦闘能力を底上げする。しっかりと励めよ。」

「勿論です。」

仮面ライダーディケイドは強敵故に何度組手をしても未だに倒せていない。

だが、少しずつ私も爆豪君も強くなってきていて、良いトレーニングになっている。

少しずつ手応えも増えてきたし、残りの2日間でさらに強くなって1回でも倒せると良いだろうね…

「だいぶ使い慣れたようだな。」

「はい！ワンフォーオールもだいぶ定着してきました！」

一方、こちらはグラントリノの下でトレーニングを積んでいる仮面ライダージオウと緑谷出久。

ワンフォーオールを完全に継承して、その使い方をさらにマスターしている。

出久の実力もかなり上がっており、事務所内でのトレーニングでは余波で家具が壊れてしまうというところで廃工場に移ってのトレーニングに切り替えていた。

「基礎はしっかりとってきたな。次は応用いくぞ。」

「はい！」

『龍騎!』

ジオウに変身した出久を相手にグラントリノは何度も組み手をし、彼に身体能力を強化した状態での動き方をしつかり叩き込んだ。

それに加え、応用編として各アーマータイムとワンフォーオールの組み合わせを試していた。

『アーマータイム!』

『アドベント!』

『龍騎!』

ジオウは龍騎ライドウォッチを起動し、仮面ライダー龍騎の姿を模した鎧を身に纏う。

「いきます!」

仮面ライダージオウ・龍騎アーマーへと変身を終わると両手に装備されている龍の頭部を模した籠手から、グラントリノに向けて炎を放つ。

「そんなもんか!?!もつと良いのが撃てるだろ!」

「勿論ですよ!」

グラントリノは個性によるジェット噴射を足から放ち、壁から壁を蹴りながら空間内を駆け回る。

縦横無尽に廃工場内を跳ね回って、ジオウが放った炎を避ける。

「ドラグレッツダー!」

ジオウは新たに覚えた技を使うために、グラントリノの気を逸らすために龍騎アーマーの力でミラーモンスター・ドラグレッツダーを呼び出す。

「2対1か!」

ドラグレッツダーがグラントリノを追うように飛びつつ、その間にジオウも自身の体にワンフオーオール・フルカウルを張り巡らせる。

(ワンフオーオール!フルカウル!)

脚力を強化したジオウは地面を蹴り、その推進力でグラントリノのように廃工場内を飛び回る。

ドラグレッツダーと連携するジオウの動きに、グラントリノも自身の攻勢を制限されてしまう。

「スマーツシュ!」

宙を舞うグラントリノに対し、ドラグレッツダーとジオウが挟み撃ちをするようにして襲い掛かり、ジオウの方はパンチ力を強化した腕をグラントリノに向けて振るう。

「まだ甘い!」

だが、グラントリノはジオウの狙いを読んでいた。

近くにいる壁に向けて足を向け、そこへのジェット噴射の勢いでジオウとドラグレッツダーによる攻勢を避ける。

「デラウエアスマツシユ…エアフォース！」

だが、そこで攻撃の手を緩めないのが今のジオウだ。

指に力を込め、デコピンの要領で周囲の空気を押し出しながら、腕から炎を放つ。

炎がデコピンによって放たれた風圧に乗ってグラントリノに迫る。

「まだ負けんぞー！」

グラントリノもその炎に向けて足を向け、ジェット噴射を撃つてその攻撃を凌ぐ。

「もらったー！」

だが、その隙を出久は見逃さなかった。

ワンフオーオールで強化された脚力で一気にグラントリノまで駆けていき、パンチを

グラントリノの腹部に撃ち込んだ。

「うう…み、見事だ…！」

「グラントリノ！」

モロにジオウのパンチを受けてしまったグラントリノは、腹を抑えて蹲る。

そんなグラントリノを心配した出久が彼の下に駆け寄る。

「良いパンチだ。もう俺から教えることはねえな…！」

「そんなこと…僕はまだまだですよ。」

駆け寄ってきた出久に、心配させまいとグラントリノは親指を立ててみせる。

「さて、後はひたすら実践よ。今夜また街に行くぞ。」

「はい！」

前回は遠征に行った結果、保須でオーマシヨッカーによる襲撃に出くわしてしまった。

その際も実践経験は積むことができたが、そこからさらに応用の段階に踏み込んでいく。

グラントリノ自身もその相手をするには荷が重くなりつつある。

「今日は新宿だ！夜はちと治安が悪いかもしれないが、良い練習だろ。」

「ちよつと緊張しますけど…頑張ります！」

ここから残りの2日間は夜の東京で実践経験を積み、出久は更に力をつけていく。

出久だけでなく、ウオズや爆豪を始めとした雄英生達は職場体験でさらなる成長をして、クラス一同が再び会う時を迎えるのであった。

期末試験編

第38話 ワンフオーオール過去の過去

職場体験を終えて最初の登校日

その午後に行われるヒーロー基礎学の授業では、コスチュームに着替えたA組生徒たちが工場地帯を模したグラウンドに集まっていた。

「おや？我が魔王のコスチュームが少し変わってるね。」

「うん、グラントリノのアドバイスで色とか装飾を少し変えてみたんだ。」

グラウンドに向かう出久のコスチュームは、これまでのものと打って変わって色が濃い緑色になっている。

オールマイイト風の頭巾はフードに代わり、口元には金属製のマスクがある。グラントリノからライダーへの変身前でも行動しやすいようにと言われ、一度コスチュームを一新することにした。

「似合ってるね、新しいコスチューム。」

「ありがとう。」

笑顔で話す2人が到着したグラウンドの入り口にはオールマイイトが立っており、そ

の周りにA組メンバーたちが集まる。

「はい、私 came! てな感じでやっていくわけだけどもね。」

オールマイトはすでに授業を何度もこなしており、最初の挨拶の”私 came!” も少し適当になっている。

「はい! ヒーロー基礎学ね。久しぶりだなく少年少女! 元気か? さて、今回のヒーロー基礎学だが職場体験直後ってことで、遊びの要素を含めた”救助訓練レース”を行うことにする。」

「救助訓練なら! USJでやるべきではないのですか?」

今回の授業内容は職場体験で学んだ技術を活かすための救助訓練レースであるが、”救助訓練”というワードを聞いて飯田はUSJで行わない理由について質問する。オーマシヨツカカーの襲撃以降、何度か救助訓練の授業をUSJで行う機会があった。それ故に皆、救助訓練といえばUSJという認識を持っている。

「あそこは災害時の訓練になるからなく私は何て言ったかな? そう! レース! ここは運動場γ! 複雑に入り組んだ迷路のような密集工業地帯! 5人3組と6人1組に分かれて1組ずつ訓練を行う。私がどこかで救難信号を出したら、街外れから一斉スタート! 誰が1番に私を助けに来てくれるかの競走だ!」

今回のフィールドは幾つもの建物が並んでいる密集工業地帯。その複雑な地形の中

心部にいる要救助者役のオールマイトの下に、だれが一番最初にたどり着けるかのレースになる。

「ここは建物も多い、被害が少ないようにしないとね。」

「わーつてるよ。」

今回のシチュエーションのことも考え、ウオズは爆豪の方を見て爆破をやりすぎてしまわないように忠告する。

勿論そんなことは重々承知していると、爆豪はウオズの言葉に静かにうなづく。

「じゃー早速始めていくぞ…ああ、それから緑谷少年はクロックアップとファイズ・アクセルは使用禁止だぞ。」

「はい！それでも頑張ります！」

レースということもあり、カブトアーマーのクロックアップやデイケイドアーマー・ファイズフォーム等による高速移動は今回は使用禁止となった。

そのまま5人ずつ3組が次々とレースをこなしていき、そして最終レースとして出久、ウオズ、爆豪に加えて瀬呂と飯田、尾白ら6人のチームが準備をする。

「さて、私の新技も見せるとしよう。」

「俺も負けねえぞ。」

「2人とも、すごい気合いだね。」

既に出久、ウオズ、爆豪の3名は仮面ライダーに変身して始まりの時を待っていた。

「それと、少し気付いたのだがその腕の籠手…君の新しい力かい？」

「うん、マイトガントレットって言うんだ。」

改めてウオズがジオウの姿を見てみると、彼がワンフォーオールを継承したことでできたマイトガントレットが両手に付いていることに気が付いた。

「なるほど、君の中で力が目覚めている証のようなものかな？」

「そうかもね。」

マイトという単語からウオズ達はオールマイトから継承したワンフォーオールのが具現化したものではないかと推測する。

「では、開始位置に行くとしよう。」

ここからさらに、ウオズと爆豪も自身の開始位置に向けて散っていく。

『それでは行くぞ！スタート！』

そして、オールマイトの合図と共にこの組のメンバーが次々とスタートしていく。

瀬呂は肘から伸ばすセロテープを建物の上に巻き付け、吊り下げられた状態の自分の体をスイングして移動していく。尾白は尻尾を使った跳躍で構造物を乗り越えていき、飯田は足のエンジンで加速しながら走っていく。

『フューチャーリングシノビー！』

ウオズはその飯田のようにフューチャーリングシノビのスピードを活かして地面を走って進んでいく。

「瀬呂君のやり方も真似てみるとしよう。」

ウオズもデイケイドとの特訓を通して、変身時でもマフラーを活かしてみることにした。

付近にある鉄のパイプにマフラーを巻き付け、瀬呂の動きを真似するようにスイングして前へと進んでいく。

「爆速ターボ！」

一方のゲイツも爆破の推進力で低空飛行をし、構造物の上を飛び越えていく。

複雑に入り組んだ地形ゆえに、走るだけではゴールにたどり着くのが遅れてしまう。上を越えていくのが定石である。

「それ俺の専売特許！」

「すまないね。参考にさせてもらったよ。」

（ワンフォーオール！フルカウル！）

現在は瀬呂と彼のやり方を真似るウオズ、そこに食らいつく爆豪が建物の上を飛び越えていくやり方で上位を争っている。だが、その背後からワンフォーオール・フルカウルを使うジオウが迫ってくる。

周囲の構造物の上を次々と蹴って、ぴよんぴよん飛び跳ねて突き進んで来る。

「あれは…?」

「出久!」

『アーマータイム!』

『タカ!トラ!バツタ!』

『オーズ!』

さらにその3人を仮面ライダージオウが追い越したかと思えば、このタイミングですらにオーズアーマーに変身して脚力を強化する。

「オールマイト並みだろありゃ…」

ワンフォーオールによる身体能力強化で加速していたジオウに、オーズアーマーの脚部にあるバツタスプリングによるジャンプする為のばねの強化が加わる。その彼の跳躍力を瀬呂は思わずオールマイトと同等と評する。

「私も負けてはいられないね…」

ウオズも何とか追いつこうと構造物の上を全力で走っていく。

「置いて行かせるかよ!」

「ちよ!速すぎんだろ!」

更にゲイツも両掌からの爆破を連続で放って加速していく。

瀬呂は3人との距離を離されて唾然としている。

(間に合ってくれ!)

ジオウ、ウオズ、ゲイツの3人が演習場を駆け抜け、オールマイトの下へ向かう。

そして、一番最初に到着したのは…

「ありがとう!そしておめでとう!ウオズ少年!君が1番乗りだ!」

「私が…!?我が魔王ではないのかな?」

ウオズであった。

出久に先を越されてしまっていたと思っていた彼は、驚きつつもジャンプ力が強力すぎてオールマイトを飛び越えていつてしまったのかと推測する。

「ウオズくん!オールマイト!」

ウオズが周囲を見渡すと、どこからか出久の声がしてウオズがこちらの方を見る。

「我が魔王!?!緑谷少年!?!」

彼がその方向を見ると、そこには麗日が個性を使った時のように宙に浮かんでいるジオウの姿があった。

だが、麗日や空中移動を可能とするヒーロー達とは違って制御できていないのか体をジタバタさせている。オーズアーマーには勿論飛行できる能力もないし、少なくとも原理がフォーゼアーマーのようなロケット噴射の推進力ではないので出久もパニックに

なっている。

「すぐに助けるよ。」

『リバイス!』

『投影!フューチャータイム!』

『バディアップ!』

『フューチャーリングリバイス!リバイス!』

咄嗟にウオズはフューチャーリングリバイスへと姿を変えると、バイストライカーをホバーバイク状の形態であるプラモモードに変化させて乗り込む。

「こつちだ!我が魔王!」

ウオズを乗せたバイストライカーはジオウに向けて浮上していき、あつという間に彼の下にたどり着いてウオズがジオウの腕を掴む。

「ありがとう…ウオズ君。」

「気にするな。さあ、皆の所へ戻ろう。」

ウオズに引かれるように地面に戻っていくジオウ。

オールマイトに辿り着くころには突如発動した“浮遊現象”は収まっていた。

「無事か!?!緑谷少年?」

「ええ、なんとか…」

戻ってきた出久に心配してオールマイトも声をかける。

「何があつたんだい？」

「それが…ジャンプしてオールマイトの近くで着地しようとしたんですけど、そこに体が浮き上がってしまつて…」

「浮き上がる…無重力状態みたいな感じかな？麗日君に何かされたのかい？」

「ううん、そんなことはないよ。」

出久の身に起こつた出来事を聞き、ウオズは麗日が人を浮かせている時のことを連想する。

「浮遊現象か…まさかお師匠の…？」

「どうしたんだい？オールマイト？」

「いいや、とりあえず君達3人は放課後仮眠室に来てくれないか？今回のことで少し話がある。」

「わかりました。」

今はまだ授業中である。

今回の原因について心当たりのあるオールマイトはこの後爆豪も含めた3人を仮眠室に呼び出して話をすることにし、まずは授業を進行し、時は流れて放課後を迎えるのであつた…

「それで、話って何かな？」

放課後、私達3人はオールマイトの指示で彼が普段使っている仮眠室に来ていた。

「ああ、緑谷少年。君と私たちの個性の話だ。」

「ワンフォーオールの話ですか……」

オールマイトが我々を呼び出したのは、ワンフォーオールの話をする為だそうだ。

先日の職場体験で我が魔王は、完全にワンフォーオールを継承した。その証として手首には緑色の腕時計のようなものもついているし、ジオウに変身した際の姿も少し違っている。オールマイトが個性の話をするべきタイミングなのかも知れない。

「ああ、特別な個性だからね。話しておかなければならない。その成り立ちをね……」

「成り立ちつつーことは最初にワンフォーオール持ってた奴の話か。」

ワンフォーオール of 初代の保持者の話。

この時代から何年遡った頃の話なのだろうか？

「ワンフォーオールは元々ある一つの個性から派生したものだ。」

「元々あった個性……？」

「その名前はオールフオーワン。」

ワンフオーオール・オールフオーワン

”一人は皆のために、皆は一人のために”という意味合いの言葉だ。

よくスポーツにおけるチームワークの精神を表す言葉として使われているが、バラバラになれば少し歪な言葉になる。皆のために動く一人に対し、皆の動きに支えられる一人。その後者の名を持つ個性か：

「他者から個性を奪い己がモノとし、そしてそれを他者に与えることができる個性だ。」

「奪った個性は他の者に与えられるまでの間、どうなるんだい？」

「オールフオーワンの中にストックされ、彼自身が使うこともある。」

奪った個性を自分で使ったり他の人間に与えられるのか：

言ってしまうばチートな個性だ。

「超常黎明期。社会がまだ変化に追いついていない頃の話だ。個性の発現により、人間という規格は崩れ去った。」

超常黎明期と呼ばれる時代、個性を持った者は差別を受けてしまった。

突然怪人のように力を持つ者が生まれたのだから社会は混乱し、個性ある者を排斥しようとした。

その結果、個性を持つ者の中には犯罪に走るものが始めて暴動も起きた。この荒廃

した時代により、人類は技術の進歩も止まってしまったといわれている。

「そんな時代において、いち早く人々を纏めたものがいた。その男こそ“オールフォーワン”という個性を持つ男だ。」

当時の世なら、個性無しで生まれたかったものも居れば、個性という名の戦力を確保したい人間も居ただろう。

個性の奪取や譲渡ができるその男の存在はそういった人々にとっては有難い神のような存在かも知れない。その男の下に人が集まるのは当然と言えるだろう…

「勢力を広げた彼は計画的に人を動かし、思うままに悪行を積んでいった。そして、日本の裏社会を支配した。」

その男から繋がってくるのが、オールマイトの個性であり我が魔王に継承されたワンフォーオールか。

「彼は個性を与えていくことで信頼を得てきたが、複数の個性を与えられて者の中にはその負荷に耐えられず、物言わぬ人形の様になってしまった者も居たそうだ…」

ちょうど、脳無のような状態か。

「一方、与えられたことで個性が変異し、混ざり合うというケースもあったそうだ。」

我が魔王のワンフォーオールとジオウ、爆豪君の爆破とゲイツが組み合わさってそれぞれの姿が変わったような現象か…

「彼には無個性の弟がいた。弟は体が小さくひ弱だったが、正義感が強い男だった。兄の所業に心を痛め、抗い続ける男だった。その弟に彼は“力をストックする”という個性を与えた。それは優しさからか、屈服させるためか分からない…」

「まさか…」

「無個性だと思われていた彼にも、一応は宿っていたのさ。自身も周りも気づくはずがない、”個性を与えるだけ”という意味のない個性が！力をストックする個性と与える個性が混ざり合った！これが：ワンフォーオールのオリジンさ！」

兄から与えられた個性と、弟が元々持っていた個性が交じり合って一つの強力な個性が誕生したのか…

「で、その個性がオールマイトや出久まで受け継がれていったってことか？」

「爆豪少年の言う通りだ。奪った個性の中に成長や老化を止める個性があるのだろうか？半永久的に生き続ける彼を倒すためにワンフォーオールは力を培い、受け継がれてきた。その継承者の1人であり、私の先代でお師匠の志村菜奈：彼女の個性は浮遊であった…」

「浮遊…」

「ここでその言葉が出たということは、先程の我が魔王の身に起こったことに関する話かもしれない…」

「先程我が魔王の身が”浮遊”してしまった現象と、オールマイトの先代志村菜奈の個性”浮遊”に何か関連性があるのかい？」

「ああ、推測でしかないがな…緑谷少年。君は以前に私の師匠と話したことがあると言っていたね。」

「はい、このウオッチを手に入れた時と…ワンフォーオールを継承した時です。」

そう言いつつ我が魔王はジオウⅡライドウオッチと、緑色の腕時計を我々に見せる。

「ああ、君は過去の継承者と話したことがあるそうだが、私にはそう言った出来事はなかった。」

「それは、ライドウオッチを通した影響かも知れないね。歴史を継承することのできるライドウオッチが過去のワンフォーオール保持者の歴史や記憶を我が魔王に継承させたということなのかもしれない…」

元々は仮面ライダーの力を継承するために使われるのがライドウオッチだ。

本来の遺伝子を使う方法ではなく、ウオッチを経由したことでこれまで培われてきたものが色濃く出たのだろうか…

「そうだ、そして緑谷少年。どうやら君には私の師匠の個性が宿ったようだ…」

「僕に…歴代継承者の個性が!?!」

「んなことあり得んのかよ!?!オールマイトにも今までんなことは…」

「ああ、数十年この力を使ってきたが、歴代継承者の力が芽生えるということはなかった……」

オールマイトも爆豪君も、そして我が魔王自身もこの事態には驚いている。

過去の継承者の個性が発現するというのは、本来あり得ないことだろう…

だが、ジオウの力ならあり得るかもしれない。

「私の仮説だが、多くのライダーの歴史を継承してきた我が魔王には肉体的なものとは違う器が出来上がっていたのかもしれない。過去の歴史を己の物にすることのできる器がね…」

これまで様々なアーマータイムを使ってきた我が魔王の肉体なら、この突然変異もあり得るかもしれない。ジオウの力がワンフオーオールを継承し、その築き上げてきた力をさらに引き出しているのだろうね…

「僕に、過去の継承者たちの力が…」

「突然のことで驚いているかもしれないが、今後緑谷少年にお師匠の浮遊の様々な個性が発現するかもしれない。」

「それでも僕は…頑張つてその力も使って人を…助けます!」

我が魔王の意思は固い。さらなる力を手にすることで“ヒーローの王”に近付けるのならとその事実を受け入れた。

「私も過去の継承者の情報を集めて提供しよう。」

「俺も、テメエが力使いこなせるように手伝ったるわ！」

「勿論、私もサポートしよう。まずは浮遊を使いこなすためのトレーニングだね。」

「皆…ありがとう！」

更に進化し続ける我が魔王の力。その力を使いこなすための日々が始まった…

第39話 期末試験に向けて

職場体験より後、出久は授業をこなしつつ、突如発現した個性の浮遊を使いこなすトレーニングも並行して行っていた。

「では！今日は空中で様々な攻撃に対応する訓練を行うよ。八百万君よろしく頼むよ。」
「ええ、お任せください。」

出久のトレーニングには何人かのクラスメイトが協力してくれており、空中での姿勢制御や浮遊中の移動の術は麗日から出久に伝えられていった。爆豪も爆破を活かして出久の空中戦の相手をこなしていた。

そして今日は、ウオズが八百万の協力の下で空中にいる出久を銃で撃つてそれを出久が避けたり防いだりするというトレーニングを行うことになった。

「安全面を考えたサバイバルゲーム用のエアガンを創造しました。これなら、空中で弾の軌道も変わるのでいいトレーニングになるでしょう。」

勿論、安全の面を考えて出久はジオウに変身済みだし銃も本物ではなくエアガンだ。
「じゃあ、よろしく頼むよ……2人共！」

「ええ、始めますわ！」

ウオズと八百万がそれぞれ2丁ずつエアガンを持ち、それを構える。それに合わせて出久もワンフオーオールで脚力を強化したまま飛び上がると、そのまま浮遊の個性で宙に浮き始める。

「銃撃開始！」

宙に浮かんだジオウに向け、ウオズと八百万のエアガンの銃口からサバイバルゲーム用のプラスチックの弾が発射されていく。

（4丁分を避けていかないと……）

2人の持つ合計4丁のエアガンから弾が連射され、空気の抵抗や重力の影響で不規則な弾道を描いてジオウに向かっていく。銃弾が重力の影響で落ちていくのを想定した2人はジオウがいる場所よりも上を狙っており、そこから雨の様に落ちてくる銃弾をジオウは回避したり、腕を振るうことで起こる風圧で吹き飛ばしていく。

「アラウエアスマッシュ！ エアフォース！」

迫りくる銃弾に向けて、ワンフオーオールのエネルギーを流し込んだ指を弾くことで、その銃弾を風圧で吹き飛ばす。

「流石だね、次のも使ってみるとしよう。」

「ええ、準備できてますわ。」

その様子を見て今度は、サバゲーでよく使われるアサルトライフルのエアガンを構え

る。

「さあ、いくよー！」

その銃身を左右に振るいながら、ジオウの上方方向に向けて弾を撃ち出していくと、発射された銃弾が雨の様にジオウに降り注いでいく。

「流石に量がッ……！」

麗日に習ったように空中を移動して回避を試みる出久だったが、流石に1秒の間に飛んでくる銃弾の数が多くて回避しきれない。幾つもの銃弾がジオウの体にあたるが、極力その数だけでも減らそうとワンフオーオールのエネルギーを全身に張り巡らせ：
(ワンフオーオール！フルカウル！)

その状態で足を蹴り上げるように振るうと、その風圧で銃弾が弾き飛ばされる。

「空中での回避も防御も完璧だ。今日はこの辺にしよう。」

「うん、ありがとう。2人共」

「いいえ、頼まりましたので当然のことをしたまでですわ。」

特訓に付き合ってくれた2人に出久が感謝した後、3人はエアガンの弾の清掃を始める。

「協力してくれて助かるよ。」

「ええ、頼まりましたので、期待に応えるのは当然ですわ。」

その清掃中、ふとウオズは八百万と言葉を交わしていた。

「道具の提供もそうだが、飯田君と共に副委員長としてクラスまで引っ張ってくれて、いつも感謝しかないよ。」

「そ、そんなツ…とんでもございませんわ!」

体育祭でウオズが八百万と対戦して以降、出久との特訓や普段の訓練を通してウオズの中で八百万の評価は上がっていた。訓練では常に自分が所望するアイテムを出してくれるので、同じ班の時はウオズが助けられることもあった。

「君は良い個性も持っているし、それを使いこなす頭脳もある。これからも頼りにしてよ…」

「あ、ありがとうございます…」

しかしながら、八百万は体育祭以降自分への自信を失っていた。最終種目でウオズに完封され、結果を残せなかったことが原因だ。そのことにウオズも責任を感じていて、時折こうして励ましの言葉を投げかけていた。

そうして訓練を重ねていきつつ、季節は夏になっていた。

雄英生徒達は衣替えの時期を迎え、多くの者は半袖の制服に身を包んでいた。

「よし、授業はここまでする。期末テストまで残り1週間だが、お前らちゃんと勉強してるだろうな? 当然知ってるだろうが、テストは筆記だけでなく演習もある。頭も体も

同時に鍛えておけ、以上だ。」

1学期もそろそろ終わりという時期を迎え、話題は期末テストに移っていた。

「まったく勉強してない!!」

「体育祭やら職場体験やらでまったく勉強してねー!」

この時期となれば、普段勉強を怠っている生徒としては気分は憂鬱だろう。

今こうして頭を抱えている上鳴はクラス順位21位で最下位。芦戸も20位だ。

「確かに、行事続きではあったが…」

「中間はまあ、入学したてで範囲狭いし特に苦労なかつたけど。」

常闇と砂藤の言葉に口田も頷いて同意する。ちなみに3人揃って中間テストでの順位は10位代だ。

「期末は中間と違って…」

「演習試験もあるんだよな〜」

と余裕の表情を見せる峰田。彼は前回の中間テストでクラス10位という成績を収めている。A組は21人いるので、上から十番目ということは半分よりも上ということだ。

「ちゅ、中間10位!?!」

「アンタは同族だと思ってたのにー!」

「お前みたいな奴はバカで初めて愛嬌出るんだろうが……どこに需要あんだよ！」
「世界……かな？」

峰田が思っている以上に頭が良いので上鳴と芦戸は嫉妬している。

「芦戸さん！上鳴君！頑張ろうよ！やっぱ全員で林間合宿行きたいもん！」

そんな2人を出久が励ます。ちなみに夏休み中に林間合宿が行われる予定なのだが、赤点の者は雄英に残って地獄の補習を受けることになる。つまり、全員で合宿に行くには、全員が赤点を回避する必要がある。

「うん！俺もクラス委員長として皆の奮起を期待している！」

「普通に授業受けてりや赤点はおねえだろ。」

「演習問題をこなしていけば、余裕だね。」

「テストに関しちや、普通にやればできんだろ。」

「言葉には気を付けろー」

とは言っても、中間の順位に関して出久は4位、飯田は2位、轟は5位、ウオズは6位、爆豪は3位である。

上位でなおかつ、簡単に勉強をこなしている轟、ウオズ、爆豪の言葉に上鳴は更に心の余裕がなくなってしまう。

「お2人共、座学なら私少しお力添えできるかもしれません。」

「ヤオモモー！」

そんな上鳴達に、クラス1位の八百万が手を差し伸べる。

「演習の方はからつきしでしょうけど…」

「…？」

そう言いつつも、演習試験の方に自信がなさそうな八百万を見て轟とウオズは首を傾げる。

「御2人じゃないけど、ウチもいいかな？二次関数の応用ちよつと躓いてて…」

「え…？」

そこで、さらに耳郎も八百万に勉強を教えてほしいと申し出る。

その声に八百万も顔を上げて、耳郎の方を見る。

「わりの俺も！八百万、古文分かる…？」

「俺もいいかな…？幾つか分からない部分あつてさ。」

「お願い！」

耳郎に続いて、瀬呂と尾白も八百万を頼ってくる。

「皆さん…！良いですともー!!」

「やったー！」

多くの人に頼られたのが嬉しかったからか、八百万は両手を挙げて席から立ち上がっ

て喜びを露にしなから申し出を了承する。

「では！週末にでも私の家でお勉強会を催しましょう！」

「マジで!?ヤオモモン家超楽しみ！」

「そうなるتماずお母様に報告して講堂を開けていただかないと……！」

(講堂?)

勉強会は八百万の家で行われることになったのだが、自分の家に客人を招くというこ
とで八百万はかなり張り切っている。

「皆さん！どこかお紅茶は御贖ありまして?」

(お紅茶?)

「我が家はいつもハロツツかウエツチウツドなので、ご希望がありましたら用意します
わ！勿論！勉強のことも任せてください！必ずお力になってみせますわ！」

八百万はかなり嬉しそうに笑顔を振りまいて、勉強会に向けての準備を考えている。

張り切ってる彼女の様子を見て、勉強会参加メンバーや周囲のクラスメイトからは思
わず笑みが零れる。

(ナチュラルに生まれの違いを叩き付けられたけど)

(なんかプリプリしてるの超可愛いからどうでもいいや〜)

「なんだっけ?いろはす……?でいいよ〜」

「ハロツツですね！」

(元氣そうだし、良い表情するね…)

ウオズは先程の自信なさげな様子を見せていた彼女が、また明るい笑顔になっているのを見て心のどこかで安堵している。

「ねえ皆、僕たちもやろうよ！勉強会！」

「良いね。大賛成だ。」

「俺も行つていいか？」

「当たり前だ！教え殺したるわ！」

その一方で、出久、ウオズ、爆豪、飯田、轟に加えて切島の6人も勉強会をすることになった。

「ふふ、皆慌てちゃつて。今更ジタバタしても始まらないのに。」

「お前は少し、ジタバタした方がいいんじゃないか？」

「それが何かな？」

勉強会を行おうとする者たちに対して、少し見下しつつ余裕の表情を見せる青山。

しかし、彼は障子に指摘された通り、順位は19位とかなり低い。少し慌てた方がいいかもしれない。

勉強会を通して筆記と演習の試験に備えて動き出すA組生徒達。

この日から1週間後、遂に期末試験当日を迎えるのであった。

第40話 期末試験 part 1

期末試験最終日

筆記試験を終えたA組メンバー達はコスチュームに着替えてグラウンドに集まっていた。

「それじゃあ！演習試験を始めていく。」

グラウンドに集まるA組一同の前には、雄英が誇るプロヒーロー教師陣が並び立っている。

「この試験でももちろん赤点はある。林間学校行きたきやみつともねえへマするなよ。」

「ん？先生多いな。」

耳郎の言う通り、相澤に加えてスナイプ、ミッドナイト、13号、パワーローダー、セメントス、エクトプラズムと錚々たる顔ぶれがこの場に集っている。

「諸君なら、事前に情報を集めてると思うが…」

「入試みてえなロボ無双だろ！」

「花火ー！カレーー！肝試し！」

既に先輩と交友関係のある生徒から試験内容は入試の時のようにロボを相手にする

と聞いている生徒は多く、上鳴や芦戸はこのまま試験をクリアして合宿に行けると喜んでいいる。

「諸事情があつて、今回から内容を変更しちゃうのさ！」

「「校長先生!?!」」

だが、2人の抱く幻想は一瞬で打ち砕かれた。相澤のマフラーから顔を出した根津校長から試験内容の変更を告げられる。

「変更つて…?」

「これからは対人戦闘、活動を見据えたより実践に近い教えを重視するのさ!というわけで…諸君らにはこれから2人1組でここにいる教師1人と戦闘を行ってもらおう!」

「先生方と…?!」

新たに発表された試験内容は、生徒2人と教師兼プロヒーローの対戦というものであつた。

「なお、ペアの組と対戦する教師はすでに決定済み。早速だが、発表していくぞ!」

生徒たちが新しい試験内容に驚いている間に、次々とペアと教師の組み合わせが発表されていく。

「…そして最後に、ウオズ、爆豪、緑谷の3人が1チームだ。対戦相手は…」

「俺がやろう。」

次々と発表されるペア達、人数の関係で出久達は3人1チームとなった。

その3人の相手を名乗るのは、屋内から歩み寄ってくるマゼンタ色のトイカメラを首から下げている。

「門矢士……」

その相手は以前の職場体験でウオズと爆豪の面倒を見た仮面ライダーデイケイドこと、門矢士である。

「アಂತアが相手か。」

ウオズと爆豪は士を見て、久々の再開がこういう形になるとは思わず驚きつつも、少し懐かしさも感じていた。

「ああ、久しぶりだな。ジオウの方も保須以来か……」

「は、はい。今日はよろしくお願いします。」

以前ウオズが見せてくれた平成仮面ライダーの物語の中で実際に見た男が目の前におり、少し緊張しつつもしっかりと挨拶しておく。

「なあ、あの人誰なんだ？」

一応この世界ではプロヒーローをしている門矢士であるが、目立った活動はしていないためか知らないものも多い。切島が気になって士のことをウオズに問いかける。

「俺か？俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えなくてもいい……」

切島の問いかけに、いつものセリフで答えた士はほかの教師達と共に一度その場を去る。

そして、生徒達は各々待機室に行ったり、モニタールームで他の組の試合を見るのであった。

「流石、八百万君だね。」

さて、私達のチームはモニタールームで他の組の試験を見ているところだ。

体育祭以来、実技では自身がなさそうだった彼女だが、今日の試験で何とか振り切ったらしい。

機転を利かせて相澤先生にしっかりと勝利を収めた。

「ウオズ君、作戦なんだけどうするのがいいかな…?」

ここで我が魔王が作戦会議を提案してくれる。

「隠れつつの逃げ一択だね。彼はかなり強い。」

この試験のルールはシンプルだ。制限時間30分以内に我々生徒が指定の出口である脱出ゲートまで向かうか、専用のカプスで相手となるプロヒーローを捕えれば勝利。

それができなければ生徒の負け、つまり赤点だろう。

そして相手は完全無欠の仮面ライダーディケイド、ここは出口を目指すことを最優先事項にすべきだろう。因みに、教師陣はハンデとしておもりを付けていが、それもディケイドには無意味だろう…

「つつてもアイツが相手なら、戦うしかねえだろ。」

「それはどういう意味かな？」

だが、私の考えを爆豪君が否定する。

まさかプライドがどうかの理由じゃないだろうね…

「アイツが強いのは分かっている。そこから逃げたくねえって気持ちもある。だが、それ以前にアイツがそう易々と俺らを逃がしてくれるとは思えねえ…」

「一理あるね。」

爆豪君の言うことにも頷ける。手数がかなり多いディケイドが相手だ。

我が魔王が全アーマータイムを使う以上に平成ライダーの力を引き出している。私のフューチャーリングや爆豪君のディエンドアーマーも職場体験中に完封されていた。いろんな手札を使って我々を追い込んで来るだろう。

「3人でバラけてゲートまで行くのは？」

「彼は当然の様に分身してくるよ。それに、ゲートの前で待たれていたら意味がない。」

3人別行動でもアタックライド・イリュージョンやオーズのガタキリバコンボの能力で分身して各個撃破されてしまうだろう。

「そうなるかと作戦は…」

「正面突破だ！」

門矢士との戦いは避けられない。なら、正面から戦うしかないだろう。

「3人で固まってゲートを目指そう。そこでデイケイドに遭ったら戦いつつ進んでいく。戦いながら誰かがゲートを通れるようにするか、デイケイドにカフスをかけよう…」

「ああ、その方針で進んでいくとしよう。」

我々との3対1ならまだ勝てるか封じ込めることはできる。

3人でもともに行動することで、クリアできる確率を上げることにはしよう…

「それと、門矢士さんを翻弄するってことなら僕に良い作戦があるよ。」

「それは何かな…?」

私達は我が魔王が提案した作戦に賛同し、試験開始に向けて動き出すのであった。

「ここが、出口のゲートか。」

ディケイドと出久達による試験の会場は市街地を模した演習場であり、門矢士はその地の様子をトイカメラで写真に収めている。試験のクリア条件である出口のゲートを確認しつつ、士はゲートの前に広がる大通りに向けて歩みを進めていく。

『試験開始！』

そして、スピーカーから試験の開始を告げるアナウンスがなされる。

「始めるか。」

数週間前、プロヒーローの1人であり仮面ライダーでもある士が存在を知った根津から試験での出久らの対戦相手のオファーが来た。根津としては他の者とライダー組が組んで試験に臨んでも、合格する確率が高いことはよく分かっている。それも組んだ相手がウオズや出久らの恩恵を受け、棚ぼたで合格できてしまうことも考えられる。それ故に根津は彼らライダー3人を固めて、そこに強敵をぶつけることを選んだ。その候補はオールマイト等も居たが、出久やウオズ達と同じ仮面ライダーである士が選ばれたのである。

「この世界での仮面ライダージオウ、その力しっかり見せてもらおうぞ…変身！」

『カメンライド！ディケイド！』

士は嘗て常盤ソウゴ、最高最善の魔王を目指す仮面ライダージオウと共に戦ったこと

があった。

そして、自分が訪れたこの世界には新たなジオウがいた。ヒーローの王を目指す仮面ライダージオウこと緑谷出久。彼とその仲間たちの実力を確かめるために、士は根津からのオファーを受けた。

（さあ、どう来る？）

相対することとなる3人の仮面ライダーの動きを警戒し、仮面ライダーディケイドへの変身を終わってからライドブックカーソードモードを手にとり取って生徒らのスタート位置の方向に少しずつ歩みを進めていく。

「来るか…」

そしてすぐ、ゴール地点に向けて出久達が向かってきているのが分かった。

演習場の大通りにはライドストライカーに乗る仮面ライダージオウ、召喚した仮面ライダーアクセルに乗るゲイツ・ディエンドアーマー、バイストライカーに乗るウオズ・フューチャーリンググライダーがそれぞれのバイク音を噴かしながら前進しており、その音もディケイドの耳に入ってきていた。

「3人で突破するよ！」

「ああ！／おう！」

出久達の作戦はバイクに乗ることで機動力を向上させ、なおかつ3人同時に攻めるこ

とでデイケイドを翻弄して正面突破を図ろうとしていた。

『カメンライド・ダブル!』

デイケイドもすぐにデイケイド・ダブルに姿を変えて、トリガーマグナムを3人に向ける。引き金が引かれるとその銃口からは炎を纏ったエネルギー弾が放たれていく。

「これは気を付けた方がいいね…」

3人は各々自身に乗るバイクのハンドルを動かして銃撃を回避し、トリガーマグナムから放たれて地面に直撃したエネルギー弾が爆ぜる。その爆風に乗ってさらに加速していく3人に対してデイケイドはメタルシャフトを構える。

「ハアツ……!」

その棒に幻想の記憶を宿すと、メタルシャフトが鞭のようにしなりながら伸び、ジオウたちを襲う。

「2人共伏せて!」

その攻撃に気付いたジオウが2人に声をかけるが、蛇のような不規則な動きに対処しきれなかった。

メタルシャフトがバイクごと3人のライダーに襲い掛かり、弾かれたジオウたちはバイクから転落して地面を転がる。

「そう簡単には突破させてくれないみたいだね。」

「ああ、やっぱ気が抜けねえ奴だな。」

「職場体験からどれだけ強くなったか、見せてみる！」

立ち上がったウオズ達に、デイケイド・ダブルがメタルシヤフトを向ける。

出久達にとって期末最後の試練、その巨大な壁であるデイケイドを果たして突破できるのだろうか…

第41話 期末試験 part 2

『カメンライド・ゴースト!』

雄英の演習場内で、出久達3人と相対する仮面ライダーディケイドはディケイド・ゴーストにカメンライドして3人への対処を試みる。

「力を貸せ。」

ディケイドの言葉とともに、坂本龍馬、石川五右衛門、卑弥呼の3人の偉人を模したパーカーゴーストが召喚されて出久達に突っ込んでいく。

「彼らは私がやろう。」

『セイバー!』

『投影! フューチャータイム!』

『烈火抜刀!』

『フューチャーリングセイバー! セイバー!』

迫りくるパーカーゴースト達に対し、ウオズはフューチャーリングセイバーへと姿を変えてファイヤソード・レッカを構えてみせる。

『ニードルヘッジホッグ!』

「まずはこれで……!」

ハリネズミの背を模した針を剣を振るうとともに偉人達に放つが、ヒミコゴーストはその攻撃を先読みしてサン格拉斯ラッシャーで自身に迫る針を切り落としていく。

「なるほど、これを防ぐか。」

その攻撃を防いでみせたヒミコの動きに感心しつつ、ウオズはそのままヒミコと相対する。

『カイザ!』

『カメンライドタイム!カ・カ・カ・カイザ!』

「行くぞオラ!」

ウオズにさらに襲い掛かろうとするリョウマとゴエモンのパーカーゴーストに対し、ゲイツはディエンドアーマーのカメンライドタイムで仮面ライダーカイザを召喚して対処していく。

「彼らは私たちが抑える。」

「先に行け!出久!」

「ありがとう、2人共!」

『ファイズ!』

偉人ゴースト達をウオズ達が捌き、その間にジオウはファイズライドウォッチを起動

してジクウドライバーのスロットに装填。ジクウドライバーを1回転させて仮面ライダーファイズを模した鎧を身に纏う。

『アーマータイム!』

『コンプリート!』

『ファイズ!』

(ワンフォーオール!フルカウル!)

仮面ライダージオウ・ファイズアーマーへと姿を変えるときにも、全身にワンフォーオールのエネルギーを張り巡らせる。

「スマーツシユ!」

身体能力を強化したジオウは加速しながらデイクイド・ゴーストに迫り、右ストレートパンチを繰り出そうとする。

「英雄はまだいるぞ。」

だがここでデイクイド・ゴーストもジオウの攻撃を防ぐために、宮本武蔵と織田信長の偉人ゴーストを召喚する。ノブナガ・ゴーストが持っているガンガンハンドを複製して宙に浮かせて迫りくるジオウに集中砲火を浴びせる。

(グラントリノに習った動きで!)

新手の攻撃に対して方向転換をして、緊急回避する術はすでにグラントリノから学ん

でいる。

右足で地面を勢い良く蹴り、その勢いで右方向へ退避。

「次が来る！」

だがその動きを見逃さず、今度はムサシ・ゴーストが二刀流モードにしたガンガンセイバーをジオウに向けて振るう。だが、ジオウは地面を蹴って上方向に跳躍し、攻撃を回避する。

（今の…危なかった！もう少し遅かったら切られてた…！）

空中に退避した出久はファイズフォンXを取り出してそれを操作。その間にノブナガのガンガンハンドの銃口がジオウを狙うが…

（浮遊の順番だ！）

ワンフォーオールとの継承での1人である志村菜奈の個性、浮遊を継承した出久は空中での攻撃回避もすでに訓練済みだ。浮遊の個性で宙に浮いたまま空を泳ぐように飛んで、ガンガンハンドの射線から逸れつつもその右手に拡張デバイスであるギア555シリーズのショット555を付ける。

「デトロイトツ…」

空中を泳ぎつつ、一番近くのビルに足を付けると、ワンフォーオールで強化された己の両足でそのビルの壁を蹴る。強化された脚力により生まれる推進力で加速してムサ

シに迫り、デジカメ状のガジェットをナツクルに変形させてエクシードチャージ。腕力もワンフォーオールで強化させた状態にし、パンチを繰り出そうと構える。

(剣を回避してッ…)

「スマーツシユ！」

ジオウに対抗しようと横薙ぎに剣を振るうムサシ。その攻撃に対して浮遊の力を活かしてムサシの剣が迫る前に再び宙に浮き、ムサシを飛び越えて後ろに回り込むとムサシの背中にワンフォーオールの威力を上乗せしたショット555によるパンチを打ち込む。

「一人仕留められたか…」

その一撃を喰らったムサシ・ゴーストは体が白い灰となって崩れ落ちてしまう。

そこからさらにジオウは攻撃の手を止めない。

「デラウエアスマツシユ！マンチェスタースマツシユ！」

ジオウはノブナガの方に自身の手を向けて狙いすまし、ワンフォーオールのエネルギーを込めた状態でデコピンをして空気を押し出す。

『フィニッシュタイム！』

撃ち出された空気の衝撃波を受け、ノブナガが怯んだ隙を狙い、ジオウはギア555の1つであるポインター555を足に付けてノブナガを狙って円錐状の赤い光を放つ。

『エクシードタイムブレーク!』

その赤い光を目標にするようにジオウ・ファイズアーマーが飛び蹴りを放てば、それを受けてしまったブナガ・ゴーストの体は破壊される。

『ストームイーグル!』

「ハウザーインパクト!」

更に同じタイミングでウオズとゲイツも自身に差し向けられたパーカーゴースト達を撃破していた。

「中々やるな…」

「ええ、ここは突破させてもらいますよ…」

「任せたまえ、我が魔王。」

パーカーゴーストを倒したジオウ達に感心するデイケイドの隙を突き、ジオウはワンフオーオールの身体能力による強化で、ゲイツは爆破の推進力でそれぞれ加速しながらデイケイドの横を一気に駆け抜けてゴールを目指す。

『ジャツ君と土豆の木!』

さらにウオズ・フューチャーリングセイバーが己の剣から作り出した木のツタでデイケイドを絡めて拘束を試みる。この間にジオウ達をゴールさせてしまおうという考えだ。

「拘束するなら、これを封じるべきだったな。」

「デイケイドの腕を拘束したウオズだったが、彼の手の可動域は拘束しきれていなかった。」

その詰めめ甘さを指摘しつつ、ライドブッカーを手に取ってソードモードに変形させて、その刃で鳶を切る。

「しまった！これじゃ我が魔王たちが…」

『カメンライド！カブト！』

デイケイドの拘束に失敗したことで、出久達をピンチにさらしてしまう。

自分のミスに動揺を見せるウオズに対し、デイケイドは赤いカブト虫のような戦士の鎧にその身を包む。

「クロックアップ」

「デイケイド・カブトへと変化した士は、全身にタキオン粒子を駆け巡らせることで超加速をする。」

「ぐあっ……！」

手始めにデイケイドは目にも止まらぬ速度でウオズの眼前に迫り、その拳を顔面に放った。

倒れていくウオズを横目に、デイケイドはクロックアップしたままジオウらの方に向

かう。

「見えてきたぞ！出久！」

「うん、後ちよつとだね。」

パーカーゴーストを倒し、隙を突いて上手くデイケイドを突破できた出久と爆豪。

2人はデイケイドと交戦した場所から離れて大通りを直進し、出口となるゲートを視界に捉えていた。

「このままいけっ……ああっ……!!」

「出久!？」

ゲートへと近付いていたジオウだが、突然その体が地面に叩き付けられてしまう。

その様子に驚くゲイツだったが

「クッソ……!」

心配して出久の方を向くゲイツの腹に鈍い衝撃が走ったかと思えば、その体が吹き飛ばされて演習場内のビルの壁に叩き付けられる。

「まだまだ、油断してるようだな。」

2人は自分達を襲った何かの正体をすぐに知ることになった。

そこにいるのはデイケイド・カブト。追いついてきた彼の姿を見て、ウオズによる妨害も失敗してしまったのかと察して2人は立ち上がってファイティングポーズを構え

る。

『カメンライド・ブレイド!』

ディケイドライダーに仮面ライダーブレイドのカードを装填すると、ベルトから青いオリハルコンエレメントが現れ、それを潜るとディケイドはブレイドの姿へと変化する。

「ここで決着を着ける。」

もう既にゴール目前。ここでジオウ達を抑えてしまえば試験のルール上ディケイドが勝つことになる。

それ故にこののゲートを通らせない為にもう一枚のカードを使う。

『フォームライド・キングフォーム!』

ラウズカードの力をその身に纏う、仮面ライダーディケイド・ブレイド・キングフォームへと姿を変えると重醒剣キングラウザーをジオウらに向ける。

「僕達だつて、ここで負ける気はありません! いくよ! かつちゃん!」

「当たり前だ!」

『ジオウII!』

クラスメイト達と夏休みの林間合宿に行く。そのためには試験で赤点を回避しなければならぬ。

そのためにもここで勝利を掴まなければならぬため、出久もジオウⅡのウオッチを取り出す。

『ライダータイム!』

『仮面ライダー!ライダー!』

『ジオウ・ジオウ・ジオウ!Ⅱ!』

仮面ライダー・ジオウⅡへの変身を果たすと、ジカンギレードとサイキョーギレードの2本の剣をデイケイドに向ける。

『ギャレン!』

『カメンライドタイム!ギャ・ギャ・ギャ・ギャ・ギャレン!』

ゲイツ・デイエンドアーマーもギャレンライドウオッチを使い、仮面ライダーギャレンを召喚。

3人のライダーがデイケイドと対峙し、一斉に攻撃を仕掛ける。

「クソツ……私としたことが……」

私がデイケイドをしつかり抑えていれば、カブトへのカメンライドを使われず我が魔

王の所へ行つてしまうことは避けられたはず。

詰めめのがさが出てしまった、ミスで我が魔王達の足を引っ張ってしまった…

「私はもう、彼らには及ばなくなってきたてきってしまった…」

我が魔王に体育祭で負けてしまい、そこからワンフオーオールまで得てさらに向こうへ彼は進んでいってしまった。

爆豪君にも職場体験中に先を越されてしまった…デイエンドアーマーを手に入れた彼に実力差を付けられるどころか、職場体験中の組手でも着いていけなくなっていた。

「私はもう、彼らの戦いについていけないのか。」

徐々に我が魔王や爆豪君達との差は広がってしまったている。

「だが、こんなところで諦める気はしないね…」

それでも勝つことを諦める気はない。

私とて1人の仮面ライダーだ。ここで勝負を諦める気はない。

ゲートを潜ればまだ勝算はある。そのチャンスがあるならまだ戦いを続ける方がベターだ。

諦めて我が魔王達の足を引っ張る、それだけは一番避けたい。

「まだ少しでも助けられるのなら…」

『ゼロワン!』

「動く…それがヒーローだツ！」

『投影！フューチャータイム！』

今日はこれまで学んできたことの集大成。

私がこの1学期で学んだこと、それは諦めずにファイティングポーズを取り続けることだ。

救うべき者のために立ち続ける…

『プログライズ！』

『フューチャーリングゼロワン！ゼロワン！』

フューチャーリングゼロワンへと姿を変え、ファルコンのライダーモデルの上に乗ると、他のライダーモデルと共にゴール方向に向けて突き進んでいく。

『ライトニングスラッシュ』

先にバイクで移動していたおかげか、我々が門矢士と対峙した場所はゴール地点と近かった。

すぐに我が魔王達がいる場所に追いついたが、ブレイド・キングフォームにカメンライドしたディケイドによって我が魔王達が斬撃技を喰らってしまった。

「今助けるよ、我が魔王！」

電撃を纏った斬撃攻撃を受け、後方に吹き飛ばされてしまう2人。

そこに追撃を仕掛けようとキングラウザーを振り上げるデイケイド・ブレイド。

その彼に向けて、私が召喚したライダモデル達が襲い掛かる。

各生物のライダモデル達がデイケイドを襲い我が魔王達から引き？がすことができ
た隙に、私はゲートの突破を試みるとしよう…

『フォーカード』

だがここで、“サンダーディアア”、“ファイアフライ”、“トルネードホーク”、
ブリザードポラー”の4種類のラウズカードの属性を込めた1振りがキングラウ
ザーから放たれると、その斬撃が私の乗るファルコンのライダモデルに襲い掛かる。
「しまった！」

私はファルコンごとブレイドの斬撃に撃ち落とされてしまい、地面へと落ちていく。

「ウオズ君！」

落ちていってしまう私の下に、浮遊の個性を使って我が魔王が飛んで駆けつける。

「すまない。助けられてしまった…」

我が魔王に手を掴まれ、そのまま爆豪君の下に降りていく。

その間に残ったライダモデル達がデイケイド・ブレイドを包囲して対処する。

「我が魔王、爆豪君。私のミスで彼を解き放ってしまった…本当にすまない…」

私のミスで2人を危険な目に遭わせてしまった。私にはどうすることも…

「おい、テメエらしくねえな。」

「ああ、私が2人の足を引っ張ってしまっている気がしてね……」

こんな時に2人にネガティブな姿を見せてしまうなんてね、情けないよ。

「ううん、そんなことないよ！ウオズ君。」

「我が魔王……？」

「だって、ウオズ君が特訓に付き合ったりしてくれなかったら僕はここまで強くなれてなかったし、浮遊も使いこなせていなかったと思う。」

「ああ、俺もテメエの言葉で目が覚めてここまで来れた。それに、出久にここまで歩み寄れなかったかも知れねえ……」

「我が魔王……爆豪君……」

2人の励ましの言葉を聞くと、私は再び己の心を奮い立たせる。

以前に私の口から2人を奮い立たせたことがあった。そして、今度は私が奮い立たせてもらった。

その期待に応えなければ。

「助け合えばいいよ。僕はずつとウオズ君の味方だから。」

「とつとと立てや。テメエが立たねえと始まんねえよ。」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。」

「うん、勝つよ。」 3人で！」

2人が私を横に立たせてくれる。いや、そこまで認めてもらえるほど私もここまで戦い続けてきたということか……

「ああ、私は仮面ライダーであり1人の預言者……皆と共に明るい未来を歩み、切り開く！」

再び彼らと共に戦う覚悟を決めた。どれだけ差が開こうと関係ない、全力で喰らいつくだけだ！

「ねえ、これって……」

その時、私のミライドウオッチと我が魔王のジオウライドウオッチ、爆豪君のゲイツライドウオッチが光始める。

『ジオウトリニテイ！』

その3つの光が集まり、1つのライドウオッチが生成された。

3人でともに立って戦う。その決意が改めて我々の中でできたことがこの力を呼び覚ましたのだろう。

「さあ、勝ちに行く時だよ。」

「うん、いくよ！」

我が魔王がジオウトリニテイライドウオッチを取り、この戦いのクライマックス

が始まろうとしていた。

第42話 期末試験 part 3

『ジオウ!』

ジオウトリニティライドウオッチを手にした出久は、ジクウドライバーのD、3スロットにジオウライドウオッチを、D、9スロットにトリニティライドウオッチを装填してそのウオッチ側面についているダイヤルを回していく。

『ゲイツ!』

「なんだ!？」

そのダイヤルが回されていくと、空から降り注いだ光がゲイツを包み込む。

『ウオズ!』

「遂にこの時が来たようだね。」

さらにウオズも青い光に包まれると、いよいよ3人の力を合わせる時が来たとワクワクし始める。

『トリニティタイム!』

「かっちゃん!ウオズ君!」

そしてジオウがジクウドライバーを回転させると、ゲイツとウオズの体が頭部と胴体

のバンド部の身の腕時計のような状態に変化し、それぞれジオウの肩に装着されていく。

『3つの力！仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！』

「やあ、我が魔王。」

「合体しちゃった!?!」

『トリニティ！トリニティ！』

ジオウの顔面部も胸に移動し、頭部には新たに3色で描かれた“ライダー”の文字による複眼が形成される。

「祝え！3人のライダーの力が集結し生まれた、未来を創出する時の王者！その名も仮面ライダージオウトリニティ！…新たな歴史が創生された瞬間である！」

ウオズの意識も入っていることで、ジオウトリニティは己の左腕を挙げて祝福を述べている。

その左手には出久が継承したワンフォーオールが具現化したマイトガントレットが付いており、右手には爆豪の個性である爆破を象徴するような手榴弾型の籠手が付いている。

「おい、これどうなってやがんだ!?!っーかここどこだ!」

ジオウトリニティの中にはウオズ、出久、爆豪の3人の意識が集う“クロックオプザ

「ラウンド」という空間があり、巨大な時計の針のようなものを囲うように3人が立っている。

「我々3人が文字通り三位一体になったということだね。」

「3人の力が1つについて言うけど、これってどう体動かせば…」

「何を話している?」

意識世界で話す3人の耳に、外部から別の声が聞こえてくる。

「そっちが動かないなら、先にいくぞ!」

その声の主はデイケイド・ブレイドキングフォームである。

先程まではウオズ・フューチャーリングゼロワンが召喚したライダモデル達に妨害されていたが、ウオズがジオウトリニティに融合してしまったので彼らが消えてしまった。

自分を邪魔するものがいなくなったデイケイドは、キングラウザーを構えてジオウトリニティに向けて切りかかる。

「さっさと俺にやらせろ!」

爆豪がそう叫ぶと、彼らの足元にある巨大な時計の針が彼の方を向く。

「くたばれ!!」

向かってくるデイケイドに対し、ジオウトリニティの体は正面突破を図るように動い

ていく。

両掌から爆破を放ち、その推進力で加速して突っ込んでいく。

「オラー！」

右腕を振るって爆破を放とうとするが、デイケイドはその攻撃を右腕で凌ぎつつキングラウザーを上から下に振るう。

「グアツ……！」

剣で切られてジオウの体が地面に叩き付けられてしまい、そこに追い打ちをかけようとデイケイドがキングラウザーをその肉体に振るおうとするが……

「替われ！私が何とかしよう。」

『ジカンデスピアー！』

ここでジオウトリニティの体の主導権がウオズに移り、巨大な時計の針も彼の意識を指している。

「ナイスガード！」

ジカンデスピアの柄で振るわれる剣を防ぎ、その防御を出久も褒める。

「さあ、我が魔王。浮遊を使うんだ！」

「分かった。」

ここでウオズから出久に体の主導権が移り、出久はワンフォーオールと共に継承され

た浮遊の個性を使用する。地面を蹴り、その勢いで体を滑らせてデイケイド・ブレイドの剣の軌道上から逸れると浮遊を使ってその身を浮かせる。

「じゃあ次は、俺の番だ！」

体を浮遊させた状態のジオウトリニティはデイケイドよりも上に移動することができ、その位置から主導権を爆豪に渡して、掌からデイケイドに向けて爆破を浴びせていく。

『ストレートフラッシュュ！』

「避けるー！爆豪君ー！」

爆炎でお互いが相手の姿を捉え切れていない状況だったが、爆破を放つ音は確かにデイケイドの耳に届いていた。

その音を頼りにジオウトリニティがいる方向を察知すると、5枚のラウズカードを剣に纏わせて斬撃を放つ。

「俺に／私に／僕に任せろ！」

予想外の攻撃を咄嗟によけようとしたことで、3人がそれぞれの方法での回避を試みようとした。

だがそれはジオウトリニティの体の主導権の取り合いを引き起こし、空中でデイケイドによる1撃を受けてしまうことになった。

「連携がツ…難しい…!」

地面を転がるジオウトリニティの肉体。

意識空間であるクロックオブザラウンドでは、3人でどう息を合わせればいいのかと悩んでいた。

「我が魔王。1つ聞きたいことがある。」

「どうしたの? ウオズ君?」

そんな中、何かを思いついたようにウオズが出久に問いかける。

「先程、デイケイド・ブレイドの攻撃を回避するのに浮遊を使ったよね?」

「うん、そうだけど。」

「その後爆豪君に主導権を変えて、彼が爆破を放っている間に君はその個性を発動したままでキープしていたと思うのだが、どうかな?」

「確かに、使ったままだったと思う…」

「ああ、俺もあん時浮いてる感覚だった。」

3人は先程キンググラウザーによる攻撃を回避して、デイケイドに爆破を浴びせた時のことを思い出していた。

「つまり体の主導権を持っていない時でも、個性の発動や制御ができるんじゃないかな?」

「確かに、ウオズ君の理論が間違ってたら、あの時体を浮かしたままにはできてなかったかも……」

「そういうことさ。体の主導権を私に託してくれ、2人は個性の発動と制御で私をサポートしてくれ。」

「うん、任せてよ!」

「ああ、信じるぜ!」

「感謝する。2人のためにも全力で戦わせてもらおうよ!」

ウオズの考えに賛同し、出久と爆豪は彼に主導権を託した。

2人の思いとサポートを受け、ウオズはデイケイドと対峙する。

(ワンフォーオール……)

(フルカウル!)

「爆速ターボ!」

再びデイケイドに挑もうと、出久によってジオウトリニテイの体にワンフォーオールのエネルギーが張り巡らされる。

ジオウが地面に足を踏み込み、そのまま地面を蹴って突撃していく。両掌からは爆豪の個性による爆破が放たれ、ワンフォーオールによる身体能力に加えて爆破の推進力でさらに加速していく。

「ハアッ……」

2つの個性から生み出されたスピードにより、ジオウは一瞬でディケイドの眼前に迫ると胸部に右ストレートパンチを放ってみせる。

「……ッ！」

「次は浮遊だ、我が魔王！」

「わかった！」

次の攻撃を仕掛ける前に出久が使った浮遊の個性により、ジオウの体が浮き上がり、爆破の推進力でディケイドの背後に回り込むように移動する。

「爆豪君！撃て！」

「オラ！任せろ！」

さらにジオウは右腕の手榴弾型の籠手をディケイドに向けると、その先端部から大爆破が放たれる。

「良い攻撃だ、だが……」

ディケイド・ブレイドキングフォームの防御力により、その攻撃によるダメージが通り切っていない。

まだ万全の状態で動けるディケイドがジオウを攻撃しようとキンググラウザーを構える。

「ここで決めるよ！2人共！」

「うん！／おう！」

その様子に気付いたウオズも、ここで勝負を決めてしまおうとジカンギレードとサイキョーギレードをその手に装備する。

「2人共、力を貸してくれ！」

ジオウが2本の剣を合体させて形成されたジオウサイキョーギレードの中に、ワンフオーオールのエネルギーと爆破のニトロ口が流れ込んでいく。

『ロイヤルストレートフラッシュ！』

『キング！ギリギリスラッシュ！』

デイケイド・ブレイドのキングラウザーが振るわれることで放たれる黄金の斬撃と、ジオウトリニティのジオウサイキョーギレードから放たれる金と虹色の光を纏う斬撃が彼らの前でぶつかり合う。

ジオウサイキョーギレードに秘められた爆豪の汗から生み出されたニトロ口が斬撃のぶつかり合いによって反応して爆発を起こす。

「今だ！」

「おう！爆速ターボ！」

爆炎によってデイケイドの視界が塞がれて、彼がジオウトリニティの姿を捉え切れな

い状況になってしまった。

その間に両掌から爆破を放ち、ジオウは加速していく。

彼の足はデイケイドではなく、出口のゲートの方を向いている。

「一気に駆け抜けて！ウオズ君！」

「任せてくれ！」

爆破の推進力とワンフォーオール の身体能力強化による加速。

それはウオズがこれまで退官したことのないような速度を生み出してしまい、何とかその身を制御しつつゲートの方へ突き進んでいく。

「そつちを狙ったか……！」

爆発による煙で視界を阻害され、音でしかジオウの場所を察知できないデイケイド。

彼がジオウトリニティの意図を読み取った頃には、既にジオウはゴール目前まで迫っていた。

『魚津、爆豪、緑谷チーム、条件達成！』

ジオウトリニティがゴールとなるゲートを駆け抜け、そのまま突破してみせた。

ゲートを潜り抜けたジオウトリニティは3つの光に分かれ、それぞれ出久、ウオズ、爆豪の3人の姿に戻っていく。

「流石だ。それぞれの得意を使って俺を突破したか。」

その3人に向けて、変身を解除した門矢士が歩み寄る。

「まあ、俺は倒しきれなかったが合格だ。」

「ありがとうございます！」

彼らに合格を告げる士に、出久は深々と頭を下げる。

「じゃ、俺の仕事は終わったから帰らせてもらう。その前にウオズ！」

士は本日の仕事を終え、すぐに自分の事務所に戻ろうとしたがウオズの方を向く。

「これはお前が使い。」

そう言つてウオズに新たなミライドウオツチを投げ渡す。

「これは…ギーツか。」

そのウオツチに描かれていたのは白い狐の仮面ライダーであるギーツであった。

彼は、ジオウよりも未来の令和時代で戦う仮面ライダーの1人である。

「ああ、お前なら使いこなせるはずだ。」

「当然さ。」

「爆豪、お前ももつと強くなってきたな。」

「当たり前だ！いつか超えてやるから首洗つて待つとけよ！」

ウオズにミライドウオツチを託し、爆豪の言葉に頷いて答えると士はそのまま歩き

去つていった。

「さあ、我々も皆の下に戻ろうか。」

「うん！」

そして、1つの試練を終えた出久達もまたクラスメイトの下へ戻っていくのだった：

第43話 期末明けの休日

期末試験を終えての1年A組の教室では、何やら重苦しい空気の生徒が4人いた。
「皆っ……合宿の土産話っ……！楽しみにしてるからっ……」

芦戸、上鳴、切島、砂藤の4人である。

彼らは期末テストの演習で条件達成ができず、合宿に行けずに補習を受けることになりそうであつた。

「ま、まだわかんないよ……どんでん返しがあるかもしれないよ！」

「よせ緑谷、それ口にしたらなくなる奴だ。」

そんな4人を慰めようとする緑谷だが、瀬呂がジंकスを気にしてそれを止める。

「試験で赤点取つたら林間合宿行けず！残つて補習地獄……そして俺たちは実技クリアならずっ……！これでまだ分らんのなら貴様の成績は猿以下だー!!」

「おつと危ない。」

上鳴が出久の両目を指で突こうとしたのを察し、ウオズがマフラーを伸ばして上鳴の腕を束縛して止める。

「落ち着け、なげー。分かんねえのは俺もさ……峰田のお陰でクリアしたけど寝ただけ

だ！とにかく！採点基準が開かされていない以上は…」

「同情するならなんかもう色々くれー!!」

瀬呂は峰田と組んでミッドナイトに挑んだが、途中でミッドナイトの個性によって眠らされてしまっていた。最後は峰田の頑張りによってチームでの条件達成はできていたが、瀬呂の個人成績がどうなるかは分かっていなかった。

「予鈴が鳴ったら席に着け！」

上鳴はまだ落ち着いていないが、ここで相澤が教室に入ってきて全員着席して口を閉じる。

「おはよう。今回の期末テストだが、残念ながら赤点が出た。」

赤点の者がいるという言葉に、条件を達成できなかった者達は自分達の補修が確定して表情を曇らせる。

「従って林間合宿は…全員で行きます！」

「「「どんでん返しだー!!」」」

だが、ここで相澤によって告げられたのは赤点の者でも林間合宿に行けるということであった。

「行つていいんすか俺ら！」

「ホントに!?!」

切島、芦戸らは嬉しくなって先程とは打って変わって気持ちが高揚している。

「赤点者だが、筆記の方は0。実技で芦戸、上鳴、切島、砂藤…それと瀬呂が赤点だ。」
「やっぱり…クリアしたら合格とは言ってなかったもんな…」

期末内で何もできず、相方のお陰でクリアできても赤点ということが分かり、瀬呂は落ち込んでしまう。

「林間合宿はそもそも強化合宿だ。赤点取った奴こそ、ここで力を付けてもらわなきゃならん。ただし、赤点は赤点だ。お前らには別途に補習時間を設けている。ぶっちゃけ学校での補習よりキツイからな！」

赤点の者は合宿でのトレーニングに加えて、他の時間に補習を行うことになりこれまでに以上に鍛えられることが確定した。何はともあれ、A組全員での林間合宿参加が確定してクラス一同はかなりテンションが上がっていた。

「で？また呼び出されたわけだが、ワンフオーオールの話かい？」

さて、その放課後なんだが私と我が魔王はオールマイトに呼び出されて仮眠室に来ていた。

「いいや。今日はそういうのじゃないさ……まずは期末試験合格おめでとう！私もりザルトを見せてもらったが良い戦いだったよ。」

「ありがとうございます!!」

「お褒めの言葉、恐悦至極だね。」

オールマイトから褒めてもらって、我が魔王はかなり嬉しそうだ。

「さて、今日はいつも頑張っている緑谷少年に私からプレゼントだ。」

そう言っただけでオールマイトはスーツの懐から一つの封筒を出す。見たところ、国際郵便かな？

「海上に浮かぶ巨大人工移動都市”I・アイランド”で開催される個性やヒーローアイテムの研究成果を展示する展覧会の”I・エキスポ”その招待状が……私に来た！そして、同伴者を一人連れて行ってもいいとのこと、私は緑谷少年と一緒にいきたいと思っただけ……」

「I・エキスポ!? そんなすごいところに!! ありがとうございます!!」

I・エキスポの開催は私もニュースで聞いたことがあり、かなり興味があった。

世界中から有名ヒーローや科学者が集まるビッグイベントだね。

そこにオールマイトと共にいけるといふことで、我が魔王もかなり喜んでる。

「ただ、話はそれだけじゃない。実はI・エキスポの招待が緑谷少年にもう一件届いてい

てね…」

そう言つてオールマイトはもう一枚紙を取り出した。

「これは雄英体育祭優勝者に贈られるもので、+2名友人を招待できる枠がある。」

「つまり、我が魔王へのI・エキスポの招待が重複してしまったということだね。」

「その通り！なのでどちらかの招待状を緑谷少年から誰かに譲つて欲しいと思つてね。」

魔王が魔王の下に届いた2つの招待券。そのどちらかを誰かに譲るということになつたが…

「じゃあ、この体育祭優勝の方の招待状をウオズ君にあげるよ。」

「良いのかい？」

「うん。ウオズ君にはいつも助けてもらつてるし、それに一緒に行けた方が嬉しいから。」

「そう言つてもらえて嬉しいよ。我が魔王。」

嬉しい言葉と共に招待状を渡してもらい、嬉しさのあまりその紙をじつと見つめてしまふ。

「ウオズ少年は体育祭準優勝だからね。君が緑谷少年の代わりに行くのも、筋が通つた話だ。」

「ありがとう、オールマイト。さて、同伴枠をどうしようかな…」

さて、ここで話は私と同伴する2人の方へと移っていく。

体育祭優勝者への招待状では、本人の他に2人友人を連れていけるといふことだが……
「かつちゃんはや？」

「勿論、誘おうと思ってるよ。」

その内の1枠はすぐに爆豪君で確定した。

共にライダーとして戦う仲だし、むしろ誘わない理由がない。

「もう1枠は……まあ、ゆっくり考えるところ……」

問題は残りの1枠だ。誰を誘おうか迷うところだ、飯田君か麗日君にでも声をかけてみようかな？

「てな感じでやって来ました！県内で最多の店舗数を誇るナウでヤングな最先端！木椰区シヨッピングモール！」

期末の結果が発表された日の翌日、A組のメンバー達は合宿に向けて荷物を揃えるために木椰区シヨッピングモールを訪れていた。

「個性の違いによる多様な形態を数でカバーするだけでなく、幅広く……ブツブツ」

「幼子が怖がるぞ。よせ」

このショツピングモールには多種多様な個性を持つ人々に合わせた、服や靴の様々なバリエーションがそろっており、それを見て出久が分析しつつ独り言を言っているのを常闇が諫める。

「とりあえず、ウチ大き目のキャリーバック買わなきゃ。」

「あら、では一緒に回りましょうか。」

「ピッキング用品と小型ドリルってどこに…」

「俺アウトドア系の靴ねえから買いてえんだけど。」

「あー私も私も！」

とは言うものの、多種多様なのは品揃えだけではなく各々が必要としている物もバラバラだ。

「みんな目的バラけてっし時間決めて自由行動すつか！じゃあ3時にここ集合だ！」

「「異議なし!!!」」

ということここでここは切島の発案で全員別行動をすることになり、3時まで自由行動となつて各自ばらけていく。

「我が魔王よ、ここのクレープは美味しいと評判だそうだ。一緒に食べるかい？」

「ううん、僕はちよつとオールナイトグッズの店があるって聞いたからそっち行くかも。」

もうちょっと調べてから行くから先行ってよ。」

「了解した。我が魔王。」

出久は店のリサーチのためにこの場に残り、ウオズは事前に行こうと思っていたクレープ屋に向かうのであった。

「I・エキスポ?」

「ああ、私と我が魔王の所に招待状が届いてね…でその招待枠が2つ程ある。なので爆豪君を招待しようと思ってるね。」

その後クレープを食べ終えたウオズは爆豪と合流し、彼に今度のI・エキスポに自分達の招待枠で来るかどうか問いかけていた。

「ま、せっかくだから行ってやんよ。出久も来るんだろ?」

「勿論。我々3人と後招待枠の残り1枠の4人で行くことになると思うよ。」

今のところI・エキスポに行くのはオールマイトから招待された出久と、その出久から体育祭優勝者向けの招待券を譲られたウオズ。そしてウオズが持つ招待枠の内の1枠を貰った爆豪の3人が現状行くと確定している。

「とりあえず、この期間の予定をしっかりと開けてくれていたら大丈夫だ。さて、もう1枠だが…」

「ここでウオズには悩みが1つあった。」

それはもう一つの招待枠が余っていることである。先程飯田にも声をかけたが彼も兄の代理で出席するため招待枠は別の者に使うことになっていた。

「八百万は誘わねえのか？」

「八百万君!?!君なら麗日君や蛙吹君、切島君辺りの名前を出すと思ったが…」

普段出久、ウオズ、爆豪に加えて飯田らが仲良くしているメンツとしては麗日や蛙吹や切島、後は峰田、上鳴、瀬呂辺りであるが、爆豪の口から出たのは八百万の名前であった。

勿論訓練等で一緒になることが多かったので交友がないわけではないが、爆豪の口からその名前が出るほど普段からよく話しているわけではない。

「デメエ、アイツのこと気になってんだろ？」

「い、いや、そんなことは…」

「最近アイツのこと、ずつと見てんだろ。」

「ま、まあ…」

会話が多いというわけではないが、ここ最近ウオズは八百万のことをよく気にかけていた。

自信なさげな彼女を心配していたということもあつたが、約4カ月の間クラスメイトとして共に過ごしていたことでウオズの中で八百万は「気になる女子」の部類に入っ

ていた。

「誘うなら今だろ？行つて来いよ。」

「君がそう言うなら仕方ない、行くでしょう…」

中学時代まではまるで周りが見えていなかった爆豪すら、今はかなり視界が広がって自分のことまで気にかけてくれている。その事実に対しウオズも心を動かされ、一歩踏み出してみることにした。

「では、少し声をかけてくるよ。」

そう言つてウオズは一度爆豪から離れ、八百万を探して歩いていく。

「お、いたね。八百万君、少しいいかな？」

カバンが売っている店の近くで八百万を見つけたウオズは、早速彼女に声をかける。

「どうなさいましたか？ウオズさん。」

「実は今度開催されるI・エキスポの招待枠が1つ余つていてね、もしよければ一緒にどうかな？と思つてね。」

早速ウオズは八百万にI・エキスポの話を出してみるが、すぐに八百万は返事をする。

「I・エキスポですと、今度私も行く予定ですわ！実はお父様がスポンサー企業の株主です…」

流石は八百万一家と言つたところだろう。すでにスポンサー企業から渡された招待

券でI・エキスポに行くことが決まっていた。

「なるほど…なら、向こうで会えることを楽しみにしているよ。」

「ええ、その時はぜひ！」

誘いを断られてしまった形にはなつたが、I・アイランドに行くことは変わらないというところでそこで合流できたらいいなと思いつつウオズが爆豪の下に戻ろうとしたその時だった。

「警察？一体何の騒ぎが…」

その時、彼らの耳に何台分ものパトカーのサイレンが聞こえてきた。

ふと広場の方に目をやるとそこには出久と麗日がおり、そこに何人もの警官が集まってきた。

「何があつたんだ…我が魔王！」

その後、ウオズが出久から事情を聴いてみたところ、なんとオーマシヨツカーの死柄木と遭遇してしまつたとのことだ。

彼としばらく話すことになり、死柄木はすぐに去つたそうだ。

この日はショッピングモールは閉鎖になり、この件に関する事情聴取や雄英から出久らへの聞き取りであつという間に時は流れ、彼らは夏休みを迎えるのであつた。

我が魔王は緑谷出久 ロングホープファイリア

第44話 ロングホープファイリア part 1

雄英高校も夏休みに入り、後半に控える強化合宿の前に各々トレーニングをしつつ自由な時間を過ごしていた。

そんな彼らの中でトレンドになっているのはI・アイランドで行われるI・エキスポである。

I・アイランドは世界中のヒーロー関連企業が出資し、個性の研究やヒーローアイテムの発明などを行うために作られた学術研究都市でありその警備システムは監獄タルタロスに匹敵するといわれている。

その人口島で行われる科学技術の展覧会であるI・エキスポが行われることになっており、そのプレオープンとその後のレセプションパーティーに参加するために、とある3人が日本からI・アイランドに向かう飛行機に乗り込もうとしていた。

「いよいよ出発だね。既にワクワクしているよ。」

「ああ、飛行機は初めてか？」

I・アイランドに向かう飛行機に乗っているのはウオズと爆豪だ。ウオズは窓側の席

に陣取り、その隣に爆豪が座っている。

既に機内からワクワクしているウオズに、爆豪がそんなに興奮しているということは初めて乗るのかと思いきい問いかける。

「いいや、数年ぶりだ。I・エキスポが楽しみすぎてね、気持ちがかなり高揚しているよだ。」

だがウオズは過去に家族旅行で乗ったことがあるだけでなく、転生前も何度かフライトを楽しんでいる。

彼に関しては単純にI・エキスポで展示されるサポートアイテムや、I・アイランドでの食事が楽しみなだけである。

「俺もエキスポ楽しみだぜ！マジで誘ってくれてありがとなー！」

爆豪のもう片方の隣、通路側の席に座っているのはこちらもテンションが上がっている切島だ。

彼は、ウオズの持つ招待枠で爆豪と共にエキスポに行くことになっていた。

「我々が行くプレオープン人は人もまだ少ない。よりアトラクションや展示を楽しめるだろうね。」

「ああ！瀬呂からも一般公開には行くって連絡あったけど、その日は混んじまうかも知れねえな。」

「そうだね、今日の内に楽しんでおこう。」

瀬呂を始めとするA組生徒達も、エキスポの一般公開に合わせてI・アイランドに向かうと言っており、ウオズや切島、爆豪らは混雑していないプレオープンを楽しめる等の特典がある。

それでウキウキの2人に対して爆豪は冷静であった。

「そろそろ飛ぶぞ、静かにしとけ。」

「おう！／＼ああ！」

「声がデけえわクソが！」

と注意する爆豪の音が一番大きかったのはさておき、飛行機は空港を離陸してI・アイランドに向かっていくのであった。

「うおおおおお!!」

一方、こちらは出久とオールマイト。

彼らが乗っていた飛行機はI・アイランドに到着し、空港を出た出久は目に飛び込んできるとI・アイランドの風景に甲高い歓喜の声を上げる。

「一般公開前のプレオープンでこれほどの来場者がいるとは…」

プレオープン中ということで、招待されたお客さんしかいないのだが、既にエキスポ会場は盛り上がりつつある様子を見せている。

「実際に見ると本当にすごいですね！」

「I・アイランドは日本と違って個性の使用が自由だからね。パビリオンには個性を使ったアトラクションが多いらしい。後で行ってみるといい…」

「はい！」

この島にあるアトラクションの多くは、個性の使用が自由なI・アイランドならではのものが多く、例えば水が浮かび上がって文字を形成したり、大型のハープのような楽器を動かしたりと五感で来場者を楽しませるものが多い。

「さて、ホテルの場所は…」

「I・エキスポへようこそ…ってオールマイイト!？」

「オールマイイト!？」

「本物だわ！」

今日はかなりお客さんが入っており、その中でもオールマイイトはNo.1の有名ヒーローということで注目が集まる。

彼が来ているということで、コンシェルジュやアナウンサーを含めた多くの客がオー

ルマイトに押し寄せていく。

「ハーツハツハツハツハツ!!サインは順番にね!!」

出久もオールマイトもファンにもみくちやにされつつ、しつかり彼らにファンサービスをするオールマイト。

「あそこまで足止めされるとは…約束の時間に遅れてしまうところだったよ。」

そこから抜け出すのに数十分ほどかかってしまったが、何とかファンたちを捌き切った。

そのオールマイトの顔には女性ファンのキスを受けた後だからか、大量の口紅の跡が残っている。

「約束…?」

「ああ、久しぶりに古くからの親友と再会することになってね!少し付き合ってもらえるかい?」

「オールマイトの親友…もちろん喜んで!」

オールマイトがここに来た目的の一つは、I・アイランドに住む親友との再会。

そこに立ち会えるということを出久も目を輝かせている。

「彼にはワンフォーオールや緑谷少年に個性を譲渡したことは話してないから、そのつもりで…」

「親友にも話していないんですか？」

「ワンフォーオール機密を知る者には危険が付きまとうからね。」

なお、その友にもヴィランの危険を回避するためにワンフォーオール機密のことは話していないと出久に小声で説明するオールマイト。ウオズや爆豪の様に様々な事情でワンフォーオールの機密を共有することになった者もいるが、基本的には一般人等には話さないようにしている。

「おじさま〜！」

するとそこに、赤色のホツピングで飛びながら金髪と碧眼が特徴的な如何にも外国人と言った顔立ちの美女が元気よくやってきてオールマイトに声をかけて飛びつく。

「マイトおじさま〜！」

「oh!メリッサ〜！」

その女性メリッサと呼ばれるとオールマイトが抱擁を交わし、2人共嬉しそうな表情を見せる。

出久はその様子に、2人が久々の再会を果たしたのだと推察をする。

「お久しぶりです！来てくださって嬉しい！」

「こちらこそ招待ありがとう！しかし見違えたな！もうすっかり大人の女性だ！」

「17歳になりました！昔と違って重いでしょ！」

「なんのなんの!」

以前オールマイトに会った時は幼い年齢だったであろう彼女も、すっかり成長して出久よりも年上の女性となったが、それでもオールマイトは軽々と彼女のことを持ち上げている。

「あ、それで。デイブはどこに?」

「研究室にいるわ! 長年やつてきた研究が1段落したらしくて、それでお祝いとサプライズを兼ねて、マイトおじ様をこの島に招待したの。」

「おお、そうか。」

そんな2人の会話から、出久はオールマイトの古くからの親友が話に出た。デイブ”という人物なのではないかと考えている。だが、彼も少しずつ2人の会話に置いていかれてしまっている。

「おお、そうだ緑谷少年。彼女は私の親友であるデイブの娘で」

「メリッサ・シールドです! 初めまして。」

「初めまして! 雄英高校ヒーロー科1年、緑谷出久です!」

そう言つて出久はコスチュームの手袋を外し、明るい笑顔でメリッサと握手を交わして挨拶する。

「雄英高校? じゃあ、マイトおじ様の。」

「はい！生徒です！」

「未来のヒーロー候補さ！」

とその後も出久のコスチュームに夢中なメリッサであったが、3人は早速ダイブの下
へ向かうのであった。

「博士。デヴィット博士。こちらの片付けも終わりました。」

研究室内でオールマイトの写真を眺める茶髪の男に、小太りで金髪の男が声をかけ
る。

「そうか、ご苦労様。サム」

茶髪の男の方はデヴィットという名で、小太りの男の方の名はサムである。

「たまにはお嬢さんとランチでも行ってきたは如何ですか？」

「今日はアカデミーに行ってるよ。」

「I・エクスポ中は休校では？」

「自主的に研究してるんだよ。」

「だって、パパの娘ですもの！似ちゃったのかな？」

サムとデヴィットの会話に入ってくるメリッサ。こちらのデヴィットこそメリッサ
の父でありオールマイトの嘗ての親友である男だ。

「メリッサ…？どうしてここに？今日はアカデミーに行ってるんじゃない？」

部屋にやって来た彼女に、今日はアカデミーに行ってるはずがなぜここにいるのかと問いかけるデヴィット博士。

「私ね。パパの研究が1段落したお祝いに、ある人に招待状を送ったの！」

「ある人？」

「パパの大好きな人よ！」

「お！」

メリッサがサプライズで読んだという人物を見て、デヴィットは思わず目を見開く。

「私がー！再会の感動に震えながら来たア!!」

その人物こそ、オールマイルトである。

「トシ…オールマイルト?!」

「本物…?!」

この場に本物のオールマイルトが来ているとは信じられず、サムもデヴィットも驚きの表情を見せている。

「ハハハハ！わざわざ会いに来てやったぜ！デイブ！」

オールマイルトも親友との再会が嬉しくて、デイブを抱き上げる。

「どう？驚いた！」

「あ、ああ…驚いたとも！」

「お互いメリツサに感謝だな！」

オールマイトとデヴィットが再会を果たすことができ、メリツサのサプライズは無事に成功となった。

2人はお互いのことを懐かしく思い、笑顔で会話に花を咲かせているが、ここでふとオールマイトが後ろにいる出久にもデヴィットのことを紹介しようとして一度横に掃ける。

「緑谷少年！紹介しよう、私の親友デヴィット・シールド……」

「知ってます！デヴィット・シールド博士！ノーベル個性賞を受賞した個性研究のトップランナー！オールマイトのアメリカ時代の相棒で……」

デヴィットは著名な個性研究者の1人であるとともに、オールマイトの親友でありながらアメリカ時代にいたころのサイドキックでもあり歴代のヒーローコスチュームの開発者という側面を持っている。それ故に出久の様なオールマイトファンにもよく知られている人物であり、彼に会うことができた出久は目を輝かせて喜びながらデビットに関して知っている情報をマシングンの様に話していく。

「まさか本物に会えるなんて！感激です!!」

「紹介の必要はないみたいだね。」

「すみません！なんか……」

デヴィットの一言に、話過ぎてしまったと出久は深く頭を下げる。

「いや、構わないよ。」

その出久に頭を上げるように言うデヴィットだったが、ふと隣にいるオールマイトが咳をしているのに気付いてそちらに目を向ける。

「オールマイトとは久しぶりの再会だ。すまないが、積もる話をさせてくれないか？」

「あ、はい！」

「メリツサ、緑谷君にI・エキスポを案内してあげなさい。」

デヴィットも、オールマイトがとあるヴィランとの戦いで力を失いつつあることを知っている。

マッスルフォームを維持し続けるのがしんどいという事情も知っているからか、一度オールマイトと2人だけにしてほしいと言い、出久やメリツサ、それにサムから一度部屋を出るように言う。

出久も事情を察しつつ、メリツサにエキスポを案内してもらおうこととなった。

「では、案内させていただきます。」

一方ウオズ達3人もI・アイランドに到着して、エキスポのスタッフに案内されなが

らパビリオンを見て回っていた。

「便利そうなサポートアイテムがいっぱいだな〜！」

現在彼らがいるパビリオンでは、不整地走行ロボットや耐熱ドローンなどが展示されており、それを見て切島は目を輝かせている。

「どちらのロボットも、大規模災害の時に我々を助けてくれそうだね。」

ここに展示されているロボット達は、全て災害時の特殊な事態でも動くことができる。要救助者を発見してヒーローに知らせることができる。

これらのロボット達の機能に、ウオズも感心しつつ将来的に役立つだろうと感心している。

「こちらのロボット達は、災害時の要救助者発見だけでなく支援物資の運搬もできるよ。うに製造されています。」

「ん？アンタは？」

「失礼致しました。私はこの研究主任をしている近本と言います。」

パビリオンを見るウオズ達に話しかけた白衣を着た中肉中背で30歳ぐらいの男に、爆豪が名前を問いかけるとその男は自身の名を名乗った。I・アイランドは国際色豊かであり、こちらの近本の様な日本人もいる。

「私はウオズと言います。こちらは爆豪君と切島君で、雄英の……」

「知っているよ。雄英体育祭の映像はしっかり見せてもらったからね。」

「見てくれてたんすか!?アザッス!!」

自分達のことを紹介しようとするウオズだが、近本は既に体育祭で3人のことを知っていた。自分達のことを知ってくれてただけでなく、体育祭後も覚えていてくれたことに切島は感激し、勢い良く頭を下げて感謝の言葉を放つ。

「ところで、ここの研究主任ということはこちらのロボット達はあなたが?」

「ええ、すべて私のラボで作りました。昔からサポートロボットに興味がありまして、色々な種類を設計、開発しています。」

「他にはどんなのがあるんだ?」

I・アイランドに研究室を構える近本が制作したロボットは多種多様で、それらを代表する機体たちがこのパビリオンに並んでいる。

「まずはこちら!フロッグドロイドです!蛙の様に跳ねるだけでなく、水中移動も可能だ!」

まず近本が彼らに見せたのは、カレー調理などでよく使う圧力鍋ほどの大きさの蛙型ロボットだ。

後両足がジャッキの様に折れ曲がっており、この部位を使つての跳躍や、水中での推進力付与ができているのだと推測される。

「水害ん時に使えそうだ。」

「梅雨ちゃんにピツタリだな！」

1台目のマシンを論評する爆豪と切島。彼らの視線は羽が生えたライオンの姿をしたロボットの方を向く。

「こちらはキメラドロイドで、その名の通りライオンと複数の生物が合体した幻の生物であるキマイラがモデルです。」

「こちらの機能は？」

「飛行機能に加え、盾を装備しております。常に使用者を守るために地面や空を駆けま
す。」

「ファンネルのような使い方ができそうだね。面白い。」

防御に不安のあるプロヒーローにはお勧めのサポートアイテムになりそうだ。

近本曰く飛んでくる銃弾などにも対応できるとのこと。

「溜め攻撃とか持つてる奴には丁度良いかもな。」

「八百万君に教えてあげたいね。彼女が物を創造する時間等にこのロボなら守ってくれ
るだろう。」

その活用法の例として、八百万の名前を挙げるウオズ。

「なあ、なんかアイツ最近ヤオモモの話多くねえか？」

「気になってるらしいんだ。アイツのこと」

切島ら複数名のクラスメイトは、ウオズの会話の中で八百万の名前が増えているのに気付いてきている。

その理由を分かっている爆豪が切島に補足しつつ、近本が次のロボットを指し示す。

「そしてこちらが大型ロボのギガントドロイドさ！全長は15mで、瓦礫撤去等の重機がする役割をこなせるだけでなく、巨大ヴィランの戦闘でも活躍できる！」

続いて紹介されたロボットはこのパビリオンで最も目立っていた、全長15mの巨体を誇るものであった。

「中々デけえ…」

「確かに、重機としても使えそうだね。」

巨大ヒーローと言えばマウントレディが有名だが、このロボットは彼女に匹敵するほどの大きさだ。

「そしてこちらが、小型4足歩行ロボのフォックスドロイドだ！」

大きいものの次は、小さいサイズのロボットを紹介しようと近本が見せたのは数体のキツネ型ロボットだ。

こちらは掌サイズの4足歩行ロボットで、その見た目は狐にも似ている。

「こちらは偵察に使える小型ロボで、体育祭でジオウさんが使っていたものにも似てま

すね。」

「言われてみると、ライドガジェットにも似ているね。」

そのサイズ感や機能から近本博士やウオズ達は、タカウオツチロイドやコダマスイカアームズを連想する。

「もし宜しければ、こちらのフォックスロイドを一つプレゼントしましょうか?」

ライドガジェットは体育祭で出久が1度使用したことで、一部のマニアの間では知られた存在になっている。それを知っているウオズにと、フォックスロイドを一体手に取って渡そうとする。

「良いのかい?」

「ああ、こいつはもう量産体制が整っていて今後プロヒーロー向けに販売する予定だ。こちらは試作機なんだが、雄英体育祭の戦いに感動させてもらったお礼さ。」

「ふふ、では有難くいただくよ。」

フォックスロイドを受け取るうとするウオズの手には、近本はちやつかり名刺も乗せておく。

サポートアイテムのメーカーとしては、プロヒーローとのつながりは重要だ。

それ故に、名門の雄英生でありつつ、期待の若手であるウオズに自分のことを売り込もうとしている。

フォックスドロイドを渡したのも、自分達のラボの売り込みのためだろう。

「おう、あっちの方も見てみるか。」

爆豪と切島も近本が作ったロボットに興味が出ており、他のロボットを紹介してもらおうとしていた。

その時だった。

「ギーツ?」

近本から受け取ったフォックスドロイドをカバンにしまおうとした時だった、ウオズのもの持っているギーツミライドウオッチが発光し始めたのは…

「なんだ…?」

右手にミライドウオッチ、左手にフォックスドロイドを持っていたウオズだが、ギーツミライドウオッチから飛び出した赤い光がフォックスドロイドの方に移る。

『ギーツ・マグナム!』

『ギーツ・ブースト!』

すると元々のウオッチが白色のギーツマグナムミライドウオッチに、フォックスドロイドが赤色のギーツブーストミライドウオッチに変化した。

「おう?どうしたんだ?」

「それが、フォックスドロイドが…取り込まれた?」

立ち止まるウオズに爆豪が声をかけるが、ギーツミライドウオッチが起こした変化にウオズは驚いて体の動きが止まっているが、彼の左手に乗っていたギーツブーストミライドウオッチがフォックスドロイドの様な小型4足歩行ロボットへと変形する。

「コイツ、ウオッチの力でライドガジェットになっちまったんか？」

「ああ、そうなのかもしれない。」

近本から受け取ったフォックスドロイドがギーツブーストミライドウオッチ改め、フォックスブーストロイドへと姿を変えた。その現象に驚きつつも、プレオープンの間は有限ゆえに3人はエキスポ観光に戻って行くのであった。

第45話 ロングホープファイリア part 2

「2人共！面白そうなおトラクションがあるぜ！」

I・エキスポを観光中のウオズ、爆豪、切島ら3名はパピリオンを見た後、屋外のアトラクションをいくつか見学していた。すると切島がある1つのアトラクションに興味を示した。

「ヴィランアタック…？」

「どうやらこの岩山内にいるヴィランを倒す時間を競うアトラクションらしいね。」

切島らが興味を示したのはヴィランアタックというアトラクションだ。

人工的に設置された岩や川といった地形に、仮想敵役のロボットが6体設置されている。

参加者達はフィールド上に設置された仮想敵を全て倒し、そのタイムを競うことになる。

「爆豪！ウオズ！俺これやりてえ！」

「良いだろう。ちょうどこのウオッチを試してみたからね。爆豪君もやるかい？」

「当たり前だ！とつとと行くぞ！」

3人の思いはヴィランアタックに挑戦する方向で一致し、早速参加申請をしてフィールドの方に向かう。

『さあ、続いての挑戦者は…』

「頑張ってきたまえ、切島君。」

「おう！露払いは任せとけ！」

3人の中でヴィランアタックの先陣をすることになったのは切島だ。

雄英入試でも仮想敵を撃破していき、全体4位の成績を収めている猛者でもあり、この競技に挑む気概も十分だ。

「じゃあ、いくぜ！」

『それでは、ヴィランアタック！レディー…：ゴー!!』

開始の合図と共に切島は自身の腕を硬化させた状態で仮想敵に向けて駆けていくと、硬化させた拳でまずは1体目の敵の体を殴って打ち砕く。

「どんどん行くぜ！」

雄英での訓練で切島もかなり体が鍛えられて、身のこなしがよくなっている。

軽快に岩山を上りつつヴィラン達を次々と仕留めていく。

「1撃でヴィランを粉碎していくあたり、流石切島君の打撃と言ったところだね。」

硬化した拳によるパンチ一発でしつかり仮想敵を倒していく様子に、ウオズは感心して頷いている。

「クリアタイム33秒！第8位です！」

「中々の好記録だね。」

エキスポに来たプロヒーロー達も参加してる中で、切島はベスト10の成績を残してみせた。

『さあ、続いての挑戦者は…』

「んじゃあ、次は俺だ！」

『ゲイツ！』

切島に続いてヴィランアタックに挑むのは爆豪。

ジクウドライバーを腰に巻き、ゲイツライドウォッチを起動させる。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『ヴィランアタック！レディー…ゴー!!』

爆豪が仮面ライダーゲイツへの変身を終われるのと同時に、両掌から爆破を放って口ケツトが飛び立つようにその推進力で一番手前の仮想敵に飛びつくとともに爆破を浴びせて破壊する。

「流石爆豪の機動力だぜ！」

仮想敵に爆破を浴びせ、その推進力でフィールド上をぴよんぴよんと飛び回っている、次々と仮想敵達を仕留めていく。

「死ねえ！」

（死ね？）

ヒートアップしつつも、飛び回りながら最後の仮想敵を倒した爆豪が地面に着地する。

『これは凄い……僅か1.5秒！現在トップです！』

爆破を巧みに使うことで生み出される、圧倒的な攻撃力と機動力により、爆豪がこのヴィランアタックで1位の記録を叩き出した。

「お？あそこにいんの緑谷じゃね!？」

「おお！我が魔王！」

丁度その時、この会場に見学に来ていた出久達を切島が見つける。

その場には出久の他にメリッサと、先程合流した飯田、八百万、麗日、耳郎が来ていた。

「3人ももう来てたんだね。」

出久がウオズ達と合流できて、嬉しそうに手を振っている。

「まあな…委員長達もこっち来てたんか。」

「俺は招待された兄の代理で来た。後、上鳴君と峰田君も先程カフェでバイトに勤しんでいたぞー！」

「結構集まってるんだな。」

出久が連れてきたメンツに加えて、上鳴達も島に來ていると聞くと、結構クラスメイ
トが揃っていることに爆豪も意外だなど驚いている。

「ねえ、デク君。この人たちも雄英の？」

「はい！僕の仲間のウオズ君とかっちゃんとか切島君です。」

「以後、お見知りおきを」

ウオズ達も同級生なのかと問いかけたメリッサに、出久が3人を紹介する。

「こちらの女性は？我が魔王。」

「この人はアカデミーの学生で案内をしてくれてるメリッサさん。」

「よろしくね。えーとウオズ君。」

「こちらこそ、よろしく頼むよ。」

ウオズとメリッサがお互い挨拶を交わして頭を下げている頃、麗日らはヴィランア
タックの方に興味を示す。

「ねえ、デク君はヴィランアタックやらないの？」

「え、ぼ、僕!？」

「うん! デク君のジオウ凄いいし、いい記録出そうじゃん!」

麗日はヴィランアタックでの出久の活躍が見たいと言い、彼に挑戦するように勧めていく。

「お?! あれ挑戦すんの?」

「おう、やってみろよ! 出久! 俺の記録と勝負だ!」

「2人がそこまで言うなら…」

爆豪からも勝負を挑まれ、引き下がるわけにはいかなかった出久は急遽ヴィランアタックへ飛び入りで参加することになった。

『さて、飛び入りで参加してくれたチャレンジャー! いったいどんな記録を出してくれるのか!』

『ジオウ!』

急遽ヴィランアタックのフィールド上に立つことになった出久。

だが、そこで緊張することもなくジクウドライバーを腰に巻いてジオウライドウォッチを起動させる。

「変身!」

『ライダータイム! 仮面ライダージオウ!』

(ワンフォーオール!フルカウル!)

そして、仮面ライダージオウへの変身を終わると同時に、全身にワンフォーオールのエネルギーを張り巡らせる。

「すごい!姿が変わった!」

「それだけじゃないよ、デク君は!」

『ヴィランアタック!レディー!...ゴー!!』

出久の変身を初めて目にして、驚きを隠せないメリツサであったが、出久の強さはそれだけではない。

ワンフォーオールによる身体能力を活かし、岩山から岩山へと跳ね回りながら次々と仮想敵を撃破していく。

強化されたパンチやキックで仮想敵の鉄の装甲を砕いていく。

「すごい!デク君も良いペース!」

「スマーツシュ!」

そして最後に岩山の頂上にいる仮想敵のどこまで飛び、ジオウがパンチを打ち込んでから着地して競技終了である。

『凄い!16秒!第2位です!』

爆豪に僅かに届かなかったがこちらにも高記録を叩き出し、観客からは歓声上がる。

(凄い瞬発力！それに破壊力！まるでマイトおじ様みたい…)

身体能力強化によって生み出される機動力と瞬発力。そしてロボット達を一撃で倒す攻撃力を見てメリツサは出久とオールマイトの姿を重ねる。

「ん〜惜しい！」

「流石、緑谷君だ。」

「うん、けどかつちゃんの記録には届かなかった…」

「ああ、俺はテメエのライバルだ。いつまでも負けっ放しでは終わらねえぞ！」

爆豪もかなり仮面ライダーゲイツの力を使いこなしてきた。

入学当初に出久との間にできていた差や溝もだいぶ埋まってきていた。

「さて、私も2人に負けないように張り切らないとね。」

『ギーツマグナム！』

『アクション！』

そんな2人に負けじと、ウオズもビヨンドライバーに腰を巻き、新たに手に入れたギーツマグナムミライドウオッチを起動させる。

「変身。」

『投影！フューチャータイム！』

展開したギーツマグナムミライドウオッチをビヨンドライバーにセットする。

『マグナム!』

『フューチャーリングギーツ!マグナム!』

仮面ライダーウオズへと姿を変えるウオズに、狐の意匠が随所にみられるマグナムフォームの装甲を模したアーマーが装着される。

その両手からは、マグナムシューター40Xを模した白いライフルの銃身が伸びており、そのマグナムアームドシューター2丁を仮想敵達がいるフィールドに向けて構えている。

『ヴィランアタック!レディー!…ゴー!!』

「まずは君だ。」

開始の瞬間、右腕側のマグナムアームドシューターが岩山の頂上にいる仮想敵に向けられ、その銃口から放たれた弾丸が仮想敵を貫きその機能を停止させると同時に、左腕から伸びるマグナムアームドシューターもウオズの視界に入っていた仮想敵に向けて弾丸を放っていた。

「早い!」

フューチャーリングギーツの武装内にある、銃の弾道シミュレーターがウオズの射撃をサポートし、あつという間に3体、4体と仮想敵を撃ち抜いていく。

その様子に、出久達も驚きの声を上げる。

「君で最後だ。」

最後の仮想敵は岩山の麓の人工河川付近に陣取っており、その敵を捉えるためにウオズは飛び上がり、上から2丁の銃から放たれる弾丸でその敵を撃ち抜いた。

『なんと!?!記録は9秒!現在トップです!』

ギーツの力を使ったウオズの好記録に、思わず見ていた客や司会、それにA組メンバー達は驚きを隠せず大歓声を上げる。

「素晴らしい力だ。」

その記録に、ウオズ自身も驚きつつも、ギーツの力に感心している。

「すごい記録だね!ウオズ君!」

「良いの貰ったな!」

「ああ、仮面ライダーギーツ、君も素晴らしい仮面ライダーだよ。」

その力を絶賛する出久と爆豪。

ウオズもギーツミライドウオツチをその手で撫でて賞賛の意を表している。

『こちらも好記録!14秒!現在2位です!』

とその時、ウオズに次ぐ記録を出した者が現れた。

「轟君!?!」

ウオズに続いてヴィランアタックに挑戦し、暫定2位の記録を収めたのは全ての仮想

敵を氷で覆って機能停止に追い込んだ轟であった。

「君も来てたのかい？」

「招待受けた親父の代理で。」

どうやら彼は父親であるエンデヴァーの代理でこのI・エキスポに来ていた。

「彼もクラスメイト!? 流石ヒーロー科！」

実力者揃いの雄英生達にメリツサも感嘆の声を上げている。

轟達も合流し、出久達はI・エキスポのパビリオンを楽しんでいき、あつという間にプレオーブンの時間が終わりを迎えていた。

『本日は18時で閉園になります。ご来場いただいた皆様ありがとうございます。』

「はあく」

「プレオーブンの初日でこの忙しさってことは、明日からどうなっちゃうんだ一体……」

「やめろ考えたくない！」

プレオーブンの閉園時間を迎えた頃、I・アイランドのカフェでバイトしていた上鳴と峰田はこの日の疲労から真っ青な表情で店の前に座り込んでいた。

「峰田君！上鳴君！お疲れさまー！」

「労働よく頑張ったな！」

そんな2人の下に出久らの一行がやって来る。

疲れ切った2人に労いの言葉をかけつつ、飯田がチケットを2枚彼らに渡す。

「何これ？」

「レセプションパーティーの招待状ですわ。」

それは出久やウオズ、八百万らが後で参加することになっているレセプションパーティーの招待状であつた。

「パーティー？」

「俺らに？」

「メリツサさんが用意してくれたの。」

「せめて今日ぐらいはって」

「余つてたから！よかつたら使つて。」

メリツサからの厚意で、本日労働に勤しんだ2人にもI・アイランドで良い思い出を作つて欲しいということを用意されたものだ。

「上鳴」

「峰田」

「俺たちの労働は報われたー!」

そんなメリッサの粋な計らいに、2人は抱きあがって感激の涙を流す。

「パーティーには!プロヒーロー達も多数参加すると聞いている!英雄の名に恥じない為にも!正装に着替え、団体行動でパーティーに出席しよう!」

レセプションパーティーにはオールマイト含め、世界中から集まったヒーローが出席する。

そこで恥ずかしい行動はできないと、飯田がクラスメイト達を律することに。

「18時30分にセントラルタワーの7番ロビーに集合!時間厳守だ!轟君には俺からメールしておく!では解散!」

「飯田君、フルスロットル!」

学外でもしっかり委員長としての責務を全うする飯田に、出久はサムズアップを送る。

「では、我が魔王。我々も1度自分のホテルの方に戻るよ。」

「うん!また後でね。」

ウオズと爆豪、切島も1度自分の部屋に戻るということで出久達と解散してそちらに向かっていく。

「ここが私の通うアカデミーの校舎！そしてここが、私の使つてる研究室！」

解散してホテルの自室に戻る前、出久はメリツサに案内されて彼女の所属する研究室に来ていた。

「散らかつててゴメンね。」

「わあ〜！本格的！こんなところで研究できるなんて…」

その場にある機械や設備に出久も目を輝かせて感激している。

「メリツサさん、本当に優秀なんですわね！」

その出久が目にしたのは、メリツサが幾つも表彰されてきたであろうトロフィーだ。それを見て彼女がこれまで成し遂げてきた実績を改めて実感する。

「実はね、私そんなに成績良くなかったの。だから一生懸命勉強したわ。どうしてもヒーローになりたかったの…」

「え？プロヒーローに？」

「ううん？それはすぐに諦めた。」

元々はアカデミー内でそこそこの成績であったメリツサだったが、今は勉強の成果でトップクラスの成績を収めている。

「だって私無個性だし。」

「無個性って……!」

メリッサがオールマイトの様なヒーローになるという夢を諦めざるをえなかった原因。

それは彼女自身が無個性であったからだ。

「5歳になっても発現しなかったから、お医者さんに調べてもらったの。そしたら発現しないタイプだって診断されたわ。」

(僕と同じだ……)

ウオズやオールマイトと出会うまでは無個性であった出久には、彼女がしたであろう辛い思いが身に染みてわかっている。

「す、すいません…:なんか、その…:」

「どうしたの?」

「いや、その…:周りの人たちが当たり前前に持つてるものが無いっていわれるなんて…:」
「勿論シヨックだったわ。ただ私には、すぐ近くに目標があったから。」

出久も自身が無個性と知った時、かなり落ち込んでしまっていた。

だが、メリッサは出久よりも早い段階で立ち直れていたようだ。

「目標?」

「私のパパ。パパはヒーローになれるような個性は持つてなかったけど、科学の力でマイトおじ様やヒーロー達のサポートをしている。間接的にだけど、平和のために戦っている。」

「ヒーローを助ける存在…」

「そう！それが私の目指すヒーローのなり方。」

メリッサの父であるデヴィットはグニャグニャ指というヒーロー向きではない個性を持つて生まれたが、その頭脳を活かしてヒーローを助けるアイテムを幾つも作り出して平和な社会を作るのに貢献していた。

メリッサもそんなデヴィットに憧れているし、出久もその道を歩む可能性はあっただろう。

「このサポートアイテムね、前にマイトおじ様を参考に作ったものなの。」

「オールマイトを？」

そう言つてメリッサが小箱から出したのは、赤いバンド状のアイテムであった。

それを出久の右手首に巻き付ける

「これは…？」

「名付けるなら、リライブバンドかしら！オールマイトやデク君みたいなパワー系の人向けのアイテムで、パンチ打つ時とかに筋肉を刺激して、本来使わない筋肉も動かして

よりパワーを引き出すの。」

「すごいスペック…」

「それ、デク君が使つて。」

「え?でも、大切なものなんじゃ…」

「だから使つて欲しいの!困つてる人たちを助けられる、素敵なヒーローになつてね。」

「はい!」

出久はメリツサの思いを受け入れ、託されたバンドを手にしてパーティーの準備に向かうのであった。

「誰がパーティーなんぞに行くか。知らねえ奴のスピーチ聞いて、一々拍手なんてしてられつか…馬鹿馬鹿しい。」

「豪華な飯が食い放題らしいぜ!」

「ビュツフェスタイル、私の好きな言葉です。」

一方こちらは爆豪らが泊まるホテルの部屋。

切島とウオズはパーティーに乗り気だが、他人のスピーチを聞くのが面倒くさい爆豪

は乗り気ではない。

とは言え、ウオズ達もただ豪華な食事を食べただけだが。

「そもそも俺は正装なんて持ってきてきてねえ…」

「だと思つて、オメエの分も持ってきた!」

「用意周到すぎるだろこのクソ髪!」

パーティーに行く気がなく正装を持ってきていなかった爆豪だが、彼の分もすでに切島が持つてきていたということで仕方なく爆豪もパーティーに行くことになった。

迫るパーティーの時間。楽しいひと時を過ごすはずであったが、今まさにI・アイランドを巻き込む大事件が起きようとしていることを、この時誰も知らなかった。

第46話 ロングホープファイリア part 3

「すまないね、我が魔王。道に迷ってしまったよ。」

『うん、飯田君達にも伝えて僕達先に会場に入ってるね。』

レセプションパーティーの開始時間を迎えていたが、ウオズ、爆豪、切島は集合場所までの道で迷ってしまい、集合時間までに出久達の下に辿り着けなかった。

「すまねえ！俺が乗るエレベーターを間違えちまったばかりに！」

「つーか、どうやったら一気に70階まで登っちまうんだ！」

彼らが迷子になってしまった原因は切島の案内ミスだ。

彼が携帯を見ながら集合地に向かおうとしたが、うっかり関係ない高層階のエレベーターに乗ってしまったがために、彼らは一気に70階まで行ってしまい、そこから戻る手段を探している間にそこで迷子になってしまっていた。

「本当にすまねえ！」

「気にするな。こういう時こそ、これを使えばいいさ。」

『ギーツブースト！』

ウオズはギーツブーストミライドウォッチを取り出すと、それを起動させる。

『フォックスブーストロイド!』

すると、そのミライドウオッチは近本から受け取ったフォックスドロイドと同じ4足歩行型の小型ロボットへと変形する。ブーストライカーギーツモードを模したフォックスブーストロイドへと変形すると、そのメカは廊下の方へと駆けていく。

「彼が帰り道を探ってくれるだろう。それまで待つしかない。」

自分達が動けば動くほど、セントラルタワー内で道に迷ってしまったてると感じたウオズは、一先ずフォックスブーストロイドに最適な道を探してもらおうことにした。

「我が魔王達はもう着いたのかな？」

一先ずウオズは、他のクラスメイト達がパーティーに出席できているのか気にしながら自身のライドガジェットを待つのであった。

「ご来場の皆様、I・エキスポのレセプションパーティーにようこそおいいただきました。」

ここはI・エキスポのレセプションパーティー会場。既に世界中から来たセレブや学者、プロヒーローが食事や酒を楽しんでいる。

「乾杯の音頭とご挨拶は来賓で来てくださいました、No. 1ヒーローオールマイトさんにお願いたいと思います。皆様、盛大なる拍手を」

「デイヴ、聞いてないぞ。」

「オールマイトが来てるとなったら、こうなるさ。」

「やれやれ」

突然の乾杯の音頭役の指名と、浴びせられる拍手に少し困惑しながらもシャンパンの入ったグラスを持ったオールマイトが壇上へと上がる。

「ご紹介に預かりました、オールマイトです。堅苦しい挨拶は…」

オールマイトが乾杯の音頭と、軽いスピーチをしようとしたその時だった。

海上中に警告音が鳴り響き、スクリーンやテレビも警告を知らせる画面に切り替わる。

『I・アイランド管理システムがお知らせします。警備システムにより、I・エキスポに爆弾が仕掛けられたことが報告されました。I・アイランドはこの時刻を以って警備モードに移行します。』

街中では警備ロボットが隊列を組んで走行し、住民や観光客は屋内に入るように言われる。

そして、パーティー会場であるセントラルタワーの窓にはシャッターが下りてタワー

ごと閉鎖されてしまう。

「きゃああああー！」

そんな中、パーティー会場の方ではいくつかの自動ドアが開いて、武装したテロリストが何人も入って来る。

「聞いた通りだ。警備システムは俺たちが掌握した。」

そのテロリストのリーダーと思われる金属の仮面をつけた男が、銃を片手に参加者達の前に現れる。

「反抗しようなどと思うな、そんなことをしたら警備マシンがこの島に住む善良な人々に牙を向くことになる。」

画面に映し出されたのは、警備ロボットとI・アイランドの住民たちだ。

「そう、人質はこの島にいるすべての人間だ。当然、お前たちもな」

「セキュリティ用の捕縛装置が！」

住民を人質に取られただけでなく、オールマイトラプロヒーロー達も警備用の電子状の縄によって縛られてしまい床に倒れ伏す。

「全員おとなしくするんだな！」

オールマイトもデヴィットとアイコンタクトを取るが、抵抗しない方が良いと首を横に振られてしまい、ここは大人しくすることにした。

「安心しろ、大人しくしていれば危害は加えない。時間が来れば開放する準備も出来ている。お前此処の研究者だな！」

テロのリーダーの男は、デヴィットの助手であるサムに銃を向ける。

「一体何を！」

「ヤメロ！彼は私の助手だ。どうするつもりだ？」

「デヴィットシールドじゃねえか。お前も来い。」

「断つたら？」

「この島で誰かの悲鳴が響くだろうな。」

「分かった、行こう。」

島の住民を人質に取られてしまったためか、デヴィットとサムはテロリストに連行されてしまうのだった。

（デイヴ：クツ！警備システムを元に戻すことはできるか？この体で！いいや、やらねばならん！私は……！平和の象徴なのだから！）

拘束されて動けない状況のオールマイト。ここからヴィランの撃退に動いていくのは困難な状況ではあるが、それでも事態の解決に向けて動こうとしていたが、天井で点滅する光が彼の目に入った。

（み、緑谷少年？）

パーティー会場の上の天井の1部はガラス張りになっていて、上の階から覗き込めるような構造になっている。その上から出久がスマホのライトを点滅させてオールマイトに自身の存在をアピールしている。

オールマイトが出久に気付くと、隣にいる耳郎のイヤホンジャックで聞こえているので小声で状況を教えて欲しいとジエスチャーで伝えると、オールマイトが小声で話し始める。

「聞こえるか？ ヴィランがタワーを占拠。警備システムを掌握、島民が全員人質に取られた。ヒーロー達も全員捕らわれている。危険だ……！ すぐにここから逃げ出さないと……！」

「大変だよ……緑谷……！」

状況の重さを1早くに理解した耳郎が深刻な面持ちで出久に状況を伝え、この場にいるA組メンバーとメリツサは1度集まってそこで話し合いをすることとなった。

「オールマイトからのメッセージを受け取った。俺は雄英校教師であるオールマイトに従い、ここから脱出することを提案する！」

「飯田さんの意見に賛同しますわ！ 私達はまだ学生、ヒーロー免許もないのにヴィランと戦うのは……！」

「なら、脱出して外にいるヒーローに！」

クラス委員長の飯田と副委員長の八百万は、この場から脱出することを最優先にすべきと主張している。

上鳴も外で拘束されていないヒーローを頼れると、その考えに賛同するが…

「脱出は困難だと思う。ここはヴィランや犯罪者を収容するタルタロスと同じレベルの警備システムが備わってるわ。」

「じゃあ、助けが来るまで大人しく待つしか…」

出久と共にパーティー会場に行く予定で、A組メンバーと合流していたメリッサはこの警備の嚴重さをよく知っている。それ故に、容易に脱出はできないと言い、上鳴は待つ選択しかできないのかと俯く。

「上鳴、それで良いわけ？」

「どういうことだよ？」

「助けに行こうとか思わないの？」

何もできないと言う上鳴に対し、耳郎が助けに行くべきと主張する。

「おいおい、オールマイトまでヴィランに捕まってるんだぞ！オイラ達だけで助けに行くなんて無理だつつかうの！」

「俺らはヒーローを目指している。」

自分達が動いたところでやられてしまうだけと主張する峰田とは違い、轟は自身の左

手をジツと見つめて何かを考えている。

「ですから、私達はまだヒーロー活動を…」

「だからって、何もしないで良いのか？」

「そ、それは…」

ヒーローの法規に則るのであれば、オールマイトに従い逃げるか何もしないのが得策。

しかし、困っている人達がいるのに助けに動かないのは、ヒーローとして持つべき意思に反するのではないかと轟は主張する。

「助けてい…」

「デク君？」

「助けに行きたい！」

出久も轟の言葉に感化され、オールマイト達を助けに行きたいと声を上げる。

「ヴィランと戦う気か!?! USJで懲りてないのかよ!」

「違うよ、峰田君。僕は考えてるんだ…ヴィラン達と戦わずに、オールマイトや、皆を助ける方法を…」

「気持ちは分かるけど、そんな都合の良いこと…」

「それでも助けていんだ!」

かなり難易度は高いかもしれないが、ヴィランとの交戦を避けつつもオールマイトらの救援をして事態を収拾したいと出久は考えていた。

「今の僕たちにできる最善の方法を探して！皆を助けに行きたい！」

「デク君……」

「I・アイランドの警備システムはタワーの最上階にあるわ。ヴィランがシステムを掌握しているなら、認証コードやパスワードを解除されてるはずだわ。私達にもシステムの再変更ができる。」

出久の演説を聞き、メリツサはこの警備システムに関して出久達に助言することにした。

現在はヴィラン達によってシステムのプロテクトが解除されてしまっている状態であり、ヴィラン達がシステムの変更をしたのと同じように、自分達にもそれができるかもと考える。

「ヴィランの監視を逃れ、最上階まで行くことができれば……皆を助けられるかもしれないー！」

「メリツサさん……」

I・アイランドに長らく住んでおり、システムを熟知しているメリツサから出た案は、出久の希望を叶えるのに十分なものであった。

「監視を逃れるって、どうやって？」

「現時点では私達に実害はないわ、ヴィラン達は警備システムの扱いに慣れてないと思う。」

「戦いを回避してシステムを元に戻すか…なるほど。」

「それならいけんじゃね?!」

「だよね！」

メリッサの考えを聞き、上鳴や耳郎達も警備システムを解除してのオールマイトや住民の救助に対して前向きに考え始める。

「しかし、最上階にはヴィランが待ち構えていますわ…」

「戦う必要はないんだ！システムを元に戻せば、人質やオールマイト達が解放される！そうなれば、状況は一気に逆転するはず！」

出久の考えとしては、自分達がヒーロー候補生で戦うべきではないのならば、オールマイトラプロヒーローの開放を目的にしオールマイトラが戦える状況にすることに徹するというものであった。

ただし、ヴィランと遭遇してしまえば自分が変身して戦うしかないというのも頭に入れているが、それもあくまで保険である。

「デク君！行こう！」

「麗日さん！」

「私達にできることがあるのに、何もしないでいるのは嫌だ！そんなの、ヒーローにならない以前の問題だと思う！」

「うん！困っている人達を助けよう！人として当たり前のことをしよう！」

「おう！」

彼らの行動はヒーローとしてではなく、人として困っている者を助けるといふ当然の行動だ。

「緑谷、俺も行くぜ。」

「ウチも！」

「轟君！」

「響香ちゃん！」

麗日に続いて轟と耳郎も出久の考えに賛同する。

「無理だと判断したら引き返す。その判断が飲めるなら、俺も行こう！」

「飯田君！」

「そういうことであれば私も！」

「よっしゃ！俺も！」

この場にいるクラスのメンバー達も考えに賛同し、そして残った峰田も

「あー！もう分ったよ！行けばいいんだろ行けば!!」

涙を流しながらもついていくことを決めた。

そして、警備システムの設定変更役としてメリッサもついていくことになり、出久達は皆を助けるための行動を開始した。

「これで30階…」

出久達を選んだ作戦は、非常階段を走って登っていくというものであった。

エレベーターで登るのは警備システムがロックされているのでできず、壁を破ってジオウに変身した出久が飛行するのも警備システムが作動するリスクがあるため実行には移さなかった。

タカウオツチライドやコダマスイカアームズを使って、オールマイトやタワー内のごここにいるウオズ達にも自分の意思は伝えてある。

「メリッサさん、最上階は？」

「200階よ。」

「マジか…」

「そんなに登るのかよー！」

「ヴィランと戦うよりはマシですわ。」

八百万の主張する通り、階段以外の手段を使ったことでヴィランと遭遇してしまうこ

ともリスクが高い。

このまま非常階段を上っていくしかなかったが…

「どうする？ シャッターが…」

80階に到着した頃、非常階段もついにシャッターが下りていて上に登れなくなってしまうていた。

「壊すか？」

「そんなことをしたら、警備システムが反応してヴィランに気付かれるわ。」

「なら、ここっちから行けばいいんじゃないの？」

「峰田君！」

「ダメ！」

峰田が階段近くにあった非常扉を開けてしまい、これにより警備システムが反応してしまう。

「他に、上に行く方法は？」

「反対側に、同じ構造の非常階段があるわ！」

「行くぞ！」

80階の廊下を走り、使えなくなった非常階段の反対側にある非常階段に向かうA組メンバーであったが、彼らの進路に隔壁が下りてきてしまう。先程自分達の存在に気付

かれてしまい、ヴィラン側も出久達の妨害に動き出したのであった。

「シャッターが！」

「轟君！」

廊下中の全てのシャッターが下りてきて、出久達の前のシャッターも閉まろうとしていたが、その向こうに扉を見つけた飯田が轟に呼びかける。

その意図を理解した轟はすぐに氷塊を生成し、シャッターの間に挟んで閉まるのを妨害すれば、その間に飯田がエンジンで加速して見つけた扉に蹴りかかって打ち破る。

「……は？」

「植物プラントよ。」

飯田が開けた部屋にA組メンバーたちが入っていくが、そこにあつたのは植物が育てられているエリアであった。

「待って！あれ……」

そこで耳郎が目にしたのは、この階に向けて登っていくエレベーターであった。

恐らく、1階に居たテロリストが登ってきているのだと推測し、出久達は植物の陰に身をひそめることにした。

「ガキはこの中に居たらしい。」

「面倒なところに隠れやがって。」

草の陰に隠れる出久達が目にしたのは、エレベーターから降りてきた2人のヴィランだ。その2人は1階のパーティー会場に居た者だ。

（来るな…来るな…）

出久達は自分達のことをヴィランが気付かないように祈っているが…

「見つけたぞ！クソガキども!!」

（どうする？どうする？）

だが、出久達の祈りは通じなかった。どうやらヴィラン達は出久達に気付いてしまった…かに思われたが。

「ああ!?!今、なんつった?」

出久達の耳に飛び込んできたのは、爆豪の声であった。

「かつちゃん!?!」

「テメエらか、出久が言ってたヴィランは…」

「気付かれちゃったなら、しょうがねえな…!」

その場にいる爆豪と切島、そして2人のヴィランは既に一触即発の状態だ。

「道に迷ってる間にこんなことになっちゃまってるなんてな!」

「道に迷ってなんでこんなところに…!」

迷子になっていた筈の爆豪達だが、出久がはなったタカウオツチライドから情報を受

け取っており、目の前にいるヴィラン相手にすぐに身構える。
「だったら、ここで捕えてやる！」

爆豪達に敵意を向けられると分かったヴィランの1人の手が膜があるトカゲの手の様な形状に変化し、そこから空気の塊が放たれる。

爆豪と切島もすぐに身構え、攻撃を防ごうとするが、それよりも先に轟が生成した氷の壁が2人を守る。

「この個性は……」

「轟!？」

「俺たちで時間を稼ぐ!先にも上に行け!」

ここで轟は、自分と爆豪、切島でこのヴィラン達を相手して、その間に出久達を上を逃すことにした。

出久達を氷で作った土台に乗せ、それを下から氷の柱を生成して伸ばして上昇させていく。

「ありがとう、轟君。それよりかつちゃん、ウオズ君は?」

「あいつはシノビの力でタワー探りながら先に上に行つてやがる。後で会えんだろ。」
「分かった!」

ウオズは既にフューチャーリングシノビに変身し、タワー内を進んでいつている。

そのことを聞いた出久達は、氷がタワーの最上部に達するとさらに上層階へ進んでいく。

「俺達もやんぞー！」

『ゲイツ！』

そして、ここでヴィラン達と戦うことにした爆豪はジクウドライバーとゲイツライドウオッチを手に取る。

「変身！」

『ライダータイム！』

『仮面ライダーゲイツ！』

そして仮面ライダーゲイツへと変身し、2人のヴィランと相対する。

「ガキ共が…付けあがってんじゃねえぞ!!」

小柄なヴィランが己の個性により、紫色の怪物へと変貌してゲイツに襲い掛かっている。

「オラア！」

紫の怪物が振るう右腕を飛び跳ねて避け、空中で爆破を放つてその推進力で敵の後ろに移動。

ゲイツは右掌を紫のヴィランに向けてから、爆撃を放つ。

「小癩な！」

もう一人の水かきのあるような手の男が、その手から突風を放つが、それを轟の生成した氷壁が防ぐ。

「おらよー！」

そんな轟を狙いパンチを放とうとする紫色のヴィランに対し、切島が体を硬化ささせ、パンチを打ち出す。2人のパンチがぶつかり合い、お互いがその衝撃を逃すように身を退かせる。

『ディエンドー！』

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディエンドー！ディエンドー！ディエンドー！』

その隙に爆豪はディエンドアーマーに姿を変えると、ライドウオツチを1つディエンドライドウオツチに装填する。

『カメンライドタイム！ク・ク・ク・ク・クローズ！』

「テメエは轟の援護だ！」

その間にも轟が生成した氷壁が、敵の個性で抉られて破壊されてきている。

そこでクローズを轟の援護に向かわせ、敵の撃破を狙うことにした。

「コイツは俺らが仕留めるぞ！」

「おう！」

まずは地面方向に爆破を放って爆豪が飛びつつヴィランの上方向に回ると：

「オラア！」

巨体を誇るヴィラン目がけて上から爆破の雨を降らせる。

「俺もいくぜ！」

その爆破を防ごうと、両手を自身の顔面部付近で構えたことで隙が生まれた。

だが、ガードの薄い敵の太腿に切島が飛び込みながら、硬化した足を振るい三日月蹴りを打ち込む。

「…ツ!？」

その衝撃に、ダメージを受けて体制が崩れる紫色のヴィラン。

動揺する相手を逃すという甘いことを、仮面ライダーゲイツはしない。

「喰らいやがれ！」

両掌を背部に向けて爆破を放ち、その推進力で加速しながら飛び蹴りを撃ち出す。

さらに敵の身体が揺らいだところで、連続でパンチやキックと爆破を撃ち出し、その連続攻撃と切島から受けた太腿へのダメージで紫色の怪物は地面に尻もちをつく。

「烈怒頑斗裂屠！」

その怪物の腹部に、切島が腕を硬化させた状態で渾身のボディブローを撃ち込む。「ガキが！」

攻撃を放った切島を、その巨大な腕で捕まえてやろうとする紫色のヴィランだったが、その時彼の視界には爆発を発生させてきりもみ回転しながら敵に向かってくる爆豪の姿が映っていた。

「榴弾砲着弾！」

ハウザーインパクト

そのヴィランが爆豪のことに気付いた時には、もう手遅れであった。

その回転の勢いを乗せた特大火力の爆発がその巨体に撃ち込まれ、そのダメージでヴィランは後ろに倒れていきながら元の小柄な姿に戻って気を失うのであった。

『ヒッパレー！ヒッパレー！』

『ミリオンヒット！』

一方、轟達の戦いの方では、ヴィランが放つ圧縮された空気と、クローズのビートクローザーから放たれる斬撃がぶつかり合う。

「次は…俺だ！」

クローズと立ち位置を変えるように轟が前に出て、体育祭で瀬呂を射て尽くした時の様な巨大な氷を作り出す。

「デけえの作っても意味ねえぜ！」

迫りくる氷に対し、水かきのヴィランは突風を何発も放って自身に達するのを防ぐ。

「膨冷熱波！」

だが、轟の狙いは相手を凍らせることではなかった。

一気に炎熱を放って、作り出した氷塊を溶かして冷やされた空気を膨張させて爆風を起す。

「ぐわあッ……！」

『ロック！』

『ヒツパレー！ヒツパレー！』

『ミリオンストラッシュユ！』

爆風によって身体を吹き飛ばされてしまったヴィランに、クローズが打ち出した鍵型のエネルギーが直撃し、気を失ったヴィランの身体が地面を転がる。

「デメエ、スーツが……」

倒した2人のヴィランを凍らせる轟。

しかし、彼が着ていた正装は炎によって一部が焼けてしまっており、左腕と左肩、左胸が露出してしまっている。

「気にするな。それより、緑谷達のところに戻るぞ。」

「ああ！／おう！」

爆豪の指摘に対し、気にしないように言いつつ、3人は出久達を追いかけて上の階に向かうのであった。

第47話 ロングホープファイリア part 4

「なんか、ラッキーじゃね？100階超えてからシャッター開きつぱじゃね？」

「ウチらのこと見失った？」

徐々に上の階に登っていく出久達。

先程までは通路が隔壁で閉鎖されていたのだが、今はそれも開いていて、出久一同は容易に廊下を走っていける。

「いや、違う。」

「私達、誘い込まれてますわね。」

だが、これは八百万の推測通り敵の罠である。

上の階で恐らく敵の戦力が待ち構えている。

「それでも、少しでも上に行くために、敵の誘いに乗る！」

その罠すらも突破して、サーバールームに向かう方針で出久達は上の階を目指すのであった。

そして彼らは、130階の実験室前に辿り着いた。ここを抜ければ上の階に行く階段があるのだが…

「すごい数…」

「やはり相手は、閉じ込めることより捕えることに方針を切り替えたか。」

「僕たちが雄英生であることを知ったんだと思う。」

出久達の素性が敵側に分かったことで、警戒のレベルが高まってしまった。

それにより、ヴィランサイドは戦力を送り込んで出久達を捕えることにした。

「でもこうなることは、こちらも予想済みですわ!」

「ああ、予定通りプランAでいこう!上鳴君!」

「よっしゃ!俺もやってやるぜ!」

敵が自分達を捕えに来ようとしているのなら、こちらも倒しに行くだけだということ
で、まずは警備ロボットを止めるために上鳴の出番がやって来る。上鳴が放電を使うの
に合わせて、八百万が絶縁シートを生成して出久達を覆う。

「頼む!飯田!」

「ああ!」

飯田が上鳴の腕を掴んでエンジンの推進力で回転してから、その遠心力で彼を投げ
飛ばす。

そして、上鳴が警備ロボの中心部に降り立ち…

「喰らえ無差別放電!130万ボルト!!」

そして、警備ロボたちの向けて大放電をするが…

「防御された!」

だがここで、ロボ達がフードを降ろして電気によるダメージを防ぐ。

「なら! 200万ボルト!!」

「バカ! そんなことしたら!」

放電が効かないので、無闇に電圧を上げてしまう上鳴。

「ウエ〜い」

「アホになっちゃうだろ!」

だが、その負担によって脳がショートしてしまい、上鳴が行動不能になって警備ロボに捕縛されてしまう。

「上鳴!」

「頑丈すぎだろ!」

「仕方ない…皆! プランBだ!」

『ジオウ!』

『ディケイド!』

上鳴が捕えられ、警備ロボ達が他の雄英生徒達に向かってくる。

そこで出久は、ジクウドライバーを腰に巻き付け、ジオウライドウォッチとディケイ

ドラウドウオッチを起動して取り付ける。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディケイド！ディケイド！ディケイドー！』

出久が仮面ライダージオウ・ディケイドアーマーに変身してライドハイセイバーを構えるとともに、八百万が創造したフレアを女子たちが投げて警備ロボの通信を妨害する。

「これで通信を妨害できますわ！」

「ありがとう！八百万さん！」

『ハイ！ダブル！デュアルタイムブ레이크！』

通信を妨害されて動きが止まった数体の警備ロボが、ライドハイセイバーから放たれた竜巻に巻き上げられてから地面に落下して機能を停止させる。

「峰田君！」

「上鳴を返せ！」

さらに向かってくる警備ロボに峰田が頭のもぎもぎを投擲し、足元を捕えられて進軍

できなくなった警備ロボ達。

『ハイ！ウイザード！デュアルタイムブ레이크！』

魔方陣が生成され、そこにライドハイセイバーの刀身を潜らせて巨大化させると、その剣を横薙ぎに振るって動けなくなった警備ロボ達を横一閃に切り裂く。

「しっけえ！」

それでもまだ倒されていない警備ロボ達が向かってくる。

「いくぞ！緑谷君！」

「うん！」

（ワンフオーオール！フルカウル！リライブバンド！）

ジオウは全身にワンフオーオールのエネルギーを張り巡らせてから、リライブバンドで全身の筋肉を刺激する。

「スマーツシユ！」

身体能力を強化した状態で拳を振るい、向かってくる警備ロボと、上鳴を捕縛する警備ロボを一気に吹き飛ばし、上鳴の身柄を飯田がキャッチして保護する。

（威力、いつもより出てたかも…）

リライブバンドの力で、普段に比べて数倍力を出せていたという手ごたえを感じる出久。

「左から来るよ！気を付けて！」

『ハイ！ドライブ！デュアルタイムブ레이크！』

さらに向かってくる警備ロボ達に、ライドハイセイバーからマックスフレア、ファンキースパイク、ミッドナイトシャドーのタイヤ型エネルギーを飛ばして攻撃しつつ、実験室の出口に向かう。

「メリッサさん！リライブバンドの効果、凄いです！」

「付けてきてたのね！」

「外し方、分からなくて…」

そう話しつつ、出久達はさらに上の階を目指していき、次に辿り着いたのは138階のサーバールームであった。

「…!?!」

辿り着いたサーバールームの奥から出久達の方に押し寄せてきたのは大量の警備ロボット達だ。

「罨か！」

「突破しよう、飯田君！」

「つて！ただけいんだよ！」

ここに現れた警備ロボ達も対処しようと試みるジオウ。

しかし、この場に現れた敵の数は想像を絶するほど多かった。

「警備マシンは私達が喰い止めますわ！」

「緑谷君！メリツサさんを連れて別のルートを探すんだ！」

飯田と八百万はこの場は自分達が喰いとめて、ジオウとメリツサを上階に向かわせることにした。

「メリツサさん！お願いします！」

「お茶子さんも一緒に来て！」

「えッ…でも…」

出久と共に上の階に行くことになったメリツサだが、麗日の個性も上に行くのに役立つと感じて共に来るように指名した。

「頼む！麗日君！」

だが、飯田からも出久達をサポートするように頼まれて麗日もメリツサ達と共に走り出す。

「トルクオーバー！レシプロバースト!!」

エンジンの噴射口から青白い炎を放ちながら、飯田が警備ロボ達の方に向かっていった。一気に5体を蹴り飛ばす。

「砲手を任せます！弾は私が作ります！」

「了解！」

八百万は大砲を創造し、その砲手を耳郎に担わせる。

八百万が生成したトリモチの弾を耳郎がたい方で撃ち出し、警備ロボの動きを次々と止めていく。

「ハーレムは譲らねえからな！」

峰田も頭のもぎもぎを次々と警備ロボに投げつけていって、警備ロボの動きを止めていく。

「…ッ！」

次々とエンジンの推進力を活かして、ロボを蹴り飛ばしていく飯田。

(エンストツ!?)

だが、ここで飯田の足のエンジンが止まってしまふ。

「うおおおおお!!」

そこに畳みかけてくる警備ロボ軍団。

「飯田！ヤオモモ！弾を！」

「はあ…はあ…」

「ヤオモモ！」

「そ、創造の…限界が…」

飯田に続き、八百万も個性の酷使で限界を迎えてしまう。

「オイラの頭皮も限界だ〜」

峰田ももぎもぎを使いすぎて頭から血を流してしまい、行動不能になっていた。

「ああつー！」

そんな八百万達を捕縛しようとする警備ロボの集団。

「メガトン忍法！」

その時だった、巨大な紫色の竜巻が生成され、警備ロボを巻き込んでから一気に吹き飛ばした。

「う、ウオズさん！」

その竜巻を作り出した仮面ライダーウオズ・フューチャーリングシノビが八百万達を守るように彼女らの前に立ち、警備ロボ達にと対峙する。

「遅くなってすまないね。少し彼が建物内で迷ってしまったみたいだね。」

そのウオズの足元にはフォックスブーストロイドがおり、彼が飛び跳ねてウオズの掌の上に乗る。

「ウオズさん、飯田さんが…」

「分かっている。私が助けよう。」

八百万達よりも前線で戦っていた飯田が警備ロボに捕らえられてしまっただけでなく、こちらにもまだまだ警備ロボ達が向かってきている。

『ギーツマグナム！』

左手に持ったギーツマグナムミライドウオッチを起動させると、右手の上のフォックスブーストロイドがギーツブーストロイドウオッチに変形する。

『ブースト！』

そして2つのウオッチがジョイントで繋がって合体し、その状態でビヨンドライバーに装填する。

『アクション！』

『投影！フューチャータイム！』

『ブースト！&マグナム！』

『フューチャーリングギーツ！マグナム！ブースト！』

仮面ライダーウオズの上半身にはマグナムフォームの装甲が、下半身にはフォックスブーストロイドが変形してできたマグナムフォームを模した装甲が装着されていく。

白と赤が特徴的な仮面ライダーウオズ・フューチャーリングギーツブーストが、警備

ロボ達の方をみてファイティングポーズを構える。

「さあ、いくよー！」

ウオズが足のブースターで加速しながら警備ロボの集団に向けて突撃していき、先頭集団を一気に蹴り飛ばす。

「ハアツ!!」

さらに両手のアーマーから伸びるマグナムアームドシューターを、ブーストの推進力を乗せてブン回すとその餌食となった警備ロボの首が吹き飛ぶ。

「パワーがかなり強化されてますわー！」

ギーツブーストミライドウオッチの力により、身体スペックがかなり向上しているウオズ。

敵に向かっていくスピードも、パンチやキックのパワーもかなり向上している。

縦横無尽にサーバルーム内を駆けながら、警備ロボを次々となぎ倒していく。

「ウオズ君！」

「飯田君、今助けるよ。」

ブーストで上方向に飛び跳ねたウオズが、両腕のマグナムアームドシューターを飯田を拘束する警備ロボに向け、そこからエネルギー弾を射出する。

「さあ、っつちだー！」

飯田を拘束していた警備ロボ達が次々と撃ち抜かれて倒れると、彼の拘束が解かれて解放された飯田の下にウオズが駆け寄る。

「助かったよ。ありがとう…」

「当然のことさ。」

まずはウオズが飯田の身体を担いだ状態で、ブースターで加速してから八百万達の方に向けて走っていく。

「おいおい、まだ来てやがるぞー！」

飯田を救出することはできたが、峰田が指摘するように次々と警備ロボ達が迫ってきている。

「任せたまえ。」

ウオズが両腕横薙ぎに振るいながら何発もの弾丸を放つと、それらが警備ロボ達を次々と撃ち抜いて機能を停止させていく。

「この数なら倒しきれそうだ。」

『ビヨンド・ザ・タイム！』

警備ロボの数が大体わかってくると、ウオズは必殺技を発動。

両腕のマグナムアームドシューターから弾を連射して、正面から襲ってくる警備ロボ達を次々と倒していく。

『ビクトリーマグナムブースト!!』

そして、残った警備ロボ達に向けてブースターで加速して突撃していくと、炎を纏った両足で一気に蹴り飛ばす。

「祝え！令和の歴史を継承し、新たな歴史を歩む預言者！その名も仮面ライダーウオズ・フューチャーリングギーツ！その勝利の瞬間をその目に焼き付けるがいい!!」

そしてウオズは、フューチャーリングギーツを使つての戦闘でしつかり勝利を収めた自分自身と、このギーツの力に祝福の言葉を贈るのであつた。

「……は……?」

「風力発電システムよ。」

一方、サーバルームから移動した出久と麗日はメリツサに連れられ、屋外の風力発電設備の場所に来ていた。多くの風車が外気に晒されており、ここでタワーの電力を四六時中生み出している。

「どうして……?」

「タワーの中を登れば、警備マシンが待ち構えているはず。だから、ここから一気に上層

部に行くの…あの非常口に行ければ。」

メリッサが提案するルートというのは、屋外の風力発電システムを上っていき、そこと繋がっている上層階の非常口を指すというものであった。

「だったら僕に任せてください！」

『ファイナルフォームタイム！オ・オ・オ・オーズ！』

ジオウはオーズのライドウオッチをデイケイドライドウオッチのF・F・Tスロットに装填し、仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボの姿と能力を取り入れたデイケイドアーマーオーズフォームへと変身する。

「ウチも手伝います！」

ジオウが自身の背中にメリッサを乗せ、その彼女に麗日が触れて体を重力から解放すること、ジオウの負担を減らす。

「じゃあ、よろしく！デク君！」

「はい！」

ジオウは自身に受け継がれた浮遊の個性を活かして宙に飛び、メリッサを運びながら上へと向かっていき、その様子を下から麗日が見届けている。

「このまま上に…」

「デク君！」

だが、そんなジオウ達に向けて上の階からドローン型の警備ロボット達が襲い掛かって来る。

ドローン型の警備ロボを、ジオウが手から火炎弾を放って何とか対処していくが：

「お茶子ちゃん！逃げて！」

地上にいる麗日の下にも、警備ロボ達が迫ってきている。

出久も空中から火炎弾を撃って、麗日に近づく警備ロボ達を撃破していく。だが空中から迫りくるドローン型の警備ロボにも対処しなくてはならず、上手く麗日の方に迫るロボ達を完全には対処しきれていない。

（早く！行かないと！）

自分達が早く上にある非常口の方に辿り着かなければ、麗日がメリツサにかけている無重力の個性を解除できない。個性がかかっているならば、ジオウからメリツサが離れてしまった時にメリツサの身体が地面に落ちていってしまう。彼女の安全のためにも、今は麗日が個性を解除できない状態だ。

「麗日さん！」

「ウチに構わず行って！デク君！」

自分のことに構わず進んで行けと言う麗日だが、彼女の下に警備ロボ達が一気に迫りつつあった。

「喰らえ!!」

だがここで、仮面ライダーゲイツが現れて警備ロボ達を爆破で吹き飛ばす。

「爆豪君!」

麗日の前に現れたゲイツ・デイエンドアーマー。彼に続く様に轟も警備ロボ達を次々と凍らせて、切島も硬化化した腕で警備ロボ達を殴り倒していく。

「遅くなった!」

「切島君!それに轟君も!ありがとう!」

「話は後だ!出久を援護するぞ!」

『バース!』

麗日の下に駆け寄る3人。

その中でも爆豪は出久に迫るドローン型の警備ロボに気付き、援護を送ろうとバースライドウォッチを取り出す。

『カメンライドタイム!バ・バ・バ・バース!』

ゲイツ・デイエンドアーマーによって召喚された仮面ライダーバースは、初めからC L A W sユニットすべてを装備したバース・デイの形態で上空に飛んで、ジオウの周りにいる警備ロボ達を攻撃していく。

「ありがとう!かつちゃん!」

「私も居るよ！我が魔王！」

さらにそこに、サーバルームでの戦いを終えたウオズ達もやって来る。

フューチャーリンググリップに変身し、バーストライカー・プテラモードに搭乗したウオズはジカンデスピアヤリモードを手に持ち飛行しながらドローン型の警備ロボ達を次々と切り裂いていく。

「ウオズ君！」

「さあ、共に行こう！」

ウオズがジオウとメリツサをブーストライカーの後部に乗せて、上層階の屋外に面する非常口まで一気に飛んでいく。

『ブレストキャノン』

そんな出久達を阻もうと彼らの正面に飛んでいこうとする警備ロボを、バースが胸部に装備したブレストキャノンからエネルギー砲を放って撃ち落とす。

「助かるよ、爆豪君。」

こうして出久、メリツサ、ウオズの3人が上層階に辿り着き、ここからさらに最上階を目指すのであった。

第48話 ロングホープファイリアparts5

出久達が迫り来る警備ロボや、テロリストの一員と戦いながら最上階を目指していた頃。

サムとデヴィットは上層階にあるデータや発明品の保管室で、コンピュータを操作していた。

「コードが解除できた！1147ブロックへ」

「はい！」

デヴィットの指示を受け、サムはとあるものを取りに走っていく。

「開くぞ！」

そこにあつた小さなドアが開き、そこから出てきたスーツケースをサムは手に取る。

「やりましたね！博士！全て揃ってます！」

「ああ、遂に取り戻した……この装置と研究データだけは誰にも渡さない……！渡すものか

……」

サムが開けたスーツケースの中には頭に着けるための装置が入っており、それを取り戻せたデヴィットは喜びを露にしている。

「プラン通りですね。ヴィラン達も上手くやってるようです。」

今回の襲撃事件。それを仕組んだ黒幕はサムとデヴィットであった。

ヴィランによる襲撃の間に、自分達はデヴィットの発明品を回収するという作戦であった。

「ありがとう。君が彼らを手配してくれたお陰だ、サム。」

「パパ…」

2人の聞かれてはいけない悪事の話を、聞いてしまった者がいた。

「メリッサ…!」

「お嬢様! どうしてここに?」

そこにいたのはメリッサと、ジオウ、それにウオズだ。

父が悪事の手引きをしていたことを知り、メリッサはショックを受けている様子だ。

「手配したって何…? この事件は、パパが仕組んだの? その装置を手に入れるために…

そうなのパパ?」

尊敬していた父親の悪事に、メリッサは力のない声で詰め寄っていく。

「そうだ…」

「なんで! どうして!?!」

「博士は奪われたものを取り返しただけです! 機械的に個性を増幅させる画期的な発明

を…」

言葉を詰まらせながらもメリツサの言葉を肯定するデヴィットを、サムが弁護する。

「個性の増幅…?」

「そんな危険なものが…」

「ええ、まだ試作段階ですがこの装置を使えば薬品などと違い、人体に影響を与えず個性を増幅できます。」

デヴィットが作った発明品の存在に疑問を持つ出久とウオズであったが、サムがその画期的な装置についての説明を続ける。

「しかし、この発明と研究データはスポンサーによって没収…研究そのものも凍結させられた。」

「体にデメリットがなく、個性を増幅できる装置…世界情勢に多大な影響を与えかねないだろうね。」

ウオズの言う通りこの装置が世界に公表されれば、個性社会を大きく覆しかねない。

そのためにサムは偽物のヴィランを雇い、彼らによって盗まれてしまったことにすることで装置とデータを取り戻そうとしていた。その後は別の場所で研究を進めていこうと、そしてその決行日はセントラルタワーの施設が休養となるI・エキスポのプレオープン日にしようとサムは提案していた。

「そんな…？でしよ、パパ…」

サムの弁論を聞いてもなお、メリッサはデヴィットの行動を信じられずにいた。

「嘘だと言つて！」

「嘘じゃない。」

「こんなのおかしいわ！私の知ってるパパはこんなことしない！なのにどうして!?!」

「オールマイトのためだ…」

本来のデヴィットであればこの様な犯行には及ばない。

メリッサの信じるデヴィットであれば、このサムの提案を飲まなかった。

だが、結構に至つたのにはあるきっかけがあつた。

「お前たちは知らないだろうが…彼の個性は消えかかっている。だが、私の装置があれば元に戻せる！いいや、それ以上の能力を彼に与えることができる！No. 1ヒーローが…平和の象徴が…再び光を取り戻すことができる！また多くの人達を助けることができるんだ！」

（僕が…ワンフォーオールを受け継いだから…！オールマイトの力が失われていることを憂いて博士は…！）

ワンフォーオールをライドウオッチを通して出久に継承して以降、オールマイトの力は弱まってきていた。マッスルフォームを維持できる時間も短くなり、USJが襲

撃された時などはすぐにA組を助けに行くことが出来なかった。

出久達がI・エキスポのプレオープンを楽しんでいる間、デヴィットはオールマイトの身体を検査して今の彼の状態を知ってしまった。

「頼む…オールマイトにこの装置を渡させてくれ！もう作り直している時間はないんだ！後でなら、私はどんな罰でも受ける覚悟を！」

再び研究を続けるためではなく、オールマイトを復活させるため…

自分の身はどうなってもいいから彼を助けたいという思いが、この事件を引き起こすトリガーとなってしまった。

「命がけだった！捕らわれた人たちを助けようと！デク君やクラスメイトの子達がここに来るまでどんな目に遭ったと思ってるの!？」

「どういうことだッ？ヴィランは偽物、全ては芝居のはず。」

ヴィランが偽物で、芝居をしているというのであれば、出久達クラスメイト一同がテロのメンバーや警備ロボに襲われることはなかったはずだ。本物のヴィランでなければここまでせず、高校生の出久達をどこかの部屋に閉じ込めていただけになるだろう。

「勿論芝居をしてたぜ。偽物ヴィランという芝居をな…」

「アイツは!!」

そこにやって来たのはテロの首謀者である鉄仮面の男、ウォルフラムだ。

彼の姿を見て、ジオウとウオズが咄嗟に捕まえようとしますが、ウォルフラムが自身の金属を操る個性を使って、まがった金属の棒を縄の様に操って二人を壁に縛り付ける。

「デク君！ウオズ君！」

「なるほど…金属を操る個性を使うのか…」

拘束されつつも、ウオズは相手の個性を瞬時に見抜く。

「少し大人しくしている。サム、装置は？」

「ここに！」

「サム…」

ウォルフラムの言葉と共に、サムがデヴィットの持っていたスーツケースをひったくってヴィランの下に走っていく。サムこそが、偽物のヴィランを呼ぶふりをして、本物のヴィランを呼んだ張本人であった。

「まさか最初から…装置をヴィランに渡すつもりで…！」

「だ、だましたのは貴方ですよ！長年貴方に仕えてきたというのに、あっさりとは研究は凍結！手に入れるはずだった栄誉！名声！全て…無くなってしまった…せめてお金ぐらい貰わないと割が合いません！」

長年デヴィットに尽くしてきたのに、研究成果が無に帰してしまったことで、得られるものが得られなくなってしまう。そのことがサムにとって不満であり、それ故に

ヴィランを使ってデヴィットをだまし、その研究成果で大金を得ようとしていた。

「約束の謝礼だ。」

「サムさん！」

だがその悪意は、本物のヴィランの方が1枚上手であった。

ケースを持ったサムの肩を銃で撃ち抜き、地面に転がったケースを奪い取る。

「な、なぜ!? 約束が違う!」

「約束? 忘れたな… 謝礼はこれだよ。」

サムの口封じをしようとヴィランがもう一発弾丸を放つ。

「…!?」

「パ。パ…!」

だが、サムを凶弾から庇う様にデヴィットが飛び出し、弾丸で貫かれた自分の右腕を血で染める。

「博士! どうして…」

「に、逃げろ!」

「パ。パ…!!」

「来るな!」

デヴィットを助けようと駆け出したメリッサだが、その体をウォルフラムが殴り飛ば

す。

「メリツサ！」

「今更ヒーロー気取りか？無駄だ。アンタは悪事に手を染めた。俺達が本物だろうが、偽物だろうが、アンタが犯した罪は消えない。俺達と同類さ……」

ウォルフラムが突きつける現実には、メリツサが目から涙を流す。

「アンタは科学者でもないし、研究を続けることもできない。ヴィランの闇に落ちていく一方さ……」

ウォルフラムの言葉を聞きながら、ジオウとウォズは金属による拘束から抜け出そうとしている。

「今のアンタにできることは、俺の下でその装置を量産することぐらいだ。」

ウォルフラムがデヴィットの頭をたたいて気を失わせ、そのまま身柄を拘束して連れて行こうとする。

「パパを返して……！」

「そうだなあ……」

デヴィットを取り返そうと地面を這い、手を伸ばすメリツサにウォルフラムが銃を向ける。

「博士の未練は断ち切っておかないとな！」

「やめろー!」

メリツサの身が危ない、そう思った時にジオウはワンフォーオールのパワーで自分達を拘束する金属を跳ねのけて、壁を蹴ってウォルフラムたちの方に突撃しながら拳を繰り出そうとする。

「スマーツシユ!」

だがジオウの放とうとする拳に対し、ウォルフラムは建物に触れてから金属の壁を作ってジオウの攻撃を防ぐ。

「私がメリツサさんと共に、警備システムを解除する!我が魔王はあのヴィランと博士を追ってくれ!」

『投影!フューチャータイム!』

『ファツション!パツション!クエスション!』

『フューチャーリングクイズ!クイズ!』

デヴィットを取り返そうとする出久に対し、彼の後顧の憂いをなくすと共に本来の目的を達成するため、ウォズはフューチャーリングクイズへと姿を変えると、倒れているメリツサの体を起こす。

「追え!」

二手に分かれるジオウ達に対し、ウォルフラムも二手に分かれることにした。

自分はデヴィットと彼が作った装置をもって屋上のヘリポートに向かい、警備システムの解除を試みるウオズとメリッサには部下を追手として向かわせる。

「皆を！助ける！」

「調子に乗るな！」

多くを救うために自身を追ってくるジオウに対し、ウォルフラムは金属を操り、タワーを形成する金属を隆起させて柱状にしてジオウに向けて次々と向かわせていく。

『ジオウⅡ！』

巨大ヴィランの拳の様に、次々と迫り来る金属の塊をジャンプして避けながら、出久はジオウⅡライドウォッチを起動させ、ジクウドライバーに装填する。

『ライダータイム！』

『仮面ライダー！ライダー！』

『ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

そして、ジクウドライバーを回転させることで、2つの時計をモチーフとし、金色の部位が追加されたジオウⅡへと変身を遂げる。

（次の攻撃は！）

不規則に金属の壁や塊をタワー内の金属から作り出し、ジオウに繰り出していくヴィラン。

だが、その攻撃パターンをジオウIIの力で予測しながら、着実に敵に迫っていく。「さて、ここで問題だ。」

一方、ウオズは警備システムを解除するためにコンピュータールームに向かうメリッサを守っていた。

迫り来る追手の前で立ち止まり、クイズの問題を出そうとしていた。

「私が今日昼食で行ったのは、I・アイランド内にあるハンバーガーショップである。○か×か？」

「何言ってるんだ？」

「クイズしてる場合じゃねえだろ！」

クイズを出すウオズに対し、応えることなく攻撃を仕掛けようとするウォルフラムの部下2人。

「未回答。君たちには罰を与えないとね。」

「なんだ!？」

「グワアッ！」

ウオズの問いかけに答えなかった2名のヴィランに雷が落ち、その電流によつて2人は気絶する。

「困みに答えは×だ。私が今日食べたのはステーキ、このぐらいの問題答えもらわない

と困るね。」

初見では解けない問題を出すことで、フューチャーリングクイズの力を活かしたウオズによってウォルフラムの部下は気絶することになった。

「さあ、頼んだよ!」

「任せて!」

そして、コンピュータールームに辿り着いたメリツサが作動中の警備システムを解除した。

「止まった…?」

「緑谷君達、やってくれたか!」

メリツサが警備システムを解除した影響はすぐにもI・アイランド全体に広がった。

風力発電システムのエリアで仮面ライダーゲイツや雄英生達と対峙していた警備ロボ達は機能を停止した。

『I・アイランドの警備モードは通常モードに移行しました。』

街中では警備ロボが警戒態勢になっており、電波もつながらない状況であったが、そ

の状態も解除されていた。

「なんだいきなり!?!」

「どうなって…!?!」

レセプションパーティーの会場では、ヒーロー達の拘束が解かれ、その場にいたテロリスト達もヒーローによって撃破される。

(やり遂げてくれたか!皆!)

その場にいたオールマイトは、出久達が助けてくれたのだと分かるとすぐ、上層階に向けて駆けだした。

「ボス!他の連中は!」

「警備システムが解除しきる前に出るぞ。」

「はい!」

一方、セントラルタワーの屋上には、デヴィットと装置を持ったウオルフラムが辿り着いていた。タワー内の金属を操り続けてジオウの足止めをしながらなんとか辿り着いていた。

先にヘリで逃げる準備をしていた部下たちに指示を出すと、デヴィットと装置をヘリに運ぼうとする。

「待て!博士を返せ!」

へりに博士と装置を乗せたウォルフラムの下に、階段を駆け上がったきたジオウⅡが現れる。

「なるほど、悪事を犯したこの男を捕えに来たのか？」

「違う！僕は博士を助けに来たんだ！」

「犯罪者を？」

ウォルフラムが乗ろうとするへりに向けて走っていくジオウⅡに対し、彼はタワーに触れてその構造物から金属の塊を幾つも作り出してジオウⅡに向けて放っていく。

それに対し、未来予測の力で自身に迫って来る金属の塊を回避していくジオウⅡ。

『ジオウサイキョー！』

サイキョーギレードを手を持ったジオウはその仮面部分を「ジオウサイキョー」のフェイスに切り替えると、その剣先から放った七色の斬撃で鉄の塊を一気に打ち砕く。

「噂通りの力だな。流石、仮面ライダーだ。」

「仮面ライダーを知ってる!？」

仮面ライダーに関して聞いたことがあるかのような口ぶりのウォルフラムに対し、ジオウⅡは一度立ち止まってしまう。

「知っているさ！とある男に教えてもらった、そしてもし仮面ライダーに出会ったらこれを使えとも言われている。」

『1号!』

この計画を実行する前に、ウオルフラムはオーマシヨツカーと接触をしていた。

彼のオールマイトを苦しめるような計画を聞きつけたある男から、彼はアナザーライドウォッチを受け取っていた。

「アナザーライダー!?!」

「さて、ここらでお前を倒しておくか。出せ!後で追いつく!」

ウオルフラムはアナザーライドウォッチを使い、バイクの様な下半身を備えアナザークウガの様な巨体を誇るアナザー1号へと姿を変えると、へりに乗った部下に対して先に飛び立つように指示を出す。

「行かせない!」

飛び立とうとするへりを追おうとするジオウⅡだが、その前にアナザー1号が立ち上がる。だかる。

長い手を床に擦り付けながらジオウに向けてバイクの車輪部を駆動させて向かっていき、金属の塊を幾つもぶつけようとする。

「博士!」

ワンフオーオールで身体能力を強化しながら地面を蹴り、後方へ下がっていくことで金属の塊による攻勢から逃れ、一気にジャンプしてへりを捕えようとするが

「悪いが、行かせる気はない！」

飛び立とうとしたジオウⅡにアナザー1号が突っ込んでいき、バイクの前輪部がジオウⅡにぶつかって彼の身を突き飛ばす。

「ぐああっ!!」

ジオウⅡに追撃を加えるように前輪部を起点に体の下半身部をバットをスイングするように回してジオウを後輪部で打つ。

「終わりだ！」

アナザー1号の攻撃を受けて地面を転がるジオウⅡに、柱状の金属の塊が幾つも迫ってきて彼の身体を押し潰す。

「行くか……」

金属の塊を操り、その上に乗って上昇していくアナザー1号。

このままヘリに乗り込めば、彼らは撤退することが出来る。

「デク君！」

「我が魔王！」

その場に駆け付けたウオズとメリツサ。

『投影！フューチャータイム！』

『ブースト！&マグナム！』

『フューチャーリングギーツ！ブースト！』

出久を助けるためにすぐにウオズがフューチャーリングギーツ・ブーストに変身し、ブーストのパワーから繰り出される強化された蹴りで出久を押しつぶす金属の塊を一気に破壊する。

「返せ！博士を返せ！」

飛び立とうとするヘリとアナザー1号に向けて手を伸ばすジオウⅡ。

だが、その体のダメージによって立ち上がることもままならず、ただ空中に向けて手を伸ばしていた。

「こういう時こそ笑え！緑谷少年！」

アナザー1号がヘリに到達しようとした時だった。

地上階で警備システムから解放されたオールマイトがやってきて、一気にヘリの上まで跳躍。

「もう大丈夫！何故って？私が来た！」

君臨するオールマイトが出す強風が、ヘリを揺らがせる。

「オールマイト……」

「親友を返してもらおうぞ！ヴィラン！」

そして、アナザー1号を殴ってタワーの最上部に叩き落しながらヘリに突撃してその

機体を破壊すると、そこからデヴィットを助け出す。

墜落するヘリを背に、オールマイトはデヴィットの身柄をメリッサの下に届ける。

「め、メリッサ…」

「もう大丈夫だ…」

「いいや、まだ油断はできませんよ。お二人は下がって…」

救出を喜ぶ2人であったが、まだアナザー1号が残っていることにより気を抜けないと忠告するウオズ。

「オールマイトオ！」

先程オールマイトによってタワーのコンクリートに叩き付けられたアナザー1号が立ち上がり、バイク状の下半身を走らせてオールマイトやデヴィット達に迫る。

「止めるよ！我が魔王！」

「うん！」

突撃してくるアナザー1号に対してウオズが走り出し、ブーストの推進力を加えた回し蹴りをアナザー1号の下半身にある前輪部分に放つ。

「…ッ!?!」

ウオズが放つ蹴りの威力はアナザー1号自身の想像を超えるほどの威力があり、その衝撃でその巨体が後ろに下がってしまう。

「手を地面に触れさせないで！」

「分かった。」

ここでジオウからアナザー1号が個性を発動しないように指示を出し、ジオウはジカングレード銃モードで、ウオズは両腕から伸びるマグナムアームドシューターでアナザー1号の巨大な腕を撃ち抜く。

「私も手を貸そう！」

両手を撃たれて動揺するアナザー1号の胸にオールマイトが飛び込んでいき、その胸部を彼の放ったパンチが撃ち抜く。

『ゴースト！スレスレシニューティング！』

アナザー1号がオールマイトの一撃で怯んだ隙に、ジオウがジカングレード銃モードにゴーストライドウオツチを装填して眼魂型のエネルギーを撃ち出す。

「チャージ：：ショット！」

それに続く様にウオズも自身の両手から伸びる銃にエネルギーを貯めて、ジオウからの銃撃を受けて体を揺るがせているところに解き放って追撃する。

「決めるよ！」

『ビヨンド・ザ・タイム！』

『サイキョーフィニッシュタイム！』

そして、アナザー1号が2人の攻撃で怯んだ隙にジオウはサイキョージカンギレードを、ウオズはジカンデスピアヤリモードを構える。

『キングギリギリスラッシュュ!』

『爆裂DEランス!』

そしてそれぞれの刃先から放たれた黄金の光の刃と赤色の斬撃がX字に交わりながらアナザー1号に迫り、その巨体の胸部に斬撃が直撃すると次々と体から爆発を起こしながら倒れていく。

「バカな!」

アナザー1号の巨体が爆散し、ウオルフラムの肉体とアナザー1号のウオッチが地面を転がる。

「さあ、観念したまえ。」

そのウオルフラムの身柄を拘束しようと近づくウオズであったが、まだ意識のあるウオルフラムは地面に触れて金属の壁を生成する。

「しぶといね…!」

「ウオズ君! 気を付けて!」

まだ意識のあるウオルフラムから距離を置く2人の仮面ライダー。

「まだ終わらないさ…この俺の野望は!」

「ボス！これを使ってください！」

墜落したヘリに乗っていたヴィランの部下が、ウォルフラムにデヴィットが発明した個性を活性化する装置を手渡す。

「その装置は…?!」

「私の発明品が…」

「よく見てろ、自分の発明品でオールマイトが死ぬ様を！」

『1号！』

その装置を頭部に着けて起動させたウォルフラムが再びアナザー1号ウォッチを起動して体に埋め込むと、周囲にあるヘリの残骸などの金属を吸収して新たな姿へと変化する。

「この姿は…」

先程のアナザー1号とは打って変わり、全身が白くなって下半身から4本、肩から2本の赤い節足を生やした異形へと変化していく。その名はアナザー新1号、個性活性化装置の影響で触れずとも金属を操れるようになったようで、周囲に幾つもの金属の壁を生成していく。

「まだいけるか？緑谷少年、ウオズ少年。」

「えええ！」

「勿論。」

親友であるデヴィットが作った装置の悪用を防ぐため、オールマイトらはアナザー新1号に挑んでいくのであった。

第49話 ロングホープファイリアpart6

「装置の価値を吊り上げるために、犠牲になってもらうぞー」

個性を活性化する装置を取り込んだアナザー新1号。

それにより変身者であるウォルフラムの個性が強化され、自身の付近の金属片や、地面から生成した金属の塊を次々とオールマイトやジオウ、ウオズ達に打っていく。

「これがパパの装置の力…」

360度様々な方向から迫って来る金属の塊による攻勢に、3人は苦戦気味だ。

「Shit!」

1つの金属の塊がオールマイトに迫り、それを何とか受け止めているが、活動限界が近いオールマイトはその攻撃を押し返そうとしているが口から血を流している。

「オールマイト!」

そんな彼を助けようとするジオウ達だが、2人もアナザー新1号が飛ばしてきた金属の塊に弾き飛ばされる。

「助けないとツ…」

ウオズは空中で下半身のブーストのマフラーから炎を噴射し、体制を整えながらオー

ルマイトの方に向かっていこうとする。

「ウオズ君！」

だが、彼の横から金属の塊の波が迫ってきてウオズを巻き込んで押しつぶそうとしている。

「……！」

だが、その金属たちが一気に氷に覆われてウオズの眼前で止まる。

「くたばりやがれ！」

その場に轟達も到着し、彼が自分のことを氷結で守ってくれたのだとウオズが分かったその時、爆豪が変身する仮面ライダーゲイツも登場して右腕の手榴弾型の籠手にあるピンを抜いて大規模爆破を浴びせる。

「何やられてんだよ！おい！」

その攻撃こそ金属の壁を作って塞がれてしまったが、着地したゲイツがジオウ、ウオズと並び立つ。

「爆豪少年！」

「今のうちにヴィランを……！」

「轟君！皆！」

爆豪や轟に加えて飯田を始めとしたA組メンバーもこちらに到着していた。

「応急処置は私に……」

「お願いします!」

八百万はデヴィットが血を流しているのを見つけると、包帯やガーゼを創造して止血を開始する。

「金属の塊は俺達が引き受けます!」

「麗日君!ここを頼む!」

「うん!」

切島と飯田も前に出ていき、アナザー新1号が繰り出してくる金属の塊へ対処していく。

「教え子たちにこうも発破をかけられちゃ……限界だなんだと言ってられないな!」

ジオウIIの剣による攻撃、ゲイツが浴びせる爆破、ウオズの銃撃、轟の氷結と火炎、飯田のエンジンで勢いをつけた状態の蹴り、切島の硬化した拳によるパンチが次々と金属の塊を打ち砕いていき、オールマイトも自身に迫る金属の塊を押し返してパンチ一発で一気に吹き飛ばす。

「限界を超えて!さらに向こうへ!!Plus ultraだ!!!」

ワンフオーオールのパワーで飛びながら、空中を飛びながらさらに迫って来る金属の塊も打ち砕いていく。

「カロライナスマツシユ〜」

迫り来る金属の塊を次々と打ち砕いてアナザー新1号との距離を詰めていき、敵の眼前にある鉄の壁も破壊していく。

「観念しろ！ヴィラン！」

オールマイトが打ち出すパンチと、アナザー新1号が繰り出すパンチがぶつかり合う。

「観念するのはお前の方だ！」

拳をぶつけ合うオールマイトに、アナザー新1号の両肩にある赤い節足が放たれ、それを受けたオールマイトが血を流しながら突き飛ばされる。

「オールマイト！」

そのオールマイトの身体が宙の上で大量の金属に覆われていき、捕らわれてしまう。

そんな状況にデヴィットを止血する八百万や、彼女が創造した盾でメリツサ達を守っている麗日もオールマイトの身を案じている。

「お前たちもくたばれ！」

そして、金属の塊の波は攻勢に出ているジオウ達だけでなく、守備側に回っている八百万達にも向けられる。

「八百万君！」

金属の塊を打ち砕けるような攻撃力を彼女たちは持ち合わせていない。

それ故にウオズはブースターで一氣に加速しながら八百万らの方に向かうが、少し距離がある。

(間に合え！)

「皆さん！伏せて！」

何とか屈んでやり過ごそうと指示を出す八百万だが、容赦なく金属の塊が迫ってきている。

「危ない！」

八百万達が金属に押しつぶされるかに見えたその時、不思議なことが起こった。

突如八百万達の前に光の壁ができて、その攻撃から守ってみせる。

(この力は?)

屈んで伏せている八百万達は光の壁に気付いていないが、自分達の身を守れている。

その間にウオズがブーストによる蹴りで金属の塊を打ち砕く。

「大丈夫かい？」

「ええ！」

謎の光の壁にウオズは少し首を傾げながら、またヴィランの方に向かっていく。

(あの光の壁、まさかね…)

個性ではない何かの力、例えば仮面ライダーの力を誰かが持っているのだろうかと考えつつもウオズはジオウの下に向かう。

「オールマイトを助けるよ。我が魔王！」

「うん！」

「じゃあ、あれでいくか！」

金属の塊に捕らわれるオールマイトを助けるために、ジオウ、ゲイツ、ウオズの3人が並び立つ。

『ジオウトリニティ！』

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ！』

ジオウトリニティライドウォッチをジクウドライバーに装填してダイヤルを回す出久。

『トリニティタイム！』

そして、ジクウドライバーを1回転させると黄金の光に包まれたウォズとゲイツがバンドのある腕時計の様な姿に変わってジオウに装着されていく。

『3つの力！仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！』

『トリニティ！トリニティ！』

（ワンフォーオール！フルカウル！リライブバンド！）

オールマイトを捕える金属の塊に向けて浮遊の力で飛びながら、ジオウは全身にワンフォーオールを張り巡らせながらリライブバンドで筋肉を刺激。

「デトロイトスマッシュユ！」

その状態で拳を振るい、オールマイトを捕える金属の塊を一気に打ち砕く。

「緑谷少年！いや、爆豪少年とウオズ少年もいるのか……」

「ああ、そうだとも。今はまあ、ジオウ・トリニティとでも呼んでくれたまえ。」

ジオウトリニティ内の意識空間であるクロックオブザラウンド内では、足元の巨大な時計の針がウオズの方を向いている。

「さあ、オールマイト！我が魔王！爆豪君！共にいこう……！」

「……ああ！／うん！／おう！」

ジオウトリニティとオールマイトが並び立ち、ウオズの一声と共に双方がワンフォーオールで身体能力を強化させた状態で跳躍してアナザー新1号に突っ込んでいく。

「スマッシュユ！」

「くたばれ！」

アナザー新1号が彼らを妨害しようとする金属の塊や柱を幾つも飛ばしてくるが、それをオールマイトがパンチで打ち砕きつつ、ジオウトリニティも爆豪の爆破で金属を壊して吹き飛ばしていく。

「俺達も援護だ！」

それに続く様に飯田達もアナザー新1号が操る金属に対処をし始め、オールマイトに迫るように伸びていく金属の柱をエンジンの推進力を加えた蹴りで飯田が破壊する。

「助かるよ！飯田少年！」

更に迫って来る金属の塊の波を轟が凍らせ、地上の金属の塊を硬化させた拳を振るう切島が殴って壊していく。

「轟君に切島君もありがとう！」

「おうよ！こっちは俺達に任せろ！」

頼もしい援護も加わり、オールマイトとジオウトリニティはさらに敵との距離を詰めていく。

「ヒーローごときが俺に勝てると思うな！」

下半身から生える4本の節足で跳躍し、ジオウトリニティに飛びつこうとするアナザー新1号。

「カリフォルニア：スマーツシュ！」

それに対してオールマイトが空中で前転して回転を加えてから、下方向にパンチを撃ち出せば、飛び込んできたアナザー新1号の顔面部を捉えて地面に叩き落す。

(ワンフォーオール！リライブバンド！)

「デトロイトスマッシュユ！」

そこに続く様にジオウトリニティのワンフォーオールとリライブバンドで強化されたパンチが、地面に倒れこむアナザー新1号の体に撃ち込まれる。

「まだだ！」

追撃を加えようとするジオウ達に対し、アナザー新1号は両肩から赤い節足を突き出して防ぎ、後方に下がると周囲の金属の欠片を自分の身の回りに集めていく。

「それで身を固めようとも無駄だ！」

ジオウトリニティの体の主導権はウオズにあり、彼が手榴弾型の籠手が装備された右腕を敵に向けると、それを察した爆豪がすぐに大爆破を放つ。

「……ッ！」

身に纏おうとした金属の塊ごと吹き飛ばされるアナザー新1号に対し、ジオウトリニティはライドハイセイバーを構える。

『ハイ！電王！』

『デュアルタイムブ레이크！』

剣先からデンライナーの姿をしたエネルギーが放たれ、アナザー新1号の右肩に直撃。そこから生えていた赤い節足が切り落とされて地面に落ちる。

「……ここで終わってたまるかア!!」

この攻撃に激高し、キューブ状に固められた金属の塊がジオウ達に迫っていく。

「テキサス…スマッシュユ！」

だが、飛んでくる金属の塊に対してオールマイトが腕を振るい、それで起こる強風が金属の塊を吹き飛ばす。

『フィニッシュタイム！』

『ヘイ！仮面ライダーズ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！ヘイ！セイ！』

その間にライドハイセイバーにデイエンドライドウォッチを装填して、針を3周回転させると、39枚のライダーズクレストが描かれたカード型のエネルギーをの周りに竜巻状に纏わせる。

『デイ・デイ・デイ・デイ・デイエンド！』

その状態のライドハイセイバーの剣先をアナザー新1号に向けて、突きを放つとカード型のエネルギーと共に剣の形のエネルギーが敵に向かって進んでいく。

「喰らってたまるか!!」

金属の壁を幾つも生成して攻撃を防ごうと試みるアナザー新1号だが、それすらも突き破り、ライドハイセイバーから放たれたエネルギーが敵の巨体の左胸を撃ち抜いて、肩から生える節足を落とす。

「いくぞ！有精卵達！」

この一撃を喰らったアナザー新1号はダメージを受けて防戦に切り替え、自分の周りを金属の塊で固めて、その塊は山の様に大きくなる。その中腹部に体を埋もれさせながら、金属の塊や柱をオールマイトやジオウ達に放つていくが、それを避けながら2人の英雄は駆けていく。

「させねえ！」

幾つもの金属の塊がジオウ達を横から襲おうとするが、轟が氷の塊を作って防ぐ。

その後繰り出される金属の塊による攻勢も、ジオウとオールマイトは避けながらパンチやキックで壊して敵との距離を詰めていく。

「うおおおおお!!」

ウォルフラムが上から下に斜めに伸ばした金属の柱の上を、オールマイトとジオウが走り、それを潰そうと敵は巨大な金属の塊を作り出す。

「目の前にあるピンチを！」

「全力で乗り越え！」

それに対して、オールマイトは地面を蹴り、ジオウは爆破を足から放つてそれぞれ飛んで金属の塊へと直進。

「人々を！」

「全力で助ける!」

そんな2人を狙って飛んでくる金属の欠片を、ジオウはジカンドスピアで弾いて防ぐ。

「それこそが!」

「ヒーロー!」

「タワーごと潰れちまえ!!」

オールマイトとジオウ、それに加えて雄英生達やセントラルタワーごと破壊しようと、巨大な金属の塊を振り下ろして落とそうとするアナザー新1号。

「ダブルデトロイト!!スマーツシュ!!!」

ジオウトリニティは右腕で、オールマイトは左腕で、ワンフォーオールのエネルギーを込めたパンチを撃ち出して巨大なキューブ状の金属の塊を打ち砕いてその勢いのままにアナザー新1号がいるところまで突き進む。

「いけー!」

「オールマイト!」

「ジオウ!」

「ぶちかませ!!」

『フィニッシュタイム!』

仲間たちの声援を背に受けて、ジオウはライドウォッチの起動スイッチを押し
てい

『ジオウ！』

「さらに！」

『ゲイツ！』

「向こうへ！」

『ウォズ！』

「[[[Plus Ultra!!]]]」

アナザー新1号に向けて飛び立ちながら、出久、ウォズ、爆豪、そしてオールマイ
ト
が声を合わせる。

ジクウドライバーを一回転させたジオウトリニティは全身にワンフォーオールのエ
ネルギーを張り巡らせながら蹴りの体制に移行し、オールマイトもパンチを撃ち出そう
と構える。

『トリニティタイムブ레이크バーストエクスプロージョン!!』

「[[[デトロイト…スマーツシユ!!]]]」

ジオウトリニティが放つライダーキックと、オールマイトが放つ強力なパンチ。

それらはアナザー新1号に直撃し、周囲の金属の塊ごと一気に吹き飛ばす。

タワーに纏わりついていたウォルフラムが操る金属や、周囲から生えていた金属の柱もすべて弾き飛ばされていく。

「トシ…」

そんな中、八百万から応急処置を受けたデヴィットは、敵を倒して立つオールマイトとジオウトリニテイの姿を目に焼き付けた。

嘗てのオールマイトの様に人を救う若い英雄、その存在にデヴィットの表情は緩くなった。

新たな平和の象徴の種に、デヴィットは安心している様子だった。

「やったのか?」

「やったんだ! ヴィランをやっつけたんだー!!」

出久達の勝利を確信し、峰田達が歓声を上げ始める。

ウォルフラムの肉体が地面を転がり、その横でアナザー1号ウォッチと個性活性化装置が砕け散る。

ヴィラン達は全員気を失っている様子で、自分達が勝ったことが分かって轟も安堵の笑みを浮かべている。

「デク君! 皆!」

「メリッサさん!」

ジオウトリニテイの変身が解除されて現れた出久、ウオズ、爆豪の3人の下にメリッサが駆け寄る。

「デイヴー！デイヴー！」

「オール…マイト」

歓喜する雄英生達から少し離れたところで、オールマイトは八百万からの治療を受けて包帯を体に巻いたデイヴィットと言葉を交わそうとしていた。

「パパー！」

「オールマイトー！」

そんな2人の無事を喜ぶように、呼びかける出久とメリッサを見て、この事態を收拾してくれた感謝の言葉をデイヴィットが発する。

「助かったよ…オールマイト。ありがとう…」

「いいや、礼なら緑谷少年達とメリッサに言うべきだ。」

今回の騒動が収まったのは、出久達A組メンバーやメリッサの活躍あってこそだとオールマイトが告げる。

「良かった…本当に…ありがとう。デク君達のお陰で皆を助けることが出来た。」

嬉し涙を浮かべながら、メリッサが出久、ウオズ、爆豪の3人に感謝の言葉を述べる。

「メリッサさんです。メリッサさんのリライブバンドに何度も助けられました。あり

がとうございます！」

「ジオウトリニティに変身しているとき、確かに普段よりも力が出せていると感じたよ。ありがとう…」

そんなメリツサに対し、出久とウオズはライブバンドを託してくれたことの礼を言う。

「デク君…ウオズ君…」

「けどそいつ、なんか焦げてねえか？」

2人の言葉に嬉しそうにしているメリツサであったが、出久の右手首に装備されていたライブバンドはショートしてしまったのか、火花を散らしながら出久の手から落ちてしまった。

「ご、ごめんなさい！大事なものなのに、壊しちゃって！」

「ふふ、そんなこと。」

ライブバンドを酷使しすぎて壊してしまったと、謝罪する出久。だがメリツサは役立ったのならそれで十分とその謝罪を受け入れる。

「おーい！デクくん！」

「ケガはないかー!? 4人共ー！」

「大丈夫だよー！」

「ああ、心配は要らないよ。」

その場にいる4人に、麗日や飯田達が声をかけ、出久とウオズがそれに手を振って応える。

「メリッサから大体の事情は聞いたよ。」

「私は…君という光を失うのが、築き上げた平和が崩れていくのが怖かった。」

オールマイトから、彼が自身の犯してしまった罪に関してもう聞いたと言われ、デヴィットは後悔の言葉を紡ぎ始める。

「だが、私の考えも、あの装置も、所詮は現状維持の産物でしかない。」

そして、自分の考えは間違っていたと言いながらデヴィットは立ち上がる。

「未来が、希望がすぐそこにあると言うのに…私はそれに気付かなかった。」

デヴィットの視線の先には、出久とメリッサ達。

彼らこそ、未来の希望であるとデヴィットは感じていた。

「メリッサが私の跡を継ごうとしているように、緑谷君達が君の跡を継ごうとしているんだな。」

「まだまだ未熟さ。しかし、彼らは誰よりもヒーローとして輝ける可能性を秘めている。」

「私にも見えるよ。トシ、君と同じ光が、ヒーローの輝きが…」

新たな1日の始まりを告げるような日の出の光が、デヴィットを継ぐ未来の研究者となるメリッサと、オールマイトを継ぐ未来のヒーローとなる緑谷出久、ウオズ、爆豪勝己を照らすのであった。

「ウオズ！おめーさつきから肉喰いすぎだぞ。」

「おう！俺らの分もちゃんと残せよ！」

「おっと失礼、つい夢中になってしまつてね…」

あれから数日。

エキスポは少し延期になってしまったが、我々雄英高校1年A組のメンバーはI・アイランドでバーベキューを楽しんでいた。

私は肉を多く食べすぎているところを、切島君と瀬呂君に注意されてしまつていた所だ。

(しかしながら、あの時の光は何だったのだろうか…)

この事件はデヴィット・シールド博士とその助手のサム、そしてテロリスト達が逮捕されて終息となった。

だが、私には気がかりなことが幾つかある。

一つは敵からの攻撃から八百万君達を守った光。

(誰かが新たな力に目覚めたのだろうか……?)

もしかしたら、仮面ライダーの力がまた誰かに宿り、その一端が出てきたのだろうか？

「どうしましたの？ ウオズさん」

「いいや、なんでもないよ。」

私が少し見すぎていたのだろうか、気になって八百万君が声をかけてきた。

「ほらこちら、パエリアがありますわ！」

「おお、美味そうだね。」

ということとで八百万君に案内されてパエリアを食べることにしよう。

それともう一つ、心配事がある。

それは今回のテロリストにアナザー1号ウオツチを渡した者のことだ。

恐らく、オーマシヨツカーだろう。

彼らとの戦いは、これからも続きそうだ……

林間合宿編

第50話 合宿初日

「ようやく休憩か〜」

「おしつこ〜！おしつこ〜！」

さて、I・アイランドでのエキスポ見学を終えて戻って来た我ら雄英高校1年A組の一同は現在、夏休みの林間合宿の宿に向けてバスで移動中だ。

途中休憩ということで、我々は山の中腹で降ろされたのだが、トイレ等が見当たらない。

峰田君もトイレを探して走り回っている。

「つか、何ここ？ここ、パーキングじゃ無くな？」

「あれ？B組は？」

休憩場所にしては少し変だ。パーキングエリアや道の駅の様な施設があるわけでもないし、共に合宿に参加しているB組のバスとも途中で分かれてしまった様だ。

「何の目的もなくでは、意味が薄いからな！」

「トイレは？」

相澤先生曰く、この地に着いたのには何か目的があるらしい。

「よう、イレイザー！」

「ご無沙汰してます。」

すると、隣に止まっていた車から2人の女性と1人の少年が下りてくる。

「煌く眼で〜ロックオン！」

「キュートにキャットにステインガー！」

「ワイルドワイルド〜プツシーキャッツ！」

その女性とは、猫を意識したパーツが随所にみられるコスチュームを着た2人のヒーローだ。

「今回お世話になるプロヒーロー、プツシーキャッツの皆さんだ。」

「有名事務所を構える4名1チームのヒーロー集団！山岳救助などを得意とするベテランチームだよ！」

我が魔王の言うように、世間でも有名なプロヒーロープツシーキャッツのメンバー4人のうち2人がこの場に来てくれている。山岳救助が得意な彼女らが面倒を見てくれる合宿ということは、そう言った救助の訓練も行うのだろうか？

「キャリアは今年で12年に！」

「心は18！」

青いコスチュームを着たプッシーキャッツのピクシーボブが、彼女たちのキャリアについて語ろうとする我が魔王の口を防ぐ。

「どうやら、歳が分かってしまうような話はNGらしい…」

「ここら一帯は、私らの所有地なんだけどね。」

さて、一通り挨拶を終えた後、赤いコスチュームを着ているプッシーキャッツのマンダレイが、現在われわれがいる山の中腹よりも下にある、麓の森を指さして説明を始める。

「アンタらの宿泊施設は、あの山の麓ね。」

「「遠い！」」

マンダレイが指さすのは、森の中のとある場所だ。

「どう考えてもここからならかなり遠い。」

「じゃあ、なんでこんな半端なところに？」

「これってもしかして…」

「いやいや…」

「バス戻ろうか。なあ？早く。」

「そうだな、そうすつか。」

「ここ」で我々を降ろして、プッシーキャッツが出てきて、宿泊場所をこの道中で説明さ

れる。

そのことから、蛙水君や砂藤君が察し始めて、上鳴君や瀬呂君がバスに戻ろうとする。

「面白そうだね。我が魔王、爆豪君。」

『ウオズ!』

と言つても、相澤先生たちがそう簡単に私達をバスに戻してくれるとは思えない。

なのでここは、プツシーキャッツがやろうとしていることに乗るだけだ。

「一番最初に着くのは俺だ!」

『ゲイツ!』

「うん!後、カプトとかは使わない方が良いかな?」

「恐らく、その方が訓練になるからね。」

『ジオウ!』

我々3人は腰にベルトを巻き、ライドウオツチを起動させる。

この場での訓練なら、カプトアーマーやデイケイドアーマー・ファイズフォームを使うのは不適切だろうなどと話しながらライドウオツチをドライバーに装填していく。

「今は午前9時30分。早ければ、12時前後かな?」

「ダメだ!おい!バスに戻れ!」

「12時半までかかったキティは、お昼ご飯抜きだからね」

「それはまずい！速く行かねば！」

「ここから3時間以内に宿に着かなければ昼食抜きはまずい。」

既に2時間後には腹を空かしている自信しかない。間に合わさねば…

「いこう！2人共！」

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『投影！フューチャータイム！スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

昼食を逃がすわけにはいかないということで、我々3人はそれぞれ仮面ライダーへの変身を遂げる。

そして、バスの方に逃げる切島君達とは逆に、ここから飛び降りて森に向かい、宿泊施設を目指すのであった。

バスに逃げ込もうとしたA組生徒達は、ピクシーボブの個性である土流によって操ら

れた土の波によつて森の方に放り出される。

「ほう、すっかり障害物も用意しているんだね。」

そんな彼らより一足先に森に入ったウオズ達の前には土でできた魔獣達があり、彼らの行く手を阻もうとしていた。

「ご飯のためだ。悪く思うな。」

『投影！フューチャータイム！』

『デカイ！ハカイ！ゴーカー！』

『フューチャーリングキカイ！キカイ！』

ここでウオズは全形態の中でも最大の攻撃力と防御力を誇るフューチャーリングキカイに変身し、パンチ一発で目の前の土魔獣を壊してみせた。

「くたばりやがれ！」

一方のゲイツも、自身に向かってくる土魔獣に対し、爆破を放つて体を構成する土を打ち崩していく。

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディケイド！ディケイド！ディケイドー！』

そして、出久の変身するジオウもディケイドアーマーへと変身すると、ライドハイセ

イバーを構える。

『ヘイ！ウイザード！』

『デュアルタイムブ레이크！』

そして、仮面ライダーウイザードの力を使い、自身の背後に、赤、青、緑、黄の魔方陣を生成。

剣を振るうと同時に魔方陣から火、水、風、土の属性の斬撃を放ち、迫り来る魔獣を切り裂いた。

「レシプロバースト！」

出久達の後方でも、さらに現れる土魔獣を飯田や轟が己の個性を活かして撃破していく。

「アイツら……」

だが、ウオズ達の進んでいくペースは轟達よりも早く、あっという間に他のA組生徒から見えない位置まで来てしまっていた。

「私達も急ぎましょう。これ以上遅れを取る訳にはいきませんわ。」

八百万は大型のハンマーを創造し、それを振るって土魔獣と戦っている。

彼女もまだライダーたちに負けていられないと、轟達に声をかけて進み始めた。

「さて、案内を任せたまよ。」

「場所の方は僕に任せて！」

『サーチホーク！』

『ブースト！フォックス！』

『スイカアームズ！コダマ！』

さて、森の中に入った出久達であるが、やはり複雑に入り組んだ地故に迷ってしまう可能性があった。

そこで出久はタカウオッチライド、ウオズはフォックスブーストロイドを、爆豪はスイカアームズコダマをそれぞれ起動させる。

タカウオッチライドが宿泊施設の場所を探り当て、他の2体がウオズ達をその位置まで案内するという布陣だ。

「さて、このまま突破しよう。」

ライドガジェット達に導かれながら、ウオズ達は宿泊施設を目指して駆けていく。

途中の魔獣達も難なく撃破して出発から約2時間後の11時30分。

「何とか着いたね……」

彼ら3人は目標の12時よりも前に宿に到着していた。

「もう着いたの!? 早いね〜」

「噂には聞いていたが、ここに昼前に辿り着くとは中々の実力だな。」

そんな彼らをプツシーキヤッツの黄色担当であるラグドールと、茶色担当で筋骨隆々の虎が出迎える。

「こんにちは、相澤先生やマンダレイ達はどこに…?」

「まだこつちに向かつてる途中だけど、もうすぐ着くと思うよ」

まだ姿を見せていない相澤たちのことを問いかけるウオズに対して、ラグドールが答える。

「どうやらウオズ達は相澤達よりも先にここに到着してしまった様だ。」

「それまでは中で昼食を用意している。しっかり食って酷使した筋繊維を治すんだ!」

「はい! / おう!」

一先ず、12時まででに到着した出久達は、虎に案内されて中で食事をとることになった。

そこから数時間後

昼食後に自主トレをしていた出久達だが、夕方になると他のクラスメイト達も到着して彼らを迎え入れていた。

「皆、かなりボロボロだね。」

約6時間、戦い続けながら森を抜けて宿泊所に辿り着いた雄英生徒達。

顔や肌、制服がかなり汚れてしまっており、個性を酷使した影響が出てしまっている

者もいる。

「腹減ったー！死ぬー！」

「ここまで体力の消費が激しかった切島達は地面に座り込み、腹を鳴らしてしまっている。

「けど皆、私の予想よりは早かったわね！特にその3人！仮面ライダーの強さは伊達じゃないね！」

と、ピクシーボブは午前の段階で到着していた出久、ウオズ、爆豪の方を指さす。

「数年後が楽しみ！睡つけとこー！」

「な、なにを!?」

「こういうのは、やめていただきたい。」

と言って、3人に自身の睡を付け始め、それをウオズがマフラーで拭う。

「マンダレイ、あの人あんなんでしたっけ？」

もう少し若い頃のピクシーボブを知っている相澤は、睡を付けていく彼女の様子に困惑している。

「彼女焦ってるのよ、適齡期的なアレで。」

ピクシーボブ、現在31歳独身。30代を迎えて未だにパートナーと出会っていないことに、少し焦りを覚えてしまっている。

「適齢期といえば！」

「といえば……？」

「我が魔王から離れろ！」

歳の話がされて出久の顔を抑えようとするピクシーボブと、それを引き剥がそうとするウオズ。

「ずっと気になってたんですが！その子はどなたのお子さんですか？」

「ああ、違う。この子は、私の従妹の子供だよ。」

出久が問いかけたのは、マンダレイの横にいる少年だ。

プッシーキャッツのメンバーではない少年の存在を気にしていたが、どうやら彼はマンダレイの親戚のようだ。

「洗汰、挨拶しな。1週間一緒に過ごすんだから。」

「ああ、えつと僕……雄英高校ヒーロー科の緑谷。よろしくね……ンツ!!」

「緑谷君?!」

洗汰に挨拶しようとした出久の股間に、少年はストレートパンチを放ち、悶絶して倒れそうな出久の下に飯田が駆け付けて体を支えてやる。

「おのれ従甥！何故緑谷君の陰囊を！」

「こういう時は跳ぶんだ！我が魔王！」

洗汰のことを注意しようとする飯田と、出久の股間のダメージを和らげようと腰をトントンと叩いてやるウオズ。

「ヒーローになりたいなんていう連中と、ツルむ気なんてねえよ！」

「つるむ!? 幾つか君は！」

（ヒーローをよく思っていないのかな？ 彼は…）

口が悪いその少年に驚く飯田と、彼がヒーローに対して嫌悪感を抱いていると感づくウオズ。

「マセガキ」

「前のオメエに似てねえか？」

「似てツ…るかもな…」

轟に洗汰と前の自分自身を重ねられた爆豪だが、過去のことを反省しているからこそ、その言葉を否定はできなかった。

「この後もスケジュールが詰まってる。バスから荷物を降ろせ、部屋に荷物を運んだら食堂にて夕食。その後入浴で就寝だ。本格的なスタートは明日からだ…さあ、早くしろ。」

と、相澤からの指示で疲労も残る中、A組一同は一日目の残りの行程をこなすこととなった。

「「いただきます!!」」

というところで、夕食の時間を迎えて昼食を食えなかったメンバー達はようやくありつけた。ご飯をガツガツと自身の胃に流し込んでいく。

「美味しい!米美味しい!」

「心に染み渡る!ランチラツシュに匹敵する粒立ち!いつまでも噛んでいたい!」

その中でも切島と上鳴は感動の涙を流しながら白米を口に運んでいく。

「:!?土鍋!」

「土鍋ですか!?!」

空腹と、土鍋によって炊かれた白米の感触によって、2人はややおかしいテンションになっている。

「まあ色々世話焼くのは今日だけだし、食べれるだけ食べな。」

「「あざーす!!」」

プツシーキヤツツのメンバーは2人いるA組メンバーの食事を、次々と食堂のテーブルに運び込んでいく。だが、これらの食事は殆どA組の者達の胃の中へと運ばれていき、あつという間に食事の時間は終わってしまった。

そして、入浴の時間。

「まあまあ、飯とかはね、ぶつちやけどどうでもいいんすよ。」

隣接する男湯と女湯の間の壁の前で、峰田が何やら独り言を言っている。

「求められてんのつて、そこじゃないんすよ。その辺分かつてるんすよオイラ……求められてんのは、この壁の向こうなんすよ。」

「二人で何言ってるの？ 峰田君？」

と出久が独り言を言っている峰田に疑問を投げかけるが、彼は壁に耳を押し当てて女湯の方の会話を聞こうとしている。

「ほら〜いるんすよ。きょうび男女の入浴時間ずらさないなんて事故。そう、もうこれは事故なんすよ。」

隣の空間で女子達が入浴をしていると意識してか、男子たちは頬を赤く染めている。

「峰田君！ やめたまえ！ 君のしていることは己も女性陣も貶める！ 恥ずべき行為だ！」

「やかましいんすよ。」

風呂から上がって峰田を注意する飯田だが、その言葉は峰田には響いていないようだ。

屈託のない笑顔を見せ、頭のもぎもぎをちぎって手に取る。

「壁とは、超えるためにある！ さらに向こうへ！ P i u s U i t r a !」

そのもぎもぎを壁に付け、どんどん上に登っていく。

飯田達はその様子を下から見ることにできなかつた。

だが、峰田が壁の頂上に差し掛かろうとした時、そこから冼汰が顔を出す。

「ヒーロー以前に、人のあれこれから学びなおせ。」

彼に行く手を阻まれた峰田は、そのまま落下して行って下にいた飯田に受け止められる。

と言うより落ちてきた峰田の尻が飯田の顔にめり込み、2人がそのまま温泉に落ちていった。

「やっぱり峰田ちゃん最低ね!」

「ありがと冼汰くん!」

峰田を撃退した冼汰に、感謝の言葉を投げかける女子達。

だがそちらを振り返った冼汰は、彼女らの裸を見てしまって、悩殺されて壁から落ちてしまう。

「あ:!:?」

「危ない!」

落ちてくる冼汰の方に飛び込み、出久が何とか彼の身体をキャッチする。

「ナイスだ、我が魔王。」

「うん、冼汰君大丈夫かな?」

冼汰を抱きかかえる出久だが、冼汰は気を失ってしまったている。

「どうやら、気絶しているようだね。」

「うん、僕はマンダレイのところに洗汰君を運んでおくよ。」

そう言つて出久は一足先に浴室から出て、気絶した洗汰をマンダレイの下へと連れていく。

「さて、爆豪君。峰田君へのお仕置きは君に任せるよ。」

「お、おい！何する気だ！」

一方のウオズも、峰田の身柄を爆豪に渡すと、浴室の出口に向かう。

「私はこの件を相澤先生に報告してくるよ。ついでに、男女の入浴時間はずらすように勧めてくるよ。」

「いっそのこと、こいつはセンコーと一緒に入浴で良いんじゃないか？」

「うん、悪くないね。」

この件をしつかり先生たちに報告しようとするウオズ。

彼に対し、峰田の頭をがっしり掴んだ爆豪は、峰田だけ特別に先生達と入浴させようと進言。

ウオズは共に合宿に来ているであろうB組担任のブラドキングや、先程自主トレに付き合つてくれたプッシーキャッツの虎の風貌を思い浮かべると、笑みを零してからその意見に賛成する。

「そ、そんな！オイラの青春は！合宿に来た意味は！」

「そんなの、個性の強化に決まってるだろ。」

覗きや水着などのお色気要素を楽しみに来た峰田に対し、轟は本来の目的と言う名の正論をストリートで投げかける。その言葉でトドメを刺された峰田は、シヨックを受けて顔を真っ青にし、無慈悲にもウオズは相澤達の下に向かうのだった。

第51話 林間合宿

「個性を伸ばす…?」

合宿2日目の早朝

未だに眠そうな様子のB組生徒達だが、朝日を浴びながらブラドキングに連れ出されて体操服を着て外に出ていた。

「A組はもうやつてる!早く行くぞ!」

なお、B組が起きる1時間前にはA組は訓練を始めており、自分達も早く始めるぞとB組の担任であるブラドが進み出す。

「前期はA組が目立ってたが、後期は我々B組の番だ!良いか?A組ではなく我々だ!」
(先生…!不甲斐ない教え子ですまねえ!)

1学期はUSJや保須でヴィランとの戦闘を経験したのも、体育祭で結果を残したのもA組という形になり、多くのB組メンバーやブラド自身もA組に対抗意識を燃やしている。そんな中、結果を残しきれていないと感じる鉄哲達は申し訳ないという気持ちからか涙を流している。

「突然個性を伸ばすと言っても、20名20通りの個性があるし…何をどう伸ばすのか

「分かんないんですけど!」

「具体性が欲しいな。」

この場にいるB組生徒20名や、そこに加えてA組の21名の個性で似ているものはあれど、性質や特性は全く違う。全員で同じトレーニングをして各々の個性を伸ばすということは、不可能に近いだろう。

「筋繊維は酷使することにより壊れ、強く太くなる。個性も同じだ!使い続ければ強くなり、使わなければ衰える:即ち!やるべきことは1つ!限界突破!!」

ブラドに連れられたB組メンバーが目にしたのは、個性を酷使するための壮絶な訓練を受けるA組生徒達であった。

「うおおおおお!!ああ!!」

まず目の前に入るのは、ドラム缶風呂の中にある熱湯に手をつ突っ込んだ後に、天に向けて大爆破を放つ爆豪の姿だ。熱湯で手を暖めることで汗腺を拡大させてから爆破を放ち、どんどん爆破の規模を大きくしていくという特訓だ。

「はあ…はあ…」

その横では、轟がドラム缶風呂の中に入って氷と炎を交互に放っている。

これは炎と氷それぞれの個性に体を慣らすことで、同時使用ができることを目指していく。

他にも上鳴や瀬呂、芦戸や青山などは自身の個性を出し続けていくことで、長時間の使用に耐えうる身体作りをしていたり、砂藤、八百万、峰田らは個性を連続で使い続けて効果時間の増幅などを狙っている。

また、自身の個性を使うのにより適した体作りをするため、体の一部を多く使う特訓をする者もいる。

「もつと来い！」

さらに、切島と尾白はそれぞれ、自身の硬化した腕と尻尾をぶつけ合つての強化をしていたり、気配を消す葉隠を障子が自身の個性で索敵することで、それぞれの長所を伸ばす特訓も行われている。

「なんだ……この地獄絵図……」

「許容上限のある発動型は、上限の底上げ。異形型、その他複合型は個性に由来する部位のさらなる鍛錬。」

目の前に広がる地獄のような光景に、B組生徒の1人である鱗は魂が抜けたかのように真っ白になってしまふ。

「通常であれば、肉体の成長に合わせて行われるが……」

「まあ、時間が無いんでな。B組も早くしろ。」

相澤の指示で、B組の生徒達も特訓に加わる。

約40名の特訓をしつかりとサポートできているのは、合宿所の提供も行っている
プッシュキヤッツのお陰とも言える。

ラグドールのサーチで生徒各々の情報を把握し、ピクシーボブの土流で鍛錬のための
場所を自由自在に形成。マンダレイは個性のテレパスで多人数にアドバイスや指示を
的確に送り、増強型の個性の生徒は虎と共に筋力を上げる特訓だ。

彼ら4名の合宿への参加は、短期で多人数の生徒の持つ力を底上げするのに最適なこ
とであった。

「まだまだこんなものかい!」

さて、合宿2日目の午前中だが、私と我が魔王は殆どの時間を組み手をして過
ぎて
いた。

「まだまだ!」

『ハイ!アギト!デュアルタイムブ레이크!』

『ニードルハッジホッグ!』

ジオウ・デイケイドアーマーに変身した我が魔王がライドヘイセイバーから放つてく

る黄金の斬撃に対し、フューチャーリングセイバーの姿に変身中の私はファイヤソード・レツカからハリネズミの針を模したエネルギーを放って相殺する。

『ストームイーグル!』

そこに私は間髪入れずに剣から炎を含んだ竜巻を放ち、我が魔王を吹き飛ばす。

「一度休憩にしようか。」

私我が魔王から一本取ったところで、我々の特訓の内容について話そう。

実は私はこの合宿で2つのミッションを抱えている。

一つはオールマイトからの依頼なのだが、ワンフォーオールの中に眠る過去の継承者の個性の開放だ。

以前にオールマイトのお師匠の個性が我が魔王に発現したが、それよりも前の継承者の個性も発現する可能性がある。オールマイトからは6代目継承者の“煙”と言う男が持つ煙幕の個性と5代目継承者の“万繩大悟郎”と言う男の個性黒鞭に関する情報が提供され、合宿でどちらかを発現できるように彼から頼まれている。

「合宿はまだ数日ある。落ち着いていこう。」

「うん、無茶して体壊しちゃったら元も子もないもんね。」

今は焦るべき時ではないし、我が魔王が出せているワンフォーオールの出力自体は上がってきている。

「さて、今は夏だ。水分と塩分の補給を忘れてはいけないよ。」

「うんー!」

1度我々は変身を解除し、水と塩分チャージを口に運ぶ。

(さて、問題はもう一つのミツシヨンだ。)

この合宿での目的として、私自身の戦闘能力の強化もあるが、もう一つのミツシヨンが難関だ。

それは、グランドジオウへの覚醒だ。全てのライドウオッチも揃えてあるし、我が魔王はジオウトリニティにまで到達できている。そろそろその力を得ても良い頃だろう
:

この合宿中に、ワンフオーオールとの相乗効果でよりライダーの力を引き出し、グランドジオウを誕生させる。それが私の目標の1つだ。

「そういえば昨日の入浴後のことだけど、洗汰君の体調はどうだったのかな?」

「落下したショックで気を失ってみたいだね。それと…マンダレイから聞いたよ…洗汰君の事情のこと…」

昨日の入浴時に転落してしまったあの少年だが、我が魔王とマンダレイがしっかりと介抱してくれたようだ。それに加え、我が魔王は洗汰君がヒーローを嫌う理由をマンダレイから聞いたようだ。

「洗汰君の両親、プロヒーローだったんだって……けど、ヴィランとの戦いで命を落としてしまったみたいで……」

「両親の死がトラウマに……?」

両親が亡くなってしまっているということが、今マンダレイの下に居てこの合宿所にもいることにつながってくる。両親を失ったから、今こうして親戚のマンダレイが親代わりになっているということか。

「それもだけど洗汰君の両親が死んだ時、命を賭けて戦ったことを世間が称えたのも引かかっているのかも……」

「名誉の死、という扱いをされてはいたが、洗汰君自身からすれば悲しい出来事。世間の反応とは違い、悲しみを抱えることになっていただろうね。その違いというところも、彼がヒーローを嫌う理由につながっているのかもしれないね。」

世間が洗汰君の両親に投げかけた名誉の死という言葉、それは洗汰君の心を慰めるのには繋がらなかったのだろう……

「そう……かもね……どうすれば洗汰君、もっと笑ってくれるようになるかな……?」

自分達の近くにいる少年がずっと笑顔を見せてくれないことは、誰にとっても辛く悲しいことだ。

「だったら、君が彼にとってのヒーローになればいいさ。オールマイトの様なね……」

「そうだね…そのためにも、特訓！頑張ろう！」

「良い心構えだね。」

洗汰君の心を救えるようなヒーローになる。その目標のために再び我が魔王はフアイティングポーズを構える。それに応えて休憩を終え、再び組手を再開するのであった。

そして、特訓をしている間に夕方となり、夕飯の時間になったが…

「さあ、昨日言ったね！世話焼くのは今日だけって！」

「己で食う飯ぐらい己で作れー！」

「カレーー！」

机の上に置かれているのはニンジンやジャガイモ、玉ねぎにお肉に米等と調理前の状態の材料しかなかった。プッシーキャッツからの指示と言うのは、夕飯は生徒達で自炊しろと言うものであり、訓練後の生徒達はかなりテンションが低い。

「全員全身ブッチブチ！だからって雑な猫まんまは作っちゃだめね！」

「確かに…災害時など避難先で消耗した人達の腹と心を満たすのも救助の一環…！流石

「雄英！無駄がない！」

疲れているからと雑な食事を作ってはいけないというラグドールの言葉を、飯田は教師陣にとつて都合の良いように解釈する。どんな指示に対してもネガティブに考えないということとは、良い心がけである。

「世界一美味しいカレーを作ろう！皆！」

（飯田…便利！）

言つたことをポジティブに捉え、生徒達を鼓舞する飯田に対し、彼のお陰で指示が通りやすいと内心喜ぶ相澤であつた。

「轟くこつちにも火頂戴！」

かまどの火を燃やすのは、主に轟が担当している。

個性で火をつけることが出来るので、災害時に飯を作ったり、人を暖めることが出来る。

「皆さん！人の手を煩わせてばかりでは、火の起こし方も学ばせんわよ！」

（ええ…）

轟にばかり頼っているクラスメイト達を注意する八百万だが、ちやつかり彼女もチャツカマンを創造し、文明の利器を活かして火を付けている。

「いや、良いよ。」

「うわー！ありがとう！」

だが、轟は皆の役に立てているのが嬉しいのか、積極的に火を付けに行っている。

「燃やし尽くせ〜！」

「尽くしたらアカンよ。」

こうして共同で1つものものを作るのが初めてだからか、轟は嬉しそうに笑って他のかまどに火を付けに行く。

「私も負けてはいられないね。」

「だな！」

一方、ウオズと爆豪は彼らを横目に玉ねぎを切っていた。

ウオズは玉ねぎをくし切りに、爆豪はみじん切りにそれぞれ切っていく。

ちなみに、みじん切りの玉ねぎはルーに溶かして旨味を増させるために用意されている。

「あの〜2人共いっばい玉ねぎ切ってくれてありがたいんだけど、なんで変身してるの？」

だが、そんな2人は出久が指摘しているように、それぞれ仮面ライダーゲイツとウオズに変身中だ。

「決まっているだろう？」

「ゴーグルの代わりだ。」

玉ねぎを切る際の目への刺激を嫌がったウオズは爆豪に提案し、2人共変身して眼を守っている。

ライダーのまさかの使い方に、出久はやや困惑している。

「そういうことなら、B組のも頼んでいい?」

「任せたまえ。」

「切り尽くしたるわ!」

すっかりノリノリな爆豪とウオズは、拳藤に頼まれてB組の分の玉ねぎも切っていくのであった。

「「いただきまーす!!」」

紆余曲折を経て完成したカレーだが、訓練と料理で空腹の生徒達の口に勢いよく運ばれていく。

「店とかで出したら微妙かも知れねえけど!この状況も相まってうめー!」

「野暮だな!」

玉ねぎのみじん切りを入れたおかげで多少美味くはなっているが、お店で作られるものと比べるとは野暮なレベルだ。だがそれでも、空腹の雄英生のスプーンはかなり速いスピードで進んでいく。

「ヤオモモガッツくねー!」

元気の良い男子たちに負けないレベルで、八百万もカレーを食べ進めており、蘆戸がそのことに気付く。

「ええ、私の個性は脂質を様々な原子に変換して創造するので、沢山食べるほど沢山出せるのです。」

「うんこみてえ…」

「謝れ!」

「スイマセンツ…!」

八百万の個性の性質を、カレーを食べてる最中にも関わらず大便と擲揄してしまった瀬呂。

落ち込んだ八百万はその場にうずくまり、瀬呂には耳郎のパンチとウオズのキックが突き刺さる。

「……」

そんな中、皆が食事をとっている場所から少し離れた崖の上で、洗汰が腹の虫を鳴らしながら佇んでいた。

「お腹、空いたよね?これ食べなよ、カレー。」

「デメー!何故ここが!」

洗汰しか知らない秘密の場所に、出久がカレーを持って現れる。

「ゴメン、足跡を追って……」飯食べないのかなって?」

「いいよ、要らねえよ!言っただろ、ツルむ気はねえって……俺の秘密基地から出てけ!」
自身のテリトリーに勝手に入ってきた出久を追い出そうとする洗汰。

「秘密基地か……」

「フン!個性を伸ばすとか張り切っちゃってさ!気味悪い!そんなにひけらかしたいのかよ!力……」

洗汰の言葉にどう返すべきか悩んだ出久であったが、再び言葉を紡いでいく。

「違うよ……僕は確かに強い人、オールマイトに憧れてたけど……ヒーローを目指しているのは、自分の力をひけらかしたいからじゃないんだ。」

「だったら、何なんだよ!」

「誰かを救いたい」、それが僕がヒーローになりたい理由だよ。最初はオールマイトへの憧れだったけど、今はその気持ちが変わってる。」

オールマイトに憧れ、ウオズから仮面ライダーの歴史を教えられ、これまでの戦いを経ていくうちに「ヒーローの王」となって多くを救いたいという夢ができた。

そのためにも、出久は今日も合宿に励んでいる。

「……」

「ほら、カレー食べなよ。お腹、空いてるでしょ？」

洗汰は個性を持ってヒーローやヴィランなどと言い、殺し合いをする彼らを憎んでいた。

だが、力を振り回すことではなく、誰かを救うために強くなるうとする出久の言葉で聞き、その心が揺らぎ返す言葉が出なかった。その時、不覚にも腹の虫が鳴ってしまい、出久からカレーを勧められる。

「食ってやるからあっち行つてろ！」

「う、うん……」

一先ず、洗汰の腹を満たすことはできたということ、出久は彼の言う通りこの場から引き下がることにした。

「つたく！なんだよ、アイツ……」

そんな出久の方を見て、洗汰は大人しくカレーを食べ始めるのであった。

「ん〜というかこれ嫌、かあいくないです。」

「裏のデザイナーが設計したんでしょ？見た目はともかく、理にはなかってるでしょ。」

一方、別の場所から合宿地の森を見つめる者が何人もいた。

マスクと付けて学生服を着た男女がおり、男の方はマスタード、女の方はトガヒミコと言う名前である。

「そんなこと聞いてないです！可愛くないです！」

「はあゝい、おまたゝ」

「シゴト…シゴト…」

自身のコスチュームに不満を唱える彼女の下に、角材の様な四角い棒状の鉄を持ったオカマのマグネヤ、刑務所の拘束服に身を包んだムーンフィッシュと言う男がやつてくる。

「これで6人。」

「どうでも良いから早くやらせろお…！ワクワクが止まんねえよ！」

体の各部に火傷跡や継ぎ接ぎのある男の茶毘がこの場にいる人数を数え、フードを被りマスクを付けた男が早く戦いたいとばかりに拳の骨の音を鳴らす。

「黙ってろ、イカレ野郎共。まだだ、決行は隊長含めて10人全員揃ってからだ。チンピラを寄せ集めただけで経験は浅い。オーマシヨツカーの野望を叶えるなら、もう少し時を待ち、統率を取ってやらなければいけない…」

茶毘も自身の中に野望を秘めているが、その達成には自身が属するオーマシヨツカー

が大きくなることが1番の近道と考えており、そのためにもしつかりと今回の計画も成功させようと考えている。

「その通りだ。お前は物分かりがよくて助かるよ…茶毘。」

すると彼らの横に黒い霧が現れ、その中から死柄木弔が現れる。

「先生は言った。新たな仮面ライダーが生まれようとしている。俺達はその女を捕えて先生の下に連れていき、その力を奪う…」

『ジオウⅡ…』

死柄木はその手にアナザージオウⅡウオッチを握りながら、その計画をメンバーに話していく。

ウオズがI・アイランドで見た新たなライダーの予兆。それを感じ取ったオーマシヨツカーのボスがそのウオッチを死柄木に託し、その新たなライダーの因子を摘み取りに来たのだ。

「決行は明日。さあ、暴れようか…」

第52話 血狂いマスキュラー

合宿3日目の夜。夕飯を終えた生徒達は息抜きのレクリエーションの時間を迎えていた。

「さて、腹も膨れた！皿は洗った！お次は〜」

「肝を試す時間だー!!」

「「試すぜ!!」」

レクリエーションとして肝試しを行うということで、芦戸や上鳴、切島達はテンションが上がって場を盛り上げる。

「その前に、大変心苦しいが…補習連中はこれから俺と授業だ。」

「ウ・ソ・だ・ろー!!」

だが、芦戸達は補修のために肝試しに参加できないと告げられ、芦戸は目が飛び出てしまうのではないかと言うほどの表情で驚愕している。

「日中の訓練が思ってるより疎かになってたので、こつちを削る。」

「勘弁してくれー!!」

「肝試させてくれー!!」

ということ、芦戸ら補習組5名は相澤に布で捕縛され、そのまま宿舎に連行されていく。

「はい、ということ、脅かす側先攻はB組。A組は2人1組で3分おきに出発。ルート
の真ん中に自分の名前を書いたお札が置いてあるからそれを持って帰ること！」

「闇の饗宴」

ピクシーボブが肝試しのルールを説明し、常闇がボソツと呟く。

「脅かす側は直接接触禁止！個性を使った脅かしネタを披露してくるよ！」

「創意工夫で！より多くの人間を失禁させたクラスが勝者だ！」

「やめてください。汚い！」

謎の失禁ルールを付け加える虎に、耳郎は若干引いている。

「なるほど…競争させることでアイデアを遂行させ、その結果個性にさらなる幅が生まれるという訳か！流石雄英！」

一方の飯田は、これまたブツシーキヤッツが説明する肝試しのルールを彼らの都合の良いように解釈し、勝手に納得している。その後、くじ引きでペア決めが行われ、障子と常闇、轟と爆豪、耳郎と葉隠、ウオズと八百万、蛙吹と麗日、尾白と峰田、飯田と口田、そして青山と出久がペアとなる。

「同じペアですわね。」

「ああ、よろしく頼むよ。」

ウオズは自分にとって気になる女子である八百万とペアを組めて、内心嬉しそうにしている。

「僕達は大トリだね。よろしくね、青山君。」

「フフツ…僕の眩さで、お化けを皆撃退してあげるよ！」

「う、うん…」

自分の世界に入ってしまったて居るような様子の青山に、出久は若干引いている。

「んじゃあ、先行くぜ。」

「うん、行ってらっしゃい。」

前の方の組である爆豪は、ウオズや出久に先んじて、轟と共に森の方に向かっていく。「ですけど、私肝試しは初めてで…少し緊張しますわね。」

「ならば、私と彼に任せてくれたまえ。」

脅かしてくる者達に怯えてる八百万を和ませようと、ウオズはギーツブーストミライドウオツチをフォックスブーストドロイドに変形させる。

「かわいらしいですわね！」

ウオズの掌の上に乗るドロイドを八百万は指でツンツンと触れて笑みを浮かべる。

「肝試しの際には彼にもついてきてくれるだろう。安心してくれればいいさ。」

「はいー！」

肝試しに対する緊張も切れたウオズ達だが、あつという間に彼らが出発する番を迎えた。

「じゃあ、4組目はーウオズ君と八百万さん！」

「では、行ってくるよ。我が魔王。」

「うん！気を付けてね。」

4組目であるウオズと八百万もピクシーボブの指示で、森の中に入っていく。

「キヤアアアアアア!!」

「この声、耳郎さんと葉隠さんですわね…」

森の中に入っていったウオズ達の耳に入ってくるのは、先に森に入っていった女子達の悲鳴だ。

自分達より先に入っていった女子は耳郎と葉隠だけなので、おそらく彼女らだろうと思いつながら先へと進んでいく。

「しかしながら、やはり森の中は雰囲気があるね…」

ウオズ、八百万に加えてフォックスブーストドロイドは脅かし役を警戒しながら先へ先へと進んでいく。

「まだ姿を現していないようだね…ここから先ッ…!」

「キャツ……！」

未だ脅かし役が出てこず、少し油断してしまっていた2人の前に、地面から女性の頭部の様なものがせり上がってきて、2人は驚いて歩みを止める。

「なんだ…君はB組の…」

「ん」

地面から出てきたのは、B組生徒の小大であり、骨抜の個性で軟化した地面に潜り、やって来たA組メンバーの前にぬるっと出てきて脅かす作戦を遂行していた。

「行こう、八百万君。ここに居るのはB組のメンバー、本物のお化けではない。」

「そ、そうですわね…」

少し体を震わせながらも、八百万は先に進もうとするウオズに付いて行く。

「あ、あの…手を繋いでいただいてもよろしいですか？」

「う、うん。いいとも…」

突然来る恐怖に腰を抜かしそうになっている八百万は、体を支えてリードして欲しいということで、ウオズに自身の手を差し出す。その彼女の行動に、ウオズは胸を高鳴らせながらも了承し、差し出された彼女の手を握って先に進んでいく。

「大丈夫かい？八百万君？」

「え、ええ…」

何とかウオズに支えてもらいながらも、八百万は歩を進めていく。

「しかしながら、さつきから焦げた様な匂いがするね。肝試しとはいえ、こんなところで火を使つては困るよ…」

「そうですね…こんなこと…」

進んでいく2人の鼻に、今度は焼け焦げた様な匂いが入ってきて、誰かが脅かすために火を使っているのだらうと推察するが…

「いや、B組に火の個性を使うものはいないはず…それにこの煙…」

「回原さん！凡戸さん！」

謎の煙が漂ってきていると2人が感じたその刹那、森の方からB組の男子生徒が2人倒れこんで来る。

「有毒ガスだ！吸うな！」

『ウオズ！』

2人が倒れこんできたのはこの煙、有毒ガスが原因だと見抜いたウオズはすぐに吸わないように忠告し、自身もビヨンドライバーを腰に巻いてミライドウオツチを起動させる。

「分かりましたわ！」

その指示ですぐに八百万はガスマスクを創造し、自身の顔に付ける。

「変身！」

『投影！フューチャータイム！』

『スゴイ！ジダイ！ミライ！』

『仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

ウオズも即座に仮面ライダーウオズに変身し、ガスから自身の身を守る。

昨日変身した状態で玉ねぎの催涙成分から目や鼻を守れたのと同様に、仮面ライダーのマスクがガスから彼の呼吸器系を守っている。

「一先ず、このガスマスクを量産してルート内の者に付けていこう。」

「そうですね！」

何が原因で森が燃え、有毒ガスも出ているのかは分からないが、ウオズと八百万はコース内にいる生徒達の救助を最優先に動き出すのであった。

「何、この焦げ臭い匂い…！」

そして、山が燃えていることによつて漂ってくる焦げた匂いは肝試しのスタート地点で待機しているプツシーキャッツや出久達の下にも届いてくる。

「あれは…」

「黒煙ツ…!」

「何か燃えているのか!」

「まさか山火事!」

その様子から、生徒達は山が燃えていることを瞬時に察する。

「な、何?!」

「ピクシーボブ!」

すると、今度はピクシーボブの身体が突然宙に浮いて吸い寄せられるように森の方に飛んで行ってしまふ。

「飼いネコちゃんは邪魔ねえ!」

「な、なんで…万全を期したはずじゃ…」

ピクシーボブが飛ばされた方向にいたのは、たらこ唇で大きな鉄の角材の様なものを持ったヴィランであり、その足元には頭から血を流しているピクシーボブが倒れている。

「なんでヴィランがいるんだよ!」

「ピクシーボブ!」

「やばい…」

そのヴィラン、マグネの下に駆け出そうとした出久をマンダレイと虎が止めるが、出久の脳裏に一つの心配事が過ぎる。

「洗汰君ッ……！」

この場で彼の秘密基地を知っているのは自分だけかもしれない、そんな状況で洗汰がヴィランと遭遇していたら……

そう考えた出久は、なりふり構わず彼のいる秘密基地に駆け出していた。

「緑谷君ッ……！」

「僕は……洗汰君を助けに行きますー！」

『ジオウ！』

『カブト！』

出久はジオウライドウォッチとカブトライドウォッチ、ジクウドライバーを取り出して走る。

「変身！」

『ライダータイム！仮面ライダージオウ！』

『アーマータイム！』

『Change Beetle！』

『カブト！』

仮面ライダージオウ・カブトアーマーに変身した出久は、即座に洗汰の下にクロックアップで超加速しながら向かうのであった。

「見晴らしの良いところを探してきてみれば…どうも資料になかった顔だ…」

その出久の行動は正しいと言えるだろう。

ピクシーボブらへの襲撃、山火事と毒ガスの発生、それと時を同じくして洗汰は巨体とマスクのヴィランと遭遇していた。

「なあ、ところでセンスの良い帽子だな…子供。俺のこのダセーマスクと交換してくれよ。新参は納期がどうかって、こんなん付けられてんの。」

マスクを外したそのヴィランが怯える洗汰にせまり、彼が逃げ出すのを追おうとした時だった。

「スマーツシュー！」

クロックアップで加速したジオウが、ヴィランの眼前まで迫り、ワンフォーオールを込めたパンチを顔面部に繰り出す。

「もう大丈夫…僕が来た！」

洗汰とマスクュラーの間に入るジオウ。その後ろで、洗汰は腰を抜かしてしまっている。

「パパ…ママ…」

「お前は…血狂いマスキュラー!」

冼汰と出久は、目の前にいるヴィランの顔に見覚えがあった。

一度ニュースで見たことのある顔、そう、冼汰の両親であるプロヒーローウオウターホースが殉職した事件のニュースで報道された犯人の顔であった。

「リストで見た面だな…仮面ライダージオウ!」

(恐らく、他にもヴィランが来ている…ここは僕一人で抑えて、早く皆を…助けに行かないと!)

「冼汰くんッ…必ず助けるから!」

他にも来ているであろうヴィランの存在もあり、ここをまずは一人で攻略して冼汰を助け出し、マンダレイ達の下に戻らないといけないと判断した出久は、クロックアツプの加速と、ワンフオーオールによる身体能力強化を活かして一瞬でマスキュラーの懐に潜り込んで蹴りを撃ち込む。

「流石、ヒーロー志望者って感じだな。どこにでも現れて正義面しやがる。」

血狂いマスキュラー、個性筋肉増強。

自らの筋繊維を増幅させて筋力を高めたり体に纏わせることが出来る。

増幅させた筋繊維を自身の腹部に纏わせ、ジオウのパンチを防いだマスキュラーは右腕に筋繊維を纏わせ、ジオウに殴りかかる。

「たっぷりいたぶってやるぜ！」

一発目のパンチを受けて後ろに下がるジオウを追撃しようと、さらに拳を繰り出そうとするが、咄嗟にジオウはクロックアップを発動して攻撃を回避する。

「スマーツシュ！」

敵の視界から逃れ、再度自身が出せる最大火力のパンチをマスキュラーに打ち込むが

：

「速さは良いが…パワーが足りねえ！」

それはまた、マスキュラーが自身の身に纏わせた筋繊維で防がれる。

「作戦ツ…変更だ！」

『ジオウ！Ⅱ！』

『ライダータイム！』

『仮面ライダー！ライダー！ジオウ・ジオウ・ジオウ！Ⅱ！』

ジクウドライダーに装填されたライドウォッチを入れ替え、ジオウⅡへと変身すると、浮遊の個性を活かして宙に浮く。

（空中で立ち回れたら、あのヴィラン相手にも優位を取れる。流石、俊典の弟子だ。）

（ありがとうございます。って！なんであなたが！）

浮遊を活かしてまずはマスキュラーの攻撃が出されにくい空中に退避したジオウに、

志村菜奈の精神体が話しかける。

（あのウオズって子との特訓やこれまでの訓練で君はワンフォーオールの出力を100%以上出せるようになってきた。それがどうやら、私達継承者の意思にまで作用してきたみたいね。）

（なるほど…）

（とりあえず話は後！まずはあの子を助けるよ！）

（はい！）

突如、歴代継承者の精神体と対話できるようになったことに驚きつつも、それについて考えようとする出久。だが、志村はまずは目の前のマスキュラーを倒して少年を救出することを優先すべきと話す。

「そんなところに逃げやがって！いたぶれねえじゃねえか！」

空中に退避したジオウⅡに、さらなる攻撃を加えれず不満気なマスキュラー。

「すぐにそつちに行くから待ってろ！マスキュラー！」

ジオウⅡは浮遊を解除してマスキュラーに向けて降下しながら、ジカンギレードとサイキョーギレードを構える。

「来やがったな！」

そんなジオウⅡに筋繊維を纏わせた右腕でパンチを撃ち出そうとするマスキュラー

であったが、出久は再び浮遊を発動して空中で静止。降下を止めた状態でサイキョーギレードのフェイス部分を弄る。

『ライダー斬り!』

サイキョーギレードの刀身から放たれたピンク色の光の斬撃が、マスキュラーに放たれる。

その光の刃はマスキュラーが纏う筋繊維が切り裂かれ、その身に達したのか血が噴き出す。

(止まるタイミング!最高だ!)

志村の精神は、出久が行った攻勢を絶賛。その一方で攻撃を受けたマスキュラーは破れたタンクトップを脱ぎ捨てて、傷を筋繊維で防ぐ。

「そんな戦い方するなら!まずはガキから殺してやる!!」

自分の手が届かない範囲である宙に浮いているジオウIIに業を煮やしたマスキュラーは、手始めに冴汰を狙って駆け出し、拳を振り下ろそうと動く。

「冴汰君ツ……!」

その動きを見て、出久は咄嗟に浮遊を解除。地に足を付けてワンフォーオールで身体能力を強化、その状態で走ってマスキュラーと冴汰の間に入ると、マスキュラーが振り下ろした拳を両手で受け止める。

「そこを退け！先にガキを殺してやる！」

「退かない！」

「だったらコイツで……！テメエを押しつぶす!!」

右腕でジオウを押しつぶそうとするマスキュラーだが、その攻撃を出久はワンフォーオールを全身に張り巡らせて耐える。

だがそこでさらに押しつぶしてやろうとマスキュラーは左目の義眼を取る。これは、洗汰の両親であるウォーター・ターホースを殺めた際に負った傷を隠すための義眼でもあり、自身の力をセーブするための物でもある。

「……ッ！」

義眼を取ったことでリミッターが解除され、マスキュラーを覆う筋繊維がどんどん増えていく。

「それでもッ……！負けない！退かない！僕はヒーローだから……洗汰君を！助ける！」

「……なんで、なんでそんなに体を張れるんだよ！……なんでそこまで、命を賭けられるんだよ！」

自分の命を捨ててまで、人を救おうとするヒーローの姿。

だがそれを、洗汰は理解できなかつた。自身の命を犠牲にしてしまう悲しさ、それを両親の死で理解していた。両親や出久が命を賭けてまで人を救う理由、それが理解でき

なかつた。

「見たいから！君の笑顔が見たいから助けたいんだ！けど、大丈夫！君の笑顔を見るために、僕も絶対、勝って生きるから!!」

自分も命を落とさず、洗汰を助けてヴィランに勝つ。

そんな出久の覚悟に洗汰が心を動かされるとともに、不思議なことが出久の身に起こった。

彼の身体から突然煙幕が発生、マスキュラーも何が起きたかわからず、一度身を退かせる。

「これって……」

(生き抜きながら人を救う覚悟、しつかり受け止めたぜ。)

その時、出久の右肩付近にクールな外見の男の精神体が現れて、語りかけていた。

(そいつは煙、私の先代だ。)

(よろしく頼むよ。俺の個性は煙幕、自分の周りに紫色の煙幕を発生させることが出来るんだ。出しすぎないように、上手に使ってくれ。)

(はい……よろしくお願ひします!!)

ワンフォーオール6代目継承者である煙との対話ができるようになり、彼の個性も発現した出久。

まずは、3つの個性とジオウの力を活かしてマスキュラーを倒すことに…

「こんな力！隠し持ってたのか！」

煙を掻き分け、大量の筋繊維を纏わせた腕を振るおうとするマスキュラー。

『ジオウサイキョー！』

それに対し、ジオウは手に持ったサイキョーギレードのフェイス部分を“ジオウサイキョー”に切り替える。

『霸王斬り！』

そこから時計の文字盤を模した七色の斬撃を飛ばし、マスキュラーが纏う筋繊維を次々と切り裂く。

「冼汰君！」

マスキュラーが血を流して怯む隙に、ジオウが冼汰に手を差し出すと、その手を冼汰が握る。

「ガキが！」

再度筋繊維を纏わせたマスキュラーが殴りかかろうとしたところで、ジオウが冼汰を抱きかかえ、煙幕をマスキュラーに浴びせる。敵の視界を奪った間に浮遊で冼汰と共に宙に浮上。

「もう大丈夫だよ。」

そして、マスクュラーの背後に着地すると洗汰を降ろし、ジオウはベルトを操作する。
『ライダーフィニッシュタイム!』

そして、腕にピンクと金の光を纏わせて、マスクュラーに向けて駆けだす。

「来やがったか!」

それに気付いたマスクュラーもジオウの方を向き、拳を放とうとする。

『トウワイズタイムブ레이크!』

『デトロイト…スマーツシュ!!』

ワンフオーオールのエネルギーとジオウIIの力を込めた拳と、大量の筋繊維を纏うマスクュラーの右腕の拳がぶつかり合う。

「なんだこの…パワー!!」

ジオウIIの腕に纏わりつく光がさらに増大し、エネルギーを増していく。

そのパワーにマスクュラーが押されていき、筋繊維が次々と千切れていく。

（このまま押し切れ!）

「イケー! ヒーロー!」

志村菜奈と煙、そして洗汰の声援を背に受けたジオウがマスクュラーを押し切り、筋繊維を一気に破壊。

空いた敵の胸部にジオウIIのライダーパンチが撃ち込まれる。

「バカなッ……！」

そして、吹き飛ばされたマスキュラーが崖の壁面に叩き付けられ、気を失う。

「戻ろう、洗汰君……マンダレイの下に戻ろう。」

「うん！」

そして、敵を倒すことが確認できた2人はマンダレイの所へ戻ることにした。

洗汰は出久の指示で彼の背に乗り、2人は一度宿舎の方に向かうのであった。

第53話 森の大混戦

「ごつちだ！退避しながら皆にガスマスクを！」

「ええ！」

仮面ライダーウオズと八百万は、肝試しのコースを進みながら、B組生徒にガスマスクを配布したり、倒れている生徒にガスマスクを付けたりしていた。

「泡瀬君も、上手く配布できていたら良いんだけどね。」

毒ガスと山火事と言う事態において、ウオズが一番に恐れているのはガスなどによる学生の健康被害だ。

原因となるウイルス退治よりも先に、ガスマスクによる生徒達の保護に向けて動いていたが、肝試しコースの中盤にいた彼らはコースを進みながらその途中でマスクを配布することにし、途中合流した泡瀬にはコースを逆方向に進んでガスマスクを配ってもらうことにしていた。

「耳郎君…葉隠君…」

その道中で、倒れている葉隠と耳郎を見つけて立ち止まる2人。

「待っていてください、後で必ず病院に運びますわ。」

ここに居る全員を宿舎まで運ぶのは不可能故に、今はクラスメイトの2人であってもガスマスクを付けてガスから守ることに徹する。

「もうすぐコースの中腹部だ。そこにい行けばラグドールと合流できるかもしれないからね。急ごう。」

「そうですね…」

彼らは間もなくコースの中心部に差し掛かろうとしていたが、そこではプツシーキヤッツのラグドールが待機しているはずだ。合流できたら他の人の位置も分かると思い、そこに向けて急いでいたが…

「おっと、あれは…」

「ネホヒヤン！」

彼らが進もうとする先に工具を腕に付けた脳無が現れる。

「早々に対処しないとね。」

『ギーツ！』

目の前に脳無が現れたということで、ウオズはギーツマグナムミライドウオッチを手に取り起動させる。

『投影！フューチャータイム！』

『マグナム！』

『フューチャーリングギーツ！マグナム！』

ウオズはフューチャーリングギーツへと姿を変えると、両腕のマグナムアームドシューターから弾丸を連射して脳無を撃ち抜こうと試みる。

「喰らいたまえ！」

両腕から放たれたエネルギー弾が脳無の関節部や筋肉を撃ち抜いて動きを止めようと試みるが、その脳無はウオズが思っているよりも脆かった。

「再生しない…？」

ウオズにハチの巣にされた脳無だが、これまで戦ってきた脳無の様に再生するわけもなく、ドロドロに溶けていく。

「あっさりすぎますわね…」

「この後復活するとかじゃないだろうね…」

溶けてすぐに果てた脳無。

これは死柄杓が持ってきた個体を、オーマシヨツカーに加入したトウワイズが個性で複製したものだ。

耐久性に関してはあまり高くなく、特にウオズの遠距離攻撃に対して本物であれば耐えれたところを耐え切れずあっせりと撃破されてしまったのだ。

「背後に気を付けつつ、先に進むとしよう。」

足止めとしてはあまり役目を果たせなかったが、彼らに警戒心を植え付け、歩みを遅くさせることはできた。

「先生！」

「緑谷！」

一方、別の場所では洗汰を背負ったジオウウⅡと相澤が合流を果たしていた。

「すみません！先生の許可なく、ヴィランと戦闘してしまいました…けど、この子を」
「言いたいことは分かった。」

相澤と合流できたことで、出久はふと冷静になり、少年を守るためとはいえ無許可で個性を使ってしまったことを話した。保須での一件の際、プロヒーローからの許可なくステインに挑んだ飯田が警察から注意を受けた話を聞いていたので、自分も同じことをしてしまったと相澤に謝罪していた。

「その子は俺が保護する。そして、お前はマンダレイの下に行け。」

「分かりました。」

「そこで、マンダレイにこう伝える…」

相澤からの言伝を預かった出久は、洗汰を彼に託して肝試しのスタート地点に向かう。

「なんだこのツ……ヴィランは！」

そのスタート地点では、マンダレイと虎がマグネ相手に戦闘を繰り広げていたが、そこに来た新手に手こずっていた。

「あら、弔ちゃんの援軍、流石だわ！」

マグネの援護に現れたのは、仮面ライダーオーズの姿を模したアナザーオーズだ。

彼の振り回す爪がマンダレイ達を襲う。

「このままじゃ……！」

バツタを模した足で跳ね回るアナザーオーズの攻勢に惑わされ、今にも切られそうになつてしまうマンダレイ。

『ライダー斬り！』

マンダレイに飛びつこうとするアナザーオーズだが、空中で突如ピンク色の斬撃が飛んできて切り裂かれ爆散する。

「緑谷君！」

アナザーオーズを撃ち落としたのは、サイキョーギレードを構えるジオウⅡであった。

(変身者がいない……どういふことだ?)

アナザーオーズにも、以前戦ったアナザークウガやアナザージオウの様に変身者がいると思っていたが、アナザーオーズが倒された場所には変身者もアナザーウオッチも転がっていないかった。

「マンダレイ！ 洗汰君！ 無事です！ それと、相澤先生からの伝言です！ テレパスで伝えて！」

アナザーオーズに関することは一度置いておき、まずは相澤から預かった伝言を伝えることにした。

「A組B組総員！ プロヒーロー、イレイザーヘッドの名の下に戦闘を許可する！」

出久の言葉に頷き、マンダレイはテレパスを使って生徒一同に戦闘許可を出す。

「新手が来てるぞ……気を付けろ。」

「やだ、アタシを助けに来てくれたのかしら？」

ジオウも森の中に入っていつて他のクラスメイトの援護に向かおうとしていたが、今度はアナザーウィザードとアナザー鎧武が森の中から現れ、マグネの援護に加わる。

それに対し、虎とマンダレイは身構え、ジオウもまずは目の前にいる2体のアナザーライダーの対処に動くことになった。

(かっちゃんとうオズ君も居るんだ！ きつと大丈夫！)

まずは目の前にいるアナザーライダーの撃破に動くことになった出久。

他の場所のことは信頼の置ける仲間である爆豪やウオズに託すことにし、彼らの勝利を信じつつアナザー鎧武と刃を交える。

「助かったぜ、半分野郎！」

一方、仮面ライダーゲイツに変身した爆豪も轟と共にヴィランと交戦していた。

対峙するヴィランの名はムーンフィッシュ。その個性は歯刃と言うもので、自身の歯を自由自在に伸縮、分岐させて刃物の様に使って相手を切り裂くというものだ。

ムーンフィッシュがゲイツに向けて放つ歯の刃を、轟が生成した氷の壁が防ぐ。

「爆豪！ 新手だ！」

「なんだ！」

新たに飛びついてくるヴィランに対して、爆豪がパンチを放ちつつその身を退けさせる。

「テメエは……」

ムーンフィッシュと共にやって来たヴィラン、基い怪人の正体は仮面ライダービルド

に似た姿をしているアナザービルド。

「コイツでいくか…」

『デイエンド！』

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『デイエンド！デイエンド！デイエンドー！』

爆豪はゲイツ・デイエンドアーマーに姿を変えると飛んでくる歯刃や、殴りかかってくるアナザービルドの攻撃を後方に退きながら避けていく。

「爆豪ー」

さらに、ムーンフィッシュ、アナザービルドの2人とゲイツの間に氷の壁を作ると、その間にゲイツはライドウォッチを1つデイエンドライドウォッチに装填する。

『カメンライドタイム！ク・ク・ク・クローズ！』

そして、仮面ライダークローズを召喚すると、それをアナザービルドに向かわせる。「まずはテメエからだ！」

新手のアナザービルドの対処をクローズに任せ、爆豪と轟は再びムーンフィッシュと相対する。

「爆豪、爆破は撃つなよ…」

「分かってらあー！」

彼らのいる森の中は毒ガスが充満しているため、爆破や炎を放てば甚大な被害を齎すことは彼らは重々承知していた。

「だったら、こいつ使ってみるか。」

そこでゲイツが取り出したのはジカンザックス。

本来、仮面ライダーゲイツのメイン武器として備わっている斧型の武装であるが、個性を使つての戦闘が主流であつた爆豪はこれまで使つてこなかった。

「くたばれ!!」

自分に向けて伸びてくるムーンフィッシュの歯刃を、ジカンザックスの刃部分で砕くように切る。

『スマッシュヒット!』

一方クローズの方もビートクローザーから斬撃を放ち、アナザービルドに対処している。

クローズとゲイツが各々の得物で相手に対処している中、突如木が幾つも折れていく音が彼らの耳に入っていく。

「爆豪!轟!早く光を!」

木を薙ぎ倒す音と共に障子の声が2人に届く。そしてに爆豪と轟、それにムーン

フィッシュが目を向けると、そこにいたのは巨大な闇の様な怪物であった。

「常闇!?!」

それは常闇のダークシャドウが狂暴化した姿であるとすぐに分かった。

その闇の中心部には苦しむ常闇の姿があり、暴走するダークシャドウはアナザービルドとムーンフィッシュを殴り飛ばす。

「やべえだろ…!」

ダークシャドウがムーンフィッシュの歯刃を折ると、その体を掴んで地面に引きずり、気に叩き付ける。

「…!?!」

さらにダークシャドウはアナザービルドの身体を掴んで地面に叩き付け、もう一度敵の身体を握ると森の方に放り投げる。

「アバレタリンゾー!」

暴走するダークシャドウの攻撃の矛先は、ゲイツと轟に向くが、ゲイツは手から起こす爆発の光を、轟は炎による明かりをダークシャドウに照らし、力を抑制させる。

「テメエと俺の相性が残念だぜ…!」

「スマン、助かった。」

ダークシャドウの暴走が治まり、解放された常闇が爆豪に礼と詫びを言う。

「障子、何があったんだ？」

「先程、あのヴィランに遭遇した際に俺が傷を負ってしまい、それで常闇の抑え込んでいたダークシャドウの暴走のトリガーとなってしまうた。」

「暗闇の中でのダークシャドウの制御…未だ訓練が必要なようだ。」

常闇の個性であるダークシャドウは闇が増すほどに強く、獯猛になる。

昼間よりも夜の方がダークシャドウは強くなるが、常闇の感情に何か揺らぎがあればダークシャドウの暴走を引き起こしてしまう。

「障子…皆…悪かった。俺の心が未熟だった。怒りに任せ、ダークシャドウを解き放つてしまった…闇の深さ、そして俺の怒りが影響され、奴の暴走に拍車をかけた。結果、収容も出来ぬほどに増長し、障子を傷つけてしまった…」

「そういうのは後だ、とお前なら言うだろうな。」

今回の暴走の件に関して謝罪する常闇を、障子は許す。

「だな、話は後だ。また来やがったぜ…」

ゲイツ達の前に現れたのは、先程投げ飛ばされたアナザービルドと新たにやって来たアナザーエグゼイド。

「毒ガスも晴れたみてえだ。全力でいくぞ！」

周囲に漂う毒ガスが無くなった。

これは別の場所でB組の鉄哲と拳藤が毒ガスを発生したヴィランのマスタードを撃破してくれたからであり、これでゲイツは爆破を、轟は炎を扱えるようになり、全力で戦える2人はアナザライダー達と相対する。

「ラグドール！ラグドールは!?」

ラグドールがいるはずの肝試しコースの中間地点に辿り着いたウオズと八百万であつたが、その場所にいるはずのラグドールの姿が見当たらない。

「ウオズさん……これ……」

そこで八百万が見つけたのはラグドールのコスチュームのヘルメット部分で、それは誰かの血が付いてしまつている。

「まさかラグドールが……いや、考えたくはないね。」

ラグドールが殺されたという最悪の事態を想定しそうになるが、ウオズは首を横に振つてまだ助けられるはずだと気合を入れなおす。

「おや?もう一人のターゲットもこの場に現れてくれるとは、ラッキーだね。」

と、彼らの前に白い仮面を顔に付け、トレンチコートを着た男が現れる。

その男の手の中には、ビー玉の様なものがある。

「ほう、悪いけどそう簡単にはやらせないよ。それにラグドールも返していただく。」

もう一人のターゲットと言う言葉に、ウオズは瞬時に自分が狙われてると悟りジカンデスピアを構える。

平成仮面ライダーの歴史を知る存在である自分自身を、アナザーライダーも使役しているオーマシヨツカーが狙うことは十分あり得る。そう考えたウオズは目の前のヴィランを撃破しつつ、ラグドールが捕縛されている可能性があるなら奪還しようと試みる。

「Mr. コンプレス、そいつは俺がやる。」

「だったら任せるよ、死柄木。」

「死柄木……?」

コンプレスの横に現れた怪人が死柄木と呼ばれていることに、ウオズは驚きを隠せない。い。

(まさか死柄木弔がアナザージオウⅡになってるとはね……)

この場にアナザージオウⅡがいることもウオズにとつては由々しき事態であるが、その正体が恐らくUSJ襲撃の主犯である死柄木であることに、ウオズはより警戒を強めている。

「八百万君、走って逃げろ!」

『シノビ！』

「で、でも！」

「良いから！彼と共に我が魔王を呼んできてくれ……こいつはかなりの強敵だ！」

シノビウオツチを起動しながら、フォックスブーストドロイドを八百万に託し、彼女に逃げるように言う。

「女の子から逃がしてあげるなんて、随分漢気あるね〜」

「悪いけど今は、褒めてもらう余裕もないよ。」

『投影！フューチャータイム！』

『誰じゃ？俺じゃ？忍者！』

『フューチャーリングシノビ！シノビ！』

死柄木からの皮肉を受けつつ、ウオズはフューチャーリングシノビに姿を変え、ジカ
ンデスピアをカマモードにしてから飛び掛かってアナザージオウIIに切りかかる。

「おっと、俺と戦う前にまずはこいつらを倒すんだな。」

ウオズが振るう刃を、加速してきたアナザーカブトが空中で受け止める。

「……ッ！」

更に今度はアナザーキバがバツシャーマグナムでウオズを撃ち落とす、ウオズは地面に着地しながらアナザージオウII達の方を見る。

（アナザーライダーの数が増える…）

アナザージオウⅡはアナザーライダー達を召喚する能力があり、アナザーカブトとアナザーキバに続いて、アナザー響鬼とアナザー電王が召喚され、合計5人のアナザーライダーをウオズは相手することになる。

「だったら数で勝てばいい…分身の術！」

ウオズは仮面ライダーシノビから継承した忍法の力で数十体に分身し、数で優位に立ちとうとするが…

「来い！アナザークウガ！」

さらに追加で召喚されたアナザークウガの巨大な腕が、ウオズの分身たちを薙ぎ払う。

「退くなー！進めー！」

次々と分身を生み出し、アナザーライダー達に攻勢を仕掛けていくウオズ。

だが、アナザージオウⅡらによって次々と分身が撃破されていってしまう。

「中々、厳しい戦いになりそうだね…」

分身を出しても次々と倒されていってしまう状態で、忍術を使うウオズの体力もギリギリと削られていく。

生み出された分身たちは、多彩な属性の忍法をアナザーライダー達に繰り出していく

が、巨体を誇るアナザークウガのパワーや、アナザーキバが操るアームズモンスターの攻勢、アナザー電王が操る4本の短刀によって次々と撃破されていく。

特に、アナザージオウⅡに触れられた分身は、アナザージオウⅡの変身者である死柄木の個性によって崩壊していく。

(このままでは私の体力が削られ、いずれ倒されてしまう。その前にも何とか八百万君、援軍を……)

援軍を待ちつつ思索し、アナザーライダーへの対処を試みているウオズだが、ある一つの違和感を感じていた。

(先程の仮面の男がいない……?)

分身を増やしてアナザーライダー達に繰り出していくウオズであったが、自身の目に映る敵の中に先程の仮面の男がいなかった。

「まさか……!」

次々とウオズの分身がやられていく中、また分身を生み出してアナザーライダー達に向かわせ、自分自身は先程逃がした八百万を追おうとしていた。

彼の視界にいたはずのMr.コンプレスが、八百万も標的に加えていて、出久達の所へ行くのを阻止しようと気空いたウオズはまずはコンプレスを止めに行こうとした。

「遅いよ。気付くのが……」

だが、ウオズの前に新たに召喚されたアナザーファイズが現れて、彼の身が蹴り飛ばされる。

「お前には特別に教えてやるよ……！」

ウオズが地面を転がるのと時を同じくして、分身たちもアナザークウガやアナザー電王らによって撃破されていって全滅し、アナザージオウⅡが彼に歩み寄る。

「どういふことだい……？」

「俺達の狙いは別にお前じゃない。狙ってたのは、あの女だ……」

アナザージオウⅡが指差す先は、先程八百万が走っていった方向だ。

「八百万君を!?!」

「ああ……お前がわざわざアイツと離れるような作戦で、俺達に挑みかかってきてくれて助かったよ。」

オーマシヨツカーが初めから標的としていたのは八百万であり、ウオズが八百万を自分から離してアナザライダー達と戦闘を行ったのは失策であった。

「何故彼女を狙う!?!」

「どうせ……でお前は死ぬんだ……だから、特別に教えてやるよ!」

地面に倒れ伏すウオズの身体を、アナザージオウⅡが踏みつける。

「先生が言っていたよ、八百万は新たなライダーになる可能性を秘めていると……だから

らここで、その力を奪うのさ！」

そのまま息の根を止めようと、ウオズの身体に触れて彼の肉体を崩壊させるが…

「忍法、変わり身の術。」

彼が崩壊させたのは、ウオズの身代わりであった。

フューチャーリングシノビだからこそ使える忍術で、死柄木に触れられる直前に離脱することに成功した。

「良いことを聞かせてもらったよ。君は詰めが甘いな…」

「コノ野郎！」

「悪いけど、ここで失礼させてもらうよ。」

再びウオズを仕留めようと動くアナザライダー達に対し、ウオズはフューチャーリングシノビの誇るスピードを活かして一気に森を駆けていく。

「君はさすがに速いね、けど！」

森の中を走っていくウオズは多くのアナザライダー達を振り切る。だが、クロックアップを使えるアナザーカーブトが彼に追いついてくる。

「メガトン忍法！」

そのアナザーカーブトに向けて巨大な紫色の竜巻を生成すると、その突風の中に敵を閉じ込めてウオズは再び駆ける。

「さあ、見つけた！」

アナザーカブトの足止めに成功したウオズが見つけたのは、八百万が走っていった方向に走っていくMr. コンプレスの姿であった。

「ゲ！追いついてきた！死柄木は何やってんだ！」

「ウツド忍法！」

そのコンプレスに向けて忍術で“木”の元素から錬成した植物のツタを伸ばし、その身を拘束する。

「さあ、ここで大人しくしておくんだね。」

「しまった…けど、本当のマジシャンは、ここでもう一つトリックを使うんだぜ。」

ウオズがコンプレスを取り押さえられたと思ったその刹那、コンプレスの身体がドロドロに溶けて消えていく。

（溶けた!? さっきの脳無と同じか…何故だ…?）

「見つけたぜ、ウオズ！」

Mr. コンプレスが先程撃破した脳無の様に溶けて消えた原因を考えるウオズだが、その体に強い衝撃が走る。

ウオズに追いついてきたアナザークウガが彼の身に突撃し、その衝撃でウオズは大きく吹き飛ばされる。

「悪いけどそいつは、トウワイズが作り出した偽物だ。」

「トウワイズ……？君たちの仲間かな？」

「ああ、そいつは便利な奴だ。どんなモンでも分身を作れるんだ。物でも人間でも、脳無でもな！」

この時ウオズは、自分達を襲い、八百万を狙う彼らがしつかりと計画を持って攻めてきたことをその脳で理解した。アナザーライダーを召喚でき、圧倒的な戦力となるアナザージオウⅡ。森を燃やした者と毒ガスを発生させた者。仮面の男コンプレスに他の者をコピーできるヴィラン、そして本物の工具付き脳無。

林間合宿を襲撃するには、十分なメンツであると言えるだろう。

「ミッシェンはクリアだ。集合地点に行くぞ。」

そして、死柄木は通信機を通じてこの場にいるヴィラン達に撤退の指示を出す。

自分達の目標が達成されたため、もうこれ以上この場にいる意味はないということだ。

「逃がさない！八百万君を返してもらおうよ！」

ミッシェンをクリアした、それ即ち先程死柄木が言っていた八百万の誘拐が達成されたということだ。

なんとしても取り戻し、ここでヴィランを確保しなければいけないと感じたウオズが

アナザージオウⅡに突撃していくが、それをアナザークウガが阻む。

「悪いな。壁はいつばいいいるからね。頑張れよ〜ヒーロー候補生!」

「ッ……!」

死柄木の挑発を受け、何としてでも彼らを追おうとするウオズだが、その眼前にはアナザークウガ達、召喚された敵の戦力が次々と立ちはだかる。

(何とか突破せねば……!)

目の前に立ちはだかるアナザークウガ達を、ウオズは突破しようと試みる。

『霸王斬り!』

『G3!ギワギワシュート!』

その時、青いエネルギー弾と金色の斬撃がアナザークウガに襲い掛かり、それらが直撃したアナザークウガの身が爆散する。

「我が魔王!爆豪君!それに皆!」

「大丈夫?ウオズ君?」

「コイツが案内してくれたぜ。」

ウオズが背後の方を見ると、そこにはジオウやゲイツ、轟、常闇、障子がいた。

爆豪の右掌の上には、ウオズのフォックスブーストロイドがおり、捕えられた八百万に変わって彼が爆豪や出久達を呼んでくれたのだ。

「助かるよ。皆…ありがとう。」

「ううん、ヒーローとして当然のことだよ。」

「流石だよ、我が魔王。それと、今回の襲撃、かなりの大事になりそうだ。彼らは八百万君と、恐らくラグドールを捕えている。逃げる前に奪還しないと…」

出久達に感謝しつつ、ウオズが今の状況を出久達に説明する。

「八百万さんとラグドールが!？」

「ああ、だからまずは彼らを突破して敵を追おう。」

「ああ！逃げられる前に取り返すぞ！」

爆豪の号令と共にこの場に集まった者達が、アナザージオウⅡらが逃走を図った方向に向けて走り出すのであった。

第54話 合宿の終わり

「なあ、なんでアイツらポニーテールの奴を狙ってやがったんだ？」

「どうやら、彼女も我々の様に仮面ライダーの力に目覚めようとしているからだそう
だ。」

アナザージオウIIを追おうと森を走るライダー達であるが、その目の前にアナザーアギトが立ちちはだかる。

「あのライダーって…」

「アナザーアギトだろうか？姿は似ているが全くの別物だ。気にせず倒せばいいさ。」

嘗て仮面ライダーアギト達と戦った1人の仮面ライダーであるアナザーアギトと、そのアギトのアナザーライダーであるアナザーアギト。彼らはよく似た姿をしており、前にアギトの歴史を見たことのある出久は、アナザーアギトの姿に若干動揺している。

「コイツでいくか！」

『デイケイド！』

ここで爆豪は、デイケイドライドウォッチを取り出して、デイエンドライドウォッチと入れ替える。

『アーマータイム!』

『カメンライド!』

『ディケイド!ディケイド!ディケイド!』

爆豪は仮面ライダーゲイツ・ディケイドアーマーに姿を変えると、ライドハイセイバーを自身の右手に持つ。

『G3!』

『ヘイ!アギト!』

するとゲイツはライドハイセイバーにG3ライドウォッチを装填すると、剣についている時計の針を回す。

『スクランブルタイムブレイク!』

ゲイツがライドハイセイバーを振ると、金、青、緑の3本の光の刃がアナザーアギトに向けて放たれる。

「見事だね。」

「かつちゃんも、ライダーの力使いこなせるようになってきたね!」

「当たり前だ!」

ライドハイセイバーの一撃を受けたアナザーアギトの身体が爆散し、再びジオウ達は走り出す。

「おっと、次が来たね。」

続いて彼らの前に現れたのは、アナザー龍騎とアナザーファイズ。

「龍騎の方は私と爆豪君で対処しよう。我が魔王はアナザーファイズを……」

「分かった!」

ウオズの指示を受けると、ジオウⅡはジカンギレードとサイキョーギレードの二刀流でアナザーファイズに切りかかる。

『ファイナルフォームタイム!リユ・リユ・リユ・リユウキ!』

一方、アナザー龍騎と相對するゲイツの方は、ファイナルフォームタイムを使ってデイケイドアーマー・龍騎フォームへと姿を変える。

「爆豪君。ライドヘイセイバーを私に貸してくれ、その方が戦いやすい。」

「ああ、しつかり手伝えよ!」

「当然さ。」

アナザージオウⅡが召喚したアナザーライダーは、同じライダーの力がなくとも撃破することはできる。

だが、多数のアナザーライダーがいる状況で、瞬時に戦いやすいウオッチを見定めるのは手間がかかる。

先程の様に一気に多数のアナザーライダーが襲い掛かって来たときは、ウオズも分身

を増やすことでしか対処しきれなかった。

それ故に各ライダーの力を多く持ち、汎用性が高いライドハイセイバーをうまく活用し、目の前にいるアナザーライダーに対処することにした。

「はあッ！」

アナザー龍騎の剣と、ウオズのライドハイセイバーが刃を交えると、ウオズがアナザー龍騎の腹部に前蹴りを放って敵の体制を崩す。

『へい！龍騎！』

『デュアルタイムブ레이크！』

そして炎を纏ったその剣でアナザー龍騎を切りつけると同時に、その後ろでゲイツはデイクイドライドウォッチのボタンを押す。

『ファイナルアタックタイムブ레이크！』

両手の爆破を地面に放ってゲイツが飛び上がり、その状態で背後の龍のエフェクトが口から放つ炎に乗ってアナザー龍騎に蹴りを放つ。

「見事だ。」

ゲイツのライダーキックを受けたアナザー龍騎が爆散、それと時を同じくして…

「2人ともやるね！」

ジオウⅡも2本の剣をうまく使い、アナザーファイズを切り倒す。

（おっと、起き上がって来たぞ！）

だが、アナザーファイズが体勢を立て直してジオウⅡに殴りかかろうとしていることに志村菜奈の精神体が気付く。

（分かりました！）

敵の攻撃を教えてもらったジオウは浮遊を使って空中に退避。

『ライダーフィニッシュタイム！』

そこでベルトを1回転させると、右足を突き出すように構える。

『トウワイズタイムブ레이크！』

そして、ピンクと金の光を纏ったジオウは、アナザーファイズに向けて降下するようにライダーキックを放つ。

「お見事。」

ジオウⅡの必殺のライダーキックがアナザーファイズを撃破し、3人はさらに先へと向かう。

「アイツら速いな…」

どんどん進んでいく出久達の様子を轟、常闇、障子らはただ眼で追うだけとなってしまった。

「今はまず、倒れている生徒の救助を優先しよう。」

「ああ、ダークシャドウ。もう大丈夫か？」

「モンドイナイ！」

それに、道には毒ガスで倒れてしまったB組生徒の姿が幾つもあり、障子は複製腕で、常闇はダークシャドウで彼らを抱えて救助していく。

轟は左手から炎を出し続けて、道とダークシャドウを照らしている。轟の火の光がダークシャドウを照らし、闇による暴走を止めている。

「おーい！轟君！」

そんな彼らに、麗日と蛙吹が合流してくる。

「麗日か、無事だったか？」

「ヴィランに遭遇したけど何とか…それよりデク君達は？」

「アイツらは今ヴィランを追っている。八百万が攫われちゃった…」

「ケロ？八百万ちゃんか？」

八百万がヴィランに攫われたと言うことは救助に入る前に、ウオズ達から聞かされている。

だが、アナザーライダーが多く出てくる戦い故にその追跡はライダー達でやることになり、轟達は救助活動をしながら彼らを待つことになっていた。

「緑谷達を取り戻してくれることに賭けるしかねえ…」

雄英高校とオーマシヨツカーの戦いの行く末は出久達3人の仮面ライダーに託された。

「なるほど、我が魔王達もすでに5体ほど倒していたんだね。」

「うん、けどこの怪人まだまだいるよね。」

「ああ、多いよ。ほら、ちょうど出てきたよ。」

アナザーライダーの数に関して考えていた出久達の前に、アナザーブレイド、アナザー響鬼、アナザーカブトが現れる。

「致し方ない。ジオウトリニティでいこう！」

「うん！」

『ジオウトリニティ！』

次々現れる強力な敵、それらに対応するために三位一体となって戦うことにした。

『ジオウ！』

『ゲイツ！』

『ウオズ！』

ジオウがジクウドライバーにジオウトリニティライドウォッチを装填し、ダイヤルを回していく。

『トリニティタイム！』

『三つの力！仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウオズ！』

『トリニティ！トリニティ！』

ジオウ、ゲイツ、ウオズの3人のライダーが1つの戦士に合体し、仮面ライダージオウ・トリニティとなる。

「さあ、いこう！」

「ん？なんか合体したね。」

ジオウトリニティ内にある意識空間の“クロックオブザラウンド”では、本来出久、ウオズ、爆豪の3人が集うのだが、今は出久の隣に志村菜奈と煙もいる。

「誰だ!？」

初めて見る2人の姿にウオズと爆豪は困惑し、爆豪は警戒を強めている。

「2人共大丈夫だよ。この人達はワンフォーオール of 歴代継承者の志村菜奈さんと煙さん。」

出久がウオズ達に歴代継承者を紹介し、ウオズは少し警戒を緩める。

「何故彼らがここに?？」

「僕のワンフォーオール of 力が強くなってきたから、僕自身この人達と話せるようになったんだ。けど、まさかここにまで来るなんてね…」

「ヨロシク〜」

志村達の精神体と話せるようになっただけでなく、ジオウトリニティ変身時には仲間たちともクロックオブザラウンド内で話せれるようになったことで出久も少し驚いている。なお、話ができるようになった煙らは少しお気楽なのか、ピースしてウオズ達に挨拶している。

「まあ、とにかく今は目の前の敵を倒そう。そして…」

「八百万を助けるぞ！」

一先ず挨拶を済ませ、ウオズと爆豪は気持ちを切り替えて戦いへと挑む。

目の前にいる3人のアナザーライダーが攻撃を仕掛けてくると、まずは志村の浮遊で宙へと逃げるとともに、煙の煙幕をアナザーライダー達に浴びせる。

「これでも！喰らいやがれ!!」

そして、爆破の中に居るであろうアナザーライダー達に向けて、空中から大量の爆破を浴びせていく。

「視界を奪って、上方向から爆撃…良い戦法だね。」

浮遊、煙幕、爆破の3つの個性をうまく使うジオウ・トリニティの動きに煙は思わず絶賛の声を上げる。

「個性のコントロールは任せたよ。」

「うん！ワンフォーオール！フルカウル！」

普段からジオウ・トリニティの身体の主導権はウオズが握っており、出久と爆豪は個性のコントロールを担っている。

それ故に、ワンフォーオールが発動を出久がしてくれている間に、ウオズが戦闘に集中できる。

「ハアッ！」

煙幕が晴れ、爆撃を受けて少し怯んだアナザー響鬼にワンフォーオールの力を加えた蹴りを喰らわせる。

頭部をサッカーボールの様に蹴られたアナザー響鬼が地面に倒れていき、カブトが対応しようとしてクロックアップを発動。

「さあ、もう一度！」

地面に着地したジオウが地面を蹴り、飛び上がりながら浮遊を発動。

さらに地上で加速しているアナザーカブトに煙幕を浴びせる。

「クロックアップを使えるアナザーカブトが一番厄介だ。早く仕留めてしまおう。」

まずは超加速をしてくるアナザーカブトが厄介だと感じたウオズはライドハイセイバーを構える。

『ウイザード！』

『ハイ！ダブル！』

『スクランブルタイムブレイク!!』

そして、浮遊を使って宙に浮くジオウは、ウイザードライドウオッチを装填したライドハイセイバーから炎を纏う竜巻を地上に放つ。

「ビンゴだ。彼を狙え!」

「任せやがれ!」

その竜巻が3体のアナザーライダーを巻き上げ、宙に浮いたアナザーカブトに狙いを定めると、爆豪の大爆破を解き放つ。

『フィニッシュタイム!』

『ヘイ! 仮面ライダーズ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ! ヘイ! セイ!』

そして、爆破を受けて空中を舞うように吹き飛ばされるアナザーカブトを見据えてライドハイセイバーにディケイドライドウオッチを装填する。

「どんな武器だよ…」

なお、ライドハイセイバーの待機音に志村は少し困惑している。

『ディケイドディケイド!』

そして、20枚のカード型エネルギーを纏った刃で、アナザーカブトを切り裂き、撃破する。

「残り2体も一気に仕留めよう！」

出久の指示と共にジオウ・トリニティがジカンギレードとサイキョーギレードの、2本の刃を構える。

「まずは君か……」

地上に降り立ったジオウに、アナザーブレイドが縦方向に大剣を振るう。

それを、ワンフオーオール の身体能力強化によつて強化したスピードを活かして回避。

「剣には銃で対抗だ。」

避けながらジカンギレードを銃モードに変形させ、その銃口をアナザーブレイドに向ける。

そこから放たれた弾丸がアナザーブレイドの胸部装甲を襲い、火花を散らす。

「2体同時にいくよー！」

そこに近づいてきたアナザー響鬼の腹部に前蹴りを放つて退けさせ、2本の剣で同時に縦に切ると、2体のアナザーライダーを仕留めるためにジカンギレードとサイキョーギレードを合体させて、サイキョージカンギレードにする。

(ワンフオーオール！フルカウル！)

ジオウは自身の全身にワンフオーオールのエネルギーを張り巡らせて、体の筋力を強

化。

そして、剣を横に構えると地面に足を踏み込み、勢いよく横薙ぎに剣を振るう。その剣先はアナザー響鬼の腹部を切り裂き、アナザーブレイドまで進んでいく。

「流石に、この剣を折るのは難しいみたいだね。」

「だつたら俺に任せろ！」

アナザーブレイドが自身の大剣でサイキョージカングレードによる攻撃を防ぐが、ジオウ・トリニティは手榴弾型の籠手が付いている右手をアナザーブレイドに向ける。

「クソ野郎がア!!」

その右腕から放たれる大爆破がアナザーブレイドを吹き飛ばし、体制を崩させると、ジオウは浮遊の個性で宙に浮きながらサイキョージカングレードを操作。

『サイキョーフィニッシュタイム!』

サイキョージカングレードから、「ジオウサイキョウ」と書かれた光の刃が伸びる。

『キングギリギリストラッシュ!』

その剣をジオウは自身の左上から、右下の方向に向けて振るうとその光の刃がアナザーブレイドに達してそれを切り裂き、さらに間髪入れずにもう一度剣を振り上げ、右上から左下に向けて剣を振るうとその光の刃はアナザーブレイドの近くにいたアナザー響鬼を切り裂いた。

「なんとか、倒せたね。」

「まだ新手が来る。気を付けろ……!」

キングギリギリスラッシュを受けた2体のアナザライダーが爆散し、死柄木らを再び追跡しようと試みる出久達だが、更なる敵が来ていると煙が忠告する。

「あれは……」

その敵とは腕が数本生えているだけでなく、その内二本には工具のようなものが付いている脳無である。

先程ウオズはこの脳無の分身と交戦していたが、その際は銃撃であっさり撃退していた。

「どうする? ウオズ君。」

「空中から仕留めるのが一番だね。」

その脳無が遠距離への攻撃手段を持っていないことはウオズは既に把握しており、浮遊で宙に浮いたまま遠距離攻撃を仕掛けていくのが得策と判断し、ジカンギレードジウモードをその手に構える。

『ファイズ! スレスレシューティング!』

その銃口から放たれた円錐状の赤い光が、脳無の右肩を撃ち抜くと、その付近から生えるいくつかの腕と、工具が付いた右腕が地に落ちる。

「再生させんじゃねえ！」

『ヘイ！ウイザード！デュアルタイムブ레이크！』

その傷口がすぐに再生しようとしているのを見た爆豪が、ウオズにライドハイセイバーを使うように指示。

その意図を理解したウオズはウイザードの力で赤い魔方陣を生成し、剣を振るうと共に放たれる斬撃を赤い魔方陣にくぐらせる。すると、その斬撃は炎を纏って脳無まで進んでいくと、右肩の再生しようとしている傷口を焼いてしまう。

「再生する相手に対して、炎で傷口を焼いて再生を阻害したか。考えたね〜」

「以前お世話になったヒーローの受け売りですが。」

保須での脳無との戦闘で、ウオズ達の職場体験先のヒーローであった仮面ライダーデイクイドこと門矢士は、再生する脳無の傷口を焼いて再生を阻害するということをしただけでなく、そのことを後日ウオズ達に話していた。

そのメソッドを使ったウオズに、志村が賛辞を贈る。

「早く倒してしまわないとね。」

「任せてくれ。我が魔王。」

『爆裂・DE・ランス！』

早く目の前の敵を仕留めておきたいと考え、ジカンドスピアを振るいつつその刃先か

ら放たれる赤い光刃で脳無を心臓部を刺し貫く。

『ゲイツ！』

そして、ジカンザックスをゆみモードにすると、その射出口であるザックスペネトレーターを傷口に差し込む。その状態でライドウオッチスロットにゲイツライドウオッチを装填すると、爆豪の汗の成分をジカンザックスが吸収していく。

「くたばれ！」

『ゲイツ！ギワギワシユート！』

ジオウがジカンザックスのバーストスリンガーを引いて、中のエネルギーを解き放つと、爆破を伴ったエネルギー弾が脳無の体内に射出される。脳無の体内にある臓器が爆破に巻き込まれ、胴体部に大穴が開いてしまう。爆破で肉が焼かれて再生しなくなった脳無はそのまま地面に倒れ伏す。

「コイツぐらいだったらもう苦戦することはねえな！」

「だが、油断はできないよ。この先も強力な敵は多い。先へ進もう……」

ここから先にいるであろう敵に警戒しつつ、ジオウは敵を追う。

「死柄木……追手が来たぜ。」

しばらくジオウが走っていくと、そこには撤退のために集合していたオーマシヨツカーの襲撃実行犯達がいた。森を焼いていた茶毘や、仲間を増やしてウオズ達を惑わせ

たトウワイズ、それに加えてトガヒミコらがこの場にいる。

「任せろ。こいつらに俺の真価を見せてやる！」

迫り来るジオウ・トリニティに立ちはだかるようにアナザージオウⅡが立つ。

「アイツらは…」

その周囲にはこれまでの戦闘で倒されてしまった者を含め、18体のアナザーライダーが陣取っている。

「ああ、まずいことになったね…」

アナザージオウⅡはアナザーライダーを召喚するだけでなく、時間を改変する力を持つている。

その力でジオウ達に倒されたアナザーライダー達を、「倒されなかった」と時間を改変させて復活させている。

一度倒されたアナザーライダーも含めた18体が、ジオウ・トリニティを取り囲む。

「どうする？2人共？」

「劣勢だ。だが、八百万君を救うためにはここで退くわけにはいかない…」

「当たり前だ！まだまだ戦うぞ！」

敵の手の中には八百万が捕えられてしまっており、ここで諦めて逃げれば彼女を見捨てることになってしまう。

彼女を救い出すために、彼らは全員退く気はない。周囲のアナザーライダーを倒してしまおうとサイキョージカンギレードを構えるが…

「…ッ!？」

加速したアナザーカブトとアナザードライブの突撃を受け、一瞬でジオウの身体が吹き飛ばされる。

「宙に逃げろ!」

さらに他のアナザーライダー達が遠距離攻撃を浴びせようとしてきて、志村が浮遊を使って空中に退避するように指示。浮遊したジオウは爆破を手から放ってその推進力で宙を飛びながら姿勢を制御する。

「来やがった!」

だが、そこにアナザーフォーゼが追従してきて、そこから爆撃しながら撃ち落とそうと試みるが…

「上だ!」

そこに飛んできたアナザークウガが巨大な腕を振るい、ジオウを地面に叩き落とす。

「…!」

そこを追撃するように多数のアナザーライダーが襲い掛かってきて、反撃の隙も与えられずに次々と彼らの攻撃がジオウに放たれていく。

「クッ……！」

怯んでしまつて体制を立て直そうとするも、その時間すらも与えられずに体にダメージを溜めていつてしまう。

「多勢に無勢かッ……！」

アナザーライダー達の攻勢を受けてジオウは死柄木らに近づくことすらできず、地面に膝をつく。

「吊ちゃん！戻ったわよー！」

その現場にマグネが現れて、戦いの様子を見るオーマシヨツカーの面子と合流する。

「他の奴らはどうした？」

「多分やられたんじゃないかね？いい奴らだったよ。待つてやる？いいや、置いてけー！」

ヴィランがこの場に集合したものの、最初は10人いたのにマスキュラー、ムーンフィツシュ、毒ガスを発生させていたマスタードが雄英生徒によつて撃破されてしまい、この場には7人のヴィランしかいない。

「じゃあそろそろ、撤退するか……黒霧！」

「かしこまりました。」

トウワイスらの言葉を受け、死柄木はやるべきことを終えたことでこの場から去るところにした。

「「待て！」」

だが、それを逃がすまいと立ち上がるジオウ・トリニティ。サイキョージカンギレドを構えてアナザージオウⅡに向けて走っていく。

「ワンフォーオール！フルカウル！」

ジオウに切りかかるアナザーブレイドとアナザー電王の攻撃を避けようと身体能力を強化するジオウ・トリニティ。

だが大勢のアナザーライダーが次々と攻撃を仕掛けてきて、ダメージを体に蓄積してしまおう。

「敵が多い……！」

剣を振るうジオウはアナザーライダーの軍勢を中々突破できない。

「俺達の勝ちだ……！」

そして、ジオウがアナザークウガに殴り飛ばされ、地面を転がる。

それを見た死柄木はワープゲートを潜ろうとする。

「ま、待て！」

去ろうとする死柄木らに、手を伸ばすがそれは届かない。

「最後に見せてやれ、こいつの姿を」

「ええ……」

死柄木の指示でコンプレスはビー玉の様なものを一つ取り出すと、自身の個性を解除して八百万を出現させる。

「う、ウオズさん……」

「八百万君！」

コンプレスに捕まり、見せつけられるように現わされた八百万。

ジオウを囲むアナザーライダー達が、死柄木の撤退によつて消えたことでジオウは一気に彼女らの下へと走れた。

「助けて……」

だが、八百万とヴィラン達は黒霧のワープゲートに飲まれて姿を消し、ジオウの手は彼女に届かなかつた。

「うわあああああああ!!」

林間合宿へのオーマシヨツカーの襲撃は、オーマシヨツカー側の勝利と言える結果になつてしまった。

彼らは目的であつた八百万とラグドールの誘拐を成功させた。その悔しさから、ウオズは叫ぶ。

（ウオズ君……）

ジオウトリニティは変身を解除し、出久、ウオズ、爆豪の3人に分かれるが、各々が

悔しい表情を浮かべている。

(おい、少年…それって…)

そんな中、志村の精神体があるデバイスが地面に落ちていることに気が付いた。

「これって…」

出久がそのデバイスを拾うと、そこには座標の様なものが示されていた。

「もしかして、ポニテの奴…」

そのデバイスは八百万の個性によって作られたもので、GPSによって彼女の現在地が分かるようになっていた。

ヒーローと生徒合わせて行方不明者2名、ガスによる意識不明の重体15名、重軽傷者10名という絶望的な結果で幕を閉じた雄英高校の林間合宿。

だが、八百万が残した自身の座標は、ヒーロー達にとって一筋の希望の光となるのであつた…

神野編

第55話 果たすべきミッション

雄英高校の林間合宿は3日目の夜にオーマシヨッカーの襲撃を受け、中止となつてしまった。

この件は連日ニュースで報道され、職場体験先でCM出演をしていて密かに人気を得ていた八百万が誘拐されたということもあり、かなりの数の批判が雄英に集まつていた。

一方引き上げた生徒達はセントラル病院に、怪我を負ったクラスメイトの見舞いに來ていた。

「ん…皆…」

毒ガスによつて意識不明の重体になつてしまつた耳郎と葉隠の病室。

そこにはほとんどのA組メンバーが集まつており、ちやうど目を覚ました耳郎の目に彼らの姿が映つた。

「耳郎！ やつと起きたか！ 心配したんだぜ〜」

耳郎が目を覚ましたことに、上鳴は安心と喜びからか、思わず駆け寄つて彼女の手を

握る。

「か、上鳴……？何があったの？」

「合宿でヴィランの襲撃を受けた。そいつらの毒ガスでお前含めて十数名が意識不明の重体、他にも怪我人多数だ。」

「それに……八百万が……誘拐されちゃった……」

「ヤオモモが!？」

目を覚まして早々に轟と上鳴が告げた合宿での出来事に、耳郎は驚いてその身を勢いよく起こす。

「すまない……私が守り切れなかった……」

「ウオズ君は悪くないよ……オーマシヨツカーが一枚上手だった……」

自分を責めるウオズを、出久が慰める。

オーマシヨツカーは強力なアナザージオウⅡに加えて、コンプレスやトウワイス等と言った特殊な個性を扱うヴィランを揃えたことで襲撃に成功し、八百万の誘拐を果たしたのだ。

「私は、皆の笑顔を守るヒーローに憧れた……そして、今はそれを目指している。だが、敵を倒すことに集中し、彼女のことを見落としていた……私が、救えなかったんだ……」

前世から憧れた仮面ライダーになっていこうとするウオズ。人を救い敵を倒す彼ら

だが、今回は救うことが出来なかった。その悔しさと自責の念から自身の拳を強く握る。

「じゃあ、今度は助けよう。」

そんなウオズに切島がかけた言葉に、場にいる生徒達に衝撃が走る。

「緑谷、お前八百万の位置情報を発信する装置、オールマイトに渡してただろ？」

「う、うん…」

「そこに載ってた位置！まだ覚えてるだろ!？」

「うん、覚えてるよ…」

八百万が攫われる直前にウオズ達に託したデバイス。それは八百万自身の位置情報がGPS経由で分かるものであり、それを一時的に持っていた出久は彼女の位置情報がしばらくあった場所を覚えている。

「つまり…緑谷君が覚えているその場所に行く…」

「だとしたら？」

「これはプロに任せろべき案件だ！俺達が出ていい舞台じゃないんだ！馬鹿者！」

「んなこと分かってんだ！何もできなかった！仲間がピンチなのに俺は！」

保須でステインと戦闘し、その際マニユアルからの戦闘許可を得ていなかったことで警察から注意を受けた飯田。彼はその際にマニユアルらに迷惑をかけてしまったこと

を重々承知していた。それに対して切島は、出久達がアナザーライダーやヴィランと戦闘している時に、補講で施設内に居てもできないことに後悔をしていた。

「ここで動けなきや俺は！ヒーローでも男でもなくなつちまうんだよ！」

「切島、ここ病院だぞ！落ち着けよ。こだわりは良いけど今回は……」

「飯田ちゃんが正しいわ……」

感情的になつてしまふ切島を、上鳴と蛙吹が宥める。

「ここは法規を守ろうとする飯田が正しいと主張し、切島を止めようとする。」

「飯田が……皆が正しいよ……そんなことは分かつてる！でも緑谷！手は届くんだよ！助けに行けるんだよ！」

仲間を助きたい。自分のその想いを出久に語り掛けながら、切島は自身の手を差し出す。

八百万を救うには出久が持っている情報が必要であり、切島にとってはまずは彼の援軍が必要であった。

（彼、なかなか熱いよね。）

（どうするんだ？9代目。）

切島の話聞きながら、志村と煙の精神体が出久に語り掛ける。

「実はあのデバイスの位置情報受信機能、こつちでも使えるようにした！僕だって助け

に行きたい気持ちは一緒だよ！」

目の前で八百万を攫われてしまった悔しき。それを勿論ウオズだけでなく出久も抱いており、密かに助けに行けるように彼女が作ったデバイス機能を自身のファイズフォンXでも使えるようにしていた。

「ふっ！ふざけるのも大概にしたまえ!!」

「待て、落ち着け、切島たちの気持ちもよく分かる。俺だって悔しい。だが、これは感情で動いて良い話じゃない」

感情的になる飯田と切島の間に入り、障子が2人の気持ちを収めようとする。この2人に冷静さを保たせようと中立的に話を進める。

「オールマイトに任せようよ…：戦闘許可、もう解除されてるし」

「青山の言う通りだ…」

彼らは既に戦闘許可が無い状態であり、勝手に戦ってしまえば法律によって裁かれることになるだろう。

「皆、仲間を失ってショックなのよ。でも、冷静になりましょう。どれ程正当な感情であろうと、ルールを破る戦闘を行うと言うのなら…：その行為はヴィランのそれと同じなのよ。」

その事実を突き付ける蛙吹の言葉に、この場が静寂に包まれる。

「なるほどな。話は大体分かった。」

と、彼らの病室に一人の男が入ってくる。

「門矢士!?!」

その男とは、ウオズと爆豪の職場体験先のプロヒーローでもあり、出久も含めた3人のライダーと期末試験で戦った仮面ライダーディケイドこと門矢士である。

「確かに、法律上これがない奴は許可なく戦うことが出来ない。それで合ってるな?」

「ああ…」

門矢士は訪れた世界で何かの役割を自分に与えられ、この世界ではプロヒーローである。それ故にプロヒーローの免許も、彼の持ち物の1つになっている。それをウオズに見せながら、この世界の法律をウオズに確認する。

「だが、だからと言って立ち止まるのはヒーローとして、いいや、仮面ライダーとして正しいか? ウオズ?」

「いいや、正しくないさ。困っている人や敵に捕まった人を…それが友人だろうとそうでなからうと、見捨てたことのある仮面ライダーなんて、私は一人たりとも知らないさ!」

前世でウオズが見てきた数々の仮面ライダー。

彼らの中でこういう事態になって大人しく見てるだけになる者はいない。それはウオズや、士がよく分かっていることだ。

「勝己、お前はどうかだ？」

「俺も見捨てる気なんてさらさらねえ！」

爆豪もウオズ達と気持ちは同じであった。オーマシヨッカーに敗北したまま終わる気はない。

「で、出久。お前はどうかする？」

「僕は助けに行きます！」

士は3人の仮面ライダーの気持ちを聞き出すと、口角を上げて頷く。

「だがしかし！彼らは戦闘許可が出ていない身分だ！」

「だったら、俺が出せばいい。」

「…!？」

士はヒーローの免許を持っており、アマチュアである出久達に戦闘許可を出すことが出来る。

それ故に、飯田達の中にあつた法規上の問題と言うのはクリアできてしまう。

「けど、ここはオールマイト達に従った方が…」

それでも勝手に動くべきではないと、主張する青山。

「今回の相手はオーマシヨツカーだ。オールマイトやエンデヴァー、他のプロヒーローが勝てる相手か分からない。」

「つまり、我々仮面ライダーの力が必要と言うことだね。」

アナザーライダー達の力は強力だ。特に彼らを召喚、使役するアナザージオウIIの攻略となるとプロヒーローやディケイドだけではできるとは限らない。

それに加えて更なる敵戦力がある恐れもあり、ジオウ達の手も借りておきたいと言ったところだろう。

「僕行きます！僕にしかできないことがあるなら戦います！」

「私も…必ず八百万君を助ける！」

「俺も乗るぜ！」

そして、出久達3人は改めて門矢士に付いて行くことを表明した。

「俺も行く！俺も八百万を助けてえ！」

「ああ、俺もだ。」

そこに切島と轟も乗ってくる。

「ああ、覚悟があるならついてこい。何か力になるかもしれないな。」

その2人の申し出も、士は受け入れる。

「だったら俺も行かせてくれ！ここに居る皆を代表して、俺は緑谷君達が無茶をせず無

事に帰って来れるようにしなくてははいけない……！」

「監視者って感じだな？」

「ああ、ウオッチマン！ウオッチマン飯田だ！」

飯田もクラスを代表して彼らを監視するために付いて行きたいと、名乗り出る。
あくまで委員長として仲間達が無茶をしないように見張る役割だ。

「ああ、着いてこい。ミッションは今夜だ。」

門矢士が来たことにより、我々は八百万君を助けに行く戦いに挑むことになった。

彼が戦闘許可を出してくれることで、私達は合法的に戦える。

「準備はできてるか？」

「ああ、問題ない。」

八百万君が残してくれた情報により、彼女は神野という土地にあるアジトに捕らえられていることが分かった。

「全員分の新幹線のチケットだ。」

我々のいる地域から神野まで行くのには、新幹線が早いということで我々7人は新幹

線のチケットを購入した。今から10分ほど後の列車で向かう予定だ。
「すっかり暗くなっちゃったな。」

既に時刻は夜になり、空は暗くなっている。

夜襲と言うことで、ちょうどオーマシヨッカー達に林間合宿の仕返しをする形になる。

(八百万君…無事でいてくれ…)

既にあれから2日が経っている。オーマシヨッカーによって八百万君の身に危害が加えられていないか心配しながら、今日までの日々を過ごしていた。勿論、ブツシーキヤツツのラグドールのことも心配だ。

「ウオズ君。少しいいかな?」

「どうしたんだい? 飯田君?」

そんなことをふとホームで考えていると、飯田君が私に声をかけてきてくれた。

「今回、僕が一番心配しているのは君なんだ。」

「私かい?」

「ああ、君は今回の件を一番重く受け止めている。だから、無茶をしまわなにか心配なんだ。」

「どうやら飯田君は私が無理して敵に突っ込んでいき、大惨事にならないか心配してい

る様だ。

「先程病院で、私の憧れるヒーローの話をしたね。皆の笑顔を守るって話を…」

「そうだね。」

「その話には続きがある。」

私の知る仮面ライダーは、悪を打ち倒し人々の笑顔を守る。

ただ、それだけではない。

「戦いを終えた後、自分自身も仲間や家族と笑顔で過ごす。それも私の憧れる姿だ…」

TVで見てきた仮面ライダーで言えば、日常パートと言えるものだろう。

それは仮面ライダー自身が生きることと彩られるものであり、仲間に見せる笑顔と言うのもヒーローにとって大事な部分だ。人を救えた喜び、平和を守れた喜び、日常を過ごせる喜び、それらを噛みしめて生きると言うのが私が目指すヒーロー像であり、憧れた仮面ライダー像だ。

「だからこそ、必ず生きて戻るよ。八百万君や我が魔王、それに君とも笑顔で過ごすためにね。」

「その言葉を聞いて安心したよ。」

ちょうどその時、新幹線が駅のホームに入ってきて、私達はそれに乗り込む。

（さて、この事態を切り抜けるのなら、後は君の覚醒が必要だ。我が魔王…）

アナザージオウIIと戦うことに関して、デイケイドも居るのである程度敵を追い詰めることはできるだろうが、大量にアナザーライダーを召喚してくる。そろそろ私としては、あの力の覚醒に期待させてほしいとこだね。そう、多勢に挑むには多勢で攻めるのが最適だからね。

「このライダーの歴史は面白いな！仮面ライダーゴーストか〜」

「俺はこの仮面ライダービルドを推す。中々に面白い歴史を辿っているな。」

一方、出久の中にある意識空間では志村と煙が過去のライダーの歴史を見ていた。

ジオウ・トリニティの意識空間であるクロックオブザラウンドと同じような時計型の円卓を囲みながら、出久の中に宿っている平成ライダーの歴史を鑑賞している。

「あの〜ここってどういう空間何ですか？」

その空間に出久の意識もやってくる。椅子に座って少し寛ぎながら仮面ライダー鑑賞を楽しんでいる2人の歴代継承者に若干困惑している。

「ここは君とワンフォーオールを意識空間のような場所だね。ここには君の中にあるいろんな歴史が詰まっている：ワンフォーオールの歴史も、彼ら仮面ライダーの歴史も。」

林間合宿でジオウ・トリニティに変身して以来、出久の中に常時クロックオブザラウ
ンドの空間が残っており、そこには今対話できる歴代継承者2名が常にいる状態になっ
てしまった。

「ところで、さっきのウオズ君の話、興味深かったね…」

「ウオズ君の？」

「うん、笑顔で仲間や家族の下に帰るって話。私は彼の考えが正しいと思うんだ。」

仮面ライダーの歴史を見つつ、志村は先程ウオズが飯田に語ったことに感心している
ようだった。

「私は家族をヴィランから遠ざけるために、家族の下に帰らなかった。けど、それが一つ
の悲劇を生んでしまった…」

「というの？」

「死柄木弔、あれは私の孫、志村転狐なんだ…」

「え…?」

志村の口から告げられた事実には、出久は驚きを隠せずにいた。

「君がこの個性を受け継いだ時、私はそこまでにオールマイトやグラントリノが調べた
ことの記憶を知った。私はある日夫をヴィランに殺され、息子の狐太郎を他の家に預け
たけど、私はその後死んでしまった。死柄木は、転狐はその狐太郎の息子なんだ。」

「その人がなんで、ヴィランに…」

「詳しいことは分からない。けど、分かっているのは狐太郎とその家族が死んで、転狐がオールフォーワンに拾われたってことだけだ。多分、私が狐太郎から離れたから…」

そうなってしまったのには、自分にも責任があると志村は肩を落とす。

「だから、君に聞きたい。私の分も彼と戦えるかい？」

「はい！勝って助けます！」

詳しい事情は分からない。だが、出久はより死柄杓との戦いに意欲を示していた。

志村の思いを汲み取り、彼を倒して闇から救い出そうと決意した。

「すまない、私の分も頼んだよ。」

「はー！」

出久達を乗せた新幹線は神奈川県にある

神野に到着し、土率いる一行は八百万が捕らわれているアジトに向けて歩き始めた。た。

「我が魔王、位置情報はこの辺かい？」

「うん、もうすぐ着くよ。」

八百万に託されたデバイスが享受していたように、ファイズフォンXでも八百万のGPSの位置が分かるようになっていた。その情報を頼りに彼らは八百万が捕えられている場所に向かっていった。

「いかにもアジトって感じだな…」

そして、切島らの前に位置情報が指し示す建物が現れた。

その建物はかなり大きい工場であると推察でき、オーマシヨツカーが何かを作っていると言われても頷けるような見た目をしている。

「さあ、乗り込むか。」

「い、いきなりですか？」

「ああ、ここにいるのかまはずは確かめる。」

ここについてしまえば後は中に入り、敵を倒しつつ八百万を救出する。

門矢士は仮面ライダーディケイドの圧倒的な戦力を以って、行動を開始しようとしていた。

「ちよつと待ってください！あれって…」

だが、そんな士を出久が止める。

「なんだ？」

「あそこにいるのって……オールマイト!？」

「あれって、合宿所にいた……」

「警察も来ている様だが……まさか!」

出久が士たちを止めたのは、その場にオールマイトやプツシーキャッツの虎を始めとした、多くのプロヒーロー達や、警察の姿があつたからだ。

「ベストジーニストにマウントレディまでいるってことは……」

「恐らく、我々とは別に動き出しているんだろうね。プロヒーロー達が。」

その場にいるヒーロー達の様子から、プロヒーロー達による八百万の救出及び、オーマシヨツカーのアジトへの襲撃が始まると出久達は予感した。

「さあ皆! オーマシヨツカーとここで蹴りを付け、八百万少女を助け出し、死柄木らを捕えるぞ!」

オールマイトの号令と共に、プロヒーローによるオーマシヨツカーのアジトへの突撃が開始されたのであつた。

第56話 突入開始

「さあ皆！オーマシヨツカーとここで蹴りを付け、八百万少女を助け出し、死柄木らを捕えるぞ！」

オールマイトの一声と共に、オーマシヨツカーのアジトに向けて、プロヒーロー達が突撃していく。

オールマイト、ベストジーニスト、ギャングオルカ、虎、マウントレディ、シンリンカムイ、グラントリノらがアジトに突入していき、エンデヴァー、エッジシヨツトラが入り口付近での防衛を行っている。

「突破口は、私に任せて！」

その先陣を切るのはマウントレディで、個性によつて身体を約20mほどに巨大化させると、アジトと思われる建物の入り口を蹴り上げる。

「な、なんか来やがった！」

入り口が蹴られて扉と壁が天井ごと抉り取られると、そこには丁度林間合宿を襲撃したトウワイスらヴィラン達が出た。

「先制必縛ウルシ鎖牢！」

奇襲を受け動揺するヴィラン達を、シンリンカムイの腕から伸びた多数の枝が縛る。

「囚られたか…」

「これ、きついので放してください。」

いきなりの奇襲に対応しきれなかった茶毘とトガヒミコも縛られてしまい、トガは不満そうに身を振って拘束を脱しようとしている。

「死柄木はどこだ!」

そんなトガの意に反するように、シンリンカムイはさらにきつくヴィラン達を縛り、この場にはいない死柄木の居場所を聞き出そうとする。

「U S Jにも来た死柄木と黒霧の姿が見当たらないな…」

死柄木達を探そうとさらに奥へと進んでいくオールマイト達。

「ラグドールよ!返事をするのだ!」

そんな中、プツシーキャッツから参加した虎は、仲間であり誘拐されていたラグドールを発見し、彼女の身を抱きかかえている。

「仲間か?息はあるのか、よかったな。」

「しかし、様子が変だ。何をされたのだラグドール!」

虎の腕の中のラグドールはコスチュームを全て脱がされて布で包れており、意識が朦朧としている様子で上の空状態だ。

「後は俺達に任せてくれ。お前は仲間と共に先に戻れ。」

「すまない！」

そのまま虎はギャングオルカの計らいでラグドールと共に、先にアジトから出ていく。

「八百万君の居場所は！」

「この辺のはずだ。」

オールマイトに同行する警官の塚内の手には八百万から託されたデバイスがあり、そこに示された場所は確かにこのアジトだが、彼女の姿が見つかっていない。

「妙だな、このカプセル。」

「本来ならあの、脳無が居てもおかしくなさそうだが……」

更に奥に進んだオールマイト達の目の前には、空のカプセルとそこに繋がる幾つもの機械があつた。

恐らく、脳無を保管するのに使われているカプセルだが今はその中には何もいないようだ。

「ここに君たちが来るのは、予想通りだったよ。オールマイト……」

「誰だ！」

何者かの声が聞こえたかと思いきや、何者かが建物の奥から歩いてくる。

「茶毘達が！」

と、その時シンリンカムイによつて縛られていた茶毘達が泥の様に溶けて消えてしまふ。

「分倍河原の個性か……」

その様子を見たグラントリノは、彼らが出久から報告があつたトウワイスの作り出した偽物であつたことに気付く。

「君達が来ることは予測済みだったからねえ。トウワイスに協力を得て対策させてもらつたよ。」

「貴様はツ……」

「オールフォーワン！」

オールマイトラに歩み寄ってくる男を、警戒するベストジーニスト達。

しかしその人物は、オールマイトにとって最も最悪な人物であつた。

「おや？」

「ここから先は行かせない！」

オールマイトの反応から、オールフォーワンが相当な相手であると推察したベストジーニストは、敵の着ている服の繊維を操つて拘束する。

「ジーニスト！逃げろ！」

だが、次の瞬間ジーニストの腹が何かによつて撃ち抜かれ、大量の血が噴き出す。

「君は確かに、僕の四肢をうまく拘束した。大した技術だよ。けど、僕は指さえ動かせればなんだって個性を使うことが出来る。」

ジーニストが拘束しきれなかった指から衝撃波を放ち、ジーニストに重傷を負わすことが出来た。

彼からの拘束を脱し、自身の右腕に幾つもの個性を発動させて巨大化させる。

「先生！全員を逃がしてくれ！」

「そのつもりだ！」

かつてオールマイトに重傷を負わせた相手の復活と言うこともあり、彼はかなり警戒した様子で他のヒーロー、特に重傷を負ったジーニストをこの場から逃がそうとする。

「さあ、楽しもうよ！」

オールフォーワンが巨大化させた腕を振るうと同時に放たれる衝撃。そこから逃げるようにオールマイトとグラントリノは駆けていき、仲間の身体もつかんで一気に退避する。

「な、何が起きてるんだ……！」

先程から少し離れた位置で、その様子を外から見ている出久達。

彼らから見れば、マウントレディが破壊したことで空いた建物の穴から重症のベスト

ジーニストとその他のヒーローを抱えたオールマイト達が飛び出してきたかと思えば、そこから爆発が起きたのだろうかと言うほどの砂埃と突風が飛び出してきた。

「どうやら、俺達が行かないといけないみたいだな。」

「ええ、その様ですね…」

「ライダー以外はここで待機だ。俺達4人で行く。」

「うっす！」

(俺はまた、見てるだけなのか…！)

ヒーロー側劣勢の状況を見て士は、出久、ウオズ、爆豪の3人を引き連れてアジトの建物に向けて歩き始める。待機を言い渡された3人はただその様子を見ることしかできなかつた。

「僕が誘拐した少女が発信機を持つていることはお見通しだったよ。だからこそ、泳がせて君達をおびき出したのさ！」

「どうやら、罠に嵌められてしまった様だね…」

入り口で待機していたヒーロー達と合流したオールマイト、その前にはオールフォーワンが歩み寄ってきていた。

「位置情報の通り、彼女はここに居るよ。けど、君達に助けられるかな？なんせ僕には、最高の戦力があるからね。」

「死柄木弔ッ!？」

その時、オールフオーワンの横に現れたワープゲートから死柄木が出てくる。

「喜べ。今日はヒーロー達が負け、俺達がゲームをクリアする日だ!」

『ジオウ…II…』

この場に集まったのはトップ層のヒーロー達であり、彼らを一気に倒すため死柄木はアナザージオウIIへと姿を変えながら、18体のアナザーライダーを召喚する。

「これは僕からのサーブスだよ。」

さらにワープゲートが開き、そこからは脳無達が多量に現れる。

オールマイトらの攻撃を予測していたオールフオーワン達は、カプセルから先に脳無を出しており、今ここで登場させたのだ。

アナザーライダー軍団と脳無軍団。彼らが一斉にオールマイトらヒーロー達と警官たちに襲い掛かる。

「デトロイト…スマーツシユ!」

「赫灼熱拳! ジェットバーン!」

迫り来る脳無達に、オールマイトとエンデヴァーが拳を繰り出して吹き飛ばし、オールフオーワンに迫ろうとするが…

「お前らの相手は俺達だぜ。」

その前にアナザージオウⅡとアナザーエグゼイドが立ちはだかる。

「Shit……」

多勢に無勢、ヒーロー達は思うように立ち回ることが出来ない。

しかも、敵は仮面ライダーを相手取ってきた怪人と、オールフォーワン達を作り出した改造人間の脳無だ。苦戦を強いられてしまい、オールフォーワンに近付くことすらできない。

「やれ……」

アナザージオウⅡの号令と共にオールマイトに切りかかろうとするアナザーブレイドとアナザー龍騎。

（ワンフォーオール！フルカウル！）

「ハウザーインパクト！」

だが、そんな2体のアナザーライダーをジオウとゲイツが吹き飛ばした。

「緑谷少年!!それに爆豪少年まで!何故ここに!」

「デイクイドさんから許可は得ました…僕達はオールマイト達と八百万さんを救いに来ました!」

アナザーライダー達からオールマイトとエンデヴァーを守るように立つ、2人の仮面ライダー。

「来てしまったのなら仕方ない……無理はするなよ！2人共！」

「はー！」

他のプロヒーローから許可を得てここに来てしまったのなら、引き返させるわけにもいかないし、敵の数的に人数は多い方が良い。そう判断したオールマイトはI・アイランドの時と同じように、出久達と共闘する道を選んだ。

敵のアジトに侵入した私達は、2手に分かれることにした。

我が魔王と爆豪君がオールマイト達の援護に向かい、私と門矢士でアジト内を探索して八百万君の救助に向かうことにした。

「位置情報ではこの辺りなんだが……」

発信機の情報を私のファイズフォンXでも見れるようにしており、今はそれが示す位置を探索しているが、どこにも彼女の姿が見当たらない。

「上の階か地下にいるんじゃないか？GPSだったらどの階層にいるか分からない。」

「では、探ってくれ。私は地下がないか探ってみるよ。」

このアジトのいろんな階を一気に調べるのは困難なため、ファイズフォンXからタカ

ライドウオツチ、コダマライドウオツチ、ギーツミライドウオツチを取り出して、それぞれライドガジェットに変形させると、アジト内に解き放つ。

「他の2人のライダーがいたから探してみたけど、やっぱり君も来てるんだね。」

「誰だ!？」

私と門矢士で他の階を探ろうとしたその時、我が魔王達が向かったオールマイトのいる方向から男の声が聞こえ、そちらを振り向くと黒い鉄仮面をつけて、スーツを着た男が歩いてきていた。

「もう一人の仮面ライダーと、他の子達に戦闘許可を出した男…彼らが居て別行動をするなら、こっちに来ると思ったよ。悪いけど、あの娘は渡さないよ。」

恐らく彼は、オールマイト達と交戦していたヴィランの1人。

我が魔王達が来たことで、私達の存在にも気付いてこちらに来たようだ。

「ウオズ、こいつは俺がやる。変身!」

『カメンライド・ディケイド!』

鉄仮面を付けたヴィランの相手をすると言い、門矢士は仮面ライダーディケイドに変身する。

「お前は八百万つて奴を助けてこい。こいつの言い分では、ここに居るっほいしな。」

「ああ、助かるよ!」

この鉄仮面の男は“あの娘は渡さない”と言った。

それにわざわざ我々を倒しにこちらまで来た。もし仮にここに彼女が居ないのなら”ここにはいない”と煽ってくる可能性もあれば、そもそも我々のことは後回しにしていただろう。

少なくともここにまだ何かがあるから、オールマイトや我が魔王達との戦いを置いてこちらに来たのだ。何もなければ我々を放置し、後回しにするだろう。

「なるほど、上の階か。」

先程解き放ったタカウオツチロイドが上の階で何かを見つけたようで、それを私に知らせに来た。

私は彼に案内されてそのまま上の階に向けて走っていく。

「おっと、ここで脳無か。しかしながら、ここに置いておくという事は何か守るべき者があるということかな？」

『クイズ！』

上の階に到着すると、合宿所に襲撃しに来た個体と同じような、工具を腕に付けた脳無の姿があった。

「変身。」

『投影！フューチャータイム！』

『ファッション！パッション！クエスチョン！』

『フューチャーリンググクイズ！クイズ！』

私は一先ずこの脳無を倒して戦闘不能にすることにし、仮面ライダーウオズ・フューチャーリンググクイズへと変身する。

「さあ、始めようか。」

神野の敵のアジトでの戦闘が各所で発生していく。

待っててくれ、八百万君！私が必ず救ってみせる！

第57話 ヒーローの王・前編

「まずはこれでいこうかな、鋏突。」

仮面ライダー・デイクイドと対峙するオールフォーワンは、指を稲妻の形をした赤い線の入った黒い触手の様なものに変化させ、デイクイドに向けて伸ばしていく。

『アタックライド！ブラスト！』

刃物のように鋭く、デイクイドを刺し貫こうとする黒い触手に向け、デイクイドはライドブツカーガンモードを構える。その銃口をカードの硬化で分身させると、多数のエネルギー弾を放ってオールフォーワンの黒い触手を打ち砕いていく。

「悪いけどお前には、アイツらから離れてもらう。」

『カメンライド！エグゼイド！』

この場にいる他の味方に、オールフォーワンが何らかの影響を及ぼしてしまわないように、デイクイドはエグゼイドのカードを選んだ。

『レベルアップ！』

『マイティジャンプ！マイティキック！マイティマイティアクション！X！』

『I, m a 仮面ライダー』

仮面ライダー・ディケイド・エグゼイドへと姿を変えるときにも、いくつかの情景が映し出された画面が現れる。

『ステージセレクト』

ディケイドエグゼイドへと変化したことで展開されたゲームエリアだが、ディケイドが現れた画面に触れると、オールフォーワンがいるそのゲームエリアごと森のような場所に転送された。

「ほう、僕と弔達を引き離れたんだね。」

「ああ、さつきみたいなの撃たれたら厄介だからな。」

先程オールフマイト達を襲ったオールフォーワンの大規模な攻撃。

それを再び神野の地で撃たれば、自分の身を守るところか共に戦う出久やウオズ達の戦いにも影響を与えてしまう。

そのことを危惧してオールフォーワンを違う場所に転送し、出久達が心置きなく戦える状況を生み出したのだ。

「だったら君を、この森ごと薙ぎ払うだけさー！」

オールフォーワンからすれば、目の前の敵を倒すことでしか弔達に手は貸せないし、捕えた八百万を奪い返されないように動くこともできない。

早々にディケイドを始末しようと、個性で自身の両腕を強化。両腕が肥大化し、そこ

からは槍の様な骨が幾つも露出している。

「なるほどな。大体分かった…」

巨大化し、筋力が強化されたその腕でデイケイドを殴ろうと振り上げるオールフオーワン。

それに対してデイケイド・エグゼイドは付近にある四角いチョコの箱のようなものを殴る。

『高速化!』

「ちようどいいのが来たな。」

そこで得たのは“高速化”のエナジーアイテム。

一時的に高速移動ができるようになったデイケイド・エグゼイドは、一瞬でオールフオーワンの攻撃の射程圏外に退避する。

「逃げ足が速いねえ!」

オールフオーワンが振った右腕は宙を空振りし、さらに彼の背後には高速移動してきたデイケイドが迫っていた。

「針鼠!」

だが、ここでオールフオーワンは自身が得ていたハリネズミの個性を発動し、自身の背中から針を大量に生やすことでデイケイドの攻撃を防ぐ。

「どちらの手札が先に尽きるか、勝負だ！」

大量の個性を操るオールフォーワンと、エナジーアイテムを駆使するデイケイド・エグゼイド。

その戦いが夜の森の中で繰り広げられる。

一方、アジトの方ではウオズ・フューチャーリングクイズと工具腕を付けた脳無が相対していた。

「さて、ここが問題だ。」

「……」

ドリル状の工具が付いた右腕で、ウオズを刺し貫こうとパンチを放ったがその脳無の攻撃は空を切る。

その攻撃を後方に退いて避けたウオズが、クイズをその脳無に出す。

「私と我が魔王が出会ったのは中学校1年生の時である。○か×か？」

「……？」

この脳無はこれまでの脳無よりは知性があるが、唐突に出されたクイズに対応できな

かった。

と言うより戦闘中に問いを出されれば、まともに考えて答えを出すのは難しいだろう。

「時間切れ。答えは○だ。この程度の簡単な問題に答えられなかった君には罰を与えよう。」

そのウオズの答えと共に、クイズに無回答だったその脳無に雷が落ちてその身に大量の電気が流れる。

「機械を使う相手には効果覷面だね。」

その電流は脳無が装備する工具をショートさせ、それらは黒い煙を上げて脳無の手から落ちていく。

「今度は、そう来るか…」

素手になった脳無は両肩から大量の腕を生やし、ウオズに襲い掛かる。

『キカイ!』

「パワーにはパワーだ。」

力で押そうとしてくる脳無に対抗するため、ウオズはベルトのミライドウオッチを入れ替える。

『投影!フューチャータイム!』

『デカイ！ハカイ！ゴークイ！』

『フューチャーリングキカイ！キカイ！』

複数の腕で殴ろうとする脳無に対し、フューチャーリングキカイに姿を変えたウオズはパンチを何発も撃ち出してぶつけ合う。

「パワーでも…負ける気はないよ！」

複数の個性を持ち合わせることで、オールマイト並みの筋力やパワーを持つ脳無。腕の数を増やして手数を増やすことでそれらをさらに有効的に發揮していたが、キカイの力を得たウオズはそれに対抗してみせる。

「私が！」

脳無の攻勢に対し、ウオズは何度も拳を振るって防いでいけば、パワーで押し切りパンチを脳無の顔にヒットさせる。

「八百万君を！」

そして飛びついて膝蹴りを脳無の顔面に打ち、敵の付けているマスクを破壊する。「救ってみせる！」

八百万を救うというウオズの強い思いが、脳無を超えるパワーを生み出し、その拳が敵の顎を砕く。

顔面部の肉を破壊されたが、骨と共に再生しようとする脳無。だが、その傷口にジカ

ンデスピアが突き刺さる。

『ビヨンド・ザ・タイム!』

ヤリモードのジカンデスピアのデイスプレイ部分を、ウオズが操作する。

『爆裂DEランス!』

その刃先から放たれた赤い光が、脳無の口内から体内に入っていく、内臓や骨を焼き尽くしていく。

「これで終わりだ。」

体内を焼かれた脳無の再生が止まり、機能を停止させた脳無の巨体が大きな音を立てて地面に倒れこんでいく。

「さて、八百万君は…」

脳無が倒れたのを確認すると、ウオズは再び八百万の姿を探そうと周囲を見渡す。するとそこに、フォックスブーストドロイドが駆け寄ってくる。

「もしかして見つけてくれたのかい?」

ウオズの問いかけにドロイドが頷くと、彼に案内されてウオズは施設内を進んでいく。

「八百万君!」

そして、彼の眼にはベッドに両手両足を拘束されてしまった八百万の姿が映ってい

た。

「う、ウオズさん…?」

「体は大丈夫かい? 怪我はないかい? 変なことはされてないかい?」

ようやく彼女のことを見つけられたウオズは、駆け寄って心配からか言葉を溢れ出させてしまう。

「だ、大丈夫ですわ…ただ、う、ウオズさん…」

そんなウオズの様子に困惑していた八百万であったが、助けに来てくれた安堵と恐怖からの開放で目から涙を流し始める。

「辛い思いをさせてしまつて申し訳ない。私の判断が間違つていた…」

八百万の両手両足を拘束する鎖を、ウオズはジカンデスピアを使って断ち切る。

そして、合宿の際に自分が彼女から離れてしまった判断のミスを謝罪する。

「ウオズさんは悪くありませんわ…それに…救けにも来ていただいて…」

俯くウオズを八百万が抱きしめる。自身を救ってくれたことへの感謝と、落ち込むウオズを励ますために…

「ありがとう。八百万君…」

「お礼を言うのは私の方ですわ。その…ウオズさん…ありがとうございます。」

改めて礼の言葉を交わした2人は、出口の方を向く。

「さあ、ここから出よう。」

「ええ、そうですね！」

ウオズが八百万の手を取り、彼女を拘束していたこのアジトから脱出していくのであった。

「次！右から来ます！」

「すまないね！緑谷少年！」

一方、アナザーライダーと脳無の軍団に取り囲まれたオールマイトラプロヒーローと出久達。

敵の数はかなり多く、出久はジオウⅡの未来予測の力を使って多数の敵による攻勢を捌いていた。

「クソツ！埒が明かねえ！」

デイエンドアーマーに姿を変えたゲイツと、彼が召喚した仮面ライダーメテオも敵の攻撃を何とか退けているが、凌ぎ切れてはいない。

「私の方もツ…限界が…！」

そんな中、ヒーロー側の重大戦力であるマウントレディの身体が限界を迎えようとしていた。

「マウントレディ！」

アナザークウガに加ええ自身の身体を大きくする個性を備えた脳無と戦闘をしていたが、彼らの攻撃によるダメージが彼女の体力を蝕んでいた。

「……ッ！」

アナザークウガの突撃をボディに受けた彼女の足が揺らぎ、バランスを崩した彼女が自身の身体に蓄積されたダメージに耐えきることが出来なかった。

「マウントレディがやられたかッ……！」

圧倒的な巨体を誇るマウントレディであれば、多くの脳無やアナザライダーを蹴散らすことが出来た。

だが、彼女とほぼ互角の脳無に加えてアナザークウガによってノックアウトされてしまった。

それにより、彼女の力による援護が見込めないどころか、彼女を倒した強力なヴィランの攻撃がエンデヴァー達に向けられる。

「赫灼熱拳！ヘルスパイダー！」

その2体のヴィランに向けて、エンデヴァーが5本の指から蜘蛛の巣状に展開した炎

の糸を放つが、アナザークウガには効いていない。巨体の脳無の胸に蜘蛛の巣の形をした傷跡を付けただけとなった。

「来るぞー！」

巨大化した脳無は、エンデヴァアの攻撃が完全に効いている様子はなく、その巨大な腕をヒーロー達に向けて振り下ろす。

「デトロイトースマーツシュー！」

その攻撃に気付いたオールマイトが飛び上がり、その脳無の巨大な腕に自身の渾身のパンチをぶつけて敵の動きを止める。

『霸王斬り！』

オールマイトの一撃による衝撃で、後方に身を退けてしまう巨大脳無をジオウⅡは見逃さなかった。

サイキョーギレードを振るい、黄金の斬撃を放って敵の胸部を切り裂く。

「良い攻撃だ！我が魔王！」

とそこに、八百万を救出し終えたウオズがやってくる。

フューチャーリングリグロバイスに変身し、バーストライカープテラゲノムに搭乗して巨大脳無に突撃していく。

「再生はさせない！」

サイキョーギレードの斬撃によって付いた傷が再生するのを防ぐように、バイストライカーの左右から出てきた機関銃が再生していく傷に弾丸を浴びせて阻害する。

『ビヨンドザタイム!』

バイストライカーに乗ったウオズが、ビヨンドライバーを操作する。

『ゲノミクスブレイク!』

バイストライカーに乗ったウオズが、他のゲノムたちと共に脳無に付けられた胸部の傷に向けて突撃していき、その巨体に大穴を開ける。

「ウオズ君!」

ウオズによって巨大化した脳無は倒れながら体を元のサイズに戻していく。

ありがたい援護が来たと思った次の瞬間。

「逃げる!」

バイストライカーに乗ったウオズにアナザークウガが突撃し、そのままバイストライカーは破損。

地面に落ちていつてしまう。

『投影!フューチャータイム!』

『マグナム!』

『フューチャーリングギーツ!マグナム!』

空中でウオズはフューチャーリングギーツへと姿を変えて着地する。

「八百万君は安全なここに逃がし、援護に来た。中々の数だが耐え切ろう！」

「うん！」

「やってくれたか！」

ウオズによる八百万救出成功の一報は出久達の士気を上げ、彼らは再びアナザーライダーや脳無達と向き合う。

「ライダーが一人増えたところで無駄だ！先生もいるしお前たちは俺に勝てない！」

アナザーライダー達がアナザージオウⅡの号令と共に3人のライダーとプロヒーローに向けて襲い掛かる。

「流星に多いね。」

ウオズは両腕のマグナムアームドシューターで迫り来るアナザーファイズとアナザーフォーゼを撃っていくが、敵の数の多さに対処しきれない様子だ。

「Shit……！限界か……」

特にアナザーライダーとの交戦経験が少ないプロヒーロー達は、彼らの特殊な能力や高い戦闘能力に対して苦戦を強いられていた。その中でもオールマイトは過去の戦いで追った古傷が原因で活動できる時間が短くなってきた。そしてこの戦いでの消耗で、限界を迎えつつあった。

「おや？ 膝をつくのか？ 平和の象徴。」

「そんなわけはないさ！ 私はまだまだ！」

身体から煙を出し、膝をつくオールマイトをアナザージオウⅡが挑発し、それを受けて彼に殴りかかるオールマイトだが：

「やれ！」

アナザークウガがアナザージオウⅡの横に立ち、オールマイトを振り払う。

「オールマイト！」

「お前の相手は俺だ！」

アナザージオウⅡが2本の時計の針を模した剣でジオウⅡに切りかかり、オールマイトを助けに行こうとするところを妨害する。

「クツ……！」

「対処しきれない……！」

ゲイツとウオズも助けに行こうとするが、アナザーライダー達がそれを阻む。

「やってしまえ！」

地面に倒れ伏すオールマイトを、上からアナザークウガが何度も殴りつける。

「やらせない！」

ここでジオウⅡは煙幕の個性を発動し、アナザージオウⅡの視界を遮ると浮遊で離

脱。

そしてアナザークウガにも煙幕を浴びせる。

「み、緑谷少年……」

ワンフオールオールで加速したジオウがオールマイトの身体を保護し、アナザークウガの視界が阻まれていている間に助け出した。

「オールマイト……もう限界が……」

助け出したオールマイトの姿を見た出久は動揺を隠せなくなってしまっていた。

オールマイトの右腕や身体は筋肉を纏う状態を保てず、？せ細ってきてしまっていた。

「ああ、どうやらその様だ……」

顔も半分は痩せている時のオールマイトと同じ容姿になりつつあった。

「限界です！オールマイト！後は僕達……」

「いいや、まださ。まだ私は退かないさ！」

そんな彼の様子を見て、離脱するべきだというジオウだが、その言葉をオールマイトは否定する。

「私のお師匠がかつて言っていたよ！限界だって感じたら原点を……！オリジンを思い出せとね！」

(俊典…)

ここで倒れる訳にはいかない。自身の師の言葉を胸にオールマイトは再び立ち上がると力を振り絞って再びマッスルフォームとなる。

そんな彼の背中を弟子である出久と、師匠である志村が見送る。

(皆が笑って過ごせるための象徴！平和の象徴として私は立ち続ける！国民の心の拠り所である柱として！ここで折れる訳にはいかない!!)

襲い掛かってくる複数の脳無達を拳で殴り飛ばしながら、死柄木達に向けて走っていくオールマイト。

「死柄木弔ア！」

アナザースカイジオウIIを守るがために、オールマイトの前に立ちはだかるアナザーアギトとアナザー響鬼。

「テキサス！スマーツシユ!!」

だが、右腕にワンフオーオールのエネルギを込めて振るうことで強烈な風を起し、アナザースカイライダー達を吹き飛ばす。

「カロライナスマツシユ！」

今度はUSJを襲撃したのものによく似た脳無が立ちはだかるが、左右の手刀によるクロスチョップを浴びせて撃退する。

「オールマイト…笑ってる…!」

出久達の前でヴィランとの戦闘を繰り広げるオールマイト。彼は常に笑顔を見せていた。

「僕の、オリジン…」

そんな彼の姿を見て、出久の中の過去の記憶が蘇る。

「お母さん!お母さん!パソコン!」

「また?」

それは、出久がまだ幼く自分が無個性と分かるよりも前の記憶である。

「早く!早く!」

「もう、出久だけで再生数1万は増やしてるわね。お母さん怖くて見れんわ。」

その頃の出久にはいつもは歯にパソコンで見せてもらっていた動画があった。それは古い動画であり、大災害の中1人のヒーローが人々を救っている動画であった。

「見えるか!もう100人も救い出してる!やべえつて!まだ10分も経ってねえつて!」

そして、そのヒーローと言うのは建物の崩落や大火災の中から、短い時間で多くの人数を助け出していた。

「ハーツハツハツハ!」

「メツチャ笑ってんよ！」

人々を救うその男は常に笑顔絶やさないでいた。

「もう大丈夫！何故って…？私が来た！」

その一人の英雄の活躍に、幼き日の出久は目を輝かせて夢中になっていた。

そのヒーローこそ、若き日のオールマイトである。出久が憧れ続けた存在で、彼の原点である。

（緑谷出久、君のオリジンは？）

そんな過去を思い出す出久に、志村が問いかける。

「僕の原点は、どんな困ってる人でも笑顔で助ける！超カッコいいヒーローだ！」

オールマイトに続く様に出久も再び立ち上がり、2本の剣を構える。

「それに僕は知ったんだ！他にも人を救って笑顔になれる理由が…」

「我が魔王…」

「一つだけ教えてやる。クシャつとなるんだよ。誰かの力になれば、心の底から嬉しくなって、クシャつとなるんだよ。俺の顔…マスクの下で見えねえけど。」

そして出久の脳裏には、仮面ライダービルドの変身者である桐生戦兎の言葉が思い浮かぶ。

オールマイトから学んだのは人を支えるための笑顔、仮面ライダー達から学んだのは

人を守る嬉しさによる笑顔。その2つが出久を突き動かし、彼にヒーローの道を歩ませていた。

「僕が皆の笑顔を守る！皆の笑顔を守って…」

” 勝利の法則は決まった！”

” ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！”

” 命燃やすぜ！”

” ひとつ走り付き合えよ！”

” ここからは俺のステージだ！”

” さあ、ショータイムだ。”

” 宇宙キター！”

” 手が届くのには手を伸ばさなかったら、死ぬほど後悔する。それが嫌だから、手を伸ばすんだ。”

” さあ、お前の罪を数えろ！”

” 通りすがりの仮面ライダーだ！”

” 人は音楽と同じ。それを守りたい、そうやって生きていきたい。”

” 俺！参上！”

” おばあちゃんが言っていた…”

” 鍛えてますから!”

” 俺は運命と戦う。そして勝つてみせる。”

” 俺には夢がない。でもな、夢を守ることはできる。”

” 人を守るためにライダーになったんだから!ライダーを守ったっていい!”

” 誰も人の笑顔を奪うことはできない!”

” こんな奴らのために!これ以上誰かの涙は見たくない!みんなに笑顔でいて欲しいんです!だから見ててください!俺の!変身!”

出久の中で蘇る仮面ライダーの歴史。

” 俺はツ……小さい時からアイツをツ……デクを虐げちまってた!勝手に見下して!勝手に……プライド折れて!そんな俺でもアイツは救ってくれた!だから俺が今度は救ける番だ!!”

” だからこそ、必ず生きて戻るよ。八百万君や我が魔王、それに君とも笑顔で過ごすためにね。”

” こういう時こそ笑え!緑谷少年!”

そして、頭の中に流れる仲間やオールマイトの言葉。

「僕は!頑張れって感じのデクで……平和の象徴に……ヒーローの王になる男だ!」

自分を奮い立たせて立ち上がり、ジオウはアナザーライダー達に向けて駆け出してい

く。

「それが君の王道か……緑谷出久！」

それを見たウオズは、彼の言葉に賛辞を贈る。

その瞬間にジオウに襲い掛かる敵達を蹴り飛ばし、両腕の銃で撃ち抜いていく。

「私は君の優しさとまつすぐな思いに触れて、私自身より強く、立派になれた！私は君と共に覇道を歩むよ！さあ！行こう！」

「うん！ウオズ君！」

ジオウとウオズが共に駆けていきながら、次々と迫り来る敵を撃破していく。

ジオウⅡは2本の剣で、ウオズは2丁の銃で、敵を倒していきながらオールマイトに駆け寄る。

「オールマイト！」

「緑谷少年！」

ジオウは全身にワンフォーオールエネルギーを張り巡らせ、オールマイトの前に立つアナザークウガ目がけて飛び出し、オールマイトも共に飛び掛かる。

「デトロイト！スマーツシュ！」

2人同時に繰り出すワンフォーオールの力を込めたパンチがアナザークウガの胸を突き、敵の身体を爆散させる。

「僕は！オールマイトや！仮面ライダーの想いを受け継いで！ヒーローの王になる！」
すると、出久のファイズフォンXが光を放ち、その中から浮遊しながら出てきたライ
ドウォッチが光りながら出久の手に集まっていく。

(これは…)

(どうやら、仮面ライダーの力が彼に集まっている様だね。)

『グランドジオウ！』

そして、それらが集まって黄金のライドウォッチが生まれる。

「どうやら、時が来たようだね。君がヒーローの王になる時が…」

第58話 ヒーローの王・後編

『グランドジオウ!』

「どうやら、時が来たようだね。君がヒーローの王になる時が…」

出久の手に収まったグランドジオウウオッチ、それを起動した後、ジクウドライバーにジオウライドウオッチとグランドジオウウオッチを装填していく。

『(アークル) (オルタリング) アドベント! COMPLETE! ターンアップ!』

壮大な音楽と共に黄金のコインの様なものが舞い、ジオウの後ろには地中から巨大な黄金の時計台が出てきて、彼の横には20人の歴代平成仮面ライダーの石像が並ぶ。

『(音角) CHANE BEETLE! ソードフォーム! ウエイクアップ! カメンライド!』

そして、その石像の表層が? がれていつて仮面ライダー達の姿が現れる。

『サイクロン! ジョーカー! タカ・トラ・バツタ! 3・2・1! シャバドウビタツチヘンシーン! ソイヤツ!』

「変身!」

『ドライブ! カイガン! レベルアップ! ベストマッチ! ライダータイム!』

ジオウⅡの変身が解除された出久が、ジクウドライバーを1回転させる。

『グランドタイム!』

『クウガ!アギト!龍騎!ファイズ!ブレイド!』

それと共にライダー達が黄金のフレームに取り込まれる。

『響鬼!カブト!電王!キバ!デイケイド!』

そして、出久が再びジオウの姿に変化すると、フレームが彼の周囲を浮遊する。

『ダブル!オーズ!フォーゼ!』

そのフレームたちはジオウの身体に張り付くように装着され、彼のアーマーとなる。

『ウィザード!鎧武!ドライブ!』

そのフレームが開き、ライダー達が決めポーズをとって黄金の像となる。

『ゴースト!エグゼイド!ビルド!』

そして、頭頂部のジオウが固定されると“ライダーの文字”を象った複眼が飛び出してくる。

『祝え!』

『仮面ライダー!グランドジオウ!』

そのインゲージアイがセットされ、出久は仮面ライダーグランドジオウへの変身を果たす。

「祝えー！いや…もはや言葉は不要。ただこの瞬間を味わうがいい!!」

仏像とも言える姿をした壮大な王の誕生に、ウオズが最高の歓喜と祝福をこの場に轟かせる。

「姿が変わったところで、俺に勝てると思うなア!!」

グランドジオウへの変身を終えた出久に、死柄木はアナザー電王とアナザーダブルを差し向ける。

『クウガ!』

『ビルド!』

すると、グランドジオウは自身の身体にあるライダーレリーフに触れると、各ライダーが戦った年代が表示したゲートが彼の上に現れる。そこが開くと、ライダーキックの姿勢のビルドとクウガが現れ、それぞれアナザーライダーに向けてその体制のまま突き進んでいく。

「ライダーが召喚された!？」

召喚されたライダー達のライダーキックが、アナザーライダーに放たれていく様子を見て、オールマイイトは驚いた様子を見せる。

「まだまだ!」

『ブレイド!』

『鎧武！』

彼らに続く様にアナザーブレイドとアナザー鎧武が剣で切りかかってこようとしているので、ジオウはキングラウザーと大橙丸をレリーフから出して2本の剣を構える。

「ハアツ！」

2体のアナザーライダーが切りかかって来たのを大橙丸で捌くと、キングラウザーを横一閃。

アナザーブレイドとアナザー鎧武の胸部を切り裂き、火花を散らさせる。

「大きいのは大きいのだ！」

アナザージオウⅡが再び能力を使って復活させたアナザークウガが、グランドジオウに迫り来る。

『鎧武！』

それに対してジオウは鎧武のレリーフに触れると、仮面ライダー鎧武・スイカアームズがゲートを潜って登場し、アナザークウガに突撃していく。

『オーズ！』

さらに、アナザーアギトとアナザーファイズ、アナザーフォーゼと言ったアナザーライダー達が襲い掛かってくるが、それに対してグランドジオウは仮面ライダーオーズ・ガタキリバコンボを召喚。

召喚されたオーズはすぐに分身を発動し、50体のオーズがアナザーライダーに襲い掛かる。

「なんなんだ！この力は！」

「これが、ヒーローの王の力だよ。死柄木弔。」

グランドジオウの力に狼狽える死柄木木に対し、更なる攻勢に出ようとウオズはギーツ・ブーストミライドウオッチを取り出して、ベルトのギーツマグナムミライドウオッチと連結させる。

『投影！フューチャータイム！』

『ブースト！&マグナム！』

『フューチャーリングギーツ！マグナム！ブースト！』

仮面ライダーウオズ・フューチャーリングギーツブーストに変身すると、周囲のプロヒーローと交戦中のアナザーエグゼイドやアナザービルドに飛び掛かって、ブーストによる推進力を加えた回し蹴りを放つ。

「流石出久だ…けど、俺も負けてらんねえな！」

幼馴染である出久の強化と活躍に、爆豪も奮起してアナザーオーズに向けて飛び掛かると、爆破を連続で浴びせていく。

「皆！オールマイト達を助けに行って！」

『ファイズ!』

『カブト!』

『ドライブ!』

数の上では完全にヒーローサイドが逆転した。

ファイズ・アクセルフォーム、カブト、ドライブがそれぞれ召喚されると、エンデヴァーらと交戦する脳無やアナザーライダーに向けて走っていく。

『start up!』

『clock up!』

『スピ・スピ・スピード!』

ファイズはアクセルフォームの力で、カブトはクロックアップで、ドライブはシフトスピードの力でそれぞれ高速移動をすると、目にも止まらぬ速さで脳無やアナザーライダーにパンチやキックを放ち、ダメージを与えてプロヒーロー達から引き剥がしていく。

「なんて力だ…」

現役No. 2ヒーローであるエンデヴァーも、グランドジオウの圧倒的な力に驚きを隠せないでいた。

「ふざけるな!俺と先生の作戦が!」

八百万のGPSを使ってオールマイトラを誘き出し、アナザライダーと脳無で一網打尽にするという作戦は成功から遠のいてしまっていた。オールフオーワンはディケイドによって離れた土地で戦わされることになり、グランドジオウの覚醒によって脳無やアナザライダー軍団が倒されようとしていた。

それに良かったアナザージオウⅡがアナザーゴースト、アナザー龍騎、アナザーブレイドと共にジオウに突撃していく。

「私も、まだまだ戦うぞ！」

それに対して、オールマイトが向き合いファイティングポーズを構える。

（いい戦いっぷりだね！少年！）

（俺達も戦わせてくれ。）

（え!?ど、どうやって!?)

（良いから！ゴースト出して！ゴースト！）

（俺はビルドで頼む。）

（わ、分かりました！）

グランドジオウの力に興奮気味な志村と煙が、共闘したいと言ってライダーを召喚するように出久に強請る。

『ゴースト！』

『ビルド！』

その要求にこたえるように、ジオウはゴーストとビルドを召喚する。

(それじゃあ、行くよ！)

するとゴーストには志村の精神体が、ビルドには煙の精神体が憑依していく。

「命！燃やすよ！」

「さあ、実験を始めるよ。」

その結果、ゴーストには志村の意思が宿り、ビルドには煙の意思が宿る。

それぞれ新たに戦う体を得ることができて、テンションが上がって決めセリフの真似をしている。

「その声は！お師匠！」

「ああ、俊典！一緒に戦うよ！」

「はい！」

ワンフオーオール8代目継承者の八木俊典、7代目継承者の志村奈々、6代目継承者の煙がヒーローとしてジオウの前に立ち、死柄木と彼が率いるアナザーライダーと対峙する。

「まずは俺から……」

アナザージオウIIを始めとする4体のアナザーライダーに向けて、ビルドが煙幕を放

っ。

「前が見えない!」

ビルドに宿った煙の個性である煙幕によつて視界を奪われた死柄木が狼狽える間に、ゴーストは志村の個性で浮遊していく。

『カイガン! ビリー・ザ・キッド! 百発! 百中! ズキューン! バキューン!』

そして、空中でビリー・ザ・キッド魂にゴーストチェンジすると、ガンガンセイバーガンモードとゴーストガジェット・バットクロックのガンモードを煙幕の中のアナザーライダー達に向けてると、弾丸の雨を降らせていく。

「今だ! 俊典!」

「アトロイト! スマーツシユ!」

オールマイトは自身の力を振り絞るように、右手でストレートパンチを放つ。

その威力で煙幕が晴れるどころか、4体のアナザーライダーが一気に吹き飛ばされる。

『龍騎!』

今度はジオウが龍騎のレリーフに触れると、龍騎サブイブの契約モンスターであるドラグランザーとドラグバイザーが現れる。そして、オールマイトに吹き飛ばされて宙を舞うアナザーライダー達にバイザーから放たれるレーザーとドラグランザーの

火炎が浴びせられる。

『オメガインパクト!』

『ハリネズミ!ボルテックブレイク!』

さらにゴーストのガンガンセイバーライフルモードと、ビルドが持つハリネズミボルトが装填されたドリルクラッシュャーから放たれた銃撃もアナザーライダー達に突き刺さっていく。

「チツ……まだまだ!」

アナザージオウII以外のアナザーライダーがこの攻撃で撃破されて爆散し、アナザージオウIIも地面を転がる。

『スキヤニングチャージ!』

さらに、先程召喚されたオーズ・ガタキリバの大群によるライダーキックの嵐がヴィランの軍団を襲い、脳無やアナザーライダー達の多くが倒れる。

「さあ、観念しろ!死柄木弔!」

グランドジオウ、ゲイツ、ウオズ、ビルド、ゴースト、オールマイト、エンデヴァーとプロヒーロー達がアナザージオウIIを取り囲んで追い詰める。

「まだだ!まだ終わらない!」

だが、アナザージオウIIには歴史を書き換える力がある。加古川飛竜が変身した時ほ

どうまく使いこなせていないが、倒されたアナザーライダー達を倒されなかったことごとぐらいいは出来る様だ。

18体のアナザーライダー達を再度召喚し、自身の周りに布陣させてジオウ達から身を守ろうとする。

「死柄木自身を倒さないとッ……！何度も復活してしまう……！」

「だったら、君は彼自身と戦うんだ。」

「こいつらは俺達に任せろ！」

『ムゲンシンカ！』

『グレート！オールイエイ！』

アナザーライダー軍団と再び戦うために、志村ゴーストと煙ビルドがそれぞれ変身アイテムを取り出す。

『アーイー！バッチリミナー！バッチリミナー！』

『イエイ！イエイ！イエイ！イエイ！』

『Are you ready?』

「変身！」

『チョーカイガン！ムゲン！』

『完全無欠のボトルヤロー！ビルドジーニアス！』

『KEEP・ON・GOING!　ゴ・ゴ・ゴ!　ゴ・ゴ・ゴ!　ゴ・ゴ・ゴ!　GODゴースト!』

『スゲーイ!モノスゲーイ!』

ゴースト・ムゲン魂とビルド・ジーニアスフォームがヒーロー達の先陣を切るように、アナザライダー達に突撃していく。

「俊典!その状態では…」

「いいや、ここが最後の戦いになろうと…私は最後まで!」

オールマイトは既に体から白い煙が立っており、体も随所随所が痩せ始めているが、平和の象徴としてここで退く気はない。アナザライダーの中でも特に大きいアナザークウガ目がけて殴りかかり、出久達の進む道を開ける。グラントリノも彼の身を案じつつも、そのオールマイトに続いていく。

「くたばりやがれ!」

そして、アナザージオウⅡに向けて走っていくグラントジオウを守るように、ゲイツとウオズが彼と並走していく。迫り来るアナザライダー達をゲイツの爆破や、ウオズのアームドガンによる銃撃を退けていく。

『キバー!』

『カメンライドタイム!イ・イ・イ・イクサー!』

続いてジオウ達の前に立ちはだかったのは、3体のアームズモンスターを役とするアナザークィバ。

それを迎え撃つのはグラウンドジオウによって召喚されたキバ・ドガバキフォームとゲイツ・ディエンドアーマーによって召喚されたイクサ。

「任せたよー！」

アナザークィバ達の相手を任されたキバ自身はガルルセイバーとバツシャーマグナムを手を持ってアームズモンスター達に近距離と中距離で対抗していき、イクサはドッグハンマーを受け取って敵に目がけて振り回す。

『鎧武！』

死柄木と距離を詰めたジオウは、鎧武・イチゴアームズの武器であるイチゴクナイを手を持つと、それを敵に向けて投擲する。

「俺はここで倒れない！」

投擲されたイチゴクナイ達を、剣で叩き落とすと、自身の眼前に迫った一本をその右手で掴む。

「ヒーローの社会を崩壊させるまでは！」

アナザークィバの手に触れてしまったそのイチゴクナイは、死柄木自身の個性によって崩壊してしまう。

「あの手に触れられないよう、注意しないとね。」

死柄木の個性は強力で、触れてしまった相手を簡単に殺してしまうことが出来る。

だが、そんな彼の個性をこの戦いで生かし切るのは至難の業かも知れない。

『電王！』

仮面ライダーギーツの力をその身に宿すウオズと、ジオウが召喚した電王・ガンフォームによる銃撃でアナザージオウIIをけん制し、距離を詰めさせない。

「これでも喰らいやがれ！」

やや遠距離からの攻撃で距離を取られてしまっているアナザージオウIIに、爆破の推進力で加速しながらギーツが距離を詰めて爆破を浴びせる。

『ファイズ！』

『ダブル！』

『ドライブ！』

ゲイツの爆破は、アナザージオウIIにダメージを与えるだけでなく、爆炎によつて敵の視界を塞いでしまう。

その間に、ジオウはファイズ・ブラスターフォーム、ダブル・ルナトリガー、ドライブ・タイプフオーミュラー、を召喚する。

『ブラスターマード・エクシードチャージ』

『フルチャージ』

『トリガー！マキシマムドライブ！』

『フルフルフォーミュラー大砲！』

そして、ファイズはファイズブラスタ、電王はデンガツシャーフアンフォーム、ダブルはトリガーマグナム、ドライブはトレーラー砲をそれぞれ構えて、必殺技を撃つ準備をしていく。

『ビヨンドザタイム！』

そして、彼らに並んだウオズが両腕のマグナムアームドシューターをアナザージオウIIに向けてと、そこにブーストの炎を纏わせる。

『ビクトリーマグナムブースト！』

そして、ウオズが両腕から炎を纏ったレーザーを放つとともに、他の4体のライダーも自身の獲物から銃撃を一気に解き放つ。

「クツ……見えない！」

その間にもゲイツがアナザージオウIIと距離を取りながら、爆破を浴びせ続けたことで、彼は視界を奪われてどこからライダー達の攻撃が飛んでくるか把握する前に、彼らの放った銃撃がその身を襲う。

「グアアッ……!!」

その攻撃を受けて自身の身から爆発を起こしながら、アナザージオウⅡは膝を付いてしまう。

「あつちもド派手だね！私達もいこう！」

『イノチ！ダイカイガン！』

出久達の戦いの様子に触発されるように、志村ゴーストもゴーストドライバーを操作してからガンガンセイバー・ライフルモードを構える。

『シンネンインパクト！』

その銃口から放たれる”信”の感情を込めた緑のエネルギー弾が、アナザーゴーストら複数体のアナザーライダー達を一気に撃ち抜いて爆散させる。

「俺も続け。」

『ワンサイド！』

『逆サイド！』

『オールサイド！』

その志村ゴーストに続くように、煙ビルドはビルドドライバーのレバーを回している。

『ジーニアスフィニッシュ！』

そして、虹色のグラフでアナザービルドを始めとするアナザーライダー達を拘束する

と、そのグラフに沿って滑るようにライダーキックで突き進んでいって、アナザーライダー達を次々と蹴飛ばして、撃破していく。

「緑谷少年達の方には行かせないぞー！」

劣勢になっていくアナザージオウ達の様子を見て、アナザークウガが主人を助けようとジオウ達に突っ込んでいくが、その前に既にマッスルフォームを維持できなくなってきたオールマイトが立ちほだかる。

「これが最後となろうと…緑谷少年に繋ぐ！緑谷少年の邪魔はさせないぞー！」

オールマイトの中にあるワンフォールオール灯火の消耗しきってしまい、右腕以外はマッスルフォームを維持できていない。だが、それでもグランドジオウとなった出久が戦いに勝利することを優先し、その障害となるアナザークウガと相對する。

（緑谷少年。これからは君たちの時代になってくるだろう。私も生きて君達を導こう…だが！その前に…最後の1仕事をさせてくれ！）

「うおおおおお！！」

自身に向けて突撃してくるアナザークウガに向けて、自身の腕を振り上げる。

「さらに向こうへ…Plusulttra！」

オールマイトは弱った体でアナザークウガの胸部に飛びつき、振り上げた右腕にワンフォールオールのエネルギーを込めてパンチを放つ。

「ユナイテッド！ステイツオブ！スマーッシュユ!!」

最後の力を振り絞ったオールマイトの1撃は、アナザークウガの胸部を打ち砕き、遙か先の上空まで吹き飛ばす。

「俊典!」

そして、マッスルフォームが完全に解けてトウルーフフォームとなつてしまったオールマイトの下に、グラントリノが駆け寄る。

「少し、無茶をしすぎたようです…」

グラントリノが駆け寄つてきた後でも、オールマイトは膝を付くことなく立っている。

「次は…君達だ…平和な時代を築くんのだ!」

オールマイトはブランドジオウ達がいる方を指さす。

そのオールマイトの言葉に應えるように、ブランドジオウも軽く頷いた。

「決めるぞ、出久。」

「うん、かつちゃん!」

オールマイトの勇姿を見届けた、彼に憧れた2人の若き仮面ライダー。

その2人がオールマイトからバトンを受け継ぎ、戦いの決着をつけようとしていた。

『フィニッシュタイム!』

まずは先陣を切るようにゲイツが自身のベルトを操作すると、アナザージオウIIに向かっっていく。

「自ら向かってくるなんてな！」

ジャンプしてから、蹴りを放とうとするゲイツに対し、アナザージオウIIは手で触れて体を崩壊させてやろうと目論む。

「悪いが、爆豪君を簡単にはやらせないよ。」

そんな死柄木の甘い考えを折るように、ウオズも爆豪達の援護に加わる。

アナザージオウIIの背後に回ると、両腕のマグナムアームドシューターから弾丸を連射。

幾つもの弾丸がアナザージオウIIの背中に突き刺さり、次々と爆ぜて火花を散らしていく。

「…ッ!?!」

今日の戦いで体にダメージを溜めこんでいた死柄木にとって、ウオズによる攻撃もかなり効いてしまう。

「バーストショット！」

そして爆豪は、自身の周囲にある“らいだー”と“きつく”の文字たちを集めて1つのボールの様なものを作り出すと、爆破を伴った蹴りでそれを撃ち出す。

「触れてしまえばッ……！」

ウオズの銃撃によるダメージを受けつつも、手を伸ばしてそのエネルギー弾を崩壊させてしまおうとする死柄木。

『フイニツシユタイム！』

『グランドジオウ！』

だが、2人の攻撃で死柄木の集中力が削がれた隙に、グランドジオウによって召喚されたクウガ・ペガサスフォーム、カブト・ハイパーフォーム、フォーゼ・コズミックス、ハイパーフォームテキエグゼイドが彼を取り囲む。

「いけえええええ!!」

出久の号令と共に放たれたクウガのペガサスボウガンによる封印エネルギーの込められた矢が、ゲイツの放ったエネルギー弾ごとアナザージオウIIを貫く。

「グアアッ……!!」

自身を射抜いた矢と、エネルギー弾の爆発で吹き飛ばされるアナザージオウIIの身体を、フォーゼ・コズミックス、ゲイツがバリズンソードを上から下に縦に振るって切り伏せながら地面に叩き付ける。

『ALL ZECTOR COMBINE!』

そこを、カブト・ハイパーフォームがパーフェクトゼクターのガンモードで狙う。

ザビーゼクター、ドレイクゼクター、サワードゼクターを装填したパーフェクトゼクターから、巨大な竜巻状のエネルギーを射出する。

『MAXIMUM HYPER CYCLONE!!』

多数のワームを一気に葬り去るほどの威力を誇るマキシмумハイパーサイクロンが、その射程をアナザージオウⅡだけに絞って放たれる。

「先っ生……!」

その攻撃をその身に受けたアナザージオウⅡは、既に気を失ってしまいそうな状態であつたが、完全にとどめを刺そうとグランドジオウが飛び上がる。

『オールトウエンティ! タイムブレーク!』

ハイパームテキエグゼイドと、グランドジオウの2人のライダーが並んでのライダーダブルキック。

それが抵抗する力を残せていないアナザージオウⅡに向けて放ち、2人の突き出した両足が敵の胸部を捉える。

「俺が先生とツ……この社会を……ヒーローの社会を! 壊すんだ!!」

捨て台詞を吐きながら、アナザージオウⅡの身体は爆発を起こす。

「死柄木……」

その爆煙が晴れると、そこには倒れて気を失った死柄木自身とアナザージオウⅡ

ウオツチが転がっていた。

アナザージオウⅡの撃破を表すかのように、残りのアナザライダー達も消滅し、夜明けの日差しがヒーロー達を照らすのであった。

第59話 神野の夜明け

「中々やるねえ…」

ジオウ達が神野で戦いを繰り広げている間、転送された森でオールフォーワンもデイケイドに追い詰められていた。

「当然だ。」

デイケイドはハイパームテキエグゼイドにカメンライドしており、オールフォーワンが繰り出す数々の個性による攻撃を全て凌ぎきるところか、パンチやキックを次々と浴びせてダメージを与えていた。

「だが、ここで負ける気はないよ！僕の物語はまだまだ終わらない！」

オールフォーワンは自身が他人から奪ってきた個性をいくつか発動し、右腕を巨大化させ、そこから鉄の骨の様なものを生やす。

「ここで君を叩き潰してしまえば良いだけだ！」

その腕を使って叩き潰すかのように振り下ろすが、その巨大な腕に向けてデイケイド・ハイパームテキエグゼイドがパンチを撃てば、その腕の筋繊維が次々と断裂していき、ドリルの様に生える鉄の骨が次々と折れていく。

「…ッ！」

ハイパームテキによって今のデイケイドの能力はかなり上昇しており、彼の放つパンチによってオールフォォワンの右腕は内出血して青紫色になっていた。

「オールフォォワン！」

このままオールフォォワンとしては、撤退をして死柄木らと合流しようと図ったが、そこに黒霧が現れる。

「死柄木弔がッ…いやられました！」

「なるほど…どうやら、ここで戦っている場合ではないみたいだね。」

死柄木弔の敗北という報を受け、これ以上戦うのは意味がないと思い、オールフォォワンはすぐに撤退することを選んだ。

「待て！」

そう簡単には逃がすまいと、デイケイドが駆けるが、オールフォォワンは黒い霧の中に消えていく。

「俺も、アイツらのとこに戻るか…」

オールフォォワンは黒霧の手によってこの場から去り、彼を逃してしまった士も一度出久達のいる場所に戻ることにした。

「オールマイト!」

死柄木弔との戦いを終えた出久達は、力を失いトゥルーフオームの姿を晒してしまっているオールマイトの下に駆け寄った。

「緑谷少年…爆豪少年…それに、ウオズ少年まで…まさか君達が来るとは思わなかったよ…」

「ご、ごめんなさい…勝手に来てしまつて…」

「いいや、良いんだ。君達が居なければ私達は…」

この場に仮面ライダーである出久達が居なければ、八百万の救出やアナザージオウIIの討伐は果たせなかった。その事実をオールマイト始めこの場にいるプロヒーロー達は重々承知しており、誰もオールマイトの言葉を否定しない。この戦いへの勝利の賛辞と言う意味合いもあつてか、この場にやつて来た出久達のことを誰一人として責めない。

「空彦、俊典、久しぶりだね。」

「お、お師匠!?!」

「その声は、志村か。」

そんなオールマイトと、グラントリノの傍に志村奈々の精神体が憑依した仮面ライダーゴーストが歩み寄る。

「何故、あなたが…」

「それはきつと、彼が今度説明してくれるはずさ。」

「ええ!? ぼ、僕ですか!?!」

出久自身が歴代継承者と話せるようになったり、彼らがグランドジオウの力で召喚されたライダー達に憑依して戦えることなど驚くべきことは多い。

そういったことの説明は後々出久に任せることにし、志村自身は自身の親友や弟子との再会を喜ぶことにした。

「お師匠…私は…」

「うん、よく頑張ったよ!」

自らの師である志村からの言葉に、オールマイトは目を潤してしまう。

「俊典、今までよくやってくれたよ…昔お前が言ってた平和の象徴に、なれたんじゃないかな…?」

「はい!」

これまでのオールマイトの活躍を称えるように、志村ゴーストがオールマイトの頭の上に手を置く。

「それと出久。」

「は、はい！」

「これからは君が歴史を築くんのだ。きつと今日、世間に示せたよ。君が来た！」ってね。」

「はい！全力で頑張ります！」

志村の言葉に、出久は力強く頷く。これからの時代を担う覚悟は、既に出久達の中で出来上がっていた。

「うん！その意気だ！俊典、それに空彦も彼のことしつかり育てるんだよ！」

「はい！お任せください！」

「ああ、任せろ。」

「良い顔だ。」

自身の言葉に頷くオールマイトとグラントリノの姿を見て、満足気に志村ゴーストは黄金の粒子となつて姿を消す。煙ビルドも彼女に続くように、姿を消す。

「死柄木弔は確保した。他に何かするべきことはあるか？」

「まずは、5本の指で触れられないようにだけ注意しなければ…個性を使われないように拘束しないとね。」

一方その頃、ウオズはシンリンカムイと共に彼の個性で死柄木の捕縛を行っていた。

「後は何かしておくべきことはあるか？」

「アナザーウオッチの確保だ。彼が怪人になるのに使ったものだ。」

「時計型の物体か。確かそれは……」

地面に転がっているアナザージオウIIウオッチの存在に心当たりがあつたギャングオルカが、周囲を見渡す。

「あれか!」

そして、シンリンカムイがアナザーウオッチを見つけてそちらに向かつていく。

「悪いけどそれは、君達には渡さないよ。」

だが、その周囲に黒い霧の様なもの漂い、その中からオールフォーワンが現れる。

「オールフォーワン!?!」

その姿にオールマイト達も驚きつつ、ファイティングポーズを構える。

「今回は君たちの勝ちだ。だが、いつか僕自身が最低最悪の魔王となり、この世を支配する! その時を楽しみに待つんだね。」

オールフォーワンは、デイケイドとの戦闘で負ったダメージもあり、ヒーロー達の前に長居する選択肢を選ばなかった。怪我をしていない左手の方で地面に落ちているアナザージオウIIウオッチを回収すると、すぐに黒霧の中に消えていく。

「待て!」

すぐに出久が追おうとするが、既にオールフォーワンは黒霧のワープによってこの場

から去る。

「逃げられたか…」

「だが、敵の幹部1名は捕縛できた。それだけでも十分な成果だ。」

「ああ、戦いはこれからも続くだろうけどね…」

オールフォーワンはアナザーウオッチの回収だけを行ったことで、一瞬での撤退をすることが出来た。だが、それはつまり死柄木のことを見捨てたということだ。ヒーロー側にはグラランドジオウがいるのに対し、自分は腕を負傷している。”二兎を追う者は一兎をも得ず”と言うことわざ通りの展開になりかねない状況だった。

これからもヒーローとオーマシヨッカーの戦いは続くことになるが、死柄木弔の確保にこぎつけたのは1つの勝利とも言えるだろう…

「八百万君！」

「ヤオモモ！」

戦いの決着が着いた頃、ウオズに助け出されて警察に保護してもらっていた八百万の下に、飯田、切島、轟の3人が駆け付ける。

「飯田さん!?それに切島さんに轟さんまで…何故ここに?」

「おめーを救けに来たんだ!」

「つつても、俺らはほぼ待機して終わっちまったが。」

出久達と共に神野にやって来た切島達であったが、彼らはデイケイドこと門矢士からの戦闘許可が出ず、遠くから戦いを見守るしかできなかった。とは言え、プロヒーローでも仮面ライダーでもない3人が参戦していても、かなり厳しい戦いになっただろう。

「そうだったんですね…けど、ウオズさん達が来てくれて…私…」

八百万としてはクラスメイトが来たことに対する驚きよりも、こうして敵から解放してくれた感謝の気持ちが大きく、目を潤わせる。

「それより、ヴィランになんか変なことはされなかったかい?」

「ここで飯田はふと、彼女の身に何かさかれていないか心配になって問いかける。

「緑谷さん達が使っている時計のようなものを体に押し付けられたりしたぐらいで特に…?」

「本当にそれだけか?」

「ええ、その時計のようなものも変化はありませんでしたわ…」

八百万の中に芽生えつつあった仮面ライダーの力を奪おうと画策したオーマシヨツカーであったが、彼女の話から察するにウオッチを使ってその力を奪おうとしたが上手

くはいかなかったようだ。

そこから、八百万自身とGPSを神野に残していたのは、彼女の存在に興味がなくなったのか、オールマイトらを誘き寄せる罠に転用しようとしたのか、その意図はオーマシヨツカーのみぞ知ることだ。

「警視庁の塚内だ。君が八百万君だね？」

「ええ、そうですけど……」

「無事で何よりだよ。今から一度病院に行ってもらって、そこで手当てや検査を受けてもらうことになる。しばらくはそこで保護させてもらう形になるよ。親御さんにも連絡させてもらったよ。」

「ありがとうございます。」

誘拐されてから救出されたものの、この後も大変な出来事は幾つか付き纏う。

メディアからの注目も受けるし、何よりオーマシヨツカーに捕らえられていた期間の心身のケアも必要だ。それ故に警察は病院で彼女を保護して回復させることにし、その処置に八百万は頭を下げて感謝の意を伝える。

「君達も、新学期でまた彼女と会えるだろうから、待っててあげてね。」

「ウツス！」

今回の事件の後処理で英雄も多くの手続きをすることになり、夏休み期間はそれで殆

ど潰れてしまう。

クラスメイト達が再会を果たせるのは、恐らく2学期を迎えた時だろう。

雄英高校林間合宿でのオーマシヨッカーによる襲撃と八百万の誘拐事件、そして神野での八百万救出作戦。

その結果として、オーマシヨッカーから誘拐された八百万を救出でき、幹部であるアナザージオウIIこと死柄木弔の身柄を拘束することが出来た。

しかしながら、ヒーロー側も多くの損害が生まれてしまった。

プッシーキャッツは重傷者を2名出して活動休止、ベストジーニストもオールフォーワンによって深手を負い活動休止。そして、オールマイトは最後の力を振り絞ったことで、引退を余儀なくされていた。

だが、今宵世間は知ることとなった。台頭する新たな世代と、その中心で輝くヒーローの王の存在を…

仮免取得編

第60話 部屋王

「それでは、しばしの別れだね。」

「うん、元気で過ごすんだよ!」

暑さは暑さでも、本格的な夏の暑さから残暑へと変わっていきこうとする季節。

8月も終わりに近づいた頃、雄英の制服に身を包み、大きなカバンを幾つも持ったウオズが両親に見送られながら家を出る。

普段通りの登校であれば、こんな大げさに送り出されることもないが、ウオズの言う通りしばらく彼と両親が離れることになってしまう。

夏休み前半のショッピングモールでのヴィランと雄英生の接触、後半の林間合宿へのオーマシヨツカーによる襲撃。それに加えてベストジーニストが重症による休養と、オールマイトの引退とヒーロー側にとってネガティブな出来事が続く情勢だ。

(しかしながら、我が魔王の方の家庭訪問も大変だったそうだね…)

それに伴い、雄英高校では家庭訪問も行われ、そこで全寮制に関する説明がされた。

生徒達を守るための全寮制、多くの家庭が了承した中、緑谷家などでは反対の声が出

たものの、オールマイトがしっかりと説得して納得してもらおうことが出来た。

「おーい！ウオズ君！」

「我が魔王！」

2学期に入る約10日前のこの日、寮に入るために生徒達は各々の荷物を持って雄英に向かうことになった。

その道中、出久とウオズが合流して共に雄英に向けて歩いていく。

「しかしながら、神野での一件。なんとか不問になって良かったね。」

「うん、相澤先生に呼び出された時はビックリしたけど、勝手に神野に行った件とか許してもらえて安心したよ……」

学校側に断ることもなく、門矢士と共に神野に行った件に関して、出久、ウオズ、爆豪は相澤に学校に呼び出されていた。

そこで多少の説教を受けたが、門矢士の許可の下での戦闘であったことと、死柄木甲を倒すことが出来たこともあって、引き続き雄英に在籍することを許された。

「おう！テメエらもう来たんか。」

「やあ、爆豪君。それは寮に持ち込むものかな？」

「まあ、そんなとこだ。」

さらに出久達と合流した爆豪だが、彼の荷物はキャンプ道具や、それを入れる大きめ

のカバンを担いでいる。このまま登山にでも行くのだろうかと言う格好に、出久とウオズは目を丸めている。

「まあ、折角の1人部屋だ。好きに裝飾していくのが良いだろう。」

3人は雄英に向かい、荷物を一時的に預けた後に寮の前に集合するのであった。

寮の前に集合したA組一同は、相澤によって寮内を案内される。

「学生寮は1クラス1棟。右が女子、左が男子と分かれている。ただし一階は共同スペースだ。食堂や風呂、洗濯等はここで行う。」

「うおー!」

「中庭もあんじゃん!」

「広い!きれいなソファアール!」

彼らが住むこととなった寮、ハイツ・アライアンスの内装は新築と言うこともあり、清潔感があるだけでなく、21人で住むにはスペースが余ってしまうほど広くて豪華。設備もかなり充実している。

「豪邸やないか〜!」

「麗日君!」

まさしく豪邸と言えるその作りに、麗日は卒倒してしまう。

「聞き間違いかな? 風呂、洗濯が共同スペース? 夢か!」

「男女別だ。お前いい加減にしとけよ…」

「はい。」

風呂と洗濯が同じスペースにあると聞いていかがわしいことを考える峰田を、相澤が注意する。

「部屋は2階から、1フロアに男女各4部屋の5階建て。1人1部屋、エアコン、トイレ、クローゼット付きの贅沢空間だ。」

「ベランダもある!すごい!」

まるでマンションの1室の様な1人用の部屋に、生徒達の興奮はおさまらない。

「我が家のクローゼットと同じぐらいの大きさですわね。」

「豪邸やないかい!」

「麗日君!」

ただでさえ豪華な仕様の寮の部屋を、自身の家のクローゼットと同じ大きさと言ってしまふ八百万に驚き、麗日は再び卒倒してしまう。

「部屋割りはこちらで決めた通り、各自、事前に送ってもらった荷物が置いてあるから、

とりあえず今日は部屋作つてろ。明日また、今後の動きを説明する。以上！解散！」

「はい先生！」

と言うことで、これからの時間は各々自分の部屋作りをすることとなった。

各自、割り当てられた自分の部屋に向かつていく。

「おお、私は爆豪君の隣のようだね。」

「そうみてえだ、よろしくな。」

因みにウオズの部屋は4階の角部屋で、その隣は爆豪の部屋となっている。

他にもこのフロアには切島と障子も住むことになっている。

そして各々が自分の部屋の荷解きや部屋作りをしていくうちに、時間はあつという間に夜になった。

「うわー！疲れたー！」

「切島！荷解き終わったのか？」

「ようやくな！」

「お疲れ様。」

その夜、寮のリビングルームに集まる切島ら男子生徒達。

各々、上はシャツで下にジャージという部屋着コーデでゆっくりしている。

「経緯はあれだが、共同生活ってワクワクすんな！」

「うん！」

「共同生活！これも協調性や規律を育むための、訓練！」

「気張るな！飯田！」

共同生活も学びの一環であると捉えた飯田は、より一層気合が入っている様子だ。

「将来的な家事の練習にもなるだろうね。」

自分達で生活するということもあり、掃除や洗濯、料理と言った家事の練習をすることも出来るとうオズは分析する。

「男子！部屋出来た〜？」

「ああ！寛ぎ中〜」

そんな男子たちの前に、部屋作りを終えた女子6名がやってくる。

「あのね！今女子で話してて…」

「提案なんだけど！」

「お部屋披露大会しませんか？」

芦戸を中心とした女子達が提案してきた、部屋の見せ合い。

それを聞いて出久、常闇、峰田は顔を真っ青にして固まる。

「あーダメダメダメ!!ちよつと待って！」

1番最初に女子達が目を付けたのは、2階にある出久の部屋。

そこに皆が入っていかないように、必死に止める出久だが、お部屋披露大会をしたい女子達や……

「我が魔王の部屋！興味があるね！」

出久の部屋に興味津々のウオズによって強行突入される。

「おぉー！」

「オールマイトだらけだ！」

その部屋の中は、様々な時代のオールマイトのフィギュアや、ポスターで埋め尽くされている。

「オタク部屋だ！」

「憧れなので……」

麗日の言葉に、出久は顔を真っ赤にして目を逸らす。

（こんなに、俊典に憧れてくれるのは、師匠としても嬉しいことだけだね。）

（それにしても多くないか？）

俊典だらけの部屋に、志村の精神体も少し喜んでいますが、煙の方は少し引いている。

「恥ずかしい……」

「やべえ、何か始まりやがった！」

「ちよつと楽しいぞコレ。」

上鳴や瀬呂等他の男子も既にこの状況を楽しみ始めている。

「フン、下らん。」

続いてルームツアーの一行が目をつけたのは、同じフロアの常闇の部屋だ。扉に常闇が腕を組んでもたれかかり、彼女らの侵攻を止めようとしている。

「アツ……！」

しかし、常闇は芦戸と葉隠に押し退けられてしまつてそのまま、部屋への侵入を許してしまふ。

「黒……わッ！」

全体的に暗く、中二病全開な常闇の部屋。

「このキーホルダー！中学ん時に持つてたわ！」

「私も、観光地の土産で買ったことがあるよ。」

魔剣を模したキーホルダーに、興味津々な切島とウオズ。

「男子つてこういうの好きなんだね！」

「出ていけ！」

芦戸らの言葉に恥ずかしくなつた常闇は、彼女らに出ていくように促す。

「お！剣だ〜カッコいい！」

「出ていけ!!」

さらに、常闇が用意した剣の装飾に出久はかなり目を引かれている。

「アハハハーン！」

「眩しい！」

続いて一行が向かった青山の部屋は、かなり眩しかった。

全体的にキラキラしてるし、絵画や鏡の額縁も黄金だ。

「ノンノン！眩しいじゃない、マ・バ・ユ・イ！」

「思ってた通りだ。」

「想定外の範疇を出ない！」

葉隠、芦戸らはあまり関心がなさそうに、早々に青山の部屋を出る。

「楽しくなってきたぞー！後二階の人はー」

お部屋披露大会にノツテきた女子達はこの2階の最後の部屋を見ようと、そちらの方

を見るが…

「入れよ…すげえのを見せてやるよ…」

そこは目が血走った峰田の部屋だった。

「ケロ、3階に行きましょう。」

「入れよ…なあ…」

何かを察した蛙吹が、早々に峰田から離れるように皆を連れて次のフロアに向かう。

男子棟の3階は、尾白、飯田、上鳴、口田らの部屋があったが、ここで主に好評だったのは口田の部屋の兎ぐらいで、尾白は普通、上鳴はチャライとデイスられてしまった。「ていうかよお、釈然としねえ。」

「奇遇だね。俺もしないんだ、釈然。」

「そうだな…」

「僕も！」

お部屋披露会がこのまま進行していくかと思われたが、部屋に関してデイスられたりした上鳴、尾白、常闇、青山が不満を唱え始める。

「男子だけが言われっぱしってのは変だよな？お部屋披露大会つつたよな？」

そして、そんな彼らの意見を代表するように、峰田が女子達に迫る。

「女子の部屋も見て決めるべきじゃねえか？誰がクラス一のインテリアセンスの持ち主か、全員で決めるべきなんじゃねえのか!？」

峰田の場合は、ただ女子の部屋を見たいだけであるが、女子の容赦ない論評に不満を持つ男子たちの支持を得てしまっていた。

「良いじゃん！」

「え？」

なお、女子も女子でノリが良くその提案に乗ってしまい、全く興味のないクラスメイ

トも巻き込んで、第一回、A組ベストセンス決定戦が今始まる！

「さて、次は私の番の用だね。」

ということでも女子も含めて競い合うことが決まったベストセンス決定戦の先陣を切るのは、ウオズである。

4階に向かった一行は早速、その手前側にあるウオズの部屋に向かう。

「では、ご照覧あれ！我が部屋を！」

「おおー！」

ウオズの部屋の装飾や家具は、比較的シンプルであるが、それ故に勉強用の机の横にある水槽に目が向けられる。

「私御自慢のアクアリウムだ。良いだろうか？」

「素敵だね！」

「癒される〜」

その水槽の中には色とりどりな多数のメダカが住んでおり、ウオズが用意した流木や水草と言った装飾の周りを泳いでいる。最新の浄水装置を使っているためか、水質も良い状態で保たれている。

「メダカちゃん達もウオズ君のお陰で快適に泳げてるって。」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。勉強や戦いの疲れを癒してくれてるのだから、良い環

境を作らねばだね。」

口田を通してメダカ達の満足の声を聞いて、ウオズも嬉しそうに微笑んでメダカ達に餌を与えていく。

「ウオズ君のこのアクアリウムも中々の癒しだったね。」

「ウチも勉強行き詰まったら寄ろうかな…」

「是非私も、お邪魔させていたきたいですわね。」

口田のウサギや、ウオズのメダカは女子達から癒し要因として重宝されることになりそうだ。

比較的好評なウオズの部屋の後は、その隣のこの男の部屋となる。

「爆豪君の部屋、あんま予想できへんな…」

「つつても、おもしろえもんはねえぜ。」

爆豪の部屋がどう言った内装なのかあまり想像できぬまま、その部屋の扉が開かれる。

「「キャンプ場?!」」

爆豪の部屋のだ真ん中にあっただのは、寝袋やテントと言ったキャンプ道具や、他にも登山道具の様なものが幾つも散見される。

「そういえば、登山が趣味と言っていたね。」

「まあな、キャンプ系のも買い揃えてたしインテリアに使ってみた。」

「すごい！これって相澤先生も使ってる寝袋だ！」

爆豪が揃えたキャンプ道具の数々に、出久やウオズ達は絶賛の声を送る。

その後も切島の暑苦しい部屋や、障子のほとんど何もない部屋に、瀬呂の以外にもお洒落なこだわり満載部屋を堪能した一行は轟の部屋に向かう。

「次は轟さんですわね。」

（クラス屈指の実力者。）

（クラス屈指のイケメンボーイ！）

（クールな轟君の部屋！ちよつとドキドキ！）

クラス内でもトップクラスのイケメンである轟の部屋と言うこともあり、女子達も少しドキドキしている。

「さっさと済ましてくれくれ、ねみい……」

「わ！和室だあ!?!」

その扉を開いたところに広がっていたのは、これまで巡ってきた部屋とは全く違う和装の部屋であった。

フローリングは畳に張り替えられ、壁も天井も和風だ。

「作りが違くない?」

「実家が日本家屋だからよお、フローリングは落ち着かねえ。」

轟家はかなり立派な日本家屋であるが、彼はそれに合わせたそうだが：

「理由はいいわ！」

「当日即リフォームって、どうやったんだお前?！」

約半日程で内装を和風にしたことに、上鳴や峰田は突っ込まずにはいられない。

「頑張った。」

「なんだよこいつ?！」

だがこれは轟本人なりに頑張った結果であり、あまり不思議には思っていない様子だ。

「んじゃあ次!男子最後は!」

「俺…」

かなり衝撃的な部屋を披露し、爪痕を残した轟の後に部屋を披露するのは砂藤力道。

轟の後に披露することになってしまい、酷評を心配している様に部屋に女子達を案内する。

「まあ、つまんねえ部屋だが。」

「轟の後ならだれでもそうなるぜ。」

その砂藤の部屋は普通の内装で、強いて言うならお菓子作りの道具が幾つかある程度

だ。

「ていうか、良い香りするけどこれ何？」

「ああ！いけねえ忘れてた！大分早く片付いてたんでよお、シフォンケーキ焼いてたんだ。」

尾白に部屋からする良い匂いを指摘されると、砂藤は慌てた様子でオーブンの扉を開ける。

「皆食うかと思つてよ、ホイップがあるとつと美味いんだが、食う？」

「「食う〜！」」

「「ただくとしよう！」」

「「模範的意外な一面かよ！」」

砂藤の意外な一面に上鳴達が驚きつつも、女子達やウオズはシフォンケーキに食いつく。

「ふわふわ〜」

「ポーノ、ポーノ。」

「瀬呂のギャップを軽く凌駕した。」

「ケロ、ホイップが無くて甘くて美味しいわ。」

「素敵なお趣味をお持ちですね、砂藤さん。今度私の紅茶と合わせてみませんか？」

「おお、こんな反応されるとは！」

シフォンケーキを食べる女子達は、その柔らかさと甘さに笑みを浮かべながら食を進めていく。

次々と女子達から上がる絶賛の声に、砂藤は顔を赤らめていく。

「砂藤君！おかわりをいただこうか！」

「お前は食いすぎだ。ウオズ。」

「それに皆が全部食べちゃったよ……」

女子達に紛れてちやつかりシフォンケーキを一口食べたウオズは、さらにおかわりを要求して爆豪と出久に止められる。

こうして、男子棟の部屋巡りが終わり、今度は女子棟に向かつていく。

各々の部屋を男子部屋と同様下の階から順番に回っていき、男子も女子もそれぞれの部屋を見学していく。そして、最上階の女子の順番になる。

「ケロ、じゃあ次は私ね。」

そして次は、蛙吹の部屋に入っていく。

「おおー！蛙部屋だ！」

その部屋には可愛らしい蛙のポスターやぬいぐるみがあり、彼女の個性でもある蛙らしさが押し出された部屋となっている。

「なんか、こうあまりにも普通に女子部屋見て回っていると、背徳感出てくるよね。」

「禁断の花園…」

この様に普通に女子の部屋を見て回っていると、峰田に乗ってしまった尾白や常闇は申し訳なさを感じ始めてしまう。

「んじや、最後は八百万か!」

「それが、私見当違いをしてみました…皆さんの創意溢れるお部屋と比べまして、少々手狭になってしまいましたの…」

最後に部屋を紹介することになったのは八百万で、少し恥ずかしそうな様子で自室の部屋を開ける。

すると、その部屋の真ん中に鎮座していたのは、巨大で高級感あふれるベッドであった。

「でっけ!セつま!どうした八百万!」

上鳴が驚く通り、このベッドが大きすぎて部屋の大半のスペースを占領していて狭く感じてしまう。

「私の使っていた家具なのですが、まさかお部屋の広さがこれだけとは思っておらず…」

（（お嬢様なんだね。））

お嬢様として育っていた八百万にとって、庶民的な暮らしというのは初めてだ。

そんな彼女を、出久達は優しい目で見てやるのであった。

「えー皆さん！投票はお済でしょうか？」

そして、1階の共用スペースに戻ったA組の面々は、各自A組1番のお部屋センスを決める投票を行っていた。

「自分への投票はなしですよ！」

投票用紙を集計した芦戸が、そのまま司会を務める。

「それでは！第一回部屋王の発表です！」

今から1位の発表と言うことで、場に少し緊張感が走る。

「得票数7票！圧倒的独走単独首位を叩き出したその部屋は！砂藤力道！」

「はあ!？」

圧倒的な支持を得て、部屋王となったのはなんと砂藤であった。

そのまさかの結果に、本人も驚きを隠せないようだ。

「因みに女子全員とウオズ君が投票！理由はく〜ケーキ美味しかった〜だそうです
!。」

「部屋は!？」

「「テメエヒーロー志望が贈賄してんじやねえ!!」」

まさかの部屋ではなく、ケーキで選ばれてしまった砂藤。

峰田と上鳴も、砂藤の方を責め立てる。

「知らねーよ！なんだかさげえ嬉しい！」

「それより砂藤君。おかわりをいただごうか。」

「だからお前は食いすぎだ！クソだ！」

部屋王になれて喜ぶ砂藤に、再びウオズがおかわりを要求する。

まだまだ食べる気のウオズに、爆豪も突っ込むように頭を叩く。

こうして、雄英高校1年A組の新たな学校生活が始まるのであった。

第61話 TDL

新たに寮生活が始まった雄英生達。

徒歩5分で寮から学校に向かうことが出来るため、家にいた頃よりもゆつくりとした時間に出発してこれまで通りの朝のホームルームの時間に間に合わすことが出来る。

「昨日話したと思うが、1年A組は仮免取得を当面の目標とする。」

「「はー！」」

神野での戦いの後、力尽きてしまったオールマイトは引退状態となった。

それ故にヒーロー社会の動きもまた変わってきて、早急な次世代の育成が課題となってきた雄英高校ヒーロー科は1年前倒しでの仮免試験を受けることとなった。

「ヒーロー免許つてのは、人命に直接かわる責任重大な資格だ。当然、取得のための試験はとて厳しい。仮免と言えど、その合格率は例年5割を切る。」

「仮免でそんなキツイのかよ……」

「そこで、今日から君らには1人最低2つ……必殺技を作ってもらおう！」

相澤からの指令と共に、ミッドナイト、セメントス、エクトプラズムら3名が教室に入ってくる。

「必殺技!?!」

「学校つぼくてそれでいて!」

「ヒーローつぼいのキター!!」

必殺技と言う響きに、主に男子生徒達は興奮してテンションが上がっている様子だ。

「必殺、必ズ殺ス技、スナワチ必勝ノ事ナリ」

「その身に染みつかせた技、型は他の追隨を許さない。戦闘とは、いかに自分の得意を押し付けるか。」

「技は己を象徴する。今日日必殺技を持たないヒーローなんて、絶滅危惧種よ。」

エクトプラズム、セメントス、ミッドナイトの3人が必殺技の重要性を説いていく。

「詳しい話は実演を交え、合理的に行いたい。コスチュームに着替えて体育館γに集合だ!」

そして、相澤の指示に従って生徒達は、コスチュームに身を包んで体育館γへと足を運ぶ。

「体育館γ、通称トレーニングの台所ランド…略してTDL」

(TDLはまずそうだ…)

とある会社から怒られてしまいそうな略称ではあるが、必殺技を作るには最適の環境だ。

「ここは俺考案の施設。生徒1人1人に合わせた地形や物を用意できる。台所つてのはそういう意味だよ。」

「なるほど…」

「質問をお許しく下さい！何故仮免許の取得に必殺技が必要なのか！その意図をお聞かせください！」

TDLのことを説明するセメントス達に飯田が質問を投げかける。

「順を追って話すよ、落ち着け。ヒーローとは、事件、事故、天災、人災、あらゆるトラブルから人々を救い出すのが仕事だ。取得試験では当然、その適正を見られることになる。情報力、判断力、機動力、戦闘力；他にもコミニケーション能力、統率力など様々な適性を試される。」

「その中でも戦闘力はかなり重視される項目になります。備えあれば憂いなし。技の有無は合否に大きく影響する。」

相澤の説明に、ミッドナイトが補足を加える。犯罪者；即ちヴィランとの戦闘と言うのはヒーローにとって最も多い仕事と言えるだろう。それ故に戦闘力の項目は重要になってくるし、重視されるからこそ必殺技を作つて高めなければいけない。

「状況に左右されることなく、安定行動を取れば、それは高い戦闘力を有していることになるんだよ。」

「技ハ必ずシモ、攻撃デアル必要ハナイ。例エバ飯田君ノレシピロバースト…一時的ナ超速移動、ソレ自体ガ脅威デアルタメ、必殺技ト呼ブニ値スル。」

「あれ必殺技で良いのか…!?!」

エクトプラズムが、飯田のレシピロバーストもある種の必殺技であると説き、その事実には飯田自身も驚きつつも受け入れる。

「なるほど、自分の中にこれさえあれば有利、勝てるって型を作ろうって話か。」

「その通り！先日大活躍したシンリンカムイのウルシ鎖牢なんか、模範的な必殺技よ。相手が何かする前に、縛っちゃう！」

神野で偽物であったとはいえ、ヴィラン達を一時的に捕縛することに成功したシンリンカムイ。

その手段であったウルシ鎖牢も、戦いを優位に進めることが出来る必殺技の1つと言えるだろう。

「中断されてしまったが、林間合宿での個性を伸ばす訓練は、必殺技を作り出すためのプロセスだった。つまり、これから後期始業まで、残り10日余りの夏休みは、個性を伸ばしつつ必殺技を編み出す…圧縮訓練となる！」

その訓練をサポートするために、セメントスは個性のセメントで岩場の様な地形を作り出し、エクトプラズムは自分の分身達を生成していく。

「なお、個性の伸びや技の性質に合わせて、コスチュームの改良も並行して考えていくように。Plus Ultraの精神で乗り越えろ。準備は良いか！」

「「はい！」」

「ワクワクしてきたー！」

ということ、相澤先生の指示で始まった必殺技を作るための訓練。

爆豪君は自身の個性である爆破を、我が魔王はオールマイイトから受け継いだワンフォーオールの強化をそれぞれしていくことになった。

「蹴りを主体にした戦い方か！良いねえ！」

「ありがとうございます！」

我が魔王はこれまでのパンチ主体であったワンフォーオールの、蹴りでも上手く活用する特訓をしている。パンチスタイルに加えてシユートスタイルの取得。

更には他の歴代継承者の個性の覚醒も、目標の1つとなってくる。

我が魔王はグラウンドジオウに変身し、仮面ライダーゴーストを召喚。そのゴーストにワンフォーオール歴代継承者の志村菜奈の精神体を憑依させて特訓に付き合っても

らっているようだ。

「さて、私も張り切っていいこうかな。」

「ああ、かかってこい！」

一方、私と相對するのはもう一人の歴代継承者である煙と言う男が憑依した、仮面ライダービルドだ。

さて、爆豪君や我が魔王と違って仮面ライダーの他に戦力のない私は、ライダーとしての戦闘力を上げることが今回の課題となる。

「ハアッ！」

まずは私の方から攻撃を仕掛ける。

ビルドとの距離を詰めてから、右ストレートパンチを打ち出す。

「おっと、危ない危ない。」

だがこのパンチをあっさり避けられてしまい、体制を崩しかけたところでビルドの蹴りが放たれる。

「ッ……！」

そのキックを両腕をクロスさせてガードするが、少し体が後ろに退いてしまう。

「まだまだ！」

さらに間髪入れず、ビルドはドリルクラッシュャーをその手に持って私に向けて突き攻

撃を放つ。

『ジカンドスピア!』

そこで私はジカンドスピアをその手に構え、その柄部分でドリルクラツシャーを弾く。

『ヤリスギ!』

さらに、ジカンドスピアをヤリモードにして、ビルドの胸部を狙って突きを繰り出す。「良いやり捌きだね。俺もノツてきた!」

今度はドリルクラツシャーをガンモードにして、私目掛けて銃で撃ってくる。

「銃には銃だ!」

『ギーツ!』

『ブースト!』

『アクシオン!』

ビルドが銃撃によって私との間の距離を取って来たので、ここはギーツの力で対処するでしょう。

2つのギーツミライドウオツチを連結させて、ビヨンドライバーに装填する。

『投影!フューチャータイム!』

『ブースト!&マグナム!』

『フューチャーリングギーツ！マグナム！ブースト！』

私の切り札的形態である仮面ライダーウオズ・ヒューチャーリングギーツブーストへと姿を変えると、ビルド目掛けて両腕のマグナムアームドシューターから弾丸を連射していく。

「遠距離でも武器があるのは良いけど、これはどうかな？」

とここで、彼の個性の煙幕が発動。

私の周りが煙に包まれてしまう。こうなると相手の姿を見失ってしまい、私も迂闊に手を出せない。

（まずは、相手の位置を捕捉するのに集中しよう…）

どこから相手が来るのか警戒しつつ、いつでも撃てるように両腕のマグナムアームドシューターによる射撃の準備をする。

「そこかー！」

僅かな足音で相手がいる方向を推測し、そちらに向けて銃口を向けて弾丸を放つ。

「見事だね…」

その銃弾はビルドに直撃したようで、火花を散らしながらビルドが膝を付く。

「じゃあ、今度はこれでどうかな？」

『ゴリラ！ダイヤモンド！ベストマッチ！』

とここでビルドはベストマッチのゴリラダイヤモンドフォームに変身し、更なる攻撃を仕掛けてくる。

こういつた感じでTDLで私と煙ビルドの組手は続いていく。

「ウオズ君、今日もお疲れ様。」

「こちらこそ、お疲れ様だよ。我が魔王。」

特訓開始から2日目。

それぞれその日の行程を終えた出久とウオズは、2人で寮の風呂に浸かってその日の疲れを癒しながら特訓について振り返る。

「我が魔王の方の特訓は順調かい？」

「シユースタイルの方の確立は順調だよ。」

仮面ライダーに変身した際は、パンチだけでなく蹴りも多用して使うことが多い。

それこそ、必殺技がライダーキックと言うことだけあって、蹴りに特化した戦いもしやすい場合もある。ジオウの場合、ジカンギレードやライドハイセイバー等の武器を使いながらの戦いも多いことを考えれば、パンチよりもキックとワンフォーオールを掛け

合わせた戦法を必殺の型として身に着けることにした。

「シユートスタイルの完成、それを見れるのが楽しみだよ。」

「うん、けど問題はもう1つの個性の方かな…」

蹴りを強化するシユートスタイルの確立に加え、出久にはもう1つの課題があった。

「ワンフオーオール5代目継承者である万繩大悟郎の個性、黒鞭か…」

それは、歴代継承者の個性をまた1つ使えるようになることである。

オールマイトが既に調べていた歴代継承者の1人である、5代目万繩大悟郎の個性を出久に発現させることも現状の彼らの目標の1つである。

「うん、黒鞭も発現できれば戦いの幅広がりそうだし、頑張らないと…」

オールマイトが残した資料によって学んだ、万繩の個性は中距離での戦闘に於いて活かしやすい。

使えるようになると、出久の戦いの幅をさらに広げることが出来る。

「それに、黒鞭が出てからの特訓もやらないと…」

「確かに、使いこなせるようにならなければ意味はないからね。」

「うん、そうなるかと瀬先生とか瀬呂君、後はウオズ君にも教えてもらわないとね。」

「私かい？」

出久が黒鞭の使い方を学ぶにあたって、アドバイスを求めたいと言われたウオズは驚

いたような表情を見せる。

「何故私なんだい？」

「だってほら、中学の時とかウオズ君マフラーで色々やってたし！」

嘗ての折寺中学時代、ウオズは仮面ライダーの力よりも平常時に自身が装備しているマフラーをよく活用していた。当時の爆豪始め多くのクラスメイト達はウオズの個性がマフラーであると思込んでいたレベルだ。何なら今この風呂の中でも首に着用されている状態だ。何故濡れないのかは企業秘密だが。

「そうかそれだ！すっかり盲点だったよ！」

「きゅ、急にどうしたの!？」

「湧き上がってきたんだよ…私の必殺技の案がね！」

出久の言葉で必殺技のアイデアが浮かんできたウオズは勢いよく湯船から立ち上がり、脱衣所へと向かっていくのだった。

その後も必殺技を作るための訓練は進んでいき、その途中サポート科の生徒に頼んでコスチュームを改良した者も居た。

「纏え！ 黒影！」
ダークシャドウ

『ハイヨ！』

特訓開始から5日程経てば、必殺技の型が出来てきた者が始める。

「ダークシャドウを纏うことで、弱点であるフィジカル、近接をカバー。名付けてしんえんあんく深淵闇軀」

「言いつらくない？ 技名は言いやすさも大事よ。」

『ハイヨ！』

常闇の新たな必殺技は、ダークシャドウを自分自身に纏わせて強化するというものであったが、その技名にミッドナイトはやや難色を示している。

「ようやくスタイルを定め始めた者も居れば、既に複数の技を習得しようとしている者もいます。」

この日はオールマイトが見学に来ており、その特訓の様子を相澤が彼に説明している。

(掌全体じゃなく、一点に集中し起爆…)

A.P.ショット
 「徹甲弾！」

爆豪の編み出した必殺技は、掌の中で起爆する部位を絞り、一点集中した爆撃を放つというものであり、それで岩の塊を撃ち抜く。

「ハッハー！できたあ！」

「爆豪少年は相変わらずセンスが突出しているな。」

この特訓の期間、爆豪は仮面ライダーに変身せず、自身の個性を高めて必殺技も作り出していた。

「おい上！」

だがその時、爆豪が撃ち抜いた岩の一部が割れ、下にいるオールマイトに向けて落ちていってしまう。

「スマーツシユ！」

その時、それに気付いた仮面ライダージオウが飛び出してきて、その岩を蹴り砕く。

その姿を見たオールマイトは安堵したような笑みを浮かべる。

「祝え！緑谷出久の新たな戦法、その名もシユートスタイルの確立を！」

そのオールマイト達の横に突然現れたウオズが、出久の新スタイルに祝福を送る。

「ウオズ少年!?!いつからそこに?」

オールマイトがウオズの方を向くと、そこにいるウオズの姿にも変化があった。

仮面ライダーウオズの首には、彼が変身前に巻いているマフラーが装着されていた。

「こちら結構便利なマフラーだね、変身時にも使ってみることにしたよ。私の新たな必殺の型、その名も仮面ライダーウオズ、マフラースタイル！」

ウオズはマフラーで自身の身を包み込むと、一瞬でその場から姿を消す。

「やあ。」

「いつからそこに!?!」

と、今度は爆豪の後ろに瞬間移動してくる。

ウオズの新技に、爆豪や相澤も驚きを隠せない。

こうした新しい技や戦いの型を、A組メンバー達は確立していき、仮免試験に臨むのであった。

第62話 仮免試験開始

仮免試験に向けた日々を送る雄英高校1年A組。

この日の訓練を終え、風呂で疲れを洗い流した女子生徒達は共用スペースのソファに座ってリラックスしていた。

「毎日毎日大変だ〜」

「圧縮訓練の名は伊達じゃないね!」

芦戸は日々の訓練で疲れているようで、ソファにもたれかかって背筋を伸ばしている。

「とは言え、仮免試験まで一週間も無いですわ。」

「ヤオモモは! 必殺技どう?」

「やりたいことはあるのですが、まだ体が追い付かないので、少しでも個性を伸ばしておく必要がありますわ。」

葉隠の問いかけに答える八百万だが、彼女は林間合宿での訓練の続きの範囲で止まっています。浮かない表情をしている。

「梅雨ちゃんは!」

「私は蛙らしい技が完成しつつあるわ。きつと透ちゃんもビックリよー!」

「お茶子ちゃんは!?!」

蛙吹の言葉を聞き、期待に胸を膨らませた葉隠が同じ質問を麗日にもするが、彼女はどこか別の方を向いていて言葉が聞こえていないようだ。

「お茶子ちゃん?」

「わわー!」

「お疲れのようね?」

ボーっとする麗日のことを、蛙吹が指でつついて気付かせると、麗日は驚いたように声を上げる。

「いやいやいや! 疲れてなんかいられへん! まだまだこっから! …のはずなんだけど…」

意気込んだ様子の麗日であったが、徐々に言葉尻をすぼめていつてしまう。

「なんだろうね…最近心がざわつくことが多くてね…」

頬をピンク色に染めて、ふとため息をつく。

「恋だ!」

「な、何?! 故意?! 濃い?! 鯉?! なんも知らん!」

麗日のざわつく心をつくような芦戸の直球な答えに、麗日自身汗を流しながら慌てふ

ためいてしまう。

期末試験でペアを組んだ青山から、「緑谷君のこと、好きなんですよ？」と言われてから彼女は出久のことを意識してしまっている。

「お相手は緑谷か飯田？一緒にいること多いよね！」

「ちやうわ！ちやうわ！」

芦戸が絞り込んだ相手の中に、該当者である出久の名前があつたためか、麗日は顔を真つ赤に染めてそれを両手で覆い隠す。

「ちやうわ、ちやうわ、ちやうわ……」

「浮いた……」

動揺した麗日は自身に個性を使つてしまい、顔を隠したまま宙に浮いていく。

「誰……どっち？誰なの……」

「ゲロつちまつた方が罪軽くなるよ」

「ちやうよホントに！私そういうのわからんし！」

この話に興味津々な葉隠と耳郎がさらに問い詰める。

「無理に詮索するのはよくないわ。」

「ええ、それより明日も早いですしもうお休みしましょう。」

それに対し、良識的な蛙吹と八百万は話を切り替えて明日に備えて解散しようとする

る。

「そんなこと言って、ヤオモモだつて最近ウオズ君のことメツチャ見てるじゃん！」

「そ、そんなことは!？」

芦戸からカウンターの様な一言を突き付けられると、八百万も顔を真っ赤にして両手で覆い隠す。

神野でウオズに救われてから、八百万はウオズに見惚れてしまっていた。

「いつから〜」

「いい、言えませせんわ!ともかく本日は寝ますわ!」

恋の話題が自分に移ってしまい、八百万は強引に自分の部屋に戻って逃れようとする。

そんな彼女に付いて行くように、蛙吹と麗日も部屋に戻っていき、この日の女子会は解散となった。

訓練の日々は流れ、仮免試験当日。

雄英高校1年A組のメンバー達は試験会場である多古場競技場に来ていた。

「ううゝ試験つて何やるんだろゝ緊張してきた…」

「峰田、取れるかじゃない。取つてこい。」

「も、モロチンだぜ！」

緊張している様子の峰田に、相澤が励ましとも取れる言葉をかける。

峰田は返す言葉を少々間違えている様だが…

「この試験に合格し、仮免許を取得できれば、お前たちは卵からひよっこ、つまりはセミプロへと孵化できる。頑張つてこい！」

「じゃあ！なつてやろうぜひよっこによう！」

「いつもの一発決めていこうぜ！」

相澤の言葉に上鳴と切島は奮い立ち、気合を入れようとするが…

「せーの！Plus…」

「Ultra！」

いつもの雄英の掛け声に、見知らぬ制服の男が参加してくる。

「勝手に人様の円陣に加わるのは良くないよ、イナサ。」

「ああ！しまった！」

その男子を注意するのは、同じような制服に身を包み、制帽を被る紫髪の男だ。

その他にも同じ制帽を被る茶髪の女子と毛むくじやらの男子も居る。

「どうも！大変失礼いたしました！」

切島の円陣に勝手に参加する、イナサと呼ばれる体格の良い男が頭を下げると、勢い余って彼の頭が地面に激突し、制帽が脱げて坊主頭が露になる。

「なんだこの！テンションだけで乗り切る感じの人は！」

「待って…あの制服。」

「西の有名な…」

「東の雄英、西の士傑！」

イナサを始めとする集団の制服に見覚えのある者達がちらほらいた。

その原因は東の雄英、西の士傑と呼ばれるほどの有名なヒーロー科高校の制服であったからだ。

「一度言ってみたかつス！P i u s U i t r a !自分！雄英高校大好きつす！雄英の皆さんと競い合えるなんて光栄つス！よろしくお願いします！」

「あ、血…」

「行くぞ…」

雄英生達と競い合えることで、高揚している様子のイナサだが、その額からは血が流れている。

彼は他の士傑生に連れられ、会場の方に向かう。

「夜嵐イナサ…」

「先生…知ってる人ですか？」

「あれは、強いぞ。夜嵐は昨年度、つまりお前達と同じ代の推薦入試でトップで合格したものの、何故か入学を辞退した男だ。」

「我々の世代の推薦1位…即ち轟君や八百万君に勝る実力があるということか…」

目の前に登場した強敵の存在に驚きつつ、ウオズ達も会場に向かうのであった。

「しかしながら、中々厳しい条件になっていたね。」

試験内容の説明を聞き終えたウオズ達は、演習場に入りながらその準備を進めている。

先程、公安の目良と言う男から試験の説明を受けていたのだが、勝ち抜け式の1次試験を突破できるのは1540人の受験者の内100名だけと言われてしまった。これは前々から聞いていた合格率5割よりも狭き門になっており、A組のメンバーも動揺を隠せない。

「関係ねえ、勝っただけだ。」

だが、いくら門が狭くなるうと、突破することに変わりはないと、爆豪は自身の腰にジクウドライバーを巻く。

「うん、かつちゃんの言う通りだね！」

「ああ、落ちる気は一切ないさ。」

出久とウオズもその気持ちは変わらない。

試験に挑むために、各々の変身ベルトを腰に巻いていく。

『ジオウ！』

『グランドジオウ！』

『ゲイツ！』

『ディエンド！』

『シノビー！アクシオン！』

そして3人はそれぞれのライドウォッチを起動させていく。

『(アークル) (オルタリング) アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！(音角) CHANE BEETLE！ソードフォーム！ウェイクアップ！カメンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドウビタッチヘンシーン！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！ライダータイム！』

「「変身！」」

そして3人が一気にベルトを操作する。

『グランドタイム！クウガ！アギト！龍騎！ファイズ！ブレイド！響鬼！カブト！電王！キバ！ディケイド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武！ドライブ！』

『ゴースト！エグゼイド！ビルド！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！』

『投影！誰じゃ？俺じゃ？忍者！』

『祝え！仮面ライダー！グランドジオウ！』

『アーマータイム！』

『カメンライド！』

『ディエンド！ディエンド！ディエンドー！』

『フューチャーリンググシノビ！シノビ！』

そして、出久が仮面ライダーグランドジオウに、ウオズが仮面ライダーウオズ・フューチャーリングギーツブーストに、爆豪が仮面ライダーゲイツ・ディエンドアーマーに姿を変えていく。

「で、これが今回のターゲットみたいだね。」

1次試験のルールは全員参加のボール当てである。

受験生は体に3つのターゲットを付けて試験に挑み、他の受験生が持つボールを当てられてしまうと、脱落と言うことになる。

3人を脱落させた者から勝ち抜けとなり、先に勝ち抜け出来た100人が2次試験へと進める。

変身した3人は、ライダーのスーツの上からそのターゲットを張り付ける。

「皆！あまり離れず塊で動こう！」

「ああ！任せろ！」

そして他のクラスメイト達と合流した出久達は、全員で1塊になって動くことを提案する。

手の内を分かりあっている上に共同で生活している関係性のA組内で潰し合うよりもチームアップして他校との対抗戦に持つていく方が得策と考えた。それに、恐らく他校も同じ考えであると予想する。

「わりいけど、俺は抜けさせてもらおう。大所帯じゃかえって力が発揮できねえ。」

「轟君！」

だが、その集団から轟だけ離脱することにした。

「君なら確かに、大規模な攻撃を仕掛けるからね。我々と離れるのも得策か。」

轟は炎や氷を大規模に放つことが出来る反面、それにクラスメイトを巻き込む恐れが

ある。

「轟君、必ず受かって二次試験で会おう。」

「当然だ。」

そのことを理解したウオズに送り出され、轟だけ単独行動を選ぶ。

「緑谷！速く行こう！」

「うん！けど、単独で動くのは良くないと思うんだ。」

峰田に促されて出久達は試験会場に向かって走り出すが、出久は単独行動を選んだ轟のことを心配している。

「なんで？」

「だってほら僕達、手の内がバレてると思うんだ。」

「バレてるって？」

「そうか！体育祭か！」

他校と違い、雄英では毎年体育祭が中継されていることで、生徒達は自身の個性や戦い方を知られてしまっている。

「それに私や我が魔王の能力も良く知られてるだろうね。」

それに加え、神野での戦いが中継されていたためか、グランドジオウやウオズ、ゲイツの新たな力も既に世間に知れ渡っている。

「さっきも言った通り、学校単位での対抗戦になると思うんだ。そしたら次は、どこの学校を狙うかって話になると思うんだ！」

「それって！」

「もしかして！」

『第一次試験。スタート。』

対策が練られやすく不利な状況の雄英生を狙わない学校は少ない。

そんな自分達の状況を、A組メンバーが理解し始めたその時、試験開始を告げるチャイムが鳴る。

「テレビで見たよ！他の仮面ライダーを呼び出すのその力を！まあ、杭が出ればそりや打つさー！」

傑物学園高校ヒーロー科2年の真堂揺とそのクラスメイト、及び他校の生徒達が一気に出久達雄英高校1年A組を急襲する。

『ウイザード！』

『ダブル！』

いきなり多数のボールが出久達に向けて投げられるが、出久は冷静にダブル・サイクロンジョーカーと、ウイザード・ハリケーンスタイルを召喚する。

『サイクロン！マキシマムドライブ！』

『ディフェンド・プリーズ』

だが、飛んでくるボールの雨はウィザードとダブルが作り出した竜巻に飲まれ、呆気なく防がれる。

「ダークシャドウ！」

「A・Pシヨット！」

出久に続く様に常闇や爆豪を始めとするクラスメイト達も、他校による雄英潰しに対処していく。

飛んでくる球を撃ち返す者も居れば、防いで凌ぐ者もいる。

「今回の必殺技作り、編み出しておいて正解だったよ。」

そんな中ウオズは、落ちてきたボールを幾つか回収すると、攻勢に転じる。

「消えた！」

マフラーを伸ばし、自身の身体を包み込んでしまえば、全員の前からその姿を消す。

「これは対策できないだろうね。」

その時、雄英を狙っていた5人の小集団の背後に現れたと思えば、その内の1人のターゲット3つにすかさずボールを当てて脱落させる。

「中野がやられた！」

仲間がやられたことに関して驚きつつも、すぐに敵を討つためにウオズに向けてボー

ルを投げつける。

「変わり身の術。」

だが、ウオズが居たところには既にカカシの様なものしかない。

「こんなにボールをくれて助かるよ。」

「しまった！」

彼らが投げたボールや、他の学校の生徒が投げたボールをマフラーで回収し、既に多くのボールを手を持っている。

「分身の術！」

そしてシノビの力でウオズは分身し、分身達もボールを持って一気に投げつけていく。

『な、なんと！史上最速での突破だ！』

主催者の目良は、圧倒的なスピードで3人仕留めて試験をクリアしたウオズに驚きつつ、アナウンスをする。

『え〜クリアした人は…先に控室に移動をお願いします。』

「先に失礼するよ、皆。」

「早い！流石ウオズ君！」

さっさと試験をクリアしてしまったウオズは、そそくさと控室に戻っていく。

「もうやられた！一旦退こう！」

攻撃はA組のメンバーに防がれ、更には共に襲撃を行った仲間がやられてしまった事から、雄英生の集団とこのまま戦うのは不利と判断した真常は一時撤退を決断する。

「離れる！最大威力！震伝動地!!」

彼は個性によつて地面を揺らし、大規模な地割れと地震を同時発生させる。

「一回皆逃げるんだ！」

自分達が一度グラウンドジオウ等から離れ、尚且つ有利な状況を作り出すのに、真常の必殺技は最適であつた。

大規模な地震は地形すらも変えてしまい、雄英生達はバラバラに分かれてしまう。

「デク君！」

「麗日さん！」

そんな中、グラウンドジオウは近くにいた麗日の手を掴み、共に地震に？まれていくのであつた：

第63話 一次試験

「う、麗日さん…」

「デク君！」

真常が起こした地震攻撃で仲間たちとはぐれてしまったグランドジオウと麗日。

2人は地面から起き上がりながら周囲を見渡す。

「大丈夫…?」

「うん、けど皆とはぐれちゃったね…」

起き上がった2人が辺りを見渡すが、そこにはクラスメイトの姿はない。

各々が真常による攻撃から逃げた際に、離れ離れになってしまったらしい。

「一先ず、辺りを見てみないと。」

(だったら私に任せて。)

ジオウは浮遊の個性を使って宙に浮き、辺りに仲間や他校生が居ないか情報集めをしようとしたが、彼自身が浮けば格好の的になると思い、志村の精神体が代わりにやると申し出る。

「わかりました。」

『ゴースト』

グランドジオウが召喚した仮面ライダーゴーストに、志村菜奈の精神が乗り移る。

「それじゃあ、お願いします。」

「任せて！」

志村ゴーストが浮遊して周囲を見渡す。

「あっちの方向に君達のクラスメイトのセロハンテープの子がいて、逆に向こうには他の学校の子がいるわ。」

「ありがとうございます！」

「行ってみよう！デク君！」

志村ゴーストによって伝えられた情報をもとに、ジオウと麗日は瀬呂がいる方向に向けて走り出す。

「瀬呂君！」

「緑谷！それに麗日！」

2人はすぐに岩陰に隠れている瀬呂と合流することができ、一先ず安堵の表情を見せる。

「さっきの攻撃、大丈夫だった？」

「ああ、何とか凌げたけど皆とはぐれちゃった。」

「瀬呂君もウチらと状況は一緒みたいやね。」

3人共体のダメージはなく、ポイントも失っていない。

「つつても、やるべきことは分かっているだろ？」

「うん、ウオズ君の後も何人か試験をクリアしてるみたいだし、僕達も早く合格しないと……」

現在彼らは1540人中100人しか通ることのできない試験に挑んでいる。

ウオズを始め早々に試験を突破した者もあり、出久達も早くクリアしなければ不合格となってしまう。

「だったら、あつちにいる他の人達と……」

「戦うしかないね。」

先程出久達は志村ゴーストから、瀬呂がいるのとは反対方向に他校のグループと言う情報が齎されていた。他人を蹴落とすことになるとは言え、3人は戦う覚悟を決めて他校グループに向けて進行していく。

「で？ 作戦は？」

「まずは僕が情報を集めて、そこからだね。」

「また私の出番だね。」

「……」で志村ゴーストは再び浮遊して、他の受験生の様子を見に行く。

「数はざっと20人。恐らく1クラス分ってところね。」

「じゃあ、ちやうど俺達が合格できる分は居るってことか。」

出久、麗日、瀬呂の3人がそれぞれ3名撃破して合格となると9人はその場にいても
らう方が良いが、既に20人いるということは彼らを倒せば合格できる確率が高い。

「そうなるって作戦は…」

出久はこの3人でできる作戦を考え、それを麗日達に伝える。

その作戦を聞いた麗日達は、早速その戦法を実行するための準備に取り掛かる。

「それじゃあ、いくよー!」

準備を終えるとジオウは1人で他校生達が居る方向に向けて走っていく。

「いたぞ! 雄英の奴だ!」

そして、浮遊の個性を使った状態で宙に浮き、他校生達の前に現れる。

「一人で来やがって! 倒してやるぜ!」

他校生達がグラウンドジオウに向けてオレンジのボールを投げていく。

(ワンフォーオール! シュートスタイル!)

まずはボールの嵐を凌ぐため、ジオウはワンフォーオールのパワーを込めた足を振る
い、起こした風圧でボールを全て吹き飛ばす。さらにその風圧によって、身体を後退さ
せていくジオウ。

「追えー！」

そんな彼を狙う他校生達は、ボールを拾ってジオウに向けて走っていく。

「煙幕！」

岩場に囲まれた地に、他校生達を誘い出したジオウは、ここで煙幕の個性を発動する。

「み、見えない！」

ジオウが放った煙に包まれてしまった他校生達は、視界を奪われて混乱に陥る。

「解除！」

その時、麗日が浮かせていた岩が重力に引き寄せられて地面に落ちる。

その岩は煙に包まれた他校生に直撃こそしていないが、その岩に付けられた瀬呂のテープが彼らを拘束する。

「しまった！」

「逃げろ！」

煙幕が晴れた頃には、岩に着いたテープによって地面ごと拘束されてしまった生徒や、未だ捕まっていなくてなんとか闘争を試みる生徒もいる。

「捕まえた！」

だが、瀬呂が新たに伸ばしたテープによって、逃げようとした生徒が捕えられる。

「これでクリアだね。」

ジオウに誘われてしまい、麗日と瀬呂の罫にはまった他校生は自身の的に出久達のボールを当てられて脱落する。

こうして、出久達3人は一次試験の突破に成功したのであった。

さて、一足先に試験をクリアできた私は、先に控室に案内されてそちらで会場の他のクラスメイトの様子を見ていた。

「流石は我が魔王。素晴らしい戦術だ。」

と、ちょうど私が観測していた場所で我が魔王達が試験の通過に成功していた。

「おや？彼は…」

我が魔王も中々早い段階での試験突破だったが、彼よりも先に試験を通過して控室に入ってきた男がいた。

「ウツス！お疲れさんです！」

それは先程会場前で出会った土傑高校の夜嵐イナサ君だ。

彼は確か、今年の雄英の推薦入試を受けており、トップ成績で合格したものの辞退したとのことだ。

まあ即ち、轟君や八百万君以上の実力を持つ可能性があるということだ。

「お疲れ様。君も中々早いね。」

「ええ！しかも100人ぐらい倒せたツス！」

100人も撃破したとは…流石推薦入試1位だ。

「ほう、それは中々素晴らしいね。それに雄英の推薦入試でトップ成績で通過したらしいね。」

「え、ええ…まあ…」

反応から察するに、彼が雄英の合格を蹴ったのには何か深い事情がありそうだ。

とは言え、詮索するわけにはいかなないので視線を中継画面の方に移す。

「おや、ここに居るのは轟君の様だね…」

と、そこで見つけたのは忍者の様なコスチュームを着た集団と対峙する轟君の姿であつた。

「轟ッ…！」

私と共に中継が映る画面を睨みつけるように見る夜嵐君。

轟君を凝視している様子だし、推薦入試を受けていたということは彼にも会っている可能性がある。

「彼と何かあつたのかい？」

「い、いやッ……それは……」

流石に轟君のクラスメイトである私に、なんらかの事情を話すのは難しいだろうが……
「1つ言っておこう。君と轟君の間で何があったかは知らないが、彼も色々悩みがあったのだよ。」

「アイツの悩み……?」

私の推測では、推薦入試の時の轟君は左を使っていなかった頃だ。

即ち、エンデヴァーや家族との関係が拗れており、孤高を貫いていた頃だ。

「彼は、父と同じに見られたくないと思っていた時期があった。」

轟君はエンデヴァーへの反骨心から、炎を使わずに彼を超えようとしていた。

「エンデヴァーへの恨みから、視野が狭くなっていったことがあってね、君と会った時の彼はちやうどそんな時期だったんじゃないかな?」

ちやうど、雄英に入ってすぐの屋内演習で彼と戦った時のことを懐かしく感じる。

「そ、そんなことが……」

「何故轟君がそうなったかは、個人の問題なので言うのは控えておくが、はつきりと言っておくよ。彼はあの時から変わったよ。少なくとも、私達の頼もしいクラスメイトの1人にね。」

彼が何故エンデヴァーを恨んでいるかは本人たちの名誉にかかわることなので、言わ

ないでおくがまあ、あの頃からは様変わりした。今の轟君は、我々の大事な仲間の一人と言えるだろう。

「ウツス…その言葉、信じるツスよ。」

とは言え、夜嵐君は私の言うことを信じてくれたようで何よりだよ。

丁度、轟君も試験を突破したようだし…

おっと、こっちの画面に映っているのは爆豪君達かな？

「な、なんだありや!?!どうなってんだ!」

高速道路を模したエリアの上に着いたのは、爆豪が変身したゲイツと切島、上鳴の2人だ。

彼らが目にしたのは、肉塊の様になってしまった受験生が転がっている。

「あの野郎の仕業ってことだろ!」

ゲイツが自身の仮面に着いた複眼で睨みつけるのは、夜嵐イナサと同じ士傑高校の生徒だ。

紫髪その生徒は2年生の肉倉精児だ。

「我々士傑生は、活動時には制帽の着用を義務付けられている。何故か？それは我々の一挙手一投足が、士傑高校という伝統ある名を冠しているからだ。」

肉倉は自身の個性によって肉塊の様になってしまった他校生をその手に持ち、自身の学校の制帽について語り出す。

「これは示威である。就学时より責務と矜持を涵養する我々と、粗野で徒者のまま英雄ヒーローを目指す君達の圧倒的な水準差。」

「嫌いなタイプだ。」

「ああ、俺も同じだぜー！」

自身の学校のことを上げるためか、雄英の自由な校風を見下す言い方をする肉倉に、爆豪と切島は嫌悪感を露にする。

「雄英高校、私は尊敬している。御高と伍する事に、誇りすら感じていたのだ。だが…私は近頃の雄英の動きが気に喰わん。」

「何が気に喰わねえんだ？」

「飯免も持たぬ若輩者が、前線に立ち、あたかも自分がトップヒーローであるかのような面をしていることだ！」

自身の指を切り離して巨大な肉塊とした状態で、それを構える肉倉。

彼としては、免許がないにもかかわらずプロヒーローと肩を並べて戦闘に参加する出

久や爆豪達が気に喰わない様子だ。

世間的には彼らの行動は賛否両論あるが、賛の方が多い。

だがそれは、彼らが死柄木弔を倒して八百万を救い出したからこそであり、結果が伴わなければ規律を乱す行動だとバツシングを受けていただろう。さらに、肉倉の様な一部の人間は結果が伴っていたとはいえ、出久達の行動を否定的に見ている様だ。

「切島、下がってろ。こういうのは大体、遠距離の方が有利だ！A・Pシヨット！オートカノン！」

肉倉が飛ばしてくる肉塊を、掌の一点から集中させて撃ち出す爆破を、連射して撃ち抜いていく。

「テメエ、出久やウオズのこと悪く言うなら……ブツ殺す！」

出久達のことを悪く言われたことで、爆豪の怒りに火が付いた。

出久との関係が修復されて以降、あまり汚い言葉を発してこなかった爆豪も、そう言った言葉を口から発してしまう。

「口が汚い輩だ！」

更に爆豪達に向けて、自身の体の一部をこねて切り離して向かわせる肉倉。

「くたばりやがれ！」

幾つかの肉塊を飛ばしてくる敵に対抗するため、今度は広範囲の爆破を連発していく

ゲイツ。

「視界がッ……！」

連続で浴びせられる爆破の、爆炎や煙は肉倉の視界を阻害する。

彼の視点では、爆豪達の位置を把握することが出来ず、肉塊を飛ばすにも、どの方向に飛ばせばいいか判断ができない。

「今だ！アホ面！」

「アホじゃねえ！」

ゲイツからの指示を受けると、上鳴はコスチュームの新装備であるシューターにポイントターを装填して構える。

「雄英とか緑谷のこと中傷したの、俺も結構怒ってるぜ！」

肉倉が立っている方向に向けて、上鳴がポイントターを射出する。

「なんだッ……!？」

爆煙が晴れて視界を取り戻した肉倉だが、そのコスチュームには上鳴が放ったポイントターが着いてしまっている。

「ターゲットエレクトロ！」

そのポイントターには周囲10m内の電気を誘導する性質があり、上鳴が放った電気は他の者に当たることなく肉倉に直撃する。

「皆真面目にヒーロー目指してんすよ！」

「それを、校風とか断片の情報だけでけなしてんじゃねえ！」

「…ッ!？」

電撃を受けて怯んだ肉倉の腹に、切島の硬化した拳による一撃が撃ち込まれる。

「コイツの分はテメエらにやるぜ。」

「良いのか？」

「ああ、決定打はテメエらだからな。」

肉倉を倒す決定打を与えたのは上鳴と切島だということで、彼らに肉倉の分のターゲットを2人に譲る。

「それに、どうやら起きるみてえだ…」

それに加え、爆豪としては標的はまだ有り余っている様だ。

肉倉によって肉塊にされていた他校生達が、彼が倒されたことによって通常の人としての姿を取り戻していく。

彼らのターゲットもまだ残っているゆえに、爆豪達にとつては獲物が多いということだ。

起き上がった他校生に対抗すべく、3人はファイティングポーズを構えるのであった

：

第64話 二次試験

「なんとか全員、一次試験を通過したようだね。」

「うん！まずは一安心だね！」

「皆で合格って嬉しいね！」

一次試験の終盤、既に合格していた出久達は他のクラスメイトの様子を見ていたが、何とか飯田を始めとする残りのクラスメイト達も一次試験を通過することが出来た。

麗日や切島など、一足先に控室に居た者達は喜びの声を上げる。

「ええー!?肉倉先輩落ちちゃったんスか!?!」

「声デカいわ…先走って単独行動するからだ！あの劇場型男！」

一方、士傑の方では、肉倉が倒されてしまった事に夜嵐が驚きを隠せていない様子だ。彼の性格が引き起こした悪い結果に、毛原は怒りを露にしている。

『えー一次選考を通過した100人の皆さん。これをご覧ください。』

と、ここで合格者控室に居る者達に、スクリーンを見るようにアナウンスされる。

「フィールドだ。」

「何だろうね？」

そこに映っているのは、先程まで彼らが試験を行っていた、街を模したフィールドだ。
「何故?!」

すると、画面に映る構造物が次々と爆破されていく。

突然の爆破映像に、学生たちの頭にはクエスチョンマークが浮かび上がる。

「こ、これは…」

『次の試験でラストになります。皆さんにはこの被災現場で救助演習を行ってもらいます。』

この映像の意図は、これから行われる救助演習のフィールドを説明するというものであった。

『一次選考を通過している皆さんは、仮免許を取得していると仮定して、どれだけ適切な救助を行えるか試させていただきます。』

「人がいる…」

「老人に子供?!」

「あぶね!子供!」

その映像内には、老人や子供などが映っており、危険な瓦礫に近付いていつている。

「彼らは、あらゆる訓練において今引張りだこの要救助者のプロ! Help. us. company! 略してH.U.Cの皆さんです!」

「要救助者のプロ?」

「色んなお仕事があるのね。」

「ヒーロー人気のこの現代に、即した仕事かもね。」

ヒーロー科の授業や、大手ヒーロー事務所の定期的な訓練などで、救助現場を想定した訓練をする際に、被災者の役をする人間が多い。その被災者側のことをより深く理解し、演じ切るだけでなくアドバイスをするプロ。それがH・U・Cである。

『H・U・Cの皆さんは傷病者に扮して、フィールドにスタンバイ中。皆さんには、これから彼らの救助を行ってもらいます。なお、今回は皆様の救助活動をポイント制で見させてもらいます。救助活動を採点させていただき、基準値を満たしていれば、合格となります。10分後には始めますので、トイレなど済ましておいて下さいね。』

そして、爆破された構造物の瓦礫が転がるフィールド上で、H・U・Cの皆さんを救助するという訓練の内容が告げられる。

10分後には試験が始まるということで、各々準備を進めていくのであった。

10分後、控室に試験開始を知らせるベルが鳴り響く。

『ヴィランにより大規模テロが発生。規模は〇〇市全域。建物倒壊により負傷者多数。』
「演習のシナリオね。」

アナウンスを担当する目良によって、今回の試験でのシチュエーションが告げられる。

「え、じゃあ…」

「始まりね!」

『道路の損壊が激しく、救急隊の到着に遅れ…到着するまでの救助活動はその場にいるヒーロー達が執り行うものとする。一人でも多くの命を救い出すこと…それでは…スタート!』

試験開始と共に、控室の壁が倒れて中に居る受験生達はその外に広がる試験会場を目にすることになる。

本物の爆薬を使っていたためか、彼らの目には立ち上る煙が映り、鼻が利く者の鼻には、火薬のにおいが漂ってくる。

テロによる被害を受けた市街地を再現したフィールドのどこに、H・U・Cの人達がいるかは明かされておらず、受験生達は縦横無尽に駆け出して彼らを探す。

「やるぞ!やるぞ!やるぞ!!」

その中でも夜嵐は、自身が起こした旋風に乗って飛んでいく。

空から要救助者を探し出して、助けようと試みている。

『カメンライドタイム！ビ・ビ・ビ・ビースト！』

「テメエも探してこい！」

夜嵐が空から探るのを見た爆豪は、彼と同じ手で要救助者を探すことにした。

カメンライドタイムで呼び出した仮面ライダービーストがフルコンマンツの能力で空を飛び、H・U・Cの人々を探す。

「俺も付いて行くぜ！」

偵察に出たビーストを追うように、ゲイツが走っていき、その後を切島と上鳴が追う。

「とりあえず……一番近くの都市部ゾーンに行くぞ！なるべくチームで動くぞ！」

「とは言え、既に何人かいないみたいだね。」

飯田がクラスで一丸となって行動しようと言うが、先に張り切って行ってしまった爆

豪達がこの場にいないことを指摘する。

「いくら演習とは言え、ひどい状況ね。」

「皆！落ちてくる瓦礫に気を付けて！」

実際の街に見立てて作ったセットを、本物の爆薬で破壊しているためか、この試験会場にある構造物は実際に災害やヴィランの攻撃によって受けたのと同様のダメージを負っている。建物を構成していたコンクリートも、ダメージを受けていつ崩れてもおか

しくない状態である。

「…!?!」

そんな会場内を走っていた出久は、どこからか声が出たのに気付いて、そちらの方を振り向く。

「どうした!?!緑谷君!」

「子供の声だ!」

その声が出た子供の泣き声であると瞬時に判断した出久は、そちらの方にクラスメイト達と共に向かう。

「うええーん!うええーん!助けて!お爺ちゃんが!潰されてエ!」

「大変だ!どつち!?!」

「なんだよそれ!減点だー!」

「え…?」

泣きじやくる少年に、出久がどの瓦礫に彼の祖父が埋もれてしまったのか問いかけた時、H・U・Cの少年は突如出久を怒鳴りつける。

「まず!私が歩行可能かどうか確認しろよ!呼吸の数もおかしいだろ!頭部の出血もかなりの量だぞ!仮免持ちなら被害者の状態を瞬時に判断して動くぞ!」

(この試験の演習!H・U・C自身が採点するのか!)

その少年が指摘したことは、救助と言う観点での得ていることであつた。しつかりと、その場でやるべき行動を指摘し、さらに採点まで行う。

これが要救助者のプロである、H・U・Cの仕事である。

「こればかりは訓練の数が物を言う！視野広く！周りを見る！」

出久達の場合は、カリキュラムの都合で1年生であるにも関わらず、この仮免試験に挑んでいる。

だが、他の学校は大体2年生でこの試験を受けている。つまり、救助訓練などの経験値では他校生の方が一歩リードをしている。

ヘリポートを作ったり、瓦礫を撤去して通路を作ったりと、救助活動をより円滑に行う整備を行っている。

「では、私が道を作ろう。我が魔王は彼をまずは搬送。他の皆は彼の祖父の救助を！」

『投影！フューチャータイム！』

『プログライズ！』

『フューチャーリングゼロワン！ゼロワン！』

諸先輩方の動きを見て、ウオズはフューチャーリングゼロワンに変身。

ライダモデル達を召喚すると、その内数体が瓦礫を撤去し、フリージングベアーが地面を凍らせて氷の道を作る。

「もう大丈夫、僕が運びます！」

「この道なら、私も手を貸しますわ。」

その少年を担いだジオウは、八百万が創造したそりに少年を乗せて、氷の道を滑って被災者を保護する区域に向かう。

「そりと氷での運搬か。安全性は微妙だが、円滑さは悪くない。」

「あ、ありがとうございます！」

ウオズと出久の編み出した救助方法に、H・U・Cの少年はまずまずの高評価をする。

ウオズが即座に戦略を編み出したことで、一度叱責された出久やA組のメンバーは気持ちを切り替えてき救助活動をしていく。

「こつちだ！あぶねえ！」

「た、助かった……」

一方の爆豪も、落ちてきた瓦礫に潰されそうだったH・U・Cの人間を助ける。出久達と別れた爆豪らも、順調に救助演習をこなしている。

こうして、試験を受ける者達が順調に救助活動を進めているところを、見つめる男たちがいいた。

「怪我人の振り分けに応急処置。救急隊が来るまでのわずかな時間……その代わりをヒーローが務め、そして円滑な橋渡しができるようにしておく。」

それはプロヒーローの1人であるギャングオルカと、その部下たちは待機室から現在会場で行われている救助訓練の様子を見ていた。

「調子は？」

『初動はまあ、至らない所はありますが、それでもH・U・Cの皆さんが下す減点の判断は想定していたよりも少ないです。』

彼は通信機で、目良から現在の試験における受験生達のポイントの変動について聞く。

「1次試験で優秀な受験生に数を絞ったからか、全体的な減点の幅も例年よりは少ない。」

『概ね、良いんじゃないですかね。』

「市井の人々を守るため、ヒーローには複合的な動きが求められる。」

” ヴィランにより大規模テロが発生。規模は〇〇市全域。建物倒壊により負傷者多数。”

今回の様なシチュエーションでは、救助活動だけでなく、そのテロの犯人であるヴィランとの戦いも想定される。ヴィランとの戦闘と救助の両立をする手腕いうのも、ヒーローになるにあたって必要な能力である。

その能力を試すため、ギヤングオルカとその部下たちはテロリスト役として二次試験に乱入することになっていた。

「あ、あれは!?!」

だがその刹那、ギヤングオルカのサイドキックの1人が空の方を指さす。

「あんなのがあるとは聞いてないぞ!」

ギヤングオルカ達が目にしたのは、空から会場に向けて降り注ぐ3つの光の球であった。

それぞれ黄色、青、濃い紺の3つの色の球であり、それぞれが会場の各所に向けて落ちていく。

「何なんだあれは!?!」

『わ、分かりません! 少なくとも参加者の個性によるものではありません! すぐに調査をします!』

勿論それらは仮免試験を仕切っている公安の者が用意したものではない。

想定外の存在に、目良達も動揺を隠せていないようだ。

謎の存在の正体は分からなくとも、それが驚異の可能性があるならプロヒーローであるギャングオルカ達のやるべき行為はただ一つ。

「これより作戦を変更する！光の球への対処と、H・U・Cの皆さんの救助だ！動ける受験生がいるなら彼らと協力するんだ！」

謎の3つの光が会場に落ちたことで、用意していた構造物が崩落し、怪我人が出てくる恐れがある。

試験の受験生だけでなく、H・U・Cの人達もいる。建物の倒壊や、光の球による攻撃によってH・U・Cの人々は本当の要救助者になってしまった。恐らく負傷をした受験生もおり、彼らの救助と事態の対処となるとギャングオルカ達だけではやり切れるかどうかは分からない。

「とにかく早くぞー！」

動ける受験生達と協力しつつ、彼らは想定外の事態の対処に向けて動いていくのであった。

「さて、ここが下等生物達の集まる会場とやらか……」

怪我人の救護エリア付近に落ちた黄色い光の球。その正体は金色の機械生命体の様な未確認生命体であった。

渦巻き形状の頭部の装飾に、黄色と赤の右腕、刺々しい白い左腕を持つその怪人の名はイザンギ。

嘗て別の世界では仮面ライダーリバイス及び、その仲間のライダー達と戦った怪人である。

「あれって…怪人？」

(どうやらそうみたいね。)

(倒すしかないな。)

そのイザンギの近くには、先程助けたH・U・Cの少年を運び込んでいた仮面ライダージオウこと緑谷出久がいた。

『グランドジオウ！』

その場で志村と煙からも目の前の怪人と戦うべきであると助言された出久は、グランドジオウウオッチを起動させる。

(あの怪人と戦いつつ、皆を助けないと…！)

『(アークル) (オルタリング) アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！(音角) CHANE BEETLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメンライド！』

サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドウビタッチヘン
シーン！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！ライダー
タイム！』

彼の背後には要救助者を保護するスペースがあり、H・U・Cの人々や他校の生徒が
いる。

彼らを守り、救助しながら戦うとなると多数のライダーを召喚できるグラウンドジオウ
が適任であると判断し、グラウンドジオウオッチをジクウドライバーに装填する。

『グラウンドタイム！クウガ！アギト！龍騎！ファイズ！ブレイド！響鬼！カブト！電王
！キバ！ディケイド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウィザード！鎧武！ドライブ！
ゴースト！エグゼイド！ビルド！』

その状態のジクウドライバーを1回転させ、ジオウは黄金の鎧を纏っていく。

『祝え！仮面ライダー！グラウンドジオウ！』

壮大なる王、仮面ライダーグラウンドジオウが多くの命を救うために、この場に再度君
臨する。

「あれが噂に聞く、仮面ライダージオウか。まあ、ここで倒すまでだ。」

「僕は倒れない！皆を守るために！」

手を触手の様な形状に変化させたイザンギが、グラウンドジオウに向けてその腕を振る

いながら走っていく。2人の黄金の戦士が拳を交えるその一方で、別の光から現れた怪人も仮面ライダーと相対していた。

「爆豪、やべえかも知らねえぞ！」

「おいおい！なんか急に降って来たぞ！」

切島と上鳴の前に現れたのは、ソフト帽と道化師の様な帽子を組み合わせた特徴的な頭部を持つ青色の怪人である。彼も未確認生命体の1人であるバリデロで、彼も仮面ライダーバイスらと戦ったことがある。

「倒さねえといけねえヴィランってことに間違いはねえ……」

会場に降り立ったバリデロが左腕の銃や、棍棒から火炎弾を撃って他の受験生達や瓦礫に攻撃して場を争うとしているのを見て、仮面ライダーゲイツこと爆豪は切島と上鳴の前に立ち、バリデロと戦う構えを見せる。

「下等生物が……俺に勝てると思うなよ……」

「俺がテメエみたいな怪人に負けると思ってたのか！クソが！」

ゲイツ・ディエンドアーマーの力で召喚していた仮面ライダーバースと共に、バリデロに向かっていく。

「良いだろう。この俺が相手してやる！」

2本の棍棒を構えたバリデロが、自身に向かってくる2人のライダーに向けて自身の

得物を振るう。

棍棒と彼らの拳のぶつかり合いが、戦いの始まりを告げるゴングとなる。

そして、もう一つの光はウオズと轟の前に現れていた。

「まさか、このライダーが現れるとはね…」

「知ってるのか？」

「ああ、それにこれは…非常にまずい事態だ。」

目の前に現れた仮面ライダーの存在に、ウオズは驚きを隠せず、そんな彼に轟が問いかける。

「そんなにヤバいのか？」

「ああ、彼は宇宙のパワーを扱う強力な戦士、仮面ライダーギンガさ。」

ウオズ達の前に現れたのは、宇宙を思わせる色合いのスーツやマントを身に纏い、所々に惑星の様な意匠がある仮面ライダー。その名もギンガ。彼の持つ強力な能力に関して、ウオズは前世からよく分かっている。そんな敵が目の前に現れたことで、動揺を隠せない様子だ。

「この地球を…滅ぼす！」

「そうはさせないさ…ここは私達を守る！」

仮面ライダーギンガによる攻撃が来る前に、ウオズはフューチャーリングゼロワンの

力で呼び出したライダーモデル達に一気にギンガを襲わせる。

こうして、仮免試験の会場は本物の戦場となってしまうた。

3体の怪人と3人の仮面ライダー。彼らの戦いは受験生やH・U・Cを巻き込み、さらに激しくなっていくのであった……

第65話 宇宙との戦い

仮免試験開始前…

その会場の様子をどこかから見つめる、黒い髑髏の様な鉄仮面を付けた男が居た。

「ここが雄英高校の生徒が試験をしている会場か。」

「そうみたいだけど、ここで何するんですか?」

その隣にはベージュ色の学生服を着た、女子高生のような見た目の少女もおり、鉄仮面の男と共にこの地に赴くことになった訳を首を傾げて問いかける。

「1年A組の緑谷出久に、爆豪勝己、それに魚津圭介…彼らには僕の弔をやられてしまったからね。今日はその仕返しに来たんだよ。」

「弔君の仇ですか…確かに、弔君を倒したのは許せません。」

そう、ここに居るのはオーマシヨツカーの首領であるオールフォーワンと、オーマシヨツカー構成員の1人であるヴィランのトガヒミコである。

彼らの目的と言うのは、神野での一件の仕返しであった。

「今日は彼らにとつて守らなければいけない存在が多い。それに対してプロヒーローは少ない…仮面ライダー達を襲うには絶好の機会だ。」

オールフォーワンはどこかから得た情報により、この地で雄英高校1年A組の生徒達が仮免取得試験を行うことを知った。

公安委員会の者を始め、複数名のヒーローはいるだろうが、神野に来た7プロヒーローほど質も量も無いと考えられる。それにH・U・Cやプロレベルではないヒーロー候補生も居る。

「頼れるオールマイトももう居ない。今日が彼らの命日だ。」

頼れるプロヒーローよりも、未熟な者や要救助者が多いこの仮免試験こそ出久達にとつては守るべき者も多くて苦しい戦いを強いることが出来る。既にオールマイトも引退済みであれば、出久達は自分達の力を信じて戦うしかできない。

「強力な僕の友達を呼んでおいたよ。イザンギ、バリデロ、それに仮面ライダーギンガ。宇宙の力を持つ彼らであれば、ジオウ達を倒せるだろうね。」

「弔君の仇、取っちゃってください。」

オーマシヨツカーの戦力はまだまだいるようで、その中でも強力な3人が今回の戦いに抜擢された。

彼らが宙から試験会場に降り立つ様子を、オールフォーワン達は口角を上げて見るのであった。

「オラア！ かかってこいや！」

棍棒を振って殴りかかってくるバリデロに対し、爆豪も自身の腕を振るいながら掌からの爆破をバリデロに浴びせていく。

「大丈夫ですか!？」

「さあ、こっちに！」

その間に切島と上鳴がH・U・Cの人達を巻き込まれないように2人の戦いから遠ざける。

「ツ…!？」

攻撃を浴びせていた仮面ライダーゲイツに対し、バリデロは左腕に着いた銃から火炎弾を撃ち出す。

3発放たれた火炎弾の1発目はゲイツの胸に当たって爆ぜ、2発目と3発目に対応できたゲイツはそれらに爆破を撃ち出して自身に当たる前に打ち消す。

「ハアツ！」

だが、その爆破はゲイツの視界を遮ることになってしまった。

その煙の中を突っ切ってきたバリデロが横薙ぎに振るった棍棒が、ゲイツの胸部を撃

ち、火花を散らしながらゲイツの身体が吹き飛ばされる。

「チツ…」

『カメンライドタイム！ギャ・ギャ・ギャ・ギャレン！』

地面に膝を付いたゲイツは、デイエンドアーマーの力で仮面ライダーギャレンを召喚。

ギャレンは召喚されるとすぐに、バリデロに向けてギャレンラウザーで弾丸を放つていく。

「効かん！」

その弾丸を身に受けても、あまりダメージを感じさせないバリデロ。

むしろ自身に向けて撃ってきたギャレンに対して、左手の銃から火炎弾を撃ち、ギャレンもその火炎弾をギャレンラウザーから放つ弾丸で相殺していく。

『ジエミニ』

「A・P・シヨット！」

それに対応すべく、ラウズカードで2人に分身。

2人のギャレンがラウザーから放つ弾丸と、ゲイツが掌から絞って放った爆撃がバリデロに向けて撃ち出されていく。

様々な方向から放たれる攻撃に、バリデロは直立不動で耐え続けている。

「下等種族の攻撃が、俺に聞くと思ふなよ！」

バリデロが持つ棍棒に両端に炎の球がついており、その棍棒を振り回せば、2体のギャレンとゲイツに向けて炎の球が幾つも飛んでいく。

それらはライダー達の身体や、周囲の構造物にぶつかるると同時に、次々と爆発していく。

「ヤベえって！」

「伏せろ！上鳴！」

その炎の球による攻撃を受けたのは、ライダー達だけでない。

バリデロの射程圏内で救助活動を行っていた上鳴達にも炎の球が向かってきており、それに気付いた切島は硬化の個性で自身の身を硬め、上鳴の前に立って攻撃から守る。

「切島！」

「まだまだッ……！」

その火炎弾を切島は、流石の防御力で耐え抜く。

「まずは、その下等生物から倒してやろう。」

「させるかッ!!」

バリデロの銃から放たれた火炎弾が、切島に向かって放たれると、ゲイツがその間に割って入る。

切島を庇う様に立ったゲイツの身体に、火炎弾が撃ち込まれていく。

「爆豪!!」

切島達の前で、火炎弾による攻撃を受けたゲイツの身体が、地面に転がるのであった。

「やはり、中々の強敵だね…」

仮面ライダーギンガに向けて、召喚したライダーモデルに攻撃をさせるが、次々とギンガの放つ疑似惑星弾であるエナジープラネットによって次々と撃墜されていく。

「ウオズー！避けるー！穿天氷壁ー！」

更にギンガが惑星の様なエネルギー弾を放とうとしているのに気付くと、隣にいる轟がすぐに巨大な氷を作って、その攻撃を防ぐ盾とする。TDLでの特訓で編み出した、と言うよりこれまで使っていた特大の氷結を必殺の型に落とし込んだ彼の右から繰り出される必殺技だ。

「…ッ!?!」

体育祭で瀬呂を拘束し、会場に巨大な冰山を作り出したその技であったが、ギンガのエナジープラネットによる攻撃に耐えきれなかった。

彼の作り出した氷塊にエナジープラネットがぶつけられ、ひびが入っていく。

「致し方ない。」

『投影！フューチャータイム！』

『烈火抜刀！』

『フューチャーリングセイバー！セイバー！』

その事態に対処すべく、ウオズはフューチャーリングセイバーに姿を変える。

『ストームイーグル！』

ギンガのエナジープラネットによつて壊れ、落ちてくる氷塊を炎を纏う斬撃で溶かす。

それに合わせて、轟も炎を放つて氷塊による周囲への被害を防ぐ。

『ニードルヘッジホッグ！』

さらに、ファイヤソード・レッカを振るつて無数の針をギンガに向けて放つが、それらはギンガの作り出す重力場に阻まれる。

「攻撃も防御も、強力だな…」

そんなギンガの側面側に回り、氷と炎を交互に放っていく轟だが、それらはエナジープラネットやグラビコンリングで操作される重力場によつて阻まれる。

「どちらも、大したことがないな…」

重力場を操作し、自身の身を宙に浮かせるギンガ。

その背部では、新たな疑似惑星弾が生成されていつている。

「撃たせない！」

『ピーターファンタジスタ！』

ウオズはファイヤソード・レッカの剣先から鎖の様なものを出し、ギンガを拘束して攻撃を阻もうとするが、それもまたギンガが作り出した重力場によって阻まれる。

「終わりだ！」

ギンガが自身の作り出した疑似惑星弾、エナジープラネットを地上にいるウオズ達に撃ち込もうと左腕を上げたその時だった。

「させないっすよお!!」

突如空中から現れた竜巻の様な爆風が、ギンガの身体を地面に叩き付けた。

「お前は……」

「夜嵐君だね。」

ウオズ達に助太刀したのは、風を操る夜嵐イナサである。

「俺、ぶっちゃけエンデヴァーさんのこと嫌いッス。アンタも、最初は同じ目をしてるって思っ……雄英の合格蹴つちやうぐらいには嫌ってたッス……」

「何だとッ……!」

雄英の推薦入試で夜嵐は初めて轟と会った時、彼の他者のことなど視野に無い様な態度と、かつてサインを断ったエンデヴァーの姿を重ねて嫌悪していた。その自身の気持ちをまっすぐに口にする夜嵐に、轟も怒りの表情を見せる。

「けど！今はそうじゃないってウオズさんに言われてから、俺も信じてみたくなかったス…だから、一緒に戦おう！」

夜嵐も轟もヒーロー候補生だ。ここに居る者達を助けたい思いは同じだ。

轟がウオズと共に戦っている姿を見て、夜嵐も彼らを信じて共闘をしたいと持ち掛けたのだ。

「私は構わないよ。味方は多い方が良いからね。轟君はどうだい？」

「俺のこと、信じるってのなら別に構わねえ。けど、足引っ張るなよ。」

「はいッス！」

こうして、ウオズ、轟、夜嵐イナサによる共同戦線が組まれたのであった。

「コイツ強いッ…！」

一方、イザンギと対峙するグランドジオウも彼の攻撃に苦戦していた。

「周りの下等生物なんて、見捨ててしまえば良いのに……」

周囲の人々を救うため、志村ゴーストや煙ビルド等の召喚されたライダー達は、周囲の人々の救助や警護に動いている。

それ故に、手薄気味なグランドジオウに向けてイザンギが触手と光弾で攻撃を仕掛けていき、その攻勢を防ぐのにジオウ自身は集中せざるをえない状況だ。

「そんなことは……しない！」

それでも、グランドジオウは周囲の人々を見捨てるような選択はしない。

ジカングレードとサイキョーグレードを手に持ち、イザンギに向かっていく。

「ほう、ならば死ね。」

イザンギは掌の上で光の弾を作り出すと、それらをジオウに向けて放ちながら、右手の触手を伸ばしていく。

（浮遊……）

自身に向かってくる攻撃を、浮遊を使って宙に浮くことで回避し、そのままイザンギとの距離を詰めていく。

（ワンフォーオール！ シュートスタイル！）

ジオウは自身の身体にワンフォーオールのエネルギーを張り巡らせ、身体を空中で回転させながらイザンギの頭部目掛けて蹴りを放つ。

「させないさー！」

更なる攻撃を仕掛けようと、2本の剣を振るおうとするジオウに対し、イザンギは光の弾を放ってジオウとの距離を置く。

「…ッ!?!」

光の弾をモロに受けてしまい、ダメージから後退をせざるを得ないジオウ。

「この攻撃、防ぎきれるかな?」

さらにイザンギは多数の光の弾を生成し、自身の周囲に浮遊させる。

「助けてー!!」

その時、グランドジオウは自身の背後にまだ逃げ遅れた者がいることに気付く。

避けてしまえばそこにいる人間の命が危うくなってしまふ。そんな状況を理解したイザンギは、光の弾をジオウ目掛けて解き放つ。

『ウイザード』

そこで出久が召喚したのは、仮面ライダーウイザード・ランドスタイル。

彼が魔法によって土の壁を生成する。

「くッ…!」

その壁と、自身の前で交差させた2本の剣によって、攻撃を耐え忍んだ出久。

「これはどうかかな?」

さらに追い打ちをかけようと、イザンギは両腕を触手にしてジオウ達に向けて振るう。

『ブレイド』

その触手を召喚されたブレイドがブレイラウザーで切り伏せ、ジオウも2本の剣で攻撃を捌いていく。

「何故避けない？ 避ければもつと簡単に戦えるだろうに。」

「見捨てれないからだ！ 僕の後ろで助けを求めている人のことを！」

触手を振るいながら、ジオウ達に距離を詰めていくイザンギ。

「下等生物なんて、放っておけばいいのに。」

「生きてる人の上等も下等もない！ 皆の命は僕が守る！」

『ライダー斬り！』

サイキョーギレードから放たれる斬撃が、イザンギの身体に当たって火花を散らす。

「僕はオールマイトみたいにな…皆を救って勝つ！ それが！ 僕の目指すカッコいいヒー

ローだから！」

（いい心意気だ！）

周囲にいる人々を救けながら勝つ。

そんな出久の想いに応えるように、彼の中に1人の男の声が響き、ジオウの手から黒

い鞭状のエネルギーが生え出てくる。

(あ、あなたは!?)

(おれは万繩大悟郎! ワンフォーオール5代目継承者さ!)

出久の前には、スキンヘッドにゴーグル、黒い革ジャンを身に纏った男の精神体が居る。

その男こそ、煙の前のワンフォーオール継承者である万繩大悟郎だ。

(お前の心意気に惚れて出てきたのさ! さあ、俺の個性黒鞭を使ってくれ!)

(分かりました!)

「新しい力が目覚めたようだが、関係ない!」

5代目継承者の個性、黒鞭が覚醒したグランドジオウ。

だが、彼にお構いなしとばかりにイザンギは触手状の自身の両腕を伸ばす。

(黒鞭!)

イザンギの黄色い触手に向けて伸びていく、ジオウの手から出る黒い鞭状のエネルギー。

それらは、何本にも伸びて触手達に絡んで掴んでいく。

(ワンフォーオール! フルカウル!)

その状態でジオウは自身の身体にワンフォーオールを張り巡らせ、筋力を強化。

黒鞭に絡められたイザンギの身体を、自身の方に引き寄せる。

「なッ…!?!」

「スマーツシユ！」

引き寄せてきたイザンギの身体を、ジオウはワンフォーオールの力を込めた右足で蹴り上げる。

「出久、その力って…!」

そんなジオウの下に、志村ゴーストがやってくる。

「ええ、5代目の個性、遂に出ましたよ！」

（ああ！俺の個性さ！）

黒鞭に関して問いかけてきた志村に、出久と万繩がその個性に関して応える。

（ていうか！なんかそれ羨ましい！俺もやらせろ！）

「え？」

遂に目覚めた万繩の精神体は、志村が仮面ライダーに乗り移っているのを見ると、自分もしたいと主張し始める。

「だったら、ちようどそこにいる子に入っていけば良いんじゃないかな？」

（こいつか？分かったのさ。）

志村ゴーストが指差したところにいたのは、先程グランドジオウがイザンギの攻撃か

ら自身や後ろの要救助者を守るために召喚した仮面ライダーウィザード・ランドスタイルであった。

(じゃあ、いくぜ！)

そのまま万繩は、仮面ライダーウィザードの肉体に乗り移る。

「よし！いくぜ、9代目！」

「はい！」

万繩が憑依した仮面ライダーウィザードと、グランドジオウ、志村ゴーストが並び立つ。

「いくら増えようと、関係ない！」

「ホントかな？じゃあこの数に、対応できるかな？」

『グレイトフル！』

『ガッチリミナー！コッチニキナー！ガッチリミナー！コッチニキナー！』

無数の光弾を作り出し、周囲の人間や施設もろとも攻撃しようとするイザンギ。

彼に対抗すべく、志村ゴーストはアイコンドライバGを腰に巻いて起動させる。

『ゼンカイガン！ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー！ダ〜イ〜へ〜ンゲ〜!!』

そして、黒と金のアーマーに15人の偉人のパーカー部分が合体していき、仮面ライ

ダーゴースト・グレイトフル魂となる。

「皆行くよー！」

宙に浮遊したゴーストが、15人の偉人ゴースト達を召喚。

彼らはイザンギが放った光弾を各々の武器や能力で防いでいく。

「今度は俺の番だ！」

それに続いて、万繩ウィザードが右手から黒鞭を伸ばし、イザンギの身体を拘束する。

「まだまだ！」

だが、拘束されても両腕を触手状にすることで、それらを自由自在に伸ばして戦えるイザンギ。

数本の触手で万繩ウィザードごと叩こうと振り上げる。

「そつちもさせねえ！」

だが、その触手も万繩ウィザードの左手から伸びる黒鞭に縛られる。

「決めろ！9代目！」

「はい！」

『フィニッシュタイム！』

『グランドジオウ！』

ジオウが自身のジクウドライバーを回転させると、装甲響鬼、ダブル・ファングジョー

カー、ドライブ・タイプフォーミュラーが召喚される。

「音撃刃！鬼神覚声！」

装甲声刃によつて増幅された響鬼の声が巨大な波動となり、拘束されたイザンギを襲う。

『ファング！マキシマムドライブ！』

ダブルはファングサイドの足にマキシマムセイバーを出現させた状態で回転し、イザンギを切り裂く様に蹴りを放つ。

「ッ…!?!」

『フルフルフォーミュラー大砲！』

ダブルによる攻撃を受けたイザンギに、追い打ちをかけるようにドライブ・タイプフォーミュラーが持つトレーラー砲による強力な銃撃がイザンギに放たれる。

「これで終わりだ！」

トレーラー砲から放たれたエネルギー弾がイザンギに当たり、爆発を起こしたところでジオウは止めを刺すためにジカンギレードとサイキョーギレードを合体させる。

『キング！ギリギリスラッシュ！』

そして、サイキョージカンギレードを縦に振るい、その剣から伸びる光の刃でイザンギを切り裂く。

「バカな！」

逃げる隙すら与えられず、ライダー達の攻撃を受けたイザンギの肉体はそのダメージに耐え切れず、爆散する。

「勝ったぜ！」

「けど、まだ救助が残ってます。行きましょう！」

「おう！」

勝利を喜ぶ万繩ウイザード達と共に、ジオウは救助活動に向かう。

未だにこの会場での戦いは終わっていない…

第66話 救世主と預言者

「ば、爆豪ー！」

バリデロの攻撃から、仲間たちを守ったゲイツの身体が地面を転がる。

「お前も邪魔だー！」

ゲイツがやられたのを見て、彼に召喚されたギャレンが、自身の銃からエネルギー弾を放ちながらバリデロへと距離を詰めていく。

だが、それに撃ち返すようにバリデロも左手の銃から火炎弾を撃っていき、自身に近付いたギャレンを棍棒で殴り飛ばす。

「おいおい、嘘だろ…！」

バリデロに殴り倒されたギャレンは、そのまま光の粒子となつて消える。

味方が次々とやられていく様子に、上鳴は狼狽えてしまう。

「させるかー！」

倒れるゲイツや、狼狽える上鳴に向けて歩みを進めるバリデロの前に、切島が立ち塞がる。

「これ以上爆豪達に！負担かけさせられっかよー！」

神野での戦いの時、切島は近くまで行けたものの、戦いは爆豪ら仮面ライダー達だけが行った。

先程の肉倉との戦いでも、個性の相性が悪くて切島はあまり動くことが出来なかった。

そうやって前に出ることが出来ず、悔しい思いをしてきた切島は、今こそ守るべき時だと奮い立って全身を硬化させてバリデロの前に立つ。

「お前から死ぬか？」

「いいや、死なねえよ！俺は倒れねえ！」

バリデロが振るう棍棒と、硬化した切島の拳がぶつかり合う。

切島の拳はこれまでの訓練でより強く、硬くなっている。

バリデロの棍棒による衝撃を受けることなく、寧ろその拳で棍棒を曲げてしまっている。

「!?」

「オラ！オラ！」

そこから勢いに乗って、大振りのパンチをバリデロに次々とぶつけていく。

「俺の根性！見せてやる！」

バリデロに反撃の隙を与えない様に、切島は腕を振り続ける。

バリデロもパンチを打ち返すが、それに耐えながら切島が己の拳をバリデロの顔面目掛けて振るう。

「下等生物ごときが……！」

だがバリデロの右手が、殴りかかってきた切島の手首を掴み、左手の銃を切島の腹に押し当てる。

「気合は十分だ。だが死ぬー！」

「ッ……!!」

至近距離から放たれた炎の弾が、硬化した切島の腹部に放たれ、吹き飛ばされた切島の身体が宙を舞う。

「切島ー！」

「まだッ……まだー！」

吹き飛ばされた切島が再び立ち上がろうとするが、ダメージからか上手く立ち上がる事が出来ない。

そこにさらに追い打ちをかけようと、バリデロが切島に歩み寄る。

「い、行かせるかー！」

倒れる切島と爆豪に敵を近付けさせまいと、今度は上鳴が前に出て、シューターからポインターを撃ち出す。

「ターゲットエレクトロ！」

バリデロの身体に着いたインター目掛けて、上鳴の放った電撃が飛んでいく。

その電流がバリデロの身体に流れていくが、それでもバリデロは歩を進めていく。

「な、なんでッ…!？」

「下等種族めが…ここで死ね！」

バリデロが上鳴に殴りかかろうと、右腕を振り上げたその時だった。

「させねえよ！」

その腕を掴んで攻撃を受け止めた一人の戦士が居た。

「ば、爆豪ッ…！」

その戦士こそ、目を覚まして再び立ち上がった仮面ライダーゲイツであった。

「俺は…勝つまで倒れねえぞ！」

攻撃を止めたのと逆の手をバリデロの腹部に押し当て、そこから爆撃を放つ。

「ぐぐッ…！」

「オラァ！」

さらに前蹴りを放って、バリデロを押し倒す。

「爆豪！すまねえ！」

「気にすんな！」

再び立ち上がってきた彼に、感謝の意を伝える切島。

そんな彼らの前に立ち、ファイティングポーズを構え続ける。

「何故立ち続けられる……！」

「決まってるだろ！俺は追いかけ続けてんだ！オールマイトが引退しようが関係ねえ、オールマイトの勝って救ける姿に憧れ続けてんだよ!!」

更にバリデロに向けて前進し、攻撃を仕掛けようとするゲイツ。

だがその前に、光を放つ3つのミライドウオッチが飛来してきた…

「つ、強い……！」

ウオズ、轟、夜嵐の3人が仮面ライダーギンガと対峙しているが、かなり苦戦してしまっている。

「少し、作戦を変えようかな。」

ギンガに対抗するため、別のフューチャーリングに変身しようとする。

ウオズがシノビミライドウオッチを取り出そうとしたその時だった。

「何か光ってるぞ。」

「ホントだ！腰の方も何か光ってるつすよ！」

轟と夜嵐が指摘するように、シノビミライドウオツチや、ウオズの腰についているクイズミライドウオツチとキカイミライドウオツチが光を発する。

「これは…」

光を発する3つのミライドウオツチが、宙に浮かび上がる。

「あーどっか行っちゃったツス！」

そのまま3つのミライドウオツチは、どこかへ飛んでいってしまふ。

「恐らく、彼がついに目覚めたみたいだね。」

その様子から、遂に救世主となる戦士が目覚めたことを察したウオズは、別のミライドウオツチを手取る。

『ギーツマグナム！』

『ギーツブースト！』

『アクシオン！』

白と赤のミライドウオツチを連結させてビヨンドライバーに装填する。

『投影！フューチャータイム！』

『ブースト！&マグナム！』

『フューチャーリングギーツ！マグナム！ブースト！』

仮面ライダーウオズ・フューチャリングギーツブーストへと姿を変えると、両腕に搭載された銃型武器のマグナムアームドシューターからギンガに向けて次々と弾丸を放っていく。

「しかしながら、やはり厄介だね。」

放たれる弾丸は、エナジープラネットや重力場によって次々と阻まれていく。

圧倒的な手数によって、ウオズの攻撃が阻まれていく。

「轟君、夜嵐君、少しいいかな？」

「なんだ？ウオズ？」

ウオズと共に各々の個性でギンガを攻撃する轟と夜嵐に、ウオズが問いかける。

「君達の過去や因縁のことは分からないが、少し試してほしいことがある。」

「俺は大丈夫っすよ！」

「なら、夜嵐君の旋風に轟君の炎を乗せて大きな炎の渦を作ろう。それで一気に彼を攻撃だ！」

ウオズの指示に従う様に轟は左手を、夜嵐は右手を構える。

「ああー！」

「任せろー！」

夜嵐がギンガに向けて放った突風に、轟が手から放つ炎がくべられ、巨大な炎の竜巻

となつてギンガにぶつかつていく。

「何をしようと、私には効かない!」

その炎の竜巻を防ごうと、ギンガは疑似惑星弾を撃つていくが、風に乗つて次々と距離を詰めていく炎に打ち消されていく。

「ッ……!!」

自身に迫る炎の渦に対処すべく、右手から重力場を出して、炎の渦を弾き返そうとする。

「まだ行くつスよ!」

「こつちもだ!」

ここで夜風が起こす風と、轟が出す炎の威力がさらに上がり、ギンガの身体が完全に炎の渦の中に囚われてしまう。

「さて、私のも少し乗せさせてもらおうか。」

その炎の渦の中に、ウオズがマグナムアームドシューターから次々と弾丸を放つていく。

その弾丸は夜風の出す風に乗せられ、轟の放つ炎を纏う。

渦の中を進んだ弾丸は、不規則な位置で渦から離れて、ギンガの身体に撃ち込まれる。

「ば、バカなッ……!!」

炎の渦と、弾丸の嵐の組み合わせは仮面ライダーギンガの体力を徐々に削っていく。「……で終わらせるよ。」

『ビヨンド！ザ・タイム！』

マグナムアームドシューターから連射される、強力なエネルギー弾。

それらは炎の渦に乗って次々とギンガの身体に撃ち込まれる。

『ビクトリーマグナムブースト！』

下半身のブーストのアーマーで加速するウオズが炎の渦の中を突っ切り、炎を纏った状態でのライダーキックをギンガに撃ち込む。

「……なところまで！」

ウオズのライダーキックを受け、そのダメージに耐え切れずギンガは光を放ちながら爆発を起こす。

ギンガの放った光は、ウオズの手の中にあるミライドウオツチに吸い込まれていく。「2人共、良いコンビネーションだよ。助かった。」

生成されたギンガミライドウオツチをしまいながら、2人に感謝の意を述べる。

「ああ、けどまだやることは残ってる。」

「俺もそう思うッス！」

轟と夜嵐は、ウオズよりも先に救助活動に向かう。

「あの2人、案外仲良くなれそうだね。」

そんな2人に続くように、ウオズも救助活動に赴くのであった。

「ハ、ハ、いつは…」

爆豪の下に飛来してきた3つのミライドウォッチ。

それらが三角形を象るように並ぶと、その中心に光が集まり、砂時計型のライドウォッチが生成される。

「コイツは…」

『ゲイツリバイブ!』

ゲイツリバイブライドウォッチがゲイツ自身の手に取り、ミライドウォッチ達はウオズの下に戻るために再び飛んでいく。

「なんだ?それは?」

「俺の新しい、力みてえだ!コイツでテメエをぶつ潰す!」

ゲイツリバイブウォッチをジクウドライバーに装填した爆豪は、ジクウドライバーを回転させて新たな姿に変身する。

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！リ・バ・イ・ブ剛烈！ 剛烈！』

仮面ライダーディエンドを模したアーマーが消滅し、その代わりにオレンジ色のマツシブなアーマーがゲイツの身に装備される。

「ば、爆豪の…」

「新しい姿か！」

爆豪勝己は仮面ライダーゲイツリバイブ・剛烈への変身を遂げた。

その姿に歓喜の声を上げる切島達に対し、バリデロは新たな棍棒を手に持ち、ゲイツに向けて駆けていく。

「効かねえよ。」

その棍棒がゲイツのボディに向けて振るわれるが、圧倒的な防御力を持つゲイツリバイブの身体には一切効いていない。

「教えてやるよ。」

そして、その怪力でバリデロの手首を掴んで、持ち上げるゲイツリバイブ。

「俺を倒すのはアイツら、出久とウオズだけだ…こんなところでテメエにやられるかよ！」

圧倒的な攻撃力を持つゲイツリバイブのパンチ。

それがバリデロの腹部に撃ち込まれると、バリデロの肉体は軽いボールの様にあっさり飛んでいき、近くの構造物にぶつかって止まる。

「これが俺のパワーだ！」

そんなバリデロに接近したゲイツは、掌からの爆破を放つ。

リバイブの力で時間を圧縮し、スペック以上のパワーを引き出すゲイツリバイブ・剛烈の能力。

それは爆豪自身が個性によって放つ爆破にも作用し、放たれたその爆撃の威力が上昇してかなりの威力の爆発になる。その爆撃がバリデロの身に浴びせられ、そのダメージから、バリデロが地面を転がる。

「下等生物」ときが！」

左手の銃から、次々と火炎弾を撃ってゲイツに攻撃を仕掛けるが、それもゲイツリバイブの強固なアーマーの前では焼け石に水。一切ダメージを感じさせずにゲイツリバイブがバリデロに歩み寄ってくる。

「コイツも俺のモンか。」

バリデロに迫りつつ、ゲイツは新たな武器のジカンジャックロー・のこモードを手にする。

オレンジ色の電動丸鋸であるそれを右手に持ち、刃を回転させながらバリデロに殴りかかる。

「武器が！」

咄嗟に棍棒でその攻撃を防ごうとしたバリデロだが、回転する刃はあっさりとバリデロの棍棒を真つ二つにしてしまった。

「くたばりやがれ！」

棍棒をもおったゲイツの攻撃は、バリデロの胸部に達し、彼の装甲を抉る。

「これで終わりだ！」

『フィニッシュタイム！』

バリデロにとどめを刺すべく、ゲイツリバイブがジクウドライバーを回転させる。

『一撃！タイムバースト！』

強化されたエネルギーがゲイツの右足に集まり、その状態で跳躍。

その足を突き出すライダーキックの体制でバリデロに迫る。

「ハアッ！」

ゲイツリバイブのライダーキックがバリデロに突き刺さり、バリデロにゲイツリバイブのエネルギーが流れ込み、その体を爆発四散させる。

「す、すげえ！」

「やったな！爆豪！」

「ああ……」

ゲイツリバイブの能力を使うことによる負担で、流石に疲れが出てしまっ居る爆豪

の下に上鳴と切島がやってきて、彼の肩を抱きながらねぎらいの言葉をかける。

「3人のヴィラン…全員彼らが倒したのかッ…!？」

その近くで、驚きの表情を浮かべる者がいた。

それはプロヒーローのギャングオルカだ。

元は試験でのヴィラン役として乱入予定であったが、本物のヴィランが会場に乱入したことで、参加者やH・U・Cの方々の救助活動をしていた。

ヴィランの対処もしなければいけなかったが、それらは出久達によつて既に達成されていた。

「学生とは言え、仮面ライダーか…かなり強力な力を持っている様だ。」

この場に居た3人の仮面ライダーの力に、驚きつつもギャングオルカはヴィラン3体が撃破されたことを公安に伝えるのであった。

ヒーロー仮免試験中の、オーマシヨツカーによる乱入。

これは神野での一件に続き、世間を騒がせることとなったが、試験を受けに来ていたヒーロー候補生たちの活躍で犠牲者0と言う結果となった。

その要因は、戦闘に参加した仮面ライダー達もそうだが、彼らだけでなく他の雄英生や学校の生徒達によるH・U・Cや負傷してしまった他の受験生等の救助活動によるものも大きかった。

それにより、本来は試験中止で再試験と言う選択肢になるところを、負傷などで動けなかった者以外全員の仮免交付が為された。動けなかった者達も補講を受けることになっっている。

雄英高校1年A組は21人全員合格と言う結果で、2学期を迎えることとなったのだ。

インターン編

第67話 雄英BIG3

仮免試験でのオーマシヨッカーによる襲撃と云う事件はあったものの、我々雄英高校1年A組は全員無事に2学期を迎えることが出来た。

「あー今日のゴミ当番僕だったー！」

「私もお供するよ、我が魔王。」

レベルアップしていく授業内容について行きつつ、我々は寮での共同生活を確立していく。

ゴミ出しや洗濯、風呂掃除は当番制で回していくのだが、今日はちょうど我が魔王がゴミ出し当番の日だ。

少々今日は量が多いので、私も手伝うことにした。

「そういえばもうすぐ、インターンが始まるそうだね。」

「うん、僕たちの仮免取得が早まったのに伴って、インターンも1年からできる様になっただよね。」

2学期が始まって早々に、相澤先生からはヒーローインターンについての説明を受け

た。

簡単に言えば以前の職場体験の進化版で、本格的にサイドキックとして共にヒーローの職務を行うというものだ。仮免取得後に行く予定のカリキュラムで、こちらも我々の仮免取得と同様に1年前倒しで行われることになった。

「ヒーローインターンに授業にと大変だが、それよりも私はゴミの分別の方がネックだね。」

実家から出て21人での共同生活とは言え、自立した生活をしなくてはいけなくなつた。

私は生憎ゴミの分別について考えるのが苦手だね、全て燃やせば済む話なのだが分別をしなくてはいけない。

どこにどのゴミを置けば良いかがイマイチわからないので今回も我が魔王に付いて行つて勉強しようと考えた。

「ゴミね、食品トレーとかも可燃で出しちゃって大丈夫だからね。」

「これはこれはご丁寧に…」

と丁度先輩らしき人の声がして、アドバイスをくれたのでそちらの方を我が魔王と共に見たのだが、そこにいたのはただの人ではなかった。壁から顔と腕だけが出ている。

「うん。」

「き、消えた!?!」

するとその金髪の男性の顔は壁の中に消えていく。

「なんだったんだろうか、今のは?」

「うわああああ!!」

先程の顔のことはさておき、ゴミを捨てに行こうとした時、突如我が魔王が叫んだ。

「またあなたか…」

我が魔王が驚いている原因は、先程の顔が今度は地面から出てきたからだ。

「アハハハハ! 悪いことした! ビックリしたよね? ビックリすると思つてやつてるんだけどね!」

「な、なんですか!?! あなたは!」

「アハハハハ! なんなんだろうね? 何してるんだだろうね? 思うんだよね、僕もね!」

「我が魔王、恐らく不審者だ。さっさと行こう。」

こういうのはスルーするに限る。

我が魔王と共にさっさと歩きだそうとする。

「ゴメンゴメン! まあ、俺のことはじきに分かるよ!」

色々と怪しいので、私は我が魔王の手を引いてさっさとゴミ捨て場に向かう。

翌日の基礎学

「今日のヒーロー基礎学はインターンの話だ。入っただけで！」

オールマイトの引退により、2学期からは各クラスの担任がヒーロー基礎学の授業を受け持つことになっており、A組の授業では相澤が教壇に立っている。

本日の授業はインターンに関するということということで、その説明のために呼ばれた者達が相澤に招かれて教室に入ってくる。

「職場体験とどういふ違いがあるのか、直に経験している人間から話してもらおう。心して聞く様に。」

教室に入って来たのは、出久達と同様に雄英高校の制服を纏う男子2名と女子1名であった。

男子の1人は金髪で筋骨隆々、夏服の半袖シャツを着ているためか太い腕の筋肉がかなり目立つ。

もう1人の男子は金髪の方に比べると細く見えるが、黒髪で鋭い目つきと耳が特徴的だ。

女子の方は美しいスタイルが服の上からでも分かるうえに、可愛らしい顔をしてい

る。美しい青髪を腰ぐらいまで伸ばしている。

「あれって……」

「現雄英生の中でもトップに立つ雄英生3名。通称BIG3の皆さんだ。」

「BIG…3!」

その中の1人の顔に、出久とウオズは見覚えがあった。

筋骨隆々の金髪の先輩の顔は、先日彼らがゴミ捨てに行つた際に遭遇した壁や地面から出てきた顔と同じであった。あの謎の人物がBIG3の一員であることに驚きを隠せない。

「雄英生のトップ!」

「BIG3!?!」

「BIG3!」

彼らの登場に驚く生徒も居れば、興奮する者もいる。

「栄えある雄英生の中の頂点……」

「学校の中で一番プロヒーローに近い存在。」

「めっちゃキレイな人いるし……そんな感じには見えないな。」

(目標! 捕捉!)

飯田や八百万達は彼らの実績に驚いている中、上鳴と峰田は唯一の女性の方に視線を

向けている。

(あの人……思い出した！)

(確か去年の雄英体育祭に居た……)

一方で、出久とウオズは金髪の男の方に心当たりが有る様だ。

昨年受験勉強の息抜きで2人で見た雄英体育祭。そこで金髪の少年始め、他の2名も出久達の中にインパクトを残していたようだ。

「じゃ、手身近に自己紹介宜しいか？まず、天喰から。」

相澤から自己紹介を頼まれた黒髪の少年から、A組一同に向けられる視線が突如鋭くなる。

「ダメだ……ミリオ……波動さん……ジャガイモだと思つて臨んでも頭部以外は人間のままだ……依然人間にしか見えない……言葉が出て、こない……頭が真っ白だ！辛い……！帰りたい……！」

だがそれは、天喰が緊張して頭が真っ白になってしまつていたからだ。

人見知り故に、20人近い人々の前で話すことが出来ずに、壁の方を向いて頭を付けて俯いている。

「あの……雄英ヒーロー科のトップですよね？」

「聞いて！天喰君！そういうのノミの心臓つて言うんだって！人間なのにね……不思議

「！」

そんな天喰の様子を不思議そうに見ている青い髪の女子生徒。

「彼はノミの天喰環！私が波動ねじれ。今日はインターンについて皆に話してほしいと頼まれて来ました！」

「ここは青い髪の女子生徒、波動ねじれが天喰のことも紹介する。

「けどしかし、ところでなんで君はマスクを？風邪？お洒落？」

「これは昔……」

波動が不思議そうに前の席にいる障子が口に付けているマスクに関して問いかける。

その答えを障子が話そうとするが……

「ああ！あなた轟君だよね！ねえ！なんでそんなところを火傷したの!？」

「それは……」

だがその答えを待つことなく、今度は轟の火傷跡に関して問いかける。

「芦戸さんはその角！折れたら生えてくるの？動くの？峰田君のボールみたいなのは髪の毛?!散髪はどうやるの？蛙吹さんはアマガエル？ヒキガエルじゃないよね？どの子も皆気になるところばっかり！不思議！」

彼女はA組生徒の様々な見た目の観点で気になるところがあり、その質問がどんどん自分の口から飛んでいく。

「天然っぼーい、可愛い〜」

「幼稚園児みたいだ…」

天真爛漫な彼女の様子に上鳴と芦戸は少し癒されてしまっている。

「オイラの玉が気になるって!?ちよつとちよつと!セクハラですつてば!」

「ちげえよ…」

なお、峰田は自身の頭部の球と股間の玉を勘違いして受け取ってしまった様子だ。

「ねえねえ!尾白君は尻尾で体を支えられる?」

「え、あ、あの…」

「ねえねえ応えて!気になるの!」

尾白にも質問責めしていく波動に、流石の相澤も我慢の限界が来たのか鋭い目つきでBIG3の方を睨んでいる。

「合理性に欠くね…」

「イレイザーヘッド!安心してください!大トリは俺なんだよね!」

全く話が進まないことを注意され、金髪の少年がまずは自己紹介を進めることに

「前途〜!」

と言つてA組の生徒達の方に自身の耳を傾けるが、誰も反応を示さず静かにしている。

ミリオからの突然の対戦要求に、一同驚きの声を上げる。

「戦うって……」

「いきなりかよー！」

「俺たちの経験を、その身で経験した方が合理的でしょ？ どうでしょうね？ イレイザーへッドー！」

ミリオの考えとしては、実際に経験値を積んだ自分自身と戦ってみることでA組の者達にインターンで得れるものを教えようというものだ。

「好きにな、ただしウォズ、爆豪、緑谷の3人は見学だ。」

「それは何故？」

「お前達は強すぎる。少なくとも3人对通形と他のBIG3でやつと勝負になるかどうかだ。」

2学期に入る前の段階で、出久はブランドジョウの力を使いこなせるようになり、爆豪もゲイツリバイブに覚醒。ウォズも仮面ライダーギンガを倒したことで強力なミライドウォッチを手にした。

そんな3人を相手すると、ミリオ達も伝えられる経験値を伝えきれないと判断した。

「なるほど、了解した。」

「戦ってみたかったが、仕方ねえ…」

(BIG3の個性…どんな個性なんだ…?)

相澤のその考えをウオズ達は了承し、出久はミリオの個性をじっくりと見れることに胸を躍らせている。

そして彼らは体操服に着替えて、体育館に向かうのであった。

「あのーマジすか？」

「マジだよね！」

本当に戦うのかと疑心暗鬼な様子で集まるA組生徒達を前にして、ミリオは準備運動をしている。

「ミリオ、やめた方が良い…」

「…と？」

そんなミリオに対し、天喰は壁に頭を付けて俯いている。

その口からはミリオを止めるような言葉が飛び出してきた。

「インターンについては形式的に、こういう具合でとても有意義ですと語るだけで十分

だ。皆が皆、上昇志向に満ち溢れているわけではない。立ち直れなくなる子が出てはいけない……」

「それほど、彼は強いということか。」

天喰の言動から、ウオズはミリオの強さは誰かの自尊心を折るには十分なのかもしれないと推測する。

そしてその推測が正しいことを理解するのに、あまり時間は要さなかった。

「攻撃が当たってねえ!？」

戦いの開始と共に、突如ミリオの服が脱げてしまい、その隙を突くようにA組の面々が攻撃を加えていったがそれらは全てミリオの身体をすり抜けてしまう。

「今度は消えた!？」

「キヤアアアアア!!」

青山のレーザーや轟の炎などが放たれるが、そこにいたはずのミリオの姿が消えてしまう。

すると次の瞬間、一番後ろに居た耳郎の背後に全裸のミリオが現れる。

「瞬間移動もできるのか……」

「いや、違う。あれこそミリオの技術だよ。」

そこからはA組生徒達の攻撃をすり抜けつつ、次々と腹パンを加えていく。

（あの子の個性、多分すり抜けか何かだよね。）

（ああ、それを上手く切り替えて戦っている様だ。）

ミリオがインターンで身に着けた技術というものを、プロヒーロー経験がある志村や煙は見抜いている。

（服が脱げたりしてたのは…）

（多分、すり抜け使った時に服が落ちたのさ。）

轟や飯田、切島に常闇と言った実力あるA組生徒達を次々と沈めていくミリオ。

端から見ると強力な個性を持っているミリオだが、実際はそうではない。

透過という扱いにくい個性を、インターンで身に着けた技術で上手く使いこなしている。

その様子を歴代継承者と共に出久は分析している様子だ。

「POWERRRRRR!!!」

あつという間に、戦いに挑んだA組のメンバー達はミリオに腹パンされて倒れてしまっている。

「多分このからくり、すり抜けを使ってワープしてるってことか。」

「なるほど、例えばすり抜けて地面に入ってから地中を移動して別の場所に浮上しているとか…相当な技術力だね。」

「1つの個性を上手く応用して使っているミリオの様子に、出久とウオズは感心している。」

「そういう技術身に付けれんのが、インターンってことか…」

「ああ、ミリオは相当な努力をしてきたし、インターン先でかなり教え込まれた。」

そんなミリオの努力を一番近くで見えていた天喰が、爆豪の言葉に頷く。

「今度は沈んだね。」

切島達と対峙するミリオの方はすり抜けて地面に沈み、姿を消す。

「後ろか!」

その場に居た轟が彼の個性の性質に気づき、後ろに現れると予測してそちらを向くが、轟の放つ攻撃をすり抜けて回避したミリオは、彼の腹部にもパンチを放つ。

そして、残った飯田や切島達も腹パンで沈められていく。

「POWER!」

あつという間に沈められてしまったA組生徒達。

彼らは腹を抑えつつも立ち上がる。

「まったく、歯が立ちませんでしたわ…」

「俺の個性、強かった?」

「強すぎます!」

「ズルいよ！私のもも考えて！」

「すり抜けるし！ワープするし！轟みたいなハイブリッドですか!？」

訳も分からず倒されたA組生徒からは、ミリオの個性に関してブーイングが起こる。

「いや、1つ！どんな個性か分かるかな？」

「もしかして、すり抜けとかですか？」

自身の個性に関して問いかけるミリオに、戦いを客観的な立場から見て歴代継承者達と分析していた出久が応える。

「ご名答！正確には俺の個性は透過なんだよね！君達がワープと言ってる移動は緑谷君の推察するように透過の応用さ！」

「しかしながら、透過の個性を使ってどのようにワープを？地面に沈んでいたりもしたようですが…」

その応用にどのような技術が使われているのか気になっている様子で、ウオズが問いかける。

「全身個性を発動すると、俺の身体はあらゆる物をすり抜ける。すなわち地面もさ！」

「じゃああれ、地面に落っこちてたってこと!？」

戦いに参加していたA組生徒達も、彼の行動と今の解説の点と点が繋がっていく。

「そう！地中に落ちる。そして、落下中に個性を解除すると不思議なことが起きる。質

量がある物が重なり合うことはできないらしく、弾かれてしまうんだよね！つまり俺は瞬時に地面に弾き出されてるのさ！これがワープの原理。体の向きやポーズを調整して弾かれた先を狙うことが出来る！」

「ゲームのバグみたい。」

「言い得て妙！」

ワープの原理は、まさしくゲームのバク技の様であるが、それを使うのもかなりの技術力があるだろう。

「攻撃は全て透かして、自由に瞬時に動けるのね。やっぱりとても強い個性……」

「いいや、強い個性にしたんだよね。個性発動中は肺が酸素を取り込めない。吸っても透過しているからね。」

透過の個性自体を強い個性だと評する蛙吹に対し、ミリオはその言葉を否定するようにデメリットを話し始める。

「同様に鼓膜は振動を、網膜は光を透過する。あらゆるものがすり抜ける。それは、何も感じる事が出来ず、ただただ質量を持ったまま落下の感覚だけがある。」

「一見便利そうに見えるが、意外と扱いにくいのか……」

5感を使えなくなってしまうだけでも、相当なデメリットであり、そこも踏まえると扱いにくいという印象を受ける。

「その通り！そんな感じだから壁をすり抜ける時も片足以外発動。もう片方の足を解除してから設置。そして残った足を発動させてすり抜け。簡単な動きでもいくつか行程があるんだよね。」

「急いでる時ほどミスるなく俺だったら。」

「おまけに何も感じれなくなってるんじゃないや動けねえ…」

上鳴と峰田は自分であればその個性を使いこなせる自信がないと言う。

A組のクラスの何人かも、彼らと同じ気持ちだろう。

「インターンの現場ではプロと同列に扱われる。時に人の死にも立ち会う！けど、怖い思いも辛い思いも全てが学校じゃ味わえない一線級の経験！その経験が予測をする力を育みトップを掴んだ！ので、怖くてもやるべきだと思うよ！1年生！」

（経験を力に！）

ミリオは18人同時の対戦で自身の実力を示すとともに、そこに至るまでの経緯、自分が持つ個性のメリットとデメリットを話した。一番下から一番上に這い上がれる要因となったのはインターンで積んだ経験。その重要性を短時間で出久達に理解させてみせたのだ。

「体育祭とか、神野とかで見せてもらったんだけど、このクラスは強力な個性を持っている子が多い！その子たちもインターンで経験を積めばさらに輝くよ！今日戦えなかつ

た緑谷君、爆豪君、ウオズ君も是非！」

「当たり前だ！」

「私も現場はもつと見ておきたいからね。」

既に出久、爆豪、ウオズもミリオの凄みを見学だけで理解し、インターンに行くことに前向きになっている。

それはミリオと直接戦ったクラスメイトも同様であった。

出久達は放課後、早速インターン先を探したのだが……

「まずいいことになったな……」

「ああ、これは非常にまずい……」

「僕もだよ……」

その夜寮の談話室に腰掛ける爆豪、ウオズ、出久。

「門矢士にインターンを断られてしまった……」

「僕も、グラントリノが色々と用事で立て込んで無理だった……」

インターンに関して、大体の人は職場体験でお世話になったヒーローの所に行くのだが、3人は職場体験先の門矢士とグラントリノに受け入れ拒否をされてしまった。

「どうやら彼は、他の地に旅立つそうだ。それで我々のインターンの面倒は見れないとのことだ。」

「体育祭で指名してきた奴らの中から選ぶか…」

グラントリノは現在警察と連携して大きな事件を追っており、門矢士は他の世界に出発するためインターンで面倒を見れないということで新たに受け入れてくれるヒーローを探さないといけなくなった。

「けど、グラントリノからオールマイトに相談してみろって言われて、もしかしたらオールマイトが紹介してくれるかもしれないしその人のとこに良かったら3人で…」

「あの、インターンの件なんですが私からも相談させていたただきたいことがあります。」
「八百万さん？」

グラントリノは電話で出久からインターンの件を断る際に、他の候補を1人推薦してくれていた。

そのヒーローはかつてオールマイトのサイドキックをしていた男で、オールマイトならば紹介してくれるだろうとアドバイスをしてくれていた。

3人でオールマイトに頼んでみようと出久が提案していたところに、八百万が割って入ってくる。

「あの…ウオズさん…」

「どうしたんだい？」

「私と！インターンに一緒に行ってくださいませんか！」

八百万からの突然の頼み、それにウオズ達は驚いた様子を見せるが、すぐにウオズは彼女と向き合う。

「それは何故だい?」

「今日も私はあつけなく負けてしまいましたわ…全く歯が立ちませんでした。体育祭の時もウオズさんに何もできず、林間合宿では…」

「それ以上は言わなくても大丈夫だよ。」

推薦で雄英高校に入學した八百万。中学時代までに残してきた経歴とは裏腹にこの来てからは多くの挫折を味わっていた。そのことを拳を握りしめて涙ぐみながら語ると、彼女の意思を汲んだのかウオズがたと上がつて彼女の言葉を止める。

「今日のミリオ先輩を見て学んだだろう。経験はより人を強くする。インターンに行けば私も君ももつと強くなれる。君のその申し出、断る理由はないよ。」

そして、硬く握られた八百万の手を優しく握る。

「ありがとうございます!」

「けど本当にいいのかい?」

「ええ、ウオズさんは普段からクレバーな戦い方をされていますから、学べることが多いかと思ひまして…」

八百万はインターン先のプロヒーローからだけでなく、ウオズからも学ぼうとしてい

る。

「良いだろう。では、共に頑張ろう！」

「はい！」

ウオズとインターンに行けるということで上機嫌で部屋に戻っていく八百万。

「良かったじゃねえか。」

そんな2人の様子を見て爆豪はニヤニヤ笑いながらウオズに語り掛ける。

「ああ、彼女には仮面ライダーになれる兆候があるからね。インターンでいよいよ花開くかも知れないね。」

「アイランドで八百万に現れた兆候、林間合宿ではその兆候が出た八百万をオーマシヨツカーが狙った。

そう言ったこともあり、ウオズは彼女が新たな仮面ライダーになれる日が来ることを信じている。

「それだけじゃねえだろ。」

そんなウオズの太腿を、爆豪は肘で押しながらニヤニヤとしている。

「そ、そのことは触れないでください……では私は失礼するよ。」

ウオズは八百万に好意を抱いており、それを指摘されると頬を赤くしたウオズはそそくさと部屋に戻ろうとする。

「明日も早い。ちゃんと寝て明日に備えよう。」

そう誤魔化しつつもウオズは嬉しさを感じながら帰って行くのであった。

第68話 インターンに向けて

「プロヒーローの職場に出向き、その活動に協力する職場体験の本格版、ヒーローインターン。昨日職員会議で協議した結果、校長はじめ多くの先生が”やめとけ”という意見でした。」

「「えええ〜?!」」

「あんな説明会までして?!」

授業時間を丸ごと使って、インターンを推奨するような授業をしておきながら、反対が多いということに生徒からは驚愕と非難の声上がる。

「でも全寮制になった経緯から考えたら、そうなるか…」

No. 1ヒーローであるオールマイトの引退と、その原因となったオーマシヨッカーの台頭。

それは治安の悪化を招いており、雄英の全寮制も表向きは生徒を守るためとなつてい

る。そういった情勢から考えれば、15歳の1年生を現場に連れていくのは危険とも言えるだろう。

「が、今の保護下方針では強いヒーローが育たないという意見もあり、方針として、インターンの受け入れ実績が多い事務所に限り1年生の実施を許可するという結論になりました。」

「なるほど、行けるヒーローが限られるという訳か…」

つまりはインターン先として選べるヒーローが限られるということになる。

ただでさえ職場体験の伝手を使えなくなってしまったウオズと出久達からすれば新たな問題となる。

「で、どうするんだい？八百万さん？」

その後の休憩時間、インターンの行先について話し合うべくウオズは八百万の席に向かう。

「実は私、候補の人を見つけておりました、受け入れ実績の方がどうかはあまりわからないのですが、この後連絡してみようと思っておりますわ。」

「なら、早速連絡してみるとしよう。」

八百万はややフライング気味だが、既にインターンを申し込もうと思っているヒーローの目星を付けており、そのヒーローがインターン受け入れ実績があれば相澤達も送り出してくれるはずだ。

「あの、ウオズ君。少しいいかな？」

「どうしたんだい？我が魔王。インターンの相談かな？」

「それもあるんだけど、ちよつと見せたいものがあつて僕の部屋に来てもらつてもいいかな？後かつちゃんも。」

「勿論、構わないが。」

「俺も問題ねえ。」

そんなウオズと爆豪に、放課後部屋に来て欲しいと伝える出久。

インターンに関する話だけでなく、もう一つ要件があるようで、ウオズと爆豪は彼の申し出を了承する。

「では、そろそろ授業なので席に戻るとしよう。」

「また何かありましたらお伝えいたしますわ。」

ここで授業が始まる前であることを告げる予冷が鳴り、ウオズ達は自分の席に戻って行くのであつた。

「さて、用事というのは何かかな？」

我が魔王に部屋に来て欲しいと言われた私と爆豪君は、放課後に彼の部屋に向かつて

いた。

「まずはちよつと、見せたいものがあつてね。じゃあ、こつち。」

我が魔王に誘われるがままに部屋の中に入っていき、机の前に来るとそこには見たことのないライドウオッチが3つ並んでいた。

それらはそれぞれ、ウィザードランドスタイル、ゴースト・ビリャザキッド魂、ビルド・ラビットラビットフォームが描かれている。

「我が魔王、これらのウオッチは？」

「実はこれ皆、ワンフォーオールの歴代継承者の皆さんなんだ？」

「ええ？」

夏休みの林間合宿の際、我が魔王は2人の歴代継承者の精神体が見えるようになり彼らとコミュニケーションを取れるようになった。

当時、私と爆豪君もジオトリニティに共に変身した際に彼らと意識空間の中で対話をしたことがある。

「前にジオトリニティの中で会った奴らがなんでこうなつてんだ…？」

「これらのウオッチが歴代継承者というのはどういふことかい？」

「そのことなだけど…」

爆豪君と私の問いかけに我が魔王が応えようとした時だった。

『ロボットのの中に私達の意識を移したのさー』

ゴースト・ビリーザキッド魂のウオッチから、以前意識空間の中で話した7代目継承者の志村菜奈の声がしたかと思えば、3つのウオッチがそれぞれ変形する。

黄色いウイザードウオッチはクラーケン型のロボットになり、茶色のゴーストウオッチはコウモリ型、赤色のビルドウオッチはウサギ型のロボットに姿を変えた。

『コイツの中で仮面ライダーの歴史を見てたらサポートするメカみたいなのを見つけたのさ。丁度、お前らが使ってるライドガジェットみたいなのさ。』

黄色いクラーケン型のロボットの方から、聞き覚えのない男の声がする。

恐らく、我が魔王が仮免試験の際に習得した個性黒鞭の使い手である5代目継承者の万繩大悟郎だろう。

彼が言っているのは響鬼のディスクアニマルやダブルのメモリガジェット、オーズのカンドロイドやフォーゼのフードロイドのことを言っているのだろう。

『彼がグランドジオウに変身している時や戦闘時以外もある程度活動できた方が良いと思ひ、そこで俺達はそれらのメカを参考に新たなライドガジェットを作り出してそこに精神体乗り移らせたって感じだ。』

続いて赤いウサギ型のメカからは6代目継承者である煙の声が聞こえてくる。

「なるほど……ちなみに我が魔王。これらのライドガジェットはどうやって作ったんだい

？」

「グランドジオウオッチに継承者の皆さんの意識を移して、そこで設計してもらってできたんだ。」

「便利なウオッチだな…」

新たなライドガジェットを作ったことで、我が魔王に宿るワンフォーオール of 歴代継承者の皆さんはグランドジオウの力で召喚したライダーに憑依するだけでなく、ライドガジェットにも憑依することで活動が可能となった。

『これで君達とも直接コミュニケーションが取れるようになったし、色々と便利になった。』

『彼に提供できる情報も増えるしな。』

彼らは偵察もこなすことが出来るため、我が魔王に齎せる情報が多くなる。

『このメカもそれぞれのお気へのライダーが使ってるメカを参考にしたのさ。』

彼らのライドガジェットの姿は、よく憑依している仮面ライダーのメカを参考にして
いるそうだ。

志村菜奈はゴーストの使うバットクロックを、万繩大悟郎はウィザードの使うプラモ
ンスターであるイエロークラーケンを模した姿をしている。煙の場合は恐らく、ビルド
ラビットラビットフォームの変身時に登場する赤色の強化アーマーであるラビットラ

ビットアーマーを模しているのだろう。

「二応、ガジェットの名前を言っておくと志村さんがバットウオッチガジェット、煙さんがラビットウオッチャー、万繩さんがクラーケンモンスター。」

『君達2人のこともサポートできたらと思っっているよ。』

「ああ、よろしく頼むぜ。」

我々にまた頼もしい戦力が増えて、これからの活動の幅がより広くなりそうだ。

「ところで、インターンの方はどうなりそうなんだい？」

「僕とかっちゃんのインターン先なんだけど、ミリオ先輩が紹介してくれることになったよ。」

「おお、あのミリオ先輩が。」

先日クラスを訪れた雄英BIG3のミリオ先輩が、我が魔王と爆豪君をプロヒーローと繋いでくれるそうさ。

「それはどういう風の吹きまわしかな？」

「グラントリノが推薦してくれたヒーローなんだけど、最初はオールマイトに紹介してもらおう予定だったんだけど断られちゃって…」

「理由は私情だよ。」

先日我が魔王が言っていたオールマイトの元サイドキックの方が。

私情で無理ということは、今はあまり仲が良くないということかな？

「けど、ミリオ先輩のインターン先だったからミリオ先輩に紹介してもらえってことになつて…」

「明後日に2人で会いに行くことになった。」

「ほう、中々に早いね。」

既にプロヒーローの下に訪れるのが決まっているあたり、段取りが早いみたいで安心した。

私達も頑張らねば…

数日後、とあるプロヒーローに呼び出されてウオズと八百万はとある駅に来ていた。

「相澤先生曰く、普段は活動拠点を構えていないようだが最近では雄英の近辺で活動しているみたいでラッキーだったね。」

「ええ、インターンの受け入れ実績はあまりないようでしたが、先生方からの許可もいただけで何よりですわ！」

八百万が見つつけて来たプロヒーローについて、2人が早速話したところ、相澤はすぐ

にそのヒーローの下にインターンで行くことを許可した。

「事務所もサイドキックも構えておらずこれまでのインターン実績は0、しかしながらヒーロービルボードチャート上半期TOP8の実力者。特別に先生方も認めざるを得ない実績だ。しかしながら、どこで彼女と繋がりを持っていたんだい？」

世間的には孤高というイメージで、今回英雄の教師陣がインターン先の条件としたものからは外れたヒーローではあるが、若手ではトップクラスの实力者であるため特別に許可が下りた。相澤達としてはウオズに早々にプロの現場を体験して欲しいがために話を合理的に進めようという意図もあるかもしれないが…

「実は一度、お父様の会社の方で格闘技の大会でその方のスポンサーをしたことがあったそうでした…」

「確か、プロデビュー前に地下格闘技の試合とYouTubeのアマチュアの格闘技の大会に出ていたと聞いたことがあるよ。その時かな？」

「ええ、その時ですわ！今も人気の1分1Rの格闘技大会に参加された時にお父様がスポンサーに付いて関係を築いていたとのことですわ。」

YouTubeで人気のある企画により、そのプロヒーローとつながりが出来ていた八百万一族。

その伝手で今回のインターンに行くことが出来た。

「お！お前達が私んところにインターンに来たっていうガキ共は！」

そんな2人の所に、白いバニー服の様なボディースーツを着た筋骨隆々な褐色肌の女性が進み寄ってくる。

「初めまして、ミルコさん。雄英から来たウオズと言います。」

「八百万万ですわ。よろしくお願ひいたします！」

そのやってきた女性こそ、彼らがインターン先として選んだプロヒーローのミルコである。

彼女に対してウオズは軽く会釈をし、八百万は深々と頭を下げる。

「まあ、立ち話もアレだし、あっちのカフェ行けど。」

「はい！」

ミルコに連れられて2人はカフェに向かう。

そこで席に座って彼女と改めて対面し、机の上に2人はインターンの資料を出す。

「インターンの件だが、まずは私ん所でインターンをしたい理由を言え。」

「私がインターンに志望した理由は至極簡単。強くなるためさ。我が魔王に負けじとこれまで以上に経験を積みたい。そのためにあなたの下でインターンをしようと思った次第さ。」

「私は…雄英に入ってから負け続きでした…けど、そんな自分を変えたくてインターン

に参加しようと思いました！」

八百万が強く握りしめる手を、優しく見つめるウオズ。

彼女は林間合宿でオーマシヨッカーに誘拐されてしまった件含め、悔しい思いをすることが多かった。

それ故にそんな自分を変えて強くなりたいというのが八百万の願いであった。

「ミルコさんは私とは正反対のヒーローで、私が持つていないものを多く持つていますわ。そういつた部分も得てより強くなるために来ました！」

「2人共いい心がけだ！ 気に入った！ だが、まだこの紙にハンコは押せない。」

2人が出した資料には、インターン先のヒーローが受け入れを容認するためのハンコを押す欄がある。

2人の想いは分かったようだが、ミルコは2人をインターン制として受け入れることを容認しない。

「それは何故かな？」

「私は元々サイドキックすら受け入れない主義だ！ そんな私がインターン生である君達を受け入れるメリットがあるか？」

「私の場合新たな戦力も最近加わり、実力もさらについている。私に加われればより効率的にヴィランを倒すことが出来るだろうね。」

「私は…戦闘面ではまだまだですが、サポートの面では御2人を支えることが出来ますわ…」

「そつちのは良い感じだが、お前はあんま自信がないみたいだな…そんなんじやまだま
だだな。」

ミルコとしては、ウオズの方には魅力を感じている様だが八百万に対してはあまり関
心がなさそうである。先にウオズの資料の方にハンコを押すが、八百万の方には押す気
がなさそうだ。

「いいや、そんなことはないさ。」

「ウオズさん…」

「彼女は判断力と作戦立案能力に優れている。知能面でのサポートのみならず、個性の
創造で様々なものを作り出せる。個性の力で後方支援も出来るだろうが、これからの成
長次第では戦闘にも生かせる。あなたの下で経験を積みれば3年後には良い戦力になり、
実力で貢献できるだろうね。」

「そ、そこまで言われたら少し…恥ずかしいですわ…」

ウオズからの自身の知能面や個性に関する賛辞を言われると、恥ずかしさからか顔を
赤らめてもじもじしている。

「なるほどな…んじやあ、インターンでお前は実力だけじゃなくて自信を付けろ！そつ

ちのウオズに弁護されっ放しじゃだめだが、ポテンシャルは気に入った！絶対的な強さと絶対的な自信を私のとこで身に付けろ！」

ウオズの言葉を聞き、八百万のことを育てる価値ありと判断したミルコはハンコを八百万の資料にも押す。

「ありがとうございます！」

「それじゃあ！来週から早速インターン開始だ！よろしく頼む！」

「ああ、よろしく頼むよ。」

こうして、ウオズと八百万はミルコの下でインターンをすることになったのだ。

第69話 ラビツトヒーローミルコ

「ウオズ君達のインターン、結構遠方なんだね。」

「ああ、まずは1週間の広島遠征に付いて行くことになってね。」

無事にインターン先が決まったウオズ達。

一先ずウオズと八百万はミルコの1週間の広島遠征に付いて行くことになった。

「しかしながら、我が魔王達もインターン先が決まったようでは何よりだよ。」

「まあ、なんとかね。ミリオ先輩のお陰でまあ……」

出久と爆豪も無事にインターン先が決まっており、ウオズ達よりも先に開始しているが今日は招集が無く雄英にいる様だ。

「では、お互いの健闘を祈ってるよ。」

「おう！行ってこい！」

「連絡待ってるよ。」

爆豪と出久は2人を見送るために寮の廊下と一緒に向かう。

「ヤオモモー！いつてらー！」

「ええ、行ってきますわ。」

芦戸を始めとする女子達も八百万らを見送る。

既に一部のクラスメイトはインターンに出発していてこの場にはいないが、寮に残っているクラスメイト達がウオズ達を見送る。

「行つてくるよ。」

「必ず、強くなつて戻つてきますわ。」

「「いつてらっしやい！」」

寮を出た2人は近くの駅から新幹線に乗り、そこから西進していく。

昔であれば、途中駅の新大阪で乗り換えなければいけなかったが、今となつては東京から福岡に直通する新幹線も運行しており、それに乗つて彼らは広島に向かう。

「緊張しているのかい？」

「い、いえ、そんなことは……」

その車内で、少し緊張している様子の八百万にウオズが声をかける。

「実際にプロヒーローとして活動するのは初めてだ。緊張するのは致し方ないよ。」

緊張気味の八百万をリラックスさせようと、そつて彼女の手を握る。

「リラックスしすぎるとも良くないが、緊張しすぎて硬くなれば学べるものも学べなくなつてしまうよ。」

「確かに、ウオズさんの言う通りですわね。」

ウオズの言葉に納得した様子で、八百万は深呼吸をして緊張を和らげる。

少しお互いの距離が近くなったことに、それぞれの心拍数が上がっていくが2人共そのことには気づいていない。

「さて、そろそろ広島だね…」

「そうですね…」

間もなく、彼らが乗っている新幹線は広島駅に到着する。

ウオズと八百万は1週間分の着替えやコスチュームが入った荷物を手に持ち、降りる準備をしていく。

「さあ、始まるよ。我々のインターンが…」

「来たな！2人共！」

「おはようございます。」

広島のを降り立った2人を出迎えるのは私服姿のミルコだ。

白いTシャツにGパンというレアな出で立ちのミルコに驚きつつ、2人は挨拶をする。

「よしーじゃあまずは私の仮拠点に2人を案内する！そこでコスチュームに着替えて早速訓練だ！」

2人は大きめの貸倉庫に彼女に連れてこられ、そこで各々別室でコスチュームに着替える。

「さて、訓練というのは一体どういうことをするのだろうか？」

先に着替え終えたウオズが1番広い部屋にやってくる。

既に腰にはビヨンドライバーを巻いており、いつでも戦う準備は出来ている。

「それじゃあ、始めるぞ！」

そこにコスチュームに着替えたミルコと八百万がやってくる。

「まずは筋トレと体幹だ！フィジカルから強くしていくぞ！」

いきなり戦闘訓練を始めるのかと思いきや、まずはそのためのフィジカルを鍛えるところから始まる。

「特にこっちは体はあんま強くないから、しっかりと鍛えていくぞ！鍛えねえと折角の個性も活かせねえからな！」

「わ、分かりましたわ！」

ミルコ曰く、既に活躍しているウオズというよりは八百万の方の肉体がまだまだで、これでは創造で武器を使っても上手く使いこなせず終わってしまうと指導する。

ミルコが八百万とウオズに課した訓練は基礎的でありつつも、かなりハードである。しつかりとストレッチや筋トレ、体幹トレーニングをしてフィジカルを鍛えていく。

「次はミット打ちだ！」

続いてのトレーニンング内容は、ミットにパンチやキックを打ち込んでその動作をしつかりと身に着けていくという訓練である。

「もつと腰ひねって！」

「はい！」

そのパンチの打ち方などはミルコから厳しく指導される。

フィジカルとテクニック、それらを数時間かけて磨き上げた後は実践編へと移っていく。

「じゃあ、スパarringだ！」

続いては実戦形式での組手をする事になり、まずはウオズとミルコが戦うことになる。

「では、本気でいくよ。」

『ゼロワン！アクション！』

ミルコと対峙するために、ウオズはゼロワンミライドウオツチを自身のビヨンドライバーに装填する。

「変身」

『投影！ヒューチャータイム！』

『プログライズ！』

『フューチャーリングゼロワン！ゼロワン！』

フューチャーリングゼロワンに変身したウオズだが、ライダーモデル達は召喚していない。

「さあ、始めるぞー！」

「よろしく頼む。」

ミルコの個性は兎、主に彼女の脚力を強化している。

その足で地面を蹴れば、弾丸の様なスピードでその体がウオズに向けて突き進んでいく。

「おっと、危ない。」

そのミルコが放つパンチを横に避けて、ウオズはミルコの腹部を狙って膝蹴りを撃とうとするが…

「お見通しだよー！」

それに反応したミルコが右足を振り上げる。

兎の様に優れた彼女の脚力から繰り出される蹴りは、ウオズ自身に当たることはない

が、蹴りと共に起きる強風は彼に攻撃を中止させて後退させるには充分であった。

「足なら負けないさー！」

兎は脚力に優れた生物であるが、昆虫界で脚力に優れていると言えばバツタだろう。

そのバツタの力を持つ仮面ライダーウオズ・フューチャーリングゼロワンもミルコに對抗できる脚力は備わっている。

「ハアッ！」

ミルコが地面を蹴ってウオズに突き進み、蹴りを放とうとするが、それをウオズは瞬時に見切って自分からも蹴りを放つ。

お互いに回し蹴りを仕掛けようとしたウオズとミルコのそれぞれの足がぶつかり合う。

高い攻撃力を持つ2人の蹴りがぶつかり合い、それぞれの身体が反作用で後ろに後退していく。

「良い蹴りだ。それに私のスピードにしつかりと対処しているー！」

「当然だ。私は普段もつと速い人たちを相手しているからね。」

ミルコの脚力から来るスピードは、現代のプロヒーロー達の中でもトップクラスだろう。

しかし、それ以上に速い速度を出せる者達とウオズは良く行動を共にしている。

ジオウとゲイツは使うライダーの姿次第で、プロヒーロー達以上の速度で動くことが出来る。

そんな彼らとよくトレーニングをしているウオズも、ある程度速い相手への対処はできる様になっている。

「良いぜ！燃えてきた！」

更にもう片方の足で蹴りを繰り返すミルコに対し、ウオズは身体を仰け反らせて回避する。

「それ！」

後ろに足を引かせてから、右足を軸に身体を回転させてバックアンドブローをミルコに向けて打つ。

「いいねえ、けど今日はここまでだ！」

ウオズの攻撃を腕で止め、ミルコはスパーリング終了を告げる。

「お前は中々いい感じだ。次は八百万！いくぞ！」

「は、はい！」

ミルコが次に相手とするのは、八百万だ。

戦うことに、少し不安そうな様子を見せる八百万。

「大丈夫だ。君の個性と判断力であればしっかりと戦えるはずだ。」

「ええ、ありがとうございます。」

ウオズからの励ましに感謝し、八百万はミルコの前に立つ。

「んじゃあ！いくぜ！」

「よろしくお願いします！」

早速地面を蹴り、勢いよく八百万に向かっていくミルコ。

その攻撃を防ぐように八百万は創造した盾を右手に持って構えるが：

「そんなの、すぐに突破しちまうぜ！」

ミルコは八百万の前で飛び上がり、上から降下しながら踵落としを仕掛ける。

「…!?!」

咄嗟に反応して左腕に盾を装備して上に向けて構えて防ごうとするが、ミルコの踵落としはその盾すらも粉碎し、盾が粉碎されてしまった衝撃で八百万は尻もちをついてしまう。

「これで一本だな！」

「は、速いですわ…」

僅か数手で自分を圧倒してしまったミルコの動きに、八百万は驚きを隠せない。

「今のは判断を誤ったな。」

「と言うと…?」

戦いの中での八百万の動きに、ミルコは手厳しくダメ出しする。

その内容に関してウオズも気になっている様だ。

「今出したのが盾じゃなくて棒であれば、私は攻撃に転じることが出来なかった。蹴り砕きにくいし変な落ち方したら刺さっちゃう。怪我覚悟で突っ込んでも良いが避けるのが得策。まあ、盾よりは私にダメージ与えれたな…」

「よくよく考えれば、理になくなってますわね…けど、その作戦が戦いの時に頭に浮かびませんでしたし、そうしようという判断もあの場でできてたかと言われると…」

八百万の戦闘に関してのアドバイスから、八百万はその時の自分の行動に関して考える。

だが、ミルコが言うような行動をその場でできたと言える自信がない。

「そう…そこだ！今のお前の弱みはまさしくそう、咄嗟の作戦立案と判断だ！それも一秒未満の間での即決！そういうのが戦闘で大事になってくるが、今のお前にはそれが足りない…」

「即決ですか…」

「八百万君は一度止まって考えて判断する能力に優れているが、動きながらの判断は確かに苦手な印象だね…」

一度の組手で八百万の短所が分かれば、ミルコのやることはただ一つ。

「じゃあその短所を潰すのにやることはただ一つ！只管戦って経験積むのみよ！ウオズ！お前も手伝え！」

「ウオズさん……」

「私とて、乱暴は好まないが、強くなりたいという君の気持ちに応えるためだ、本気でやるよ。」

八百万とのスパーリングを続けつつ、彼女にミルコが戦闘時にするような咄嗟の判断をする力を付けようというものだ。

フューチャーリングゼロワンに変身したウオズがライダモデル達を呼び出し加勢させる。

ただでさえ強力な相手が多数。ピンチではあるが成長のチャンスである。

強力かつ多勢の相手を捌き切ることが出来るようになって来れば、瞬時の判断力も身に着くかもしれない。

「強くなるための覚悟はできていますわ……ミルコさん……ウオズさん……よろしくお願います！」

覚悟を決め、八百万はミルコ達に向かっていくのであった。

「さてと、東と西に我々の戦力を用意することが出来た。」

「しかしながら、神野で吸収した力がようやく芽生えるとはな…」

蛇腔市という土地にある大きな病院。

その医院長である氏子達磨という男は地域住民からも慕われており、良き医者という顔を持つ。

また彼はオーマシヨツカーのドクターという顔を持っており、彼の病院の地下には秘密の研究所がある。

そこにある培養液のタンクの中には新型の脳無が幾つか眠っており、彼が座る椅子の前にはオールフォーワンが座っている。

「ドクターの培養の賜物だね。あの時はウオッチの変化すら起きないほどの微小な力だったけど、今ではアナザーウオッチを作り出せたのだからね。」

雄英高校ヒーロー科林間合宿への襲撃と、八百万百の誘拐。

それは彼女の中に芽生えつつあった仮面ライダーの力の回収が目的であったが、その回収は失敗したのだと思われていた。

「力の増幅には大分苦労したが、個性の複製技術を応用して何とかできた。」

だが、その時着実に彼女の中に眠る力の一部を採取することに成功していた。

それを氏子の技術によつて増幅させて、彼らは新たな戦力を作り出した。

「この世の中には燻っている悪意が多くある。それを私が裏から目覚めさせ、力を与える。やがてこの国は、いいや世界はさらなる悪意に包まれるだろうね。」

「例のヤクザ達も順調そうだしな。」

「死穢八斎會：彼らも中々に面白いものを作るからねえ。」

オールフオーワンの手の中には、いくつかの銃弾の様なものがあり、その先端には針のようなものが付いている。

「個性消失弾か、興味深い品じゃが…」

「なんでも、”巻き戻し”という個性を持つ少女の血肉で作ったそうだ。」

オールフオーワンは新たな悪の力を死穢八斎會という組織に渡す代わりに、彼らが作ったという個性消失弾を得ていた。その製造工程は人の道を外れた様なものであるが、オーマシヨツカー陣営としてはそれは関係のないことだ。

「中々えげつない製法じゃが、彼らならアナザージオウの力を成長させれることに期待じゃな。」

「ああ、向こうの若頭の個性も中々興味深いからねえ…」

「んじやあ！今からパトロールだ！」

時は流れて夕方、日が沈み出した時間にミルコはウオズと八百万を連れて街を歩いている。

基礎訓練を終えて、次は応用と言うことで夜の街をパトロールすることになった。

「夜だとはやはり、昼間よりも治安は悪いだろうね……」

「え、ええ……」

ウオズの方は普段通りであるが、八百万は疲労困憊と言った様子である。

「どうした？まさかさつきまでの訓練で疲れたとは言わせねえぞ。」

「そ、そんなことないですわ！」

その疲労の原因をミルコに見抜かれてしまったが、八百万もプロヒーローを目指す者として訓練後のパトロールも頑張らねばと背筋を伸ばす。

「おう！じやあ、さつきと行くぞ！」

ミルコに先導されながら2人は歩いていくが、事件は特に起きないまま時が過ぎていく。

「この町はあまり治安が悪いといった様子はなさそうだね。」

「そうだな、けど最近大物ヴィランがこの辺に居るって情報があるんだ。」

「大物ヴィラン？」

この日は小さい事件もあまり起きていないこの広島街であるが、裏では大きな悪が動き出そうとしていた。

「関西全域を拠点にしてた麻薬密売組織の奴らだ。中々にデカイ組織だったし、一回蹴りに行ったんだが苦勞したぜ。」

「その彼らがこの町に？」

「そうだ。前にぶつ飛ばしたんだが中枢の奴らは取り逃がしちまった…で、今この町で再起を図ってるって情報を得たんだ。」

ミルコが得た情報では、嘗て彼女と戦った麻薬密売組織のボスや幹部がこの町に逃げ込んだとのことだ。

「では、今回の遠征の目的って…？」

「ああ、またアイツらをぶつ飛ばす！」

今回インターンとしてウオズ達を受け入れたミルコだが、それには若きヒーローの育成だけでなくこの件の解決のための戦力増強という理由もあった。

広島遠征の目的も麻薬組織の情報収集と討伐である。

「そう言うことなら、早く行ってくれればよかつたのにね。私は情報収集も手を貸せるからね。」

『フォックスブーストロイド!』

ウオズは自身の手を持ったギーツ・ブーストミライドウオツチを変形させて、フォックスブーストロイドにすると、早速街の方に解き放つ。

「彼ならば良い情報を集めてくれるはずだ。」

「ほう、中々使えそうだな!」

ライドガジェットによる情報収集を開始したウオズに、ミルコは感心している。
「さて、私らの足でもどんどん情報集めていくか!」

情報集めと治安維持のためのパトロールは、夜遅い時間まで続くのであった…

第70話 ギンガの力

「お前ら！情報が入ったぞ！」

インターン3日目、仮拠点で特訓中のウオズと八百万の下にミルコがやってくる。

「情報、例の麻薬組織のボス達か……」

「その通り！」

ミルコの様子から、それが今彼女が追っている麻薬密売組織に関する情報だとウオズはすぐに見抜いた。

「奴らはこここの隣町である凝留葉市つとここに潜伏中だそうだ。」

「早速乗り込むのかい？」

「明日に乗り込むぜ！」

そして、既に明日に凝留葉市という土地に乗り込んで麻薬組織と戦うことが決まっていた。

「それで、明日は2人にも来てもらおう！今日は早めに切り上げて戦う準備だ！」

「あ、その前に！一つよろしいですか？」

「どうしたんだ？」

明日に備えて体を休める様に2人に言うが、八百万がミルコの言葉を遮るように前に出る。

「明日の戦いに向けて、麻薬組織の方達の個性などの情報を聞いておく必要がありますわ。」

「そういや言つてなかったか…んじゃあ、パパつと教えていくぞ！まずはボスの黒川イタチだ！コイツの個性は“カマイタチ”。刃が付いた尻尾みてえなのをケツから生やしてやがる。」

ミルコ自身も一度黒川とは戦ったことがあり、その個性などはよく理解していた。

「他の構成員は？」

「私知ってる奴らは生憎、この前戦つた時にとつ捕まえたからな。今いるのはあんま情報ねえ新顔つて感じの奴らだ。」

「なるほど…」

こちらが把握している個性の敵が1人しかいないということ、情報面で少し不安を感じる八百万が俯くが、胸に拳を当ててすぐに顔を上げる。

「なら、もう少し特訓して明日勝つだけですわ！」

「そうだね。敵がどうであろうと、我々が気落ちすることはないさ。」

それでも前を向き、明日敵を倒すことを強く決意している八百万。

「よし！なら今日は追い込みだ！明日動けなくなっても知らねえぞ。」

「意地で戦ってみせるさ。」

「望むところですよ！」

勝ちを引き寄せるための追い込み、ウオズと八百万は気合を入れて臨む。

その2人の気概を買ってかミルコもニヤツと笑い稽古を始めるのだった。

翌日の朝、凝留葉市に向かうことになったミルコら一行は出発の準備をしていた。

「大丈夫かい？八百万君？」

「も、問題ありませんわ！」

昨日までの訓練の疲れの蓄積と、これからの戦いへの緊張からか、八百万の表情は少し優れていない。

「心配は無用さ。私もよく戦いに挑むときは緊張するが、いざヴィランと戦う時は冷静になれる。」

「と、言いますと？」

「信じられるものが多いから、勝てる自信が生まれて冷静に頭を動かせる。」

ウオズには頼れる力や仲間がいっぱいある。

仮面ライダーウオズやミライダー、令和ライダー達の力は頼れる戦力である。そして、出久や爆豪に轟と言った頼れるクラスメイトもいる。

これらはウオズに戦いに勝つという自信を与えてくれるのだ。

「私が魔王や爆豪君を信じるように、君も私やミルコ氏を信じて欲しい。そして、君自身の力も……」

その普段の自分の考え方を八百万に伝えることで、励まし安心させようとしていた。

「ええ、信じて戦いますわ!」

「その意気だ! んじゃあ早速、行くぞ!」

「はい!」

八百万の中の不安が吹き飛んだのを確認し、ミルコの号令と共に凝留葉の地に向けて3人は出陣する。

「それで、敵がいるというのとは?」

「港の倉庫街の方だ。」

3人はタクシーに乗って凝留葉市の海沿いの地域に向けて移動していく。

敵の潜伏先であるという港の方に着くと、タクシーを降りて倉庫街を移動していく。

「では、敵がいる方を早速調べてみるとしよう。頼んだよ。」

『フォックスブーストロイド!』

倉庫が幾つか見えたところで、ウオズがギーツ・ブーストミライドウオッチを起動。それはフォックスブーストロイドに変形して倉庫街の方に向けて走り出していく。

「さてと、どの倉庫かな?」

倉庫街というだけあり、港にはいくつものコンテナや倉庫があり、その中のどこに敵達がいるか分からない。まずは斥候を放って、そこに敵がいるのかを特定する。

「なるほど、その建物か。」

フォックスブーストロイドがウオズの手に戻って来たのはすぐだった。

彼らの視界にある1つのこじんまりとした廃工場のような建物。そこで敵を見つけた様子のフォックスブーストロイドがウオズ達の下に戻ってくる。

その建物に件の敵がいることが伝えられ、ミルコらは乗り込むために臨戦態勢に移っていく。

「んじゃあ、乗り込むぞ!」

「はい!」

「了解。」

『ウオズ!アクション!』

八百万は個性の創造で鉄のパイプと盾を生成して装備し、ウオズはミライドウオッチ

を起動しながら腰に巻いたビヨンドライバーに装填する。

「変身。」

『投影！フューチャータイム！』

『スゴイ！ジダイ！ミライ！仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

そして、仮面ライダーウオズへの変身を完了すると、ジカンドレスピアをその手に持つ。

「突撃開始だ！」

2人が戦う準備を終えたのを見ると、ミルコが敵がいるという建物に先陣を切つて突っ込んでいく。

廃工場の建物の扉をミルコが蹴破り、3人が中に入っていくが…

「君達はツ…!?!」

「あらやだ！なんでここに仮面ライダーがいるのよ?!」

そこで3人が目にしたのは意外な人物であった。

黒い目出し帽の上に白の仮面を被り、丈の長いトレンチコートを着た人物と、赤い長髪にお姉口調が特徴的な大柄な人物。

「オーマシヨツカー…」

そう、彼らは林間合宿を襲撃したオーマシヨツカーのメンバーであるMr.コンプレースとマグネである。

特にコンプレスはウオズと八百万の2人と顔を合わせたことのある因縁の相手だ。

その彼らがこの地にいることに、八百万達は驚きを隠せない。

「おいおい、ここなら安全って言ってたのにこりやどういうことだ？」

「黒川イタチ……！」

オーマシヨツカーの2人に背後から男勝りな口調で声をかける1人の女性。

その女性こそ今回のミルコ達のターゲットである黒川イタチであった。

「仮面ライダー含むヒーローが3人来たとは言え、今の我々には関係ないさ。」

「そうね、ここでアンタを倒して弔ちゃんの敵討ちよ！」

黒川はオーマシヨツカーと手を組み、広島の凝留葉市に潜伏していたが、それもミルコらに突き止められてしまった。

だが、ここで彼女と共に行動していたオーマシヨツカーの2人はウオズ達の殲滅に考えを移す。

『ブロー！』

「プログライズキーか。」

仮面ライダーゼロワンと敵対した企業の製品でもあるレイドライザーを腰に巻いたマグネが、バッファロープログライズキーをベルトに装填する。

「実装！」

『レイドライズ!』

『クラッシングバツファロー!』

『This charge attack will send you flying.』

マグネの身体は赤い牛の様な角と、頑丈なアーマーに包まれていく。

クラッシングバツファローレイダーへと彼女が姿を変えると同時に、コンプレスは手に持ったビー玉の様なものを投げる。

「さあ、援護だ!」

地面を転がった6つのビー玉は光を放って人型となり、コンプレスの個性によって圧縮され持ち歩かれていた怪人達に姿を変える。

それらは白い身体を持つ鳥を模した怪人、アヒルメギドであり合計6体がこの場に現れる。

「この隙に逃げるんだ!」

相手は3人に対してオーマシヨッカーは7体の怪人がいる。

このまま抑え切れることは容易と判断し、黒川自身には撤退を進言する。

「それじゃあ、任せたよ!」

「ミルコ! 八百万君! 2人は彼女を追ってくれ。怪人達は私が引き受ける。」

「おう！分かった！」

7体の怪人で3人の足止めをしようというオーマシヨツカーに対し、ウオズはこの場を1人で抑えると言う。

「7人を相手に1人って、勝つ策はあるのかしら？」

「勿論、ここにがあるさ。」

ウオズを挑発するマグネに対し、ウオズはあるウオツチを取り出す。

『ギンガ！アクシヨン！』

それは仮免试験の襲撃に來た仮面ライダーギンガのミライドウオツチであり、ウオズはそれをビヨンドライバーに装填する。

『投影！ファイナリータイム！』

『ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！』

『ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

ギンガミライドウオツチを使うことで宇宙の力を使う最強の戦士へと変身する。

「祝え！太陽と惑星を司る、宇宙最強の預言者！その名も仮面ライダーウオズギンガファイナリー！新たな歴史の1ページである！」

「何を祝ってるの!?やっておしまい！」

ウオズギンガファイナリーへの変身を遂げたウオズの祝辞に腹を立てたマグネの変

身するバッファローレイダーが、6体のアヒルメギドをウオズに差し向ける。

「私を倒すのに、その数で足りるのかな？」

仮面ライダーギンガと同じ力を使うことが出来るウオズは、疑似惑星弾エナジープラネットを無数に創造し、アヒルメギド達に向けて撃ち出す。エナジープラネットは次々とアヒルメギドに直撃し、爆ぜていく。

「さあ、今のうちに黒川を追うんだ！」

「おう！八百万！ついてこい！」

「分かりましたわ！」

アヒルメギド達が倒れている間に、ミルコと八百万はその場からの逃亡を図る黒川を追う。

「さて、まずは君達をここで倒して、警察にでも突き出すとしよう。」

「そんなこと！アタシがさせないわよ！」

バッファローレイダーが背中のブースターによって生み出される推進力で、ウオズに向けて突撃していく。

「悪いけど今の私に近付くことは不可能だよ。」

ウオズは両肩に装備されたグラビコンソーサーを使って重力を制御し、自分の身体を浮遊させる。

「ここからなら、私の独壇場だね。」

重力から解放されたウオズは宙に浮きながら、自身の身の回りにエナジープラネットを生成。

そして地上にいるバッファローレイダーとアヒルメギド達に向けて疑似惑星弾の雨を降らせる。

「ちよつとー！こつちに來なさいよー！」

空中にいるウオズに対して、地上にいるオーマシヨツカーの怪人からすればかなり不利だ。

ウオズからの攻撃に対して防戦一方にならざるを得ないが、バッファローレイダーに変身するマグネは自身の武器である巨大磁石と個性を使ってウオズを引き寄せようとする。

「おっと、これは…」

マグネの個性は磁力。自身から半径5 m以内の人物に磁力を付加することができ、ウオズの身体に磁力を付加させる。磁力を帯びたウオズの身体を、マグネは巨大な磁石で地上に引き寄せようとする。

「ならば、君をこちらに引き寄せるまでさ。」

グラビコンソーサーによる重力操作はウオズ自身だけでなく、他者に対して行うこと

ができる。

それによりバッファローレイダーの重力を無くし、その体を宙に浮かせる。

「ちよつと!?でしょ!離して!」

さらにウオズを惹かれ合う巨大磁石を手に持っているせいで、マグネの身体ごとウオズの方に引き寄せられていく。

「教えてあげよう。磁力よりも重力の方が強いってことをね。」

グラビコンソーサーにより生み出される超重力をバッファローレイダーに仕掛けて、その鋼鉄の身体を地面に叩き付ける。

「クワ!これ以上好きにはさせないぞ!」

「やったれやったれ!」

その隙に6体のアヒルメギドが飛び上がって、空中にいるウオズに襲い掛かろうとする。

「どうやら、6体一気に焼かれないようだね。」

『灼熱バーニング!激熱ファイティング!ヘイヨー!タイヨウ! ギンガタイヨウ!』

ウオズは重力を操作して浮遊しながらギンガミライドウオツチをタイヨウモードの切り替えると、額のクレストが太陽に変化する。タイヨウフォームになったウオズは体で生成したピュアパワーを反応させることで超高熱を生み出して、6体のアヒルメギド

に向けて炎を放つ。

「クワー！」

火炎を放つファイナリープロミネンスによって、身体を炎に包まれてしまったアヒルメギド達が地面に落ちる。

「まずは君達から、焼き尽くすよ。」

『ファイナリービヨンドザタイム！』

まずはアヒルメギド達を一掃するために、ビヨンドライバーを操作して必殺技を撃つ準備をする。

超高熱を生み出す太陽型疑似惑星“エナジープラネット・ソーラータイプ”を複数生成する。

『バーニングエクスプロージョン！』

「クワー！！」

その疑似惑星を地面を転がる6体の怪人に向けて撃ち出すと、その超高熱の炎がアヒルメギド達を一気に焼き尽くす。

「全員やられただ?!？」

その炎は凄まじく、6体の全てのアヒルメギドが焼き尽くされて消滅する。

「よくもアヒルちゃん達を！許せないわ！」

バッファアローレイダーは両腕に装備された蹄型武器のバッファブローを振るいながら、ウオズに向けて突撃していく。

「次はこれでどうかな？」

地面に降り立ったウオズはギンガミライドウオツチをワクセイモードに切り替える。

『水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！ワクワク！ワクセイ！ギンガワクセイ！』

額のクレストが土星に変化し、ウオズギンガワクセイフォームとなった仮面ライダーウオズ。

「まずはこれで…」

ワクセイフォームになったことで多種多様なエナジープラネットを作ることができ、ウオズは、土星の形をした疑似惑星弾を生成。輪が着いた状態のエナジープラネットを構え、バッファアローレイダーの攻撃をその輪で受け止める。

「さあ、どんどんいくよ。」

その状態でウオズは火星、水星、木星、金星を模したエナジープラネットを作り出し、次々とバッファアローレイダーにぶつけていく。

「キャッ……！」

「これで終わりだ。」

『ファイナリービヨンドザタイム!』

バッファローレイダーに止めを刺すべく、ビヨンドライバーを操作すると、多種多様なエナジープラネットが大量に生成される。

『水金地火木土天海エクスプロージョン!』

「キャアアアアア!!」

そのエナジープラネットはバッファローレイダーに雨のように降りかかり、次々とエナジープラネットを体にぶつけられてダメージを負ったバッファローレイダーは爆発し、変身を解除したマグネがその場に倒れる。

「さて、このまま確保だ。」

「させません!」

ウオズが地面に倒れたマグネを捕まえようとした時、突然黒い靄の様なものが現れてマグネの身体を飲み込む。

「ほう、新手か…」

「お2人はオーマシヨッカーの計画を遂行するのに必要な人材です。ここで失う訳には行きませんかからね。」

その黒い靄の正体はオーマシヨッカーの黒霧であり、マグネの身体を自身の個性のワープゲートでどこかに逃がしたようだ。

「俺もここで失礼するぜ！」

コンプレスもワープゲートに入ってその場からの離脱を試みる。

「逃がすか！」

「させません！」

コンプレスを捕まえようとするウオズに、黒霧がワープゲートの中から召喚したダンクルオステウスジャマトが襲い掛かり、コンプレスが逃げるまでの時間稼ぎをする。

「次から次に……しかも見慣れない怪人だね……」

ウオズが前世でも見たことない怪人である、古生物ジャマトの存在に困惑しつつ、ウオズはすぐに目の前の怪人を倒すための体制に移る。

「おっと……」

ダンクルオステウスジャマトが自身の持つ大剣“ランド・ド・クリーブ”を地面に向けて振り下ろすと、地面からウオズに向けて巨大な棘が大量に生えてくる。

その攻撃を重力操作によって宙に浮くことでウオズは回避する。

「これは中々……厄介そうだね……」

古代魚ジャマトが地面を液化化させてその中に潜り込むと同時に、そこから巨大な古代魚が飛び出してくる。

『灼熱バーニング！ 激熱ファイティング！ ハイヨー！ タイヨウ！ ギンガタイヨウ！』

ここでウオズは再び、ウオズギンガタイヨウフォームへと姿を変える。

そしてピュアパワーの反応による熱線照射、ファイナリーフレアレイを巨大な古代魚に向けて放つ。

「さあ、焼き魚にしてあげるよ。」

熱戦を照射しながら、ウオズは右手の上で太陽型疑似惑星“エナジープラネット・ソーサラータイプ”を生成すると巨大な古代魚と液化化した地面にその高熱のエネルギー弾を叩き付ける。

「あまり、美味しくはなさそうだね…」

地中に潜っていた古代魚ジャマトごと巨大な魚が燃え盛る。

『水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！ワクワク！ワクセイ！ギンガワクセイ！』

再びワクセイフォームへと姿を変えたウオズは、多数のエナジープラネットを生成してジャマト達に向けて降らせていく。

「かなり、しぶといみたいだね。」

だが、巨大な古代魚はウオズによる攻勢を受けてもなお、未だに健在でウオズに向かって襲い掛かる。

さらにジャマト自身も再び立ち上がって巨大な棘を射出する。

「だが、銀河を超越するこの私の力には勝てないよ。」

ウオズは自身の目の前に多数のエナジープラネットを生成すると、それで棘を阻んでしまうと敵に向けてその疑似惑星弾を古代魚ジャマト達に向けて放つ。

「中々に硬いようだが、私には関係ないさ。」

火星、水星、木星などを模した疑似惑星弾を間髪入れずにウオズは作り出して古代魚ジャマトや彼が使役する巨大な古代魚に向けて撃ち出してぶつけていく。

ジャマトが大きなトゲを地面から生やして、そのトゲの山がウオズに向けて伸びていくが、ウオズは重力操作で自身の身体を宙に浮かせて回避。

古代魚ジャマトと巨大な古代魚はウオズへの攻撃の機会を伺うとともに、ウオズからの強力な攻撃を避けようと試みる。

「残念ながら、そこには逃げさせないよ。」

だが、液化化した地面に向けても容赦なくエナジープラネットの雨を降らせる。

「魚釣りの時間だよ。」

エナジープラネットが液化化した地面の中で幾つも爆ぜて古代魚ジャマトらが飛び上がる。

そこで2人にかかる重力を操作して強制的に宙に浮かせる。

ウオズは派生形態からウオズギンガの通常の姿に戻りつつ、ビヨンドライバーを操作

する。

『ファイナリービヨンドザタイム!』

浮かせた古代魚ジャマトの後ろに巨大な古代魚を浮かせて、空中で一直線上に並べる。

その状態でウオズは自身の右足にピュアパワーを溜め込んでいく。

『超ギンガエクスプロージョン!』

その状態でウオズが飛び上がり、右足を突き出した状態で古代魚ジャマトに向けて突き進んでいく。

ウオズのライダーキックは空中で古代魚ジャマトに突き刺さり、そのままの体制でウオズはジャマトごと巨大な古代魚に突撃していく。

「このまま逝くがいい!」

足に溜め込んだピュアパワーを一気に敵に流し込むと、古代魚ジャマトの肉体が巨大な古代魚と共に吹き飛び爆散する。

「これでオーマシヨッカーの怪人は全滅かな? さて、ミルコらのところに向かうとしよう。」

オーマシヨッカーが差し向けた怪人達を全て倒すことができたウオズは、黒川イタチを追うミルコと八百万の様子を見るために彼女らの方に向けて移動していくのであつ

た。

第71話 凝留葉事変

「待て！逃がすか！」

ウオズとオーマシヨツカーの者達を相手している間に、ミルコと八百万は麻薬組織のボスである黒川イタチを追っていた。

「行き止まりですわ！もう観念してください！」

八百万ら2人は黒川を港の端の方に追い詰め、彼女がこれ以上自分達から逃げ出すことができない状況を作り出す。

「んなどこまで来やがって！私の好きにやらせろよ!!」

黒川は個性によつて生えた自身の尾を展開、その先には刃の様なものが付いている。その刃が生えた尾を鞭のように振るい、刃でミルコと八百万を切りつけようとする。

「危ねえなあ！」

ミルコは自身に向かってくる刃に対して、横から蹴ることで軌道をずらして自身に達するのを防ぐ。

八百万も創造した盾を使って、相手の攻撃を防いでいる。

「ガキまで連れて来やがって！一筋縄にやいかなそうだ！」

黒川が縦横無尽に刃を振るうが、それをミルコと八百万は回避したり防ぎ切つてい
る。

「今ですわ!」

我武者羅に相手は尾を振り回している状況なので、隙は多くできている。

その隙を伺い、八百万は野球の硬球を生成すると、それをミルコに向けて投げ渡す。

そのボールをミルコは野球選手がバットで弾を打つように、自身の個性によつて強力な筋力を持つているその足で蹴りを放つ。

「ッ……!」

野球においても打たれたボールは打球速度次第では当たってしまった人物の骨を折ってしまう様なことも起こってしまう。

ミルコの蹴りによつて撃ち出されたボールにもある程度の威力はあり、それを腹部に受けてしまった黒川は当たった箇所を手で押さえながら膝を付いてしまう。

「中々やるじゃねえか……」

「ああ、私らはかなり鍛えてるからね!」

相手が蹲つた隙にミルコが地面を蹴つて急接近し、蹴りを放とうとする。

「まあけど、無駄さ。」

黒川は刃が付いた尾を束ねて防御壁にすると、ミルコの蹴りをそれで受け止める。

「私はもつと強くなってるからね…」

『ツクヨミ…』

黒川がミルコの攻撃を受け止めつつ、時計の様なものを懐から取り出す。

それは白く禍々しい戦士が描かれたアナザーウオッチであった。

「さあ、ぶつ殺してやる！」

アナザーツクヨミウオッチを自身の身体に押し付けると、黒川の身体は黒く禍々しいオーラに包まれ、白い装甲を持つ禍々しい姿の怪人へと変化する。

「アナザーライダー!? な、何故あなたがその力を…」

「さっきの奴らに貰ったんだよ…この力をな！」

アナザーツクヨミに変化した黒川は、自身がその力を持つことに驚きを隠せない八百万に向けて詰めを伸ばして切りつけようとする。

「よそ見すんな！」

「は、はい！」

その爪をミルコが横から蹴って軌道をずらし、八百万の身を守るととみに動揺している八百万の意識を戦闘そのものに向けさせる。

「さあさあ! そんなんで私のこと倒せるか!？」

アナザーツクヨミは伸ばした爪と背部から生える尾の先に付いた刃をミルコと八百

方に向けて振るい、彼女らを切り刻もうとする。

「ッ…!?!」

八百万は斬撃を盾で防ごうとするが、鉄の盾はあっけなく切り裂かれて地面に落ちてしまう。

「良い感じだろ?この力!」

アナザーツクヨミの力そのものを楽しみ、見せつけるようにして伸ばした爪を縦横無尽に振るう。

周囲の地面は切られて抉られてしまい、ミルコ達は徐々に敵との距離を離すしかなくなかった。

「アイツ、厄介すぎんだろ!」

「まだです…私にある考えがあります。少し相手の陽動を頼んでも良いですか?」

「仕方ねえ、任せろ!」

アナザーツクヨミに近付けば、彼女が振るう爪や尾の刃で切られてしまう。

近接攻撃に自身のあるミルコにとっては不利な相手だが、応用ができる八百万の個性であればまだ対処する術を作り出すことができる。その可能性に賭けてミルコが前に出る。

「やれるもんなら、やってみやがれ!」

ミルコは自身の強靱な足でアナザーツクヨミの爪を蹴って折り、尾も蹴り飛ばして自身の身体が切られない様に防いでいく。

「お前から切り刻んでやる！」

「そんなんじや私は切れないぜ！」

何本もの刃を伸ばしてミルコを切ろうとするアナザーツクヨミであったが、それらの刃がミルコが足を振るうことで起こる風圧によって吹き飛ばされてしまう。

「いきますー！」

ミルコとアナザーツクヨミの攻防の間に、一門の大砲がアナザーツクヨミの身体を狙っていた。

ミルコが敵の注意を自身に引き付けている間に八百万は大砲を自身の個性によって創造しており、その訪問から放たれた巨大な弾がアナザーツクヨミの身体に向かつていく。

「無駄だー！」

アナザーツクヨミの能力は爪を伸ばすだけではなかった。満月の形を模した盾を自身の左腕に装備して、飛んできた砲弾を防ごうと試みる。

「まだですわー！」

「なんだッ!？」

八百万が撃った砲弾はただの鉄の塊ではなかった。

アナザーツクヨミの盾に激突すると同時に破裂し、白い餅の様なものをまき散らす。それらは盾ごとアナザーツクヨミの腕や足元を包み込む。

「トリモチですわ!」

八百万の狙いは、砲弾による直接の攻撃ではなくトリモチを使って敵の動きを封じることであった。

「もらったあ!」

トリモチで足や手を上手く動かせなくなってしまったアナザーツクヨミの顎を狙い、ミルコが急接近して蹴りを放つ。

「くっ……!」

蹴りを受けたアナザーツクヨミの身体が吹っ飛ばされて地面を転がる。

「良い技持つてるじゃねえか!」

アナザーツクヨミが頭部に付いた半月を模したプレートを発光させると、彼女の身体に纏わりついていたらトリモチが取れて再び動ける体制となる。顎をミルコに蹴られてしまったが、身体が揺らいでしまっている様子もなく再び立ち上がる。

「だが、これ以上はやらせねえ!とつとクタバレ!!」

黒川自身の個性で伸びてくる刃が付いた尾と、アナザーツクヨミの力で伸ばしてくる

爪。

それらを八百万とミルコに向けて振るっていけば、切られないようにと2人は避け続けることしかできない。

「アイツ…厄介だ!」

「盾でも防ぎ切れませんわ!」

八百万は何度も盾を生成して斬撃の雨を防ぐが、それらの盾は次々と切られて防御能力を無くしていく。こうなれば防戦一方の展開となってしまう。

「どうすれば…ウオズさんと呼ぶしか…」

八百万はこの状況を打破するために、ウオズを呼んで彼の力を頼るべきかと考えてしまふ。

「何言ってるんだ!」

弱音を吐いてしまった八百万に喝を入れるように、ミルコは彼女らに向けてくる刃を蹴り飛ばして防ぐ。

「いいか?現場じゃ、都合良い個性持ったプロヒーローが来るなんてことはねえ!自分の力でやらねえといけねえんだ!!」

ウオズに頼ろうとしてしまっていた八百万は、ミルコの言葉を聞いて自身の考えは甘かったと痛感する。

「ウオズの奴が言ってただろ。この場に居る仲間と、自分の力を信じろって！だからテ
メエも私と自分自身の個性を信じろ!!」

「ええ…そうですね！私は己を信じて勝ち抜きます!!」

自分達だけでは勝てないと諦めてはいけない。ここにいる自分達の力を信じて勝ち
に行けというミルコの言葉を受け取ると、八百万は再び奮起する。

「でしたら、これで行きますわ!」

八百万は一つのボールの様なものを創造すると、それをアナザーツクヨミに向かって
投げる。

「こんなもの…私に当たらない!」

アナザーツクヨミがその球を爪で切るがその時、その球が爆ぜて白い煙幕を作り出
す。

「見えない!」

アナザーツクヨミは煙幕によって視界を遮られてしまった。

「もう一発！行きますわ!」

ここで八百万は先程使った大砲の元まで再び走り、そこで再び砲弾を装填して発射す
る。

「今度はなんだ?!」

「トリモチですわ！」

彼女が放った砲弾は先程と同じトリモチ弾。

初見ではない技だが、視界を遮られたアナザーツクヨミはモロにトリモチ弾を体に受けてしまう。

「動けねえ！」

煙が晴れた時、ミルコ達の視界に映るのはトリモチ塗れになってしまったアナザーツクヨミの姿だ。

「次はこれですわ！」

トリモチが身体中に付いて動きにくい状況のアナザーツクヨミにさらなる砲弾が放たれる。

黒川自身の個性である尾も、トリモチが絡んで動かしにくいよう放たれた砲弾を防ぐ間もなく体に直撃してしまう。

「ッ……！」

身体に大きな鉄の塊がぶつかってしまったアナザーツクヨミは、怯んでしまつて地面に膝を付いてしまう。

「舐めやがって！」

さらに追撃を加えようとする八百万達だが、アナザーツクヨミは再び自身の頭部に付

いた半月型の飾りを発光させる。すると三日月の形をした光の刃を空中に生成し、それが八百万らに向けて一気に飛んでいく。

「なんだあれ!？」

「危ないですわ!」

光の刃達から自分達の身を守ろうと両腕に創造した盾を構えて、ミルコの前に立つ。

「私が…守りますわ!」

その時、自身とミルコの身を守ろうとした八百万に不思議なことが起こった。

「こ、これは…」

突如八百万の前に光の壁が生成されて、飛んできた光の刃を防ぐ。

「小癩なあ!」

「させないさ!」

驚く八百万らにさらなる追撃を加えようとするアナザーツクヨミに、敵を倒してこの場に辿り着いたウオズがエナジープラネットを幾つか当てて動きを封じる。

「この力は一体…?」

「私にもわかりませんわ…」

一方の八百万本人とミルコはこの現象に驚いているが、ウオズは遂に時が来たと考えられている。

「恐らく、遂に目覚めたのだらうね。君の中の仮面ライダーの力が…」

八百万の前に現れた光の壁、それはIアイランドでのアナザー1号が起こした事件の際に、八百万自身を守るために現れたものであった。ウオズはそれが再び現れたことで、何かを理解し語り始める。

（しかしながら、目の前にいるのはアナザーツクヨミか…やはり神野で力を取られていたのか。だが、どうやら八百万君の中のツクヨミの力を取り切れていなかったようだね。）

Iアイランドで現れた八百万の中にある仮面ライダーの力の兆候。

それを察したオーマシヨツカーは林間合宿で彼女を誘拐し、神野の研究施設でその力を奪おうとしていた。その時は失敗していたが、オールフォーワンはアナザーライダーの力を作れるほどの力を奪えており、八百万の中でもまだまだ力が残り切っていた。ウオズは彼女らに語りながらそのことを推察していた。

「私の中の、ライダーの力…?」

「ああ、君が決めた覚悟や勝ちたいという思いが君の中のライダーの力を呼び覚ましたのさ。さあ、これを…」

『ツクヨミ!』

八百万の中にあつたツクヨミの力はオールフォーワンに奪われていたが、残っていた

微力な力が彼女のこれ以上負けたくないという気持ちや、自分の力を信じて勝ちに行くという気持ちによって遂に覚醒した。

ウオズから受け取ったブランクウオツチを八百万が手にすると、ツクヨミライドウオツチに変化する。

「さあ、これを使うんだ。」

「分かりましたわ!」

『ジクウドライダー!』

ウオズにジクウドライダーを渡されると、八百万はその力で戦う覚悟を決めてドライバーを自身の腰に巻き付ける。

『ツクヨミ!』

「変身!」

何度も見てきたクラスメイトの変身方法を真似して、八百万もジクウドライダーにツクヨミウオツチを装填してドライバーを回転させる。

『ライダータイム!』

『仮面ライダーツクヨミ♪ツク・ク・ヨ・ミ!』

白のベースカラーに金色のラインが入った装甲を纏い、三日月をあしらったデザイン
の複眼と女性的な体のラインが特徴的な仮面ライダーツクヨミ。八百万がその姿に変

身を果たすとともに、ウオズが逢魔降臨伝を手にして前に出る。

「祝え！英雄の頂点を目指し苦しみの時を味わいながらも遂に花開いた時の女王！その名も仮面ライダーツクヨミ！まさに生誕の瞬間である！さあ、思う存分戦うと良いさ！」

「ええ、行きますわよ!!」

ウオズによる祝福を受けるとすぐ、ツクヨミに変身した八百万はアナザーツクヨミに向けて走り出す。

「殺してやる！」

ウオズのエナジープラネットによる攻撃のダメージから復帰したアナザーツクヨミが伸ばした爪と刃が付いた尾を振るつての攻撃を繰り返すが、ツクヨミは手に光の刃“ルミナスクラスタ”を生成してそれらを全て切り落とす。

「なツ…!?!」

自分の攻撃を防がれただけでなく、尾まで切り落とされてしまったことで驚きつつもアナザーツクヨミは尾を再生して再び刃を生やす。

「再生もできるようですが、今の私には勝てませんわ！」

だが、アナザーツクヨミが尾を再生している間にツクヨミが急接近し、回し蹴りを放つ。

「クツ……!」

その時ツクヨミの足から創造したナイフの刃がアナザーツクヨミの装甲を切り裂く。攻撃時に道具を作つてさらにダメージを与える……やるじゃねえか!」

蹴りと共にナイフによってダメージを与える八百万の戦術にミルコも感心している。

「テメエツ! うぐツ……!」

アナザーツクヨミが反撃をしようと試みたが、八百万が掌から生成して伸ばした鉄の棒が腹部に刺さる。

「いつてえな!」

「まだまだいきまますわ!」

反撃を試みる相手に隙を与えることなく、ツクヨミは自身の寮手から光の刃であるルミナスフラスターを生やして振るい、2本の光刃がアナザーツクヨミの胸部を切り裂いて火花を散らす。

「戦いの技も中々にしなやかだね。」

「ああ、私が教え込んだんだからな!」

ツクヨミの肘打ち、膝蹴り、回し蹴りのコンボがアナザーツクヨミに決まっていた次々とダメージを与えていく。これらはミルコとの特訓で八百万が身に着けた技の数々であり、自身の身体能力を上げる仮面ライダーの力によってパンチやキックを高い

威力で撃ち出すことができ、高いスペックを誇るツクヨミとミルコの教えた格闘技はかなり相性がいいと言えるだろう。

「私もいくか!」

「勿論!」

さらにアナザーツクヨミに攻撃を仕掛けようとミルコとウオズも駆けだし、ウオズの生成したエナジープラネットがアナザーツクヨミに降りかかる。

「オラア!」

エナジープラネットの次はミルコの三日月蹴りがアナザーツクヨミを蹴り飛ばす。

「さあ、決めるんだ!」

「ええ!」

『フィンツシユタイム!』

アナザーツクヨミが怯んだ隙に、ウオズが止めを刺すように促す。

『タイムジャック!』

周辺が一気に月夜になり、現れる三日月に向けてツクヨミが飛んでから、アナザーツクヨミに向けてライダーキックを放つ。

「させるか!」

尾と爪を伸ばしてツクヨミを仕留めようとするアナザーツクヨミであったが、それら

の攻撃はツクヨミが足に纏う光によって打ち砕かれて、ツクヨミの身体が敵に向けて突き進み、自身を横した禍々しい姿の怪人の胸部を捉える。

「ぐっ……！」

蹴りを受けたアナザーツクヨミの身体が爆散し、地面には気絶した黒川とアナザーツクヨミウオッチが転がる。そのままウオッチは火花を散らして壊れる。

「確保だ！」

黒川の身柄をミルコが拘束し、スマホで警察を呼び出す。

「さて、遂に変身できたね。仮面ライダーに……」

「ええ……まさか私が！」

戦いを終えても未だ、八百万は自身が仮面ライダーになったことに驚きを隠せていない様子だ。

「私は嬉しいよ。これからは並んで戦えることがね。」

「ええ、私もですわ！」

彼女がライダーの力に選ばれた理由こそわからないが、今は2人共ツクヨミの力の覚醒を喜んでいる。

「さあ、これからさらに強くなろう。私が導くよ。」

「ええ！喜んで！」

ウオズはこれからも仮面ライダーツクヨミの力を使いこなせる様に特訓に付き合うことにし、それを八百万も受け入れる。

「ようし！警察来たしそろそろ帰るぞ〜」

「はい！」

その時、彼女らが倒した黒川の身柄を確保しに警察が到着し、役目を終えたミルコ達は事務所に戻ることになった。

こうしてミルコとインターン生2名によって西の麻薬密売組織リーダーである黒川イタチが確保され、組織も壊滅となった。その頃、東の方でもある事件が起きようとしていた。

「それではこれより、死穢八齋會への突撃を開始する！」

警察主導の下、プロヒーロー達が和風の家屋を取り囲んでいた。

「んじゃあ、俺らも行くか！」

「勿論！」

プロヒーローだけでなくその場には出久達インターン生も複数人いる。

しかも出久はグランドジオウに、爆豪はゲイツに変身しておりいつでも戦えると言った様子だ。

何故このような事態になってしまったのか。それを知るために少し時をさかのぼる

死穢八齋會編

第72話 出久のインターン

インターン生含むプロヒーローと警察にいる指定ヴィラン団体死穢八齋會への討ち入りから少し時は遡る。

嘗てのオールマイトのサイドキックでもあるサーナイトアイにインターン生として受け入れてもらった出久と爆豪は、インターン初日を迎えていた。

「本日はパトロール兼監視。私とバブルガールと爆豪、ミリオと緑谷の二手に分かれて行う。」

「監視…」

「ナイトアイ事務所は、今秘密の調査中なんだよ。」

サーの口から出た監視という言葉に疑問を感じた出久に、サーのサイドキックであるバブルガールが解説をする。

「死穢八齋會という小さな指定ヴィラン団体だ。ここの若頭、所謂ナンバー2である治崎という男が妙な動きをし始めた。」

「妙な動き？」

ペストマスクを付けた若い男の写真を示しながら、その男が見せる動きについて語り始める。

「指定ヴィラン団体、警察の監視下にあり大人しいという印象を受けるだろうが、この治崎は似た様な者達を集め出しているそうだ。」

「最近はおーマシヨツカーとも接触を図ったって情報があるわ。顛末は不明だけど。」

「オーマシヨツカー!?!」

バブルガールの口から出たオーマシヨツカーという言葉に、出久は思わず反応してしまふ。

自分との因縁がある相手が、ここでもまた出てくることで彼らの影響力の大きさを痛感することになってしまう。

「ただ奴が悪事を企んでいるという証拠がつかめない。そのために八齋會は黒に近いグレー……ヴィラン扱いができない。我がナイトアイ事務所が狙うのは奴の尻尾。くれぐれも、向こうに気取られぬように……」

「「イエス!サー!」」

「おう!」

そして、サーの指示で死穢八齋會の監視を兼ねたパトロールを開始するのであった。

「あ！ヒーロー！」

「雄英体育祭で優勝してた子だ！」

「き、緊張する…」

街中でパトロールを開始した出久達。

出久は雄英体育祭で優勝したこともあり、一般人からの知名度もそこそこある。

ジオウ変身時の姿を覚えている人はかなり多いが、変身前の彼の姿を覚えている人間も結構いたりする。

「パトロールぐらい職場体験でもやってるよね？」

「やってたんですけど…やっぱり緊張するとか…なんか前よりも視線向けられてるというか…」

出久の知名度があることのきっかけは雄英体育祭だけでない。

夏の神野での事件でのグラウンドジオウの活躍がより人気に拍車をかけている。神野の件をきっかけに、体育祭を見返した人や初めて見た人も多く、職場体験以上に注目を集めている。

「変わってるね。けど大丈夫。今回ホシを監視するのはサー達で俺達はパトロール。」

色々と教えるよ。ついておいでよ！」

(けど、なんでオールマイトは教えてくれなかったんだろう。2人の関係性のことを…) 今回のパトロールにリラックスして臨むように伝えるミリオを横目に、出久は自分達が彼の事務所を訪れた時のことを思い出す。そこで感じたのはオールマイトとサーの間で確執があることで、出久達がインターン生として認められるまでの間に一苦労あった。

「さて、コスチュームを纏って街に出れば俺達はヒーローだ！油断はするなよジオウ！」
「はいールミリオン！」

ここからの時間は本格的にヒーローとして動いていく。

出久とミリオもお互いのことをヒーロー名で呼び合っている。

「…!?!」

パトロールを続けようと出久達が歩き出した時、何か鈍い衝撃が出久の身体に伝わる。

どうやら一人の白い髪の少女が裏路地から出てきて、彼にぶつかってしまった様だ。

「ごめんね、大丈夫？痛かったよね？」

出久にぶつかって倒れてしまった少女に視線を合わせるように出久はしゃがみ、声をかける。

その少女は頭から小さい角が生えており、手足には包帯が巻かれている。そして、靴は履いていなくて服も質素だ。そんな少女を安心させるために手を伸ばす出久に少女は怯えている。

「立てない？大丈夫？」

少女を立たせてやろうと手を伸ばす出久。

（震えてる……？）

出久の手と少女の身体が触れ合った時、出久は彼女の身体が震えていることに気が付く。

「ダメじゃないか……ヒーローに迷惑かけちゃ……」

その時、裏路地から彼女の保護者と思われる男がやってくる。

（嘘だろ……！）

その男はペストマスクを付け、白い手袋をしていた。

彼こそ先程サーが説明していた死穢八齋會の治崎という男である。

「ウチの娘がすみませんね……ヒーロー。遊び盛りで怪我が多いんですよ。困ったものです。」

優しい口調で如何にも少女の父親という雰囲気だが、彼はサーが追っている男ということもあり出久は警戒心を露にしてしまっている。

「またフードとマスク外れちゃってるぜ。サイズ調整ミスってるんじゃないか？」

出久の表情に対して治崎が逆に警戒してしまう可能性を恐れ、ミリオが出久のコスチュームのフードを彼の頭部にかぶせる。

「こつちこそすみません、ぶつかっちゃって。その素敵なマスクは八斎會の方ですよね？こころじゃ有名です。」

「ええ、マスクは気になさらず。汚れに敏感でして…」

ミリオが気さくに会話を続け、治崎の視線を自分の方に向けさせる。

「お2人も初めて見るヒーローだ。」

「そうです！新人なんでまだ緊張しちゃって！さ！立てよ相棒！まだ見ぬ未来に向かおうぜ！」

さらにミリオは軽いノリの言葉を発することで、警戒心が無いかのように振る舞う。

「どこの事務所所属なんです？」

「学生ですよ！所属だなんておこがましいほどのひよっこです。職場体験で色々回らせてもらってるんです。」

サーの事務所の所属ということがバレてしまえば、彼の捜査に支障をきたすと思い、事務所名を出すことも極力避けている。

「では我々、昼間までにこの区画を回らないといけなくて。それじゃあ！」

警戒されない間に、早くこの場から去ろうとするミリオ。

「はい！」

出久も彼に続く様にこの場から去ろうと立ち上がって、少女を離そうとした時だった。

「い、行かないで…」

涙目で少女は出久のコスチュームを掴み、出久に助けを求めている。

「あ、あの…娘さん…怯えてますけど…」

先程感じた少女の体の震えや、出久から離れたがらない様子。

そこから、出久は彼女が治崎に何かされているのではと疑い、その疑問を口に出す。

「りつけた後なので…」

「行こう！」

「いや、でも…」

余計な勘繰りで警戒させてはいけないと、ミリオが場を去ろうと出久に言うが、少女が出久のことを掴んで離さない。

「遊び盛りって感じのこの包帯じゃないですよね？」

さらに腕に巻かれた包帯のことに触れ出す。

「よく転ぶんですよ。」

「こんな小さい子が声も出さずに震えて怯えるって、普通じゃないと思うんですけど。」
治崎がこの少女に暴行などの虐待行為をしているのではないかと、出久は疑いその疑問を投げかける。

「人の家庭に自分の普通を押し付けないでくださいよ。」

「性格は様々だからね！」

これ以上の詮索は、更なる警戒を生んでしまうとミリオはこの場から離れようと治崎に同意するフリをする。

「この子に、何してるんですか？」

1人のヒーローとして、出久は怯える少女を助けようと試みる。

「ふう、全くヒーローは色んな事に敏感ですね。分かりました。人目に着くし、こちらに來てもらえますか？」

治崎はそう言つて出久とミリオを連れて裏路地に入っていく。

怯えている少女を見捨てるのもヒーローとして不自然だと感じたミリオも出久と共に彼に付いて行く。

「実は…最近壞理について悩んでまして、何を言っても反抗ばかりで…」

（虐待?!）

「子育て…ですか？大変ですね。」

子育ての大変さを語る治崎の言動に、その苦勞故にこの男が自身の腕の中にいる壊理という名の少女を虐待しているのかと出久は疑うの目で見つめる。

「難解ですよ、子供は。自分が何者にでもなれると本気で思ってる……！」

白い手袋を少しずらしながら治崎が壊理の方を睨みつけると、彼女は出久から離れて治崎の下に駆け出す。

「なんだ、もう駄々は済んだのか？」

「え……あの……エリちゃん……？」

治崎の言葉に静かに頷く彼女の行動に、出久は疑問を感じている。

「いつもこうなんです。すみません、悩みまで聞いてもらって……ご迷惑をおかけしました。では、お仕事頑張ってください……」

「待って……」

路地裏の奥へと去っていく治崎を呼び止めようとする出久を、ミリオが止める。

「なんで……」

「追わないよ。気付かなかったかい？殺意を見せつけてあの子を釣り寄せた。深追いとると余計に捕まえきれなくなる。」

唐突に離れてしまった壊理に疑問を抱くも、ミリオはそれが治崎が自分達に殺意を向

けたことによるものであり、ここが引き際であったと出久を止める。

出久は悔しきを感じつつ、ミリオと共にサーの所に向かうのであった。

「俊典！ やつと見つけた！」

「その声はお師匠!?!」

それから数日後の夕方、ジヨギングをしているオールマイトの下にバットウオッチがジェットの中に入った志村がやって来る。

「何故機械の中に…」

「ジオウの力でライドガジェットの身体を手に入れたのさ。それより、話がある。」

「話とは…?」

「サーナイトアイのことだ。お前のサイドキックだったんだろ?」

「ああ、私は元々サイドキックを持たない主義でしたが、私のファンであった彼に根負けして組むことになった。」

サーのことについて聞かれると、オールマイトは彼との関係性を話始める。

「なるほどな、それじゃあ彼がワンフォーオール秘密や後継者の件を知っていてもお

かしくないと言うことか。」

「何故そのことを…」

「彼が出久に言っていたんだ。」元はミリオを後継者にする予定だった”つてね。出久は出久なりにそのことを隠されていてモヤモヤしているよ。」

オールマイトが言つてこなかったことを、サーの口から言われてしまったと志村から聞き、オールマイトは動揺しつつもこれ以上隠すわけにはいかないと口を開く。

「彼は、私が緑谷少年と出会う前に後継者候補の一人として名前が出ていた。」

「そういう事情は私にも分かるさ。けど、何故彼に言わなかったんだい？」

他の後継者がいたこと自体は出久も納得はできるだろうが、そのことをオールマイトから話されていなかったことで彼の心にモヤモヤが生まれてしまっていた。

さらには少女壊理の件で落ち込んでいる出久を見兼ねて、その件について志村はオールマイトと話すことにした。

「言う必要が無いと思つたからだ…それに、私と彼の関係も拗れていました…」

「コンビ解散の経緯か？」

その理由というのは、オールマイトとサーの関係が拗れたことにあった。

「きつかけは6年前、私とオールフォーワンの戦いを終えた後だった。彼との戦いで私はヒーロー活動存続の危機に瀕してしまった。」

「それで後継者探しを…」

「ええ、彼は私をここで引退させてからの後継者探しを提案した。だが、私は後継者を探す間も象徴を絶やしてはならないと戦い続ける道を選んだ。」

現役続行の道を選んだオールマイトに対して、サーは彼に引退するように必死に言い続けた。

「俊典は実際、活動時間が短くなりつつも活動し続けたんだろ？出久へのワンフォーオール継承も無事にできた。俊典はやり遂げることができたわけだし、なんでサーはその未来を信じられなかったんだ？」

「彼は見てしまったんですよ…それよりも先にある私の未来を…」

「俊典の未来…？」

「ええ、」私がヴィランとの戦いの中で凄惨な死を迎える」という未来を…」

サーの個性、未来予知。彼が見た人物の未来を見ることができると言うもので、その未来はほぼ確実なものである。

「私の未来を見てしまった彼は、どうしても私に身を退いて欲しかったようだが、その未来を聞いても私は折れなかった。このすれ違いで私達は離別することとなった…」

2人の決別のきつかけとなったオールマイトの未来。

それを聞いてしまった志村は言葉を失うが、すぐに言葉を巡らせる。

「けど、出久ならこう言うと思うな。」そんな未来僕が変えます!」って…
「私も、そう思います。」

「それに、私もその想いは一緒さ。私も俊典、お前を死なせる気はない。そんな未来、捻じ曲げるよ!」

オールマイトを死なせたくないという思いは、弟子の出久やコンビを組んでいるサーだけでなく、師である志村も同じ気持ちだ。

「お師匠…!」

「この世界は私達と出久に任せてくれ!」

オールマイトの中のワンフォーオールの灯火は消え、彼はN.O. 1ヒーローの座を降りた。

時代は徐々に出久達やミリオに移り変わっていき、オールマイトがヴィランに殺されることなく平和に過ごすというサーが望む未来がやって来るかも知れない。その未来を作り上げていくため、志村も出久を支える決意をしたのであった。

第73話 緊急会議

「今日はテメエらも一緒なんか。」

「おう！今日は集合場所がいつもと違うみてえだ。」

9月も半分を過ぎた頃、サーに呼ばれてインターンに行くことになった出久と爆豪。だが、本日はいつもと違い切島、麗日、蛙吹も一緒にいる。

寮を一緒に出て、向かう方向が同じだからから5人で同じ電車に乗って向かっている。

「おー！」

同じ電車に乗り、同じ道を歩き、同じ曲がり角で曲がって5人が目的地に近付くと、そこにはビッグ3のミリオ、波動ねじれ、天喰環らもいた。

(グラントリノ!?それに相澤先生!)

出久達が集合場所のビルに入っていくと、そこにはグラントリノや相澤、さらにはリューキュウやファットガムと言った有名プロヒーロー達も多くいる。

「ファットガム、あなた方に提供していただいた情報のお陰で調査が大幅に進みました。死穢八齋會という小さな組織が何を企んでいるのか、知り得た情報の共有と共に、協議を行いたいと思います。」

「俺、完全に置いてけぼりなんですけど…」

これから始まろうとしている会議だが、インターン生であまり事情を分かっていない切島達はまだ状況を把握しきれていない。

「悪い」と考えてるかもしれないから、皆も煮詰めましよの時間や。お前らも十分関係してくるで。」

切島のインターン先のヒーローであるファットガムが、切島と共にインターンをしているBIG3の天喰環の腕に視線を落とす。そこには包帯が巻かれており、彼は先日とある特殊な弾丸を被弾して腕を負傷していた。

「えーそれでは初めて参ります。我々ナイトアイ事務所は約2週間前から死穢八齋會という指定ヴィラン団体について独自調査を進めています。」

サーのサイドキックの1人であるバブルガールが、司会進行を務める形でその会議は始まった。

「とある強盗犯と死穢八齋會の若頭である治崎廻の間で起きた車の接触事故をきっかけに、気がかりな点を見つけて我々は調査を開始しました。」

「私が追跡調査をしたところ、彼らは他の構成員や指定ヴィラン団体との接触が増えてきており、組織の拡大や資金集めに動いているとみられます。そして先日オーマシヨックカーとの接触も確認されました。」

サーのサイドキックの1人であるセンチピーダーがタブレットを操作すると、スクリーンにはオーマシヨツカーの1人であるトウワイズと件の中心人物である治崎が2人で歩いている写真が映し出される。

「オーマシヨツカーが絡んでいると言うことで、俺や塚内にも声がかかったんだ。」

現在、グラントリノは塚内警部と共にオーマシヨツカー関連の事件を追っており、この件にも関わってくると思われて会議に召集されていた。塚内は今日は別件でこの場に居ないが、出久はここで職場体験の際に世話になったグラントリノと再会することになった。

「八齋會は認可されていない薬物の売買をシノギにしている疑いがあり、その道に詳しいファットガム氏に協力を要請しました。」

「昔はゴリゴリにそういうのぶっ潰してました！それで先日 of 烈怒頼雄斗のデビュー戦！見たことない種類のモンが環に撃ち込まれたツ！！個性を壊すクスリ！」

「個性を壊す!?!」

飴玉を握って壊しながら、特殊な弾丸のことを話すファットガムに、周囲のヒーロー達は驚きの表情を見せる。

「個性を壊すって……！環、大丈夫なんだろう!?!」

「ああ、寝たら回復したよ。見てよ、この牛の蹄。」

「朝食は牛丼かな？」

大阪でファットガム、切島、天喰が追っていたヴィランによって個性を壊す力を持つという弾丸が天喰に撃ち込まれた。だが、その効果はすでに消えたようで彼は自身の個性で腕を牛の蹄に変化させていた。

「回復するなら安心だな。致命傷にはならねえ。」

「いえ、その辺りはイレイザーヘッドから」

その弾丸を撃ちこまれたことで天喰は一時的に個性が使えなくなってしまうていたが、回復しているなら問題ないとプロヒーローのロックロックが推察する。だが、そう一筋縄でいくような話でもなさそうだ。

「俺の抹消とはちよつと違うみたいですね。俺は個性を攻撃しているわけじゃないので、人の身体に宿る個性因子を俺は一時停止させるだけで、ダメージを与えることはできない。」

「環が撃たれた直後！病院で診てもらったんやが、その個性因子が傷付いとつたんや！幸い今は元通りやけど！体の方も他は異常無しや、ただただ個性だけが攻撃された！」

「個性だけを狙ったクスリか……」

その特殊な弾丸の特性を聞きつつ、その異様さに爆豪は目を細める。

「その撃ち込まれたものの解析は？」

「環の身体に痕跡は無し！撃った連中もダンマリ、銃はバラバラ、弾も撃ったきりしか所持してなかった！ただ、切島君が身を挺して弾いたおかげで中身の入った一発が手に入ったつちゆうことや！」

「俺っスか!？」

大阪での事件の時、その弾丸が切島にも撃たれたが、彼は個性の硬化でその弾丸を弾き飛ばし、残った中身を手に入れることができていた。

「そしてその中身を調べた結果、むっちゃ気色悪いモンが出てきた！人の血や細胞が入った！」

（人の…血液…）

「他の奴の個性因子を攻撃する個性持ちの血で弾丸を作ってやがったのか…！」

人の血が弾丸に入っているという惨い事実を聞き、雄英生と一部プロヒーローが動揺する中、爆豪はその血の持ち主の個性が他人の個性を壊す要因なのかと察する。

「個性による個性破壊っていうのはわかるけど、どうやって八齋會と繋がってくるのかしらっ。」

「今回切島君が捕えた男が使った違法薬物。その売買にかかわる組織と八齋會に繋がりがあつた！」

「それだけか？」

リユーキュウの投げかけた疑問に対し、ファットが応対するが、その根拠ではまだ証拠不十分と云えてしまう。

「先日リユーキュウ達が対処したヴィラングループ同士の抗争を始めとする多くの組織的犯罪に彼らが絡んでいる。だが、それだけでは決定的な証拠とはならない。」

その時、スクリーンに治崎の顔が表示される。

「若頭、治崎の個性はオーバーホール。対象の分解、修復が可能という力です。分解、一度壊し治す個性。そして個性を破壊する弾。」

(…!?)

治崎の個性と個性破壊弾の話の点と点が繋がった時、出久とミリオの身体に寒気が走る。

「治崎には壊理という娘がいる。出生届もなく詳細は不明ですが、ミリオと緑谷が遭遇した時は手足に夥しい包帯が巻かれていた。」

「まさかそんなおぞましいことを…」

「クソだな…」

「それってどういう…」

リユーキュウや爆豪は事実を察している一方、切島はまだピンと来ていない様子だ。

「こういうことはあんま言わせんなよ、つまり治崎って野郎は娘の身体を銃弾にして捌

いてんじゃねえかってことだ。」

「そ、そんな…」

ロックロックの口から語られる治崎の容疑に、切島らは動揺の表情を見せる。

「今出回っている物は中途半端な性能だが、もし完成すればこの社会を一転させてしまおうだろう…」

「んな惨いこと…！こうなったら今からガサ入れじゃー！」

治崎の残酷な行いに、ファット達は怒りを露にしている。

「こいつらが子供保護してりや解決だったんじゃねえの？」

「すべて私の責任だ。2人を責めないでいただきたい。知らなかったこととは言え、2人共その子を助けようと行動したのです。緑谷はリスクを背負いその場で保護しようとし、ミリオは先を考えより確実に保護できるように動いた。」

（何が…ヒーローの王だ！）

（何が…ミリオンを救うルミリオーン！）

目の前で助けを求める少女を救えなかったことの後悔が、個性破壊弾の事実を聞いてより大きくなる。

そして彼らは、自身のヒーローとしての意思を遂行できなかつたその時の自分自身を恨む。

「今この場で一番悔しいのはこの2人です。」

「今度こそ必ず壊理ちゃんを……」

「保護する！」

そして2人は同時に立ち上がり、少女を救う決意を口にする。

「そう、それが私達の目的となります。」

その後も会議が続いたが、すぐに壊理を救けに行くという結論は出なかった。

一つ目の理由は救うべき少女である壊理がどの拠点にいるか特定する必要があったからであり、もう一つの理由はその特定を早めるためのサーの個性の使用を彼が拒んでしまったからだ。

誰かが死ぬ未来を予見するのをサーが恐れたためだ。

出久達は救いたい少女がいるのに、手を伸ばせないもどかしさを感じながら日常生活を過ごすこととなった。出久、爆豪、切島、麗日、蛙吹の5人は壊理救出に向けて奮い立っていたが、目の前で壊理を救えなかったショックは目を追うごとに大きくなっていった。

「では、お互いの健闘を祈ってるよ。」

更にインターンのことは口外禁止となり、出久が抱えたもどかしさを相談できない状況だった。

そんな中でウオズも自身のインターンで察から離れてしまった。

マイナスな出来事が次々と出久に降りかかり、彼の心はグチャグチャになりつつあった。

「食わねえのか？」

「く、食うよ！食う！」

飯田と轟の2人と共に食堂に来ていた出久であつたが、好物のカツ丼を前に箸が止まってしまつていた。

「大丈夫か？」

「インターン入ってから浮かない顔が続いてる。」

「そうかな…」

インターンが始まってからの出久は多くの壁にぶつかつてしまった。目の前で助けを求めた少女を救えなかつたこと、その少女が治崎から身体を切り刻まれて悪事に利用されているという事実を知つてしまった事、さらには自分達が治崎と接触したことで調査やカチコミを慎重に行わなくてはいけなくなつてしまったこと、その心のダメージを

飯田や轟でも察してしまおうほど今の出久は暗かった。

「本当にどうしようもなくなったら言ってくれ。友達だろ？」

そんな出久を見兼ねて飯田が出久に声をかける。

その言葉は、飯田がステインへの復讐に駆られてしまった時に出久が彼にかけた言葉と同じであった。

「いつかの愚かな俺に、君が駆けてくれば言葉さ。職場体験前の…」

「……」

その時、食堂のテーブルに温かい水滴が落ちる。

「あああああ！お、おい！」

「緑谷……」

それは出久の目から零れ落ちた涙であった。

「ゴメン……大丈夫……何でもない……」

零れ出る涙をこらえようとしながら、出久はカツ丼を口の中に掻き込む。

内容を話すこと自体はできないが、心配してくれただけでも出久にとつては嬉しいことであった。

それと共に、出久の中の複雑な感情が涙となって漏れ出てしまった。

「ヒーローは泣かない……！」

「ヒーローも泣くときは泣くだろ。多分。蕎麦、半玉やろうか？」

「ビーフシチューもやろう！」

「ありがとう…」

飯田と轟はその事情を知ることにはできないが、自身の食事を少し分けて出久を元氣付けようとする。

「ネギもいるか？」

「いただきます…」

「ワサビもいるか？」

「う、うん！」

そこから数日後の夜、眠りにつく出久達の携帯電話の1つの連絡が届く。

「……！」

スマホに届いたメールを見た出久はすぐに談話室に降りていく。

麗日、爆豪、蛙吹、切島も続々と集まって来る。

「皆、来たか！」

「ああ……」

「うん！」

「来たわ……」

あの会議に参加したインターン生全員にそのメールが届いている様子だ。

「決行日！」

そのメールの内容は、この日の朝から壊理を救うためのアジトへの突入を言うと
言うものであった…

第74話 突入開始

朝8時、警察署前

「ナイトアイが死穢八齋會員のその後を見た結果、会長宅には申請に無い入り組んだ地下施設があり、その中の一室に今回の目的である女兒が匿われていることが確定した。」
壊理がどこにいるか最終的に突き止めたのは、サーナイトアイであった。

彼は街中で死穢八齋會の構成員と思われる男性を発見し、その男の未来を見ることで彼らのアジトの構造やそこに壊理がいるか否かを突き止めていた。

「流石に地下全体を把握することはできなかつたが、男の歩いた道は目的への最短ルートである。」

今回の指揮担当である警部が合図をすると、プロヒーロー達に資料が配られる。

「だが、個性を駆使されれば搜索は難航する。そこで分かる範囲でだが、八齋會の登録個性をリストアップしておいた。」

その資料に書かれているのは、確認できる死穢八齋會構成員の個性である。

プロヒーロー達も対策を立てて戦いやすくなると言うことだ。

「隠蔽の時間を与えぬためにも、全構成員の確認、捕捉を迅速に行っていただきたい！」

「決まったら速いっすね！」

「君、朝から元気だな。」

普段ならまだ授業が始まっていないであろう時間だが、かなり気合が入った様子の切島に天喰は少し引いている。

「緊張してきた〜」

「探偵業のようなことから、警察との協力。知らないことだらけ……」

「ね！不思議だね！」

蛙吹はサーがここまで敵のことを調べ上げ、警察やプロヒーロー達との突入作戦の計画をしっかりと立てて実行に移したことに感心している。

「そうね、こういうのって学校では深く教えてくれなくて、新人時代苦労したよ。」

リューキュウが言うように、こう言った作戦は通常の授業では中々味わえないものだ。

インターンだからこそその経験と言えるだろう。

「相手は仮にも、今日まで生き延びた極道の者！くれぐれも気を緩めずに、各員の仕事を全うして欲しい！突入開始時刻は、0830とする！総員！出動！」

「んじゃあ、やってやるか！」

出動の合図と共に、爆豪と出久はジクウドライバーを腰に巻き付ける。

（最初から全力で行くのかい？）

（ええ、勿論です！）

（ああ、その方が良いだろうね。）

『グランドジオウ！』

『ゲイツリバイブ！』

出久の手にはグランドジオウウオッチが握られ、爆豪もゲイツリバイブウオッチを手にしている。

最初から全力で相手を叩き潰し、最短で壊理を救うために彼らはそのウオッチを選んだ。

『（アークル）（オルタリング）アドベント！COMPLUTE！ターンアップ！（音角）CHANE BEE TLE！ソードフォーム！ウエイクアップ！カメンライド！サイクロン！ジョーカー！タカ・トラ・バッタ！3・2・1！シャバドウビタツチヘンシーン！ソイヤツ！ドライブ！カイガン！レベルアップ！ベストマッチ！ライダータイム！』

「アレが噂の、仮面ライダーか……！」

出久の周囲に現れる20人の仮面ライダーの像に周囲のプロヒーロー達は圧倒されてしまう。

「変身!!」

『グランドタイム!』

『パワードタイム!』

『グランドタイム!クウガ!アギト!龍騎!ファイズ!ブレイド!響鬼!カブト!電王!
!キバ!デイケイド!ダブル!オーズ!フォーゼ!ウイザード!鎧武!ドライブ!』

ゴースト!エグゼイド!ビルド!』

『リ・バ・イ・ブ剛烈!剛烈!』

『祝え!仮面ライダー!グランドジオウ!』

壮大なる王、仮面ライダーグランドジオウと力の救世主仮面ライダーゲイツリバイブ・剛烈。

2人が変身を終わるとともに、ヒーロー達は死穢八齋會の本部へと向かっていく。

『ウイザード!ゴースト!ビルド!』

「よし!出番なのさ!」

さらにジオウは万繩が憑依したウイザード、志村が憑依したゴースト、煙が憑依したビルドも召喚する。

そして朝の8時半、彼らは死穢八齋會の事務所である和風家屋の前に陣取る。

「令状読み上げたらダーツと行くんで!速やかにお願いします!」

大量の警官たちと、サーに招聘されたプロヒーロー達。

彼らを代表して警部が事務所のインターホンを押そうとしたその時だった。

「なんなんですか…？朝から大人数で。」

その扉を突き破って身体が大きい筋骨隆々の男が出てくる。

顔を覆う様にペストマスクを付けており、その腕で扉を殴っただけで複数の警官を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた警官たちは出久や相澤らヒーローによって救助されて重傷を負うことを避ける。

「おいおい！感付かれたのかよ！」

「良いから皆で、取り押さえろ！」

「少し、元気が入ったな。」

プロヒーロー達がその男を取り押さえようとするが、男の右腕の筋肉は更に大きくなっていく。

「離れて！」

その男が腕を振るおうとした時、リユーキュウが前に出て自身の個性を発動する。

「この場に人員を割くのは違うでしょ！彼はリユーキュウ事務所に対処します！今の内に！」

リューキュウは個性によってドラゴンの様な巨大な姿になり、大男を押しさえつける。その間に警官隊と他のヒーロー達は事務所の中に入っていく。

「私達はリューキュウのサポート！」

「はい！」

波動、麗日、蛙吹の3人は彼女のサポートのためにこの場に残り、他の者達は事務所の庭園を通って家屋に向かう。

「ヒーローと警察だ！違法薬物製造・販売の容疑で捜索令状が出ている！」

「捜索令状？」

「知らねえわ！」

その場にいる構成員たちとプロヒーローで交戦状態に突入してしまう。

「くたばりやがれ！」

そのヒーロー達の先陣を切る爆豪は、リバイブ・剛烈の力で強化された爆破を放ち、構成員たちを吹き飛ばす。

「朝から酔いを醒ましてきそうなやつだな：足元がおぼつかねえなあ！」

その時、酒を飲むペストマスクの男と黒いマントとペストマスクの男が現れたかと思えば、地面に着地した爆豪の足がふらついてしまう。

「さあ、君の能力を教えるんだ。」

「俺の力は個性の爆破と仮面ライダーゲイツの力だ！」

「かつちゃん!？」

「口が勝手に!」

黒いマンントの男の問いかけに、爆豪は意図せず自身の個性と仮面ライダーのことを口にしてしまう。

「多分だけど、平衡感覚を狂わせる個性と相手に本当のことを無理矢理言わせる個性だね。」

「雑魚個性じゃねえか!」

彼らが爆豪に与えた攻撃から、出久の隣に居た志村ゴーストが相手の個性を分析する。

「ああ、我々の個性は前線向きとは言えないな。」

「けどな、これがあるから十分だ!」

「あれは……!」

その時黒マンントの男、音本真と酒を飲んでる男、酒木泥泥が懐から時計の様なものを取り出した。

『ゲイツ……』

『ウオズ……』

それらはアナザーウオッチであり、それらを彼らは自身の身体に取り込む。

酒木泥泥はゲイツに似た怪人アナザーゲイツに、音本真はウオズに似た怪人アナザーウオズに姿を変える。

「気味悪いモン作つてると思つたら、趣味悪い姿になりやがつて…おいゴラ！こいつ等は俺がやる！テメエらはとつとと中に行け！」

「ありがとう！かつちゃん！」

「私も残るわ！」

自身が変身する仮面ライダーゲイツに似た姿の怪人に、爆豪は怒りを露にして彼らを抑える役目を買って出る。志村も爆豪の援護のためにこの場に残る。

「ああ、ここは任せる！」

サーも2人のアナザーライダーの撃退を爆豪らに託して敵のアジトの屋内へと入って行くのであった。

『クウガ！ファイズ！』

続々とやって来る八斎會の構成員に対し、他のプロヒーローやサーのサイドキックのバブルガールとセンチビード、そしてグランドジオウが召喚したライダー達が対処していき、その間に久やサー達は事務所の地下に突撃していく。

「行き止まりじゃねえか！」

だが、彼らが入った地下通路がコンクリートの壁で塞がれてしまっており、前に進むことができない。

「道、あつてんだな!？」

「俺、見てきます!」

サーが予知の中で見た道が塞がれてしまっており、サーが見た通路があるか確認するためにミリオが先陣を切る。恐らく透過で目の前の壁をすり抜けようとしているようだ。

「待つて!またマップに!」

「大丈夫、ミリオのコスチュームは彼の頭髪から作られた特殊な繊維だ。発動に応じて透過するようにできている。」

ミリオが透過を使うことでコスチュームが脱げてしまうのではないかと切島が危惧するが、天喰曰く彼のDNAを使った繊維なのでその心配はないそうだ。透過した顔を壁の向こうに出してミリオが様子を確認する。

「壁で塞いであるだけです!ただかなり厚い壁です!」

「だったら壊すだけさ!」

『ビッグ!プリーズ』

万縄ウィザードが前に出ると魔方陣を生成、その中に自身の腕を通すとその腕が巨大

化する。

「俺も行くぜ！烈怒頑斗裂屠！」

ウィザードの巨大化した腕と、切島の硬化した腕によるパンチが分厚い壁を撃ち抜いて通路を開ける。

「やるじゃねえか！」

「進みましょう！」

障壁を一つ破り、さらに先へと進もうとするヒーロー達。

「道がうねって!？」

「変わっていく!！」

だがその時、地下通路の空間が突如うねり始め、ヒーロー達は足を止める。

自身が立つ場所がうねることで上手く歩けなくなってしまった。

「これは…入中の個性か！奴の個性は物の中に入り、自由自在に操る擬態！地下を形成するコンクリートに入り生き迷宮になったのか!？」

「規模が大きすぎるぞ！せいぜい動かせるのは冷蔵庫ぐらいって…！」

八斎會の個性を既に分析していた警部が、誰の個性による攻勢なのかを推測するが、地下空間全てを操ることは想定外だった。本来の入中であればここまで動かせないはずであった。

「薬でブーストさせたら無理な話やないな！」

道をうねらされ、作り変えられていく状況に、ヒーロー達は八方塞がりだ。

どんどん時間を稼がれてしまい、その間に逃げられてしまうのではないかという危惧も生まれてしまう。

(どうしよう…このままじゃ女の子を救い出すどころか俺達も…)

「環！そうはならないし、お前はサンイーターだ！」

不安が顔に現れてきた天喰の肩を叩き、ミリオが前に出る。

「そして、こんなのはその場凌ぎ！方向が分かっていたら俺はいける！」

「ルミリオン！」

「先輩！」

足を止めてしまったヒーロー達を背にミリオは走り出す。

「スピード勝負！それを奴らも分かっているからこそその足止めでしょ！先に向かっています！」

ミリオは透過を使い道を塞ぐ壁をすり抜けて、さらに先へと向かう。

「…!?!」

出久達も動き出そうとしたその時だった、地面を形成するコンクリートが大きくうねり、穴が開く。

その下に警官たちやヒーロー達が落ちていってしまふ。

『ハリケーン！フー！フー！フーフー、フーフー！』

『天空の暴れん坊！ ホークガトリング！ イエーイ！』

咄嗟に万繩はウイザード・ハリケーンスタイルに姿を変えると自身の身体を風で浮かしながら黒鞭で落ちていく人々の身体を掴んで彼らの身体が地面に叩き付けられるのを避ける。

煙はビルド・ホークガトリングフォームに姿を変えて宙で、何人かの身体を掴んで落ちないようにする。

「上は塞がれたか…」

「一旦着地しましょう！」

だが、その穴は塞がれてしまい先程までいた位置に戻れなくなってしまった。出久の指示で地下の広場に全員を降ろす。

「緑谷んとこのライダー達、すげえな！」

「助かったぜ…」

出久と仲間たちに感謝を告げる切島達だが、彼らがいるのは未知の広場であった。

「ますます目的から遠のいてるじゃねえか！」

「おいおいおい！空から国家権力が落ちてきやがった！不思議なことも起こるもん

だ……」

本来のルートから遠回りを強いられただけでなく、目の前には新たに3人の構成員が立っている。

「よつぽど全面戦争したいみたいやな……流石にそろそろプロの力を見せつけ……」

足止めとして現れた3人の敵を相手にしようとなつたが拳を鳴らすが、彼の前に天喰が立つ。

「そのプロの力は目的のために……こんな時間稼ぎ要因、俺一人で十分だ……」

「こんなところで時間と人員は避けないと、天喰が前に立つ。

「俺も、援護するのさ……」

「なんだ!?!」

万縄ウィザードが手から出した黒鞭が3人の鉄砲玉に掴みかかり、さらに天喰が自身の個性で再現したタコの触手と共に3人を縛る。2人が掴んだ構成員たちを壁に叩き付ける。

「プロの個性も、警官の拳銃も、こんなところで留めていいものじゃない……」

「けど……先輩たちけじゃ……」

天喰が足止めをしようとすが、彼らを残せば人数的に不利になる。

そのことを危惧して切島やファット達は動き出せない。

「こいつは俺が絶対に生かすのさ！だから行くんだ！」

「いいや、アンタも皆と行ってくれ…幸いファットの事務所でタコの熟練度も高くなっている。ここは俺一人に任せてくれ！」

「彼の言う通りだ、行くぞ！」

「任せたぞ！環！」

ここで多数の戦力が割かれてしまうことも敵の思う壺だ。

天喰はウイザードからの援護も断り、一人で足止めを決意。

彼の思いを受け止めたサーの指示で、一同は彼をこの場に残して先へと進むのであった。

第75話 ルミリオン

八齋會の入中ことミミックは自身の個性をブーストで強化したうえで地下通路に入り込んで一体化。

通路を形成するコンクリートを自由自在に操ることで時間稼ぎや圧殺を狙っていた。

(ワンフオーオール！シユートスタイル！)

「受けてみる！ダイヤモンドの拳だ！」

天喰だけでなく、切島とファットガムをサー達の集団から分断することはできていた。

だが、グランドジオウと煙ビルド・ゴリラダイヤモンドフォームらによってその妨害は次々と突破されていってしまう。

(このままではまずいッ……)

徐々にサー達は治崎らのいるフロアに近付いてしまっている。

足止めとして繰り出した実働部隊である八齋衆も全員繰り出してしまっているが主力の足止めという役割は果たせていなかった。

活瓶はリユーキュウ事務所に抑えられ、乱波と天蓋はファットガムと切島の2人と交

戦中。

窃野、多部、宝生の3人に至っては天喰環1人だけとの戦いになっており、ヒーロー陣営を思う様に抑えていない。仮面ライダーゲイツこと爆豪勝己を屋外に留められているものの、それはオーマシヨツカーとの取引で手に入れたアナザーウォッチを2つ使ったからこそである。

(何とか耐えてくれ…オーバーホール！)

治崎ことオーバーホールと彼の補佐であるクロノスタシスが壊理を抱えて逃げ出すようとしているが、彼らの下にサー達より先に辿り着いた男が居た。

「治崎ー！」

それは、ミミックの妨害を自身の個性ですり抜けてきたミリオであった。

治崎達の前に現れるとともに、彼といたクロノスタシスの顔を蹴り飛ばす。

「なんで…」

クロノスタシスが気を失いながら手放した壊理の身体を、ミリオがすっかりキャッチする。

「来たらダメだよーあの人に…殺されちゃうー！」

だが、壊理は未だ怯えている。

目の前にいる脅威、治崎廻がまだ健在故に彼女の中の恐怖心は消えていなかった。

「もう決して君を悲しませない！俺が君のヒーローになる！」

ミリオはあの日の会議から決心をしていた。

もう壊理のことを悲しませない、そしてもう離さない。

「汚いな…壊理、戻ってこい。殺される？いつになつたら分かるんだ？お前は人を壊す。そう生まれついた…」

治崎の肌はミリオの手が触れてしまったところからかぶれ、そこを治崎が掻きむしつてゐる。

「ダメ…やっぱり…」

「聞かなくていい！」

怯える壊理の身体をしつかりミリオは抱えて治崎から逃がそうとする。

「いつも言ってるだろ。お前のわがままで俺が手を汚さないといけなくなる。お前の行動1つ1つが人を殺す。呪われた存在なんだ。」

「自分の子になんてことを言うんだ！」

壊理のことを罵る治崎に対し、ミリオが声を荒げる。

だが、彼は2つの間違いをしていた。

「そうか、そういう話だったな…俺に子などいない。」

『ジオウ…Ⅱ…』

1つは壊理が治崎の实の娘であるという間違ひ、もう1つは治崎の持つ力が個性だけでないということだ。

治崎が懐から取り出したアナザーウオッチを自身の身体に押し当てると、彼はアナザージオウIIに姿を変える。そして彼がコンクリートに触れるとそれらが分解されて再構成されていき、針の山脈を形成する。

(修復どころじゃない！早い！)

何とか透過でそのコンクリートの棘に自身の身体をすり抜けさせて攻撃を回避するが。

「いけ……」

アナザージオウIIが新たにアナザライダー達を召喚し、ミリオに次々と差し向ける。

「この子ごとッ……！」

治崎による地下空間の作り変えによる攻撃と、アナザライダー達による攻勢は、壊理を抱えたままのミリオを襲う。

「死んでしまっても、この力でまた蘇生すれば良いだけ……その子は身を持って知っているはずだ」

オーバーホールが再形成したコンクリートの塊が次々とミリオに向かってきて、アナ

ザーライダー達が各々の武器をミリオに向けて振るうが、ミリオは壊理を抱えたまますり抜けて次々と回避する。

「逃げ道は塞いだ。壊理を抱えたままどう戦う?」

ミリオ自身への攻撃は陽動でもあった。退路となる道をコンクリートで塞がれてしまっていた。

「ッ……」

ミリオに容赦なく襲い掛かるアナザーライダー達。

自身の個性やコスチュームのマントを使って攻撃を凌ぎ、壊理を何とか守り切っている。

(壊理ちゃんをつ……一人にできない!)

アナザーライダーは10体近く召喚されており、数の上でもミリオはかなり不利と言えるだろう。

仮面ライダーではない者がこの数のアナザーライダーの攻勢を凌ぎ切ることは至難の業と言えるだろう。

だがこれは、多くの訓練を積み個性を使う技術を高めてきたミリオだからこそなんとか攻撃を喰らうことなく壊理を守り切っている。

「決して君を悲しませない!もうアイツには指一本触れさせない!」

だが、ミリオと壊理に向けて銃口が向けられていることにここで彼自身が気付く。先程ミリオが倒したはずのクロノスタシスが起き上がり、銃を構えて引き金に指をかけた。

(もう痛い思いは、させない！)

その弾丸を透過してしまえば壊理に当たってしまふ。

透過することもなく弾丸を自身の背で受け止める。

「病人が……個性なんてものが備わってるから夢を見る！自分が何者かになれると精神に疾患を抱える！」

その弾丸はミリオの身体を貫かず、背中に針の部分突き刺さる。

「笑えるなあ！救おうとしてきたその子の力で、お前の培ってきたものが全て！無に帰した！」

その弾丸は治崎らが壊理の肉体を材料に作り出した個性消失弾であった。

それも完成品であり、ミリオの中の個性を完全に消し去ってしまった。蹲るミリオに向けてアナザーライダー達が次々と襲い掛かる。

(相手をよく見て！動きを予測するんだ！)

だが、個性を失ったミリオは未だに強かった。

敵の攻撃を上手く避けて防ぎ、寧ろ自身の方からパンチを打ち出して攻撃する。

(これまでのすべてが無駄になったわけじゃない!)

「俺は!ルミリオンだ!」

ミリオは個性自体が強力な訳ではない。戦闘で活かすのが困難な個性をサーの下で培った技術力で何とかカバーしていた。個性を失っても戦闘の技術は生きている。

「それほどまでヒーローになりたかったか…」

だが、ミリオにも限界は訪れる。

次々と治崎やアナザライダー達が繰り出す攻撃を被弾し、脇腹にコンクリートの棘が突き刺さる。

「壊理を助けたかったかルミリオン!汚らしい現代病だ!お前のような奴を直してやるのさ!壊理の力で!」

個性を持ち、ヒーローに憧れる人々を嫌悪する治崎。

彼はミリオにトドメを刺すために、時計の針を模した槍を構える。

(必ず…助ける!)

だがその時、コンクリートの壁を打ち破って現れたグランドジオウが、アナザージオウIIに向けて蹴りを放つ。その後ろには相澤とサー、煙ビルドと万縄ウィザードがいる。

「サー!ジオウ!」

出久達はグランドジオウの力でミミックによる生き迷宮を攻略し、他のヒーロー達がミミック自身を拘束し、彼らは遂にミリオと壊理の下に辿り着いた。

「またアナザージオウ!?」

「仕方ないね。またやるよ。」

「この力でいくのさ!」

『ドラゴタイム!』

『ウオータードラゴン!』

『ハリケーンドラゴン!』

『ランドドラゴン!』

アナザージオウⅡが召喚するアナザライダーに対抗するために、万繩はドラゴタイムで4人のウイザードに分身する。

「もう大丈夫だ。」

出久達がアナザライダー軍団に向かっていく中、サーがミリオと壊理の下に駆け寄り、2人を抱き寄せる。

「よくやった…ミリオ…!」

そして、壊理を助け出して守り切った彼に賞賛の言葉を贈るのであった。

「これでどうだ!」

「助かりますー！」

『キバ！ファイズ！響鬼！鎧武！』

ウィザードが黒鞭で敵のアナザーライダー達を縛り上げると、そこにグランドジオウが召喚したライダー達が各々の武器で攻撃を加えていく。

『ダブル！』

『ルナ！マキシマムドライブ！』

さらに迫り来るアナザーライダー達に対処すべく、ジオウはトリガーマグナムを生成し、ルナメモリを装填。

「トリガーフルバースト！」

トリガーマグナムから放たれた光の弾丸が縦横無尽に跳ね回り、次々とアナザーライダー達に突き刺さっていく。

「病人共が！」

アナザージオウⅡは地面に触れて自身の個性を使おうとするが…

（個性が使えないッ…！）

（ワンフォーオール！シユートスタイル！）

相澤の個性によって自身の個性を封じられたアナザージオウⅡが、グランドジオウに蹴飛ばされる。

グラウンドジオウとアナザージオウⅡの戦いは出久にとって既に経験済みであり、他のライダーとの連携も強化されているためか優位に戦いを進めることができている。

だが、今回は相澤の加勢もあり、変身者自身の個性を気にせず戦うことができるためか、ワンフオールで強化された打撃を次々と浴びせることができる。

「バカなツ……」

グラウンドジオウとアナザージオウⅡのスペックは同等程度ではあるが、出久の肉体はワンフオールによって強化されている。2人の格闘戦となれば、身体能力で勝るジオウが圧倒していく。

（黒鞭……）

さらに使える個性の数も多いジオウは黒鞭でアナザージオウの身体を縛って自身の方に引き寄せてからパンチを撃ち出す。

『電王！』

今度はデンガツシャを自身の手に装備し、アナザージオウⅡに切りかかる。

「アレが、ジオウの力……」

「壊理ちゃんを……守る……」

壊理を治崎から守ると硬く決意し、迷いが一切ないジオウの攻撃が徐々にアナザージオウⅡを追い詰めていく。

『ドラゴンフォーメーション!』

その一方で、分身したウィザード・ドラゴンスタイルたちはそれぞれドラゴスカル、ドラゴウイング、ドラゴテイル、ドラゴヘルクローを装備し、それらを活かした連携攻撃でアナザージオウⅡが呼び出したアナザライダー達を次々と撃破していく。

「デトロイト!スマーツシュ!」

相澤や万繩らの援護を受けた出久の拳が、アナザージオウⅡの顔面を捉えて殴り飛ばす。

「流石だ…緑谷!」

サーはミリオ達を守りながら、ここから出久達の勝ちを確定させるために、治崎の未来を自身の個性で見る。

(さあ、どう動く…)

敵の動きを予測して出久に伝えようとするサーであったが…

「これはッ…!」

サーが見た未来に驚愕する間に、アナザージオウⅡが地面に手を触れさせると、彼の個性が再び発動して、コンクリートの針の山がジオウに襲い掛かる。

「イレイザー!?!」

「抹消ヒーローイレイザーヘッド、あなたのことは良く調べていました。」

治崎の個性が再び発動したと言うことは、相澤に何かがあったと言うことだ。

サー達が彼の方を見ると、クロノスタシスが彼を拘束し、目も彼の捕縛布で覆っていた。

「アンタは今、カタツムリ並の速さでしか動けない。何をしても無駄だ。」

クロノスタシスが自身の個性で相澤を無力化し、彼の個性を封じたことで戦況は治崎らの方に傾いていく。

「緑谷……これ以上はダメだ！」

サーが自身のサポートアイテム、超質量印を投げてアナザージオウⅡに応戦。

出久をこの場から離そうとする。サーにはここから出久達がさらに不利になる未来が見えてしまっていた。

（結果を見るだけではなく、1秒先の未来を予測し、私とミリオが望む結末を！）

自身の個性だけでは見れない数秒単位の未来を予測し、適切な位置に重さ5kgの超質量印を次々と投げていくサー。

グランドジオウもそれに合わせて攻撃や退避をしようとするが、アナザージオウⅡが追加で召喚したアナザーライダー達が出久達を阻み、その隙に治崎が個性で攻撃を仕掛ける。

（…!?)

「危ないー！」

その状況を打破するべく、サーが未来予測を釣祐るが突如、彼の中に動揺が走る。それと同時に治崎が作り出したコンクリートの棘がサーの左腕を貫いた。

その大きなコンクリートの塊はサーの心臓部を狙ったものであったが、それに気付いた煙ビルドがサーの身体を押ししたことと急所は免れた。だが、サーの左腕と体は離れてしまい、血がしたたり落ちる。

「間に合わなかった……！」

「私のことは良い！早く緑谷をこの場から！」

「何言ってるんだ！ここでアイツをこの場から離れたらもつとまずい状況になる！」

出久をここから逃がすように言うサー。

だが、目の前に強大な力を持つ敵がいるのに敵前逃亡をしてしまえば、全員の命が危なくなってしまう。

「まさかアンタ!？」

「煙さん！サーと壊理ちゃん達を逃がしてください！」

「……ッ！分かった！」

煙はサーが見てしまった未来を察した。

それは出久がこの戦いの中で死を迎えてしまうという未来なのかもしれない。

だが、それを出久自身に伝えてしまうよりもまずは彼が守るべき存在をこの場から離して上にいる他のヒーロー達と合流することを優先する。

それが煙なりに出久の死という未来を回避する最適な答えだと考えた故の判断である。

「おい！地下にずっといてもアイツの思い通りさ！まずは上にかつ飛ばせ！」

「はい！」

一方の出久と万繩はサーが重症を負った経緯からあることに気が付いていた。

それは、この地下空間という場所が治崎にとつて非常に有利なフィールドであることだ。

ここはコンクリートに囲まれた場であり、治崎が床や壁に触れてしまえばそれらすべてのコンクリートを分解、再形成して出久達に攻撃を加えることができってしまう。

『オールドラゴン、プリーズ！』

『カブト！』

まずは地上に彼を出してしまい、彼が攻撃に使えるものが少ない場に押し出そうとする。

万繩は全てのウイザードと合体し、身体にドラゴンの尾、翼、爪、頭を装備する。

出久は3つのゼクターを取り付けたパーフェクトゼクターを構える。

「いくのさー！」

まずはウイザードがアナザージオウⅡに向かっていくと、ドラゴンの尾で敵の足元を狙って払いのける。

「オラアー！」

足元を狙われて動揺したアナザージオウⅡに向けてまっすぐに進んできたウイザードがドラゴクローで天井に向けてかち上げる。

「これでもくらのさー！」

「なんだッ…!？」

そしてウイザードがドラゴウイングとドラゴスカルを使って作り出した炎の竜巻で、宙に浮くアナザージオウⅡを巻き上げて天井にぶつける。

『カブト、ザビー、ドレイク、サソードパワー！オールゼクターコンバイン』

タキオン粒子のエネルギーをパーフェクトゼクターの先端に収束させて天井のアナザージオウⅡに向ける。

『マキシマムハイパーサイクロン！』

そこから放たれる竜巻状のエネルギーがアナザージオウⅡに向かっていき、天井のコンクリートごと吹き飛ばす。その強力なエネルギーは地下から地上に向けて突き進み地下から天井に向けて大穴を開ける。

「まだいるのさー！」

だが、地上まで吹き飛ばされたアナザージオウIIは健在であった。

天井部のコンクリートを個性で自身の前に集めて、ダメージを受けつつも何とか防ぎ切っていた。

「第2ラウンドだー！」

グラウンドジオウは浮遊の個性で地上に向けて浮上していく。

地下から地上に上がり再びアナザージオウIIとの戦いが始まる。

第76話 オーバーホール

地下で激闘が繰り広げられているのと時を同じくして、地上では爆豪と志村が2体のアナザーライダーと戦いを繰り広げていた。

「クソがッ……」

爆豪と対峙するアナザーゲイツは両腕を斧や弓に変形させて攻撃を仕掛けるだけでなく、変身者の酒木によって平衡感覚を狂わせられてしまっている。行動を阻害されるだけでなく、ゲイツリバイブ・剛烈の力によって強化された強大な爆破を無闇に撃てなくなってしまう。

「酔ってきたなあ！だがまだ足りねえ！」

アナザーゲイツは自身の腕を弓に変形させて、光の矢を何本もゲイツに向けて撃つていく。

「こんぐれえ、大した事ねえ！」

平衡感覚を狂わされながらも、周囲への影響が少ない小規模な爆破を放つことで敵の攻撃から身を守る。

「仮面ライダーゴースト、アイテムを落としてフォームチェンジに失敗する……と」

「何を書いているの？とつとと行くわよ！」

アナザーウオズにさらなる攻撃を加えるべく、ムサシゴーストアイコンを取り出す志村ゴーストに対し、敵はノートの様なものに何かを書いている。

「あれ、眼魂が……」

「隙アリですよ。」

そのノートに書かれたとおりにウォッチを落としてしまったゴーストに、アナザーウオズが空中で生成した疑似惑星弾が襲い掛かる。

「あなたの個性は？」

「浮遊だッ……！」

アナザーウオズが自身の個性を使い、志村の個性を突き止めると、彼女が浮遊を使いにくい状況になるように雨の様に疑似惑星弾を降らせていく。

「厄介な相手だ……！」

元々多彩な能力を持つアナザーウオズに、変身者である音本の個性が加わることでよりその力が発揮されてしまっている。

「ぶっ倒してやるー！」

さらに両腕を斧に変化させたアナザーゲイツが個性で平衡感覚を狂わせながらゲイツとゴーストに切りかかり、胸部装甲から火花を散らしながら2人は地面を転がる。

「厄介なヴィラン達だ……」

「けど、下でアイツらが頑張ってたんだ！んなどこでくたばる訳にはいかねえんだ!!」

だが、この地下では出久達も八斎會と激闘を繰り広げている。爆豪はここで負けられないと立ち上がる。

「オラア！」

ゲイツは足から爆破を放って宙に浮くと、地上にいる2人のアナザーライダーに向けて掌から爆破を放つ。

「これも喰らいやがれ！」

『パワードのこー!』

さらにゲイツは2人のアナザーライダーの前に着地すると、ジカンジャックローの電動丸鋸部分の刃でアナザーゲイツを切る。アナザーゲイツも両腕を斧に変形させて防ごうとするが、ジカンジャックローはそれを折ってしまう。

「メンタルはかなり強いみてえだな！」

「なら、そこも壊すまでだ。」

「させないよ！」

『俺がブースト! 奮い立つゴースト!』

『ゴー! ファイ! ゴー! ファイ! ゴー! ファイ! ゴー! ファイ!』

中々折れない爆豪のメンタルを折ってしまおうとするアナザーウオズに対し、闘魂ブースト魂にフォームチェンジしたゴーストがサン格拉斯ラッシュャーで切りかかる。

「貴様、隠し事はッ……！」

アナザーウオズはその刃を両手と右肩で止めながら、ゴーストの精神を揺さぶるために彼女の秘密を言わせようとする。

「サーが俊典が死ぬと予言したッ……！」

「……ッ!？」

アナザーウオズが聞きだした志村の秘密は、サーがオールマイトが死ぬ未来を見てしまったと言うものであった。

「俊典? そいつは誰だ?」

世間ではオールマイトの本名が八木俊典であることは知られておらず、他のヒーローや身内のことだろうかとアナザーウオズが聞こうとする。

『スピードタイム!』

『リバイ! リバイ! リバイ! リバイ! リバイ! リバイ! リバイ! リバイ! リバイ! 疾風!』

『疾風!』

だが、その事実を知っている爆豪は、オールマイトのことを知られる前に倒さなくてはいけないと考え、ゲイツリバイブ・疾風に姿を変える。そして2名のアナザライ

ダーが捉え切れないほどの速さで彼らの背後に回り込んで爆破を浴びせる。

「くっ……！」

アナザーゲイツが爆豪の平衡感覚を狂わそうとするが、爆豪は一度その場から離れる。

『スピードクロー！』

「くたばりやがれ！」

そして一気に2人のアナザーライダーに向けて駆けていき、ジカンジャッククローのつめ部分で敵を切りつけ、爆破で吹き飛ばす。

「とつとと決めるぞ！」

「ああ……！」

オールマイトの件を口にしてしまつて動揺していたゴーストも、再び立ち上がつて臨戦態勢になる。

『フィニッシュタイム！』

『ダイカイガン！ブースト！』

炎を纏うゴーストの蹴りが2人のアナザーライダーを吹き飛ばし、その間にゲイツがジャンプする。

『百烈タイムバースト！』

『オメガドライブ！ブースト！』

そして上からゲイツリバイブ・疾風が2人のアナザライダーに向けて連続でライダーキックを叩きこんでいく。ゲイツの足が怪人の身体に当たる度に爆破が放たれ、連続蹴りを打ち込まれたアナザライダー達の身体が地面に叩き付けられる。

「やったみてえだな……」

怪人達は変身が解除されて人間の姿に戻り、気を失って倒れている。

「んなことより、さっきの話本当か？オールマイトの……」

敵を倒し一息ついた爆豪が、先程志村の口から出た言葉が真かどうか問いかける。

「ああ、本当だ。俊典から聞いた話だ……」

「……」

サーが予知してしまった未来に、爆豪は言葉を失ってしまう。

「少し、シヨックかな？」

「いいや、関係ねえ……んな未来、俺がねじ伏せる！」

「ああ、私もそのつもりだ！」

だが、爆豪は静かに決意した。

”サーが予知した未来を捻じ曲げてオールマイトを救う”と。

「後これ、出久は知ってんのか？」

「いいや、知らないさ。」

「そうか、まあ……いざれ伝えることになるだろうな。」

オールマイトの運命を出久はまだ知らない。だが、今はそれよりも先に敵の対処をすべきだと考え、爆豪は出久達が向かった建物の中に足を向けようとするが……

「何かが来るぞー！」

だがその時、地面からコンクリートが壊れていく轟音が響いてきて、爆豪達は音がした方に振り向く。

『マキシマムハイパーサイクロン！』

すると突然、地面に大きな穴が開き、竜巻状のエネルギーが天に向けて昇っていく。

それと共に、アナザージオウⅡの身体が吹き飛ばされて宙を舞う。

「第2ラウンドだー！」

穴の中から浮遊してきたグラウンドジオウも現れる。

「またアナザーライダーか……」

治崎が変身するアナザージオウⅡの登場に、爆豪と志村はファイティングポーズを取り、その横に出久が降り立つ。

「あれは……」

「治崎だー！」

「アイツら、オーマシヨツカーと接触してたって情報あつたが、多分これを貰つてたんだろうな……」

サーの調査の中で分かった、治崎らがオーマシヨツカーと接触していたという情報。

その時に彼らが行つた取引の結果、治崎らは3つのアナザーウオツチを手にしていたのであつた。

「起きろ、仕事はまだ終わっていない……」

アナザージオウⅡが地面に倒れ伏す酒木と音本の下に歩み寄ると、アナザージオウⅡの力で彼らが倒されてしまった歴史を改ざんしてしまう。地面に浮き上がった酒木と音本の身体が闇のオーラに包まれてアナザーゲイツとアナザーウオズに姿を変える。

「こういうことは、したくないが……ここでお前達を潰すためだ！」

アナザージオウⅡが2人のアナザーライダーに触れると、それぞれの身体にヒビが入っていく。

「あ、あれは……」

すると、アナザーライダー達の身体が割れて黒い靄が溢れ出る。

3人のアナザーライダーから漏れ出る黒い靄が絡まり合い、闇が3人のアナザーライダーを包み込む。

「なんつーこと、してやがんだ！」

「仲間を…吸収している!？」

アナザーゲイツとアナザーウオズの肉体が崩壊し、アナザージオウⅡの身体に吸収されていく。

『ジオウ…トリニティ…!』

アナザージオウ、アナザーゲイツ、アナザーウオズの3つのアナザーライダーの力がオーバーホールの力で1つになる。仮面ライダージオウ・トリニティを禍々しくし、黒いラインが至る所に走る6本の腕を持つ異形、その名もアナザージオウ・トリニティ。音本と酒木の肉体をも自身に吸収した治崎は新たなアナザーライダーへと進化を果たしたのであった。

「病人共…俺が治してやる!!」

アナザージオウ・トリニティが腕を振るうと、その場に大量のアナザージオウが召喚される。

「アナザージオウが…多すぎんだろ!」

「けど、やるしかないよ。ここで治崎を倒して壊理ちゃんを助ける!」

『ダブル!オーズ!』

『ゼンカイガン!ケンゴウハツケンキョシヨウニオウサマサムライボウズニスナイパー!ダクイ〜へ〜ンゲ〜!!』

『パワータイム！リ・バ・イ・ブ 剛烈！剛烈！』

グランドジオウはダブルとオーズを召喚し、ゴーストはグレイトフル魂に変身して英雄を召喚。

数で勝るアナザージオウ軍団に対抗するために、こちらも人数を増やしていく。

「俺も手伝うのさー！」

さらに万繩ウィザードも合流し、ライダーとアナザージオウ軍団の戦いの火蓋が切つて落とされる。

『ムサシー・ベンケイ！ゴエモン！リョウマー！ヒミコ！ノブナガ！デルデルデ！ロ！ラツシャイ！！』

ゴースト・グレイトフル魂が召喚した英雄ゴースト達が、それぞれの剣でアナザージオウ達を切っていく。ベンケイゴーストもガンガンセイバーハンマーモードを振るってアナザージオウ達を殴打していき、ノブナガゴーストはガンガンハンドでアナザージオウ軍団を撃ち抜いていく。

「くたばりやがれ！」

ゲイツはリバイブ・剛烈の力で増幅した大規模な爆破を浴びせて、アナザージオウ達を吹き飛ばしていく。

「もう一回分離してやるのさー！」

ウィザードはドラゴタイマーの力によってフレイムドラゴン、ウオータードラゴン、ハリケーンドラゴン、ランドドラゴンの4形態に分離し、それぞれの身体にドラゴンの体の一部を発現させて攻勢に打って出る。

「治崎！」

他のライダー達がアナザージオウ軍団を抑えてくれている間に、ランドジオウ自身はジカンギレードとサイキョーギレードの二刀流でアナザージオウ・トリニティに切りかかる。

「英雄気取りの病人が……」

だが、2本の刃はアナザージオウ・トリニティの2本の腕で受け止められ、別の腕でランドジオウを殴り飛ばす。

『フォーゼ！』

ジオウはフォーゼファイヤーステイツが使用するヒーハックガンを装備すると、火炎弾を相手に向けて撃ち出していくが、それらも敵は6本の腕で防いでいく。

「どうした……こんなものか？」

さらにアナザージオウ・トリニティが地面の意思の通路に触れると、それらが分解されて棘の山となり、ランドジオウに迫る。

（浮遊！）

ここで出久は志村の個性である浮遊で宙に浮いて回避する。

(黒鞭！)

更に万縄の個性である黒鞭で敵の腕を縛り付ける。

(ワンフオーオール！シユートスタイル！)

黒鞭を引き寄せて敵の身体を自身の方に引き寄せて、ワンフオーオールで強化された足を活かして蹴りを撃ち出す。

「スマーツシユ！」

「…ツ!？」

蹴りを受けたアナザージオウ・トリニティが地面に着地して、衝撃を数本の腕で抑える。

『霸王斬り！』

さらにサイキョーギレードから七色の斬撃を飛ばすが、それは敵の腕に当たるだけで、彼自身にダメージを与えることはできなかった。

『電王！ドライブ！』

地上に降りたジオウはデンガツシャーとドア銃の2丁の銃を手に持ち、敵に向けて弾丸を撃ち出していくがそれすらも腕で防がれてしまい効いていない様子だ。

「壊理を…返してもらおう！」

アナザージオウ・トリニティがグラウンドジオウに向けて走り出すと、6本の腕で次々とパンチを浴びせていく。

「クツ…!?!」

「そんなものか…?英雄症候群の小僧!」

敵が放つパンチを出久が受け止める。

「何かになりたいって夢は…病気なんかじゃない!」

そして出久は左腕にワンフオーオールのエネルギーを込めてカウンターパンチを撃ち出す。

「子供が夢を持って目指すことを…否定する権利なんて誰にもない!」

さらに左足で蹴り上げて敵の顎を撃ち抜く。

「俺がこの世界の支配者となり!」

だが、今度はアナザージオウ・トリニティがパンチを撃ち返し、ジオウの身体が揺らぐ。

「個性という病気を消し去る!!」

更に数本の腕から繰り出されるパンチが、次々とグラウンドジオウの身体に突き刺さっていく。

「さあ、息の根を止めろ…!」

さらに召喚されたアナザージオウ達が次々とグランドジオウやライダー達を取り囲み、攻撃を続けるのであった……

第77話 希望のトリニティ

アナザージオウトリニティと、ジオウら仮面ライダーの戦いは、徐々にジオウ達不利の状況になりつつあった。

その状況を作り出す要因の1つはアナザージオウ・トリニティの能力。

アナザージオウIIは全てのアナザードライダーを召喚することができるが、それは精々19体だけだが、アナザージオウ・トリニティは無限にアナザージオウを召喚できるため、無限に戦力を供給し、多勢に無勢の状況を作り出すことができる。

それに加え、出久達ヒーロー側が現在手負いの状況なのも状況の悪化に拍車をかけている。リユークキユウ事務所の面々は、活瓶の討伐に成功するが、かなり消耗してしまっており、ファットガム事務所の面子も各八斎衆との戦闘で負傷してしまっている。

「この状況はツ…!?!」

地下から上がってきたサーとミリオと壊理。

だが、ミリオは個性消失弾によって個性を失い、サーは戦闘の中で左腕を失っている。更にその状況で壊理を守らなくてはいけない。

「……は俺が守る!」

彼らの中で戦力となるのは、サーに帯同していた煙ビルドとサーのサイドキックのブルガールとセンチピーダーだけであり、彼らは壊理を狙うアナザージオウ達への対処を行う。

「壊理イ!!」

そんな壊理達が見界に入ったアナザージオウ・トリニティが彼女らに向けてまっすぐに駆け出す。

「行かせない!」

それを阻もうとジオウが間に立つが、殴り飛ばされてしまう。

「ここは任せて!」

煙ビルドが何とか敵の進撃を止めようと身構える。

「どうすればッ…!?!」

その頃、出久は地面に伏せながら、どうすればこの状況を打破できるのかと頭を抱えていた。

「何こんなどで諦めてんだスカポンタヌキ!」

「タヌキ?!」

だがその出久を、爆豪が無理矢理起こす。

爆豪のポキヤブラリーに驚きつつ、出久は少し思考が冷静になっていく。

「ここで悩んでも始まんねえだろ。俺に作戦がある。」

「作戦って……」

「とりあえず今来てる奴ら適当に抑えとけ！」

「分かった！」

『ブレイド！』

ジオウは、新たに召喚したブレイドと共に迫り来るアナザージオウ達を対処している。

そこで爆豪はファイズフォンXを取り出して、ある人物に電話を掛ける。

『もしもし、どうしたんだい？爆豪君。』

「ちよつと面貸せや。今どこだ？」

『いきなり言われても困るね……しかも私が今いるのは広島だ。』

その電話の相手は、広島でインターン中のウオズであった。

「関係ねえ！今は何やってんだ？」

『大きな事件を解決し、今はミルコと特訓中だ。八百万君がライダーに覚醒したので、戦い方を教えているところだ。』

「八百万がライダー？なら猶更戦力的な問題はねえ！おい出久！ジオウトリニティだ！」

「え？う、うん！分かった！」

『ジオウトリニティ！』

出久は爆豪に言われるがままに、ジオウトリニティウオッチを取り出す。

『ジオウ！ゲイツ！ウオズ！』

「へ、変身！」

『トリニティタイム！』

『三つの力！仮面ライダー・ジオウ！ゲイツ！ウオズ！トリニティ！トリニティ！』

戸惑いつつも出久がグラウンドジオウからジオウトリニティに返信すると、ゲイツが腕時計状のバンドとなり、ジオウと合体してしまう。

幸いにもグラウンドジオウウオッチ単体でもライダーを召喚することは可能であり、志村ゴーストラ召喚されたライダー達は残っているが、1人ライダーが減ってしまう形となった。

「やれやれ、少し手荒な帰還だね。」

だが、出久の下に広島から召喚されたウオズがやって来た。

頼もしい味方の登場に、出久と爆豪は思わず笑みを浮かべる。

「まずはアイツを引き剥がすぞ！」

「了解。」

ジオウトリニティは普段通り、出久と爆豪が個性使用担当、ウオズが肉体操作担当というフォーメーションで煙ビルドと対峙しているアナザージオウ・トリニティに向けて駆け出す。

(ワンフオーオール！フルカウル！)

「喰らいやがれ！」

ワンフオーオールで加速したジオウは、背後から敵の背中に爆破を浴びせる。

『ジカンデスパア！』

その攻撃に反応し、ジオウ達の方を向いたアナザージオウ・トリニティの胸部に向けて槍を突き出す。

「ツ…!!」

『霸王斬り！』

更に今度はサイキョーギレードから放たれる虹色の斬撃を至近距離で放つ。

「喰らいやがれ！」

さらにその斬撃でできた切り傷に向けて、ジオウは掌から大規模な爆破を放つ。

「無駄だ…この程度の傷は…すぐに治せる。」

アナザージオウ・トリニティは自身の身体に触れて、肉体を再構成してその傷を塞ぐ。

「中々厄介な相手だね。爆豪君、私を呼び出したのだ。何か策はあるのかい？」

敵の能力に驚きつつも、ウォズは自身を呼び出した理由を問いかける。

「ああ、アイツはアナザーライダーも召喚してきて厄介だ。まずはテメエも殲滅を手伝え。」

「やれやれ、人使いが荒いね。けど、やるしかないね。」

「うん、皆！いこう！」

『グランドジオウ！』

『ゲイツリバイブ！』

『ギンガ！』

精神世界内で出久がグランドジオウウォッチを起動し、それに続く様に爆豪とウォズも再び変身の準備をする。

「変身！」

『グランドタイム！クウガ！アギト！龍騎！ファイズ！ブレイド！響鬼！カブト！電王！』

『キバ！ディケイド！ダブル！オーズ！フォーゼ！ウイザード！鎧武！ドライブ！』

『ゴースト！エグゼイド！ビルド！』

『祝え！仮面ライダー！グランドジオウ！』

『ライダータイム！仮面ライダーゲイツ！リ・バ・イ・ブ剛烈！ 剛烈！』

『投影！ファイナリータイム！ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタ

ジー！』

『ウオズギンガファイナリー！ファイナリー！』

ジオウトリニティが分離し、グラウンドジオウ、ゲイツリバイブ・剛烈、ウオズギンガファイナリーの3人のライダーがこの場に立つ。

「3人になったところでこの俺に勝てるのか？」

「勝つてみせる！だって僕達は、最強の3人だから！」

爆豪の奇策によって呼び出されたウオズにより、戦局は一変する。

アナザージオウ・トリニティと共にジオウ達に突撃していくアナザージオウ軍団であつたが、ウオズギンガファイナリーが生成した疑似惑星弾、エナジープラネットに次々と撃ち抜かれていく。

「くたばりやがれ！」

さらにゲイツリバイブが放つ大爆破によって、多くのアナザージオウが吹き飛ばされていく。

「私らも行くよ！」

「おう！」

さらに志村ゴースト、煙ビルド、万繩ウィザードも引き続き敵との交戦を進めていく。

『鎧武！』

頼もしい味方達の活躍により、出久自身はアナザージオウ・トリニティとの戦いに集中ができる。

「壊理ちゃんはまだ渡さない！」

無双セイバーを装備したグラウンドジオウが、その刃を縦に振るい、アナザージオウ・トリニティを切りつけ、敵の身から火花が散る。

「壊理を返してもらおう！」

「させない！」

自らに生える6本の腕をグラウンドジオウに向けて伸ばすアナザージオウ・トリニティであったが、ジオウは個性で煙幕を出して敵の視界を塞ぐ。

(ワンフォーオール！シュートスタイル！)

距離を置いてから再度ワンフォーオールで身体能力を強化し、地面を勢い良く蹴って加速。

アナザージオウ・トリニティに迫りつつ飛翔し、左ハイキックを敵の側頭部目掛けて繰り出す。

『サイキョージカンギレード！』

更に敵の身体が揺らぐ隙に2つの剣を合体させて振るうと、アナザージオウ・トリニティの両肩から生えている腕を左右一本ずつ切り落とす。

アナザージオウ・トリニティとなった時、普通の腕に加えて両肩と両脇腹からそれぞれ1本腕を生やしている状態であったが、この攻撃で腕は4本だけになってしまい戦いの優位性が減ってしまう。

「黒鞭！」

「…ッ！」

さらに残りの4本の腕も黒鞭で縛り、ジオウによる膝蹴りががら空きの敵の頭部に突き刺さる。

「まだだッ…！」

アナザージオウ・トリニティに吸収されているアナザーゲイツの力を使い、両脇腹から生える腕を弓に変化させると、そこから矢の形をしたエネルギー弾を放つ。

(ワンフオーオール！フルカウル！)

放たれる矢を加速しながら避け、背後に回るとアナザージオウ・トリニティの背中に向けてサイキョージカンギレードの刃を振るう。

「消し飛べ！」

今度は吸収したアナザーウオズ的能力で疑似惑星弾を作り出し、それらを出久に向けて撃ち出していく。

(浮遊！)

ジオウが浮遊の個性を使って宙に逃げることで、攻撃を回避し、疑似惑星弾は地面に当たただけであった。

「壊理イー！」

「壊理ちゃん！」

だが、それはジオウにとって悪手であった。

彼が空中に退避した隙を見て、アナザージオウ・トリニティが視界に入った壊理達を見て走り出す。

「俺を守る！」

壊理と手負いのサーを守るように、ミリオが立つが彼の身体も既にボロボロである。

「いかせるか！」

『スピードタイム！』

『リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！疾風！』

『疾風！』

そのことに気付いた爆豪も、ゲイツリバイブ・疾風に切り替えると加速して一気に駆け抜けようとする。

「道は私が切り開く！」

『灼熱バーニング！激熱ファイティング！ヘイヨー！タイヨウ！ギンガタイヨウ！』

爆豪に迫り来るアナザージオウ軍団は、タイヨウフォームとなったウオズギングの力により、次々と焼かれていってしまふ。

「死ねエー！」

高速でアナザージオウ・トリニティの前に回り込み、ミリオとの間に立ったゲイツの掌から爆破が連射される。

「スマーツシユー！」

さらにジオウもそこに合わせて背後からパンチを打ち込む。

「壊理イ！」

「キャツ……！」

だが、地面に倒れそうになる治崎はその執念で手を地面に突き、個性を発動して壊理ら3人を仕留めようとする。

「させない……！」

だが、敵の身体を後ろから掴んだ出久が、そのまま敵の身体をワンフォーオールで筋力を強化しながら投げる。プロレスにおけるスープレックスの様な技を受け、アナザージオウ・トリニティの頭部が地面に叩き付けられる。

「舐めた真似を……だが！ 私はここで終わらない……！」

アナザージオウ・トリニティは自身の能力を活かし、更にアナザージオウ軍団を召喚

して出久達を取り囲む。

「また湧いてきた！」

「まだまだいくよー！」

だが、先に召喚されていたアナザージオウ軍団を殲滅したゴースト・グレイトフル魂と15体の英雄ゴースト達が対処に動く。

「どうやら、一体一体は脆いみたいだね。」

無限に湧いてくるアナザージオウ軍団により、一時は形勢が不利であったが、それはウオズの参戦で逆転した。ウオズギンガはタイヨウフオームもワクセイフオームも宇宙由来の多彩な力を使うことができ、疑似惑星弾や太陽のピュアパワーは多数の敵を殲滅するのに打ってつけであった。

「こいつ等には、指一本触れさせねえ！」

さらにゲイツリバイブ・疾風も次々とアナザージオウ軍団を撃破することができている。

(この状況、俺の個性が役に立つだろうな。)

(あなたはッ…!?)

仲間たちの活躍により、対峙する敵がアナザージオウ・トリニティ自身と複数のアナザージオウだけに絞られた出久の精神に何者かが語り掛ける。

(使ってみろ。)

(こ、これって……！)

その男の声を聞くと共に、出久の中の感覚が変わる。

(これってツ……！)

(危機感知、危機に際し警鐘を鳴らす俺の個性だ。)

(あなたももしかして4代目の……)

(ああ、そうだ。)

出久の中で新たにワンフォーオール4代目継承者である四ノ森避影が目覚め、彼の個性である危機感知が出久に宿る。既に目の前にいる数名の敵という危機を感知し、出久の頭に痛みが走る。

「何を突っ立っている！」

(これなら敵がどこから来てるか……分かる！)

その個性が宿ったことにより、出久に迫る敵を察知することができ、攻撃を回避しながら地面を蹴って飛び跳ねながら加速し、次々とアナザージオウ達を殴り倒していく。

「四ノ森さん！アンタもライダーの身体使うかい？」

(その声は、万繩か！ライダーとは、その姿のことか……)

「出久！四ノ森さんにピッタリなライダー呼び出してくれ！」

「分かりました！」

『響鬼！』

出久が仮面ライダー響鬼を召喚すると、その中に四ノ森の精神体が入っていく。

「さあ、やってみるとするか。」

四ノ森の精神が入った響鬼が音撃棒烈火2本を構えて、迫り来るアナザージオウ達を次々と殴打して倒していく。

「こ、これは……！」

ウオズに四ノ森とさらなる加勢が加わり、戦いの流れを自身の方に持っていく出久の姿にサーは驚きを隠せなかった。

（私が見ていた未来と…違う！）

今目の前で繰り広げられている戦いは、先程サーが目にした出久の死の未来とは大きく変わりつつあるものであった。

「次はここだ！」

危機察知を得た出久は、自身に迫って来る敵の位置を把握することができ、やってきたアナザージオウ達を次々とサイキョージカンギレードで切り伏せていく。

「壊理イ！」

アナザージオウ・トリニティがさらに召喚するアナザージオウ軍団。

「我が魔王の邪魔はさせないよ。」

『水金地火木土天海！宇宙にやこんなにあるんかい！』

『ワクワク！ワクセイ！ギンガワクセイ！』

だがその前に立ちちはだかるのはワクセイフォームへと姿を変えた、ウオズギンガファイナリー。

「さて、これほどあれば十分だろう。」

ウオズは9種類の疑似惑星弾、エナジープラネットを生成すると、向かってくるアナザージオウ軍団を次々と撃ち抜いていく。

「サーー！」

更にサーとミリオや壊理を取り囲むようにアナザージオウ軍団が召喚される。

「ここは任せたまえ。」

だが、そのアナザージオウ達もウオズのエナジープラネットによって次々と撃ち抜かれていく。

ワクセイフォームになったことでエナジープラネットの制御はより精密になり、仲間達を巻き込むことなく敵を倒している。

「もう大丈夫だよ。壊理ちゃん。だって、僕達仮面ライダーがいるから！」

「仮面ライダー…」

そして壊理を守るように、グラントジオウが彼女を背に立ち、親指を立てる。

この場で奮闘する仮面ライダー達の活躍は、壊理の希望の光となる。

「いいや、ここでその希望を打ち砕く！」

ジオウに切り落とされた腕を再度生成し、アナザージオウ・トリニティがジオウに攻撃を仕掛けようとする。

「鬼棒術、烈火弾！」

だがここで、出久らの危機を察知した四ノ森響鬼が音撃棒から火の玉を放ち、アナザージオウの身体に火を付ける。

(ワンフォーオール！フルカウル！)

その一瞬の敵の動揺を見抜き、ジオウはワンフォーオールで身体能力を強化し、加速しながら敵に向けて駆けていき、胸部目掛けてサイキョージカンギレードを横薙ぎに振るう。

「ハア！」

さらにジオウと連携して響鬼が、音撃棒烈火でアナザージオウ・トリニティを背部から殴打する。

「馬鹿なッ……！」

アナザージオウⅡにアナザージオウ・トリニティと相手に対して数で優位に立つこと

のできる力を治崎は持っていた。だが、今はグラントジオウと響鬼の2人に対して、自分一人で戦っている状況だ。

召喚したアナザージオウ達も他の仮面ライダーによつて次々と撃破されていつている。

「さあ、フィニッシュユキ！」

『キックストライク！サイコー！』

万繩ウィザード・オールドラゴンは4つの魔方陣を生成し、その場にいるアナザージオウ軍団を拘束すると、翼で飛び立ち、魔方陣内の怪人達に向けてライダーキックを放ち、一網打尽にする。

「勝利の法則は、これで決まりだ！」

『ライオンクリーナー！ボルテックフィニッシュ！』

ライオンクリーナーフォームに姿を変えていた煙ビルドは、左腕の掃除機でアナザージオウ軍団を吸引して捕縛してから、ライオン型のエネルギーを放つて引き寄せられた敵を一気に吹き飛ばす。

「命！燃やすよ！」

『オメガドライブ！グレイトフル！』

さらに、志村ゴースト・グレイトフル魂と15の英雄ゴースト達が放つライダーキック

クの雨がアナザージオウ軍団に降り注ぎ、敵を殲滅する。

『フィニッシュタイム!』

「鬱陶しい奴らだ、全員くたばりやがれ!」

『スーパーツメ連斬!』

爆豪はゲイツリバイブウオッチをジカンジャックローにセットし、そこから青い斬撃を連射して、自身の周囲にいるアナザージオウ軍団を次々と切り捨てていく。

『ビヨンドザタイム!』

「広島への交通費、後で請求させてもらうよ。」

『水金地火木土天海エクスプローション!』

地上に残ったアナザージオウ軍団に対し、ウオズギンガファイナリーワクセイフォームが生成した大量のエナジープラネットが雨の様に降って来る。エナジープラネットの雨が次々とアナザージオウ軍団を撃ち抜いて、アナザージオウ軍団を全滅させる。

「治崎!ここで決める!」

『フィニッシュタイム!』

「倒せるものなら!倒してみろ!」

必殺技を仕掛けようとするブランドジオウに対し、治崎は自身の個性で対抗しようと地面に手を触れる。

コンクリートを分解して再生成し、ジオウに攻撃を仕掛けようとするアナザージオウ・トリニティを四ノ森響鬼、オーズ・サゴーズコンボ、電王・ガンフォーム、鎧武・カチドキアームズが取り囲む。

『オールトウエンティタイムブ레이크!』

まずは治崎が再生成し、ジオウ達に向けて繰り出そうとしたコンクリートの針の山を、オーズサゴーズコンボが放つ重力場で粉碎する。

「……」

すると今度はアナザージオウ・トリニティの周囲の重力が操作されて彼の身体が地面から浮いたところを、四ノ森響鬼が音撃棒烈火を下から上に振るって殴り飛ばして宙に浮かせる。

『フルチャージ』

『火縄大橙DJ銃!』

宙に浮いた敵の身体を、デンガツシャーと火縄大橙DJ銃による銃撃が撃ち抜く。

「馬鹿なツ……!」

空中でダメージを受けたアナザージオウ・トリニティの視界に入ってくるのは、飛翔してライダーキックの構えを見せるグランドジオウの姿であった!

(ワンフォームオール! シュートスタイル!)

ワンフォーオールの力と仮面ライダー達の力が上乗せされたグラウンドジオウのライダーキックが、アナザージオウ・トリニティに突き刺さり、その体を地面に叩き落とすと、地面に落ちたアナザージオウ・トリニティの身体がダメージに耐え切れずに爆散する。

「壊理ちゃん……これが俺達、ヒーローの力だよ！」

「ヒーロー、仮面ライダー……凄い……！」

ナイトアイ事務所、リユークュウ事務所、ファットガム事務所を始めとしたプロヒーロー達。出久達を始めとする仮面ライダーの活躍は壊理を恐怖で支配していたオーバーホールを打ち砕き、少女に希望を見せた。

「治崎廻！確保だ！」

アナザードライダーの姿から元の人の姿になり、気を失い地面に倒れる治崎、酒木、音本を見て警部は彼らを確認するように指示を出したのであった。

第78話 戦いのその後

「こつちだ！治崎を移送だ！」

ヒーローとヴィランとの戦闘が終わると、次は警察や医者が主役となる。

倒されたヴィランの移送や、手当てのための病院への搬送。使用された武器の回収やヒーローの手当てなどを行うという大きな仕事が残っている。

「こちら時計型の遺留品を確認。証拠として署まで移送します。」

警官の1人が回収したのは、アナザージオウ・トリニティのアナザーウオッチだ。

元は3つのアナザーウオッチであったが、治崎の個性により1つの強力なアナザーウオッチに変化していた。

アナザージオウ・トリニティに変身した治崎の体内にあったものだが、彼が倒されたことで外に排出されていたようだ。

それらを一足先に警察署まで運ぶべく、複数の警官がパトカーに乗り込み現場から去る。

「さあ、早く所に戻ろう。」

「そうですね。」

パトカーを運転する警官と、助手席に座る後輩の警官。

彼らが輸送するのはアナザーライダーを生み出す危険物のためか、早く警察署に運んでしまつてそこで安全に保管してしまいたいところだ。

「んん？あれは…？」

アナザージオウ・トリニテイウオツチを乗せたパトカーが車道を走つていくが、その道中運転手を務める警官がブレーキを踏む。

「危ないぞー！」

その理由は、パトカーの前に1つの人影があり、それにぶつかつてしまわないようにするためであつた。

警官はパトカーを止めて窓を開け、注意をしようとするが…

「つて…お前は！分倍河原！」

その人影の姿を警官は見覚えがあつた。それもオーマシヨツカーの人物リストの中で…

トウワイスという名で知られるヴィランがパトカーの前に立つており、運転手の警官は銃を引き抜いて対応しようとする。

「つ…！」

だが、その警官の命は一瞬にして刈り取られた。

隣にいる後輩警官の持つ拳銃によって頭を撃ち抜かれてしまい、鈍い音を立てながら重力に従う様に頭をハンドルに打ち付ける。

「トガちゃんナイス！」

「ふふ、アナザーウオッチの確保完了です…」

最初からパトカーに乗っていたのは後輩の警官ではなかった。

それはオーマシヨッカーのトガが化した姿であった。

「こっちは回収完了だ！とつとと帰らせる！いや、まだゆっくりするぜ！」

トウワイスはスマホである男にアナザーウオッチを回収できたと報告すると、トガと共にこの場から早々に去るのであった。そしてその頃…

「さてと、彼の個性は中々使えるからねえ…ただくとしようか。」

別の道では警察が捕えたヴィランを乗せた護送車が走っているが、歩道橋の上から黒い鉄のマスクを付けた男がその車を狙っている。

「まずは、黒槍…これでいこうかな。」

その男、オールフォードは自身が持つ個性の一つによって黒い鉄の槍を複数個空中に生成したかと思えば、槍の雨が護送車の運転席目掛けて降り注ぐ。

「ダメじゃないか、人の個性を消そうとしているのに、自分が力に頼るだなんてね…」

止まってしまった護送車の扉を破壊し、オールフォードが中に居る治崎に話しかけ

る。

「殺しに来たのか……？」

「いいや、君にもつとも相応しい結末を与えようと思つてね。」

四肢を拘束されて個性を発動できず、抵抗も出来ない治崎の首元にオールフォーワンの手が触れる。

「君の病気を僕が治してあげるよ。」

「や、やめろ！」

個性を持つ人々のことを病人と言いながらも、治崎は個性を振るつて地位を高め、個性消失弾まで作り出した。だが、彼の個性はオールフォーワンによつて奪われてしまつた。それを表すように、オールフォーワンが自身の付けている黒いマスクに触れると、それが一度分解されて、刀の形に再生成される。

「さてと、君にあることを教えてあげよう。オーマシヨッカー内で話し合つただけど、君達が苦勞して作つた個性消失弾はもう不要だ。」

オールフォーワンは護送車内にあつた個性消失弾のケースを地面に落とすと、黒い刀を突き立てる。

「消したくなるような個性は全部僕が貰つちやうからね。もう消す必要なんてないんだよ。すべてはもう僕の物……個性をこの世から失くすなんてもう、終わつた考えだよ。残

念だったね。」

自身の考え、そして苦勞の末に作り上げられた品がいとも簡単に否定されて破壊されてしまった。

その行動に言葉すら発することができなくなった治崎は、去っていくオールフォーワンの背中を睨みつけることしかできないのであった：

警察とプロヒーローによる死穢八齋會への強制捜査は不完全燃焼と言える結果に終わった。

八齋會若頭である治崎始め多くの幹部を逮捕することこそできたものの、護送車とパトカーが襲撃されるといふ事件があった。証拠品が幾つか失われてしまい、護送車で運ばれていた治崎の個性が失われてしまう結果となった。それに加えてヒーロー側の損失も大きかった。

「引退？それってどういうことなんですか？」

セントラル病院のとある病室。そこにはサーがベッドに寝転んでおり、その周囲には彼の事務所のサイドキックであるバブルガールとセンチピーダーに加えて、インターン

組の出久、爆豪、ミリオらが集まっていた。そこでサーから告げられたのは、彼自身がヒーロー活動を引退するというものであった。

「そのままの意味だ。この戦いで私は腕を失った。このままでは前線に行つても誰かの足を引つ張るだけだ。」

治崎との戦いの中で、サーは自身の左腕を失う重傷を負つてしまっていた。

そのことが、彼に引退を決断させてしまっていた。

「それに、私の未来予知はもう正確ではない。あの戦いの中で私の予知が外れてしまった。」

「それってどういう…」

「私位はあの戦いの中で見たんだ。緑谷、君が死んでしまう未来を…」

「僕が死ぬ!？」

サーが見てしまったという未来に、この場に居る者達に動揺が走る。

「ああ、私は君がああの戦いの中で凄惨な死を迎える未来を見た…だが！君はその未来を捻じ曲げて治崎に勝つた！」

「それ、アンタの予知が外れたつて言うより、出久が未来捻じ曲げるだけの力持つてるだけだろ…」

サーの個性に欠陥があったと言うより、出久の持つ力が凄すぎるだけなのではと爆豪

が首を傾げる。

「どちらなのかは、私にはわからない。ただ、1つの絶対が揺らいだのであればもう引き際ということだ。」

それは、自身の個性における絶対が覆ってしまったからなのか、それとも緑谷出久という新世代の存在に、自身が引退すべき時と考えたのかは分からない。ただ、すでに彼は裏方に回りサイドキックの2人をメインに事務所を作っていくことを決意していた。

「本当に引退するんですか…?」

「ああ、私も他にやることは多い。裏方で色々と働くことにした。」

出久の問いかけにも、彼はそう答える。

既に彼の決意が固いことを周囲の者達は察した。

「インターンも一度打ち切りだ。お前達ならまた新しいインターン先を見つけられるだろう。しっかり励んでくれ…」

「サー！その、短い間でしたけどありがとうございます！」

「ウツス…」

流石に若手中心の事務所に転換していく自分達の事務所でインターンをするのは出久達にとつてもあまり利が無いことであると感じ、サーはインターンの打ち切りを告げた。これまでインターンで色々教わったことと、励ましの言葉に出久は感謝の気持ち

を伝える。

「それとミリオ、お前は今後どうするつもりだ？」

「俺は……しばらく休学します。」

そして、話はミリオの件に移る。個性消失弾を撃たれてしまった彼は、個性因子が身体から消えてしまい、個性を使えない体になってしまっていた。

「けど、しばらく学校には残ります。壊理ちゃん的面倒を見ようと思って……」

「そうだ！壊理ちゃんはその後どうなったんですか!？」

出久達仮面ライダーが治崎の変身するアナザージオウ・トリニティを倒した直後、壊理は気絶してしまいすぐに病院に搬送された。それ以降出久は未だ彼女と顔を合わすことはできていなかった。

「うん、すぐに目は覚めたよ。けど、まだ元気にはなっていないみたい。」

彼女は治崎から解放されてもなお、明るい表情はまだ見せていなかった。

「そういえば彼女、両親が……」

「ええ、八斎會の証言によると、彼女の個性は巻き戻し。触れた生物を中心に、対象を過去の構造へと修復する個性で怪我の修復だけでなく生物としての時間そのものを戻してしまうことができる個性です。」

「人間を猿にもできるってことか……」

「ミリオが警察の者から聞いた彼女の情報をサー達に報告する。」

「彼女は八斎會の組長の孫娘でした。ただ、組長の娘である彼女の母と組長自身は絶縁状態だったみたいですが…それである日、壊理ちゃんの個性が発現した時に事故で父親を消滅させてしまったみたいですよ…それから母親にも捨てられて組長に拾われたとのことですよ。」

壊理がこれまで歩んできた人生に、一同は言葉を失う。父を自身のせいで失ってしまい、母に捨てられ、拾われた先で弾丸の材料にされてしまう。そんな残酷な彼女の人生に、出久達はショックを受ける。

「だからこそ、俺が何とかしたいんです！俺が彼女の心も救いたい！」

その静寂を切り裂くように、ミリオが声を上げる。

「戦うことができなくても、俺は女の子一人の笑顔を守りたい！だから、学校に残って先生達と彼女の面倒を見ようと思います！」

「ミリオ先輩…」

出久の中で、一つの迷いがあった。それは個性を失ってしまったミリオにワンフオーオールを渡してしまおうかと言うものである。勿論、志村達に反対されたためその考えは胸にしまっていたが、ミリオの言葉を聞いて自身の考えが杞憂であったと感じた。

「コントロールが難しい個性の使い方は俺もよく分かっています。だから、俺に任せて

ください！」

「良い心がけだ、ミリオ…」

ミリオは自分が透過という制御が難しい個性をモノにした経験から、壞理にも個性の使い方を教えると意気込んでいる。そんな彼を見て自然とサーの表情も柔らかくなっているのであった。

「全く、広島への移動でどれだけのお金と時間がかかると思ってるのかな…」

さて、ジオウトリニティの力で強制的に広島から呼び出された私は再び広島に戻るため空港で飛行機のチェックインを済ませているところだ。インターン中に呼び出されたことには驚いたよ。

（しかしながら、中々の事件ではあった…）

とは言え、私が呼び出されるのも無理はない案件だったかもしれない。敵はアナザージオウ・トリニティというアナザージオウの道の進化形態とその力で呼び出されたアナザージオウ軍団。私とアナザージオウ軍団の相性が良かったからか、我が魔王も戦いやすかったらうね。ウオズギンガファイナリー、無数の敵を一網打尽にするのにはもつ

てこいだね。

『広島行きの便に乗られるお客様は5番ターミナルまでお越しく下さい。』

「おっと、そろそろ飛行機が来るみたいだね。」

今回の飛行機代はサー・ナイトアイの事務所の方から出してもらえたが、こういう呼び出し方は止めて欲しいものだ。しかしながら、アナザージオウ・トリニティか…厄介な敵だ…

アナザージオウが私の知らない進化を遂げてしまった。それにそのウオッチがどこかへ消えてしまった…

「また新たな進化を遂げたアナザージオウが出てくるかもしれない。常に警戒しないとね…

「さて、行くとしよう。」

こうして私は飛行機に乗り、広島に戻るのであった。

「さて、今日の動画は何をしようか…」

一方その頃、街中でも1つの事件が起きようとしていた。

ジェントル・クリミナル、自身の犯罪動画をネットに投稿している男だ。

「食品偽造ネタはどうかしら？ジェントル。」

「良い案だ。それにしようかなラブラバ。」

彼の隣にいるのは彼の相手でもあるラブラバという女性であった。

彼女がその犯罪動画の撮影と編集を担っている。

「見つけたよ。ジェントルにラブラバ……」

「なんだい？私のファンかな？」

裏路地を歩く2人の後ろから声をかけてくる男がおり、2人がそちらの方を向くと同時にその顔に額から冷汗が滴り落ちる。何故なら、その声をかけた男が自分達にシアン色の銃を構えていたからだ。

「ヒーローか!? 私達の確保が目的かな？」

「いいや、違うね。」

その男に警戒するジェントルとラブラバ。だがその男はフランクに言葉を続ける。

「僕は君達に協力してもらおうと思ってる。」

「協力!? なんの協力をしろというの?」

「ちよつとしたお宝を手に入れてたくてね。君達にも手伝ってもらおうと思ってる。」

その男がジェントルらに提案したのは、自身がとある物を手に入れる協力をして欲し

いと言うものであった。

「協力をしても良い。だが君は何者なんだ？」

自身の名を歴史に残すことが目標の1つであるジェントルは、その男の話に興味を示しつつも、何者か分からない彼に正体を問いかける。

「僕かい？ 僕は怪盗で、通りすがりの仮面ライダーさ…」